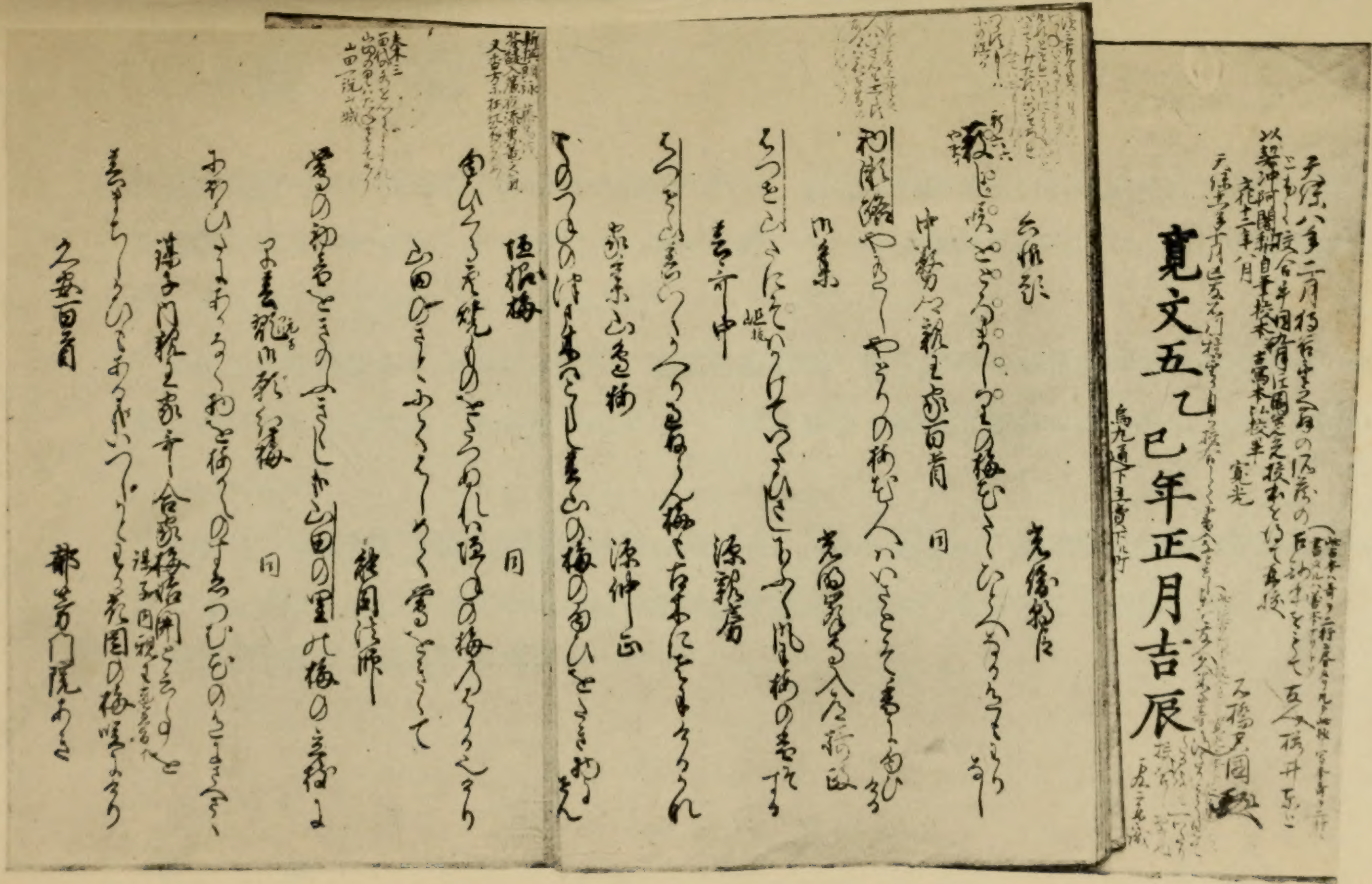
夫木和歌抄

上


寛文五乙巳年正月吉辰

例言

一、和歌叢書として最大量を包有する國歌大系に、藤原長清撰の夫木和歌抄を逸することは、甚だ遺憾でありますので、大系第二十一卷及び第二十二卷の豫定を變更し、これを夫木和歌抄上下二卷として刊行することとしました。

一、本書は和歌類題を主としたもので、既出の勅撰集、家の集等より抽出されたもの多く、且上欄にはこれが註と見るべきものもあるので、其の重複と卷數の增大とをおそれ、註釋を省くこととしました。

一、本書は、片岡寛光が契沖自筆校本竝に古寫本によりて比校し、狩谷望之(掖齋)所藏本によりて石橋眞國がこれに書入れを爲したる學習院所藏本に據り、中山泰昌が校訂しました。

一、本書の解題は山岸德平が執筆しました。

校註 國歌大系第二十一卷目次

卷第三　春部三

卷第四　春部四

卷第五　春部五

巻第六　春部六

巻第七　夏部一

巻第八　夏部二

卷第九　夏部三

卷第十　秋部一

卷第十一　秋部二

卷第十二　秋部三

卷第十三　秋部四

卷第十七　冬部二

卷第十八　冬部三

巻第二十　雑部二

目次終

解　題

夫木和歌抄

夫木和歌抄は藤原長清の撰した類題の歌集である。長清は、作者部類には、五位、勝間田遠江守と掲げ、玉葉集雜一に題知らずとして、

下荻もかつ穗に出づる夕露に宿借りそむる秋の三日月

の一首が見えて居る。又、増鏡、秋のみ山の元亨五年七月七日乞巧奠の條には、

いつの年よりも御心とゞめて、かねてより人々に歌も召され、物の音どもも試みさせ給ふ。其の夜は例の玄上彈かせ給ふ。人々の所作ありし作文にかはらず。笛篳篥などは殿上人ども鳴る板の程に侍ひて仕うまつる。中宮もうへの御局にまうのぼらせ給ふ。御簾の中にも琴、琵琶あまたありき。播磨守なが清の女、今は左大臣の北の方にて、三位殿といふも箏彈かれけり。

と見えて居る。この「なが清」は播磨守であるが、夫木和歌抄作者の「長清」と同人であるかどうか

時代は殆ど同じ頃である。

又、永仁二年春某の家に歌合を行つた事は、卷第三十六の戀に「永仁二年藤原長淸が家歌(合の字脫か)に」とし、卷四の花に「永仁二年春、藤原長淸家にて名所を」と題して、何れも前參議爲相の歌を載せて居る。又卷第四花に「藤原長淸すゝめける百首題」として、法眼慶融の、

雲まがふ吉野を花の種として四方に咲き散る山櫻かな

が見える。尤もこの歌は玉葉集卷一春上にも見えて居る。

此の他、法名を蓮昭と號した事を知る外に、其の傳は明かでない。

夫木の名稱はその跋文に據つて知られる。卽ち、

此の抄之名を思案して少しまどろみてありける夢の中に、白衣之老翁一人來曰、汝所撰之和歌抄者我朝之至寶也、末代之證歌成るべし。倭國之風俗なれば扶桑集と可名付と謂れけるな、夢心地に、是は誰人にて御座すぞと問ひければ、我は是れ和歌の道に心を留めし江中納言匡房と云者也とて夢さめぬ。

此の由を冷泉黃門爲相卿に被申ければ、爲相卿此の事希代不思議之靈夢、末代之奇特、誠我朝之深秘抄也。但扶桑者日本國總名也、可有其憚、扶の字のつくり、桑の字の木を取り合て夫

木和歌抄と名付。

と見えて居る。撰者長淸は扶桑集と命名するの意志があつたかも知れないが、其の師、冷泉爲相に謀ると、扶桑を省略して夫木と命名したのである。

この跋文は後人の記したものと思はれるが、書名に關してかかる說が存したものらしい。恐らく事實の眞相を傳へるものであらう。

歌數、一萬六千三十二首の中、長歌百四十九首、旋頭歌二十首、唱物の歌一首及び催馬樂歌一首が載つて居る。萬葉集より勅撰集を始め、家集、歌合等凡そ證歌となるべきものは悉く網羅しようとしたものである。

撰集の時代を明かにする事は難いが、所收の歌では、嘉元四年十一月のものが最も後である。其の例を示せば、

嘉元四年十一月當座百首　（卷六、春部六、菫菜）

必ずと契らぬ人の花菫誰ゆゑ一夜許す假寢ぞ

同　（卷七、夏部一、早苗）

取りあへぬ早苗の末の亂れ葉に村雨ながら騷ぐ夕風

同　（卷九、夏部三、蟬）

宿に鳴く梢の蟬の村聲は夕日の影も所せきまで

同　北風　（卷十九、雜部一、風）

北に吹き南に變る追風も人の思ひは叶ふとぞ聞く

などである。右は何れも從二位冷泉爲實の歌である。此の外に嘉元元年、二年、三年或は四年十月の當座百首もある。嘉元は後二條帝の年號で、同四年は十二月十四日に德治元年（一九六六）と改元になつて居る。

惟ふに長清がかかる浩瀚な類題の歌集を撰するには、周到な準備と不斷の努力とを要して、幾年かの時日を費したものに相違ない。各題の下に適合する歌は、考慮を要せず機械的に羅列も出來るが、何れにも分類出來る種類の歌は、その所屬を決するに苦心と熟慮とを必要とする。題の分類が多種多様となるに比例して、各歌の分類と排列とは困難となる。加ふるに一萬六千餘首の中に重複を避け、證歌となるべきを選定することは、勅撰集の撰よりも多大の勞力を要すると思ふ。況んや個人の事業である。

故にこの集の撰を完成し終るには、二三年乃至數年を費したものでは無からうか。たとひ逐次

に和歌を增加して行つて、嘉元四年十一月の當座百首の歌を採取の最後と假定しても、整理完了には多少の時日を要する事は明かである。

されぱこの抄の成つたのは、早く見ても後二條帝の德治二年乃至は三年(一九六七―一九六八)頃かと考へられる。德治三年は十月十九日に延慶と改元され、花園帝の御代となる。

又飜つて思ふに、玉葉集は花園帝の正和二年(一九七三)に、伏見上皇の勅に據つて成つたものである。長淸の歌一首が玉葉集雜一に見えるのは、長淸が歌人であつた事にもよるが、一面にはかかる大類題集を撰した事などにも多少の關係はあるまいか。

以上の如き事實に據つて案ずるに、後二條帝の德治の末年から花園帝の延慶年中までの間(一九六七―一九七〇)約三四年に成つたものかと推察せられる。國書刊行會本なる夫木和歌抄の例言には

第三十六、雜部十八に、永仁二年、藤原長淸が家歌合の歌とて、參議爲相卿の詠を載せたるに據り考へ合はすれば、……長淸の本書を撰集せし時代は伏見天皇の朝(一九四七―一九五七)若しくは是れを去ること遠からざる頃なるを知る可き也。

と記して居るのは、未だ詳しからぬ論である。

内容は四季と雜の二部に分れ、四季にはそれ〴〵の季節に應じた風物を集め、雜は天地、動植物、居所、調度、衣服、神祇、釋教、人事、詠史、賀、哀傷、戀等に分け、すべて五百九十一題に亙つて居る。採取の範圍も勅撰集と異なつて、時代及び標準等の制限が無い爲に自由であり、從つて雜多豐富である。從つて諸々の點に例證として參照せられる事が多い。

引用書目を見るに、勅撰集は勿論であるが、萬葉集、古今六帖、新撰六帖、現存六帖、萬代集より、當時存した多くの家集及び歌學の書、或は個人の撰集又は歌合等を網羅し盡して居る。

それ故に參考となる點は、各方面に頗る多い。例へば萬葉集の如きは新點以後のもので、吉野朝の宗良親王や由阿の研究以前のものとして見る事が出來る。今卷十一、秋部二の萩に就いて今日の讀み方と比較して見よう。

夫木

手もすまに植ゑしもしるく出でて見れば宿の秋萩咲きにけるかも

萩の花咲きたる野べに蜩の鳴くなるともに秋風ぞ吹く

萬葉

たぎそなへ植ゑしもしるく出でて見ればやどのわさ萩咲きにけるかも

萩が花咲きたる野べに蜩の鳴くなるなべに秋の風吹く

眞葛原靡く秋風吹くごとにあたの大野の萩の花散る

さぬかたの野べの秋萩時しあれば今盛りなり折りてかざさむ

秋風は日毎に吹きぬ高圓の野べの秋萩散らまくをしも

春日野の萩も散りなば朝ごちの風にたぐひてここに散り來ね

あきつ野の尾花刈り添へ秋萩の花をふかさね君が假菴

秋萩を散らすながめの降る頃は一人起き居て戀ふる夜ぞ多き

玉鉾の君が使の手折りたるなごの秋萩見れど飽かぬかも

眞葛原靡く秋風吹くごとにあたの大野の萩が花散る

さぬかだの野べの秋萩時なれば今盛りなり折りてかざさむ

秋風は日にけに吹きぬ高圓の野べの秋萩散らまく惜しも

○春日野の萩し散りなば朝ごちの風にたぐひてこゝに散り來ね

あきつ野の尾花刈り添へ秋萩の花を吹かさね君が假ほに

○秋萩を散らすながめの降る頃は一人起き居て戀ふる夜ぞ多き

玉づさの君が使の手折りけるこの秋萩は見れどあかぬかも

この夕秋風吹きぬ白露に爭ふ萩の明日咲かむ見む	○この夕秋風吹きぬ白露に爭ふ萩の明日咲かむ見む
秋風ははや吹きにけり萩がはな散らまく惜しみきほひ〳〵に	秋風は早く吹き來ぬ萩が花散らまく惜しみ爭ひて見む

○印は讀方同一のもの。萬葉集は略解の讀方に據る。

以上は僅に一部であるが、かくの如く萬葉研究には參照すべきものである。

又、古い時代の歌合等で、今日既に不明なものなどにも、其の時期を示して居るものがある。この點は歌合の研究上重用な光明を投げるものである。一例を示せば左の如きものである。

亭子院歌合　昌泰元年、延喜六年、延喜十三年三月三日、延喜十九年八月
平定文家歌合　延喜五年二月　延喜六年
貫之家歌合　天慶二年二月
陽成院歌合　延喜十三年九月
京極御息所歌合　延喜十一年、延喜廿一年三月五日、延喜廿年三月廿七日、延喜廿二年三月
芳子女御歌合　天曆十年五月

麗景殿女御家歌合　天暦十一年二月
坊城右大臣家歌合　天暦十一年
内裏歌合　寛和二年六月
殿上歌合　寛和二年八月十日

亭子院歌合は七度あり、寛平御時后宮歌合は寛平六年に前番、同九年に後番として行はせられたが、當時歌合の盛んに流行した狀況を今日から知り得る資料としても、本抄は更に研究しなければならぬものである。

或は又路次記云として、東關紀行や十六夜日記、長明の伊勢記、冷泉爲相の道の記等の文を引用した處もあり、東關紀行の如きは、著者を源光行とする一證として引用せられて居る。尤も東關紀行は、古くは長明海道記と稱せられ、扶桑拾葉集、羣書類從等に收められて、源親行作の如く傳へられてゐるが、從來は東海道名所圖會の序文や、岡西惟中の消閑雜記には、何れも光行作と信ぜられて居た。或說には光行親行父子何れの作としても多少の疑問があるとも言ふ。

最後に類題の和歌集に就いて一言しよう。

類題の集は古今六帖を濫觴とする。古今六帖又は紀氏六帖とも稱し、本大系第九卷に述べた。

それに次いで、鎌倉時代に入つては寛元年中（一九〇三——六）に、爲家、知家、信實等五人によつて新撰六帖が撰せられた。それ以來六帖の名目を襲つたものには、右大臣光俊の現存和歌六帖があり、壹岐前司後藤基政の東撰六帖があつて、實朝や仙覺や光行等の歌を集めて居る。

この他足利初期のものと思はれる續現存六帖の如きは、類題を更に詳しくして居るが、何れも古今六帖の系統を引くものである。近葉六帖、寛元六帖など、すべて六帖の名稱を襲ふものは少なからずあつた。德川時代に入つて小澤蘆菴の袖中和歌六帖は、古今六帖と新撰六帖から拔いて一題に五首宛集めたものである。

夫木和歌抄は六帖の刺戟によるものであり、六帖等も參考せられた事は確實であるが、更に撰者の考慮によつて一層特色あり、詳細な淸瀚なものとなつたのである。其處に長淸の苦心と努力とが流れて居る。古今六帖の題に對する新撰六帖や現存六帖の題の如きは、只摸倣に過ぎなかつたが、長淸は更に面目を一新したものと言へる。

夫木和歌抄以後には六帖の名を襲はずに類題和歌集が現はれた。例へば類題の集の主要なものとして左の如きがある。多くは德川時代に出來た。

類題六家集　これは作者未詳であるが、六家集の歌を部類してゐる。

明題和歌全集　今川了俊の作である。又二八明題和歌集とも稱し、古今集以後十六代の集の題を部類した。

續五明題和歌集　或說には今川氏親の撰と傳へて居る。二十一代集中、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の五部の集の題を部類して、近體の歌を學ぶ爲にしたものである。

類題和歌集　後水尾帝の勅撰である、題の次第は凡そ夫木抄によつて居る、題の數一萬二千餘に及んで居る。

新類題和歌集　靈元法皇の勅撰である。烏丸光榮、西三條公福、水無瀨氏成、高松重季、武者小路實陰等が撰者となつた。勅撰の類題集には釋敎部を載せないが、この集は雜部にこれを載せて居る。

續類題和歌集　これは藤原義泰が坂以得に命じて延寶二年の秋に類集したものである。蓋し二八明題、續五明題、明題全書、題林愚抄等はあり、又、類題和歌集もあつて、證歌を得るに容易であるが、類題和歌集を再び修飾しようとして著手したのである。然るに義泰は逝去したので坂以得が撰擇したものであつた。全部三百卷の由であるが、現存するものは僅に春夏の部六十三卷と、別に序凡例一卷のみである。

類題落穂集　勅撰の類題集には題のみで歌の缺けたものがある。それを補ふ爲に一題一首づゝをあげて居る。

新類題落穂集　勅撰の類題集の歌を以て新類題和歌集に、題のあつて歌の缺けた部を補つて居る。

殘林拾葉集　勅撰の類題集に題のあつて歌の缺けたものを、作者山本紀内源道春が自ら詠じて補つたものである。

拾題和歌集　惠藤一雄の撰にかゝり、二十一代集、三玉集其の他の家集等から、四季、戀、雜公事の題に部類して居る。

新明題和歌集　後水尾、後西條、靈元帝以下通村、雅章等當時の人々の歌を類集して居る。

新後明題和歌集　新明題和歌の後集と稱すべきものである。

新題林和歌集　撰者は明かでないが、集中の作者は凡そ新明題和歌集と相似て居る。

新續題林和歌集　新題林以後の歌をも交へて居るが、集中の作者にも爲村、光榮、資枝等がある。

部類現葉和歌集　伯水堂梅風の撰である。新題林和歌集の前後に亙つて、その集に漏れたもの

を採取した。歌毎に年月、出所を記して居る。

撰玉類題和歌集　部類現葉和歌集の誤を正し、缺を補ひ、更に餘を削つたものである。故に撰玉と言ふ由は、澄月の序に記して居る。

袖中證歌集　二十一代集、六家集、三玉集其の他の家集、歌合から、各題に一首づゝの證歌を掲げて袖珍本としたものである。

百家類葉　富士谷成壽の撰である。新類題集時代の歌を專ら採取して居る。

古今和歌集類題　松井幸隆の撰である。古今和歌集の歌ごとに同じ意味又は同じ詞の歌を、萬葉集、二十一代集、菅家萬葉集、古今六帖、夫木和歌抄、六家集、宇津保、大和、源氏等の物語其の他の家集、歌合等から採錄して居る。

三玉和歌集類題　後柏原院の柏玉集、西三條實隆の雪玉集、冷泉政爲の碧玉集を類題して集めて居る。松井幸隆の集めたものである。

新三玉和歌集類題　後水尾院の鷗巣集、中院通茂の老槐集、烏丸光榮の榮葉集の歌を類題としたものである。

三槐和歌集　中院通村、同通茂、同通躬の集を類題して居る。

千首類題　尾崎雅嘉の撰である。爲家千首、正徹千首、後水尾院御歌撰首、天文千首、慶長千首、元祿千首、貞享千首、享保千首、寛延千首等の歌を部類したものである。

續撰吟和歌集類題　尾崎雅嘉の撰にかゝる。原本たる續撰吟抄は、文明永正の頃宮中の御會や諸家の詠、持爲徹書記等の百首を集めたもので類題ではない。それを部類して袖珍本として、寛政十年に尾崎雅嘉が上梓したものである。

新續撰吟和歌集類題　尾崎雅嘉の撰である。文明、永正、大永頃の歌人の詠を類集して居る。題の數を多くした。

類題證歌集　尾崎雅嘉の撰である。勅集撰、私撰集、諸家集、歌合、物語、記錄等をはじめ、廣く題詠の歌を題毎に一首宛あげて居る。題數は二萬五千餘に及んで居る。

草菴和歌集類題　草菴集、續草菴集の歌を類題によつて集めたものである。蜂谷又玄子の手に成つて、元祿八年九月に上梓して居る。

李花和歌集類題　尾崎雅嘉の撰に成つて居る。

芳雲和歌集類題　武者小路實陰の家集を、類題によつて部類したものである。

桂雲集類題　廣澤の望月長孝の家集、廣澤輯藻の歌等の世に傳はるものを部類したのである。

似雲集類題　似雲は武者小路實陰の門人である。その詠草中から選び出して類題としたものである。

幸隆類題　松井幸隆の家集を類題としたものである。幸隆は中院通茂の門人であり、歌學にも精通して居た。愚問賢註、六窓抄、古今類題、溪雲問答、雨中吟、未來記聞書等を著作して居る。

これ等の外、德川末期に至つてはなほ左の如きものもある。今その名稱のみを掲げておく。

類題鴨川集　　長澤伴雄編

類題草根和歌集　安田躬絃編　草根集は正徹の集である。

類題草野集　　木村貞良編

類題鰒玉集　　加納諸平編

類題新竹集　　猿渡容盛編

類題眞金集　　藤井尙澄編

類題武藏野集　　仲田顯忠編

類題千船集　　佐々木弘綱編

類題若菜集　　積書堂編

類題和歌清渚集　熊代繁里編
類題和歌玉藻集　村上忠順編
類題和歌月波集　近藤芳樹編

以上は羣書一覽其他にも據つたが、此等の外に類題、清風集、類題藍田集、或は明治に入つても二三、類題の集は世に現はれて居る。

要するにこれ等の書は、作歌上の習練又は證歌としての必要上、自然の要求として現出したものである。德川中期以後に初學和歌式や濱の眞砂や布留の山踏等の如き、作歌に關する書の出たのも、夫木和歌抄等以來の要求が一層簡易と實用の方面に進んだものである。文學論が現はれて文學が衰へるとも稱せられるが、かかる書類が多く現出した事は、同時に和歌を衰頽せしめる原因となつて居る。德川時代の自由研究に因つて歌道の革新の起るまでの歌界に生氣の無くなつた事も、これらの著述を見れば自ら推察出來ようと思ふ。實に喜ぶべくして又他面歌界の爲には却つて喜ぶべからざる現象である。

更に夫木和歌抄の現はれるに至るまでの歌界を見るに、新古今集は古典主義の典雅と浪漫主義の優勁な歌格を調和融合して、表現の手法にも內容の豐醇にも古今獨步の域に進んで、更に展開

するの餘地が無くなつた。同時に歌合等も盛んとなり、判者としては博識を最も必要とした。つまり歌界は古典主義も浪漫主義も融和せられたが、歌合等の場合には證歌を重んじ、故事典據が重きをなす古典主義の潮流が力強く流れて居た。

又歌合等の如き題詠を必要となす場合には、證歌を熟讀して置く事も必要であつた。歌は消閑の具では無く、社交上の競技の具にも用ゐられたのである。されば古來の多數の集等を繙くの煩よりも、類題集の必要は當然の要求である。六條家の歌學者として、清輔が題林百二十卷を撰し歌合、會、百首、雜各三十卷宛としたと傳へられるのも、時代の要求が必然的に述作せしめたものと考へられる。清輔の題林は今日傳はらないが、その種の述作は他にも存在した事と想像するに難くない。

それらの後に現はれたのが、殆ど從來のものを集大成したとも見える夫木和歌抄である。この書が出て、浩瀚な類題の集は私撰としては現はれなかつた。類題和歌集は浩瀚とは言へ勅撰である。

故に夫木和歌抄は大部なる點にも、又、今日既に湮滅した集又は紀行類より採取して居る點にも、それが類題の集としてより以外に偉大な價値を有して居る。

本大系所收の底本は、石橋眞國が、狩谷掖齋所藏の古抄本や、契沖阿闍梨の自筆校本並に古寫本を以て片岡寛光の比校した本や、石川雅望が自ら校合して書入れをした本等を集めて、比較對校したものであるから、他に類本を見ない珍重すべきものであることを附記しておく。

解　題　終

夫木和歌抄　上卷

自　卷第一
至　卷第二十

○寶治二年仙洞百首、歳内立春
○同イ
○同イ
○同イ
○同
○寛元元年六帖題、春立日

夫木和歌抄　卷第一

春部一

題　歳内立春　朔日　元日宴　立春　初春　子日
　　卯日　若菜　白馬　御齋會　賭射

歳内立春

新續古今雜上
あさ氷とけにけらしな年の内にくみて知らるゝ春の若水　民部卿爲家

おほかたの年また明けぬ民の戸は松やは立つる春來たりとて　正三位知家卿

新玉の今年とやいはむ立ちかへり春よりさきに春はきにけり　光臺院入道二品のみこ

新六一
君が代の千とせにあまるしるしとや春より先に春はきにけり　常磐井入道太政大臣

新六一
くれ殘る日數も待たず新玉のむべもとしとや春はきぬらむ　衣笠内大臣

新六一
くれ果てていく日もあらぬ年の内に猶急ぎける春はきにけり　同

新六一
冬かけて春立つ空の朝霞としをばさても隔てざりけり　民部卿爲家

新六一
くれはてぬ年のをはりに春立ちて定めかねたる我が齡かな　藤原光俊朝臣

○百首歌、立春
冬ながら花散るそらの霞めるは雲のこなたへ春やきぬらむ　従二位家隆卿

○永久四年百首、舊年立春
とし過ぐる山邊なこめそ朝霞さこそは春とともに立つとも　神祇伯顯仲卿

○同
一年にふたゝび春は立ちぬれど老木の花はいかゞさくべき　仲實朝臣

○同
あは雪もまたふる年にたなびけばころまどはせる霞なりけり（とぞみるイ）　源俊頼朝臣

○同
谷の戸を出でずとなけや鶯は年のあけぬに春はきにけり　藤原忠房

○文永五年毎日百首歌中に
春はきてまた年あけぬ谷の戸におとづれ初むる鶯のこゑ　民部卿爲家

○六帖題、春立日
あら玉の年のこなたの方たがへ歸れば春のあしたなりけり　權僧正公朝

○家集、歳內立春
雪にさへ霞にいろぞおぼろなる春たつ今日の冬のよの月　前民部卿雅有

山家下
年は早月なみかけて越えにけり宜積みけらしゑぐのわかたち　西行上人

この歌家集云野に人あまた侍りけるを何する人ぞととひければ菜つむものなりと答へけるに年の內にたちかはる春のしるしのわかなかさはと思ひて云々

六帖
年の內に春たつ事を春日野のわか菜さへにもしりにけるかな　紀貫之

この歌家集云延喜十五年十二月春立つ朝にさだかたの右兵衛督の內侍のかみの賀に奉り給ふ時の歌云々

○家集、春歌中
萬二十
月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春たちぬとか（はきイ）　中納言家持卿

朔日

○文治六年女御入内御屏風に、朔日

風雅春上 立ち初むる春の光と見ゆるかな星をつらぬる雲の上人　後法性寺入道關白

○同

紫の袖にもあまる嬉しさに立ちるかなへる今日にもあるかな　後德大寺左大臣

○同

袖たれて玉しく庭をうち拂ひふしてぞ春の初めとは知る　三條入道左大臣

○同

霞しく春の始めの庭のおもにまづ立ち渡る雲の上びと　前中納言定家卿

○同

風雅春上 九重や玉しく庭に紫の袖をつらぬる千代のはつ春　皇太后宮大夫俊成卿

○同

河竹の千代をこめたる庭に出でておきふし君を祝ふもろ人　藤原隆信朝臣

○寛喜元年女御入内御屏風裏書(京華イ)、人家元日

新勅撰 初春の花の都に松をうゑて民の戸とめる千世ぞ知らるゝ　光明峯寺入道攝政

○同

いはふべきこと葉のさきにたつ春の花の都の空に見ゆらむ　西園寺入道前太政大臣

○同

宿ごとに都の春の初めとて松にぞきみの千代いはふなる　前中納言定家卿

○家集、元日心を

正月立つけふ九重にふる雪や衣にうけしあとをしるらむ　參議爲相卿

この歌孝武帝大明五年正月朔日雪降義恭以レ衣受レ雪爲二佳瑞一歌云々

○家集、立春

今朝きけば人の言のは改めて祝ふ初めの春はきにけり　源仲正

○六百番歌合元日宴左大將家、建久四年

松が崎絶えぬ氷室にすべらぎの千世の例しをけふぞ立て(たてまつるイ)ける　正三位經家卿

○千五百番歌合、建仁元年

九重にけふ立ち(たてまつるイ)初むる氷こそ風にもとけぬためしなりけれ　野宮左大臣

○寛元二年六帖題、氷室（元イ）

新六一 立ち初むる睦月のけふのひのためし絶えずそなふる御代ぞ畏き　衣笠内大臣

○朔日

新六一 四つのうみ波靜かなる御代なればはらかの犧もけふ供ふなり　同

新六一 今朝みればうなゐ處女がすり衣春立ちそむる軒の松風　光俊朝臣

○家集、元日聞鶯

しめかけて立てたる宿の松にきて春の戸あくる鶯のこゑ　西行上人

○文永九年毎日一首歌中

年のうちに春はたちしを新玉の初めとけふは霞む空かな　民部卿爲家

○朔日の心と云々

現存六 とをつかは吉野の國栖いつしかもつかへぞまつる春の初めに　衣笠内大臣

或抄云くずとは吉野川のおくに國栖人と云ふえびすのおほやけにもしられ奉らでかくれて有りけるを神功皇后宮淸御原天皇などのおはしたりけるに見つけられまゐらせて鮎と云ふ魚や又若菜をまゐらせたりけるそれをなめしたりけるをみて喜びて笑ひて口をたゝきて笛を吹きけるなりされば若菜つむとはいへるなりさて今にいたるまで節會には其のくず人笛たくみはまゐりて御菜まゐらするなり正月節會にかならず參りて若菜まゐらするなりと云々

○永久四年百首、元日

けふよりは我をもちひのます鏡うれしき影を寫してぞみる　俊頼朝臣

よき事をますみの鏡今日みればかねて千年のかげぞうかべる　二條大皇大后宮肥後

○春歌中

風春上 春たたば（はたゝイ）さかむと思ひし梅の花珍らしげにや人の折るらむ　貫之

此の歌家集云天慶四年左(右イ)大將家の屏風の十二首元日の人家(人のイ)にまらうど
あまた來たりあるは家のうちにあるは庭におりたちて梅花を折る所に
と云々

元日宴

〔六百番歌合、元日宴〕
袖かはすみはしの下に年ふりて幾度春をよそに迎へつ　前大納言兼宗卿

〔同〕
(玉春上)春くれば星の位に影見えて雲居のはしにいづるたをやめ　前中納言定家卿

〔同〕
初春のけふは畏きみことのりのべよと千代のしるしをぞ開く　大藏卿有家

〔同〕
もろ人のたちゐる庭の杯に光もしるし千代の初春　從二位家隆卿

〔同〕
たちかはる年の始めはとよみきに重ねて賜ふひろはたのきぬ　正三位季經卿

〔同〕
百敷や春を迎ふる杯に君が千とせの影ぞうつれる　慈鎭和尚

此の歌左方云節會の心たしかならず御藥とこそおぼえたれと云云判云
右歌宴の心なきよし左方に申さるさもあることなれど又宴の歌にても
などかなからむ云々

〔同〕
むつき立つ今日のまとゐや百敷の豊のあかりの始めなるらむ　法橋顯昭

此の歌右方云むつき立つと云聞きなれずおぼゆ左陳云此の五もじ萬葉

より出でたり又右方云豐のあかり變束なし知らざる事なり左陳云もろ〳〵の節會豐のあかりと申すべし宣命にみえたり判者俊成卿云左云むつき立つとおけるは右方とがめ申すべしともおぼえ侍らず萬葉集にまことにむつき立つなどよめるやらむとおぼえ侍る但し萬葉より出でたりとも歌合の時は無二左右一證據とすべしとも覺え侍らず萬葉集は優なる詞をとるべしとぞ故人申し侍りしこれは彼の集聞きにくき歌ども多かる故なり又かの集の時までは歌の病をさらず然れば必ずしも歌合の時例とすべからざるかこれは此の歌の事にしもあられども申しおき侍るなり又とよのあかり宣命に豐明豐樂と書きたりとぞ見え侍る歌の風體におきてぞ左右あるべき歌の意趣一方計りはさこそときこえ侍れまとゐもより所なきなり豐のあかりもくもりなしなどこそ常にはよみならひて侍めればこれに事毎より所なきに侍るべし云々

立春

○家集

春たてる一夜の程にいかにして雪の景色のまづかはるらむ　前中納言匡房卿

○同古來歌合古來歌

新拾春上

たつひより花を見よとて吉野山雪の梢に春やきぬらむ　藤原基俊

○千五百番歌合
春霞きのふを去年のしるしとや軒端の山も遠ざかるらむ　前中納言定家卿

○同
今朝よりや澤べの氷とけぬらむ春風かよふ鵲のこゑ　正三位季能卿

此の歌判者云東方朔（忠良卿イ）傳朔日風從二東方一來鵲順レ風而立是以知二東響鳴一也云々

○正治二年百首
もろ人の祈る千年をあつめても猶かず知らぬ春の初空　土御門内大臣

○千五百番歌合
今朝よりは霞の雲の跡はれて緑にかへる春の初空　大納言通具卿

○同
今朝よりやこのめも春の山風に櫻が枝も花をまつらむ　前大納言忠良卿

○百首御歌
吉野山はつ春風の今朝はまづ櫻が枝をいかゞとふらむ　慈鎮和尚

○百首御歌合
（續千春上）あら玉の年のあけ行く山かつら霞をかけて春はきにけり　順徳院御製

○家集、春立ちける日
解け初むる初若水のけしき（こほりイ）にて春たつことのくまれぬるかな　西行上人

○久安百首（元イ）
霞めども雪ぞ降りくる今日はなほ雲路に冬やたちとまるらむ　藤原實清朝臣

○寛元二年六帖題
（新六一）新玉のけふ豐年の始めとて民の竈もけぶり立ちそふ　正三位知家卿

○建長八年歌合
新玉の年も月日もゆきかへりみつの始めの春はきにけり　前大納言顯朝卿

○題しらず
（雲葉續後拾春上）春きぬと人しもつげず相坂のゆふ付鳥の聲にこそしれ　人丸

○喜多院入道二品親王家五十首
せきの戸もあけゆく年に相坂のゆふ付鳥の春の初聲（ヤイ）　大藏卿有家

○同
天の戸のあくればやがてくる春の鳥の音よりぞ聞き始めける　喜多院入道二品親王

新玉の千とせの春の始めとて八聲の鳥も千世いはふなり　従二位家隆卿
○百首歌、曉立春

立ちかへる年と共にや春も又ゆきあふ坂をこえて來つらむ　寂蓮法師
○百首歌、元日立春

音羽山雪ふる年のかすめるや去年と今年とあふ坂の關　同
○五十番歌合

來る春の姿はそれと見えねども名のみやこゆる相坂の關　小侍従
○正治二年百首

音羽山いかでか春のこえつらむ人も通はぬ岩のかけ道　源師光
○同

いはと山天の關守今はとてあくる雲居に春はきにけり　正三位知家卿
○百首歌、山立春

眞木の戸を明くれば春や急ぐらむ袂にさえし風ゆるかなり　殷富門院大輔
○百首歌

年くれぬ春くべしとは思はねど（思ねのイ）正しく見えてかなふ初夢　西行上人
○家集、立春朝をよめる

冬の夢の驚きはつる曙に春のうつゝのまづ見ゆるかな　後京極摂政
○西洞隱士（院七イ）百首御歌

かねの音の春をつぐなる曙にまづうち拂ふ霜のさ筵　同
○治承二年右大臣家百首御歌、立春

年くれし雲ゐの雲氣はれそめてたえ〴〵あをき東雲のそら　同
○御集春の初めの御歌

年をへてかすみかゝれる海山をみなわが國と春はきにけり　後九條内大臣
○建長八年家百首歌合

春きぬとみゆばかりにや山鳥のはつをの霞今朝はたつらむ　同
○御集、立春

九重にもゝのつかさの引きつれて萬代いはふ時はきにけり　入道前太政大臣堀川
○弘安元年百首御歌

けふはまづ天津社のさかき葉も春のひかりをさしや添ふらむ　前中納言定家卿
○文治五年閑居百首

春くればいとゞ光をそふるかな雲ゐのにはも星のやどりも　同
○建久元年百首

○正治二年百首
たけくまのまつにや音を立て初めて今朝は都に春のはつ風　參議雅經卿

○治承二年右大臣家百首、立春
あふさかに今朝はきにけり春がすみ夜半にやたちし白川の關　皇太后宮大夫俊成卿

○同
をしのゐる池の冰のとけゆけばおのが羽ぶきや春のはつ風　同

○祇園社百首、立春
あふさかの杉より松にかすみけり祇園精舍の春のあけぼの　同

○文永七年毎日一首歌
年のあくる神の玉の戸いまあひて八字の霜の眉ぞひらけむ　民部卿爲家

○立春心を
いつの間にかすみの色となりぬらむ昨日は雪のふる年のそら　參議爲相卿

○乾元々年仙洞歌合、春朝
さだかには其の色となきけしきしも唯春めけるけさにもあるかな　前中納言爲兼卿

○弘安元年百首
玉がきのうちつみくにの朝がすみ光へだてぬ春はきにけり　法印定圓

○家集中法興院にて立春を
三笠やま春を音にてしらせけり冰をたゝく鶯のたき　西行上人

○御集正月一日御歌
こち風は冰とくともはる霞たつはじめをば吹きなみだりそ　花山院御製

○立春の心を
萬代 春霞たつといふ日をむかへつゝ年のあるじと我やなりなむ　壬生忠見

初春

○延喜六年定久家歌合、春氣籠煙[illegible]
梅の花雪にみゆれどはるの氣はけぶりをこめて寒からなくに　讀人しらず

○同
咲く花の光にもゆる春のきは煙をこめて晴れずぞ有りける　同

○同二十一年三月二十七日京極御息所歌合
雪がてにふく春風ははやけれどあをやまなれば寒からなくに　同

○春歌中
新續古春上
春日野にけふもみ雪のふりしくは雲路に春やまだこざるらむ　深養父

○家集、百首早春
をの山の春のしるしは炭がまの煙よりこそかすみ初めけれ　藤原清輔朝臣

○西洞院七百首御歌
霜がれし春のをぎ原うちそよぎ裾野にのこる去年の秋風　後京極攝政

○踏歌の心を
たはれをが聲もふけぬる竹川の水うまやには影もとまらじ　光明峰寺入道攝政

○久安百首
いつしかと春のあしたのききがきに耳驚かす我が身なりけり　前參議親隆卿

○承久四年百首、春日
昨衣春たちきぬと聞きしより日のうら／＼となりにけるかな　藤原忠房

○題不レ知
萬十七
三冬つき春はきたれど梅のはな君にしあらねば折る人もなし　中納言家持卿

○天平勝寶二年正月五日
萬十八
睦月立つ春の始めにかくしつゝあひし笑みて（は來ぬらじイ）はときしけめやも　同イ

○題不レ知
萬十
久方の天のかご山このゆふべ霞たなびく春たつらしも　人丸

○寛平御時后宮歌合
春がすみ立つ日の風のいとなれや瀧のをとけて珠とみだるゝ　讀人しらず

○延喜御時屏風歌
春立ちて風やふくとて今日みれば瀧のみをより珠ぞちりける　貫之

○朱雀院御時屏風歌
風春上
みよし野の芳野のやまにはる霞たつをみる／＼雪ぞ猶ふる　同イ

○家集にはじめの春の歌
新千春上
あさりするよさのあま人ほこるらむ浦風ぬるく霞みわたれり　惠慶法師

○百首歌中
昨日までさえし山水ぬるければ鶯の音ぞしたまたれぬる（けイ）　同イ

○家集、春立日
けふこそは冬ごもりせし瀧津せも春のしるしに花となるらめ　權中納言定頼卿

○禖子内親王家歌合、瀧の音に春をしる。
ふりつみし雪はきえねど吉野山たきの音にぞ春をしりける（ぬイ）　加賀左衛門

○家集
雲葉
水鳥のうきねの牀のはる風にこほりの枕とけやしぬらむ　前中納言匡房卿

○建保三年内大臣家百首、早春
池水のこほりに宿るとしなみを數ふるものは春のはつ風　慈鎭和尚

○平宗宣朝臣すゝめける十首歌、早春
ふるとしの雪氣は雲に殘れどもはや山風はゆるく吹くなり　參議爲相卿

○文永十一年毎日一首歌　閏イ
いつしかと鳴きてこしぢや急ぐらむ年立ち返る春のかりがね　民部卿爲家

○康元二年毎日一首中
年はきて春はまだきをいづ方に思ひさだめて鴈のなくらむ　同イ

○同イ
あら玉の春につけてぞふりにける六十にあまる年を數へて　同イ

○建保四年百首
あら玉の若のみどりにはるかけて山の峯もときは知りけり　前中納言定家卿

○寛喜二年六帖題
新六一
あら玉の空めづらしき春といひてうゐに數ふる月もきにけり　藤原信實朝臣

○寶治元年仙洞十首歌合、早春霞
朝がすみ風も音せぬあら玉の春はまつこそのどけきを見れ　同イ

○家集、長歌
長き夜すがら　めもあはず　なげきあかして　あら玉の　は
るにしなれば　つれ〴〵と　ながめくらして　能宣朝臣

○中務卿宮家十首、春風
あら玉のひと夜はかりをへだつるに風の心ぞことよなかりける　惠慶法師

○家集、早春歌中
御狩野にまたふる雪はきえねども雉子のこゑは春めきにけり　能因法師

○建保四年百首　六イ
あし垣はまぢかき冬の雪ながら開けぬ梅に鶯ぞなく　前中納言定家卿

○同三年内大臣家百首、春雪
沫ゆきの今もふりしくときは山おのれ消えてや春をわくべき　同イ

○同百首、早春
鶯もまだ出でやらぬ春の雲ことしともいはぬ山風ぞふく　同イ

○同四百首、早春

雪もとき春にはあへぬ三吉野の玉松が枝にかゝる白つゆ　從二位家隆卿

○百首歌、賀神祇

かみやまのむ月の半つき近えてとりの初音にみと開くなり　同イ

○正治二年百首

三輪の山たづねし杉は年ふりて春のしるしに松立ててけり　小侍從

○南北百番歌合

珍らしき千とせの春のしるしには三輪の里にも松やきるらむ　慈鎭和尚

○春のはじめの御歌中

春やとき軒端の梅に雪さえて今日まで花の枝にこもれり　後京極攝政

○弘安元年百首

きみが代におきふしなびくわが國の民のちぐさや春の初風　後九條内大臣

○建長八年百首歌合

新續古今 雪きゆる籬の竹の春風にこほりておつる庭の朝露　右近中將經家卿

○最勝四天王院名所御障子

相坂やかすみもあへぬ杉の葉の下つゆこほるあけぼのの空　如願法師

○北野社百首和歌

谷ふかみ日かげの露もとけにけり深山がくれも春や立つらむ　後鳥羽院御製

○千五百番歌合

春立ちてけふ三日月のやまの端にかすみそめたる夕暮のそら　從二位家隆卿

○文治二年百首

風雅 何となく心ぞとまる山の端に今年みそむる三日月のかけ　前中納言定家卿

子日

○文治六年五社百首、子日

春日野におふる子の日の松は皆千代をそへつゝ神ぞひくらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○同イ

子の日には野べならねども住吉の松のかげにて祈るばかりぞ　同イ

○祇園社百首子日

千はやふる天すべらぎのみそのにぞ初子の松も先づ祝ひける　同イ

二見がた千歳の松に名をとめて神や子の日に引きはじめけむ　民部卿爲家
○文應元年七社百首、子日

男山けふの子の日の松にこそ君が千とせのためしをも引け　同ィ
○同ィ

子の日にも引く人なくてなしほ山松にむなしき年をへしかな　藤原爲顯
○百首歌、小鹽山

なに故にはつ子のけふの小松原春のまとゐを契り初めけむ　前中納言定家卿
○文治二年百首

千年へむ（しイ）子の日の友をたのめても松は久しきためしなりけり　寂蓮法師
○百首歌、兼待子日

家集
松はいな神の御室の子の日には賢木を千代のためしにはせむ　清輔朝臣
○家集、社頭子日

家集
君が引く子の日の松は朽ちめやはいざ斧の柄にかけて頼まむ　清原元輔
○大政大臣家子日に

拾遺春
老の代にかかる子の日はありきやと木高き峯の松にとはばや　同ィ
○同ィ

此の歌は安和二年二月五日小野宮太政大臣子の日しにつかはしけるに
よみけると云々

家集
千はやぶるいつきの宮の庭の松いくらのちとせ（よたイ）とゞめ數へむ　同

この歌は天德三年二月三日一條太政大臣齋院にて子の日し侍りけるに
庭前の松を祝ふと云ふ題と云々

家集
子の日する山下水のかげしあれば千年の松はひかで見えけり　藤原元眞
○屏風女御屏風に、水のほとりに子の日したる所

み吉野に千世のはる〴〵生ひそふる小松の綠引きつくさばや　能宣朝臣
○家集、ある所歌合、子日

家集
二葉よりあひおひしても見てしかなけふ契りつる野べの小松に　惠慶法師
○家集、屏風に子日所

○承暦二年正月庚申夜歌合

幾千世と限らぬ世には子の日してにまの松をの小松をぞ引く　赤染彩珍

散木
春たてば初子のいみに旅ねしてかみのしたなる小松をぞひく　俊頼朝臣

此の歌家集云伊勢に侍りける頃む月の朔日とし忌といひて家を出でて野に行きて終日に居くらしてかやなかりてこがひする折にえびらといふなる物にすなるを其のついでにことのもとなれば松をなほざりに引きて歸るとききてよめると云々

○承暦二年歌合

子の日してよはひをのぶる舟岡は（にイ）松の千年をつめるなりけり　大納言経信卿

○子日を

良玉一
ふな岡の遠きわたりに子の日して網手に野べの松や引くらむ　二條院宣旨

○承久二年四季百首

もろ人のはつねを祝ふ小松はら幾世の春の千世にあふらむ　従二位家隆卿

○正治二年百首

おなじくは千本を引かむひめ小松きみがよはひの数に任せて　正三位季経卿

○同イ

子の日する野べのみ雪に出でてこそ我が身の千代も君にひかれめ　同イ

○堀川院御時百首、子日

今年生ひの松を手毎に引きそへて今日より後の千世を數へむ　藤原顕仲朝臣イ

○千五百番歌合

君が爲子の日の松を引き植ゑて千世のかげをも頼みつるかな　前大納言経宗卿

○題不知

新續古春上萬代
二葉より引きこそ植ゑめ見る人の老いせぬものと松を聞くにも　人丸

○同イ

萬二十
初春のはつ子のけふの玉はゝき手にとるからにゆらぐ玉のを（さだめつるかなイ）　中納言家持卿

○堀川院御時百首、子日

玉はゝき春の初子にたをりもて玉の緒ながくさかゆべらなり　仲實朝臣

○久安百首、子日の心を

あたらしき春の初子になりにけり賤のまろやに玉はゝきとる　前大納言隆季卿

○正治二年百首

玉（贄）はゝき初子の松にとりそへて君をぞ祝ふしづのこやまで　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合

玉はゝきこれも千歳のためしとて初子の松に引きそふるかな　正三位季能卿

○正嘉二年毎日一首中

初子とてとるてふ今日の玉はゝき千とせを（もイ）松の手に任せつゝ　民部卿爲家

○正元二年毎日一首中

ひきかへて（はイ）猶もさかえよ神山のけふの子の日の松のゆく末　同イ

○文永二年毎日一首中

さがの山舊きみゆきの跡とめて今日は子の日の松やひかまし　同イ

○弘長三年毎日一首中

龜山の子の日の松はきみが爲ほかに千歳のためしやはひく　同イ

○家集

行きかへりほどさへ遠き子の日かな千世の松ひく龜の尾の山　忠見

○同イ

龜山の子の日のこまつ引きつゞき君が爲にも祈りけるかな　平　兼盛

卯日

○長保四年屏風歌、卯づゑ

君がため常磐の山の玉椿いはひてとれるけふの卯杖ぞ　祭主輔親

○承暦二年正月庚申夜歌合

色かへぬときはの峯の玉つばき君が八千世の卯つゑにぞきる（つゑにとぞイ）　讀人しらず

○御方違へとりまた曙ほどにかへらせ給ふとて卯杖ほがひをきこしめしてと云々

よろづ代にあかきの山の白つばき君がさかゆく卯杖にぞきる　橘　盛　永

萬八（萬代歟）

朝まだき祈る卯杖のしるしあらば千年の坂も行かざらめやは　花山院御製

○卯杖を

神代より年のはじめにきる杖は祝ひそめけりはるのみや人　法性院入道關白

浅ましや初卯の杖のつく〴〵と思へば年のつもりぬるかな　俊賴朝臣
○卯杖を、家集、初卯日

新六四
みやのうちむつきはかみの卯の日とてとるてふ杖は萬代の爲　民部卿爲家
○寛元二年六帖題

みかま木に卯杖とりそへ今日こそは君が爲にと春急ぐらめ　同イ
○文永九年毎日一首中

けふみやのうちには年の初めとて雲居の庭にうづゑたつなり　同イ
○同八年毎日一首中

けふことのとえだの卯杖つきなして君はわかなの萬代の春　參議爲相卿
○わかなをよめる

若菜

萬六　新勅旅
いさやこら香椎のかたに白妙の袖さへぬれてあさな摘みてむ　大納言旅人卿
○神龜元年香椎潟にして作歌

大淀の蜑のをとめ子春されば神のはつものみるめ刈るなり　從二位家隆卿
○建保三年名所百首

春はまた浦に出でてやみ熊野の神のはつもの磯菜つむらむ　小辨
○家集、題不知古來歌

萬八
春山のさゝ（きイ）のをすぐる（なりイ）に若なつむ妹がしらひも見らくしよしも　讀人しらず
○春雜歌

風春に　堀百若菜　袖中十九
春山のさきののすぐろかき分けてつめる若菜にあわ雪ぞふる　基俊
○堀川院御時百首

旅人の道さまたげにつむものは生田のをのの若菜なりけり　大納言師輔卿
○同イ

春くればかたみぬきいれて賤の女が垣根のこなをつまぬ日ぞなき　隆源法師
○同イ

とはれねば誰が爲とてか津の國の生田のをのに若菜つむらむ　權中納言經平卿
○百首歌古來歌

みよし野の花の盛りを待つ程はふもとの野べに若菜をぞつむ　宜秋門院丹後
○正治二年百首

○天徳三年二月三日内裏歌合、閏
續後拾春上
よし野山かすみ棚引く今日よりやあしたの原は若菜つむらむ　藤原元眞

○家集、題不知
春日野のわかなもしるく春きては霞みわたれる片岡のはら　惠慶法師

○家集
さぎ草も萌えぬらむやぞ春きては若菜つむべきをちかたの山　曾禰好忠

○家集、戀歌中
散木
君をこそあさはののらにをはぎ摘む賤の（しつしみイ）をふさのしみ深く思へ　俊頼朝臣

○む月の七日仲實朝臣のもとへ七種菜つかはすとて
散木
ながみ川浮江にはゆるゑぐうれを摘みしなへても底のみためぞ　同イ

○返事
こゝろざし深きみたにに摘みためていしみ搖りて洗ふ根芹か　仲實朝臣

○家集、雪中若菜
はつ／＼の若菜をつむとあさゐ間に野原の雪は村消えにけり　源仲正

○同、後園若菜
かたくなやしかへの園に若菜つみかゞまりありく翁すがたよ　同イ

○元暦元年悠紀方御屏風近江國鶴岡
をとめらも君が爲とや鶴岡に萬代かねてわか菜つむらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○同イ明玉
鶴岡にまた二葉なる若菜こそ年をつむべきしるしなりけれ　正三位季經卿

○百首御歌、明玉
妹はけふしめ野の淺茅ふみ分けてひれふる袖に若菜をぞつむ　後鳥羽院御製

○同イ
さほ姫の染め行く野べを絲子の袖もあらはに若菜つむらし　順徳院御製

○御集、若菜
うら若み摘みと溜らぬゑぐの葉を形見にのみも仰せつるかな　後徳大寺左大臣

○百首歌
古來歌
賤のめがゑぐの若菜はおひぬとや鳥羽川のおもに畦傳ひ行く　殷富門院大輔

○題不レ知、古來歌
古來歌
春の野に衣かたしき誰がためと習はぬ里にわかなつむらむ　凡河内躬恒

○題しらず、古來歌
若菜つむ子の日の松の千世のかげすみつゝみせよ白川のなみ　元輔

この歌は安和二年二月五日一條おほきおほいまうち君白川院にて子の日し侍りしに讀めると云々

○家集、ふなをかのわかな

舟岡にわかなつみつゝ君がため子の日の松の千世をおくらむ　同イ

○毎日一首中

きのふけふ春雨晴れぬ舟岡のわかなはおして明日やつままし　民部卿爲家

○家集、屏風、二月山家わかなつむ所

あし引の山かたつける家ゐには待つひとさきに若菜をぞつむ　平兼盛

○ある所の月次屏風、二月松引き若菜つむ所

ひく松の千年の春は春日野の若菜もつまむものにやはあらぬ　能宣朝臣

○家集、春歌中

續後拾春上
東路に春やきぬらむ近江なるをかたの原に若菜むれつむ　惠慶法師

○天徳二年正月庚申夜歌合

君が代はにまの里人うちむれて永きかたみに若菜をぞつむ　藤原實樹

萬十
くにすらが若菜つむらむしばの野のしば／＼君を思ふ比かな　讀人しらず

○寶治二年百首、澤若菜

國栖らが若菜つむべき時はきぬ野澤の草もしたねざしつゝ　正三位知家卿

○同イ

家集
おほち野の野澤の冰とけにけりますけにまじる小芹つむなり　衣笠内大臣

○百首歌

小芹つむ春の山田のくろつかに安達のまゆみかすみたな引く　寂念法師

○寛喜元年女御入内御屏風

君がため野べの白雪うちはらひいや年のはなつむ若菜かな　正三位知家卿

○百首、獨摘若菜

雉子なく春のやけ野の若菜ゆゑねたくも人をさそはざりけり　寂蓮法師

○六帖題、若菜

君がため奈良のあしたの七くさに猶つみそへむよろづ代の春　權僧正公朝

○文應元年七社政務會、遲若菜

けふもつむ雪げのさはの初若菜明日よりとこそ人はしむらめ　同イ

○弘長元年中務卿親王家百首
み垣守やそのつゞきは今もかもとものそめきに若菜摘むらし　同イ

○家集、文永元年春歌中
今日もまた雪ふみ分けて大内のまそでがはらに若菜つむなり　同イ

○題しらず
六帖
春雨のふりはへゆきて人よりはわれ先づつまむ賀茂川のせり　讀人しらず

○寶治社百首御歌
けふぞかし薺はこべら芹つみてはや七種のおものまゐらむ　慈鎭和尚

○寛元三年
かたをかの枯野のしたの若なづな雪さへつみてみらく少なし　民部卿爲家

○六帖題
新六二
七種の數ならねども春の野にゐぐの若菜もつみはのこさじ　信實朝臣

○正治二年百首
賤のめがかたみの底はむなしくておひぬ若菜に日數をぞつむ　源師光

○同イ
人なみに水田の小芹つむ程は思はぬそでのぬれにけるかな　同イ

○六帖題、せり
新六
こひぬまも水田の畦にひく芹の根にあらはれて袖ぬらしける　民部卿爲家

○文應元年七社百首
けふはまた神のためとや里人の山田の原にわかなつむらむ　同イ

○弘長元年百首
新續古春上
たれか又山田のはらの雪わけて神代のあとに若菜つむらむ　後九條内大臣

○春御歌中
萬代
あら小田のこぞのふる跡ふみ分けて雪氣の若菜今やつむらむ　同イ

○御集、朝若菜
都人けふのためにとしめし野に朝露はらひわかなをぞつむ　後京極攝政

○弘長元年百首
つみたむる若菜をみれば春日野に袖こそ春の雪まなりけれ　信實朝臣

○建長七年顯朝卿家千首歌、若菜
年へたる老そのもりの下草につむともわかなまじりやはせむ　同イ

○同イ
やけ原と思へばいとゞ墨染の袖もすゞろにつむ若菜かな　同イ

○弘長元年百首
ふか草の野となる里に歸りきて住みにし人やわかなつむらむ　法印定圓

○春歌中
古來歌 おのがすむ澤邊の冰したとけて鴨の羽いろのわかなをぞつむ　光俊朝臣

○家集、きゞすを
もえいづる若菜あさるときこゆなり雉子なくなるはるの曙　西行上人

○千五百番歌合
春雨のふるから小野の梓弓おしていさゝはわかなつみてむ　慈鎭和尚

此の歌判者忠良卿云左かち侍るらむと云々

若菜つむゆかりにみれば武藏野の草はみながら春雨の空　參議雅經卿

○同イ
はる立ちて都のわかなつむまでに鶯のねをまつの白雪　隆信朝臣

○同イ
春日野のあささは小野のうす冰たれふみ分けて若菜つむらむ　從二位家隆卿

○文治六年五社百首
風春上 いさやこら若菜つみてむ根芹生ふる淺澤をのは里遠くとも　皇太后宮大夫俊成卿

○同イ
しづのめがかはたの原に摘む芹もたが爲にとて袖ぬらすらむ　同イ

○祇園社百首、若菜
祝ひつゝけふの若菜を摘む賤もまつはみそののつとめにぞする　同イ

○百首婦歌
けふとてやあさ菜つむらむ雪殘るさはの玉水そでにかけつゝ　光明峯寺入道攝政

○同イ
續後拾春上 岩そゝぐ冰解くらし瀧のうへのあさ野のわかなけさや摘らむ　同イ

○建保三年内大臣家百首、朝若菜
續後拾春上 たがためとまだあさ霜のけぬが上に袖ふりはへて若菜つむらむ　前中納言定家卿

○同イ
朝冰たが爲わけてこのかはのむかひの野べにわかなつむらむ　從二位家隆卿

○同四年百首
新續古春上 春くれば千代のふる道ふみ分けてたれ芹川にわかなつむらむ　同イ

○百首、芹川
身をつめば袖こそぬるれ芹河の根にあらはるゝ今日の若菜も　藤原爲顯卿

○建長八年百首歌合
あたの名は春やたちなむ女郎花わかなとなりて人につまれば　後九條内大臣

○同イ
袖ぬらす澤べの若菜さりとては玉だすきにやいれてつままし　信實朝臣

○弘安三年新熊野社百首
春きては皆わかなになりにける雪いたゞきしおきな草まで　安嘉門院四條

○家集、粟津野若菜
新千賀 新後拾春上 いざけふは衣手ぬれてふる雪のあはづの小野に若菜摘みてむ　民部卿爲家

○文應元年毎日一首中
春霞小倉の山を立てこめてふもとの野べはわかなをぞつむ　同イ

○百首歌
をぐら山おなじふもとの野べにこそ萬代かねて若菜をもつめ　同イ

○同イ
こぐさつむ深田のあぜの澤水にわかなすゝぐと袖ぬらしつゝ　同イ

○同イ
古來歌 ふる雪の花野にいでて賤のめもあさての若菜いまやつむらむ　土御門院小宰相

○貞永元年洞院攝家百首
見わたせばいはたの小野の朝霞たちいでて誰が若菜つむらむ　藻壁門院但馬

○五十首歌
さゞ波や志賀の蜑人春來ぬとみるめなぎさに若菜つむらむ　従二位家隆卿

○承久二年四季百首歌
朝日山ふもとの野べに雪消えて八十宇治人もわかなつむなり　同イ

○千首歌
風雅春上 朝日山のどけき春のけしきより八十氏人もわかなつむらし　民部卿爲家

○同イ
若菜はやつみて歸らむ春の野に道ふみまよふ花もこそちれ　同イ

○同イ
新千春上 冬がれのしのをすゝき打ちなびき若菜つむ野に春風ぞふく　同イ

○文應元年七社百首、若菜
今朝はまた雪間求めて山城のみつのうへ野にわかな摘むなり　同イ

○毎日一首中
里人も若菜つみつゝやましろのみつのうへ野は春めきにけり　同イ

○文永元年毎日一首中
神垣やみたらし河に生ふる芹のつまずもありて袖やぬれなむ　同イ

○正嘉二年毎日一首中
人毎にけふの若菜はいそげどものりの爲とは思ひやはせむ　同イ

○文永七年毎日一首中
里人も千世のふる道いくかへり春のさが野とわかなつむらむ　同イ

○同二年毎日一首中
さと人や若菜つむらしいそのかみはつ春雨のふるのなか道　同イ

○建長三年毎日一首中
里人や野田の若菜をすゝぐらむ汀ぞにごる玉川の水　同イ

○同七年毎日一首中
かた岡のをのの草ばの淺みどりあらたまれとや若菜つむらむ　同イ

○同八年毎日一首中
春日野には若菜つむらしさゞ波や比良のたかねの雪のむらぎえ　同イ

○同イ
春雨のふるにつけてや春日なるみかさの野べの若菜つむらむ　同イ

○寶治二年院御百首
野べに出でてわかなつめとや霞むらむ春めき渡るかた岡の里　藤原爲實朝臣

○寛喜元年百首
新六一　四六
春日野にわれこそつまめ神垣の内にも外にも生ふるわかなを　後九條内大臣

○六帖題
新六
春日野はをはぎつみけりなら山のこのめ春風ゆるく吹くらし　民部卿爲家

○同、うはぎ
新六一
けふは又雪間のをはぎつみまぜて野べの若菜の數やまさらむ　信實朝臣

○同イ
萬十
うはぎつむ春野をみればあをによし奈良の都も賑ひにけり　光俊朝臣

○春雜歌中
萬十
春日野に煙立つみゆ少女らし春野のをはぎつみてにらしも　人丸

○題不知
萬八
明日よりは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪はふりつゝ　赤人

○同イ
萬八 難波べに人のゆければおくれゐて若なつむこを見るが悲しさ　讀人しらず

○六帖題
新六一 山がつの園の雪まのかきうちに心せばくやわかなつむらむ　信實朝臣

○同イ
新六 つむとても思ふ心のふかぜりは落つる涙や根をあらふらむ　同イ

○同イ
新六 うば玉のよるのいとまに立ち出でて芹つむ澤の月をみるかな　光俊朝臣

○題不レ知
萬三十 あかねさす晝はたゞゐてぬば玉の夜のいとまに摘める芹これ　讀人しらず

白馬

○正治二年毎日一首中、あを馬を
ゆふがすみ鴨の羽いろにたなびきて玉しく庭をわたるあを馬　民部卿爲家

○白馬歌
現存六一 さがの山くもゐの春にひきそめて絶えずもけふは渡るあを馬　同イ

○六帖題
新六二 くれたけの青葉の色のこまなべてよゝのためしを霞（雲居イ）にぞ引く　同イ

○同イ
新六二 庭のおものしめとる程になりにけり早あを馬も引き渡さなむ　衣笠内大臣

○同イ
新六二 見渡せば皆青さぎのけつるめを引きつらねたる馬つかさかな　信實朝臣

○同イ
新六二 長閑なる御代のながはしとりもあへず引き續けても渡る白馬　光俊朝臣

○家集、正月七日小松につけて經信卿のもとへ
あを馬をまづひく物と思ふまに忘れやすらむ今日の子の日は　出羽辨

○返し
白馬をひくにつけても子の日する野べの小松を忘れやはする　大納言經信卿

御齋會

○文永八年毎日一首中
大きなるいもひの始め今日こそは二つののりのよをまぼるらめ　民部卿爲家

○健保五年毎日一首中
御代ながく年も豐かに守るらむ今日はいもひの始めなりけり　同イ

○文永四年毎日一首中
御いもひのはじめを今日と思ふにぞたかき昔の事も知らるゝ　同イ

○同二年毎日一首中
世の爲にいのるしるしのはじめかないもひの庭の春の光を(はイ)　同イ

賭射

○六百番歌合、賭射
けふはわれ君の御前にとるふみのさして片よるあづさ弓かな　後京極攝政

○同イ
梓弓はる九重にちる雪を今日たつまひのそでに見るかな　慈鎭和尚

○同イ
あづさ弓はるの雲居に引きつれてけしき殊なる今日のもろ人　從二位家隆卿

百敷にひきつらなりてあづさ弓はるもともねの珍らしきかな　正三位季經卿

○承久四年百首、賭射
心あるいてのとねりのけしきみな玉しく庭にともねひくきて　大藏卿有家

堀後百
ひきはづすたつか(たイ)の弓の矢を早み共音に的のなりかはすかな　俊頼朝臣

○同イ
春さればかたやなはさみともねうちわがかち弓の數ぞ(をイ)ま(さイ)しける　仲實朝臣

○同イ
春たてば梓のまゆみ引きつれてみかきのうちに圓るをぞする　神祇伯顯仲卿

夫木和歌抄巻第一　終

夫木和歌抄　巻第二

春部二

題　鶯　霞　餘寒　殘雪　春水　若草
　　春霜

鶯

いかなれば春くるからに鶯のおのれが名をば人につぐらむ　前中納言匡房卿

○承暦二年殿上歌合

うぐひすと鳴きつる鳥や春きぬとめぐむ若菜も人にしらする　前中納言定家卿

○文治三年百首

うぐひすの宿しめ初むるくれ竹にまだ節なれぬ若音なくなり　同イ

○同五年百首

あら玉のとしの初聲うちはぶき朝けのそらに來るうぐひす　同イ

○家集、初聞鶯

はるきぬといはせのもりの鶯の初音をたれに告げはじむらむ　同イ

○百首歌

しのぶるを音にたてよとやさそふらむ岩瀬のもりの鶯のこゑ　俊成卿女

○建保三年名所百首

鶯のひなひきつれてあささらず花のねぐらを占めてけるかな　後徳大寺左大臣

○文治三年女御入内御屏風、鶯

花のもはひるのみましか鶯のねぐらの竹をおき出でてゐる　三條入道左大臣

○正治二年百首

つねよりも珍らしきかな鶯のまたしどろなる曙のこゑ

○家集、鶯

鶯のたにのふる巣のとなりにてまだかたことの初音をぞきく　小侍従

家集　かたをかに谷の鶯かどでして羽ならはしにくちずさぶなり　清輔朝臣

同　ひめもすに已が啼きをる聲のあやはけに桃色になりもしぬらむ

同　天の戸をおし明けがたにうたふなりこやうぐひすの朝倉の聲

○正治二年百首

式子內親王集　あし引の山の端かすむあけぼのに谷より出づるとりのひと聲　式子內親王

鶯のこゑにひかりやそひぬらむ月にうたひて谷をいづなり　喜多院入道二品のみこ守

もゝしきのみかきのたけを鶯のおのがねぐらと思ひがほなる　正三位經家卿

○弘長三年內裏百首、竹鶯

もゝしきのみかきのたけは鶯のこゑのうちにも千代ぞ籠れる　前大納言爲氏卿

○百首歌

さびしさや世のうきよりもまさるらむ古巣をいづる谷の鶯　寂蓮法師

花もみな散りはてぬとも梅がえの古さとはとはむうぐひすもがな

○百首歌、鶯

はつねよりなごりを思ふ鶯のみやこへいづる春の山里　參議雅經卿

ふるすたつ都も春の梢にて霞をいでぬうぐひすの聲

○六帖題、鶯

新六二　いくばくのかぜのへだてに鶯のはなをはぐゝむ春の梅が枝　信實朝臣

○柳集、春興を

見もききもあかれむものか鶯の花になく夜のありあけの月　鎌倉中務卿のみこ

○建長三年仙洞歌合

杉の葉もまだ霜こほる三輪の里なにをしるしに鶯のなく　正三位經朝卿

○建久元年百首、鶯
○文永九年毎日一首中、鶯
○春雜歌
○家集
○六帖題
○五十首歌、雪中鶯
○家集
○千五百番歌合
○建仁元年老若五十首百歌合
○鶯をよめる歌苑抄
○南北百番歌合

宿ちかくめぐれる竹を古巣にて谷よりまたぬうぐひすの聲　參議爲相卿

明けやらぬ老いのねざめの悲しさ（きイ）を同じ心にうぐひすのなく　民部卿爲家

萬八
かすみ立つ野上のかたにゆきしかば鶯なきつ春になるらし　乙麿

萬代
不破の關あさ越えゆけばかすみ立つのがみの方に鶯ぞなく　隆信朝臣

新六
あら玉の春になるらし冬枯の野上のかたにうぐひすのなく　正三位知家卿

おのれのみ春のしるしと鶯のなけども雪はふるのかみ杉　土御門院小宰相

花さきし便りまつかなたづぬやと三輪の山邊のうぐひすの聲　前大納言公任卿

春雨にこぬれかぐれに鶯のこゑうちしめる夕暮のそら　土御門内大臣

たれかまた春のしるしと契りけむ三輪の山もと鶯のこゑ　寂蓮法師

かかりけるみのりのはなぞ鶯よこなへ（ほイ）をなしと何思ひけむ

續千載春上
山里は谷のうぐひす打ちはぶき雪よりいづる去年のふるこゑ　前中納言定家卿

今はとてうぐひすさそひ吹く風のかすみに匂ふ春のあけぼの

かすむより鶯さそひ吹く風にとやまも匂ふ春のあけぼの

風春上
はなならで身にしむものは鶯のかをらぬ聲のにほひなりけり　道因法師

風雅春上
春の色は花ともいはじ霞よりこぼれて匂ふうぐひすの聲　後京極攝政

新拾雜上
ふかくさやうづらの牀は跡たえて春の里とふうぐひすのこゑ　同イ

○建仁元年老若五十首歌合
○百首御歌
○故郷鶯
○咽霧山鶯啼尚少
○題しらず
○寶治五年十一月從二位藤原親之歌合、鶯
○嘉保三年三月堀川院中宮詩歌合
旅宿暁鶯
○建仁元年影供歌合、閑居鶯
○光明峯寺入道攝政家御歌合、寒野鶯
○建保三年家百首御歌
○弘長元年百首
○家集、鶯を
○百首御歌、鶯

葛城やたかまの山の雲間より空にぞかすむ鶯のこゑ　同イ
鶯のよるとなくなるいはしの葛城山の青柳のいと　土御門院御製
風春上
霧にむせぶ山のうぐひすいでやらで麓の春にまよふ頃かな
鶯のこゑもたかまのみやきもり山にしめゆふ昔こふらし　從三位行能卿
家集
山ふかみ立ちくる霧にむすればや鳴くうぐひすの聲の稀なる　大江千里
萬十
春山のきりにまどへるうぐひすも我にまさりて物おもはめや　人丸
またれつる心もしるく春くればあしたの原にうぐひすぞなく　讀人しらず
あけぬとていそぎたつ田のやまぢには鶯の音やせきの關守　同イ
ほどとほみいそぎたつ田の旅にしもあかつきかけて鶯のなく　同イ
家集中
雪の色はまだ白川のせきの戸にあけぼのしるきうぐひすの聲　從二位家隆卿
同
あらち山谷のうぐひす野べにいでて鳴けどもいまだ春の泡雪　同イ
みよし野は谷の古里ちかければ先づ馴れ初むるうぐひすの聲　光明峯寺入道攝政
いほむすぶ野はらにかよふ鶯のおのれもかくる春のたまづさ　後九條内大臣
もゝ千鳥朝けの空にあそぶなりことのほかにぞ春めきにける　源有仲
かすみしく夕くれ竹の春風に涙とけゆくうぐひすのこゑ　慈鎭和尚
雉子なく春のすそ野のむらしばに又こゑやどす百千鳥かな

○住吉社百首御歌

うぐひすの梢にきゐる初音より色に色そふすみのえの松　同

○家集、鶯を

色つゝむ野べのかすみのしたもえき心をそむるうぐひすの聲　西行上人

つくりおきし苔の衾にうぐひすは身にしむ梅の香やうつすらむ

うぐひすはゐ中の谷の巣なれどもだみたる音をばなかぬなりけり

鶯はわれを巣もりにたのみてや谷のほかへは出でてゆくらむ

○家集春の始の比和布といふ物を梅花に付けて人のおこせたるに

はなみれば木の芽も春になりにけりみゝの間もなし鶯のこゑ　和泉式部

○小野宮殿七十御賀屏風歌

新千春上
はなさかぬ常磐のやまの鶯は霞を見てやはるを知るらむ　大中臣能宣朝臣

○文永二年毎日一首中

鶯のこゑばかりしてときは山花なき枝にあわ雪ぞふる　民部卿爲家

めづらしき松のねぐらを占めおきてふしみにきたる鶯のこゑ　花園左大臣家小大進

この歌はむ月の朔日比花園左大臣はじめて伏見の山莊にわたり侍りて

松上鶯といふ事を人々よみけるによめると云々

○鶯

萬
うちきらし雪はふりつゝしかすがにわが家のそのに鶯なくも　中納言家持卿

○天徳四年内裏歌合

續後撰春上
白妙のゆきふりやまぬ梅がえに今ぞうぐひす春となくなる　兼盛

判云此の歌の詞にうぐひす春となく事そらごとなりと云々遂爲負云々

六一
鶯のふゆごもりしてうめる子は春は睦月のなかにこそなけ　讀人しらず

○題不知

六二
うぐひすの鳴く音をまねぶ山彦を友ありがほに求めつるかな　伊勢

○寛和二年六月内裏歌合、鶯
○家集
○御返事
○上の大ばん所に硯の札に色々の花を入れたるを見て
○綠絲條弱不レ勝レ鶯
○家集、雨うちふりて物いと哀れなるに
○天延元年九月内裏御屏風に、あふさか
○或所屏風に、相坂こゆる程に鶯の聲を聞く
○中務の君山里にゐて春歌十首よみけるに鶯を
○家集
○建仁元年影供歌合

こほりとく風の音にや巣ごもれる谷のうぐひす春をしるらむ　　齊信卿

家集
きみにとし思ひかくれば鶯の花のくしげも惜しまざりけり　　伊勢

此の歌は九條の宮のみやす所の御もとにこばこ谷のこゑ紅梅のつぼみたるを入れて奉るとてよめると云々

同上
みづの江のかたみと思へば鶯の花のくしげは明けてだに見ず　　七條后

はこのうちを明けてみつれば鶯の花のくしげはにほひ深しも　　平祐擧

新拾遺下
木ゞたふにみどりの枝のよわければ鶯とむる力だになし　　大江千里

はる雨にうてなさだめぬ鶯のわづらふよりもまさる袖かな　　謙徳公

鶯のねをさきだてて逢坂のせきにかすみぞ立ちかくれける　　清原元輔

家集
關守にくちかためてぞ我はゆく鳴きぬと告ぐな山のうぐひす　　惠慶法師

なきぬやとたちゐるまちつる鶯は谷のうちより聲ぞききつる　　同イ

かたをかの花ふりそへむ雲分けて南さすえにうぐひすぞなく　　同イ

あふさかの關守神や惜しむらむこゝにしもなく谷のうぐひす　　野宮左大臣

あふ坂のせきの杉むら木づたひて山たち出づるうぐひすの聲　　前大納言忠良卿

東路やいはての關のかひもなく春をば告ぐるうぐひすのこゑ　　前中納言定家卿

鶯のなく音ばかりぞ古里のみやこに近きしらかはの關　　寂蓮法師

東路はなこその關ときくからに人來といとふうぐひすのこゑ　家長朝臣

○布引百首御歌
しらなみをはつ花とてやうぐひすのおりはへて啼く布引の瀧　法親王澄覺

○題不知
今も猶つまやこもれる春日野のわかくさ山にうぐひすのなく　中務のみこ鎌倉

○鶯を
萬代春上
色なくて身にしむものは春の日にをちかへり鳴く鶯のこゑ　藤原雅信朝臣

○承暦二年四月内裏歌合、鶯
はるくればす巣だちの小野の鶯のこゑ昔はしにいまぞなくなる　藤原伊（仲イ）家

○家集、鶯を
鶯のこゑまだしぶく聞ゆなり巣立ちのをのゝ春のあけぼの　權（同イ）中納言長方卿

○建長八年歌合
はるきぬと今ぞなくなる待たれこし巣立ちのをのゝ鶯のこゑ　後一條入道關白家民部卿

春の田はいなおほせ鳥にすみかへて今朝わがごと（門イ）に鶯のなく　後九條内大臣

○題外歌、閑眠徒負南簷日賓雁從レ今欲ニ北飛ー
家集下
たにふかく鶯さそふ春風にまづ花の香やそらにとぶらむ　前中納言定家卿

○百首御歌、鶯を
はなも匂ふはるの燈火きえやらで傾く月にたけのひとこゑ　慈鎭和尚

○春御歌中
紫の庭ものどかにかすむ日の光ともなふうぐひすのこゑ　後京極攝政

○百首御歌
呉竹の世もをさまれるまつりごと鶯までもさぞうたふらむ　後九條内大臣

芹つみしみかきがはらの鶯はおなじむかしの音になくらむ

○春御歌中、鶯
春雨の露もまだひぬ梅がえにうはげしをれてうぐひすぞ鳴く　鎌倉右大臣

草ふかきかすみの谷にはぐゝもる鶯のみや昔こふらし

○光臺院入道二品親王家五十首、野中鶯イ
鶯のゆきゝの花笠ぬひわびていづれを梅とぬれてなくらむ　從二位家隆卿

○建久七年百二十八首、題歌
おのづから春すぎばとも頼むらむ雲につけたる鳥のふる巣は　前中納言定家卿

○久安百首
晩春上
我が園を宿とは占めようぐひすの古巣ははるの雲につけてき　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首
鶯の音はかはらねどかみ山に春を告ぐるはうれしかりけり　同イ

○建保三年名所百首
氷りゐしいはまに浪のおとは川おとに深山をいづるうぐひす　俊成卿女

○貞應三年百首
音羽山たにの氷もとけぬ間にひとりうち出づるうぐひすの聲　民部卿爲家

○文治二年五社百首
せきこゆる春のつかひやゆきやらぬ音羽のやまの鶯のこゑ　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首
春のくるつかひのためや鶯のあをき色にはなりはじめけむ

○文治六年女御入内御屏風
みどりなるうはけのみかは鶯のこゝろさへ春のいろになくらむ　後法性寺入道關白

○喜多院入道二親王家五十首
いづちゆく春の使の鶯のはねやすめしてこゝになくらむ　源仲正イ師光

○百首御歌、春
鶯のうは毛はたけにまがへども聲の色には似るものぞなき　喜多院入道二品親王みこ

○家集、鶯
しのぶ山かすみのおくの鶯もはイ人にしられぬ音をやなくらむ　中務卿みこ

○治承二年右大臣家百首、鶯
をしきかな誰かきくらむ陸奥のしのぶのおくの鶯のこゑ　皇太后宮大夫俊成卿
くもゐより餘所にきくこそあはれなれ朝倉山の鶯のこゑ

○むねのもとなつが返歌作本もと夏が歌とみゆ可レ尋
こち風に氷とけなば鶯の高きにうつる聲をつげなむ　貫之

○正治百首
餘所にてもきくぞうれしき位山たかきにうつる鶯のこゑ　三條入道左大臣

○久安百首御歌
はるごとに高きにうつる鶯やくらゐの山のあかずなるなむ　崇德院御製

○文治六年女御入内御屏風、人家花鶯ある所
谷をいでてたかきに移る鶯は花さく宿のあるじなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○同年五社百首
新續古今春上
たにを出でて心たかくぞうつるなる神路の山のうぐひすの聲　同イ

○治承二年左大臣家百首
いつしかと高きにうつれ春日山たにのふる巣の鶯のこゑ　同イ

○寶治二年百首、朝鶯
明けぬれど塒のたけのよのほどにかこちよせてや鶯のなく　民部卿爲家

○文應元年七社百首、鶯
朝日かげのどかにさして春日なるみかさの森に鶯ぞなく　同イ

○文永六年毎日一首中
鶯のこゑよりほかも春やしる雪にはな咲くときは木のもり

○千首歌
鶯のまちこし野べに春のきて萩のふる枝ぞあさみどりなる

○體不知
萬八
くだら野の萩のふるえに春まつとすみし鶯なきにけむかも　赤人

○六帖題
くだら野の萩のふるえの鶯もいまぞ鳴くらし春の來ぬれば　中務卿みこ

○春日野社納百首、鶯
はるごとに奈良の都をたづねても身をふるすとや鶯のなく　安嘉門院四條

○題不知詠花抄
續後拾春上
春きぬと人に告げつる鶯のなれは誰にかとひて知りけむ　讀人しらず

○毎朝聞鶯と云ふ事を大皇太后宮にて
鶯のねぐらに夜はをさめたる聲あさなさな運びいづなり　源仲正

○建保六年三首歌合、鶯
風雅春上
たがためぞしづはた山のながき日にこゑのあや織る春の鶯　正三位知家卿

かすみしく春の日ぐらしもろごゑに友鶯のなにをなくらむ　從二位行家卿

○春歌中、萬十
春日野にいぬる鶯なきわかれ歸りますほと思ひますわれ　人丸

○千五百番歌合
春雨のこゝろ細くもふるさとは人來といとふ鳥のみぞなく　土御門院内大臣

花故にまれに宿とふくれにまた人くといとふ鳥のこゑかな　後鳥羽院宮内卿

○百首歌、浦鶯を
鶯のまつに來なけば難波かたうらわのなみも咲くやこの花　従二位家隆卿

○家集、浦鶯を
浦風に花もにほはぬ里のあまの柴のかきねもうぐひすぞ鳴く　藤原隆祐朝臣

○建保三年名所百首
心ありて誰かきくらむ津の國のあしやの里のうぐひすの聲　兵衛内侍

高砂の松はみどりに埋もれて尾の上にかすむ鶯のこゑ　藤原康光

○文治六年五社百首
さらねどもなにはの春はあやしきに我つげがほに鶯のなく　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合
梅がえの花の匂ひをゆかりとや來ゐるうぐひす妻もとむらむ　野宮左大臣

○建長八年百首歌合
春のくるゆかりなるらむ紫の根はふよこ野に鶯のなく　前大納言顕朝卿

○詠鳥歌中
萬十　紫の根はふよこ野のはる野には君をかけつゝうぐひす鳴くも　人丸

萬十　春さればつまを求むとうぐひすの梢をつたひ鳴きつゝもとな

萬十　うちなびき春さりくればしのゝめに尾羽うちふれて鶯なくも

萬十　はるがすみなかるゝともに青柳のえだくひもちて鶯なくも

○久安三年歌合、花中鶯
鶯のくひもてなくぞ惜しまれぬはやす（やとイ）柳の若葉なれども　讀人しらず

○詠鳥
萬十　打ちなびき春たちぬらし我が門の柳の末にうぐひすなきつ　同イ

○詠柳
あさな〳〵我がみるやなぎ鶯の來ゐてなくべき杜にはやなれ　同イ

○文治六年五社百首
あさ緑おのが色とやおもふらむ柳の枝にうぐひすのなく　皇太后宮大夫俊成卿

○老若五十首歌合
風わたるやなぎの絲に春かけてむすぼられたる鶯のこゑ　後鳥羽院宮内卿

○家集、竹林院
風ふけばたけの林のともずりにふしやわづらふ夜半の鶯　源仲正

○天平五年正月十一日、詠雪
萬十二　みそのふの竹のはやしに鶯はしばなきにしを雪はふりつゝ　中納言家持卿

○題不レ知
六帖二　春きぬと今はいぶきの山べにもまだしかりけりうぐひすの聲　讀人しらず

君にあはむ年をば人にかすが野の淺茅が原に鶯ぞ鳴く

○古歌
萬六　春さりゆけど　山のべに　霞たな引き　高圓に　鶯鳴きぬ　ものゝふの

○御集中御連歌
おとなしの山にや今日は鶯のこゑ珍らしく人のきくらむ　花山院御製

霞

○寛平御時后宮歌合
菅萬　はる霞あみにはりこめはなちらば移ろひぬべし鶯とめよ　讀人しらず

○家集
松が崎いつも綠の色なるをいとゞも春のかすみたちつゝ　好忠

○同イ
袖中二十　春きぬと聞きだにあへぬあけくれに霞にむせぶ眞野の萩原　俊頼朝臣

賤のをが柴かりみだるとやの野に今朝ぞ霞は立ちなびきける　神祇伯顯仲卿

○題不レ知懐中
あはぢのや浦の霞やへだつらむ繪島の松もあさみどりなり　讀人しらず

○家集、歌林
春くればまがきのしまにかけてほす霞の衣ぬしやたれなる　俊惠法師

○しま
現存六　からごろもうらわの蜑の袖しまに春の霞は立ちぞしにける　祝部成茂

○建治三年名所百首、大淀浦
大よどの浦ぢのどけき春の日にかすみぞ殘るまつのむらだち　順德院御製

○春御歌中
同春上
伊勢島や鹽干の潟の朝なぎにかすみにまがふ（よイ）和歌のまつばら　後鳥羽院御製

○小野宮百首御歌
うら風にかすみをむすぶあみ人は春のそらにや心ひくらむ　同イ

○永仁二年八月一宮大納言家百首歌、春浮島
うき島や（のイ）松のみどりを見渡せば千とせの春ぞかすみそめたる　平　祐擧

○土御門内大臣家歌合、海邊朝霞
明けわたるおきつ波間にねをたえて霞にやどるうき島の松　鴨　長明

○洞院攝政家百首、霞
みよし野は春のかすみのたちどにて消えぬにきゆる峯の白雪　前中納言定家卿

○千五百番歌合
はれやらぬ雲は雪氣の春風にかすみあまぎるみよし野の空　參議雅經卿

○二夜百首御歌、霞
やまざとの外面の岡の程なきを遙かにみする朝がすみかな　後京極攝政

みよし野のおくにすむなる山人の春のこころもは霞なりけり

○寶治二年百首
このはるは山のいはほを撫で初めてかかる霞やあめの羽衣　後九條內大臣

○貞永二年洞院攝政百首御歌
ながき日の霞になびく山鳥のをのへの里に春はきにけり　光明峯寺入道攝政

朝がすみ光に色やまがふらむ春風にほふ野べの梅がえ　洞院攝政

○同集、春曙
明くる夜の霞のこずゑほのかにて山の端さびし春の東雲　中務卿みこ

○建保三年和歌所歌合
春の立つ霞の光ほのぼのとそらにつけゆく天のかぐ山　後鳥羽院御製

○百首御歌
萬代
昨日までさえし氣色をひきかへて明くる霞の山ぞのどけき　同イ

○春歌中
今朝みれば空の氣色のしるきかな霞や春の姿なるらむ　權中納言師俊卿

○文治二年五社百首
淺みどり四方の山べにうちなびき霞や春の姿なるらむ
皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合
八重がすみ八十しまかけて立ちにけり千代の初めの春の曙
同

○建保三年名所百首
餘所人に鳴海の海の八重がすみ忘れずとても隔て果てつゝ
前中納言定家卿

○千五百番歌合
津の國の難波の春を見渡せば霞をよする沖つ白浪
第三みこ

○六帖宮百首御歌
難波がた霞のおきを行く舟のおす手もたゆき朝凪のそら
後鳥羽院御製

○百首御歌
新後撰春上
難波がた月のでしほの夕凪に春の霞のかぎりをぞみる
順徳院御製

○建久元年一字百首
太山路やかすみは雪の上とぢて猶くもうづむ草の色かな
前中納言定家卿

○承久元年十首歌、野徑霞
新拾春上
春日野の霞の衣山風にしのぶもぢずり亂れてぞゆく

○貞永二年百首御歌
春日野やしのぶもぢずりたちかへて春は霞の衣きてけり
洞院攝政

○洞院攝政家百首、霞
梓弓はる立ちぬらしわたつみの波のかざしに霞たなびく
民部卿爲家

○建保三年内大臣家百首、海霞
かざすてふ波もてゆへる山やそれ霞ふきとけすまの浦風
前中納言定家卿

あさみどり霞たゆたふわたつ海に春あるなみの花ぞ移ろふ
従二位家隆卿

○承久二年内裏にて山月といふ事を
萬代
みむろ山春のかけたる白木綿は月にうつろふ霞なりけり
光明峰寺入道攝政

○延喜十三年亭子院歌合
萬代
山里は春の霞にとぢられて炭竈とへる鶯のこゑ
藤原興風

○春雜歌
萬十
こらが手をまきもく山に春されば木のは凌ぎて霞たな引く
人丸

○喜多院入道二品親王家五十首
新千春上
春やたつ雪氣の雲はまきもくの檜原に霞たなびきにけり

○千五百番歌合
まきもくのあなしの檜原春くれば霞をかけて山かづらせり　寂蓮法師

○家百首、霞歌
梓弓はるは岡邊の小松原いくひとしほに霞みきぬらむ　民部卿爲家

○寶治二年百首
春のきる霞の袖もほしわびぬ同じ空なるあめのまぎれに　同イ

○文永元年七月百首、霞
春のきる衣かけほすさほ山のみらく少なき曙のそら　同イ

○建暦二年内裏詩歌合、山家霞
たにの戸のかすみの色あれまくに心してふけ山の夕風

○百首歌、同五首中
青柳のかづら城かけて霞むなり山はみどりの春の眉ずみ　藤原爲顯

○平宗定すゝめける十首歌、霞
花とりは猶ところわくなさけにて霞の見する春ぞあまねき　參議爲相卿

○正應(慶イ)五年三島社十首歌、海邊霞
くるゝ日の夕なぎ遠き波路より霞をいでて歸る舟人　同イ

○嘉元元年百首歌、霞
かこ山に昔のひかり立ちかへり思へば遠くかすむ春かな　同イ

○嘉元二年[illegible]歌合
立ちかくすをちの霞の一むらにけぶりあまらぬ里の朝あけ　同イ

○霞の心を
雲もゆき風もとまらぬ大空にきはなき色は霞なりけり　他阿上人

○[illegible]歌合、霞
鶯の春になりぬとさほぢなるはがひの山のまづ霞みぬる　權僧正公朝

○家集朝霞旅客
朝がすみひなのなかぢに立ちにけりすこゑに見ゆる遠の旅人　清輔朝臣

○[illegible]社[illegible]山霞
佐保姫の名にあらはるゝ山なれば今朝も霞の衣たつなり　從二位家隆卿

○家集霞歌中
いもせ山ほそ谷川を(のイ)おびにして霞の(はイ)衣けさやきぬらむ　俊頼朝臣

○治暦二年三月定綱朝臣歌合
朝まだきふる秋霧にゆふされの春の霞はたちまさりけり　源基綱

○百首御歌
ともがほに鶯ばかりおとづれて霞にむせぶ春の山里
喜多院入道二品のみこ

○喜多院入道二品親王家五十首歌合
山のはは分けよるまゝにあらはれて霞をこむる松のむら立ち
寂蓮法師

○洞院攝政百首、霞
朝ぼらけおぼろに霞む山の端によゝの昔ものこる月かげ
俊成卿女

○三百六十番歌合
はなさかでまだ色どらぬ梢には春のかすみぞ下綺なりける
土御門内大臣

○正治二年百首歌
春霞たえ間をわけてながむればとほちの梢なべて靑しも
同イ

葛城やくろちの谷のむらがすみと絶えは橋に限らざりけり
前大納言隆房卿

春がすみ松浦の山はよきてたてゆくてにも見むいもが袖ふる
正三位經家卿

○同山
春くればふもとめぐりの霞こそ帶とは見ゆれきびの中山
小侍從

○百首歌
萬代 三輪の山ふもとめぐりの横がすみしるしの杉の末な隱しそ
源仲正

○春歌中新沫賞
あふさかの關の外山も明けやらで霞よこぎる杉のむらだち
藤原業清朝臣

○南北百番歌合
おとは山今朝の霞をかきわけて心ぞかよふ白川のせき
慈鎭和尚

○文保百首題春來レ到可レ在ニ海門東一
陸奥や春まつ島のうはがすみしばし勿來の關路にぞみる
同イ

○百首御歌
ほのぼのと霞の袖のくれなゐをくゝるは白き和歌の浦波
同イ

○住吉社百首御歌
朝がすみたなびく程はすみよしの梢につゞくこやの松原
同イ

○元久元年詩歌合、水郷春望
里人のたまもの袖やせく春のかすみによどむゐでの白波
後久我太政大臣

河上やまたよこぐもる薄みどり波よりかすむよどの曙
従三位保季卿

へだてつる横のを山も絶え〳〵に霞ながるゝうぢの川波　家長朝臣

○弘長元年百首、霞
朝氷はやうちとけよ川邊なる霞の衣そではぬるとも　信實朝臣

○石清水若宮歌合、河邊霞
水上やきしの柳の深みどり霞のみをのしるしなりけり　祝部成茂

朝日かげさすや霞の龍田川また水くゝる春のくれなゐ　後鳥羽院下野

○後京極攝政家歌合、志賀浦霞
春くればみぎはの氷うちとけて霞ぞとづるしがの浦波　從二位家隆卿

○伊勢のふたみのうらにて海邊のかすみを
家集上
浪こすとふたみの松の見えつるは梢にかゝる霞なりけり　西行上人

○六十五[illegible]字歌、光花照耀是春衣
梅がえのうつす匂ひはうすからし霞はよわき春の衣に　前中納言定家卿

○五百首御歌、霽霞
あめにますとよをか姫の夕かづらかけて霞める天のかぐ山　後鳥羽院御製

○春御歌中
かぐ山のあまぢの霞をりはへて神もや昔ころも干しけむ　後九條内大臣

○嘉禎二（六イ）年十首歌合、朝霞
春の夜のあけるかすみの立田山これや神代の衣なるらむ　同イ

○弘長二年[illegible]山百首
世におほふ霞の衣これやさは神のみけしとたちはじめけむ　安嘉門院四條

○建保三年名所百首
佐保ひめに霞のま袖手向山みだすな嵐うすき衣を　正二位忠定卿

○千首歌
さほ姫のかすみのま袖ふりはへて春立つ野べに雪やけぬらむ　民部卿爲家

○題不ㇾ知六帖五
新勅春上
佐保姫のおりかけ晒すうすはだの霞たちきる春の野べかな　讀人しらず

○山霞漸從心
袖中十九
あすは又たちや重ねむ雪きえぬ伊吹のたけの峯のをがすみ　仲實朝臣

○家集、春歌中
山里のひとのみなかけ今朝みればうすく霞の峯にうるだち　惠慶法師

○百首歌、霞
いつしかもうゐだちにける霞かなまだいとけなき春の初めに
源仲正

○家集、霞歌
たち初むる霞も色のわかければまがひもやらず春の神垣
從二位家隆卿

○寛喜二年女御入内御屏風、山家霞
春きてはゐて越す波の音ばかり霞にのこる山川の水
西園寺入道太政大臣

○四季百首御歌、朝霞
春のたつあしたの原の霞より野べも山邊も色づきにけり
慈鎭和尚

○百首御歌中
浦人のたきすつる火の色よりも猶やあかしの霞なるらむ
後九條内大臣

○嘉祿元年百首
明石潟おき行く舟もかつきえてひとかすみなる波の上かな
民部卿爲家

○同二年百首、海霞
須磨の蜑のかすみの衣ふき返しうら珍らしき淡路島山
同イ

○家集、春歌中
むさし野の萩の燒原かき分けてをちかた人の霞みゆくらむ
從二位家隆卿

○建保二年内裏詩歌合、野霞
武藏野やかれにし儘にした萩のなかばぞ霞む雪のむらぎえ
順德院御製

春の色や淺さはをのの忘れ水たえ／＼かすむ住吉の松
參議雅經卿

○舊年立春堀川次郎百首
あらたまの　年にふたゝび　春たてば　老のかすみの　そはりつつ　なきむかしこそ　戀しけれ　哀れ我が君　ましし時　たつのみかほに　ちかづきて　てるひの光　身をてらし云々
仲實朝臣

餘寒

○寶治二年百首、餘寒
春きても猶さえわたる山里は去年とやいはむ峯のこがらし
常盤井入道太政大臣

あし引の山のあらしぞ猶さむきうべ二月と人はいひけり　後嵯峨院御製

○家集
ともすれば雪氣の餘波猶さえて時雨に歸るきさらぎの空　鴨長明

○文永五年毎日一首中、二月を
さらにきる霞の衣猶さえてしもにむすべる花のしたひも　民部卿爲家

○同七年毎日一首中
はれやらぬ雪氣の雲にきりあひて曙さむききさらぎの空　同

○同九年毎日一首中
雲間よりあまぎる光ひとつにて月にふりしく春のあわゆき　同

○建長三年毎日一首中
春きても野路のしのはらそよさらに雪も霰も冬とさえつゝ　同

○貞應三年句題百首
若菜つむ澤べの氷とけやらでまだ肌さむきはる風ぞふく　同

○家集
春きても野原はいまだ松もひき若菜もつまず雪はふりつゝ　同

○千首歌
春くれど軒端のつらゝ猶さえてあさ日がくれに殘る白雪　同

○百首歌
うはがれの草葉は霜に猶さえて春めきやらぬ小野の古みち　同

○建保三年名所百首
春日野はきのふも今日も猶さえて妻もこもらぬ狹の燒原　僧正行意

○弘長元年百首、春雪
ふるゆきは猶こそきえねあらたまの年を吹きこす冬の嵐に　信實朝臣

○寶治二年百首、餘寒
殘れるをさらぬあたりの宵々に思ひもすてぬはるの埋火　辨内侍

○六百番歌合、餘寒
風春上
霞みあへず猶ふる雪に空とぢてはる物深きうづみ火のもと　前中納言定家卿

同
はるきても猶しみこほる山里は筧の水のおとづれもなし　前大納言兼宗卿

○老若五十首歌合
雪消えぬひら山風なほさえて霞にこほるしがの浦波　參議雅經卿

○永久四年百首、餘寒
春きては岩まの氷とくべきに冬にもこえてさゆる比かな　仲實朝臣

春なれど雪ふる年のけをちかみ小野のすみがま猶やたくらむ　皇太后宮肥後

殘雪

○文治二年百首、殘雪
ふみしだくおどろが下にしみ入りて埋もれ替る去年の雪かな　前中納言定家卿

○光明峯寺入道攝政家百首、春雪
春のゆきの梢に匂ふ吉野山花よりさきに花をみるかな　慈鎭和尚

○家集、野外春雪
春もみるみむろのあたりけを寒みこやくるす野の雪の村ぎえ　大納言經信卿

○家集、三百六十首
山がつのうつぎ垣根に消えのこる雪をぞ花によそへつゝみむ　曾禰好忠

○承保二年二月陽明門御殿上歌合
こち風に峯のあわ雪きえぬらしところ〴〵に晴れぬ白雲　高階政業

○堀川院御時百首
消えのこる朝日がくれの白雪は去年の形見をたたぬなりけり　基俊

○文應（永イ）元年七社百首、殘雪
きえやらぬ紫野ゆきしめ野ゆきそれかとまがふ春の夕暮　民部卿爲家

春冰

○家集、池有二波文一氷盡開
袖ひぢし池の冰もうちとけて綠のあやは波ぞたちける　前中納言匡房卿

○同日暖人間（爾カ）釣
山川は春のうすらひ解けにけり心のどかに人ぞつりける　太宰大貳高遠卿

○建長八年百首歌合
春くればとくる冰のうすらひに音たてそむる谷川の水　前大納言顯朝卿

○家集、古今一句歌
こほりゐし水のしら浪立ち返り春の宿とふ池のをしどり　從二位家隆卿

○家集
春風に今はこほりもたまさかの池のおもては小波ぞたつ　同イ

○家集、春歌中
朝日さすかた山川の薄冰まづうちとけてねむるむらがも　源有仲

○三百六十首中
家集 我が宿に板井の水やぬるむらむ去年のかはづの聲すだくなり　好忠

○禖子内親王家歌合、池氷一重殘
萬代雜二 うすごほり殘り少なくなりにけり池の鏡と冬はみしかど　武藏

こち風にとけゆく池の冰うすみ鴛鴦の羽ぶきも春めきにけり　宣旨

東風かぜにとけはてねかし薄冰池のみづなみあやに見るべく　讀人しらず

○家集、春氷 若水イ
春風に冰のとぢめゆるされて岩間の水の心ゆくなり　源仲正

○百首歌
雪こほり水上山にとけにけり小川のさなみさゞれこえ行く　民部卿爲家

○建仁元年老若五十首歌合
こほりとく春の山風ふきぬらし岩根をとむる瀧のふるこゑ　從二位家隆卿

○建保四年百首
春風に野澤の冰かつきえてふれどたまらぬみつの泡雪　參議雅經卿

○六百番歌合、春氷
山河の冰のくさびうちとけて石にくだくる水の白玉　大藏卿有家

風春上 鶯のなみだのつらゝこゑながら便りにさそへ春の山水　寂蓮法師

風春上 はる風に下ゆくなみのかずみえて殘るともなきうす冰かな　從二位家隆卿

木の間より日影や春をもらすらむ松の岩ねの水のしらなみ　後京極攝政

○百首御歌
風春上 ちくま川春ゆく水はすみにけり消えていくかの峯の白雪　順德院御製

若草

○六百番歌合、若草

新後拾遺春上
雪きゆる枯野の下のあさ緑こその草はや根にかへるらむ　後京極攝政

○貞曆（應イ）三年百首

同
霜おきし去年の枯葉ののこるまにそれとも見えぬ春のわか草　慈鎭和尚

○仙洞柿本影供、野徑若草

同
おそくとく己がさまぐ\さく花もひとつふた葉の春の若草　前中納言定家卿

若草のつまもや雪にこもるらむまだ春寒きむさし野の原　民部卿爲家

野原ゆく人の袖のみふきかへしまだうらなれぬ葛のうは風　源家長朝臣

○あめつちのもしの歌

らにもかれ菊も枯れにし秋の野のもえにけるかなさほの山づら　源順

○嘉保三年三月堀川院中宮詩歌合
草有識

しかふべくなりもゆくかな雉子啼く片野のみのの荻のやけ原　讀人しらず

○家五十首

小雨ふる端山がすそに下もえてまだくさたたぬ荻の燒原　喜多院入道二品のみこ

○南北百番歌合

新勅撰雜上
むさし野の春の氣色もしられけり垣ねにめぐむ草のゆかりに　慈鎭和尚

○好忠百首歌

萬代
あかねさす朝日にきゆる雪まよりきざしやすらむ野べの若草　源順

○寶治二年百首、若草

口を經ては綠ぞ增さるたまさかにきざすと見えし野べの若草　正二位知家卿

春のきて又くさたちになりにけり見しはふるねの荻の燒原　信實朝臣

○千五百番歌合

春風のふくにつけてぞ思ひいづるつのぐむ荻の行末の秋　家長朝臣

○建長八年百首歌合

見渡せば春は難波のうらわかみ蘆のにひ葉の淺みどりなる　從二位忠定卿

○寶治二年百首、若草

み吉野の燒生をみればいと早みにひ草もえてあさ緑なる　光俊朝臣

○建長七年顯朝卿家十首、磯徑若草

濱菜とるあらいそのをのしき波におひとめがたき春の若草　同イ

○名所歌、古與呂木磯若草

岩がねの磯の初草したもえてよすれば靑きこよろぎの波　參議爲相卿

○寶治二年百首

萌えそめて幾日もあらぬ初草のあさ野の原にきゞす鳴くなり　衣笠内大臣

○建長二年詩歌合

春くれば入江のまこも下萌えてかつ緑なるまののうら波　土御門院内大臣

○家集

難波江の蘆も眞菰もしらすげも角ぐむ程はえこそ見わかね　前中納言匡房卿

○雜歌中

萬十四
おもしろき野をばな燒きそ古草に新草まじりおひは生ふるに　人丸

○題不レ知

萬十一
若草の新手枕を卷き初めて夜をや隔てむにくくあらなくに　讀人しらず

○文應元年七社百首

春日野の新若草につながれてたちも離れずあさる春駒　民部卿爲家

○六帖題しめ新六帖五

新六帖五
結ばはやわがしめゆひし若草の新手枕を人にふるさで　同イ

春霜

○題不レ知

萬十
春さればみくさの上におく霜のけつゝも我は戀ひ渡るかな　人丸

○千五百番歌合

池水の水くさにおける夜の霜きえあへぬ上に春雨ぞ降る　後鳥羽院御製

○建保三年内大臣家百首、春霜

さゆる日のみくさの霜の消えがてに又ふり積る春の泡雪　從二位家隆卿

○建長八年毎日一首中

きさらぎの末野の草の淺緑めぐみもやらずさゆる霜かな　民部卿爲家

○同五年毎日一首中
きさらぎの夜寒の霜にむすぼほれとけこそやらね花の下紐　同イ

○同三年毎日一首中
下萌えの青葉もみえず朝な〳〵霜にこほれる小野の淺茅生　同イ

○正嘉三年毎日一首中
あけ渡る東雲寒き霜の上にむら〳〵みゆる春の泡雪　同イ

○岡屋入道攝政家百首、摘若菜
我が袖はぬるともつまむ霜むすぶ燒野の若菜した萌えにけり　同イ

夫木和歌抄卷第二　終

〇家集

〇家集

〇天元元年御屏風

夫木和歌抄　巻第三

春部三

題　梅　柳　早蕨　春雨　稲荷詣
　　春日祭　遊絲　春駒　燕

梅

風春上　六帖
梅のはな咲くとも（もイ）しらずみ（やイ）芳野の山にともまつ雪のみゆらむ（ふるイ）　貫之

此の歌は延喜十六年に齋院御屏風に人の家に女共の庭に出でて梅の花を見又山にのこれる雪を見たる所をよめると云々

明けぬとも折りや惑はむ梅の花いづれともなく雪のふれれば　躬恒

家集
あさ氷ふきとく風はぬるけれど急ぎて梅ははや咲きにけり　順

笛のねにおつるを見れば梅の花春のしらべと思ふなるべし　大宰大貳高遠卿

この歌は清涼殿の御前の梅の花いと面白くちりしなりに殿上の人々なめして花のもとにておほんあそび有りけるに御歌などよませ給うける

○南枝暖待レ鶯といふことを

○家集、前能登守にて下るにイ

○家集、梅花を

○家集

○家百首

○平貞時朝臣家屏風歌

にょみけると云々

風ぬるみ梅の初花さきぬればいづらは宿の鶯のこゑ　・　同イ

春霞たなびくことのねにそへて梅が枝さへに匂ふ宿かな　祭主輔親

此の歌は東三條院の御屏風に初春家居にひめの花のみぎりにあるところすだれの前に男客ありて花を見琴を引く所をよめると云々

さきそむる山べの梅の香にめでば花の便りと君や思はむ　藤原道信朝臣

このうたは前大納言二位卿北白川の家に春の比道信朝臣きたりけるに花こそ宿のあるじなりけれとよみ侍りける返しと云々

新拾春上　伊勢家集

梅の花かたえ殘らず散りにけり圍ひてだにや惜しまざるべき（うらみてなどかのこらざりけむイ）　亭子院御製（詠イ）

此の歌は伊勢がかつらの家の梅の花御覽じて結びつけさせ給うける御歌と云々

雪ふかく春ともみえぬ（しらぬイ）こしぢにも時しる（をりイ）梅は（こそイ）花さきにけり（けれイ）　中務

春霞たつ片岡の梅の花匂はざりせば誰かしらまし　藤原元眞

珍らしや垣根に植ゑしすはえきの立ち枝にさける梅の初花　源仲正

わが宿の根こじの梅のかたさきてほつえの風ぞ薄匂ひなる　民部卿爲家

をりて見む軒端の梅の紅にうすくふりなす雪の一えだ　前參議爲相卿

○嘉元元年百首、梅
さそふべき風は霞にへだゝりて梅が香ちらぬ窓のあけぼの　同イ

○梅花讀ニ號袖ニと云ふ事を
玉葉雜一 忍びつゝまかへる習ひの移り香を袖に争ふ窓の梅がえ　前大納言爲家卿

○大嘗會悠紀方御屏風
やへたてる白雲山の梅の花みなみの風に匂はざらめや　前中納言匡房卿

○梅歌中
萬八 霜雪もいまだすぎねば思はずに春日の里の梅の花みつ　讀人しらず

萬 春がすみ（たつイ）かすがの里の梅の花山した風にちりこすなゆめ　大伴宿禰村上

○春歌中、家集
かすが野やいはふみむろの梅が枝に霞たなびき鶯ぞなく　從二位家隆卿

○最勝四天王院名所御障子
かすが野にさくや梅だ枝雪間より今日は春べと若菜つみつゝ　前中納言定家卿

○御集中
さほ山はもみぢの色もなにせむに春の梅をぞみるべかりける　花山院御製

○神龜四年正月春日野にて作歌
萬八 梅柳過ぐらく惜しみさほの中に遊びしことを宮もとゞろに　讀人しらず

○梅歌中
萬八 ひきよぢて折らばちるべく（しイ）梅の花袖にこきいれつ染まばそむとも　中納言家持卿

同 つぼめるといひし梅がえ今朝ふりし泡雪にあひて咲きにけむかも　大伴宿禰村上

萬五 杯に梅の花うけて思ふどち飲みての後はちりぬともよし　坂上郎女

○題不レ知
萬八 うらわかみ花咲き難き梅を植ゑて人のことしげみ思ひぞわがする　中納言家持卿

○同イ
萬五 おくれゐてなかこひせずば御園生の梅の花にもならましものを　讀人しらず

○同イ
萬十七 御園生の百木の梅の散る花の雨にとびあがり雪とふりけむ　中納言家持卿

○家集、春歌中
萬 泡雪にふられてさける梅のはな若かりやらばよそへてもみむ

同 雪さむみさきも開かぬ梅の花よしこの頃はかくもあるかに

しろ髪にさきまどはせる花の色をそれなむ梅と人はわかなむ

萬十五 春の野に鳴くや鶯なづけむとわがいへの園に梅の花さく

萬八 風まじり雪はふれども見になさず我がいへの梅を花よちらすな

梅が香を山ふところに吹きためて入りこむ人にしめよ春風　西行上人

雪のしたの梅重ねなる衣の色をやどの妻にも縫はせてぞみる　同イ

新六ノ六 宿の梅の薄紅のおろし枝ねをまつ程の色はイやかれなむ　信實朝臣

風春上 中務集 にほふ香のしるべならずば梅の花暗部の山にをりまどはまし　讀人しらず

春のくる霞の里はいつしかと垣ねの梅も花さきにけり　同イ

たかみやの宮人いかにかざすらむまづさく梅の花を尋ねて　兼仲卿

山ひめの袂やかをる布引の瀧のあたりの梅の初花　法親王道光 覺イ

一木だに匂ひはとほし唐土の梅さく嶺を思ひこそやれ　俊成卿

たれか又こえても折らむみくま野の神のいがきに匂ふ梅がえ　從二位家隆卿

壬二下 またイ はるは先づたのむ南の太山より思ひひらけて匂ふ梅がえ　同イ

續千春上 梅が香やまづうつるらむ影清き玉しま河のはな 水イ の鏡に　前中納言定家卿

春の夜はあたりの梅をふく風に袖の香かふる軒のたちばな　同イ

○家集中

○雪こうばいをうづむ

○六帖題、紅梅

○光明少將家歌合、梅 夜イ

○寛喜三年三月祐子内親王家名所歌合、龍の里

○正安大嘗會

○布引百首御歌イ

○文治六年五社百首

○後鳥羽院御幸熊野山有りけるに

○承明門院よりめさたける熊野山歌

○建保三年名所百首

○家集、春夜 梅イ

○正治二年百首御歌

新後拾　袖のうへに軒ばの梅は訪れて枕にきゆるうたゝねの夢　式子内親王

梅がえはまだはなたたず雪中に匂ひばかりは風にしられて　後鳥羽院御製

秋よりも梅かをる夜の月をみむ鹿こそなかね袖はつゆけし　隆信朝臣

家集　をる袖ぞ雪げのつゆにぬれにける梅の花笠かひなかりけり　能因法師

○承久四年百首、紅梅

色も香もなつかしきかなわぎも子が衣にそむか紅の梅　藤原兼房

○嘉陽院殿にて清涼殿の八重梅を

紅ににほふ盛りの八重梅はこゝのへながらとへば散らまし　堀河院中宮上総

○家集

わが宿の八重の紅梅さきにけり知るも知らぬもなべてとはなむ　鎌倉右大臣

みても猶あかずぞありける水の江の吉野の宮の梅の初花

○建長六年三首歌合に

限りなきはこやの山の梅の花匂ふ八千代のかざしなるらむ　兵部卿隆親

○洞院摂政家百首、春朝梅

まちいづる朝日の里の梅の花八十氏人もそで匂ふらし　従二位家隆卿

○家隆卿家會、野外梅

しきたへの手枕の野の梅の花ねての朝けの袖にほふらし　光俊朝臣

○百首御歌中

新續古今春上　ながむれば見ぬ古への春までも面かげかをる宿の梅がえ　式子内親王

○西洞院隠士百首和歌

はれやらぬ軒端の梅やさきぬらむ雪に色づく春の山もと　後京極摂政

○建保三年家百首御歌

はる雨にまがきの梅の花ざかり枝もとをゝの雪かとぞみる　光明峯寺入道摂政

○家集、月次歌中

梅がえに結ぶ氷も春たてばとくと聞きつる鶯のこゑ　太宰大弐高遠卿

○家集、梅

春くれば裾野の梅のうつり香に妹背の山やなき名たつらむ　清輔朝臣

○文應元年執政家會、野梅
くみたえし清水も春や思ひいでむ野中の梅のよその匂ひに　同イ

○六帖題、梅
住吉の岸もせざらむ人ぞうき遠里小野の梅のさかりに　同イ

○住吉社百首
住よしの里のあたりに梅さけばまつ風かをる春の曙　慈鎮和尚

○文應元年七社百首
おのづからまじりて咲ける梅がえに松さへ匂ふ住吉の岸　民部卿爲家

○朗詠百首、寒梅北[illegible]雪封寒
日影なき片枝は雪にとぢながらかつ〴〵匂ふまどの梅がえ　民部卿爲家

○嘉元元年三十首歌、夕梅　百イ
曉の風をまたずて梅の花花の夕にぞひらけそめぬる　前中納言爲兼卿

○若御歌合
風雅
梅が香は枕にみちて鶯の聲よりあくる窓のしのゝめ　同イ

○乾元元年仙洞歌合、春夕
玉春上
梅のはな紅にほふ夕ぐれに柳なびきて春さめぞふる　同イ

○弘安二年箱根宮百首
いくしほか袖に色香をうつすらむ春は梅さく里のあま人　安嘉門院四條

○文永二年七月白川どの七百首、里梅
さきぬとはいはでの里のいはねども外までしるく匂ふ梅がえ　左近中將具氏卿

○仁和寺嶋王院にて梅花久薫といふことを
あたりまで三室の山はのどかにて松風かをる宿の梅がえ　寂蓮法師

○久應二年毎日一首中
よそにてぞ見るべかりける小倉山麓につゞく梅のさかりは　民部卿爲家

○弘長四年毎日一首中
梅の花さかりになれば小倉山ふもとの里を雪かとぞみる　同イ

○名所歌に、小倉山春
みしまゝに春も忘れず小倉山ふるき軒ばに匂ふ梅がえ　法眼慶融

○六帖題
新六ノ六
藪し咲くおどろまじりの梅の花唯一重なる色もわりなし　光俊朝臣

○中務卿親王家百首
初瀬路やありし宿りの梅のはな人はいさとぞ香に匂ひける　同イ

○御集
はつせ山たにそばかけて板庇下ふく風にうめの香ぞする　光明峯寺入道攝政

○春歌中
はつせ山春いくかへり過ぎぬらむ梅も古木に老いにけるかな　源親房

○家集、山滝梅
よのつねのつま木はこらじ春山の梅の匂ひをたき物にせむ　源仲正

○垣根梅
にほひくる空焼ものを尋ぬれば垣ねの梅のはかるなりけり　同イ

○山田のさとにてはじめて鶯をききて
鶯の初音をきのふ聞きしかな山田の里のうめの立ち枝に　能因法師

○早春館ニ翫紅梅一
勾ひだにあかなくものを梅がえの末つむ花の色にさへさく　同イ

○親子内親王家歌合、家梅始開と云ふ事を
春まちし甲斐もあるかないつしかとわが花園の梅さきにけり

○久安百首
ひきつれてくる青柳の絲よりも南や北の梅ぞ身にしむ　郁芳門院あき

○百首歌
梅がえに軒のしがらみかけてけり花の關守さゝがにのいと　寂蓮法師

○建長八年百首歌合
ともし火を月になぞへて春のよの暗にも見ゆる宿の梅がえ　從二位行家卿

○堀河院御時百首
紅の八重さく梅にふる雪は花のうはきと見ゆるなりけり　仲實朝臣

○光臺院入道二品親王家五十首、道梅
みちのべの片岡山のうめの花たちよるばかり春風ぞふく　法印定範

ふまば惜し花はゆくてに古郷のみかきが原の梅のしたかぜ　信實朝臣

○五十首歌
續後拾春上
しろたへの袖かとぞ思ふ若菜つむみかきが原の梅のはつ花　前中納言定家卿

○家集、三十首歌中
風雅
くもぢゆく鴈の羽風もにほふらむ梅さく山の有明の空　同イ

○最勝四天王院名所御障子歌
○家集、遊覧梅を
○百首歌
○家集中右馬頭保昌朝臣のもとに紅梅の枝にきじをつけて送るとて
○返し
○御集、山にて梅花を御らんじての御製歌
○仁安二年二月清輔朝臣家歌合、隣家梅

今はとて鶯さそふ花の香にあふさか山のまづかすむらむ　同イ

けふぞしる（とふイ）志賀津の蜑のすむ里を鶯さそふ花の（はるイ）しるべに　同イ

うめの花にほふやいづこ雲かゝる太山の松は雪もけなくに　同イ

風かをる遠のやまぢの梅の花いろにみするは谷のしたみづ

起きて行く旅ねの庵の梅が香にありしながらの東雲の空

春の野の雉子の羽風あふげども塒の梅はちらずぞありける　祭主輔親

鶯の塒の梅と聞くものをとりたがへたる心ちこそすれ　藤原保昌朝臣

年ごとに逢坂山の梅の花ちるをばせきもとゞめざりけり　花山院御製

三たびまでかかる宿をや慕ひけむあたり嬉しく匂ふ梅がえ　資隆朝臣

此の歌判者衆議いづれもおしくもきこえぬを三たびまでしたひたる（けイ）歌はもし孟母が事にや侍らむさてはすこしおぼつかなしかれは鄰をこそきらひたれ慕ひたる事はなし但かやうのことはおほかればこと事にてもこの梅はききひらきてのち淺し深しはさだむべしなどと申すほどに作者きたりあはれて孟母のよし侍りしかばさて心えずとてまけにきと云々

○家集
○題不レ知
○百首御歌
○柳
○題不レ知
○家集、春歌中
○後京極攝政家歌奉りける二十首中
○家集
○家集、柳をよめる
○家集
○天延三年關白家歌合、青柳

さして行く稲荷の山のすぎがたみ花のあたりの移り香により　能宣朝臣

此の歌は屏風に二月初午にいなりまうでする男女おほく行きかふ梅花の下に女やすむに同じくなとことゞまれる所と云々

柳

萬九 蛙なくむつたの淀の河柳ねもごろみれどあかぬ君かも　人丸

萬八 みよし野の六田の淀の河柳みどりをおくる春の岩なみ　後鳥羽院御製

萬八 わがせこの見らむさほぢの青柳を手折りてだにもみむ色にもが（よしめかめ萬）　坂上郎女

萬八 うちおく（のほ萬）るさほの河原の青柳は今（ぬ萬）は春べとなり（めえ萬）にけるかも

家集 わが宿のまど（へ家）の青やぎ風ふけばおる人なしにぬきみだる絲　中納言家持卿

新千春上 あさみどり空に波よるいとゆふに亂れてまがふ窓の青柳　前中納言定家卿

新千春上 青柳の眉にこもれるいとなれば春のくるにや色まさるらむ　貫之作本集輔昭云々

露を重みたえぬ（づぬイ）ばかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらむ　順

新拾春上 池水になみは隙なくあらへども柳のいとはほす人もなし　素性法師

青柳をかざしにさして梓弓はるの山べにいる人やたれ　躬恒

萬代 谷風の吹上にたてる玉やなぎ枝のいとまも見えぬ春かな　讀人しらず

○東三條にて舟に乗りて釣堂へ詣づとて岸柳を
○堀川院御時百首、柳
○禖子内親王家歌合、雨中柳
○同家歌合
○同イ
○大嘗會悠紀方屛風、青柳杜の柳を
○家集、柳を
○建保四年百首
○弘長元年百首御歌
○西洞隱士百首御歌 院イ
○南北百番歌合 首イ
○千五百番歌合 歌イ
○文治二年百首、柳
○三十六人歌合

青やぎのいとを綱手にひく舟は岸近くこそよらまほしけれ　伊勢大輔
もかり舟ほつゝしめ繩こゝろせよ河ぞひ柳風になみよる　俊頼朝臣
綱手ひく川ぞひ柳春くればみつとともにぞ風に浪よる　顯仲朝臣
青柳の絲は絲の髮なれや亂れてけづるきさらぎの風　權僧正永縁
萬代 春雨のふりそめしよりいつしかと垣根の柳色づきにけり　讃岐
玉ひかる絲かとみゆる青柳になびかぬ人はあらじとぞ思ふ　小式部
雨の中(うち)に色まさり行く青柳をたまひけるとはいふにざりける　美作
代々をへてたえじとぞ思ふ春毎に絲よりかくる青柳のもり　前中納言匡房卿
さほ姫のねくたれ髮を青柳のけづりやすらむ春の山風　同
さほ姫のかつらぎ山の朝寢髮みだれてなびく青柳のいと　源家長朝臣
青柳のうちたれ髮のたれまつといはねの枕よる拂ふらむ　後九條内大臣
新千 谷河のいは(ふるイ)ねかたしく青柳のうちたれがみをあらふ白浪　後京極攝政
春風に柳や岸をはらふらむ浪にかたよる池のをし鳥　同
春の池のみぎはの柳打ちはへてなびく下枝にをしぞたつなる　二條院さぬき
おそくとき絲の色にしるきかな春くるかたの庭の青柳　前中納言定家卿
新續古今雜上 花みるも苦しかりけり青柳のいとよりよわき老の力は　刑部卿頼輔イ

○家集
見にとくる人だにもなし我が宿のはいりの柳したはらへども　和泉式部

○喜多院入道二品親王家五十首
いにしへの春や戀しきふる郷の柳のめより露のこぼるゝ　正三位季經卿

○同五十首、閑居
わがや（かイ）どのいつもと柳うちなびくはなだの絲はくる人もなし　前大納言經宗卿

○家集
我がかどのいつもと柳いかにして宿によそなる春をしるらむ　清輔朝臣

○久安百首
ふく風にいと亂れたる我が宿のいつもと柳よりてこそみめ　大炊御門右大臣

○同
しづのをが小田の堤のさし柳しげくもことしはえにけるかな　藤原實清朝臣

○建長七年顯朝卿千首、詠柳路
玉ぼこの道のなはてのさし柳はやもりになれ立ちも宿らむ　光俊朝臣

○寛喜五年女御入内屏風、江山人家垂柳
山もとの入江の柳かけ見えて浪も絲のいろやそふらむ　光明峯寺入道攝政

そめてけり柳の枝の玉かづらながきよちぎる宿のしるしに　前中納言定家卿

○貞應三年朗詠百首
青柳の夜の間のつゆの玉かづらかけて吹きほす庭の春風　民部卿爲家

○柳をよめる
風わたる岸のやなぎの片絲に結びもとめぬ春のあさつゆ　前中納言爲兼卿

○御集、柳を
はるくればなほ色まさる山城のときはの森の青柳のいと　鎌倉右大臣

○中務卿親王家歌合、柳
うき身には柳をあめるかひもなしさらぬ人だに眉を開くに　權僧正公朝

○家集
さる澤の池の柳やわぎも子がねくたれ髮のかたみなるらむ　承明門院宰相

○家集、垂柳臨レ水
さる澤の池に浪よる青柳たまもかづきし朝ねがみかも　清輔朝臣

○建長七年顯朝卿家千首、江柳
難波江にいまは春べとうちはへて萌えいでにける玉柳かな　源仲業

○承安五年正（二イ）月重家卿歌合、故郷新柳

なには津に冬こもれりし（イせイ）青柳も今は春べにけしきことなり　清輔朝臣

さる澤の池の玉もにかげそへて浪よりあくる青柳のいと　正三位季經卿

さる澤の池のうすらひ打ち解けてたまもを宿す岸の青やぎ　勝命法師

花ならで見にくるものはみよし野のあさ緑なる青柳のいと　正三位經家卿

古里の見かき（柳イ）がはらの玉柳おのが絲をやをにはぬくらむ　菩提院入道關白家卿

春きぬとよそにもしるしみ吉野のみかきが原にしだる小柳　正三位季能卿

○仙洞歌合

淵は瀬になるや飛鳥の川のべにかはらぬものは春の青柳　二條皇太后宮大貳

○仙洞歌合

とぶ鳥の飛鳥の寺はあれにけり誰がうゑおきし春の柳ぞ　中納言光經卿

○光臺院入道二品親王家五十首、岸柳

ながめやるみむろの岸の柳原かすみの上に春風ぞふく　常磐井入道太政大臣

青柳のかみなび河の春風に三室のきしをあらふ白浪　信實朝臣

神なびのみむろの岸の柳かけ絲も深き水のいろかな　前中納言光經卿

新續古今上
立田川みむろの岸の古柳いかにのこりて春をしるらむ　正三位家衡卿

神なびのみむろの岸の河柳かはらぬ浪も春めきにけり　如願法師

○百首歌

風になびくみむろの岸の柳陰したゆく水は色ぞのどけき　藻璧門院少將

○建暦内裏歌御會、水邊柳

立田川やまとにはあれど唐藍の色染めわたす春の青やぎ　從二位家隆卿

○久我内大臣家會、關路の柳・云ふ事を

あふ坂の關のいはもる水のあやにしづえ浪よる玉のを柳　如覺法師

○詠柳

萬十
霜がれの冬の柳はみな人のかづらにすべく萌えにけるかも　讀人しらず

○六帖題

新六ノ六　現存六
白なみの龍田のうへの河柳もゆといふ春はきのふけふかも　衣笠内大臣

現存六
きしかげの水のよどみの片淵につりをたれたる青柳のいと　正三位知家卿

春風の氷ふきとくかはぎしの冬木のやなぎ色づきにけり

○五社百首、柳

あさ緑さほの河べの玉やなぎつりをたれけむ絲かとぞみる　皇太后宮大夫俊成

たをやめのよとての姿ほの見えて眉よりあをき玉のを柳　同

露ぬける春の柳はさほひめの玉の姿をみするなりけり　同

○祇園社百首歌、柳

その匂ひその姿とはなけれども春の柳はなつかしきかな　同

やつはしに絲のいとをくりかけて蜘手にまがふ玉柳かな　同

○保元元年、禁庭柳垂

玉葉春
はるくれば玉のみぎりを拂ひけり柳の絲やとものみやつこ　同

○建保四年百首

あをによしならの都の玉やなぎ色にもしるく春はきにけり　前中納言定家卿

○内裏歌合水鳥柳

春の日にきしの青柳うちなびきながきよ契るたきの白絲　同

○文集百首、挿柳作高林

なほざりにさしし柳の一枝や日かげ木だかき夕ぐれのいろ　同

○黄楊新柳出城墻

風春上
この里のむかひの村のかきねより夕日をそむる玉のを柳　同

○寛喜元年女御入内屏風、江山人家垂柳

蘆のねも角ぐみぬらむ三島江のきしの青柳いろづきにけり　従二位家隆卿

○承久元年内裏御會、野外柳

惠みあれば野べの柳も打ちなびきたみの草葉に春風ぞ吹く　同

○建保三年名所百首
水無瀬川ありてゆく水青柳にうつろふかげは浪ぞかけそふ　同

みなせ川底の玉藻は青柳のなみにしたがふ下枝なりけり　正三位知家卿

○十禪寺社百首、湖邊柳
へだつべき宿にはあれど唐崎の春の柳は錦なりけり　同

○寶治二年百首、行路柳
みちのべに染めて亂るゝ青柳の神なび山をけふやこえなむ　後九條内大臣

あさみどり先づ染めてけり青柳のかげふむ路はいまだ冬の野　民部卿爲家

しるしらず暫しやすらふ旅人のゆききの岡になびく青柳　正三位經朝卿

青柳のかつらの里の深緑みちのたゞぢに春風ぞふく　信覺

○家集
いとかけしそばの片へのくち柳末ぞ緑になほむすびける　鴨長明

○建長四年毎日一首中
春雨のふる野の柳今朝みれば玉ぬくいとぞ青みどりなる　民部卿爲家

○春歌中
見わたせばくもの林の淺緑やなぎは花に劣らざりけり　大宮

○文永二年七月白河どの七百首
古河のよどのつぎ橋いとゞしく春風わたる柳陰かな　前大納言爲家卿

○百首
うちわたす水の入江の玉柳露ぬくえだに春風ぞふく　民部卿爲家

○結縁經百首
春雨にみつのうへのの玉柳ぬれて緑の色まさるなり　少將内侍

○寶治三年百首歌、行路柳
みちのべの鴨の河原の柳かげ春のゆききにたれならすらむ　從二位賴氏卿

○文應元年七社百首
今朝みれば鴨の河原の柳原かげふむばかりはやなりにけり　民部卿爲家

玉にぬく朝露かけし青柳のはるかに見ゆる春日野のはら

青柳の絲くりはへて住の江のよるさへ岸のなみやかくらむ

○住吉社御百首
拾玉三
住吉の春の柳のあをみどりまつなき庭のけしきなりけり　慈鎮和尚

○文久御百首、黄楊新柳出二城墻一
春の宿のつゞく垣ねを見渡せば梢にさらすあをやぎの絲　同

○賀茂社御百首
片岡のしだりの柳のうはがすみ綸にかく物はこれかあらぬか　同

○堀河院御時百首
春風にしだり柳のかたよりに君になびけば國ぞさかえむ　中納言國信卿

さほ山に柳のいとをよりかけて心のまゝに風ぞふくなる　修理大夫顯季卿

○家集春歌中
いつしかと春のあさけの空の色に見えこそ渡れしだり小柳　藤原為經

○建久元年六月百首歌
こきまずる錦おれとや青柳のはなだの絲をまづはそむらむ　前中納言定家卿

○千五百番歌合
かぜふかぬ君の御代とはしりながら心となびく青柳の絲　法橋顯昭

○家集
とびのゐる非くゐの柳なはへして惠みにけりな春を忘れず　源仲正

○建長八年百首歌合
春雨はいやふりにけり河べなるゐく非の柳なはへするまで　法印實伊

みたびこそおきもふしけれ玉柳ひまなく枝の何なびくらむ　右近中將具氏卿

青柳の絲にかゝれる白露の玉のをやまに春雨ぞふる　従二位行家卿

萬十四
つくばねの柳の絲の眉ごもりいぶせくもあるか春の霞に　後九條內大臣

○文久元年詩歌合、水江春望
かつらがは河ぞひ柳浪かけてうめづははやく春めきにけり　正三位季經卿

○光臺院入道二品親王家五十首、岸柳
もがみ河かげこそ同じいな舟ののぼれば下る岸の青柳　参議雅經卿

〇二百首御歌
萬六
松ならぬ柳の枝もたまつけてきなれの里に春雨ぞふる　中務卿鎌倉
ふる鄕のいけの堤の柳原さすがに春はわすれざりけり

〇四季百首、春池
小やま田の池の堤のふる柳たがさしそめし綠なるらむ　従二位家隆卿

〇題不知
萬十四
小山田の池の堤にさす柳なりもならずもなとふたりはも　讀人しらず

〇百首御歌
たかしまやあとかは柳風ふけば濡れぬしづえにかゝる白波　順德院御製
ひろ澤や岸の柳をもる月のひかりさびたる水の色かな

〇千首歌
風雅春中
ひろ澤や池のつゝみの柳陰みどりもふかく春雨ぞふる　民部卿爲家
ながめやる遠の末野の柳かげ梢あらはに春かぜぞ吹く
ゐる鷺のおのがみの毛も片よりに岸の柳に春風ぞふく

〇百首御歌
玉鉾の道のべの柳春くれば行きかふ人のかざしにぞをる　花山院内大臣

〇家集、門邊柳
小山田のきしの柳もうちはへて引くしめなはにかけぞ爭ふ　隆祐朝臣

〇御集、春雨
故鄕の柳の庭はさびしくて春雨つらきゆふぐれのそら　中務卿

〇百首歌
物よわき柳の枝のゆふなびき風もやはらぐけしきなるかな　前中納言爲家卿

〇嘉元四年十月當座百首、柳
下萌えのふる木の柳末みえてけぶりものうき春の色かな　爲實朝臣

〇百首歌、門前柳
さらでだにイ
さらでのみ人待つ宿の柴の戸をたれこめたるは靑柳のいと　寂蓮法師

〇寶治二年百首歌
かは柳もくづを枝にかけ留めて岸こす水のほどぞしらるゝ　民部卿爲家

○建長八年百首歌
青柳のいとばかりこそなびきけれ木毎に春の風はふけども　　信實朝臣
此の歌判者後九條内府云いかやうなる子細にや侍らむ當時の淺見には木ごとに風ふかばなど柳のいとばかりはなびくにか侍らむふしんなさんせんほど以レ右爲レ勝

○春歌中、柳
年へたる鶴のをかべの柳原青みにけりな春のしるしに　　平泰時朝臣

○大宰權帥忠卿、墻柳
あたらしきしづの柴垣かきつくる便りにたてる玉のを柳　　源仲正

○墻柳枝莊山家百首
ほりて植ゑし籬のそひの丸柳しだりにけりな枝もたわゝに　　同

○建長七年家千首歌、原柳
いくしほか緑はそむるうみべなるなびく柳の浮島がはら　　前大納言顯朝卿

○河柳
せをはやみ水かさまされば玉川の河ぞひ柳えだぞながるゝ　　光俊朝臣

○水郷柳
里ちかきよどの河べの植ゑ柳ほづゑよぢおりかづらせよ子等　　源仲正

○貞應三年百首、渡邊柳
かち人の舟まつ淀の河やなぎいく度かぜの吹き渡るらむ　　民部卿爲家

○爲家卿家百首歌
あさあけの山さくら戸の玉柳たれまつ花の友とみるらむ　　從二位家隆卿

○光臺院入道二品親王家、岸柳
はつせ川なびく玉藻はみがくれて岸の柳にはる風ぞふく　　同

○元久元年詩歌合、水郷春望
いそのかみふる川のべの柳かげ惠みもあらぬ春のいろかな　　具親朝臣

○文應元年七社百首
いつしかと春くる風になびくなり古川のべの青柳のいと　　民部卿爲家

そのかみやあはれ昔を忍ぶかな古川のべにくつるやなぎも

題不レ知
あさみどり野べの青柳をりて見む絲を吹きくる風はありやと　人丸

萬十
百敷の大宮人のかつらなるしだり柳はみれどあかぬかも

○寛治二年百首
青柳の花のかつらの永き日にうちはえゆくとみちぞ遥けき　正三位知家卿

○中務親王家歌合
はしひめの春のかつらは知らねども八十氏河に靡く青柳　光俊朝臣

○光台院入道二品親王家五十首、岸柳
よしの河きしの青柳うちなびき波にこぼるゝつゆの白玉　経乗法師

○弘安元年百首
風春中
よしの河岩浪はらふふし柳はやくぞ春の色は見えける　法印定円

○家集
かは柳さしもおぼえぬ姿かなそばはさみつゝ月にたてれば　俊頼朝臣

此の歌はたなかみに侍りけるに柳にそばむきといふものをかけたりけるを月よにみてよめる云々

○賀茂社百首歌
とのづくりせく遣水の岩かげにしろきいろこきには柳かな　慈鎮和尚

○家隆、庭柳の花をみて
には柳をりたがへるは長月の菊の花ともみゆるなりけり　和泉式部

いけみづの汀にさはるいは柳浪に心をよせてけるかな　選子内親王家三河

早蕨

○だいしらず
萬八　新古今春上
岩そゝぐたるみの上の早蕨のもえ出づる春になりにけるかも　志貴皇子

同
みよし野の山の霞を今朝みればわらびのもゆる煙なりけり　読人しらず

○禖子内親王歌合
さわらびのもえ出づる春の夕暮は霞の上にけぶり立ちけり　小式部

さわらびも萌えやしぬらむ山人の野やく煙はたなびきにけり　小辨

○春歌中に
萬六
さわらびやもえ出でぬらむ春日野に燒原あさる人しげくみゆ　相模

○堀河院御時百首
續後拾春上
春日野の草葉はやくとみえなくに下萌え渡る春のさわらび　權大納言公實卿

春の野を事あり顔にかへせども持てる蕨はたゞばねだになし　中納言國信卿

紫のちりうち拂ひ春の野にあさるわらびは物うかりけり　修理大納言顯季卿

むさし野はまだ燒かなくに春くれば急ぎ萌えいづる下蕨かな　大納言師賴卿

○家集中
むさし野にとらば（ことイ）生ひよな（ろイ）紫の蕨は（もイ）草のゆかりなりけり（ならねとイ）　前齋宮河内

むさし野の末黑が中の下わらびまだうら若し紫のちり　權中納言長方卿

○六帖題、わらび
うちかへす片山畑のさわらびの下にもゆるも現はれにけり　衣笠内大臣

○文治二年百首
岩そゝぐ清水も春の聲たてゝうちや出でつる谷のさわびら　前中納言定家卿

○百首御歌中
出でてみよ野邊の早蕨萌えぬべし雪の消え間に雉子音なふ　喜多院入道二品親王

○百首中
冬枯の裾野の原を燒きしよりさわらびあさり雉子鳴くなり　皇太后宮大夫俊成卿

○述懷百首、早蕨
なげかめやおどろの道の下蕨跡を尋ぬる折にしありせば　同

○祇園社百首、早蕨
岩そゝぐたるひの上に生ふるより折も春なりさわらびの比　同

○文治六年五社百首
たがために忍びの岡のしたわらび煙はたてず萌え渡るらむ　同

賴みこししめぢが原の下わらび下にもえても年へにしかな　同

炭竈の煙になるゝ小野山は春のわらびもまづやをるらむ　同

つらゝゐるしたるひ（みイ）の杜の早蕨の折りにだにやは人のこざらむ　同

いにしへを思ひこそやれ山深み二人をりける春の早わらび　同

○六帖題

新六ノ六 今ぞしる山にいる人春さればかしこからぬも蕨折りけり　光俊朝臣

○堀河院御時百首

飛火野に今ぞ萌え出づる早蕨のいづをる計りならむとすらむ　權僧正永緣

○文應元年七社百首

雪きえて下萌え急ぐ飛火野のをりにあひぬと見ゆるさわらび　民部卿爲家

山陰の茅生にまじるしたはらに生ふる蕨もをりにこそくれ

たづねてやわらび折るらむ住吉の遠里小野の春の里人

よそにきく東の小野の下蕨いかなる時（かイ）もをりにあふべき

○正治二年百首

春は狩あさはの野べのいつのまに雪もきえやらず萌ゆる早蕨　民部卿範光

富士の山裾野にもゆる早わらびや峯には春の煙なるらむ

○家集、さわらび

早蕨の下もえ出づるつらゝせし八重の草葉も緩びたるかな　小辨

○家集

春のくるけしきの杜の下わらびをり知れるとや萌え渡るらむ

○百首歌、同詠早蕨

しめおきしわが片岡の早蕨と先づふみをるは野べの春駒　源仲正

○家集、早蕨

鍬たてゝ掘りもとめせしたち蕨春はおほ野にもえ出でにけり　同

○久安百首
山伏のいしより出でぬ早蕨もうてばぞ萌ゆる程はしらるゝ　花園左大臣家小大進

○百首御歌
野べに出でて誰家づとに折りつらむ春のわらびに交る虎杖(いたどり)　土御門院御製

○家集、春歌中
芳野山ちりしく花の下わらび櫻にかへて折るものうし　從二位家隆卿

○永久二年四季百首歌、春山家
風雅上
霞たつ嶺のさわらびこればかり折知り顔の宿もはかなし　前中納言定家

○文治三年百首
山里の籬の春のほどなきにわらび計りやをりはしるらむ　同

○樹陰わらびを
紫の塵もやまじる青柳のかげふむ山の春のさわらび　後九條内大臣

○弘安元年百首
をる人のそでふる山は雪きえてわらびに注ぐ春の水ぐき　同

○六十五組字歌、紅櫻高挿夕陽邊
山人の行くての蕨手にためて暫しぞやすむ岩のほとりに　前中納言定家卿

○千首歌
山人のつま木に春はつけてけり往來の谷の路のさわらび　民部卿

○建長七年顯朝卿千首
いはばしる神なび山の下蕨たるひをしみ(みイ)ゝいかゞ折るらむ　信實朝臣

○家集
續後拾
昨日まで冬籠れりしかまふのに蕨のとくも萌えにけるかな　よしたゞ

○三百六十首中
家集　萬代春上
蕨生ふるやたの廣野に打ちむれてをりくらしつゝ歸る里人　同

春雨

○家集、春歌中
あづさ弓春雨ごとに萌ゆる木のめも珍らしく鶯ぞなく　たゞみね

○題不レ知
萬十
春雨の心は君もしりぬらむ七日しふらばなゝよこじとや　讀人しらず

○雨
つれ〴〵と袖のみひぢて春の日のながめは戀のつまにざりける

同
ふるとしもみえず（て六）降りくる春雨は花のしべゆふ絲にぞ有りける

同　躬恒集
春雨に君をやりては逢坂の關のこなたにこひや渡らむ

○應和二年三月賢子內親王家歌合
さほ姫のかひなかりけり春雨は（のイ）としのは每に色はそめけり
同

○だいしらず
春雨のたなびく宿の青柳にかけて亂るゝ露の白玉
同

○建長八年百首歌合
春雨のたなびく今日の夕暮は月も霞におとらざりけり
從一位良教卿

新續古今春上
花とみてけふやぬれなむ春雨に人かげもなき峯の白雲
土御門院入道二品のみこ

分けきつる道はこのめも春雨の古里ふかきあとの白雲
從三位保季卿

○文永二年毎日一首中
雨ふれば比良のたかねの雪げにも浪こえまさる眞野の古道
民部卿爲家

○寛元二年結緣經百首
ふる河の岸の眞砂路雨そめてむら〳〵みゆる春の若くさ
同

○家集、古郷春雨
うづらさへ住みあらしてし宿なれば春雨のみぞ今はもりける
大納言經信卿

○南北百番歌合
やきすさぶ朝の原は草たちて春雨はれぬ岡の里人
慈鎮和尚

○六帖題
新六ノ二
下もえのすぐろをあらふ春雨に燒野の薄くさだちにけり
信實朝臣

○はるたを
思ひありといぶきの山の春雨にさせもが原も下萠えにけり
後一條入道關白

○建長八年百首歌合
いとまある宿の詠めも靜かにてくるればつらき春の雨かな
後九條內大臣

○文治三年百番歌合
風春
春雨よ木の葉亂れしむら時雨それもまぎるゝ方はありけり
前中納言定家卿

○千五百番歌合
詠めわびぬ誰かはとはむ山里の花まつころの春さめのそら　皇太后宮大夫俊成卿

○文永二年毎日一首中
徒らにたゞ春雨のながめして過ぐれば老の袖ぬらしつゝ　民部卿爲家

○弘安[illegible]百首
かきくらし浮雲まがふ春雨に身はふりはてて袖はかわかず　安嘉門院四條

○老若五十首歌合
浅茅はら春雨すぐる若葉より緣をうつす玉ぞこぼるゝ　前大納言具都卿

春雨のふるとは空にみえねどもさすがに聞けば軒の玉水　後鳥羽院宮内卿

○久安百首
唐衣かづく袂ぞそぼちぬる見れどもみえぬ春のこま雨　前大納言隆房卿

○光俊朝臣入道三品親王家五十首、旅春雨
旅衣ぬれてぞ袖にしられける霞にわかぬ春雨のそら　正三位知家卿

○若宮社歌合、春暮日成興
ふりすさび春雨かすむ夕暮のあを葉のどかにわたる山風　前民部卿範重

○柿本影供百首
吹く風も昤かならず峯からでかすみくらせる春雨のそら　從二位行家卿

さほ姫の袖のけしきはしらねども霞にあまる夕暮のあめ　後九條内大臣

○六帖題和歌、春雨
曇るとは見えぬものから夕暮の霞よりふる春雨のそら　中務のみこ

○貞應三年百首、春雨
あめかさは霞にくるゝ山陰にしめりておつる柴のした露　民部卿爲家

霞かとこゝよりをちに見えつるや東風ふく風の誘ふ春雨　同

雲かゝる朝日のかげは晴れやらで猶まどくらき春雨のころ　同

○建長三年毎日一首中
春雨を花もさこそは賴むらめはぐゝみたつるかぞいろはとて　同

○正嘉二年毎日一首中
さかゆべき河竹のよ[illegible]のかぞいろはこの春雨やよに掩ふらむ　同

○文安百首　ほそくふる三[illegible]いとならむ水に綾おる廣澤の池　花園左大臣家小大進

○建保四年百首　鶯のぬふてふ笠の梅がえにいとよりかくる春雨ぞふる　光明峯寺入道攝政

○文治六年五社百首　春雨は綠の空をうつしもて野べの色をもそむるなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○四季百首御歌　青柳の絲に玉ぬく春雨のくもになりゆく夕がすみかな　慈鎭和尚

○六帖題　新六　わぎも子が衣いづくに春の空くもりふたがる雨そゝぎかな　信實朝臣

○弘長元年百首、春雨　さゝがにのすがく草ばにさほ姫の手引の原の雨ぞかゝれる　後九條内大臣

○建長八年百首歌合　みかさとる大宮人もゆきかへりいく日になりぬ春雨のそら　右近中將信家卿

春雨は霜の仇とぞなりにけるおきからす草のもえしいづれば　信實朝臣

○建保三年名所百首　新拾春上　なにはめのすくも燒く火の打ち濕り蘆屋の里に春雨ぞふる　正三位知家卿

稲荷詣

○永久四年百首、稲荷詣　堀後　いなり山しるしの杉をたづねきて普く人の今日かざすかな　神祇伯顯仲卿

稲荷山しるしの杉を春霞たなびきつるゝ今日にも有るかな

いなり坂さかしくとまる心かなみな杉のはをふける庵に　藤原忠房

おそく疾く宿を出でつゝ稲荷坂のぼれば下る都人かな　源兼昌

○六帖題新六、いなりの春　新六一　いなり山杉の青葉をかざしつゝ歸るはしるき今日の諸人　正三位知家卿

きさらぎやけふ初午のしるしとて稲荷の杉は本つ葉もなく　光俊朝臣

春日祭

○永久四年百首、春日祭

堀後　散木　萬代

二月のはつさかなれや春日山峯とよむまでいたゞきまつる　俊頼朝臣

春毎にけふいのられて春日山松のさかえも色まさりけり　神祇伯顯仲卿

あめの下たえずぞ君は榮ゆべき三笠の山の神をまつれば　仲實朝臣

駒なべて三笠の山邊ゆく人はあめのしたいのる使なりけり　源兼昌

けふ祭るしるしにとてやそのかみは三笠と共に天降りけむ　二條太皇太后宮肥後

○洞院攝政家百首、祝

春日山霞たなびくしめの内に春の使もけふぞ立つらむ　家長朝臣

○文治二年女御入内御屏風、三月春日祭

みかさ山さしける使けふくれば杉間にみゆるそでの色々　前中納言定家卿

けふまつる三笠の山の名におへる大宮人もさしてきにけり　隆信朝臣

○同春日社にて

春の日も光ことにや照らすらむ玉ぐしのはにかくる白木綿　皇太后宮大夫俊成卿

遊絲

○六百番歌合、遊絲

面かげに千里をかけてみするかな春の光に遊ぶいとゆふ　後京極攝政

○同

おぼつかななにばかりなる絲遊の軒ばに人の詠めわくらむ　前大納言兼家卿

此の歌判云なにばかりなるいとゆふ故なきにあらざるべしと云々

○同
空にしれ春の軒端に遊ぶいとの思ふすぢなき身の向後かな　慈鎮和尚

くりかへし春のいとゆふいくよへて同じ緑の空にみゆらむ　前中納言定家卿

のどかなる夕日の空をながむれば薄紅に染むるいとゆふ　従二位家隆卿

さほ姫やかすみの衣おりつらむ春のみ空に遊ぶいとゆふ　正三位経家卿

津の國のこやのわたりの詠めには遊ぶ絲さへひまなかりけり　正三位季経卿

春風ののどかに吹けば青柳の枝もひとつにあそぶいとゆふ　寂蓮法師

○正治二年百首
くもりなき池にうつれる青柳や緑の空にあそぶいとゆふ　二條院さぬき

○嘉元元年式部卿親王家千首、遊絲
雲おほふ雨の空には見えざりきはるゝ日まちて遊ぶ絲遊　参議為家卿

○建保三年名所百首
青柳のかづらき山のながき日は空も緑にあそぶいとゆふ　前中納言定家卿

○永久四年百首、遊絲
うち亂れかすめる空にあそぶ絲に天の河瀬の水をひかばや　神祇伯顕仲卿

笹蟹の雲らぬ空の絲なれば遊ぶけしきの絶えずも有るかな　俊頼朝臣

春駒

○堀河院御時百首
我が物としめ野にかひし春駒の手にもかゝらず荒れまさるかな　中納言國信卿

取りつなげ玉田横野の放れ駒つゝじのしたにあせみ花さく（咲けりイ）　俊頼朝臣

○家集
○だいしらず
○述懷百首、春駒
○建長七年顯朝卿（卿イ）家千首、野春駒
○千首歌
○弘安元年[illegible]根宮百首
○弘安五年歌合、江辺春駒、判儀成卿
○正治二年百首
○賀茂のやしろ百首
○三百六十首中
○大嘗會悠紀方御屏風

春駒のいばゆる音ぞ聞ゆなるみつ野のまこも角ぐみぬらむ　權僧正永勝（緣イ）
みづの江の眞菰も今はおひぬれば手馴れの駒を放ちてぞみる　祐子内親王家紀伊
眞菰かる濱野にあるゝ春駒はなづくる事をけふや知るらむ　皇后宮肥後
（六帖）春の野に留めもあへぬ駒なればわれと伏見の里や荒れぬる　讀人しらず
かばかりと今はわがみを水の江に何とて駒のたち廻るらむ　皇太后宮大夫俊成卿
もゝざゝの美豆野をみれば衣手を（萬の）蘆毛の駒ぞ草つきにける　光俊朝臣
はるくれば美豆の御牧の若草におれゆく駒の聲ぞはなれぬ　民部卿爲家
おく露はつめだにひぢぬ若草のつまや爭ふ澤の春駒
春駒の水と草とを思ふこそまだのりしらぬ人にかはらね　安嘉門院四條
三島江にますけの苗やもえぬらし友よぶ駒のけしきしるしも　讀人しらず
見渡せばまだ草たたぬ春の野に思ひあがるや雲雀毛のこま　小侍從
信濃ぢやすがの荒野にはむ駒はいばえぞまさるてかふ人なみ　源師光
春駒のつきげのをかみ白妙に花ちる野べは櫻狩せむ　慈鎭和尚
（家集）冬かひのてなれの駒も放ちてむ岡べの小笹はえぬとならば　よしたゞ
春ふかみ玉野の原の放れ駒やよひの草にまかせてぞみる　前中納言匡房卿
（萬十一）妹がかみあげさゝは野の放れ駒あれゆきけらしあはぬ思へば　讀人しらず

○久安百首
○永承五年十一月俊綱朝臣家歌合放馬
○攝政家十首御會、春駒を
○嘉保二年三月御宴歌合
○俊頼朝臣家、春駒
○春駒過[illegible]
○常磐會、雨中春駒
○爲家卿家百首
○文治六年女御入内御屏風、池邊春駒
○貞應三年百首、里春駒
○百首御歌
○建長七年顯朝卿家千首歌、題春駒
○文治二年五社百首
○家集

春ふかみゆるぎの杜の下草のしげみにはむやあをさぎの駒　花園左大臣小大進
いかにせむなづけやせまし眞菰草もえ出でぬさきの放れ駒かな　能因法師
春の野に尾花あし毛のみえつるは引き違へたる心ちこそすれ　俊頼朝臣
うちなびく尾花あし毛の春駒のたち渡りたるきり原の人　中納言國信卿
よそめにもむらとも駒の氣色にて春野の草の程をしるかな　顯仲朝臣
はみやよき澤のぬなはに繋がれて汀はなれぬつるぶちの駒　源仲正
春雨にぬれてすげなるうひ駒は垣根の草をこふるなりけり　同
野べみればまだ名に負はぬ櫻麻のをぶちの駒の雪の村消え　從二位家隆卿
花の山駒さへはなつ御代なれば我しも春にあふとしらずや　後法性寺入道關白
春くれば駒のけしきものとあれて角ぐみやらぬ深草の里　民部卿爲家
いとゆふも同じなのみやまがふらむ霞のうちの野邊の春駒　土御門院御製
紫の根はふよこ野の春駒は草のゆかりになづくなりけり　從二位家隆卿
萌え渡るこやの蘆邊にあさりてやつの國かいの駒いばゆらむ　從二位行家卿
をがさ原燒野の薄角ぐめばすぐろにまがふ甲斐のくろ駒　皇太后宮大夫俊成卿
ふる鄕のみかきが原の放れ駒さこそのがはめあれて見ゆらむ
とりつなげ御垣が原の放れ駒うき世にあれて跡もさだめず　俊頼朝臣

○御集中、春駒

春駒は淺香の沼にあさりしてかつみのうち(うらイ)は踏みしだくなり　法性寺入道關白

○文治二年百首

狄のはの角ぐむ野べは久方の月毛の駒のすみかなるらむ　前中納言定家

○同五年百首

遠方や花にいばえて行く駒の聲も春なる永き日くらし

○文治六年五社百首

引きかへつ蘆の葉めぐむなには潟うらわの空も駒のけしきも

はむ駒のあし毛にのみもみゆるかな難波の春や深くなるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○百首歌、[illegible]見春駒

なには潟蘆の若葉のほに出でて招くとみゆる駒のふりがみ　寂蓮法師

○家集、久我内大臣家、春駒

なにはの江の汀にあるゝ春駒はかげもあし毛にみゆるなりけり　如覺法師

○最勝四天王院名所障子

かすみゆく難波の蘆のうらわかみ汀の駒も春をしるらし　大藏卿有家

○貞應二年信實百首、關路春駒

逢坂の山井の氷とけぬらし影さへみゆる關の春駒　民部卿爲家

○文應元年七社百首

春はまたしがの濱田の放れ駒霞ばかりぞたなびきにける　同

ふくかたや北野の野べの草わかみ風にいばゆる春駒のこゑ

燕

○歸雁を

萬十九
燕くる時になりぬと鴈がねは古里思ひつゝ雲がくれなく　中納言家持卿

○千五百番歌合

珍らしく燕軒ばにきなるれば霞がくれに鴈かへるなり　野宮左大臣

○題不知、歌林良材

かぞいろは哀れとみらむつばめだに二人は人に契らぬものを　讀人しらず

○十題百首御歌

春をこふる心にいかゞつばくらめ歸る野なかの秋の夕暮　後京極攝政

荒れはてて春の色なき古里にうらやむ鳥ぞつばさならぶる　前中納言定家卿

○建久七年百二十八首

つばくらめ哀れに見けるためしかな變る契りは習ひなる世に　同

○同元年百首

年をへてなれけむ宮の燕うらやみたえてのちもいく春　同

○文永九年毎日一首中、燕をイ

二月のなかばになるとしり顔に早くもきけるつばくらめかな　民部卿爲家

○鳥百首中、燕

あはれ身の後の春まで殘りけりつばめの脚につけし絲すぢ　參議爲相卿

夫木和歌抄卷第三 終

夫木和歌抄　巻第四

春部四

題　花　遲日　春月

花

○建仁二年五十首御歌、初春待花
（百首春）春きてもつれなき花の冬籠りまだしと思へばみねの白雲　後京極攝政

○家集、花歌中
鶯の鳴く音に春をつげられて櫻か枝や春めきぬらむ　西行上人

○同イ
とき花や人より先に尋ぬると吉野にゆきてやままつりせむ　同

○春の月あかかりける夜まだしき櫻を風のゆるがしけるをみて
月みれば風に櫻の枝たれて花よとつぐる心ちこそすれ　同

○建保四年百首
この程はおくれぬ雲ぞかゝるらむ尋ねもゆかじ山の櫻木　從二位家隆卿

○百首歌
櫻木のはもりの神はしらねども春のかけたる花のしらゆふ　隆祐朝臣

○歌集
山櫻きほひ尋ぬる人數に身をうさきまのうながしぞゆく　源仲正

○法輪百首、寄レ櫻述懷
いかでわれ書める花に身をなして心もとなく人にまたれむ　同

○南北百首歌合
花はまだし心は空に淺みどり春めくころのしら川の里　慈鎮和尚

○三百六十首中
二葉よりみつゝなれにし花櫻なになうしとてかくす霞ぞ　よしただ

曾丹集
我が宿のもとあらの櫻さかねども心をかけてみれば賴もし

○十首歌合に山花を
萬代
尋ねきて今ぞしめゆふ玉襷くもゐる山のはつ櫻花　正三位知家卿

○六帖題、初花
新六
ちりちらず木莣の櫻庭もせにかつ〳〵色の移ろふやみ見む　信實朝臣

○百首歌、初花
天の川おいぬもの散さくら花けふは七日のはじめにぞあふ　從二位家隆卿

○建仁二年五十首歌、山花未遍
おしなべて風こそかをれ春の山咲く櫻あればさかぬ梢も　俊成卿女

○嘉元元年百首、花
はなは猶枝にこもりて山櫻またぬ若葉のいろぞさきだつ　前參議爲相卿

○家集
けふあすの花なき枝に吹き出でて咲きなばよわれ二月の風

○千五百番歌合
二月や雪けの風に枝さえて咲きいづる花やたちどまるらむ　後鳥羽院宮內卿

○家歌合、山寒花遲
さえわたる雪ふるとしの心ちしてまだうちとけぬ山櫻かな　前中納言家成卿

○同
春ながら猶おき霜にむすばれて綻びやらぬ山櫻かな　從三位頼政

此の歌判者基俊云詩にも歌にも春霜むすぶといふ事侍るやと云々

○建長八年百首歌合
ことしさく若木の櫻春くればたま〳〵見ゆる色もめづらし　從二位行家卿

○家集、山寒花遲
春も淺みとけぬ氷にことよせてまたひもさせる山櫻かな　源仲正

○永久四年百首、未レ遍レ花
はるくれど野べの霞につゝまれて花のゑまひの緖もみず（かなイ）　仲實朝臣

○家集、花十首中
いまは早や咲き匂ふらむ櫻花もずの草ぐきかくろへにけり　修理大夫顯季卿

○家集、老見花と云ふ事を

山家上はイ

老苔に何をかざせましこの春の花まちつけぬ我が身なりせば　西行上人

○家集

なべてならぬ四方の山邊の花は皆吉野よりこそ種は散りけめ

○家集、春歌中

春雨の程ふることも時にあへばひもとく花の妻となりけり　たゞみね

○花をみて

萬代

めづらしき物かはあやな山櫻心の花にあるもあるかな　山田法師

○中務卿親王家五十首歌合

續千雜一

夜の間にも奈良山櫻さきにけり今朝白妙に霞みわたれる　權僧正公朝

○百首歌に花

青によし奈良の飛鳥のたをや女がかざしにをりし八重櫻かな　同

○春歌中

現存六

あをによし奈良のあすかは徒らに猶八重櫻今もさかなむ（やさくらむイ）　讀人しらず

○永萬二年重家卿歌合

白雲の八重かさなりて見えつるは奈良の都の櫻なりけり　藤原資隆卿（朝臣イ）

○三十六人歌合

春深くなり行くまゝにこま山にたちのみ渡る花の白雲　平經正朝臣

○だいしらず

萬八

春雨のしく〳〵ふるに高圓の山の櫻はいかゞあるらむ　河邊東人

○詠花

萬十

見わたせば春日の野べに霞立ち咲き匂へるは櫻花かも　人丸

○長歌

萬六

春日山　三笠の野べに　櫻花　このくれ隱れ　かほ鳥は　讀人しらず

同

三室つき　かせ山際に　咲く花の　色珍らしき　百鳥の　聲懷しく　同

萬十七

泉川　いゆき廻れる　玉くしげ　二上山は　春花の　さける盛りに　同

萬三

み心を　みせ明らめし　活路山　木立のしゝに　咲く花も　移ろひにけり

同

○寛平御時后宮歌合

○家集、泊舟尋レ花

○名所歌中

○建長八年百首歌合
文イ

○久永二年毎日一首中

○建長五年毎日一首中

○文應元年七社百首

○永仁二年春藤原長清家にて名所花を

○花の御歌の中に

○北野社詩歌、春山成レ興

○花月百首御歌

まきもくの檜原の山に立ち返り見れども花に驚かれつゝ　同

六帖
こきいでて高師のおきに見渡せばまだ一むらもさかぬ白雲（山をイ）　西行上人

たかし山花だに宿を惜しまずばたゞこえのこせけふの行末（てイ）　参議爲相卿

うつりゆく櫻に空はあひそめて花もたかしの嶺の白雲　藤原爲實朝臣

若づたふ花のあだ波いくかへり越えてたかしの春の山風　後九條内大臣

ふりつゞく雨のたえ間は霜さえて花のためうき春の空かな　民部卿爲家

咲く花のかぞいろはとてふる雨のはぐゝみたつるうるひをぞみる　同

うつし植うる神の三室の八重櫻春の日よしのほかに散らすな　同

玉雜一
花盛りちりにはすなる小車のわが身一つぞやる方もなき　同

此歌のは老ののち病にしづみ侍りけるころ花の盛りに住み侍りける家の前な車のあまた過ぎけるな聞きてと云々

尋ねきて且みるからにかつまたの花の陰こそ立ちうかりけれ　前參議爲相卿

玉春下
見渡せばしらゆふかけて咲きにけりかみをか山の初櫻花　中務卿親王

春はたゞ花見がてらに手向する北野のみ山道もさりあへず　前民部卿雅有

立ちよればみ階の櫻盛りなりいくよの春の行幸なるらむ　後京極攝政

同拾玉三
ほかばおはす宿の物とは九重のみはしの花の盛りのみこそ　慈鎭和尚

○家集、或所の御屏風みかきのはらに櫻花あり
○御集、花契多春
○家集、花契多春
○ふしみにて、山花未レ落
○久安五年七月山路歌合、花
○承安元年八月会、某法師房歌合、花
○洞院攝政家百首、花
○同
○家集、花歌中に

思ふ人こませまほしきところかな御垣の原の花のさかりは　　恵慶法師
ちよまでと咲きぞはじむる櫻花御垣の原にほりうゑしより　　京極關白
百敷のみかきの原の櫻花はるしたえずば匂はざらめや　　大納言經信卿
うらみじな山のはかげの櫻花おそくし咲けば遅くちりけり
いづる日も梢は玉と磨かれて空も輝く花櫻かな　　源親房
立田姫花の白木綿とりしでて今日や三室にかざまつりする　　法橋顕昭

此の歌判者清輔朝臣云右歌やう／＼しくはよめどさせる詮なくや又春の色をそむる神をば佐保姫といひ秋をそむる神をば立田ひめといふはもろこしよりおこりたる事なり春の立田ひめはいとめづらしく但萬葉集に春歌に立田姫とよめる事侍るやうにほのかにおぼえ侍れば僻事にはあらねど猶歌合などにかやうの異事はよむまじき事とこそ聞き置きて侍れと云々

小初瀬の山は櫻に成りにけりまばらに見ゆる峯のときは木　　從三位範宗卿
しなのおや風のはふりこ心せよしらゆふ花の匂ふかみがき　　家長朝臣
散木春 今朝みれば 信濃 木曽路の櫻咲きにけり風のはふりこ隙間あらすな　　俊頼朝臣
同 たれか又あかず見るらむ佐保山の霞にもれてにほふ櫻を　　同

同　さほ山に花咲きぬれば白妙のあまの羽衣ぬぎかへてみゆ　同

○家集、文永元年春歌中

さほ山の柞まじりの櫻花かすめる月によるさへぞみる　權僧正公朝

○六帖題、山ざくら

あさ妻の片山櫻咲きにけりあすは來むといふ人に見せばや　同

○家集、「山中見遠花」

はりまぢやこぎ出でてみれば雲かゝるむこ山櫻今盛りなり　同

○建長二年百首歌に

和泉なるあら山櫻咲きぬらしまきのはしのきかゝる白雲　同

○柳櫻交枝

あすも來むしだり櫻の枝ほそみ柳のいとにむすぼほれけり　俊頼朝臣

○遠山花

神山にまゆふの幣を引きかけて晒すや花の盛りなるらむ　同

○暮山花といふ事を

昨日までみどりに見えしさほ山の春のかひには花ぞさきける　六條右大臣

今年より千年の春を頼むかな花のゆかりにとはると思へば　修理大夫顯季卿

此の歌は俊頼朝臣かつらの山里にきたりけるに庭の花咲きにたる下に人々あまたゐなみて遊びけるにあるじにてかはらけ取りてよめると云々

家集　立ちよらむ雲やはかたき春霞ならしの岡の花ならずとも　藤原實方朝臣

此の歌は一品宮のだいばん所のまへに櫻のおもしろきをある女房によそへて歌をむすびつけて侍りければ「かけてだに立ちよりがたき花のえをならし顏にもくらべけるかな」とよみたりけるかへしと云々

○文永三年毎日一首中

白雲のならびの岡の宿こそあれ花の主の春はかはらず　民部卿爲家

○同二年白河殿七百首、岡花
風春中 旅人の往來の岡は名のみして花にとゞまる春の木のもと

○建仁三年三體和歌
花盛り霞の衣綻びて峯白妙のあまのかく山　前中納言定家卿

○柿本影供百首
またよひにいはとの櫻咲きにけり雲のいつこぞ天のかく山　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
あまくだる雪かと春はみゆるまで神のかこ山櫻ちるなり　前大納言顯朝卿

○家集
さほひめのほすや衣の白妙に花さき匂ふあまのかく山　正三位知家卿

○百首御歌
萬代 あづさ弓春の心にいるものは高まと山の櫻なりけり　大炊御門右大臣

○家集
新千春下 神ぢ山みしめにこもる花盛りこらいかばかり嬉しかるらむ　西行上人

○布引百首御歌
布引の瀧見にこすは遲櫻人にしられてちりやしなまし　法親王澄覺

○建保三年名所百首
三輪山の檜原にきくは昔にて春はさくらぞかざしなりける　従三位範宗卿

○家集
ふく風の下草そむる花の色や春のかたみの衣手のもり　正三位知家卿

花の香にそでを露けみ小野山の山の上こそ思ひやらるれ　實方朝臣

櫻ゆゑ片岡山にふせる身もおもひとけねば哀れおやなし　鴨長明

○中春歌
歌林 はるくれば細谷河にちりつもる花もてゆへるきびの中山　藤原伊綱

○家集
玉 春雨はふりにけらしなはつせ女のゆふ花かづら玉にぬくまで　衣笠内大臣

○秀能すすめ侍りける五百首歌
大方のまがはぬ雲もかをるらむ櫻の山の春のあけぼの　前中納言定家卿

○大嘗會悠記方百首御屛風、櫻山
松樹交レ枝
松が枝に枝さしかはす櫻山はるもちとせの春やにほはむ　皇太后宮大夫俊成卿

〇文治六年五社百首
わすれずよそのかみ山の花盛りよもすがら見し春のよの月
同

〇水邊落花
櫻花ちりかひかすむ春の夜のおぼろ月夜のかもの河風
鎌倉右大臣

〇寶治二年百首、落花
風ふけば浪もいくへのさくら川なに流れたるみつの春かな
後九條内大臣

〇河
春六 玉河やいはもとざくら朝な〳〵おちても花や泡とうきなむ

〇家集
ますかゞみ清瀧川の底すみて散らでも花のかげぞうつろふ
正三位知家卿

〇治承二年右大臣家百首
吉野河（山イ）花やちるらむ天の川くものつゝみをくづす白浪
皇太后宮大夫俊成卿

〇正治二年百首
長秋下 花の色を一つにこめて天の川雲のみなとやみよし野の山
源師光

〇家集、花歌中
吉野山くもゐに花のちる比はあまの河浪かけぬ日ぞなき
前中納言匡房卿

〇家集に落花を
木のもとに旅ねをすれば吉野山花のふすまをきする春風
西行上人

〇花歌中に
ときはなる花もやあると吉野山おくなく入りて猶尋ねみむ
同

〇日吉社百首御歌
よしの山雲の岩ねにちる花は風よりおつる瀧のしらいと
慈鎭和尚

〇百首御歌
みよし野の山に櫻の花盛り求めてなきはたぐひなりけり
同

〇御集、春歌中
よしの山月は朧の有明にくもよりしらむ峯の花ぞの
同

〇正治二年家百首歌
さきまじる花の光もみよし野の玉松がえの春のひとしほ
前參議爲相卿

〇藤原長清すすめける百首歌
玉葉春上 くもまがふ吉野を花のたねとして四方にさきちる山櫻かな
法眼慶融

〇春月を
同 みよし野の峯の花ぞの風吹けばふもとにくもる春の夜の月
常磐井入道太政大臣

○百首御歌、遥花
夢にだにまだみぬものを唐土の吉野のさくらいかゞ咲くらむ　後嵯峨院御製

○花月百首御歌
新後撰釋敎
よしの山御法のにはにちる花をよし野の峯の嵐にぞみる　後京極攝政

○百首御歌
吉野がは岩本櫻め（のイ）もはるの波にたちそふ花のおもかげ　光明峯寺入道攝政

○百首御歌、見花
よしの川大宮人や朝夕にみふね竝べて花をみるらむ　後九條内大臣

○花の歌とてよみけるに
山櫻よし野まうでのはなしねを（にイ）尋ねむ人の袖につゝまむ　西行上人

○花歌中に
今もなし昔もきかず敷島のよし野の花を雪のうづめる

○光臺院入道二品親王家五十首、山花
みよしのの遠山櫻春毎に心も空にかゝるしらくも　如願法師

○家集、宮中花古來歌合
風雅春中
ゆくすゑの花かかれとてよしの山たれ白雲の種をまきけむ　從二位家隆卿

○河落花
玉
春たけてきのかは白くなりぬめり吉野の奥に花や散るらむ　平泰時朝臣

○家集
水上に花のゆふたちしきるらし吉野の川のなみのまされる　西行上人

○建保三年内裏御詩歌合
よしの河さくら吹きまく山風に雪げのみちぞ色にいでゆく　從二位家隆卿

御芳野は春のふゞきに雲きえて雪になりゆくせゞの埋れ木　大納言經通卿

○七百首
みよし野の春のしげのの櫻狩花やとだちのしるべなるらむ　權僧正公朝

○花月百首
花の後八重たつ雲にそらとぢて春にうづめる三吉野のそこ　前中納言定家卿

○洞院攝政家百首
ちはやぶる神代の櫻何故によしのの山をやどとしめけむ　同

○千五百番歌合
玉春下
先立ちて誰みよしのの山櫻しらぬしをりのあとつけてけり　西園寺入道太政大臣

○最勝四天王院名所御障子
○貞應三年一字百首
○永仁二年内裏三首、庭花盛久
○御集、花歌中古今歌合
○名所歌中
○家集、閑居花
○六帖題御歌、かにはざくら
○建保三年内裏詩歌合、河上花
○[illegible]二年百首、故郷花
○建保二年内裏詩歌合、河上花
○[illegible]家詩歌合、花添山氣色二首歌合和六々
○建仁元年五十首、故郷花
○[illegible]中花
○河邊花

同上 ほの〴〵と花の横雲あけそめて櫻にしらむみよしのの山　同
春の夜のまだあけやらぬ山の端に白むともなき花の横雲　源具親朝臣
三吉野の花のしら雲猶わけて櫻にこもる春の山人　俊成卿女
雲拂ふたかねの風とみる程に麓は花のかきくもりつゝ　民部卿爲家
夜のあめ朝けの風のいくしをり花にしられぬ雲のうへかな　前中納言爲兼卿
ながむれば空には色もなかりけり峯立ちのぼる花のむら雲　常磐井入道太政大臣
立ちまじる花のむら雲たえ〴〵に杉のは埋むあしがらの山　參議爲相卿
あしがらの山の手向に祈れどもぬさとちりかふ花櫻かな　皇太后宮大夫俊成卿
春をへてあれにし奈良の飛鳥には咲くらむ花の色や寂しき　中務親王鎌倉
あすか河櫻吹きかへす春の風猶たをやめの袖の香ぞする　民部卿爲家
櫻花あすかの里のあすよりやしたは盛りの雪とふりなむ
なになかせけふ花盛りあすか川あすも汀に雪のにほひを　俊成卿女
たますだれ同じ緑もたをや女のそむる衣にかをる春風　前中納言定家卿
あすか川かはらぬ春のいろながら都の花といつ匂ひけむ　同
たれか又雲のはたてに吹きかよふ嵐の峯の花をうらみむ　同
すゞか河やそせの浪の春の色はふりしく花のふちとこそなれ　同

○後京極殿下公卿勅使にて太神宮にまうで給ひける時御ともにてよめると云々
すゞか川なみと花との道すがら八十瀨をわけて春はわすれず　後京極攝政
えぞすぎぬ花やすゞかの關ならむふり捨て難き花の陰かな　前中納言定家卿

○建保三年詩歌合
すゞか山あまつ嵐やすて衣かは瀨の浪に花ぞしをるゝ　従二位家隆卿

○九條内大臣家、關路花
雪櫻よしのにわけし鈴鹿山せきもふりゆく花のいろかな

○河上落花
さくら色にみつも染めけり神風やみもすそ河の春の夕暮　荒木田延季

○家集
いつしかと植ゑてみたれば若櫻咲かでも春の過ぎぬべきかな　源信（後頼イ）明朝臣

○家集、うつしうゑ付けける花を
花みむとねこじてうゑし若櫻さきにけらしな風吹かぬまに　修理大夫顯季卿

○三島社奉納歌、神祇大若
河むかひゆきとる山の若ざくら手折りても來む我に舟かせ　權僧正公朝

○家集
布留山の岩ねにふせるはひ櫻霞のうちをえこそたちてね　正三位知家卿

○建保三年名所百首
あしのやの我がすむ方の遲櫻ほのかにかすむかへるさの空　前中納言定家卿

○御集、春御歌中
蘆の屋のなだの鹽燒きいとまあれや磯山ざくらかざす蜑人　後京極攝政

○百首御歌
あしの屋のなだの鹽風心あらばいそ山ざくら浪にちらすな　光明峯寺入道攝政

○同
白妙のそでふる山の春風に花をしがらむみねの三日月　同

○建保四年内裏十首歌合
花の香はありとやこゝに少女子が袖ふる山に鶯のなく　従三位範宗卿

○建長八年百首歌合
花盛りきのふも今日の木のもとに誰ひぐらしの山路なるらむ　後九條内大臣

此の歌判者（知家卿）云ひぐらしの山みゝなれずありて聞え侍り

○同
いつの關に花咲きぬらむ小倉なる音羽のかひにみゆる白雲　光俊朝臣
判者(知家卿)云をぐらなるおとは萬葉に侍るにやみふるさず侍るうへ
によくいひつゞけられてこそ侍れと云々

○家集、花歌中
雲葉
櫻ばな今さきぬらししがらきの外山のまつに雲のかゝれる　中務親王鎌倉

○三百首御歌
櫻さくあなしの山の山櫻ひはら(かつらイ)をかけて匂ふ春風　龜山院御製

○千首御歌、關路花
たちどまるかすみの關の曙に花もいくへか匂ひそふらむ　前中納言光隆卿

○光臺院入道二品親王家五十首、關花
心あてにそれかとぞみる櫻花かすみの關の春の夕暮　權律師隆昭

○同
きよみがた櫻吹きおろす山風にしほひにしらぬなみの關守　法橋顯昭

○嘉應元年成通卿家歌、關中落花
風雅春下
駒とめてすぎぞやられぬきよみ潟ちりしく花やなみの關守　皇太后宮大夫俊成卿

○同歌合同歌
さらぬだにひとすぎ難き清見潟なみの關路に花やちるらむ

○同
白河の關にちりしく花みれば苔のむしろは埋もれにけり　前大僧正覺忠

○歌林苑歌合、關路落花
かげをだに留めて花は散りにけりかひこそなけれ白川の關　西園寺入道太政大臣

○光臺院入道二品親王家五十首、關花
山櫻はなの戸ざしをあけそめて風もとまらぬ白河の關　忠盛朝臣

○家集
春風をなこそのせきの遲櫻けふいくかにか尋ねきぬらむ

○家集、濱邊櫻
かめのこうさしでの磯に散りかゝる花を被かぬいろくづぞなき　源仲正

○花歌中
寳治後百首
おのづから移ろふ花に人とはば須磨のうら風わぶと答へよ(にけりイ)　少將内侍

○五十首歌
櫻花たが世の若木ふり果ててすまの關屋の跡うづむらむ　前中納言定家卿

○同
櫻色に四方の山風そめてけり衣の關の春のあけぼの　同

○洞院攝政百首、花
花の香を行く手にとめよ旅人の衣の關のはるの山風　大納言經通卿

○光臺院入道二品親王家五十首、關花
さくら色の衣のせきの春風に忘れがたみの花の香ぞする　正三位知家卿

○正治二年百首
山のはもあたりに遠き都にて雲にまがはぬ花はさきけり　寂蓮法師

○十題百首
宿毎に心ぞみゆるまとゐする花の都のやよひ二月　前中納言定家卿

○正治二年百首
春のおる花の錦のたてぬきに亂れてあそぶ空のいとゆふ　同

○家集、伊呂波四十七首
鳥のねも花のかをりも春ながらながめ晴れせぬ蓬生の宿　同

○家集寄歌中
思ふ事なくさめければ櫻花をば捨山の月にますかも　能因法師

○後京極攝政家歌合、花添二山氣色一
今よりは秋をばすての山櫻はなと月との有明のころ　源具親朝臣

○建保元年内裏詩歌合、山中花夕
時雨せし色は匂はずから錦立田のみねの花のゆふかせ　前中納言定家卿

○千首歌
立田山にしきおりはへ白妙のゆふつけ鳥は花になくなり　民部卿爲家

○寶治元年十首歌合
おもひ出よ我も昔は立田山たかねの花も袖にかけてき　常磐井入道太政大臣

○同
しら浪のたち重なれる瀧の上のみふねの山は花ざかりかも　大宰權帥爲經卿

○御集屏風歌
瀧の上のみふねの上の山ざくら風にうきてぞ花も散りける　鎌倉右大臣

○寶治二年百首
夕づく日さすやたかきの山ざくら花の光ぞ雲にうつろふ　後九條内大臣

○洞院攝政家百首
（明玉）天の原みればたかきの山櫻空にたなびく雲はこれかも
正三位知家卿

○家集、歌林
ちり殘るきさ山陰の遲櫻あだなるものと見えずもあるかな
鴨　長明

○家集、眺望山花
みよし野の水わけ山の高嶺よりこす白浪や花のゆふばへ
清輔朝臣

○櫻
（續千春下）思ひねの心やゆきてたづぬらむ夢にもみづる山ざくらかな
同

○太神宮百首御歌
物思ひに春ともしらぬながめには櫻が枝も猶しぐれつゝ
後鳥羽院御製

○御集、花御歌中
宮木引くいづみの杣にたつ民も心あればや花をよくらむ
後德大寺左大臣

○家集、花三十六首歌中
かざこしの峯の櫻や咲きぬらむ麓に花（雪イ）のふらぬ日ぞなき
同

○石淸水三百歌合、暮山花
徒らに匂ふもつらし心なきいはきの山の花のゆふばえ
家長朝臣

○同
こえやらぬ心ぞしるき夕暮のまがきの山の花のしたかげ
法印耀清

○建長八年百首歌合
あさがほの咲きしまがきの山櫻これは夕にあはぬ日もなし
後九條內大臣

○家集
やはた山春の櫻もかたそぎのゆきあひの霜の色は見えけり
從二位家隆卿

○春日歌中、松風
伊駒山あたりの雲とみるまでに尾ごしの櫻はな咲きにけり
洞院攝政

○花歌中
（萬代）いこま山尾ごしに咲ける櫻花おりゐる雲と人やみるらむ
藤原有綱朝臣

○文永二年七月白河殿七百首、林花
さきにけり雲のたちまふ伊駒山花の林のはるのあけぼの
民部卿爲家

○遥見二山花一と云ふ心を
伊駒山花さきぬらし難波とをこぎ出でてみればかゝる（はイ）白雲
中務のみこ鎌倉

○弘治元年百首、花
なには人ふりさけみらむ雲かゝる伊駒高ねの初ざくらかな
從二位行家卿

○家集
降る雪に花の林のいこま山むかしのはるに色もかはらず　正三位知家ィ

明玉
うたかみや谷のこぬれに隱ろへて風のよきたる花をみるかな　仲實朝臣

○永仁大嘗會
すがのねのながみね山の櫻花かさなる雲の末ぞはるけき　俊光（光俊ィ）朝臣

○近衛院大嘗會
家集
八重たてる白雲山のさくら花かをるばかりやしるしなるらむ　左京大夫顯輔卿

○正應大嘗會
とこしへに立つ白雲の山ざくら春を重ねていく世かもみむ　民部卿資宣

○百首御歌
拾玉六
音羽山深き霞をわけいればおぼろの宮にはるの花ぞの　慈鎭和尚

同
たづねくるたかまど山の花盛り雲とみつるは空目なりけり　同

○法輪百首、寄櫻述懷
春のうちの一盛りには逢ひなまし身の歎きだに櫻なりせば　源仲正

○家集
散木春
こもら山谷懷（ふところ）におひたててきそのはぐゝむ花をこそみれ　俊頼朝臣

けさみれば花もすぎふになりにけり風はいなりに吹くとみつれど

○屏風歌、二月
いがきにも至らぬときは稻荷山こゆる思ひは花ぞしるらむ　元輔

○家集
ひまもなくつゝめる山の霞かな花の心やあたにみゆらむ　大宰大貳高遠

○あめつちのもじの歌
筑波山さける櫻のにほひをば爭でをらねとよそながらみつ　順

○建保三年內裏歌合、山路花
さくら花ふくや嵐のあしほ山そがひにみゆる嶺の白雲　從二位家隆卿

○山
あしほ山花さきぬれや筑波ねのそがひにみれば雲ぞ棚引く　從二位行家卿

○花月百首歌
つくば山しげき梢をおしなべてさながら花と思はましかば　慈鎭和尚

○家集、春歌中
嵐だに音せぬ春と思ひせばのどけくみまし四方のはな〳〵　惠慶法師

○家集
われが名は花ぬす人と立たばたてたゞ一枝はをりて歸らむ　和泉式部

○燈の前に花をおもふと云ふことを
夜の程に散りもこそすれあくるまでほかげに花をみる由もがな　同

○花月百首御歌
村鳥の下枝になるゝけぢかさに花に宿かるほどぞしらるゝ　後京極攝政

○仙洞五十首、田家花
なれ〳〵て門田の澤にたつ鴈の涙の露ははなにおちけり　同

○光臺院入道二品親王家五十首
あたらよの花ふきくもる有明の山風ばかりうきものはなし　從二位家隆卿

○家集二（三イ）位朝中將家十首和歌
たのめこし都の人はまてどこず花のにはとふはるの山風　如願法師

○花月百首御歌
山里のみねの白雲ちりぬれば花みる人もまたはれにけり　慈鎭和尚

○同
風をいたみ山こぐ我は舟なれや花の白浪分けてきつれば　同

○應和二年三月資子內親王歌合、さくら
いづれともよそには分けず白雲の色をくらぶの山の櫻は　讀人しらず

○永曆元年七月淸輔朝臣家歌合、さくら
わぎも子が宮根の山のいと櫻結び置きたる花かとぞみる　法橋顯昭

○嘉元四年十一月當座百首
のちせ山しらぬ櫻の春の色に花こそありと今日までもふれ　爲實朝臣

○花洞歌中
さきそむる鶴の尾山のさくら花かねて千年の春ぞしらるゝ　山階入道左大臣

○建仁二年五十首御歌、田家花
さくらさく山田の原の花ざかり秋ならずとも庵むすばなむ　慈鎭和尚

○家集
春の日の夕山ざくら咲きにけり朝ゐる雲にながめせしまに　大藏卿有家

○家五十首山花
あづさ弓おしても花とたのみつゝいるさの山にかゝる白くも　光臺院入道二品親王

○名所歌

明玉 春立ちて霞たなびく千年山ふもとの里の花もめづらし　藤原正家朝臣

○建保四年内裏十首歌合

くものゐる遠山ひめの花かづらかすみをかけてふく嵐かな　後久我太政大臣

○同

おのづからいそしの峯やくもるらむ已れにしきを春の山風　僧正行尊

○同三年名所百首

みなせ河ちらぬ梢のうつるより櫻の波の立たぬ日もなし　從二位範宗

○同

ちる花は移りにけりなみなせ河山には春の色もなきまで　藤原康光

○春歌中、人家

水無瀬山昔の花のいろながら我が身ぞ今は春のよそなる　後鳥羽院二條

○みなせの井の花の面白きを見て書き付けける

玉春上 家集 さくら花匂ふをみつゝ歸るには靜心なきものにぞ有りける　中納言兼輔卿

○家集、難波浦春

なには潟花の香かすむ春のよの短きあしにかよふ浦風　安嘉門院四條

○題不知

櫻花今さかりなり難波の海おしてる宮にきこしめすなへ　中納言家持卿

○同

萬七 あじろすぎて絲鹿の山の櫻花ちらずもあらなむ歸りくるまで　讀人しらず

○家成卿家歌合、山寒花遲

絲鹿山たにの氷のとけざらばまだほころびぬ花はあらじな　刑部卿範兼

此の歌判者基俊云此の山はさきの歌合にも難じ申せる山なりよろしき歌にもよみ侍らず右人申云萬葉集に「あしびきのいとかの山の櫻花ちらでもあらなむ歸りくるまで」とよみて侍りそれならずおぼえ侍りと申すに判者萬葉集は心をまどはせるものなり證歌に不引と云々

○御集、落花を

春くれば絲鹿の山の山櫻風も亂れて花ぞちりける　鎌倉右大臣

○建長八年百首歌合
青柳のなびくいとかの山櫻こやこきまずる錦なるらむ　左近中將具氏卿

○熊野山二十首歌
青柳のいとかの山のさくら花都の外にしきをぞみる　民部卿爲家

○建長八年毎日一首中
大内や昔のあとの春毎になれこしはなの陰ぞこひしき

○文永十一年毎日一首中
中川のわたりの櫻むかしよりまづさく花とみしもかはらず

○月次御屏風歌
思ひいづや小鹽の山のさくら花かけし神代の春のむかしを

○社花
明玉
小鹽山かみ代の花やちりにけむ匂ひもつきぬ春のしらゆふ　土御門院小宰相

○春歌中
現存六
おほ原や小鹽の山のさくらがり雲こそ春のとだちなりけれ　隆祐朝臣

○御集
新續古今春下
きゞすなく大原山の櫻花かりにはあらでしばし見しかな　三條右大臣

○家集、三百六十首中
春雨のふるのみ山の花みると三笠の山をさしてのみこそ　よしたゞ

○六帖題
新六一
吹き渡る風を便りのあま小舟とませの山に花の香ぞする　正三位知家卿

○正治二年百首
おしなべて霞める花とみゆるかなこしの白根の春の曙　二條院讃岐

○同
尋ねくるこしの白根に雪ちりて花ゆゑ春も忘られにけり　寂蓮法師

○家集、翫花主不レ定
ちりまさむ方をやぬしと定むべき峯をかぎれる花の村立　西行上人

○家集
白河の春の梢のうぐひすは花のことばを聞くこゝちする　同

○後法性寺入道關白家百首
くもの浪岩こす瀧とみゆるかなに流れたる白河の花　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、關中櫻
みそのなる白河ざくらちりかゝり春の垣ねに卯の花ぞ咲く　源仲正

○家集
民忠後百 古郷のあはづの原のさくら花昔のはるもかくや匂ひし　能宣朝臣

○古寺花
粟津野やとほき霞にこゑもりて花の香つたふ入相の鐘　参議爲相卿

○十首御歌、名所花
見渡せば花の横雲たちにけり小倉のみねの春のあけぼの　後鳥羽院御製

○延喜十三年歌合
ふりはへて花見にくれば小倉山いとゞ霞の立ち隠すかな　たゞみね

○名所歌中
ともなひし春のみゆきも忘られず小倉の山のはなのした道　爲實朝臣

○同
くれかゝる霞の下の小倉山花よりほかはその色もなし　参議爲相卿

住み馴れし宿は小倉の山ざくら花の心に昔とはばや

○同
とふ人の見捨てて歸る山里に花のあるじの名こそをしけれ　民部卿爲家

此の歌は花の比をぐらの山莊にまうできてかへりける人に花のえだにつけてつかはしけると云々

○弘長三年住吉社三首歌合、野花
白雲とよそには見えて櫻花遠里小野ににほふ春風　前大納言爲氏卿

○同
さくらさく遠里小野に春霞さながら匂ふ花のしたかぜ　法眼源承

○同
色も香もふるから小野のさくら花昔の春の名殘とぞみる　法印覺源

○同
はるばると吹きくる風の花の香や遠里小野にかゝる白雲　民部卿爲家

○行家卿住よし社歌合、松間花
神垣のまつの木のまの白木綿や春に相生のさくらなるらむ　同

○同
みわたせば松のたえまに霞みけり遠里小野のはなの白雲　式乾門院御製

○題不知

住吉の里をえしかば初花のましめづらしみ君にあへるかも　人丸

○正安四年住吉社歌合

蜑のかるみるめにあかぬ住吉の浦のさくらも神やうゑけむ　法印定爲

○家集

淡路島いそわのさくら咲きにけりよきてを渡れせとの鹽風　忠盛朝臣

○卿集、花

住吉のむかひの雲は花なれや浦風かをるあはぢしま山　中務の（卿親王イ）みこ

○三十首歌、花滿山

高砂の山には花もみつしほのあらはに見ゆる松のはもなし　從二位家隆卿

○文應元年七社百首

春は先づ名にめでてこそ尋ねけれ櫻のみやの花のこずゑを　民部卿爲家

（家集イ）流れくるなみは櫻の花なれば折らでさだめむ事ぞうきたる　能宣朝臣

此の歌は伊勢の齋宮にてやり水に花のながれたるをこれは何の花のさけるぞたづねて聞えさせよと侍りしによめると云々

○一條太政大臣障子繪、國々の名所を

東路の田子の浦波春たてば岸のうへに咲く花にぞありける　同

○同

（同）八十島に千々の色々さく花はよろづ代の春君のみぞみむ　同

○同

花の色もときはの松に大淀ののどけき春にかけぞならへる　同

○家集

（同）うき島の花みる程はみちのくのしつめる事も忘られにけり　爲仲朝臣

○建仁二年歌合

（雲葉）すゑの松あたし心の花ざくら已れ浪こす春風ぞふく　正三位忠定卿

○家集

（歌林）風を痛みひゞきの灘をとほる日も岸の櫻にめかれやはする　俊惠法師

○百首歌

櫻あさの麻生のうら風心せよありそのめぐり花さきにけり　寂念法師

○建長八年百首歌合

島山の尾の上の櫻ちるなりは風におちそふ瀧のしらいと　前大納言顕朝卿

○洞院攝政家百首、花

波間よりみえしもなみの外ならで花さきかゝる沖つ島やま　光俊朝臣

○春歌中古来歌合

櫻さく奥津島山みわたせば波にかゝれる花のしらくも　従二位

○元久元年詩歌合、水郷春望

里わかず花さきぬれば浪間よりみゆる小島も雲がくれつゝ　醍醐入道前太政大臣

○同

峯の雲みぎはの浪にたちなれて花にぞ契る宇治の橋姫　藤原業清朝臣

○御集、宇治平等院にて一切經會に

のりの水八十氏河にせきとめて花のともにや春をまちけむ　後京極攝政

○洞院攝政家百首歌

あさ日山移ろふ色に咲く花のくれなゐみがく宇治の河なみ　隆祐朝臣

○百首、人家

小波や近江のみをの山風にかちのを行けば花の香ぞする　法印尊海

○題不レ知

たかしまの山の櫻や咲きぬらむみをのそまきにかゝる白雲　藤原基隆

○文永二年七月白河殿七百首古来歌合

たちかへり猶見てゆかむ櫻花ころものさとにゝほふ盛りは　左近中將具氏卿

○圓空上人のもとへつかはしける

花もまだ咲かぬときかば訪ねみむ色もにほひも深草の里　前大納言爲氏卿

○御返事

さきなばと契りし日より深草の花や都の人をまつらむ　圓空上人

○大嘗會悠紀方御屏風

やす川のわたりの櫻はつ〳〵に見れどもあかず垣越しにして　前中納言匡房卿

○家集

遠近にはなさきぬれば鷲のゐるそなれの松とみぞ紛ひぬる　俊頼朝臣

○家集

浅ましや淺香の山の櫻花かすみこめても見えずもあるかな　よしたゞ

わさ苗を宿もる人に任せ置きて我は花見るいそぎをぞする

○春御歌中
いしばしる瀧にまがひてなち山の高ねを見れば花の白雲　花山院御製

○家集
風雅上
木の本に住みける跡をみつるかななちの高嶺の花を尋ねて　西行上人

此の歌は那智にまうで侍りけるに花山院の御あんじつの侍りける前に年ふりたるさくらの木の有りけるをみてすみかとすればとよませ給ひけむ事思ひ出でられてよみけると云々

○家集、瀧上櫻
雲かゝる那智の高ねに風ふけば花ぬきくだす瀧のしらいと　源仲正

○熊野にまゐらせたまひけるとき
いざこゝにわが世はへなむ御熊野の山の櫻はさきそめにけり　後鳥羽院御製

○十二首御歌中諸木
わたるせも春はせかれて岩田川花こそたため波のしがらみ　土御門院御製

○六帖題御歌、ひざくら
爰にしもいかでさきけむ煙たつあさ間のやまのひ櫻のはな　中務のみこ（御製王イ）

新六
はるをやく光は同じ梢にてわきて名にたつひざくらの花　民部卿爲家

同
春はこれ日影をぬるみ草のはも萌ゆる野原のひざくらの花　正三位知家卿

○家集
あづさ弓春の山べに煙たつもゆともみえぬひざくらの花　みつね

萬十
冬ごもり春さく花を手折りもちちへの限りも戀ひわたるかも　人丸

新拾遺春下
はる霞たなびく山のさくら花はやくみましをちり過ぎにけり　同

○河院攝政家百首、山花
都人とはぬ住ひのさびしさも今朝はわするゝ花のみ山木　從二位頼氏卿

○寶治二年百首御歌
梅がえにさくらの枝をさしまぜて花より外につたふ鶯　慈鎮和尚

○建保三年名所百首

浪きよきたましま川にうつりきて春の光も花に見えけり　　正三位忠定卿

○百首歌、鳥羽

なに事も名には思はず今はたゞとばにぞ春の花もみるべき　　藤原爲顯

○建保三年名所百首

家集上 末遠き鳥羽田の南しめしよりいく代の花にみゆきふりけむ　　前中納言定家卿

○同

同 たつあらしいづれの神に手向山花の錦のかたみさだめず　　同

○同

さほひめに花のしらゆふ春かけておのが手向の山風ぞふく　　正三位知家卿

○同

白妙になびきにけらしゆふだすき手向の山に花やちるらむ　　順徳院御製

○同

するがなる宇都の山べにちる花よ夢の中にも誰をしめとて　　同

○同

わびつゝは夢こそあらめちる花のうつゝも辛きうつの山風　　正三位知家卿

○同

かりがねの花とびわけて歸る山霞をみねにのこす色かは　　從三位範宗卿

○建仁十首歌合、羇中見花

故郷のたより思はぬながめかな花ちる比のうつの山ごえ　　後鳥羽院宮内卿

○あづまにくだり侍るとて

もみぢせし其の佛も立ちそひて花にあきなるうつの山ごえ　　前民部卿雅有

家集云うつの山ぐちは桃李おそくして錦繍谷のごとしのぼりしたびは
もみぢ山にみちたりしにけふは櫻山なうづめりと云々

○千五百番歌合

花はゆきとふるの小山田かへしても恨みはてぬる春の夕風　　後鳥羽院御製

○六帖題、かばざくら

新六 いもがきるうへ紫のかば櫻花のゆかりのあるもなつかし　　信實朝臣

○永久三年十月顯輔卿家歌合、櫻

あさ霞へだつとみれど紅の色をかさぬる山櫻かな　　藤原宗眞

〇天延三年三月法住寺太政大臣家歌合、紅櫻

くれなゐにふかくぞみゆる櫻花雨さへ色をふりそめてけり　藤原惟賀朝臣

〇花歌中

くれなゐの色は昔の事ときくに花の匂ひにみつる今日かな　西行上人

〇永久四年六月八條入道太政大臣家歌合、櫻

花ざかり末の松山風ふけば薄くれなゐに浪ぞ立ちける　德大寺左大臣

〇光臺院入道二品親王家五十首、山花

くれなゐの薄花櫻さきにけりみねの白雲色ぞまがはぬ　從三位範宗卿

〇老若五十首歌合

山のはもうすくれなゐの花盛り雲にまがはぬ春のあけぼの　寂蓮法師

〇千五百番歌合

櫻花移ろはむとや山のはのうすくれなゐに今朝は霞める　後京極攝政

〇同

あしがもの下の氷はとけにしをうはけの花の雪ぞふりしく　同

〇同

風春上
花や雪かすみや煙ときしらぬ不二のたかねにさゆる春風　前大納言忠良卿

〇家集、遠山花

續拾後春下
雪きえぬ不二の煙とみえつるは霞にまがふ櫻なりけり　俊頼朝臣

〇久安百首

三輪のやま花のさかりを尋ねつゝとふ人しげき杉たてる門　待賢門院堀川

〇建保三年名所百首

しきしまやみわの檜原の木の間より稀なる花をふく嵐かな　僧正行意

〇家集

かざしをる三輪の檜原の木の間よりひれふる花や神の八少女　清輔朝臣

〇久安百首

なのらねど匂ふにしるし朝倉やきの丸どのにさける櫻は　大炊御門右大臣

〇長治二年五月重陽歌合、櫻

東雲にあさくら山の花をみてくもゐはるかにゆく心かな　明範法師

〇家集、春歌中

にほへ唯あさくら山の櫻花ゆきてもならぬよそのよそまで　從二位家隆卿

〇建保三年內裏詩歌合

はなのさく木ずゑに浪のかけまくも畏きみよをみつの河風　從二位行能卿

はるの嵐さそふ伊吹の山ざくら花をもらすな關のふぢかは　從三位範宗卿

○家集、閑路櫻
みる程に人とまりけりいはでたゞ花に任せよ不破のせきもり　源仲正

○光臺院入道二品親王家五十首
爲家卷首
をしめども花はとまらぬ不破の關山ふきこゆる春の嵐に　参議雅經卿

○百二十八首和歌
ちる花に汀のほかのかげそひて春しも月ぞ廣澤の池　前中納言定家卿

○貞應三年百首歌、曉落花
散りかゝる庭の櫻をたよりにて晴るゝもつらし有明の月　民部卿爲家

○百首御歌
おぼろなる月はいりぬる峯もまた花にひかりのあり明の山　慈鎭和尚

○百番御歌合
ちりかゝる花にぞくもる大原や月もおぼろの清水なれども　順徳院御製

○同
待てしばしひのくま川の春の風ちらぬ櫻のかげをだにみむ　同

○天喜六年
花のちる山の麓のかゞみ川日をへて春はせくべかりけり　讀人しらず

○承久二年四季百首歌
ちりかゝる曇りもあらじ神かぜや五十鈴の河の花のかゞみは　從二位家隆卿

○亭子院歌合、花櫻
わかのうらへいざ歸りなむ朝顏のひと花櫻うつろひにけり　おきかぜ

○家集
わかのうらあまの鹽屋に煙たてかすみの間より花ぞ匂ひし　大僧正行尊

○百首歌、海邊落花
ちる花を吹上の濱の風ならば猶も木末にかへりさかせよ　小侍従

○弘長元年百首
ちりつもる花の淵とぞなりにけるみなのせ川の春の港は　民部卿爲家

○嘉祿元年三首歌、野外花
春風に野守の鏡みえぬまで己れもうつる花はちりつゝ　同

○定家卿會、野外花
さくら狩しばしかげみむはしたかの野守の鏡花もうつりぬ　從二位家隆卿

○建長八年百首歌合
風をだにまつ程もなきあだ花は枝にかゝれる春の泡雪　従二位行家卿

○右大臣家百首
苔の上の庭のちり花いくかへり嵐につけてふりかはるらむ　民部卿爲家

○仁和寺宮にて、河上花
みなの河峯よりおつる櫻花にほひの淵のえやはせかるゝ　前中納言定家卿

○承久二年四季百首歌
櫻色のうつるも知らぬ山賤もたのもの花は袖にちりつゝ　同

○文集百首、花落城中地
春のそら入江の浪にうつる色都もふかく花やちるらむ　同

○枝空花落稀
吹く風にえだの空しくなりゆけば落つる花こそ稀に見えけれ　大江千里

○春暖山花處々開
暖けき春の山べに花のみぞところもわかず咲きわたりける　同

○偷閑何處無二良春一
しづかなる時を求めていづくにか花のあたりを共に尋ねむ　同

○家集、雲葉
文干載春下
風ふけば花さく方へ思ひやる心をさへもちらしつるかな　平定文

○御集中
春雨にちりかふ花を朝寒み今朝はみぞれにわきぞかねつる　花山院御製

○ふしみにて花をみてよめる、雲葉
家集
さくら花ちりかふ空はくれにけり伏見の里に宿やからまし　中務

○家集、春歌中
鶯の聲によばれてうちくれば物いはぬ花もひとまねきけり　源重之

○ひえの山に僧の歌よみけるを聞きてかへしすとて
袋冊子
櫻花第四上慮にさかせばや風笑なくしてちらじと思へば　堀川右大臣

○僧返し
櫻花第四上慮にさけりとも眼色なくばいかゞえんせん　讀人しらず

○又僧のもとへつかはしける
櫻花第四上慮にもしさかばしものけんしきかりてえんせん　堀河右大臣

○僧のかへし
限りあればしものけんしきかれるとも上の花をば如何宴せん　讀人しらず

○家集、はるかに山のさくらを見る
遠目にはなほぞわかれぬ山櫻いざ宿とりてゆきて惜しまむ　惠慶法師

○家集、庭上櫻
からくらや駒もかざさぬふる郷の庭もせにさく薄櫻かな　源仲正

○花十首中
爲忠後百
霞たつくらまの山の薄櫻てぶりをしてなをりぞわづらふ　修理大夫顯季卿

○うす櫻といふ名人のもてきたりければ
袖中抄
これや此の音に聞きつる薄櫻くらまの山にさけるなるべし　權中納言定賴卿

○春歌中ゑじまを
もしほ草かきあつめたる繪島には花さく春ぞ色は取りける　同

○家集、島上櫻
爲忠後百
鹽風にをじまの櫻花さかせてなみのみたてもなくて散りぬる　源仲正

○江路櫻
浪かくるつちにちりしく花の上を心してふめ春のやま伏　同

○西府寺の櫻松風にちるをみて
琴のねをしらぶる空にふる雪は松風にちる櫻なりけり　能因法師

○御集春歌
こばた山花の錦はおりてけり櫻柳をたてぬきにして　堀河右大臣

春風の吹飯のそらにちる花をさくら貝とてひろふ今日かな　堀川院中宮上總

此の歌は家集云中宮にて櫻のちるを人々ふところにひろひし爲顯綱朝臣のもとよりちりたる花を箱のふたに入れておこせたりしかばよめると云々

○久安百首
ちる花の霞のうちは波よるをくれ行く春のとまりとやみむ　上西門院兵衛

○百首歌、春雨を
春雨のしづくの山にちる花は木のもと毎のみぞれとぞみる　六條院宣旨

○花のもとにおもひやのぶ
さくら花ちりかふ程は波かけて洗ふこじまの梢とぞみる　後賴朝臣

○おもふ事有りける比大宮長實卿のもとへつかはしける

山かげにやせさらぼへる犬櫻おひはなたれてひく人もなし

○新院に人々まゐりて歌よみけるに候にまゐりてよめる

春風は花さそふらし波の上にきえせぬ雪のおりす河かな　　權大納言實家卿

○家集、春歌五首中、花

いはみのや春の雪ちる花ざかり高角山にかぜやふくらむ　　同

○寛喜二年住吉社歌合

位山みねのさくらをかざしても人は物をや猶おもふらむ　　左近中將公衛

○家集、風前落花といふ事を

山ざくら枝きる風の名殘なく花をみながら我がものにする　　西行上人

○花歌中

勅とかや下す御門のいませかしさらば恐れて花やちらぬと　　同

○同

おもひやる高嶺の雲の花ならば散らぬ七日は晴れじとぞ思ふ　　同

○同

風ふくと枝をはなれてちるまじく花とぢつけよ青柳の絲　　同

○文治六年女御入内御屏風、山野人家々花盛咲きたる所

峯の雲野べの霞もかをりあひて春にむすべる宿とこそみれ　　皇太后宮大夫俊成卿

○御集、落花

色かはるうき世の花の一盛りありしをよしや思ひ出にせむ　　中務みこ鎌倉

○花月百首御歌

秋はまた鹿のねつげし高砂の尾の上のほごにさくら一むら　　後京極攝政

○同

色も香もこの世におはぬ物ぞとてしばしも花をとめぬ春風　　同

○西洞隱士百首春御歌中

かり人のいる野の露を命にてちりかふ花にきゞすなくなり　　同

○仙洞五十首御歌、羇中花

旅ねする花の下風立ちわかれいなばの山のまつぞかひなき　　同

○建仁元年十首歌、羇中見花

よもぬれし片野の小野のかり衣花のゆきには宿からずとも　　土御門内大臣

判云右歌左方申云たびのこゝろすくなきにや又かた野にさくらことに

きこえずと云々衆議判

○弘安元年側洞詩歌合、花下遊…
雪とちる片野のさくら春くれて嵐にたどる花のしたみち　前大納言爲氏卿

○同年百首
新後拾雜
かたのなる渚の櫻いく春かたえてといひし宿にさくらむ　法印定圓

○建仁二年内裏詩歌合、河上花
ちる花のおのれあだなる名取河風ぞうらみし春のいはなみ　參議雅經卿

○洞院攝政百首、花
たかまどの花に馴れたる宮木もり風靜かなる春やまつらむ　從三位行能卿

○同
春くれば心にたえずかゝるかな雲に花さくかづらきの山　從三位範宗卿

○亭子院歌合
石の上ふるの社のさくら花こぞ見しはるの色や殘れる　伊勢

○石清水若宮歌合（若イ）
けふも又とよらの鐘の入會に花に宿とふかづらきの山　後鳥羽院下野

○家集、櫻
千春上
神垣の三室の山ははるきてぞ花のしらゆふかけて見えける　清輔朝臣

○嘉祿四年百首
咲きぬるかたかまの山のさくら花薄紅にかゝるむら雲　民部卿爲家

○同二年百首
みむろ山谷にや花のつもるらむ音もこほらぬ雪の下水　同

○貞應二年當座百首、河上落花
みむろ山しらゆふ花やうつるらむ立田の河に波ぞかゝれる　同

○御集中
三室山神のしらゆふ春かけて惜しめどあたの花はたまらず　後鳥羽院御製

○元治元年詩歌合、水郷遠望
あさづまや雲の遠方かすむなり花かあらぬがしがの浦なみ　藤原業清朝臣

○建長八年百首歌合
峯たかき比良の外山は霞みつゝ空なるくもや櫻なるらむ　衣笠内大臣

○永萬二年重家卿家歌合、花
新續古春下
あふみぢや眞野の濱べに駒とめて比良の高ねの花をみるかな　從三位賴政卿

○新御歌中
（雲葉）花さそふ比良山風あらければ櫻にしぶくしがのうらふね　後鳥羽院御製

○百首歌
さくら花ひらの山風ふきぬらし花の波よるみつの濱松　寂蓮法師

○千五百番歌合
しがの浦に花のさゞなみこぎ分けて釣する蜑や袖匂ふらむ　同

○正治二年百首
さくらさく志賀の山ごえ風過ぎて吹きよせてけり花のさゞ波　民部卿範宗

○家集、花歌中
さくらさく比良のやま風ふくなべに花のさゞ波よする水うみ　權中納言長方卿

○同
海かけてひら山颪行きかへり花のしまきの波たかくみゆ　土御門院小宰相

○弘安元年百家
しがの浦やかすむ浪間を吹き分けて花の舟さす比良の山風　法印定圓

○家集、山路ちるはな
ちりそむる花の初雪ふりぬればふみ分けまうきしがの山ごえ　西行上人

○同
春風の花のふゞきに埋もれてゆきもやられぬ志賀の山道　同

○正治二年百首
ちり紛ふ花の吹雪にかきくれて空までかをるしがの山越え　喜多院入道二品のみこ

○六百番歌合、志賀山越
みちもせに花の白雪ふりとぢて冬にぞかへるしがの山ごえ　慈鎭和尚

○御集、社頭花
神垣にしらゆふ花の見えつるはしがの浦なる櫻なりけり　後徳大寺左大臣

○永仁三年十二月太神宮祢宜歌合
さくら
さゞなみや志賀の花園なかりせば何かは春の姿ならまし　讀人しらず

○家集百首中
春がすみうちかきこむるたえ間より夕浪しろししがの花山　源有仲

○家集
曇れとやかけみる花のますかゞみみなぶち山にちる櫻かな　權僧正公朝

○久安百首御歌
ことわりや嵐の山にさく花は心のどかに匂はざるらむ　崇徳院御製

○百首御歌、名所
大井河おろすいかだに積むものは嵐の山の櫻なりけり
後徳大寺左大臣

○御集、曙花
はるふかみ嵐の山のさくら花さくとみしまに移ろひにけり
鎌倉右大臣

○春歌中
現存六
ふきおろす春の嵐の山風にとなせの瀧の花のしらなみ
民部卿雅有

○弘長四年毎日一首中
今更に名ぞうらめしき嵐山あたりの里のはなのさかりは
民部卿爲家

○花月百首
春風の浪こすそらになりにけり花の汀の岸のはままつ
前中納言定家卿

○同
花やとる櫻が枝はたびなれや風たちぬればねに歸るらむ
後京極攝政

○同
風ふけば己がくもより己が雪を散らして見する山櫻かな
同

○西洞隱士百首御歌
花は浪まきたつ山は末の松かぜこそこゆれ雲のかよひぢ
同

○洞院攝政家百首、花
ちらぬ間も水なき空の波なれや雲居になびく峯のさくらは
後九條内大臣

○同
かすみたつ遠山どりのをみ衣すそのの花につまやのこれる
民部卿爲家

○御集、花の木ともあまたうへさせ給ふとて
玉春下
こたちをば縄はずして櫻花かさがくれにぞ植うべかりける
花山院御製

○奈良花林院歌合
萬代雜一
み山にはしひのかざをれ早けれど麓の花はことし咲くめり
基俊

○永萬二年重家卿家歌合、花
うちよする五百重の浪の白木綿は花ちる里の遠めなりけり
前大納言隆季卿

○建長八年百首歌合
花の色はためしもなきを如何にして思ひかゝれる峯の白雲
信實朝臣

○同
ながめこし身ぞ老いらくの雪とのみふりてもふりぬ花櫻かな
正三位忠定卿

○同
花の上の霞をふくか春の風ちらぬ櫻に朝きよめして
信實朝臣

○弘長元年百首花
雲のたて霞のぬきにをりはへて花は錦の名にぞ立ちける　前大納言爲氏卿

○千五百番歌合
風雅春中 みねしらむ木の葉の空にかげ落ちて花の雲間に有明の月　前大納言忠良卿

○百首歌
あさ緑かすみかゝれる梢よりもれたる花のうす匂ひかな　寂蓮法師

○家集
たがみそぎ夕ゐる雲に吹きそへてさくら手向くる春の山風　正三位忠定卿

○重家卿家會歌苑抄
いづれをか花はうれしと思ふらむ誘ふあらしとをしむ心と　法橋顯昭

○千五百番歌合
花ちりぬ何かは春もをしからむ晴れゆくにこそ春をまちしか　土御門内大臣

○後京極攝政家歌合、花讓山氣色
なりにあへば何を何ともわかねども花こそ山の姿なりけれ　隆信朝臣

○花月百首
雲かゝり（のちイ）雪の下なる春の色をたれわが宿のうへとみるらむ　前中納言定家卿

○建久元年一句百首
おもふことたれに殘してながめおかむ心にあまる花の曙　同

○建暦三年内裏歌合、山居春曙
さくら色の霞のま袖露おもみ恨みぬ山ぞ宿のあけぼの　從二位家隆卿

○題不知、雜苑抄
家集 唐國のとら臥す野邊に匂ふとも花のしたにはねてをかへらむ　清輔朝臣

○久安百首
いか許り花をば春もをしむらむ且はわが身の限りと思ひて　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、花歌
憂世には留めおかじと春風のちらすは花をゝしむなりけり　西行上人

○奈良のこうよ法印の坊にて雨中花と云ふ事を
春雨の花の霙のちりけるを消えてつもれる雪とみたれば　同

○光臺院入道二品親王家五十首、庭花
とはれつる人のかたみもとゞまらずふめど跡なき花の白雪　常盤井入道太政大臣

○百首、春夕花
まつ人のくもる契りも有るものを夕暮あさき花のいろかな　從二位家隆卿

○寶元三年結緣經百首

壬二上　苔の上の庭のちり花いくかへり嵐につけてふりかはるらむ　　正三位知家卿（他本非此作可勘之）

○御集冠上花吉來歌合

苔の上にむら／＼花はちり敷きて曇りの空をにはにみるかな　　後九條内大臣

○春御歌中

あたにのみうつろひぞ行くかげろふの夕花ざくら風に任せて　　後九條入道關白

○御集、深山花

思ひやる高野の奥の山櫻わがあらましの春やまつらむ　　中務みこ鎌倉

○正嘉二年毎日一首中

さく花に錦おりかく高野山柳の絲をたてぬきにして　　民部卿爲家

○家集

もみぢみし高野のみねの花盛りたのめぬ人のまたるゝやなぞ　　西行上人

此の歌は寂然法師もみぢの盛りに高野にまゐりていでにけり又のとしの花のをり申しつかはしけると云々

○高野に侍りける比草庵に花のちりければ

ちる花の庵の上をふくならば風いるまじくめぐり圍はむ　　同

○家集、雨中落花を

梢うつ雨にしをれてちる花の惜しき心をなににたとへむ　　同

○家集、落花

面白や風のまきゐにふゞかれて庭のひまなき花のいかけぢ　　源仲正

○同

かくばかり惜しむも知らず誰にとてでもろに花をくばる風ぞも　　同

○建保三年名所百首

時わかぬ末の松山こすなみの花をわけても歸る春かな　　從二位家隆卿

○同

春風に末のまつ山なみこさば頃しも花のちるかとやみむ　　正三位家衡卿

○花御歌中

尋ねくる人なきとこの山風になげかむ爲とちるさくらかな　　後九條内大臣

○家集

散木春　あだし野は霞もつらしちりそむる花をぞ風に立ち隔てまし　　俊頼朝臣

同 風を痛み立田の山にちる花やふりけむ袖の名残なるらむ　同

○文永八年毎日一首中、雪を

よしなしや櫻ちりにし木のもとの三月もしらずふれる白雪　民部卿爲家

○弘長四年毎日一首中、三月二日雪のふりけるを

山ざくら花の盛りにふる雪はちると見るさへ厭はるゝかな　同

○同三月歌

とけやらぬ花の下紐しられつゝ三月のそらに結ぶあさじも　同

○正嘉三年毎日一首中

彌生まで猶夜寒なる霜の色にむすぼほれたる花のした紐　同

○六帖題

新六ノ六 みればかつもと木の花はちり果てて八重咲き繼るつぎ櫻かな　光俊朝臣

同 同 ちるをわが惜しみもちたる後までも折目はつけし櫻うすやう　信實朝臣

同 秋をこそやくとはみしか山の端に薄紅のひざくらの花　同

○千五百番歌合

散り殘る青葉の山のさくら花風よりのちを尋ねざりせば　大納言通具卿

○建保三年名所百首御歌

都だに花はさりあへずみちのくのしのぶの山の春風の比　順徳院御製

○同

しのぶ山みだれて花はほころびぬ限りしられずにほふ春風　正三位家衡卿

○同

おのれのみ春とやひとり忍ぶ山花に籠れる鶯のこゑ　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年百首

新後拾春下 尋ねばやしのぶの奥の櫻花風にしられぬ色やのこると　前中納言定家卿

遲日

○六百番歌合、遲日

秋ならば月まつことのうからまし櫻にくらす春の山里　後京極攝政

○同
夕暮に思へばけさの朝がすみ世を隔てたるこゝちこそすれ　大藏卿有家

○同
詠めわびぬ光のどかにかすむ日に花咲く山は西をわかねど　前中納言定家卿

○同
くもの上に鶴の諸聲おとづれて哀れのどけき春の今日かな　慈鎮和尚

○同
春の日のなぐさめ難きつれ〴〵に幾度けふも晝寢しつらむ　正三位經家卿

○同
かくしつゝ積ればをしき春の日をのどけきものと何思ふらむ　隆信朝臣

○永久四年百首、春日
百千鳥囀る春はうら〳〵となれどもわが身曇りつゝのみ　仲實朝臣

○建久元年一句百首
樓の上のあきの望みは月のほど春は千里のひぐらしの空　前中納言定家卿

○同七年二十首詠歌
日はおそく心はいさや時わかで春か秋かの入相のかね

花散にあかず傾くけふの日も思へば冬のいくかなるらむ　民部卿爲家

春月

○百首御歌中
更け行かば霞める空も身にしみていかに寂しき月となるらむ　後九條内大臣

○同
ふかき夜の哀れ知りけむ古への春のあふぎの月はかはらじ　同

○洞院攝政家百首、逢不レ會戀
よにしらぬ朧月夜の俤もめぐりあふぎのかたみだになし　家長朝臣

○建長三年毎日一首中
おぼろなる春の習ひもみせ顔に雲なきそらにかすむ月かげ　民部卿爲家

○正嘉二年毎日一首中
空も猶おぼろ月夜のころとてや曇りもはてぬ春雨ぞふる　同

○同毎日一首中

月かげの朧にかすむ小倉山くもをかさねて春雨ぞふる　同

○同三年毎日一首中

くるゝ夜のかすみに深き山のはをしらせていづる春の月影　同

○式部卿親王家和歌御歌

いとひつる雲の外なる影も猶かすみをいでぬおぼろ夜の月　參議爲相卿

○千五百番歌合

更科やをば捨山のうす霞かすめる月にあきぞこもれる　後京極攝政

あけはてば戀しかるべき名殘かな花の影もるあたら夜の月　同

新續古春下
はつせ山花に春風吹きはてて雲なき峯に有明のつき　同

○御集、春御歌中

雪おつるおぼろ月夜にまどあけて衣手さむき春風ぞふく　同

○四季百首、春風

君が代に萬代めぐる少女子がつらなる庭のいさよひの月　前中納言定家卿

○六十首字、以詩句爲題、風景好、香衫、細馬互相尋

よにしらぬ朧月夜はかすみつゝ草の原をば誰かたづねむ　同

○三春芳信除迎幕、露凋新開寄露闘

花にすむ山のいへ居をきてとへば彌生の月も影まどかなり　同

○春歌中寄霞風

そらにたつ春のかすみの關守やおぼろ月夜の名を留むらむ　前大納言爲氏卿

○親子内親王家歌合、霞月をへだてる

萬十
見る程も空にかすみの隔つれば光にあかぬ春のよの月（しるしばかりのイ）　宣旨

○詠レ月

春さればきのこのくれの夕月夜おぼろかなしも山陰にして　讀人しらず

夫木和歌抄卷第四　終

夫木和歌抄　巻第五

春部五

歸鴈

○天慶五年亭子院御屏風
家集上　六帖
春霞とびわけいぬる聲ききてかりきぬなりと外はいふらむ　貫之

○三百六十首中
家集
なきかへる鴈の涙のつもるをや苗代水に人はせくらむ　好忠

○歸鴈を詠歌
春まけてかく歸るとも秋風に紅葉の山をこえこざらめやは　中納言家持卿

○太神宮五百首御歌
かへる鴈おぼろ月夜のなごりとや聲さへかすむ曙のそら　後鳥羽院御製

○百首御歌
かへるかり涙や秋にかはるらむ野べは緑の色ぞそめゆく　順徳院御製

夕霞きえゆくかりや雲とりのあやおりみだる春の衣手　同

小山田のあぜの細道くる人に驚きてたつ春のかりがね　同

○百首歌
すぎがてにしばし休らへ歸るかり山田の原のおぼろ月夜を　従二位家隆卿

〇久安百首
都にて年もこし路のかりがねは歸るとこよや旅だちぬらむ　花園左大臣家小大進

六帖題
新六 としこしの都の空の長旅につばさたれてや歸る鴈がね　光俊朝臣

〇百首歌
都出でて古郷とほく行くかりの今朝わけそむる峯の白雲　正三位知家卿

〇建保三年内大臣家百首、夕歸鴈
行く鴈のたつことやすき空もうしたのもの澤の春の夕ぐれ　信實朝臣

〇洞院攝政家百首、眺望
わけなれし雲の翼に秋かけて越路の空にかりぞなくなる　俊成卿女

〇五十首歌、名所歸鴈
天の河秋とやなれも契るらむ片野のみのに歸るかりがね　土御門院小宰相

〇寶治三年百首、歸鴈
旅のそら鴈の羽衣立ちかへり又古里の春急ぐなり　正三位知家卿

〇保延二年三月家成卿歌合、霞歸鴈衣
たちぬはぬ霞を旅の衣にて雨のほかよりかへるかりがね　藤原雅親

此の歌判者基俊云右の歌仙人の衣の心を被レ詠てよろしなむ侍ると云々

〇同
かへる鴈霞の衣いくへきて寒きこし路のそらをゆくらむ　從三位賴政卿

〇中院入道右大臣家にて海上の鴈を、歌苑抄
雲居より鴈かへるらしこしの海の波のあやまにかける玉づさ　源忠季

〇天仁二年十一月顯家卿歌合
はねを重みあしをくひてや歸るらむ宿の上近く鴈ぞ聞ゆる　琳賢法師

〇寶治二年百首、歸鴈
薄衣そめほす山の雲間よりたなびくかりや春のしたおび　後九條内大臣

〇百首御歌
たち渡る雲のあなたの山こえてとびかすみたる春の鴈がね　同

〇柿本影供百首
曉をなれもうしとや別るらむ妹背のやまの春の鴈がね　同

〇貞應三年百首
おのが名や春に賴めてこえつらむ歸る山路のかりがねの聲　民部卿爲家

○承暦四年九月十三夜詠百首
うらみずや高間の櫻にほへども雲居のよそにかへる鴈がね

○百首御歌、夕鴈
誰かれに名のりてすぐる春の鴈歸る心をしる人ぞなき　慈鎭和尚

○家集、五十首
歸るさに名のるばかりを情にてたのむの鴈も遠ざかるなり　嘉陽門入道二品のみこ

○伊勢大輔家歌合、歸鴈
春來ればひきつらねつゝ鴈がねの歸る聲こそことに聞ゆれ　讀人しらず

○久安百首
久方のあま飛ぶ鴈のかへるさは春の調べにたつる琴ぢか　前大納言隆季卿

○賀茂の重保がもとへ送りける百首によみてそへける十首歌
かへるかり御手洗川にうつろひて水の調べの琴ぢなりけり　殷富門院大輔

○家集、春歌中
曇りなくなきたる空に遊ぶ絲にことぢを立てて歸る鴈がね　同

○家集、水上歸鴈
引きつらねことぢを立てて歸る鴈浪ぞしらべの聲あはすなる　權中納言長方卿

○文治六年五社百首
はるの空ことぢを立てて歸るかり松の風にぞ聲かよふなる　皇太后宮大夫俊成卿

○同
秋はきて春はとこ世にかへる鴈夏や涼しきすみかなるらむ　同

○文應元年七社百首
伊勢の海士のころも春とや鈴鹿山又ふり捨てて歸る鴈かね　民部卿爲家

○同
さらでだに知らぬ昔は戀しきを(にイ)その神山に歸るかりがね　同

○最勝四天王院名所御障子、大淀浦
かすみゆく松さへつらし大淀の浦たつ浪のかへるかりがね　從二位家隆卿

○同
大淀のかすみ吹き結ぶ松風にうらみてのみや歸るかりがね　俊成卿女

○同
大淀の春の浪路にゆくかりもうらみて歸る曉(かたイ)の空　如願法師

○同
大淀のまつとや告ぐる古里にうらみぬからに歸るかりがね　大藏卿有家

○海橋立、同院十首に
鴈かへる浪路はるかに打ち霞み明けこそ渡れ天の橋立

○同
春の鴈の聲を帆にあげてゆく舟もあまのと渡る天の橋立　　従二位家隆卿

○同
ふみもみぬ生野の末にかへるかりかすむ浪間の松と傳へよ　　前中納言定家卿

○建保三年内大臣家百首、夕歸鴈
くれぬなり山もと遠き鐘の音に峯とびこえてかへる鴈がね

○家集
春のそらうす花染のかみなれば玉章をのみ見ゆるかりがね　　前中納言匡房卿

○家集、歸鴈を
玉章のはしがきかとも見ゆるかなとび遅れつゝ歸る鴈がね　　西行上人

○建長八年百首歌合
つらなれる翼をかけて玉章の文字くさりして歸る鴈がね　　信實朝臣

○家集
歸る鴈飛鳥の里を過ぎていなば已が行方もみずや成りなむ　　正三位知家卿

○弘安八年仙洞三十首
舟とむるたゆひの浦の曙にこし路をいそぐ鴈はなくなり　　權中納言宗冬卿

○建長三年歌合
すみの江は名にも負ひけりわすれ草遠里小野にかへる鴈がね　　如寂法師

○家集百首歌合
北へゆく都の空の春のかりあがたの井どの人やきくらむ　　光俊朝臣

○寶治二年百首、歸鴈
のどかなる雲居の鴈のわきて今北へむかふは世を祈るらし　　同

○建長八年百首歌合
かへるかり北をさし行く浪の上にあまもつるがの沖の釣舟　　後九條内大臣

○二夜百首
春といへばいつしか北に歸るなり越路の冬をおくる鴈がね　　後京極攝政

あさぼらけ人の涙もおちぬべし時しもかへるかりがねの空　　同

○建長八年百首歌合
古里はいづくなればかさくら咲く吉野の宮をかへる鴈がね　　藤原伊嗣朝臣

○同
花もなき里にならはば暫しましてときはの杜に歸るかりがね　光俊朝臣

○家集、名所歸鴈
淸見がたよせては歸る浪路とやなれもとまらぬ春の鴈がね　土御門院小宰相

○貞應三年同題百首、同歸鴈
淸見潟關守る浪のかへるかりおのが雲路は人もとゞめず　民部卿爲家

○最勝四天王院名所御障子
なには潟霞に消えてゆくかりの名殘をのこす海人のつり舟　慈鎭和尚

○建仁元年老若五十首歌合
明石潟かすみてかへる鴈がねも島がくれゆく春のあけぼの　後京極攝政

○建長八年百首歌合
明石がたかへる浪路やかすむらむ島隱れゆく春のかりがね　前大納言伊平卿

○承久三年長尾社歌合、海邊歸鴈
あさ綠野じまをかけて行く鴈の春は涙の色ぞつれなき　從二位家隆卿

○同
かへるかり野島が崎の朝朗なれたる海士はいかゞみるらむ　法印幸淸

○同
名殘をやをじまの浪にたつ鴈の已が翼もしをれてぞゆく　參議雅經卿

○同
去年の秋こし路もおそくまつ島や春はをじまの歸る鴈がね　從三位保季卿

○同
たれこゝに秋風吹かば松島やをじまの浪にかへるかりがね　法印猷圓

○同
なには潟更にうらみや深からむ歸る習ひの春の鴈がね　正三位家衡卿

○同
習ひとてかすみの浪をたつ鴈も難波の蘆のうらみてぞ行く　如願法師

○同
高砂や尾上をかへるかりがねの名殘は秋を松風ぞふく　權大僧都定範

○同
鴈がねの關とび越ゆる餘波おほみあかぬ詠めを須磨の海士人　藤原隆宗朝臣

○同
松浦がたあくる霞にゆくかりの翼のなみに春風ぞふく　法橋圓快

○同　雲つゞく浪路の末にかすきゑて鳥羽田の浦を歸るかりがね　法印眼清

○同　こし秋もかへる空かとおぼめきし霞のうらの春のかりがね　源光行

○同　かりがねの聲ふきおくる春風にけぶりもなびく鹽竈の浦　權小僧都季嚴

○建保三年百首　鹽竈のうらみてわたる鴈がねを催しがほにかへる波かな　前中納言定家卿

○同　大淀のみるめはよそにかへるかり聲にもなきぬ心のみかは　正二位忠定卿

○同　大淀のうらより遠にゆくかりも一つにかすむ海士の釣舟　正二位知家卿

○同　歸るかり空にきえ行く有明のそらも一つにみしま江の月　俊成卿女

○同　宇津の山みちゆきぶりの白雲に誰がことづてのかりの玉章　従二位家隆卿

○同　歸るかりをしむ心のおくも知れしのぶの山に道を尋ねて　正三位知家卿

○同　鴈がねは同じながらの山こえてかへるもつらきしがの浦浪　従三位範宗卿

○同　折しもあれ末の松山浪こえてつらき詠めにかへるかりがね　兵衛内侍

○承元三年長風社歌合、海邊の歸鴈　春も今は末の松山こす波にかすみをかけて歸るかりがね　權律師公猷

○光明峯寺入道攝政家會、暁歸鴈　たつのなくあへの田面の曙にまた坂こえて歸るかりがね　従二位家隆卿

○寶治二年百首、歸鴈　山風に空ゆく雲も坂こえてあへの田面に歸るかりがね　従二位頼氏卿

○光臺院入道二品親王家五十首、還歸鴈　みるまゝに心細くもとぶかりの雲になり行く春のあけぼの　西園寺入道太政大臣

○文治三年百首　新千春上　契りおけ玉まく葛に風吹かばうらみもはてじ歸るかりがね　前中納言定家卿

○千五百番歌合
はる／＼と雲路に歸る鴈がねをいく霞まで詠めやるらむ　正三位季經卿

○同
しら山や雪猶ふかきこし路にはかへる鴈にや春をしるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○同
雲つゞく十市の里の夕がすみ絶え間／＼に歸るかりがね　小侍從

○同
春といへば今はの心つくばねの峯を遙かにかへるかりがね　隆信朝臣

○同
三吉野の月をたのむの鴈がねや花さく春もよるとなくらむ　前大納言忠良卿

○同
三吉野やたのむのかりの聲すなり花になごりの春の曙　參議雅經卿

○建保四年内裏十首歌合
はる風に鶯さそふ花の香のにほへる山にかへるかりがね　從三位行能卿

○三百首歌
いかにせむ嵐のさそふ花の山しばしとなかでかへる鴈がね　鎌倉中務卿のみこ

○賀茂社百首御歌
春風に花の錦をたちきてや我が古里にかへるかりがね　慈鎭和尚

○正治百首春御歌
水莖のあともとまらずみゆるかな浪と雲とにかへる鴈がね　式子内親王

○同
水莖のあとをや人に忍ぶらむ霞の袖につゝむかりがね　寂蓮法師

○正嘉三年毎日一首中
かへるかり聲になたてそあづさ弓いるさ（つるがイ）の山の雲の遠方　民部卿爲家

あづさ弓春の名殘やをしみけむ彌生の末にかへるかりがね　同

○永仁元年内裏御會當座、歸鴈
三月まで花の都に殘るなりなごりや思ふ鴈のひとつら　前中納言爲兼卿

○百首御歌
花ざかりかへる鴈をやよぶ子鳥おぼろ月夜に聲あはすなり　慈鎭和尚

春曙

○六百番歌合、春曙

玉葉春下
かすみかは花鶯にとぢられて春にこもれる宿のあけぼの　前中納言定家卿

判者秦城樓閣は鶯花裏といふ詩の心とおぼえてよろしくも侍るべしと
ぞ

○同

かすみもや明け行く空ををしむらむ心細げにたち渡るかな　正三位經家卿

○同

さやかなる秋にもまさるあはれかな月影かすむ有明の空　大藏卿有家

この歌方人同判者甘心云々

○同

風雅雜上
みぬ世まで思ひ殘さぬながめより昔にかすむ春の曙　後京極攝政

○百首御歌

鳥のねもかすみも常の色ならで花さきかをる春のあけぼの　式子内親王

○六十五首歌、[illegible]勸ㇾ人

いかならむ絶えて櫻の世なりとも曙かすむ春の心は　前中納言定家卿

○前関白家歌合

思ひそめきよつの時には花の春はるのうちには曙のそら　前中納言爲兼卿

○建治二年百首

二見がた浦の島々あくる夜の遠きしほやは春ぞさびしき　後九條内大臣

野遊

○六百番歌合、野遊

都人やどをかすみのよそにみて昨日も今日も野べにくらしつ　後京極攝政

○野遊
○嘉元元年式部卿親王家千首、野遊
○百首御歌
○後京極攝政家五百首詩歌合、驛中眺望
○嘉祿四年百首、野遊
○家集
○建長三年毎日一首中
○百首歌
○柿本影供百首春歌中

これぞこの春の野べよとみゆるかな大宮人のうちむれてゆく　慈鎭和尚
何方と子の日に出でし春の野ゝ菫つむまで踏みならしつる　隆信朝臣
みな人の春の心の通ひきてなれぬる野べの花のかげかな　前中納言定家卿
萬十 春日野の淺茅が上に思ふどち遊ぶけふをば忘られめやも　讀人しらず
引きそめし子の日ぞはじめ春日野の花のかげまでなるゝ里人　參議爲相卿

春海

春の野にふごてにかけてゆく賤の唯などやらむ物哀れなる　慈鎭和尚
むさし野の野べの草木はめもはるに空に綠の色もわかれず　大藏卿有家
あくがるゝ心の花も移ろへば野べこそ春の宿りなりけれ　民部卿爲家
家集百首春 うばらこき手に取りためて春の野の藤の若枝を折りて束ねむ　好忠

春野

朝凪の海士の漁りぞ思ひやる春のうらゝに日はなりにけり　民部卿爲家
よさの海の春のうら〳〵見渡せば外山のにはに和布刈りほす　殷富門院大輔
ふく風のありそのわたり浪こえて莴の若葉にむすぶ白露　後九條内大臣

○永觀二年一條太政大臣家障子繪
和布刈る海士やよるらむこゆるぎの忙がしくのみ漕ぎ通ふ舟　能宣朝臣

○御集、春御歌中
ゆふなぎの春の潮干は靜かにて霞に遠きわかの松原　中務卿みこ

○千五百番歌合
續千春上 和田の原雲にかりがね波に舟かすみて歸る春の夕ぐれ　後京極攝政

○御集
雲葉 長閑なる春の光にまつしまやをじまの海士の袖やほすらむ　同

現存六藻 紀の海のさひかの浦のおきつもの春の日ぐらしかづく蜑人　賴平法師

○四季百首、海
家集上 けふぞみる春の海邊の名なりけり住吉の里すみよしの濱　前中納言定家卿

○最勝四天王院名所障子、住吉
白菊のにほひし秋も忘れ草おふてふ岸の春のうら風　同

○建保三年名所百首
きさらぎや由良の岬に風たちぬと渡る舟のぬさもとらなむ　從二位家隆卿

春風のなほ（いまイ）吹上の濱千鳥色なき波の花になくなり　從三位範宗卿

春雜

○家集
萬 春山のあせみ（つゝじイ）の花のにくからぬ君にはしめやよがれはこひし（君にはしゑやよわぬともよし萬）　赤人

○三百六十首中
家集 花のときいきたらば見む三吉野の秋のやけふはなべてみつるを　好忠

○建久七年百二十八首
朝露のしらぬ玉のをあり顏に萩植ゑおかむ春のまがきに　前中納言定家卿

○一句百首春歌中
蟲のねは寢覺のゆめにおぼえつゝ秋の春にもなりにけるかな　同

○百首歌野五中中
名もしらぬ昔の人ははかなくてとしぐ\あをき野べの春草　藤原爲顯

○永仁元年楚忽百首

竹近き窓のともしび仄かにてみじか夜つぐる鶯の聲　同

○寛元三年結緣往生百首

春來てはげに短夜になりにけりくれぬに出でし月の殘れる　民部卿爲家

燒山の煙の末はひとつにてかすむ雲居をかへる鴈がね

○千五百番の歌合

うちながめ春の三月の短夜をねもせで獨りあかす比かな　後京極攝政

○仙洞御會三首御歌、無春風不至處

おしなべて民の草葉も打ちなびき君が御代には春風ぞ吹く

○御集

つゝみけむ昔の螢かげ見えて袂の袖にほしぞ宿れる　後九條內大臣

○百首歌

木のもとにいとゞ心やすみぬらむ吉野の奥の春の山ぶみ　寂蓮法師

○永久二年四季百首、春山

はづかしや花の色香に誘はれてうき世いとはぬ春の山ぶみ　前中納言定家卿

○家集、春歌中

田草取（つくそイ）はゝめも植ゑし萠えぬれば賤のますらもおりたちにけり　惠慶法師

○ある所の屛風に、三月藤樹家を

小菜やなぎの絲によりまぜて花の錦はわが宿のもの　同

○三百六十首中

家集
淺茅生も雀がくれになりにけりうべこの木は小倉なりけり　好忠

同
さらきつきすかきさほせり春毎にえりさす賤が爲業なるらし

同
御園生の薺の葉もちたちにけり今朝の朝なに何をつまゝし

同百首
庭の面に薺の花の散りおほへば春まできえぬ雪かとぞみる

○六帖題

新六二
山がつの墻ほのうちのから薺くきたつ程に春ぞなりぬる　衣笠內大臣

○百首歌中

春雨にまがきの薄むらだちぬ今年もさてや道もなきまで　寂蓮法師

三月三日

○六百番歌合
散る花をけふのまとゐの光にて浪間にめぐる春のさかづき　後京極攝政

行く水にうかべる花の杯やながれて淸きためしなるらむ　中宮權大夫家房卿

から人の跡を傳ふる杯の波にしたがふ今日もきにけり　前中納言定家卿

さかづきの流れと共ににほふらし今日の花ふく春の山風　慈鎭和尚

流れきて岩間を下る杯はさして誰にと見えずも有るかな　正三位季經卿

花のいろは入日をのこす木の下に春もくれぬる三日月の影　寂蓮法師

杯の流れにつけて唐人のふなのりすなる今日をしぞ思ふ　法橋顯昭

○久安百首
我がせこや花かづらせむ唐くにの昔のけふを思ふなさけに　前大納言隆季卿

○天平勝寶二年三月三日宴歌
萬十九
から人も舟をうかべて遊ぶてふ今日ぞわがせこ花蔓せよ　中納言家持卿

○久安百首春歌中
さかづきは誰ともささで廻りゆく波の心に任せたらなむ　前大納言隆季卿

○承久二年内裏二首御會、夕桃
明日よりは人もすさめし山賤のそのふの桃の花の夕風　民部卿爲家

○建長五年毎日一首中
たまのとの開くるけふの桃の花身の喜びとなるぞうれしき

○文永四年毎日一首中
我ばかりあくまで花にゑひにけりさくてふ桃のけふをみるにも

○同二年毎日一首中
めぐりくる三月も久し三千とせになるてふ桃のはなの杯

かきながすはの字の水は絶えはてて空にのみ見る春の杯　權僧正公朝

思ひ出でてねをのみぞなくゆく水にかきしはの字の春のよの夢　慈鎭和尚

桃の花うかぶ心に待ちぞみるあふむのつきのいしにさはるな　同

書きとめしはの字に波や結ぶらむ絶えにし道を通りはてねば　同

哀れともけふこそ桃の花盛りかみの巳の日と誰さだめけむ　同

此の二首御歌詞云曲水の宴は我が國には顯宗の御時はじまれりいへには寛弘寛治いみじき事になむ申しつたへたれどその後はきこえぬ道を得たまへるしるしにおこしおこなはむとて文人伶人申しさだめてすでに三日とて侍りしを熊野火事二日ゆふべにきこえしかばのべられけるになむ上の巳の日をとりてもおこなふ例あれは十二日にはなどきこえしものを詩句はいたづらに文人のこゝろにをさまり拍子はむなしく伶人のたぶさに殘りて神なり又神なりともいはず夢きかねにあらざるかとのみおどろくところまことにたましひなたつなかたちとなりて心をまよはすかぎりに侍りけれと云々

君が爲三月になればよつまさへあへのいちどにはゝこつむなり　俊賴朝臣

○六帖題三月三日

○寄水懷舊

○百首御歌、遊宴
此三字イ本になし

○同東林今に
此三字イ本になし

○同在林今に

○家集、三月三日

桃花

○大嘗會悠紀方御屏風
暗部山したてる道は三千年にさくなる桃の花にぞありける　前中納言匡房卿

○安樂寺宴、祠前桃花
三日月に紅にほふ桃の花ひかりもいとゞまされとぞ思ふ　同

○遥かに桃花をみて
次郎百首 誰か又みて忍ぶらむ山賤のそのふの桃の花のよそめを　俊頼朝臣

○六帖題
新六 桃の花さくや三月のみかの原こつのわたりも今さかりなり　光俊朝臣

○三百六十首中
家集 はゝこつむ三月の月になりぬれば開けぬらしなわが宿の桃　好忠

○三日
六一 君が爲わがをる花は春とほく千年を三たびをりつゝぞさく　貫之

○六帖題、桃
天の川きし邊の桃や咲きぬらむ谷さへ花の色にゑひぬる　權僧正公朝

雉

○聞二曉啼雉一
萬十九 足引のやつのを雉子鳴きとよむ朝けの霞みればかなしも　家持卿

○詠花
萬十 雉子なく高まど野べに櫻花ちりながらふるみむ人もがも　人丸

萬三 いのねられねば　たきのうへの　あさのの雉子　あけぬとて
立ちとよむらし　いざやこら

○御集、雉子を
高まどのをのへの雉子朝な〳〵妻にこひつゝ鳴くね悲しも　鎌倉右大臣

○正治二年百首
雉子鳴くあしたの原をすぎゆけば早蕨あさりほろゝうつなり　正三位經宗卿

○老若五十首歌合
むさし野の雉子やいかに子を思ふ煙のやみに聲まどふなり　後鳥羽院御製

○六百番歌合
武藏野にきゞすもつまや籠るらむ今日の煙の下に鳴くなり　後京極攝政

なきてたつ雉子の宿を尋ぬれば裾野の原のしばのした草　慈鎭和尚

狩人のいる野の雉子妻こひてなく音許りに身をやかへてむ　寂蓮法師

煙たつ片山きゞす心せよすそ野のはらに妻もこもれり　大藏卿有家

○聞二曉啼雉一
御狩する人やきくらむすぎの野にさをとる雉子聲頻るなり　正三位季經卿

萬十九
すぎの野にさをとる雉子いちじるく音にしも鳴かむ籠り妻かも　中納言家持卿

○題しらず
萬十二
足引の片山きゞすたちゆかむ君におくれてうつしけめやも　讀人しらず

○稻荷百首
しなてるや片山雉子ゐにうゐてこせる日くらし哀れ子を思ふ　權僧正公朝

○色葉の四十七首歌
ほの〴〵とかすめる山の峯つゞき同じ雉子の聲うらむなり　中納言定家卿

○千五百番歌合
こまなべてこせの春野を朝ゆけば萩が原に雉子なくなり　正三位季經卿

心から妻こひすらし逢ふことの片野の雉子ねにたててなく

○家集、春歌中
片岡にしば移りして啼く雉子たつ羽音して高からぬかは　西行上人

おひかはる春の若草まちわびて原の枯野に雉子鳴くなり

○家集、繪に野邊に雉のたてる所
かりの世と思ふなるべし春の野の朝たつ雉子ほろゝとぞなく　和泉式部

狩人のいとまもいらじ草わかみあさる雉子の隱れなければ

○永久四年百首、雉

堀後 おはれしや野やくにもりしきゝのはのむら草隱れ雉子鳴くなり　神祇伯顯仲卿

○百首歌

雉子鳴く宮城野の原のかすめるは花みる秋もさもあらばあれ　寂念法師

○鷹狩を

萬代 み狩する高の尾山に立つきじや君が千年のひつぎなるらむ　左京大夫顯輔卿

○家集

萬代 草をなみうたの燒野にすむ雉子の何にかくれて戀を忍ばむ　權中納言長方卿

○百首歌

萬代 續後拾春上 はしたかのはがひの山を朝ゆけば飛火の原に雉子鳴くなり　信實朝臣

○春歌中

萬代 さいたづままだうら若き三吉野の葭隱れにきゞす鳴くなり　忠度朝臣

○屛風歌

煙たち雉子しけなく山里のたづぬる妹が家るなりせは　前大納言公任卿

○家集春の歌、きゞすを

我が宿のときはの里に駒とめて朝たつきじもねには鳴くらむ　小辨

○家集春歌、雉子を

名にし負はば常磐の里に鳴く雉子朝たつことにあらじとぞ思ふ　前中納言匡房卿

○家集、あさひのきじ

春のくることや嬉しき茜さす朝日が野べに雉子なくなり　同

○女の本へつかはすとて

片野なるなよの雉子の一夜にも一つがひにはあらじとぞ思ふ　大江匡衡朝臣

○寶治二年百首雜歌中、秋風

梓弓はるのきゞすをえてだにも人の心にいるよしもがな　前中納言基良卿

○建保三年名所百首

淺緑草葉もえいづる春日野に妻やこもれる雉子鳴くなり　正三位家衡卿

○家集、戀の心を

假初に見てしとだちを立ち忍び片野の雉子のし羽うつなり　如願法師

○六帖題

新六二 つたへきく今しも袖のぬるゝかな野火けつ雉のはねの雫に　光俊朝臣

○寄託戀
つれもなき人の心をとりしばにこがねの雉子つけえてしがな　源仲正

○家集、春雉
朝霞まだたがときもまちつけずすゞろだちして鳴く雉子かな

喚子鳥

○題しらず
萬九 瀧の上のみふね山よりあきつのにきなき渡るはたれ呼子鳥　讀人しらず

○詠鳥
萬十 春日なるはがひの山ゆさほの内へなきゆくなるは誰喚子鳥　人丸

○題しらず
萬一 やまとにはなきてかくらむ呼子鳥きさの中山宵ぞこゆなる　高市連黒人

○御集、喚子鳥を
萬代 青丹よしならの山なる喚子鳥いたくな鳴きそ君もこなくに　鎌倉右大臣

○文應元年七社百首
おしなべて木の目も春の片岡に若菜つめとや人よぶこ鳥　民部卿爲家

○百首御歌
新續古春下 なけやなけ忍ぶの山の喚子鳥つひにとまらむ春ならずとも　順徳院御製

同上 まきもくの檜原の山の喚子鳥花のよすがにきく人もなし　土御門御製

○家集
朝露（霧イ）にしとゞにぬれて喚子鳥かみなび山に（三舟の山に萬）なき渡るなり（わたるみゆ萬）　赤人

○布引百首御歌
引布の瀧見よとてや喚子鳥この山なかに絶えずなくらむ　法親王澄覺

○家集
音なしの山にこそゆけ喚子鳥よぶとは人にきかすべしやは　相摸

常よりもおはせの山の喚子鳥聲なつかしく聞ゆなるかな　顯仲朝臣

人めのみもる山にすむよぶこ鳥忍びに誰をまつ音なるらむ　中務

○家集、もろ山にて
人めもろ山になくなる喚子鳥忍びに誰か相答ふべき　能宣朝臣

○建長八年百首歌合
あたら夜を誰にたのめて月影のもろ山に鳴くよぶこ鳥かな　藤原伊嗣朝臣

○家集
堀百
東路の勿来の關のよぶこ鳥なににつくべき我が身なるらむ　俊頼朝臣

○久安百首
ゆきやせむ行かずやあらまし東路の勿來の關に喚子鳥かな　待賢門院堀川

○同
足引の山の山彦こたへずば友よぶこ鳥たれとなかまし　花園左大臣家小大進

○俊頼朝臣家集歌
散木戀上
おしなべて答へぬ山の山彦をうはの空にもよぶこ鳥かな　讀人しらず

○家集、よぶこ鳥
友もなき雲居の山におのれのみうはの空にもよぶこ鳥かな　六條院宣旨

○堀川院御時百首
人かげもせぬもの故によぶこ鳥何とかゞみの山になくらむ　權中納言師時卿

小夜更けていはせの森のよぶこ鳥山彦のみぞ答ふべらなる　權僧正永縁

○五社百首
思ふ事いはせの森のよぶこ鳥哀れしられ（れらイ）む人のきけかし　皇太后宮大夫俊成卿

人の思ひたゞすの森の喚子鳥心の隙（隔イ）はそらにしるらむ

○千五百番歌合
なほさそへ位の山のよぶこ鳥昔の跡のたえぬほどをば　同

こぬ人をうらみやすらむよぶこ鳥しほたれ山の夕暮のころ　二條院讃岐

喚子鳥啼くねぞいとゞ哀れなる柞の森の暮方の空

○百首歌
くる人もなきもの故によぶこ鳥誰をあらしの山になくらむ

○題しらず
萬十
我がせこをならしの山のよぶこ鳥君よび返せ夜のふけぬとに（きイ）　赤人

○百首歌
あしふきのこやてふ方に宿からむ人よぶこ鳥聲もひまなし　前中納言定家卿

たづきなきみののを山の喚子鳥まづは一つの惠みなりけり　民部卿爲家

○建保三年名所百首
六二 名にし負はばあはでの森の喚子鳥うきはためしの夜半の一聲　俊成卿女

○題しらず
六二 きくからにもゆる歎きは山しろの岩田の杜に鳴く喚子鳥　讀人しらず

六二 みな月のならしの山の喚子鳥おほぬさにのみ聲の聞ゆる

六二 津の國の待兼山のよぶこ鳥などいまはとはいふ人もなき

後集 我がせこが衣たつたの山なかにうらがなしくも喚子鳥かな

○延喜十三年三月亭子院歌合
あかずして過ぎ行く春を喚子鳥よびかへしつゝときても告げなむ

○家集
駒なづむ木曾のかけぢの喚子鳥たれともわかぬ聲聞ゆなり　西行上人

○稲荷社歌合、喚子鳥
夜を殘すねざめに誰をよぶこ鳥人も答へぬ東雲の空　建禮門院左京大夫

雲雀

○題しらず
萬二十 雲雀あがる春べと更になりぬれば都も見えず霞たなびく　中納言家持卿

○天平五年正月二十五日詠
萬十九 うら〳〵にてれる春日に雲雀あがり心悲しも獨りし思へば　同

○保安二年に長實卿歌合、雲雀
雲雀あがる時にしなれば吉野山そことも見えず霞たなびく　修理大夫顯季卿

○百首歌
ひばりあがる春の野澤の朝綠そらに色こきむら霞かな　慈鎭和尚

○春五十首歌中
袖たれて荒田のくろにゐぐ摘めば雲雀は雲に打ち揚りつゝ　權大納言實宗卿

○五十首歌
わかな摘むあら田のおもの夕霞わくる袂にひばりおつなり　從二位家隆卿

○六百番歌合、ひばり
片山の霞もふかき木がくれに朝日まつ間のひばり鳴くなり　後京極攝政

○同
春ふかき野べの霞の下風にふかれてあがる夕ひばりかな　慈鎭和尚

○同
住み馴るゝとこを雲雀のあくがれて行方もしらぬ雲にいりぬる　大藏卿有家

○同
子を思ふすだちのをのを朝夕に揚りもやらず雲雀なくなり　寂蓮法師

○同
雲に入るそなたの聲をながむれば雲雀落ちくる曙の空　隆信朝臣

○御集
萌え出づる草葉の露やをしからむ燒野にかへる夕雲雀かな　慈鎭和尚

○百首歌
ながめやる野べの霞のおち草に聲かすかなる夕雲雀かな　安嘉門院四條

○式部卿親王家十首歌
春の野にあがる時のみ聲はして草にはなかぬ夕雲雀かな　參議爲相卿

○千五百番歌合
あはれにも空に囀る雲雀かな芝生のすをば思ふものから　皇太后宮大夫俊成卿

庭の面はのらとあれぬる古鄕のまやのあまりに雲雀おつなり　後鳥羽院宮內卿

つくゞゝと霞にくらす野べの庵の庭の菫にひばりおつなり　家長朝臣

○同
はるゞゝと飛火が原を見渡せば霞と共に雲雀たつなり　法橋顯昭

○建長八年百首歌合
けふも猶行きてまたみむ雲雀たつをかたの原の春の景色を　右近中將具氏卿

○三百六十首
道柴もけふは遙々なをみはらおりゐる雲雀かくろへぬべみ　好忠

○百首歌
野べみればわくる雲雀の通ひ路も又隱れなし秋の燒原　寂蓮法師

○元久元年詩歌合、水郷春望
ひばりたつ美豆のうへ野に詠むれば霞ながるゝ淀る川波　鴨長明

○嘉祿四年百首、雲雀
靑み行く野べの霞のなかぞらに揚りもやらずひばり鳴くなり　民部卿爲家

苗代

○天慶五年內侍督屛風
足引の山の櫻のいろみてぞをちかた人も種はまきける　貫之

○六帖題、春の田
新六二 高ねには櫻もさきぬ小山田や種まく程になりぞしぬらし　衣笠內大臣

○御集
苗代の水かけ靑み渡るなりわさ田のなへの生ひいづるかも　花山院御製

○應和三年七月一條攝政家歌合
鴈鳴きてうちつみ渡る稻むらの秋の種こそ春にまくらめ　讀人しらず

○久安百首
賤の男が小田の苗代しめはへつ室のはやわせ種かしつらむ　前參議親隆卿

○堀川院御時百首歌、苗代
秋かりし室のをしねを思ひ出でて春ぞたな井に種をかしける　俊頼朝臣

そろゐ（くわゐイ）生ふる野澤の荒田うち返し急げる代はむろのたね（めイ）かも　隆源法師

しめはふる山田の小田の苗代に雪げの水を引きぞかけける　顯仲朝臣

○仁安三年二月無動寺歌合、苗代
判者俊頼其後
やせ川を瀨々の非堰にせき留めて水ひきかくる小野の苗代　隆實法師

としのはにつくるますだの池水と我が苗代にいはひてぞひく　讀人しらず

○家集
靑柳のいとうち亂るあら小田の苗代水は絕えじとぞ思ふ　能宣朝臣

○屏風に二月田の神まつる所

あら小田の苗代水の水上を返す〳〵もいのる今日かな　同

○家集、和歌浦にたねまくを見て

わかの浦に種まく賤ぞ哀れなる刈穗のほども有り難きよに　前大僧正行尊

○堀川院御時百首

賤のをが苗代（の堀）かきをあせ置き（せきイ）て今ぞたな井に種おろしつる　中納言國信卿

○文治六年五社百首

しめはふる苗代垣のけしきにてそ（セイ）へむ田面の程ぞしらるゝ　皇太后宮大夫俊成卿

賤がせく苗代水の流れまでなにはわたりは心ありけり

たのもしな御手洗川をせきかけてみしめはへたる御田（とイ）代の種

○家六十首歌中

春深き小田の澤水せきとめて草刈りいるゝ賤が苗代　參議爲相卿

○文應元年七社百首

みしめ引くみと代小川の苗代にまづせきかくる賀茂の川水　民部卿爲家

○家集、文永元年春歌中

苗代に紙谷川をせきかけてきびの山田はをひをひくなり　權僧正公朝

○中務親王家春歌、苗代

むらきみは天のあなたの苗代に神のくたせる種おろすらし　同イ

○十題百首、大忌祭

龍田川廣瀨に深く任せてぞ苗代水も豐かなりける　寂蓮法師

○家集百首

苗代にこそ引き捨てし忘れ水猶せきかくる春のをやま田　源仲正

○題しらず

萬十四 苗代のこなぎが花を衣にすりなるゝまに〳〵あせる悲しさ　讀人しらず

○千五百番歌合

苗代にやつるゝ賤があさ衣こなぎが花のすりがひぞなき　野宮左大臣

○六帖題御歌、なぎ

ゆきてはや衣にすらむ苗代のこなぎ花さく時もきぬらし　中務卿みこ鎌倉將軍

○百首歌中

こほりとけし山の雫をせきかけて苗代水にさゞ浪ぞたつ　土御門院御製

苗代の田面にはゆるしめのをの沉めば沉むひく人はなし　同イ

○建保四年百首御歌

山風の色ふきおろす櫻田の苗代水を花にせきつゝ　光明峯寺入道攝政

○建保三年名所百首

早苗とる田子のうら人夏かけて苗代水にいりえせくらし　従二位家隆卿

○百首歌、苗代

おしなべて苗代水にしめはへて天つみ神に祈るたみかな　同イ

山里はまがきの小田の苗代にかけひの水をまかせてぞみる　同イ

○百首歌

けふきけば井出の蛙もすだくなり苗代水をたれ任すらむ　源重之

○六帖題

新六二　かはづ鳴く井出の荒小田しめはへて誰苗代に思ひ立つらむ　従三位知家卿

○建長三年毎日一首歌中

春雨に雪げもまさる山水の流れに急ぐ小田の苗代　民部卿爲家

○同八年毎日一首中

山がつの小田のあらすきひき返し流れもやらぬ薄冰かな　同イ

○同八年毎日一首中

こぞいれし水のふる跡ほりあげて賤が垣根に急ぐ苗代　同イ

○正嘉二年毎日一首中

苗代の頃までむすぶ春の霜たみのこゝろをいかゞなげかぬ　同イ

○春田

新六二　みちぎはの畦の園ひにしめさしてたなゐの種は早蒔きにけり　同イ

○貞應三年一首、苗代

水たむる春の山田にながれきて庵白妙にちる櫻かな　同イ

○嘉元四年十月當座百首、苗代

なは代の田面の畦にさす竹のはかなきふしも春は見えつゝ　爲實卿

○建長七年顕朝卿家續千首歌

なはしろのしめ園ひする小山田に又ひくものは畦の細道　信實朝臣

○千五百番歌合
○正治二年百首
○百首歌
○家集
○蛙
○六百番歌合、蛙
○永久四年百首、蛙

春田

里とほみ生野の末をみわたせば霞にかへす春のあらを田　参議雅經卿

ますらをがこなての道にいぐしたて水口祭る程はきにけり　源師光

春雨に山田のくろを行く賤のみのふき返す暮ぞ寂しき　後鳥羽院御製

蛙

萬十 蛙なく吉野の川の瀧の上にあせみの花ぞさきて散りける　赤人

六帖 玉河のひとせもよきずなく蛙この夕かけは惜しくやはあらぬ　讀人しらず

同 音羽川おつる白珠しらねども蛙の聲をしめてきにけり

諸聲にいたくな鳴きそさもこそはうきぬの池の蛙なりとも　前大納言兼宗

まだとらぬ早苗の末はなびくなりすだく蛙の聲のひゞきに　慈信和尚

庭のおもは一つにみゆるうき草をこゝぞ汀と蛙なくなる　寂蓮法師

漕ぎすぐる舟さへよどむ心ちして堀江の蛙聲しきるなり　中宮權大夫家房卿

堀川後 萬代雜 たかせ舟のぼる堀江の水を淺み草がくれにて蛙なくなり（なく蛙かなイ）　神祇伯顯仲卿

同 春ふかみさ（きイ）やまの池のねぬなはの苦しげもなく蛙なくなり　仲實朝臣

時もあれやみなぶち山を朝ゆけばこのもかのもに蛙なくなり　俊頼朝臣

谷川の淺き瀬毎にみがくれて妻よぶ蛙こゑきこゆなり　藤原忠房

いか計りいぶせかるらむこやの池の水草のもとにすだく蛙は　源兼昌

○建久四年六月一句百首、春歌
みくりはふ汀の眞菰うちそよぎ蛙なくなり雨の暮方　前中納言定家卿

○正治二年百首
川風は井出のうき草ふきわけてよるべの浪に蛙なくなり　從二位家隆卿

○千五百番の歌合
春雨のふるの山田をきてみれば鳴のふし所に蛙なくなり　家長朝臣

○百首歌合、蛙鳴苗代
苗代の水のうきねや任すらむ蛙の聲ぞあぜづたひゆく　寂蓮法師

○建長八年百首歌合
小山田によるなく蛙苗代の水のしたにも日やさますらむ　信實朝臣

○六帖題
新六三
つとめすとねもせで夜をあかす身にめかる蛙の心なきとぞ　光俊朝臣

新六二
はるの中はなほ水寒き谷かげのいはのうつぼに蛙なくなり　信實朝臣

○家集
春ふかみ花散りかゝる山の井の古き清水にかはづ鳴くなり　鎌倉右大臣

○永仁元年楚忽百首
徒らに啼くや蛙の歌ぶくろおろかなる口も思ひいればや　藤原爲顯

○百首歌、蟲五首中
はかなしや筒井の蛙われぱかりほかをもしらず淺き心は　同

○家集、山吹
山吹のしづえの花に手をかけて折知り顏になく蛙かな　源仲正

○題しらず
萬三
今日もかも飛鳥の川のゆふさらす蛙なく瀬の清くあるらむ　上古麿

○同
萬十
ゆふさらす蛙鳴くなり三輪川の清き瀬の音をきくはしよしも　讀人しらず

里イ
○春
○家集

萬十 草枕旅にもの思ふわれきけば夕かたまけてなく蛙かも

萬四 いへ人にこひすぎめやも蛙なく和泉の里にとしのへゆけば　石川廣成

現存六 夏ちかくなりにけらしな山しろの和泉の里に蛙なくなり　従一位眞敎卿

澤水に蛙の聲は老いにけりおそくやうたむ春の小山田　平兼盛

夫木和歌抄卷第五 終

夫木和歌抄　巻第六

春部六

題　菫菜　杜若　款冬　藤花　躑躅
暮春　三月盡

菫菜

○堀河院御時百首歌、菫

昔見し妹が垣根はあれにけり茅花まじりの菫のみして　権大納言公實卿

箱根山薄紫のつぼ菫ふたしほ三しほたれか染めけむ　前中納言匡房卿

草枕たび寐をしつゝ獨りつむ伏見の小野に生ふるすみれは　師時

老いぬれば花の都にありわびて山に菫をつまむとぞ思ふ　権僧正永縁

思ふどち雙の岡の壺すみれ羨ましくもにほふ春かな　前齋宮河内

雲雀あがる飛火の原に我ひとり野もせにさける菫をぞつむ　仲實經臣

○六百番歌合、野遊

打ちむれて菫つむ間にとぶひ野の霞のうちに今日もくらしつ　正三位季經卿

○家集

散木

菫つむ賤のおふさにしなへたる形見にだにもこふと聞かばや　俊頼朝臣

○千五百番歌合
松陰にさけるすみれは藤の花ちりしく庭と見えもするかな　皇太后宮大夫俊成卿

○百首文治二年楚忽
續後拾春下
春雨のふる野の道の壺菫つみてを行かむ袖はぬるとも　前中納言定家卿

○千五百番歌合
いそのかみ古野の里をきてみればひとり菫の花さきにけり　小侍従

○正治二年百首
懐しき妻もこもれり同じくはこゝのへにてや菫つままし　同イ

○家集、古郷菫
菫咲くならの都の跡とてはいしずゑのみぞかたみなりける　源仲正

○題しらず、懐中
けふまつる大原野べのつぼ菫君諸共につまむとぞ思ふ　讀人しらず

○親子内親王家歌合、菫
ひまもなく菫の咲けるしめの中はにひ紫に見え渡るかな　中務

○すみれ
現存六
菫咲く岩田の小野にしめささむゆき來の人のつゝまくも惜し　藤原經平朝臣

○文應元年七社百首
ゆく春のかたみがてらに山しろの岩田の小野に菫つむなり　民部卿爲家

○千首歌
菫つむ岩田の小野のおのれのみ草葉の露を袖にかけつゝ　同イ

○貞應三年百首、菫菜
つめやなほ岩田の森のした草にまじる菫菜の色ぞことなる　同イ

○千首歌
庭草のしげみが下の壺菫さすがに春のいろにいでつゝ　同イ

○祇園社百首、菫菜
よもぎのみ茂れる庭となるやとは菫のみこそ稀に見えけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○百首歌、杜間菫菜
色深き信田の森のつぼすみれ千重のしづくや袖にそむらむ　寂蓮法師

○家集、菫菜
たれならむ荒田のくろに菫つむ人は心のわかなかるべし　西行法師

○久安百首
紫のねはふよこ野のつぼ菫まそでにつまむ色もむつまし　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首

みくま野のはまゆふ分けてさく菫重ねて色の睦しきかな

古のまがきの野路のつぼ菫むかし戀ひてやつゆけかるらむ

すみれさく遠里小野の朝露にぬるとも摘まむ旅のかたみに

○文應元年七社百首　民部卿爲家

はるばると遠里小野のつぼ菫たれが爲とか人のつむらむ

花の色の紫野なるつぼ菫くさのゆかりに誰かつむらむ

藤のはな同じゆかりの春日野にまだ咲かぬ間は菫つむなり

古里の志賀のみやこのつぼ菫摘むやむかしのかたみなるらむ

○建保四年百首　從二位家隆

いざや君袖ふりはへてすみれ草紫野ゆきしめ野ゆきみむ

○文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿

むらさきの野べの芝生の壺菫かへさの道もむつまじきかな

○承久二年四季百首　前中納言定家卿

菫つむ野べの霞に宿とへば衣をうすみ月はもりつゝ

○建久元年一句百首　同イ

思ふどち春のかたみに菫つむ野原のまとゐ雨そそぼふる

○文治三年百首　同イ

しばしとて出で來し庭もあれにけり蓬の枯葉すみれ交りて

○千首歌　民部卿爲家

武藏野や草のゆかりの色ながら人にしられず咲く菫かな

○正治二年百首　正三位知家卿（經イ）

紫のゆかりと見えてむさし野の菫は色にあらはれにけり

○喜多院入道二品親王家五十首　禪性法師

その色に匂はぬ草もむつましきむさし野にさく壺菫かな

○嘉元三年禁忍百首　爲實卿

むさしのや菫をだにも尋ね見むかぎりもしらぬ色や深きと

○同四年十一月鶯座百首
必ずと契らぬ人のはな菫たれ故一夜ゆるすかりねぞ　同イ

○楚忽百首、菫を
萬八
七夕も菫つみてや天の川あきより外にひと夜ねぬらむ　參議爲相卿

○家集春歌中、菫
萬八
つばなぬくあさぢが原の壺菫今さかりにもしげきわが戀　中納言家持卿

○題しらず
萬八
春の野に菫つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける　赤人

○長歌
萬十七
さくら花　散るかほどりの　まなくしば鳴く　春の野に　菫をつむと　白たへの　袖折りかへし　くれなゐの　あかもすそひき　をとめらは　思ひみだれて　讀人しらず

杜若

○堀川院御時百首御歌、杜若
はなかつみまじりてさける杜若誰しめさして衣にきぬらむ　前齋宮河内

○同
萬代春下
かりびとの衣するてふ杜若花さく時になりにけるかな　基俊

諸共にふしみの里のかきつばた心ばかりは隔てざらなむ　太皇太后宮肥後

にほどりのすだくみぬまの杜若ひとへたつべきわが心かは　俊頼朝臣

紫の色にぞそまる杜若いけのぬなはの遣ひかゝりつゝ　權中納言師時卿

○家集
東路のいかほの沼のかきつばた袖のつまずり色ことにみむ　顯仲朝臣

○詠草
萬七
常ならずひとくにやまのあきつ野の杜若をし夢にみるかも　讀人しらず

萬七　仕吉のあさ澤小野の杜若きぬにすりつけきむ日しらずも

○文治六年五社百首
紫の色はふかきをかきつばた浅澤小野にいかでさくらむ　皇太后宮大夫俊成卿
こなぎつむあがたの井どの杜若花の色こそ隔てざりけれ
こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひをまばらなりとや

○久安百首
家集　こやの池の汀にたてる杜若浪のをればやまばらなるらむ　清輔朝臣

○御集
萬代　こやの池のあやめにまじる杜若花ゆゑ人にしられぬるかな　後鳥羽院御製

○元應元年七社百首
思ひやるいつきの宮はあとふりて花咲き殘るかきつばたかな　民部卿爲家
跡もなく志賀の都はふりにしをそれかとさける杜若かな

○建久元年百首
風雅春下　おもだかや下葉にまじる杜若はなふみわけてあさる白鷺　前中納言定家卿

○山家百首、水邊杜若
誰かすむ山下水のかきつばたむべえび染めの色に咲きけり　源仲正

○六帖題
新六六　沼水の底はへだてゝなかりけり岩かきつばた影うつせども　信實朝臣
奥山のみこもり沼の杜若へだて果てたる我が世なりけり　光俊朝臣

○建長七年に顯朝卿家千首歌
杜若咲きてや花のへだつらむとだえかくるゝなごのつぎ橋　同ィ

○稻荷社歌合、古池杜若
あせにける姿の池の杜若いく昔をかへだてきぬらむ　建禮門院右京大夫

○家集
廣澤の汀に咲けるかきつばたいく昔をかへだてきぬらむ　西行法師

○杜若
現存六　いそのかみ古河のべの杜若はるの日かずはへだてきにけり　讀（二條院讃岐女現存六）人しらず

○文治二年百首
關路こえ都こひしき八橋にいとゞ隔つるかきつばたかな　前中納言定家卿

○百首歌、杜若
杜若にほふ川邊のたび衣この下かげもたちぞやられぬ　從二位家隆

○天暦元年七社百首
やつ橋のむかしのあとの杜若おなじ心にこひわたるかな　民部卿爲家

○千首歌
やつはしの汀にさける杜若昔の色をこひわたるかな　同ィ

款冬

○題しらず
萬八
山吹のさきたる野べの壺菫この春雨にさかりなりけり　山田女王

○同
萬十九
いもににる草とみしよりわがしめし野べの山吹誰か手折りし　讀人しらず

○十市皇女の薨の時
萬二
山吹のさきたる山の清水をばくむにゆかめど道のしらなく（にほひしィ）　高市皇子

○題しらず
萬十九
欵冬の花とりもちてつれなくもかれにし妹を忍びつるかも　中納言家持卿

○六五
相思は六
までどこぬ君をやねたく山吹のいや初花のみまほしみせむ（く六）（け六）　讀人しらず

○寛和二年六月内裏歌合に欵冬を
續後拾春下
蛙なく井出のわたりに駒なべてゆくてにもみむ山吹の花　藤原惟成

○天暦十一年二月麗景殿女御與家歌合、山吹
のどかなる春もやあると尋ねつゝこえてをりみむ山吹の花　兼盛

貫方集　萬代雜上
衞士がゐしひたきにみゆる花なれば心のうちにいはで思ふか

このうたは圓融院御位の後貫方朝臣馬命婦と物がたりし侍りける所に
山吹のはな屏風のうへよりなげこさせ給ひければよみけるとぞ云々

○御かへし
○建保三年名所百首歌
○百安御歌
○堀河院御時百首
○五百首御歌
○建長八年百首御歌
○御集、山吹を
○御集、欵冬を
○家集、五色歌、黄
○家集中
○永久四年四月中院入道右大臣家の歌合、山吹
○文治六年五社百首
○嘉元元年百首御歌、山吹
○山吹
○建暦二年二十首
○寛喜元年女御入内御屏風

同
みかきもりほかのひたきの花なれば心を留めて折る人もなし　圓融院御製
ことに出でていはぬ色とやみなせ川かはらじ春の山吹の花　順徳院御製
風雅春下
かはの瀬に秋をやのこす紅葉ばのうすき色なる山吹の花　同イ
續後拾春下
蛙なくみつの小川の水きよみそこにぞみゆる山吹の花　大納言師頼卿
續後拾春上
春雨にぬれつゝをらむ蛙なくみつの小川の山吹のはな　後鳥羽院御製
ゆくはるの日數もしるく移ろひぬみつの小川の山吹の花　衣笠内大臣
もろこし
唐土の人にみせばややきがねのこがねの色にさける山吹　花山院御製
やきがねの色ににほへる山吹ははかりもしらぬ花の色かな　權中納言公實卿
枝かはす岸の山吹花ちりてこがねの露に浪ぞこえける　前中納言定家卿
くちなしの色とぞみゆるみちのくのいはでの里の山吹の花　前中納言匡房卿
來てみればくちなし色に咲きにけりいはでの里の山吹の花　讀人しらず
欵冬の花をば冬とききしかど春の夕べの風にこそさけ　皇太后宮大夫俊成卿
山吹のたがあやまちに咲きそめて冬をばよその色となしけむ　龜山院御製
六二
春めきぬ今は伊吹の春邊にもまだしかりける山吹のはな　讀人しらず
家集中
色にいでて移ろふいろをとまれともえやはいぶきの山吹の花（春家）　前中納言定定卿
谷川の春もちしほの色そめて深きやよひの山吹の花　同イ

○家集、春歌中

音もせで谷隠れなる山吹はたゞくちなしの色にぞありける　重之

○家集

さもこそは深き谷にはさかざらめ色さへ淺きひとへ山吹　和泉式部

○長歌

萬十九

ひきよぢて　折りもをらずも　見る毎に　心なきむと　しげ山の　谷べにおふる　山ぶきを　宿に引きうゑて　朝露に　匂へる花を　讀人しらず

○建長八年百首歌合

我が宿に引きうゑてみむ茂山の露に匂へるやまぶきの花　前大納言顯朝卿

春くるゝ時しもをのが盛りにてなどくちなしの山吹の花　信實朝臣

思ふこといまはことばのみち絶えて心にたがふ山吹の花　光俊朝臣

○家集中

春來れば咲きけるものを山吹のくきをつきて（たしかきてイ）の花につゞりし　源仲正

○山吹のいみじき枝を折りてみすにさされたるを

雲のたつ八重山ぶきの花盛りこゝのへ人に折らせてしがな　平祐擧

○右大臣家五十の賀屏風に

九重に咲かぬばかりを我が宿のふるき（かイ）ときはの山吹の花　元輔

○屏風にやり水のつらに山吹水鳥あり

家集

水鳥のながるゝ川の山吹はかげをのみこそいとふべらなれ　惠慶法師

いひやらむ方のなきかな池水のみぎはにさける八重の山吹　小辨

この歌家集云右の御歌合の比汀の岸の山吹と云ふ題を給はりてかれな

かつれひらよみわづらひけるを試みにとて云々

○御集、款冬を

わが宿の八重の山吹露重みうちはらふ袖のそぼちぬるかな　鎌倉右大臣

○河邊款冬
山ぶきの花の雫にそでぬれて昔おぼゆるたまがはの里　同イ

○百首歌
過ぎがてに心ぞうつる玉川のかげさへ匂ふ山ぶきのはな　前中納言定家卿

○寛喜元年女御入内御屛風、川邊款冬盛開
さほ川の水の流れもさかえつゝ波の花さく岸のやまぶき　西園寺入道前太政大臣

款冬のはなさくちよと答ふなり聲やかくるゝたけ川のなみ　従二位家隆卿

雨そゝぐ岸のやまぶき露おちて千世のかずそふ瀧の白玉　正三位知家卿

○喜多院入道二品親王家五十首
山吹の花のうつれる水の色のすめるや千代のためしなるべき　野宮左大臣

○光臺院入道二品親王家五十首、川款冬
新拾春下
ちりかゝる山吹のせにゆく春の花に棹さす宇治の川をさ　西園寺入道太政大臣

かざしをる八十氏人の麻衣ぬれて小島のやまぶきの花　常磐井入道太政大臣

○家集
立ち歸り昔の袖やしをれけむ昨日みつ野の山吹の花　従二位家隆卿

この歌長家朝臣集云貞應二年三月八幡臨時祭四位の加陪従つとめ侍りし次の日家隆卿本より申しつかはしけると云々

○返し
いはぬ色の心をくみてあはれ（へイ）とも君ぞみつ野（川イ）の山吹の花　家長朝臣

○嘉元四年十月當座百首、山吹
花の色はすゑの白きをかくるまで（にイ）散らで久しき庭の山吹　爲實朝臣

○貞應二年百首、春夕
見よかしな三月の庭の木の下にやまぶき咲けるゆふぐれの色　民部卿爲家

○嘉禄二年百首、岸山吹
おそくとくみとりわかれし青柳のした枝にまじる岸の山吹　同イ

○文應元年七社百首、賀茂
うた人のかざしや折りてとゞめけむ御手洗川の山吹の花　同イ

○日吉
朝風の山吹の花ちりにけり谷の小川ぞいろにいでゆく
同イ

○住吉
すみよしの岸の山吹忘れてはまだきにまがふ花かとぞみる
同イ

○家集、款冬
あづまぢは梅をはじめに移りきて春のおくなる山吹のはな
前民部卿雅有

○弘長元年百首
六帖 山吹のもとあらの花ぞさきにける秋まだ遠き萩のまがきに
後九條内大臣

○家集
春ふかく枝さしひぢてかみなびの川邊にさける山吹の花
躬恒

○同
日 山吹はいはぬ色にも咲きにけりあがたの井戸の里のしるべに
前大納言爲氏

○御集
山吹の花色衣さらすてふ垣ねや井出のわたりなるらむ
後鳥羽院御製

○題しらず
六帖 あをによし奈良も近しや山城の井出の山吹見にこ吾妹子
讀人しらず

○同
萬八 蛙なく神なび川にかげ見えて今やさくらむ山吹のはな（新古春下）
厚見王

○同
萬十七 鶯のきなく山吹うたかたも君が手ふれず花ちらめやも
讀人しらず

○内裏百首、里款冬
うぐひすのきなく山吹盛りにて誰をまつらむ井出のさと人
從二位行家卿

○款冬
祝部子（はふりこ）が衣の色やまがふらし神の御室の岸の山吹
正三位知家卿

○弘長元年御百首
家集 行く水はかげをぞ洗ふいはたかき御室の岸のやまぶきの花
衣笠内大臣

○千首歌
かみなびの岸の山ぶき散らぬらしいはぬ色なる瀨々の川波
民部卿爲家

なきとめぬ木末の櫻ちりはてて鶯きゐる庭の山ぶき
同

○文永二年毎日一首中
さけばかつ花だに重き山吹の枝にかゝれる春雨のつゆ
同

○同八年毎日一首中
山吹の花のまがきの春のしも年のさむさもいかでいはまし　同

○同四年毎日一首中
いはぬ色も心ぞみゆる春雨にぬれてこぼるゝ山吹の花　同

○山階入道左大臣家百首歌、川山吹
さがの山の二たびすめる大井川いはぬに見する花の色かな　同

○同
新古春下 大和物語
散りぬればくやしきものを大井川きしの山吹今盛りなり　季縄朝臣

○七百首歌、岸山吹
いたづらに咲き匂ふらし大井川みゆきにあひし岸のやまぶき　權僧正公朝

○家集
くちなしにいかゞ匂はむもゝつてのいはねの池の山吹の花　同

○建長八年百首歌合
行く春の色とはいはじ蛙なくいづみの里の山ぶきのはな　前權中納言伊平卿

これもまた誰によそへむ百敷のひとめかきほの山吹のはな　鷹司院輔

判者知家卿云人めかきほのなでしこけと云ふ古歌侍るを款冬に取りなされたるめづらしくをかしく侍ると云々

○堀川院御時百首
かはづなく眞野の池邊を見渡せば岸の山吹花咲きにけり　仲實朝臣

○同
玉の井にさけるをみれば山吹の花こそ春のひかり（かざしイ）なりけれ　俊頼朝臣

○家集
同師時
山吹の挿頭にさせばはまぐりを井出のわたりの物と見るかな　同

○家集、伏見にて山吹をみて
おる波のうしろめたさに目もかれず立ち居伏見の山吹の花　同

○文永四年閏三月顯輔卿家歌合
玉の井の汀にさける山吹をひとなみ〳〵にみつる今日かな　藤重定

○里款冬
里の名もしのぶときけば款冬の花さへいはぬ色に咲きけり　光俊朝臣

藤花

○延喜御時内裏御屏風

藤の花あたに散りなば常磐なる松にたゝへるかひやなからむ　貫之

○承平八年右大將家賀屏風歌

古來歌　名殘をば松にかけつゝ住の江のはるの港にさけるふぢなみ　同

○延喜七年よみてたてまつりける内裏御屏風歌

いままでに殘れるきしの藤浪は春の港のとまりなりけり

○延喜十三年三月亭子院歌合

風ふけばおもほゆるかな住の江の岸のふぢなみ今や散る（さくイ）らむ　兼覽王

○天德四年內裏歌合

われ行きていろみるばかり住吉の岸の藤浪をりなちらしそ　兼盛

○弘長三年住吉

住の江の岸におふてふ草はあれど春を忘れずかゝる藤浪　民部卿爲家

○同

沖津風ふくとはなしに住の江の松にかゝれる春の藤浪　前大納言爲氏卿

○同

ながめやる難波入江の夕風によせてかへらぬ春の藤浪　藤爲顯

清見潟きしにかゝりてさく藤のなみもせきとや人留むらむ　參議爲相卿

路次記云きよみが關をすぐるに岸のほとりに藤の花の咲きたるを見て

云々

○右大將定國卿家屏風に

家　にごりなき清瀧川の淸ければ底よりさくとみゆる藤なみ　忠岑

○題しらず

萬三　藤浪の花はさかりになりにけり奈良の都を思ほせやきみ　讀人しらず

○題しらず

萬十七　いもが家にいくりの森の藤の花いま來む春も常かくしみむ　同

○布勢水海船泊多の浦の四藤首（祜イ）

萬十九　藤浪のかげなる海のそこ清みしづく石をも玉とぞわれみる　中納言家持卿

萬十九　田子の浦の底さへ匂ふ藤なみをかざしてゆかむみぬ人の爲　内藏繩丸

聊かに思ひてこしを田子の浦にさける藤みて一夜へぬべし　久米廣繩

藤浪を假庵に作りあさりせる人はしらぬに海士とかみらむ　久米繼麿

○越中國の任のとき

萬十八　あすの日のふせの浦まの藤浪にけだしきなかず散らしてむかも　中納言家持卿

○題しらず

六五　萬十　藤波のさく春の野に這ふ葛のしたえのこひは久しくもあり　讀人しらず

○寶治二年百首、松上藤

家　吹きかゝるふせの浦わの藤波にうつる影のみまづは見えつゝ　衣笠内大臣

○百首御歌

田子の浦の岩根にかゝる藤波は滿ちくる潮に聲をからなむ　崇德院御製

たごの浦に藤咲きぬらし磯の松梢そめゆく紫の浪　慈鎭和尚

○貞應三年百首、藤花始綻

ゆく春のかたみにかゝる藤浪の色見えそむる田子の浦松　民部卿爲家

○堀川院御所百首

紫のしき浪よるとみるまつに（ゆるイ）（すイ）田子の浦ふぢ花咲きにけり　仲實朝臣

○家集

現存六　又もこむ春をぞ契るわがさちや後瀬の山のふぢの下風　祝部成茂

○同

むらさきに春は藤波たつた川これも神代の水のいろかは　鴨長明

○同

紫の風ぞふきける藤の花そらよりおつる布引の瀧　源道濟

○寶治二年百首、松上藤

新後撰春下　歌苑抄　したえ(い)み洗ふとみしを浦松の梢にかゝる藤波の花　信實朝臣

○海邊藤花

春風はふくとも見えで高砂の松のこずゑに懸るふぢなみ　平忠盛朝臣

○白河院にて藤花を翫ぶといふことを

白河の名にぞたがへるけふ見れば岸の藤浪むらさきにして　能宣朝臣

うしろめた末の松山いかならむまがきの島をこゆるふぢ波

この歌はなしつぼに和歌えらぶとてこれかれ侍るにかたはらなる内侍のかみさうしつぼねより藤の花を物よりうち出して侍りければよめる

と云々

○家集、障子繪に島のきしをめぐりて藤花有之

いく入（しほ）かそめてかくらむ色めでぬまがきの島を岸の藤浪　祭主輔親

○題不知

六二うなゐごが髮ふりしつる藤の花袖なつかしく思ほゆるかな　讀人しらず

○家集春歌中

ふか緑はやまの色をおすまでに藤の村濃は咲きみちにけり　惠慶法師

○左大將家障子の繪にあかしのうらのかた書きたる所

こぐ舟にけさをりかけし藤浪は夜さへ見ゆる物にぞ有りける　重之

○春歌、御集

あま人はかざしてかへる藤波のかげなる海に春や殘れる　後九條内大臣

○的弓のふりうに大井川を作りて松に藤のかゝる所

家集たち歸りみてを渡らむ大井川川邊の松にかゝる藤波　鎌倉右大臣

○御裳濯歌合

藤浪もみもすそ川の末なれば下枝をかけよ松のもゝえに　西行上人

○家集

春したふ飛鳥川原の松がえにけふさく藤の色ぞかはらぬ　鴨長明

○百首歌、藤

今日暮れぬあすかの河の藤波の移ろふ春や瀬にかはるらむ　正三位知家卿

○貞應三年百首、故郷藤

春は今あすかの里の藤の花かたみを如何にかけてとめまし　民部卿爲家

○暮春藤

くれ殘る春の日かずに咲きそめて盛りは夏にかゝる藤浪　參議爲相卿

○名所歌中
枝ひたす汀の松にさくふぢの花よりあまる宇治の川浪　同

○同
かすみゆくまきの島まつ藤さけば浮きて色そふ宇治の川浪　爲實朝臣

○北野社百首御歌
み吉野の大川のべの藤の花春くれかゝる色ぞのこれる　後鳥羽院御製

○故郷藤を
みよし野のみかきに殘る松がえに昔をかけてさける藤浪　菩提院法親王

○文治六年女御入内御屏風、人家翫藤咲きたる所
春の日の惠みもしるく見ゆるかな絶えせぬ北のいへの藤浪　三位（條イ）入道左大臣

○寛喜元年女御御入内御屏風
紫の雲のしるしの花なればたづ日も同じ宿の藤浪　前中納言定家卿

○天仁元年大嘗會
おとたかみ藤さかやまの藤の花よろづの年の數をぞちぎる　藤正方（家イ）朝臣

○大嘗會主基方御屏風、ふぢさか山に藤咲きたる所
君が代にあふかひありて紫の雲たちわたるふぢさかの山　前中納言匡房卿

○後鳥羽院の御時、松上藤
千とせふる松にかゝれる藤の花君が衣の色かとぞみる　同

○家集、みやぢ山を越え侍るとて
紫の雲と見つるは宮路山なだかき藤の咲けるなりけり　増基法師

○堀川院の時百首
柴の庵のにしのたかねの藤の花あけくれ願ふ雲かとぞ見る　權僧正永緣

（家）春きては心の松にかゝりつゝ藤の初花さきそめにけり　俊頼朝臣

○晩見藤花といへることを
紫にいくしほ染めて藤の花ゆふひさかきのはひをさすらむ　同

○家集、藤花
藤浪のよらばれぬれば紫のまきそめきたる松かとぞみる　源仲正

○藤花
（新拾春下）山たかみ松に（雲葉）かゝれる藤の花雲よりおつるなみかとぞみる　源道濟

○題しらず
（雲葉）紫のいとよりかけて咲く藤の匂ひに人やたちどまるらむ　菅原太政大臣

○千五百番の歌
太方の春の日影ものどけくて時にぞあへる藤浪の花　野宮左大臣

○百首歌
そめてほす若紫の藤衣まつもねずりのいろやわくらむ　從二位家隆卿

○藤のはなを
雲集
梢よりこえて落ち來る藤浪の井せきは松のしづ枝なりけり　俊惠法師

松しまに懸れる浪のしがらみと見ゆるは藤の盛りなりけり　上西門院兵衛

○文永二年七月七百首、浦藤
新續古春下
心あるあまや栽ゑけむ春毎に藤咲きかゝる松がうらしま　後嵯峨院御製

○家集、藤花の盛りなる松の本にして
藤浪のかゝれる松が浦にきて見るめにあかぬ蜑となりぬる　源有仲

○文永四年閏三月家歌合、藤花
波こすと人は見るらむ末の松こずゑに高くかゝる藤をば　左京大夫顯輔卿

○百首歌
藤浪の梢をこえて見ゆるかなこやあづまなる末のまつ山　左近中將公衡卿

○正治二年百首
岩代のはま松がえの藤の花これさへ誰か結びかけけむ　喜多院入道二品みこ

○新熊野百首
一しほの綠の外もいろやそふ花さくはるのふぢしろの松　安嘉門院四條

○十二首歌
續錦木（落木錦歟）
ゆく春のするはにかゝる藤しろの松に殘りて花ぞ少なき　權少僧都定意（公朝イ）

○寶治二年百首歌、松藤
雲とのみ藤咲きかゝるみやまには松の雨とや風もなるらむ　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
おとづるゝ松の雨さへかをるなり藤さく比のにはの夕風　右近中將經家卿

紫のなだかの浦の藤の花春の色にや波もたつらむ　前大納言伊平卿（顯朝イ）

ふる里のみかさの野べのみかり人かざしの藤も今盛りなり　衣笠内大臣

○題しらず
萬十
春日野の藤は散りにき何をかもみかりの人のをりてかざさむ　人丸

○建保四年百首
いろまがふ野べの藤浪袖かけてみ狩の人のかざし折るらし　前中納言定家卿

○文和九年百首、神祇　番イ
春日山たにの藤波たちかへり花さく春にあふよしもがな　同

○南海漁父百首歌合
水上にたのみはかけきさほ川の末の藤浪波にくたすな　後京極攝政

○御集、藤花
忘れめや春日の野べにくろきもて作れる宿の北の藤浪　鷹司攝政

○家集
春日山さかゆる藤にいとゞしく鶯啼きつ春の曙　俊頼朝臣

山たかみ松のこずゑのふぢ波は水なき空にたちぞかゝれる　權僧正公朝

○女御褒子女王家歌合
家
わが宿の松に久しき藤の花むらさきのには咲きやしぬらむ　藤忠見

○御集
紫の藤るがはらの花かつら松にや春のくれかゝるらむ　後九條内大臣

○六帖題、藤
新六ノ六
としをへてはふきあまたの藤の花たえぬ心の春は見えけり　民部卿爲家

○御集三百首御歌、山家夕藤
鳥かへる谷の柴はしふみわけて岡べの藤をけふや折らまし　後鳥羽院御製

○山家藤
をらすなよ垣ほにさける藤かづらくる山人の歸るかざしに　從二位家隆

○家集、春歌中
さきはへる岩根が岸の藤かづら春は過ぐれど折る人もなし　同

行く春にしがらみかけよ三吉野の大かはのべに咲ける藤なみ　同

この里は常磐の森の藤の花さきかゝりてや春をしるらむ　同

○百首歌、藤
さきかゝるうら紫の藤浪を綠にかへす松のうら風　同

○六帖題
新六ノ六
さすがなほ春の惠みやおよびけむ三笠の森の藤のすゑはに　衣笠内大臣

○正嘉三年毎日一首歌
小倉山松の藤なみ心にはかゝれどゆきて見るときもなし　民部卿爲家

○百首歌
ふだらくの岸の藤浪うちよせて早立ちこなむ紫の雲　八條院高倉

○家集中
たのむかな咲ける藤浪春をへて南のきしの日かげ照らさば　前中納言定家卿

○百首歌、藤
九重のみかきの藤の花ざかり雲居にくもの立つかとぞみる　同

○治承二年右大臣家百首
よゝの春あきの宮人をりにせよ雲居のにはに藤のさかりを　後京極攝政

○寶治二年百首、松藤
紫の雲かとみれば藤の花さき匂ふまつの梢なりけり　光俊朝臣

こゝのへの池の藤浪かけてこそ汀のまつも色まさりけれ　少將内侍

○顯季卿八條家藤の花見にまかりてよめる
吹く風にふぢえの岸を見渡せば浪は梢のものにざりける　俊頼朝臣

○延慶百首歌、藤
播磨潟ふぢえの浦にみつしほのからくて世にも沈みぬるかな　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首
藤の花くもにまがひて散るしたに雨そぼふれる夕暮の空　同

志賀の山松にかゝれる藤の花うらの小波こすかとぞみる　同

○文應元年七社百首
よゝかけて猶もさかえよ男山かざしにさける春の藤なみ　民部卿爲家

頼むかなこやねの藤は一つなるもとの誓ひをかけて待つとて　同

○千首歌
いはし水かざす雲居の藤の花よろづ世かけて神やまもらむ　同

○家集、松藤を
たけくまの松の梢に春と夏とふた葉をかけて藤咲きにけり　權僧正公朝

○西行上人すゝめ侍りけるみもすその歌合判じてつかはしけるとき
拾遺愚草下
神路山まつの木末にかゝる藤の花の榮えを思ひこそやれ　前中納言定家卿

○返しイ
○題しらずイ
○寶治元年五十首に
○家集
○六帖題、つゝじ
○長歌
○長歌
○百首歌
○三百首御歌

家集下
神路山きみが心の色をみむ下葉の藤に花し開けば　西行上人

躑躅

萬三
かざはやの三保の浦曲の白つゝじみれども寂しなき人思へば　讀人しらず
（寂しの傍に「あかずイ」）

萬二
みつゝての磯の浦わの岩つゝじもくさくみちを又もみむかも

萬九、ほそ、六帖
たくひれのさきさか山の白つゝじ我に匂はで妹にしるさむ

六六
玉藻かるおほえのくし六浦の浦風につゝじの花はさきぬらむかも

浪かゝる磯の浦曲の岩つゝじいはねばこそあれぬるゝ袂を　權僧正公朝

良玉
初瀬川きしの岩根の白つゝじしらじな人はみて戀ふるとも　後賴朝臣

新六
浪かくるみほの浦邊の白つゝじ孰れを花と見てか手折らむ　光俊朝臣

萬十三
道行かなむもあを山をふりさけみればつゝじ花匂へる少女　人丸

櫻花　さかゆるをとめ　なれをそも

萬六くみましイ
早みきたりて　立田路の　岡邊の道に　丹躑躅の　薫らむ時の　櫻花

新後拾遺下
くらぶ山木の下かげの岩つゝじ唯これのみや光なるらむ　崇徳院御製

同上
あし鴨のはがひの山の春の色に獨りまじらぬ岩つゝじかな　順徳院御製

あすか川往來の人やかざすらむ岡べのつゝじ今さかりなり　中務みこ鎌倉

○題しらず
萬七
山こえてとをつの濱の岩つゝじ我がくるまでは含みて有りまて　讀人しらず

○正治二年百首
あふ事はとをつの濱の岩つゝじいはばやしらむ思ふ心を　式子内親王

○家集、戀歌中に
わするなよとをつの濱の岩つゝじ山をこえても又歸りみむ　從二位家隆

○建保三年名所百首
新後拾春下
岩つゝじいはでやそむる忍ぶ山心の奥の色をたづねて　前中納言定家卿

春深きしのぶの山の岩つゝじいはねど野邊にしるき比かな　從二位範宗卿

○家集
蜻蛉日記
陸奥のちかの浦にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし　右近大將道綱母

この歌は或人道の國にをかしき所々を繪に書きて上りてみせ侍りければよめると云々

○ふしみに侍りける比經信卿のもとにつかはしける
梅櫻散りはてぬればわが宿のつゝじの花ぞ盛りなりける　俊綱朝臣

○かへし
花の散る慰めにせむ菅原やふしみの里のいはつゝじみて　大納言經信卿

○賴季卿觀音寺にて寄躑躅戀といふことを
否ならばいひも放たでもち躑躅やにかけたるはひこしろへとや　俊賴朝臣

○堀川院御時后宮歌合
霞たつふたむら山の岩つゝじ誰がをりそめしから錦ぞも　權中納言俊忠卿

○家集、つゝじを
岩つゝじ匂ふ盛りは梓弓春の山邊も紅葉しにけり　小辨

○家集、三百六十首中
山姫のそめてはさらす衣かと見るまで匂ふ岩つゝじかな　よしたゞ

同
類ひなきさきさか山のつゝじ原色てるなべに花咲きにけり

○百首御歌
しらとりのさき坂山の岩つゝじいはねば春の色は見えけり　後鳥羽院御製

○家集、寄躑躅戀

淺からぬ思ひを人にそめしより涙の色はこつゝじの花　源仲正

○永保三年准后侑子家侍百和香百歌、岩つゝじ

知りぬらむ三世の佛の岩つゝじいはねど思ふこゝろ深さを　眞遍法師

ふりはへて折りにきたれぱこま錦紅深き岡つゝじかな　相摸

○永久四年百首、躑躅

深後 賤のめがかりてはやせる岡つゝじ若枝に花の咲きにけるかな　神祇伯顯仲卿

同 紅のふかでの色の岡つゝじいもがま袖にあやまたれつゝ　仲實朝臣

同 百たらぬやそすみさかの白躑躅知らじな人は見てこふるとも　俊頼朝臣

東路やつゝじの岡をきてみればあかもの裾に色ぞかよへる　二條太皇太后宮肥後

○つゝじを

新深窓 何ごとを忍ぶの岡の岩つゝじいはで思ひの色にいづらむ　頼圓法師

○家集

やましろの岩田の岡の岩つゝじいはまくほしき花の色かな　前中納言匡房卿

紅のやしほにみゆる岩つゝじ春雨にこそ色まさりけれ

○家集、春歌

紅のやしほの岡のいはつゝじこや山姫のまくりての袖　權中納言長方卿

○文永七年毎日一首中

紅の衣笠岡のいはつゝじ日影さしてぞいろまさりける　民部卿爲家

○同四年毎日一首中

夕日影小倉の山のいはつゝじ云はねばこそあれ春や戀しき　同

○躑躅帶山光といふことを

山家上 つゝじ咲く山の岩かね夕ばへて小倉はよその名のみなりけり　西行上人

○山路のつゝじ

同 岸傳ひをりて躑躅を手にぞとるさかしき山のとりどころには　同

○家集、戀歌中

今は早中の思ひをいはつゝじもえ出づる春の色に見すらむ　従二位家隆卿

○久安百首
山もせに咲けるつゝじはさほ姫に誰がぬぎかけし許し色ぞも　郁芳門院安藝

○つゝじ
六帖六
瀧ばしる音羽の山の岩つゝじ岩間をわけていや珍らしき　讀人しらず

○家集
神路山岩根のつゝじ咲きにけりこらが眞袖の色にふりつゝ　西行上人

○建久元年一句百首
こよひねてしばしも馴れむときは山岩つゝじ咲く峯の通ひ路　前中納言定家卿

○六帖題
新六ノ六　現存
夕日さす岡邊のまつの下つゝじ常磐堅磐に花さかりなり　民部卿爲家

○夢想百首
つゝじ咲くならびの岡の松陰に同じ夕日の色ぞうつろふ　參議爲相卿

○名所歌中
わけのぼる行くての岸の高瀬山手折らでみつる岩躑躅かな　同

○同
たかせ山道のゆくての花つゝじをり居てこふる古郷の春　爲實卿

○海道宿次百首、あかさか
外山なる花はさながらあか坂の名を現はして咲くつゝじかな　參議爲相卿

○弘安元年百首春御歌
新續古春下
いはつゝじ花散りぬらし深山より落ち來る水は春の紅葉ば　後九條內大臣

○土御門內大臣家、水邊つゝじ
立田川岩根のつゝじ影見えてなほ水くゝる春の紅　前中納言定家卿

○住よしの社歌合、寄木戀
つれもなきいはきの峯の岩つゝじ折りて傳ふる山人もがな　從二位家隆卿

○千五百番の歌合
わび人のすむとは聞けど足引の山のかひある岩つゝじかな　土御門內大臣

○六帖題
新六ノ六
まれにさく山の高嶺のゆふつゝじ雲間の星や光そふらむ　信實朝臣

○同
みつゝての磯間のつゝじ咲きしより海の漁火よるとやはみる　衣笠內大臣

○建長八年百首の歌合
谷ふかき岩かたかげの姫つゝじ人もすさめぬ春に咲きつゝ　同

山かげに心ばかりは春の色のつゝじのけたみ花さきにけり　信實朝臣

判者知家卿云つゝじのけたみこそ耳どほくはべれある書にはつゝじのふるはにあせみ生ふと申せり又つゝじのそばといふ義も侍るとかや何にても風體あながちの秀逸にはあらざるにや又けたみこそおぼつかなく侍れけたにも知りて侍りける僻事にて侍りけるとこそと云々

暮春

○文永八年毎日一首中

遲櫻それだに雪とさりはてて彌生もなかば早すぎにけり　民部卿爲家

○正嘉三年三月一日雪の降るを

かぞふれば今日は三月の空までもいかなる雪の花とふるらむ　同

○喜多院入道法親王家五十首

くれてゆく彌生の空をながむれば霞に紛ふ有明の月　従二位家隆卿

東路もくるゝ今日をば惜しむなりいづくへ歸る春にかあるらむ　野宮左大臣

○御集、春暮

山里の人もこずゑに春くれて淺茅が末に花はうつりぬ　後京極攝政

○百首歌

雲葉
なしみこし同じ名殘のゆかりとて花の道より春やゆくらむ　後鳥羽院御製

○同

あすか風はなの古里人とはで徒らにのみ春やゆくらむ　後九條内大臣

○百首御歌、暮春

吉野川山吹の瀬のいは枕むすぼほれゆく花のうき浪　光明峯寺攝政

○貞應百首の御歌

鶯のかへる山路にのこりけり風のしられぬ谷の櫻は　同

○春情難覊夕陽中
夕づく日かすみの西にかたぶきて入相の鐘に春ぞのこれる　土御門院御製

○文集に百首、歳時春日少
徒らに春は少なき一とせの誰がいつはりにくるゝ宵の根　前中納言定家卿

○光明峯寺入道攝政家百首、殘春
梓弓春のやよひもとし月のいるさの山は花ものこらず　從二位家隆卿

○題しらず
一字抄
春ふかくまた霞みなば古里のとほちの山をほのもみましや（見ましやはイ）　津守國基

○春御歌の中、人家
東路のやまにや春の殘るらむふたむら見ゆるはなの色かな（おそ櫻かなイ）　後九條内大臣

○南海漁父百番歌合
花は散りぬ春の鶯こゑふけてひとむら竹に霞かゝれり　慈鎭和尚

○御集、春暮御歌
ふるすうづむ雲のあるじとなりぬらむなれし都をいづる鶯　後京極攝政

○六百番歌合、殘春
鶯の花のねぐらはあれにけり古巣にいまや思ひたつらむ　寂蓮法師

○家集、春歌中
思ひいでて古巣にかへる鶯は旅のねぐらやすみうかりつる　西行上人

○田家の鶯といふことを
ますらをが秋のをしねをまつかきにまた春深き鳥の聲かな　皇太后宮大夫俊成卿

○嘉元三年[illegible]怨百首
心さへしめる三月の暮の雨花ともまたず月もたのまで　爲實卿

○古寺殘花と云ふことを
玉春下
春をしたふ名殘の花も色くれぬとよらの寺の入相の空　入道前太政大臣

○元久元年詩歌合、水郷春望
あじろ木に櫻こきまぜ行く春のいさよふ波をえやはとゞむる　前中納言定家卿

○六百番歌合、殘春
新千春下
このもとのひかずばかりを匂ひにて花の殘らぬ春の故郷　同

拾遺愚草中
あはれいかに霞も花もなれ／＼て雲しく谷にかへる鶯　同イ

三月盡

○五十首御歌
今はとて春もいなばの峯の松根にあらはれて鶯ぞなく　光明峯寺入道攝政

○千五百番歌合
東路や春の行くへを今夜より夢にもつげよ宇都のやまぶみ　寂蓮法師

○百首御歌、三月盡
紅に霞のそでもなりにけり春のわかれのくれがたのそら　慈鎭和尙

○文治六年五社百首
かへる春けふの舟出はもやひせよ猶すみよしの松陰にして　皇太后宮大夫俊成卿

けふくれぬ夏の曆をまきかへしなほ春ぞとや思ひなさまし　同イ

○千五百番の歌合
かへる春思ひやるこそ苦しけれなこその關の夕暮の空　法橋顯昭

○建長八年百首歌合
をしむとてとまるならひの春ならば皆三月にて年やくれまし　信實朝臣

○春光品是有明朝
家 かねてよりわが惜しみこし春は唯あけむあしたぞ限りなりける（なるべき家）　千里

○唯殘半日春
同 一年にまた再びもこしものをたゞひるなかぞ春は殘れる　同

○兩處春光同日盡
同 春をのみこゝも彼處も惜しめども皆同じ日（ときイ）につきぬるがうさ（ぎイ）　同

○天慶二年宰相中將家屛風、三月晦日
春のけふくるゝしるしは鶯のなかずなりぬる心なりけり　貫之

○三月盡歌
歌苑抄　玉葉春下
夜もすがらをしみ〳〵てあかつきの鐘と共にぞ春はつきぬる　大僧正行高（慶玉）

○正治二年百首
春は今日かすみの衣花の袖やどの梢にきぬかけてけり　宜秋門院丹後

志賀の浦やけふたちかへる春風に氷らぬ浪も遠ざかるなり　寂蓮法師

今日くれぬいづくへ春のゆきてまた伴ふ花を外にみすらむ　　從二位保季卿

ゆく春のとまりしるき浦ならば我もふなでて遲れざらまし　　博古卿

うらむとてもとの日數の限りあれば人も靜かに春もとまらず　　前中納言定家卿

今宵のみ春やかぎりの草枕ゆふべのまとにかげなゝめなり　　同

なしめどもうしみつ今は更くる夜のたゞ夢ばかり殘る春かな　　家長朝臣

○千五百番歌合

○天德四年三月晦日内裏歌合

○文應百首、留レ春不レ留春歸人寂寞

○六十五首歌、九春將盡幾殘日暗客鬢除以齋間斜

○洞院攝政家百首、暮春

夫木和歌抄卷第六　終

夫木和歌抄　巻第七

夏部一

題　更衣　首夏　餘花　新樹　卯花　神祭　葵
　　賀茂祭　早苗　五月五日　菖蒲附蓬　橘　花柑子

更衣

○久安百首
夏くれば衣がへして山賤のうつぎ垣根もしらがさねなり　皇太后宮大夫俊成卿

○一字百首、夏歌
程もなくこぞの月影廻りあひて又たちきたる白がさねかな　前中納言定家卿

○正治二年百首
春の衣を涙ながらやぬぎ更へて惜しみけりとも人に知られむ　慈鎮和尚

○御集、更衣
さほ姫になれし衣をぬぎかへて戀しかるべき春のそでかな　後京極摂政

○六帖題御歌、更衣
たちなれし霞は雲になりにけり天つみ空も衣がへして　中務卿みこ

○建長八年百首歌合
あかざりし花の衣のうつろかとかとりの袖はきるも懐かし　正二位忠定卿

○六帖題、更衣
新六一
春の色をきならし衣けふは又ぬぎかへがてら形見にぞおく　信實朝臣

○寶治二年百首、夏
けふははやみあれの月のはじめとて神の社も衣がへせり　同

六一 夏衣たちきるものを逢坂の關の清水の寒くもあるかな（貫之集）　讀人しらず
〇更衣

花の色の衣かへうきひとへやまなほ白雲は形見なれども　從二位家隆卿
〇爲家卿家百首、更衣

たなばたも花ぞめ衣けふかへば名殘にはたて天のかはなみ　後九條内大臣
〇柿本影供百首、夏同歌

神がきに今日たちめぐるやをとめの袂も輕く夏はきにけり　民部卿爲家
〇文應元年七社百首

花ぞめの袖の名殘は惜しめども神の衣に夏はきにけり　同
〇貞應三年百首、更衣

櫻いろに染めにし袖のうつり香も薄くなりぬるせみの羽衣　同
〇建長三年毎日一首中

里人の今日ぬぎかふる衣手のたなかみ川に夏はきにけり　同
〇堀川院御時百首

山吹の花の袂をぬぎかへてせみの羽衣けふぞきてける　權僧正永縁
〇百首歌、更衣

新拾遺釋教
夏衣ひとへに西を思ふかなうらなくみだを頼む身なれば　權僧都源信
〇同合更衣

なつくれば賤の麻衣ときわくるかた田舍こそ心安けれ　源仲正

首夏

〇天慶五年亭子院御屏風
花鳥もみな行きかひてうば玉の夜のまにけふの夏はきにけり　貫之

〇家集、夏歌中
春霞たちしは昨日いつのまに今日は山邊のすゞろかるらむ　好忠

〇夏同歌中
新後拾夏
春をいまいたくも戀ひし足引の山郭公うらみもぞする　花山院御製

〇天慶二年二月貫之家歌合、初夏
いつしかと夏になるらし空蟬の聲もあはれに鳴きはじむらし　讀人しらず

○家集、首夏の心を
おちかはるふたけのしかのくもり星やゝ顯はるゝ夏はきにけり　源　仲正

○久安百首
いつしかと衣干すめりかげろふの夏きにけらし天のかこ山　前大納言隆季卿

よもすがら春を殘せる燈火の名殘はけさもけたじとぞ思ふ　前參議教長卿

○四月一日、藥ニ氷水ー
待ちえたるけふより夏のひのためし絶えず備へよ長月までに　參議爲相卿

色寒き冰室のためし見え初めてしらがさねなるけふの衣手　爲實卿

○岡屋入道攝政家百首
旅衣折しも春をたちかへて今日はかとりのうらにきにけり　民部卿爲家

○建保三年名所百首
大井川かはらぬせきのおのれさへ夏きにけりと衣ほすなり　前中納言定家卿

○老若五十首歌合
風夏　昨日までかすみしものをつの國のなにはわたりの夏の曙　後京極攝政

○正治二年百首
夏きぬといふばかりにや足引の山もかすみの衣かふらむ　同

○夏歌中歌苑抄
けさみればかすみの衣ぬぎかへて山もひとへの薄綠なり　賀茂重保

○百首御歌、首夏
新拾夏　宮人の袖つき衣けふかへて夏きにけらしたかまどの山　後九條内大臣

○建仁八年百首歌合、夏歌
神山のかしはの平手うちたゝきみわすゑ祈る月はきにけり　從二位行家卿

けさはゝや春におくれて鶯のひとりなくなる聲ぞさびしき　左近中將具氏卿

○六帖題、さうび
はしのもとに紅ふかき花の色も夏きにけりとみゆるなりけり　權僧正公朝

○家集、首夏
垣根にはまだ咲きあへぬ卯の花のはないろ衣袖ぞ涼しき　前民部卿雅有

○寶治二年百首歌
いつしかと今日より夏にたちかへてたゞひとへなる天の羽衣　少將内侍

○千五百番歌合
野邊みれば霞の衣ひきかへて緑は草のたもとなりけり　寂蓮法師

○伊呂波四十七首、建久二年
るりの地に夏の色をばかへてけり山のみどりをうつす池水　前中納言定家卿

○文治三年百首
なにとなく過ぎにし春ぞしのばるゝ藤つゝじ咲く山の細道　同

○建保四年百首
しのばるゝ常磐の森の岩つゝじ春の形見のかずならねども　同

○百二十八首和歌
なぐさめは秋に限らぬ空の月春より後もおもかげの花　同

○光明峯寺入道攝政家百首、夏
あはれをもあまたにやらぬ花の香の山もほのかに殘る三日月　同

○正治二年百首御歌
くる方に春のかへらばこの頃や東に春のさかりなるらむ　後鳥羽院御製

餘花

○百首御歌
せみの羽の薄紅のおそ櫻折るとはすれど花もたまらず　順徳院御製

○寶治二年百首、首夏
越えきつる遠山どりのおそ櫻都にしらぬ春やのこれる　後九條内大臣

○建長八年百首歌合、夏歌
おそ櫻ありとやけふぞみかのはら川上高く雲のかゝれる　同

○家集、山餘花
朽ちのこる春の色とや山かけの青葉に沉むはなのうもれ木　前民部卿雅有

○百首御歌イ
青羽やま卯の花垣におそ櫻春と夏とやあふさかのせき　慈鎭和尚

新樹

古來歌
ちりにける花のふるすはこがくれて青葉のやまに迷ふ鶯　　後一條入道關白
いまはまだ花もあらしのなつ山に青葉まじりの峯のしら雲　　從二位家隆卿
陰茂きならの葉がしは日にそひてまどより西の空ぞ少なき　　前中納言定家卿
しげりゆく軒の木陰の雨のうちになほ雲くらき夏の空かな　　民部卿爲家
散りはてし櫻か枝にさしまぜて盛りとみするわかかへでかな　　同
新六ノ六
春かけてはさき色づく若楓さもあらましをなに急ぐらむ　　信實朝臣
わかかへでをきひとへに紅の袴と見ゆる岩つゝじかな　　慈鎭和尚
いざ住まむ夏の木立のこのもとにしばしをみゆく岡のべの里　　同
あらはれむ秋をもしらぬ楓かな常磐の色を暫しぬすみて　　同
花はちりぬいかに云ひてか人待たむ月だにもらぬ庭の梢に　　後京極攝政
かげひたす水さへ色ぞ緑なるよもの梢のおなじ若葉に　　前中納言定家卿
春ふかき野邊のけしきと見し程に緑は宿のこずゑなりけり　　寂蓮法師
俤はしぐれし秋の紅葉にて薄もえぎなるかみなびの森　　隆信朝臣
おひにける庭のもえぎのこぐらきにそこはかとなき涙とまらで　　爲賴朝臣

○谷鶯吟ニ新樹ニ
○千五百番歌合
○文集百首、新樹陰涼多
○建長三年毎日一首中
○嘉祿四年百首、新樹
○六帖題
○百首御歌
○六百番歌合、新樹
○家集、夏のはじめつかたいへのおえきたみて

卯花

○百首御歌
この頃にさくらが枝に雲はれてうの花垣に月をみるかな　慈鎭和尙

○老若五十首歌合
さと人のうの花はこぶ山陰に月と雪との昔をぞとふ　後京極攝政

○建長元年百首、卯花
おそざくら咲きそふ谷のうの花やおなじ雪解の水の白波　後九條內大臣

たちぬはぬ誰が古の衣とて倚ものさらす谷のうの花　從二位行家卿

○家集、水邊卯花
立田川きしのまがきを見渡せば井ぜきの波にまがふ卯の花　西行法師

○正二年百首
これやこのなきなたつたの里ならむ波のぬれ衣きたる卯の花　前大納言忠良卿

○文永二年中務卿親王家歌合
立田川わたる瀨しらぬうの花の岸［あまイ］にもまさる波にまがへて　從二位行家卿

○弘安百首
高圓の野邊の卯の花さきしより里のしるべの月ぞ殘れる　前大納言資季卿

○正治二年百首
足引のやまあゐにすれる衣とやうの花垣に日影さすらむ　三條入道左大臣

○久安百首
うの花の靑葉まじりにさきぬれば垣根もせみの衣きてけり　花園左大臣家小大進

○千五百番歌合
神まつる卯月になればうの花の垣根もせみの衣きてけり　土御門內大臣

○同
ぬれ衣ほすかとみればしろたへのうの花さけるあまの袖垣　法橋顯昭

○堀河院御時百首、卯花
うの花やさかりなるらむ白河のわたりに波の立つとみゆるは　中納言國信卿

卯の花も神のひほろ［もイ］ぎときてけりとぶさもたわに木綿掛けてみゆ　俊賴朝臣

ふな岡のわたりにさけるうの花は汀によする浪かとぞみる　權僧正永緣

○家集三百六十首中
垣根には卯の花うゑむあまよにも我がやど守る人と見えつゝ　好忠

うつぎ原てこらが布をさらせると見えしは花の咲けるなりけり

○延喜十三年三月亭子院歌合
卯の花のさける垣根は白雲の下りゐるとこそあやまたれけれ　讀人しらず

○家集、夏歌
白雲のおりゐる宿の垣根かと見えまがふまでさける卯の花　太宰大貳高遠卿

○同
山賤の垣根のかひにはむ駒の雪ふりがみとみゆるうの花　源仲正

○天仁大嘗會歌
あかねさすひおきの里を見渡せばうの花咲きて懐かしきかな　藤原正家朝臣

○家集
夕づくよ小倉の山のこがくれも色はさやかにさける卯の花　正三位知家卿

○卯花を、扶桑
音たてぬせきりの波とみゆるかなみなせの里に咲けるうの花　讀人しらず

○家集
かつしかや川ぞひうつぎ咲きしより浪より通ふままのつぎ橋　鴨長明

○家集、歌林
たつのゐる渚の岡の松がねに夕波かくとみゆるうの花　蓮（素イ）覺法師

うの花のさける頃をやしら浪のよする渚の岡といふらむ　正三位知家卿

○題不レ知新撰[illegible]
白とりのさきさか山はうの花の咲ける折こそ名にはたちけれ　祐盛法師

○家集
うの花の盛りになれば白とりの鷺坂やまのしをりとぞみる　俊頼朝臣

うの花の頃ほひなれや磯の浦にたつしき浪のおると思へば

○家集、卯花似二夕顔一
けさ見ずばまがひなましを夕顔の垣根に白くさけるうの花　前中納言匡房卿

○正治二年百首
やへむぐら晴れぬ垣根とみしかどもうの花月よ隠なかりけり　前大納言隆房卿

これも亦慰めかねつうの花の月かとみゆるをばすての山　正三位季經卿

○家集、或所屏風村上御時歌合
更科の寒き山べのうの花はきえぬ雪かとあやまたれつゝ　兼盛

○永觀元年一條大納言家障子歌、鏡山
うの花のちりぬる時になりぬれば鏡の山はくもらざりけり　元輔

○久安百首
ふし水や川ぞひうつぎ花さきて浪は垣根のものとこそみれ　前參議親隆卿

○永久四年鳥羽殿歌合に、卯花
明玉イ
際もなくよる白波とみゆるかななつみの川の岸のうの花　中院入道右大臣

○家集、卯花を
千雜下
うの花よいでことゞゝしかみ島の浪もさこそは岩を越えしか　散木　後頼朝臣

同
うの花は岩こす浪に變れどもおちてはぬれぬものにぞ有りける

○六帖題、ゆふづくよ
新六二
白妙の垣根にさけるうの花にもてなされたる夕月夜かな　衣笠内大臣

○文治二年五社百首
夕月夜怪しくことにさやけきは卯の花さける山路なりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○祇園社百首
夕月夜かげかとぞみるやま人のつま木の上にさせる卯の花　同

○土御門内大臣家歌
夕月夜いりぬるかげも止りけりうの花さける白河の關　前中納言定家卿

○永久四年四月鳥羽殿歌合
うの花の垣根つゞきにさきぬればみな白川のせきぢなりけり　大炊御門右大臣

○夏歌中續　林葉イ
千夏
みてすぐる人しなければうの花のさける垣根や白川のせき　季通朝臣

○六帖題御歌、卯花
初瀬川きしのうの花ちる時はさわがぬ水も波ぞたちける　平經正朝臣

○長治二年七月歌合
有明の月にやこれもまがふらむ吉野の里にさける卯のはな　中務のみこ鎌倉

卯の花のさきにし日より音羽山麓の里にみゆる白雪　讀人しらず

○岡屋入道攝政家百首、岡卯花
白妙のゆききの岡と辿るまで冬にかはらずさけるうの花　民部卿爲家

うの花の咲ける飛鳥の里にねてまだき明けぬと驚かれつゝ　源顯國朝臣

白妙にさきかさなれる卯のはなは衣の里のつまにぞ有りける　藤原忠隆

しはつ山卯の花ぶきのかり庵やよどこもさえぬ雪のしたぶし　法橋顯昭

みなの川おちける峯はいかならむ山のはこめて咲けるうの花　後九條内大臣

新千夏
久方の月の影ともみゆるかなかつらの里に咲けるうの花　讀人しらず

ひさかたの桂のかはのうの花は月かあらぬか夕暮の空　民部卿爲家

續千夏　家集
あさ日山ふもとの里の垣根にはさらせるぬのと見ゆるうの花　左京大夫顯輔卿

うの花の垣根をみればあさひ山ふもとの里にきえぬ白雪　寂然法師

新後拾夏
ぬのさらすうちの渡りの垣根より珍らしげなく咲けるうの花　常磐井入道太政大臣

ぬのさらす麓の里のかずそひてうの花咲けるおほたきの山　皇太后宮大夫俊成卿

中河やわたりにさけるうの花は垣根つゞきになみぞこしける　同

柴舟のかへるみたにのおひ風に浪よせまさる岸のうの花　同

かへるさのゆふべは北にふく風の浪たてそむる岸のうの花　前中納言定家卿

ほとゝぎすしのぶの里にさとなれよ又うの花のさつきまつ比　同

卯の花の色にや夏はしもとゆふかづらき山の谷の夕風　従二位家隆卿

うの花のさくやまがきのしまびとも衣をほすか舟よせて見む　同

○天仁三年四月師時卿家歌合
○爲忠朝臣家三河國名所歌合、衣里
○喜多院入道二品親王家五十首
○建長八年百首歌合
○[illegible]、卯花似月
○寶治二年百首、河卯花
○永久四年鳥羽殿御歌合、卯花
○百首歌
○弘長百首、卯花
○大嘗會悠紀方御屛風、大福山
○五社百首
○暮見、卯花
○三十（二十イ）首歌、渓卯花
○光臺院入道二品親王家、花十二首
○三十首歌、江卯花
○百首歌、舟路卯花

○山卯花をよめる、明玉
○光臺院入道二品親王家五十首、社卯花
○百首御歌
○明玉
○光臺院入道二品親王家五十首、社卯花
○家集、寄卯花戀
○五十首歌、社卯花
○春日社百首、卯花
○題不レ知、延慶中
○永久四年四月四日鳥羽殿歌合、卯花
○光臺院入道二品親王家五十首、社卯花
○新撰

神垣にたがたむけとは知らねどもうの花さけるゆふの山影　前左兵衛督教定卿
みぬ里にみわのはふりや植ゑおきしゆふしで白くかくる卯の花　前中納言定家卿
みわの山身をうの花の垣しめて世をすさみたるしるしと思はむ　慈鎮和尚
神まつるころにもなればうつぎさすこやの神垣花咲きにけり　従三位経政卿
いなり山杉の下影したはれて卯の花づきよ道もさやけし　家長朝臣
夏くればみむろの山の榊葉にゆふしでかけて咲けるうの花　従三位範宗卿
あまつ袖ふるの山なり榊葉に雪のしらゆふかくるうの花　従三位行能卿
いにしへやふるの垣根のうつぎはら花のをり見し人ぞ戀しき　源仲正
神垣に咲くうの花や雨にますとよをかひめの手向なるらむ　従二位家隆卿
卯の花の咲きにし日よりゆふだゝみ田上川に浪ぞ立ちそふ　藤原隆祐朝臣
六帖 稲山の身をうの花の時鳥くやし／＼と音をのみぞ鳴く　讀人しらず
神山の麓の里のうの花はゆふしでかくるさかきとぞ見る　家俊朝臣
うつぎ垣白ゆふかけてみたらしや花のいぐしは神やうくらむ　従三位保季卿
たがみそぎしらゆふかけて神垣のみたらし川に咲けるうの花　正三位知家卿
夏神樂けふやしつらむ卯の花のしらゆふかくるかもの川上　法印幸徳
卯の花やたまがき白く咲きぬらむはるかにかくるかもの川波　経乗法師

○承安五年三月重家卿家歌合、垣根卯花
をりながら垣根もたわに降る雪よ青葉まじりに咲けるうの花　良一法師

○百首御歌
卯の花の青葉を風やわたるらむうけに浪こす玉川のさと　慈鎮和尚

○土御門内大臣家十首歌合、薄暮卯花
浪のおとは松のあらしに聞ゆなりうの花かをる玉川の里　従二位家隆卿

○承久二年四季百首
うの花の垣根ばかりはくれやらで草のとささぬたま川の里　寂蓮法師

○伊呂波四十七首
玉川に月のしがらみかけてけり入りかげみせぬうの花の頃　前中納言定家卿

○弘長元年百首、卯花
をの山やまだ冬ごもる雪と見てうの花わくる谷の細道　同

○山階入道左大臣家百首、夕卯花
さかきとる頃とはしるし白妙のゆふかけわたす森の卯の花　民部卿爲家

○文應元年七社百首、卯花
白妙の花のうつぎの影みえてまがきにかぎる夏のゆふしも　同

うの花を雪にまがへて飛火野の野もりや更にわかなまつらむ　同

○家五十首歌、社卯花
住吉の岸のうの花うつたへによせて下かへらぬおきつ白波

すみよしのゆふしでなびく松風に浦波白くかくる卯の花　光臺院入道二品みこ

○弘安元年百首
おとなしの瀧とぞみゆる思ひせく人やうゑけむ岸の卯の花　後九條内大臣

○永久四年四月鳥羽殿歌合、卯花
よそめにはすゑの松山こす波に見えまがひつゝ咲けるうの花　大藏卿行宗

○田家卯花といふ事を
小山田のいほ白妙にかけてけり五月まつまの花のしがらみ　皇太后宮大夫俊成卿

○弘安二年[illegible]根宮百首
時しらぬ富士の裾野のうの花をこぼれてきたる雪かとぞ見る　安嘉門院四條

○百首歌、卯花隱レ家
うの花を垣根のまゝにながむればいでぬる門に廻り來にけり　寂蓮法師

○文治三年百首
あたらしや賤が垣根をかりそめに隔つばかりの八重のうの花　前中納言定家卿

○一句百首、夏歌
山里はうの花垣根ゆきをれてすぎ行くいほぞ青葉なりける　同

○天仁四年顯時卿家歌、卯花
遠近の垣根に咲ける卯の花はたがせにかゝる雪かとぞ見る　藤原敦隆

枝毎にたまぬきかくる卯の花をさかはといひし人に見せばや　隆源法師

○永久四年五月歌合、卯花
しら玉の垣とやたれも思ふらむこの世のものと見えぬ卯の花　法性寺入道關白家淡路

○建長八年百首歌合
門させるうの花垣を我がためとくゞり入りても夏はきにける　信實朝臣

○洞院攝政家百首、郭公
おのれのみさやかになのる時鳥卯の花山のおぼろ月夜に　藻壁院但馬

うの花のさく峯のうへの月みれば空にまたるゝ山ほとゝぎす　常磐井入道太政大臣

○建保三年内大臣家百首、樹郭公
うの花のさく峯のうへの郭公夕闇またぬ月になくなり　從二位家隆卿

○題不知
萬八 ほとゝぎす鳴く峯の上の卯の花のうき事あれや君し來まさず　讀人しらず

神祭

○正治二年百首
日影さすうの花山のをみ衣たれぬぎかけてかみまつるらむ　小侍從

○百首御歌
新六一 神まつるうつぎの花の白妙にゆふとりしでて山かづらせり　衣笠内大臣

新六一 神まつるうつぎ垣根の白妙にゆふとりしでて山かづらせり　正三位知家卿

○六帖題
千早ふる卯月のみしめあらためてきねが諸聲はやうたふなり　信實朝臣

○六帖題、社（神イ）まつり
榊葉にまその白木綿引きかけてけふはあなしの山かづらせよ　權僧正公朝

○家集、神祭
ま榊にゆふきぬつけてたが玉をしけにぬきたれ神まつるなり　同

葵

○百首御歌
續後拾夏
たれしかもまつのをやまの葵草かづらに近く契りそめけむ　順德院御製

○あふひ
現存六
千早ふる神にかざせるもろかづら萬代かけてたえじとぞ思ふ　光明峯寺入道攝政

○光臺院入道二品親王家五十首
忘るなよよるべのみくさ打ち拂ひ君にあふひの影を待ちつゝ　從二位家隆卿

○光明峯寺入道攝政家歌、葵
秋風　現存六
神まつるけふのみあれのかざし草永き世かけて我やたのまむ　前大納言資季卿

○葵
現存六
そのかみのみかげの山の諸葉草けふはみあれのしるしにぞとる　中原師光朝臣

○永萬二年五月經盛卿歌合、月
葵草とるやみかげの山邊には月の桂もことに見えけり　清輔朝臣

○御集、葵
うかりけるみかげの山の諸葉草かけきやかかる嘆きせむとは　中務卿みこ

○家集
人も皆桂かざして千早ふる神のみあれにあふひなりけり　貫之

○經信卿家集
桂女のあゆにはあらずあま人のかづくあま衣今日にあふひぞ　六條右大臣

この歌は四月祭のころすさがのおまうへと聞ゆる人にながききぬをつかはすとてよめると云々

○堀川院御時百首、葵
神山の園の葵をくさりつゝけふのみあれにかざしつるかな　仲實朝臣

○家集

なべてには掛けてもいはじ君がため千代まつのをの葵草こそ　周防内侍

この歌は院御時松尾にまゐりて歸りてあふひまゐらするとて詠めると
云々

○家集、葵

片岡やいかきのはしの葵草けふかざして（きイ）は誰かかざさむ　平祐擧

○建久二年四月土御門右大臣家歌合、葵

けふ見ればかけて歸らぬ人ぞなきあふひぞ神のしるしなりける

○久安百首

羨まし入日のかげのさそふには西へも靡くあふひ草かな　花園左大臣家小大進

○組字百首、廣橋匂田門之院鏡梧桐之底巻之風雅

影みゆるひとへの衣うちなびく葵も涼し白きすだれに　前中納言定家卿

○文治六年女御入内御屏風、賀茂下御社館導葵付けたる人あり

けふは皆おりに葵をかざすかな頼むみおやの神のしるしに　三條入道左大臣

○寛喜元年女御入内御屏風、人家有之樹陰之淼嗟云々

もろかづら日影やおそき玉すだれあけても涼しならの下風　西園寺入道太政大臣

神まつる時は來ぬらし宿ごとにけふは葵の諸かづらせり　民部卿爲家

あふひ草けふ影そふる玉かづら長き契りも神のまに〳〵　従二位家隆卿

此の歌或注云玉かづらをかけそふる事不審と云々

○文應元年七社百首

いづくにも同じかざしの諸かづら時にあふひを掛けて待つかな　民部卿爲家

○家集

川竹の葉ごしの色にまがふかな玉の簾にかくるあふひは　前中納言定家卿

○嘉禄元年百首、賀茂祭

葵草かざり車のけしきまで今日はことなる物見とぞ聞く　民部卿爲家

○文治六年五社百首、葵

哀れにぞ草の中にももろかづら神のかざしとひかれ初めける　皇太后宮大夫俊成卿

いかなれば日影にむかふ葵草月の桂の枝をそふらむ

よそながらけふの日よしの祭にも賀茂のみあれは葵なりけり

○續集、葵を古來歌に
おのが葉に日影求むる草よりもなほ心なき身をいかにせむ　　後一條入道關白

○文應元年七社百首
曇りなき日影にむかふ葵草かけてあまねきよを賴むらし　　民部卿爲家

神まつる日つぎにならふもろかづら同じかざしぞ見るも畏き

○百首歌日五首中
神山や日影にむかふ葵草かたぶきやらぬほどぞ久しき　　藤原爲顯

○柿本影供百首
みあれ引く時は來にけり今日もかもかつらの山に葵とるらむ　　從二位行家卿

○千五百番歌合
葵草かりねの野べに郭公あかつきかけて誰をとふらむ　　前中納言定家卿

誰も皆たのみをかくるみあれ山神の惠みにあふひとを知れ　　法橋顯昭

○寛元三年結緣經百首歌
かも山のみあれを近み今こそは神のみやつこ葵かるらめ　　民部卿爲家

○夏歌中堀川院御時百首
日影山おふる葵のうら若みいかなる神の驗なるらむ　　大納言師賴卿

○建長八年百首歌合
日影山けふのかざしのもろは草かけて賴むと神は知るらむ　　右近中將爲基卿

葵草かくる時きぬかの岡の若きかづらのしづえはやとれ　　從二位行家卿

○堀川院御時百首
けふくればしどろに見ゆる山賤のおどろの髮も葵著けたり　　俊賴朝臣

○山家百首、葵驚老髮
翁さびけふぞ昔にさしかへる葵の若葉おひかけにして　　源仲正

○六百番歌合、賀茂祭

○永久四年百首、賀茂祭

○社

賀茂祭

雲居よりたつるつかひに葵草幾とせかけつ賀茂の川浪　後京極攝政

雲の上を出づる使のもろかづら向ふ日影にかざすけふかな　前中納言定家卿

流れての世のためしとてかた〳〵の使たちくるかもの川浪　大藏卿有家

昔よりいつきの宮にふき初めてけふぞ涼しき賀茂の川風　慈鎭和尚

葵草秋の宮人かけそへてのどかに渡るかもの川水　從二位家隆卿

あすは又賀茂の川浪立ちかへり紫野にや色をそむべき　隆信朝臣

葵草かざす今日とぞ思ひしに花ををりても見え渡るかな　前大納言兼宗卿

夕だすきかけてぞ頼む玉かづらあふひ嬉しきみあれと思へば　中宮權大夫家房卿

左方申云みあれまつりは頗可レ有二差別一歟非二同日事一也判者云右歌樣はいひながされたるやうに侍るにやみあれは一兩日さきなるべけれども祭りの故の事に侍れば同時に侍るべしと云々

宮人のかざしてかへる葵草紫野にてみどりなるかな　源兼昌

散木
引き連れて渡る景色を來てみればいつきぞ神のかざしなりける　俊頼朝臣

六二
みあれ門にひきつれてこそ千早振かもの川浪たち渡りけれ　讀人しらず

○六帖題
新六ノ五
わさつのを肩にかけたるかは衣けふのみあれを待ち渡りけり　衣笠内大臣

○使
新六ノ二
さしならぶ櫻山吹つゞけどもふちはあまたもなきかざしかな　信實朝臣

○毎日一首中、賀茂祭
さもこそはみあれの頃となのゐらめなもその上(かみ)の山郭公　民部卿爲家

○かもの祭の中の日みあれひくとて
家集
我ひかむみあれにつけて祈ること中々すゞもまつにこえける(きこゆなり家イ)　顯

○家集
思ふ事みあれのしめに引く鈴の叶はずばよもならじとぞ思ふ　西行上人

○永久四年百首、賀茂祭
堀後百
白雲のいほへのをちの國人も今日のみあれに逢はぬあらじな　仲實朝臣

早苗

○文治六年五社百首、早苗
伏みつや澤田の早苗とる田子は袖もひたすら水澁つくらむ　皇太后宮俊成卿

おほあらきの浮田の早苗おひにけり森の下草とりなまがへそ

かるもかくゐだのこひぢに立つたごは早苗よりこそそぼつなりけれ

早苗とるとばたの面を見渡せばいく浪あらむたごの小笠よ

○住吉社苗　さなへ(イ)
早苗とるみたの植女もいろ〳〵の袖を連ねていはふ今日かな　從二位家隆卿

○家集、取早苗聞郭公
郭公聲にうゑめのはやされて山田の早苗たゆまでぞとる　西行上人

○住吉百首御歌
早苗とる菅の小笠のならぶさへほかにことなゑ住の江の岸　慈鎭和尚

○承久二年仁和寺宮五十首、早苗　多
うゑ暮すみどりの早苗里毎にたみの草葉のかずも見えけり　前中納言定家卿

〇〃治五年百首、早苗
種まきし室の早わせおひにけり下り立つ田子のあめもしみゝに　同

〇闘房入道攝家百首、採二早苗一
小山田にさつきも待たず立つ民はわせの若苗おひぞしぬらし　民部卿爲家

〇嘉元元年式部卿親王家續千首、早苗多
遲くときかたこそかはれ山賤の早苗のをだに立たぬ日ぞなき　參議爲相卿

〇中務卿親王家歌合、早苗
日をおくる道を苦しみ坂こえてあへの田の面に早苗とるらむ　權僧正公朝

〇永承六年五月五日殿上根合、早苗
早處女の山田のしろにおり立ちて急ぐ早苗や室のはやわせ　式部卿大輔國成

〇〃百首、夏歌
今ははや五月も待たずみたやもりわさほの稻の早苗とるなり　民部卿爲家

〇千首歌
早苗とる山田の田子のあさ衣いとゞ五月の雨にぬれつゝ　同

〇文應元年七社百首
五月とや淀のさは水せきかけて常よりことに早苗とるらむ　同

〇百首歌
わが宿の垣根の早苗あけたてば田子のをりはへとらぬ日もなし　同

〇文永二年毎日一首中
小山田の田子のあさ衣おり立ちて今日は五月と早苗とるなり　同

〇〃毎日一首中
五月きぬはや五月雨よ小山田の田子の早苗や時すぎぬべし　同

今日ときく神のみと代とるなべにおりはへ急ぐ小田のや處女　同

小倉山さつきのさかと聞ゆなり早苗とるてふ田子の諸聲　同

〇文永十一年毎日一首中
せきがはの流れの末の里つゞき水をたよりの早苗とるなり　同

〇家集、新撰
君がためにまのさと人うちむれてとる若苗や萬代のかず　實信朝臣

〇老若五十首歌合
松浦川あゆつる瀬々も水清み濁らぬ末に早苗とるなり　從二位行家卿

○柿本影供百首
くれぬとてちまちの早苗とり〲に急ぐもしるきたごの諸聲　嘉陽門院越前

○寶治二年百首、早苗
里人はをのの山田に今よりや色こき稻の早苗とるらむ　鷹司院輔

○永久四年鳥羽殿五百首歌合、早苗
雨すぐるま菅の小笠かたよりに小田の早處女早苗とるなり　常磐井入道太政大臣

種まきし早稻田の稻や老いぬらむしづ心なく見ゆる早處女　修理大夫顯季卿

○建長八年百首歌合
せきとめてをかひの水に種まきしたかたの山は早苗とるなり　正二位忠管（宗イ）卿

○六帖題
今見れば植ゑつき近みわが門の早稻田の苗はみき生ひにけり　從二位行家卿

新六一
時しあれば田子の掛繩永き日もなほいとなくや早苗取るらむ　正三位知家卿

○寛元四年十禪師歌合、社邊早苗
この森にたごの諸人手向して岡邊の早苗とりはじむらむ　同

山城のいはたの早苗とるたごのつかれに休む森の下かげ　信實朝臣

このしまの森の下水ひきかけてしめのあたりに早苗取るなり　後九條内大臣家大夫

○建保三年和歌所歌合、夕早苗
岡のべの山田のはらの夕露は早苗よりこそおきはじめけれ　從二位範宗卿

○文治二年百首歌
まきおきし石田のわせの種なれば外(ほか)にまだしき早苗とるなり　光俊朝臣

○入道中務卿親王家歌合、鎌倉
古來歌に　新千夏
鳥瀬川あたりの小田にせき入れて袖つくばかりとる早苗かな　法印定圓

○中宮御屏風、山田ある所
六二　家集
蛙鳴く井手の山田にまきし種君まつなべにおひ立ちにけり　忠岑

○建長八年百首歌合
山吹のさくと見しまにかはづなく井での山田は早苗取るなり　衣笠内大臣

○長元九年大嘗會御屏風、備中國
長閑なるあめの下かないなふさの山田にたごも早苗とるなり　贈參議義忠卿

○家集
○三百六十首中
○家集
○早苗歌中
○家集
○堀河院御時百首
○顕季卿家歌合、早苗
○久安百首
○土御門院入道二品親王家五十首、早苗を
○建長八年百首歌合
○嘉元四年十一月當座百首
○正治二年百首
○永久四年四月鳥羽殿歌合、早苗

あすよりはそとものの小田に袖ぬれて富草（とみくさ）の早苗とりつべらなり　人丸
みあれ川賀茂のみとしろひき植ゑて今はた年の神をいのらむ　好忠
雲葉 早苗とる袖はなほこそほしやらね朝日の山の麓なれども　通信朝臣
萬代 急げ田子行きあひのわせのふしたつに麻須香非衣水漬つくとも　仲実朝臣
散木 流れつるけふのみはもり数添ひてさやたの早苗とりもやられず　俊頼朝臣
同 堀百 初苗にうずの珠えを取り添へていぐし祀らむたちつくりえに　同
我妹子が裾わの田井に引き連れてたごのてまなくとる早苗かな　修理大夫顕季卿
残る田は後にすぎしあすより（はたゞイ）はゆひもやとはで早苗取りてむ　隆原法師
小山田に今ぞたま苗うゑてける処女がもずそぬれて帰りぬ　仲実朝臣
六一 五月雨に苗ひき植ゆるたごよりも人をこひぢに我ぞぬれぬる　讀人しらず
時鳥きなく山田の早苗こそとるとはすれど取りもやられぬ　実清朝臣
うゑ盡す千里のたごの暇なみつげの小櫛も早苗とる頃　参議雅経卿
羨まし山田の早苗とる賤もしりぞきながら時にあへれと　光俊臣従
とりあへぬ早苗の末のみだれはに村雨ながら騒ぐ夕風　従三位為実卿
五月雨に早苗のあとは水こえてもずそも見えず田草ひく賤　土御門内大臣
植うるより刈穂の程ぞしられぬる又うら若き早苗なりとも　大蔵卿行宗

色深く門田の早苗なりにけり急げ賤のをふしもこそたて　左京大夫顯輔卿

○長久二年四月土御門右大臣家歌合

程もなくしげき植田の早苗かなまじる草葉のとりあへぬまで　重成朝臣

○家集、夏歌中

わさ苗も植ゑ時すぐる程なれやしでの田長の聲はやめたり　惠慶法師

○家集、雨後早苗

雲かへる雨の名殘に植うる田はみつに秋とぞまだき見えける　源仲正

○常磐井百首、門田早苗

かまどもるみつわの女庵よりはひいでの小田の早苗取るみよ　同

○家集、早苗

五月雨を又は早苗やおいぬべき水ひくたごのいそがしきかな　源賴實

○堀川院御時百首

早苗とる深田にわたす板船のおり立つことのさも難きかな　前中納言匡房卿

○寶治二年百首、早苗

今日も又たごの板船さしうけてぬまえを深みとる早苗かな　正三位知家卿

この程は民の草葉の初苗をとりもたゆまずいくかへぬらむ　衣笠内大臣

○御集、早苗

五月雨にとらぬ早苗の流るゝをせくこそやがて植うるなりけれ　後京極攝政

○文治十八年女御入内御屏風、早苗うゑたる所

植ゑくらす伏見のたごの旅寢には早苗ぞ草の枕なりける　後法性寺入道關白

苗代のみなぐち祭りいぐしたて急げやたごのてまはなくとも　後徳大寺左大臣

急ぎとるたけだの里の早苗かなふしたつまでに老いやしぬらむ　正三位季經卿

限りなき君がみしねの早苗をばいく萬代かとり重ぬべき　隆信朝臣

○祇園社百首、早苗

いづくにも神田の早苗とる民は秋のたのみもかねて見えけり　皇太后宮大夫俊成卿

○寛喜元年御入内御屏風、山田早苗

植ゑみつる田のもの早苗水すみて濁りなき世の影ぞ見えける　從二位家隆卿

○嘉祿元年十禪師社にたてまつる百首
○文永九年毎日百首中
○六帖題
○天慶八年内のおほせにて御屛風歌
○家集、夏歌
○家集、五月五日を
○家集、騎射馬
○六帖題
○武德殿にて、五月の心を
千五百番歌合
○萬壽二年五月五日義忠朝臣家歌合、谷中菖蒲

おしなべて植ゑぬ荒田もなかりけり雨のうるひのみよの早苗は　民部卿爲家
今は又五月來ぬらしみしめひく神のみたやも早苗とるなり　同
筑波嶺の山田の早苗とりもあへず今日はさ月に早なりにけり　同
新六二 かねてよりおくての山田程見えてさ月すぎても早苗とるなり　同
千早振神の御前のみとしろにみなつきかけて早苗とるなり　信實朝臣

五月五日

六一 家集 郭公なにともしらずあやめ草根ぞくすり日のしるしなりける　貫之
くすり日の袂に結ぶあやめ草又つくりえにひけばなるべし　惠慶法師
あやめひくみぬまをみれば唐國にけふや鏡のかげをますらむ　俊頼朝臣
永きねの花の袂にかをるなり今日やまゆみのひをりなるらむ　同
しきりはのやさしき物は菖蒲草けふ引きすつるまゆみなりけり　源仲正
新六一 あづさ弓ま弓は今日ぞまてつかひ菖蒲のねさへ引き添へてける衣　笠内大臣
花の色をさ月の玉にぬきとめて分つ處女の姿をぞ見る　民部卿爲家
今日だにも結ぶ蓬のひとかずにいらぬ菖蒲のねをもなけとや　土御門内大臣
谷深み尋ねてぞひく菖蒲草ちとせすぐべき藥と思へば　讀人しらず

此の歌判者云九節の菖蒲のおひたる谷の内の石の上に年ごとに今日人あつまりつゝ菖蒲の根をくすりとすればその水のこゝろをみてぞよむべき左の歌すがたちとせとさしたる所はあやめぐさのあやめなけれどくすりのみちはかりはふかくはおもひよりたりと云々

○同歌合、園中蓬

萬代もときはなならむ今日のため祝ひ催す園のよもぎは　同

園のうちにおふる蓬の枝しげみ末さかゆべくみゆる君かな　同

判云昔の人のけふの曉にとりと共におきてそのよもぎの人に似たる所をとりてかげにほしてくすりにしけるを左右その心をしらざりけるにやあらむ題のこゝろにかなへるものは露ばかりかけてなければ持と申すべからむと云々

○康和二年五月五日仲實朝臣家歌合

あだに置く蓬が露も今日にあへば藥の玉とぬきぞとめける　堀川院中宮上總

萬代をこめたる園のよもぎをぞ人の老いせぬ藥には引く　藤原實盛

此の兩首判者仲實朝臣云これもかれもよもぎのこゝろなむたしかならぬつてにきけば昔人今日の曉に鳥のこゑにともなひて園のよもぎの人のかたに似たるをとりて戸にあてゝたてゝ鬼をさくる藥とすといへりと云々

菖蒲

○題不知
萬八 郭公まてど來なかず菖蒲草たまにぬく日をいまだ遠みかも　中納言家持卿

つりのをの絲より長き菖蒲草ねながら引きてわざくらべせむ　能宣朝臣
この歌はたぢまのかみためちかが家の屏風の爲にさうぶを舟につくりてつりする人のとまる所と云々

○家集、菖蒲
澤水に衞士のをりひく菖蒲草君がうてなにいはひふくらし　大納言經信卿

○家集
散木 御垣守衞士のたまえにおりたちて引ける菖蒲はねも遙かなり　俊頼朝臣
ひきかくる美豆のみまきの菖蒲草ねにねをうゑて玉と貫く

○禖子内親王家歌合、五月五日菖蒲
玉にぬくけふの菖蒲はやどごとの軒端に掛けて誰か見ざらむ　兵衞

○家集、思ひける頃
流れつゝみつのわたりの菖蒲草ひきかくすべきねやは殘れる　和泉式部

○大嘗會主基方御屏風
あやめ草ひらの谷水底深みながきは千代の初めなりけり　前中納言匡房卿

○家集、菖蒲
水清きとみの小川の菖蒲草けふをまちてぞながき根もひく　同

五月ひくたまえにおふる菖蒲草何れのねをかわきて引くべき　基俊

○老若五十首歌合
なほざりに袖の菖蒲をかたしきて枕も夢も結ぶともなし　後京極攝政

○續集、菖蒲を
賤のやはもとは蓬のかたひさし菖蒲ばかりを今日はふかなむ　法性寺入道關白

○久安百首

○承久二年四季百首、曉

○六十五首歌、閑園点曉月

○家集

○みくり

○中宮御殿上家歌合

○家集、さる事有りて人の物申しつかはしける返事に五日

○貞應三二百首、沼邊菖蒲

○五社百首

○大嘗會悠紀方御屏風

○御集十首御歌中、江菖蒲

○家集、戀歌中

○文治六年女御入内御屏風

我がすみかもとの蓬の宿なれば菖蒲計りをけふは吹かなむ　季通朝臣

こもりえの汀の菖蒲ひき植ゑて玉の臺にかゝるけふかな　上西門院兵衛

色はまたわかれぬ軒の菖蒲草さつきとなのるあけくれの空　前中納言定家卿

玉のをの長きよ契れ白絲にまがふ菖蒲のねは細くとも　同

あやめかゝる（ひくイ）あさかの沼に風ふけばをちの旅人袖薫るなり　俊頼朝臣

（現存六）あやめ草さやまの池の永き根をこれもみくりの習ひにぞひく　卜部兼直

つくまえのぬまえの水や深かりし人苦しめのあやめ引くなり　權僧正公朝

折にあひて人に我が身やひかれましつくまの沼の菖蒲なりせば　西行法師

つくまえの入江の沼のあやめ草この五月雨にかる人もなし　民部卿爲家

みくりくる（生るイ）つくまの沼の菖蒲草ひけど盡きせぬねにこそありけれ　皇太后宮大夫俊成卿

難波人あしまの菖蒲あしのやにやがて植ゑてや今日はふくらむ　同

みづ垣やさ月の今日のみとひらきかざる菖蒲の香さへ懷かし　同

ながさはの池の菖蒲を尋ねてぞ千代のためしに引き歸りける　同

けふとてや浪花堀江の菖蒲草たごのもずそもなく〳〵ぞひく　後鳥羽院御製

とほつ人かりちの池の菖蒲草なか〳〵たえねこむもたのまし　從二位家隆卿

菖蒲草こゝの節をやとゝのへて玉の夜殿にけふはふくらむ　後德大寺左大臣

〔寄菖蒲祝〕
君が代にひきこそそむれ谷影の藥の菖蒲ながきためしを　參議爲相卿

〔貞應三年百首、古池菖蒲〕
あはれなりいくたの池の菖蒲草いかなる人のねか通ひけむ　民部卿爲家

〔家集〕
和歌の浦の入江に朽ちし菖蒲草ことし始めてよにひかれぬる　光俊朝臣

この歌は續古今の撰者にくははり侍りける比鎌倉中書王御會に菖蒲をよめると云々

〔家集、江中菖蒲〕
菖蒲草ひゝとや賤のおり立ちてけふ墨の江をふみにこすらむ　源仲正

〔住吉社三十首〕
すみのえにひけど盡きせぬ菖蒲草ちよのさ月や契りおきけむ　從二位家隆卿

〔百首御歌〕
墨の江の汀のあやめからで見むほかの軒端の物となるとも　慈鎭和尙

のざは潟雨やゝはれて露重み軒によそなる花さうぶかな　同

櫻散る宿をかざれる菖蒲をば花さうぶとやいふべかるらむ　西行上人

此の歌家集かやう院に中の院と申す所に菖蒲ふきたるはうの侍りけるに櫻の花のちりけるが珍らしくおぼえてよめると云々

〔正治二年百首〕
心ざしあささは沼の菖蒲草如何はねやのつまと見るべき　正三位季經卿

〔文應元年七社百首〕
繁りこし淺澤小野の菖蒲草いまは五月と早かりにけり　民部卿爲家

五月きてかもの社の菖蒲草今日はこまさへひきくらぶなり　同

〔建保三年名所百首御歌〕
新續古戀一
思ひのみますだの池のみがくれに知らぬ菖蒲のねの亂れつゝ　順德院御製

○貞應二年當座百首、名所菖蒲

五月雨にいかほの沼の菖蒲草けふはいつとか誰かひくらむ　従三位家隆卿

五月雨はいかほの沼のあやめ草かる人なみに朽ちや果てなむ　従三位知家卿

○六帖題

あやめ刈る淺香の沼にまじりてもかつみにしるき夏蟲の影　民部卿爲家

新六一 とこの上に菖蒲の枕かたしきてねを重ねばやよはの短き　信實朝臣

○家集、院北面にて

手馴れつゝすゝむ岩井の菖蒲草けふは枕にまたや結ばむ　前中納言定家卿

○毎日一首中、菖蒲を

とし深きおきの古江のあやめ草沉むしたねはひく人もなし　民部卿爲家

下り立ちて引きや盡さむけふをのみたのむの池におふる菖蒲を　大藏卿隆輔

○百首歌

新六一 いかにせむ今は六日の菖蒲草ひく人もなき我が身なりけり　衣笠内大臣

橘

○題不レ知

萬八 我が宿の花橘のいつしかもたまにぬくべくそのみならなむ　中納言家持卿

橘のたまぬくつきの短夜にあかでもすぐる郭公かな　従二位家隆卿

○野郭公といふことを

時鳥今きなけとやかゞみなる粟野の原に匂ふ橘　従二位行家卿

○家集、夏歌中

ほとゝぎすなきとよむなる橘の花ちる里をみむ人もがな　同

○題不レ知

萬八 たちばなの花散る里の時鳥かた戀しつゝなく日しぞ多き　讀人しらず

萬七 かゞみなる我が見し君をあはの野の花橘のたまにひろひつ　同

萬二　たちばなの影ふむ道のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて　三方沙彌

萬十九　島山に照れる橘うずにさし仕へまつるはまうち君たち　藤原八束朝臣

○長歌

萬十九　ものゝふの　やそとものをの　島山に　あかる橘　うずにさし　ひもときさけて　中納言家持卿

○題しらず

萬十　風に散る花橘を袖にうけて君がみためと思ひつるかも　人丸

萬十　たちばなのはやしを植ゑむ時鳥常に冬まですみ渡りかね　同

萬二十　たちばなの下吹く風のかぐはしき筑波の山を戀すあらめかも　占部廣方

○久安百首

筑波山下ふく風やさそふらむ花橘のかをり夜な〳〵　待賢門院安藝

山吹のはなたち花の香をとめて折りぞしにけるゐでの里人　平祐擧

○家集、早苗

我が宿の花たちばなも咲きにけり山田の早苗今やとるらむ　小辨

○百首歌

匂ひくる花橘のそらだきはまがふ螢の火をやとるらむ　殷富門院大輔

○殷富門院人々よませける歌

たちばなの下てる枝に郭公かたこひすらし聲もしのばぬ　權中納言長方卿

○百首御歌、儲橘子低山雨重

かをとめて昔をしのぶ袖なれや花橘にすがるあま水　慈鎭和尚

○康元二年毎日一首中

ほとゝぎす寢覺めに匂ふ橘のかはたれ時になのりすらしも　民部卿爲家

○百首歌、閑居橘

橘はこのよの外のたねなればのがるゝ宿に植ゑてこそ見れ　光俊朝臣

○六帖題

古郷の花たちばなの枝をりにかたみおほかるひと昔かな　信實朝臣

○堀河院御時百首、橘
我が園の花橘のいろ見ればこがねの鈴をならすなりけり　顯仲朝臣

橘のきのまろどのに薫る香はとはぬになのる物にぞありける　顯輔朝臣

○百首歌
門近きかつらの枝の追風に花たちばなは今や散るらむ　光俊朝臣

○北野社百首御歌
夢さそふ追風しるきたち花のいく里人の袖にしむらむ　後鳥羽院御製

○御集、夏御歌中
百敷やみはしの本のたち花になれし昔ぞ今は戀しき　衣笠内大臣

○百首御歌
新撰風 菖蒲ふくよもぎの宿の夕風に匂ひ涼しき軒のたち花　同

○千五百番歌合
たち花の昔にかをる袖に又けふの菖蒲もねはかゝりける　前大納言忠良卿

新後撰夏 たちばなに菖蒲のまくら薫るよぞ昔を忍ぶ限りなりける　皇太后宮大夫俊成卿

○御集
吹く風にわが袖の香や匂ふらむ手づからうゑし軒の橘　押小路内大臣

○十題百首御歌
行末にわが袖の香や殘るべき手づから植ゑし軒のたちばな　後京極攝政

○嘉元二年百首御歌、盧橘
忘れずよ右のつかさの袖ふれし花たちばなや今薫るらむ　龜山院御製

○正治二年百首
橘の花散る里の夕ぐれに忘れそめぬる春のあけぼの　後京極攝政

○百首
軒近く花たちばなや匂ふらむおぼえぬものを墨染の袖　寂蓮法師

○千五百番歌合
軒端もる月の光りに薫るよは花たちばなに秋風ぞ吹く　從二位家隆卿

○五月郭公といふ事を
あやめふく軒に匂へる橘に來てこゑ具せよやま郭公　西行上人

○光明院入道二品親王家五十首、夜盧橘
深きよをとふ人もがな岡の邊のをどろが軒に匂ふたち花　如願法師

○文暦元年七社百首
昔より枝にしもおけときはなる花橘は今もかはらず　民部卿為家

たちばなの花は昔の袖の香に思ひよそへしひなのなかみち　同

五月まつ花たちばなの白妙に軒ともわかずふれる雪かな　同

袖さえぬ雪こそ匂へたち花の影ふむ道に花や散るらむ　同

袖ふれし昔をいかに忍ぶらむしがの都に殘るたちばな　同

○百首御歌、名所夏
吹く風に昔をのみや忍ぶらむくにの都に匂ふ橘　土門御院御製

○寛元三年結緣經百首歌
唐衣きなれの里のかたみとてはなたち花も袖の香ぞする　民部卿為家

○建保三年家百首御歌、故郷橘
橘の花やはもとの花ならむ香こそ昔の志賀のふる里　入道攝政光明峯寺

よゝふりてとほつあすかの宮人の袖かと見ゆるにはの橘　大藏卿有家

○千五百番歌合
百敷や軒端に薫るたち花に世々の昔の風やふくらむ　同

○中務卿親王家歌合
思ひ出でて君があたりも戀しきはあすかの里に匂ふ立花　大藏卿隆輔

○百首御歌
わが心戀しき方へかへれとや花たちばなに雨の夕風　慈鎭和尚

○親へのいへにたちばなのさかえたるをみて
橘のたち榮えたるうてなよりみのなりいつる時にあへるか　大宰大貳高遠卿

○家集
五月闇雲間ばかりの星かとて花たち花に目をぞつけつる　好忠

○該子内親王家歌合、花橘
なつかしき薫りならずば橘の雲ゐの星と紛ふべきかな　小侍從

○建保三年五月家歌、廬橘
小夜更けて花橘に風ふけば我が待つ人のくるかとぞ思ふ　讀人しらず

○天仁三年四月師時卿家歌合、郭公

○禖子内親王家歌合、橘

○百首歌、里盧橘

○文治六年五社百首、橘

○六帖題、あへ橘

○百首御歌中、夏

夕されば花たちばなの薫る香をまつ人かとぞ驚かれぬる　同

常世よりかかる木の實を移しうゑて山時鳥時にしぞ聞く　仲實朝臣

玉にぬくはなたち花をいつしかと今日の袂に薫りかへたり　讃岐

思ひやる昔も遠きみちのくの忍ぶの里に匂ふ立花　隆祐朝臣

古をしのぶ心をそふるかなみおやのもりに匂ふ立花　皇太后宮大夫俊成卿

新六ノ六
すみのえにはな橘も匂ひけり松もや昔思ひいづらむ　同

新六ノ六
いかなればあへ橘の匂ふ香にうすきたもとも涼しかるらむ　衣笠内大臣

なにか匂ふあへ橘の袖の香は涼しかるべき風のつてかは　信實朝臣

花柑子

此の程は伊勢にしる人訪れて便りいろある花かうじかな　慈鎮和尚

夫木和歌抄巻第九　終

夫木和歌抄　巻第八

夏部二

題　郭公　五月雨　照射　麥　牡丹　樗
　　百合　鵜河　水鶏　螢　夏神樂　夏雜

郭公

○家集

今日ぞまた去年のねやまに郭公初音なくやと尋ねいりぬる　大納言經信卿

○竹内郭公

鶯のねぐらのたけをしめおきておやのあとふむ郭公かな　同

○天仁三年四月師時家卿家歌合、郭公

郭公なかくそいろの鶯にまれに泣くてふことな習ひそ　俊頼朝臣

○千五百番歌合

ほとゝぎす山のいづくにうちはぶき鶯かへるほどを待つらむ　醍醐入道前太政大臣

○正治二年百首

五月雨の雲間の月のをりしもあれ身にしむときの鳥の聲かな　前大納言忠良卿

○千五百番歌合

鶯のいりぬる跡の雲地よりまちつるときの鳥もなくなり　家長朝臣

郭公通ひそむれば卯の花の垣根うかるゝ鶯のこゑ　正三位季能卿

○家集、郭公歌中

鶯の古巣よりたつほとゝぎすあるよりもこき聲のいろかな　西行上人

○正治二年百首
うぐひすのふるすにとめし郭公かへらばさそへ雲にいる聲　寂蓮法師

○建仁元年老若五十首歌合
へだつなる卯の花垣のこなたにて鶯忍ぶほとゝぎすかな　慈鎭和尚

郭公思ひや出づる忍び音をなきておちにし卯の花の宿　同

○正治二年百首
待つことをわかでやもらす郭公卯の花影の忍びねの聲　式子內親王

○家集
郭公初音をまつが崎に來て聞かで歸らむことをこそ思へ　能宣朝臣

○正治五年三島社十首歌、待郭公
せめてなほまつあらましに郭公なかぬ初音を心にぞ聞く　前中納言爲兼卿

○家集
歌林 郭公おのがね山に尋ね來て聞くをりさへの人聲やなす　俊惠法師

○夏歌中
歌苑抄 ほとゝぎす待つ（石間抄イ）夕暮はつれなくて寢覺めの牀の山になくなり　正三位經朝卿

○題不レ知
歌苑抄イ 郭公尋ねに行かむ五月山卯の花かげに啼かずしもあらじ　源雅重朝臣

○家集
萬十 かくばかり雨のふる日を郭公卯の花山になほや啼くらむ　赤人

○題不レ知
萬八 卯の花もいまださかねば郭公さほの山べをき鳴きとよます　中納言家持卿

萬八 古里のならしの岡の郭公ことづけやりしいかに告げ來や　讀人しらず

萬八 つくばねにわがゆけりせば郭公山彦とよめなかましやそれ　蟲麿

○河院攝政家百首、郭公
つくば山ありとやこゝにほとゝぎす花橘の色になくらむ　後九條內大臣

○文治三年閑居百首
たち花に風吹きかをりくもるよをすさびになのる郭公かな　前中納言定家卿

○聞郭公といふを
過ぎぬともこゝろの匂ひをなほとめよ郭公なく宿の立花　光臺院入道二品のみこ

○嘉元元年百首、郭公
啼く聲も檜原の山にこもり江の初瀬をいでぬ郭公かな　參議爲相卿

○貞應三年句題百首、遠郭公
誰が里に聞きなやむらむ郭公ほのめき渡る雲のをちかた　民部卿爲家

○寶治二年百首、待時鳥
郭公來べきよひとやたのままし人は誰かは雲のふるまひ　正三位知家卿

○題不レ知
萬八 神なびのいはせの森の郭公ならしの岡にいつか來なかむ　志貴皇子
萬八 もののふのいはせの森の郭公今もなかぬか山のとかげに　讀人しらず
萬十九 ひとりのみ聞けば悲し（一點ひさし）も郭公にぶの山邊にいゆき鳴くにも　同
萬十 雨はれし（一點あまはりの）雲にたぐひて郭公春日をさしてこゆなき渡る　人丸
萬十二 郭公とばたのうらにしきなみのしばしば君を見むよしもがも　讀人しらず
六帖 千早ふる紀の神の杜にしてそら鳴きしつるほとゝぎすかな　同

○久安百首
なにごとをぬれ衣にきて郭公紀の森に鳴きあかすらむ　清原（輔イ）朝臣

○家集、夏歌中
君こふとふしゐるもせぬに郭公あを山べより鳴き渡るなり　中納言家持卿

○嘉元二年百首、郭公
早苗とるひむろの小川のほとゝぎす聲おちかゝる山あひの里　入道前太政大臣

○常盤井百首、朝郭公
郭公またせまたせて東雲のほがらかにこそなき渡るなれ　源仲正

○家集
散木 なげかじな手向の山の郭公青葉のぬさ（もイ）をとりあへぬまで　俊頼朝臣

○千五百番歌合
一聲は手向の山の郭公ぬさもとりあへずあくるよはかな　從二位家隆卿

○三百六十首中
郭公ほのに初音を聞きしよりよるとしなればめをさましつゝ　好忠

〇千五百番歌合
なほまたむなかでもみまし郭公去年もならしの岡の一聲　大藏卿有家

尋ねばや五月こすともほとゝぎす忍ぶの山のおくの一こゑ　參議雅經卿

〇天仁三年四月師時卿家歌合、郭公
つひになほあはでの森の郭公忍びかねたる聲たてつなり　琳賢法師

〇建保三年内大臣家百首
郭公こゑあらはるゝ衣手の森の雫を涙にぞかる　前中納言定家卿

ほとゝぎす聲や五月のたまをなすわが衣手の森の白露　藤原有季朝臣

〇洞院攝政家百首、郭公
郭公からくれなゐのふりいでて鳴けどもそめぬ衣手の森　光俊朝臣

〇社頭郭公
この森をふるの社ときくからになほ神さびてなく郭公　大宮太政大臣

〇題不レ知
萬十八
ふたかみの山にこもれる郭公今もなかぬか君に聞かせむ　讀人しらず

〇光臺院入道二品親王家五十首、同時鳥
ほとゝぎすよはの名殘りは飛鳥川ゆききの岡にまたも尋ねむ　信實朝臣

玉鉾のゆききの岡の郭公今ひとこゑにくらす頃かな　藤原孝繼

待つ人をなど語らはで郭公ひとり忍びの岡になくらむ　法印光寛

郭公なくや五月をいつとてかなほも忍びの岡の一こゑ　後禪法師

〇永萬二年重家卿家歌合、郭公
誰にこは忍びの岡のほとゝぎす猶うちとけぬよはに鳴くらむ　藤原頼保

〇新六一
夏きてもしのびの岡の郭公なほこがくれに五月まつなり　正三位知家卿

〇百首歌中、人家
五月まづ忍びの岡のほとゝぎす卯の花ちりぬ聲な惜しみそ　法印印宗

〇元永元年正月中院入道左大臣家歌合、郭公
五月闇くらぶの山の郭公聲はさやけきものにぞありける　修理大夫顯季卿

○保安二年閏五月贈左大臣長實家歌合、郭公
待ちかねてくらぶの山の黄昏にほのかになのる時鳥かな　藤原爲忠卿

○弘長元年百首、郭公
月よりもいでさき立ちてよひの間のくらぶの山になく時鳥　後九條内大臣

○寶治二年百首、聞郭公
千早ふる神がき(をかイ)山をこえすぎてなく時鳥身をや惜しまぬ　同

○洞院攝政家百首
ふたかみのみねをやすらふ郭公心づくしの聲ぞふりせぬ　光明峯寺入道攝政

○同
郭公やどりやすらむたち花の小島が崎の曙の空　同

○七百首歌中
今しばしまち心みむ時鳥よも來なかではやましなの里　權僧正公朝

ゆくべきをはしたたしたる時鳥はしのこなたになき渡らなむ　能宣朝臣

この歌はあはた殿のいし山にまうで給ひけるにせたの橋のあなたには
ほとゝぎすのなくを聞きてよめると云々

○家集
いづちとか鳴き渡るらむ時鳥みかきの原もまだあけぬ夜を　大宰大貳高遠卿

○殿上會郭公
なき渡るみかきの原の時鳥なべての里にこゑなふるしそ　源仲正

○家集、古來歌合
夏衣たつたの山のほとゝぎす袖かた敷きて待たぬ夜はなし　小辨

○同歌中
續後拾遺夏
たち歸りたがとへばかも郭公おのが名をのみなのるなるらむ　元方

○小倉山の郭公
夕されば空もをぐらの郭公あらしの山にこゑな忍びそ　大納言經信卿

○正治二年百首
郭公うの花山のあかずして空にしられぬ月になくなり　喜多院入道二品のみこ

○岡屋入道攝政家百首、郭公聲遠
さてやさはなかで過ぐべき郭公五月くるまで音づれもなし　民部卿爲家

○題不レ知
萬十
郭公なく聲きくや卯の花のさきつる岡にたぐさひくいも　人丸

○家集、夏中
後撰夏　伊勢集
卯の花の匂ふ五月の月清みいねず聞けとやなく郭公　中納言家持卿

○いるまのふたみのうらにて
たまくしげふたみの浦の郭公あけがたにこそなき渡るなれ　前中納言匡房卿

○郭公歌中
大君のみかさの山の郭公たづぬる程の夕日さすらし　同

○同
まどろまでまつかひなしや郭公あしたのはらに一聲ぞなく　同

○家集、桑門
しられじな水無瀬の里の郭公今も戀しきねのみなくとは　光俊朝臣

○同
郭公鳴く音ほどなくあくるよに契り短き久米の岩はし　正三位知家卿

○同
さして行くかさとり山の郭公こよひはこゝに雨やどりせよ　藤原基俊

○柳集
一字抄
たどりゆくしがの山路をうれしくも我に語らふ郭公かな　花園左大臣

○文永二年白川殿七百首
山かげのふはの關守とはねども心となのる郭公かな　光俊朝臣

○題不レ知
懐中　百首歌現存六
秋のみそいぶきの山の郭公まれに鳴く音はうれしからぬを　讀人しらず

○百首歌
現存六
郭公なきてのちせの山もなほねられぬ空に有明の月　前大納言基良卿

○百首續歌
不用
月かげのいるさの山の郭公あふぎをあぐる人や聞くらむ　後九條内大臣

○家集、暮山郭公
夕づく日いるさの山にときしまれをりはへて鳴く郭公かな　修理大夫顯季卿

○海路郭公
今日もなほ船出物うし郭公聲たか砂にたえずなきけり　同

○家集
郭公なきわたるなる波の上に聲たゝみおくしがの浦風　西行上人

○題不レ知

一字抄
郭公いかできかまし音羽山すそ野の里にやどらざりせば　藤原盛房

○仁和元年行平卿家歌合、郭公

おぼつかな風羽の山の郭公さすがにいはぬことな頼みそ　讀人しらず

○同

あけぬまに箱根の山の郭公ふた聲とだに鳴きわたるらむ　同

○永萬二年重家卿歌合、郭公

郭公まちかね山の一聲はきくにつけても恨めしきかな　同

○保安二年閏五月贈左大臣長實卿家歌合、郭公

夏びきのいとかの山の郭公くるしきまでにまたれてぞ鳴く　源兼昌

○同

鳴きて出るみ船のやまの郭公いかなる方へさして行くらむ　神祇伯顯忠卿

○同

郭公いくよな／＼か待たせつゝたまさか山になき渡るらむ　藤原忠隆

○承安二年前參議教長卿家歌合、隣郭公

月よりもなぐさめかねつ郭公をばすて山の曙の聲　清輔イ原朝臣

○千五百番歌合

新後撰夏
郭公なれも心やなぐさまぬをばすて山の月になく夜は　宜秋門院丹後

○正治二年百首

風雅夏
郭公よこ雲かすむ山のはの有明の月になほぞ語らふ　式子內親王

○同

ほとゝぎすなこりぞいとゞをしほ山小松が原の曙のこゑ　隆信朝臣

○同

思ふことといはでの杜の郭公つひにはこゑも色にいでけり　喜多院入道二品のみこ

○續集

夏ばかりいくたの杜のこととひて秋風しらぬ郭公かな　後九條內大臣

○同集、旅泊郭公

うきねする湊はすぎぬ郭公いくたの杜やとまりなるらむ　從二位家隆卿

○建保三年內大臣家百首

新拾遺　家集
つの國のいくたの杜の郭公おのれすまずば秋ぞ問はまし　同

○寬治八年八月京極關白家歌合、郭公

ほとゝぎす心のまゝに尋ねつゝいはたの杜に一聲ぞきく　權中納言通俊卿

○中務卿親王家歌合、水郷郭公
みしまえやあしのかりねの短夜にきくもほどなき郭公かな　従二位顕氏卿

○郭公中
郭公待ちし渡らばやつ橋のくもでのかずに聲をきかばや　俊頼朝臣

○同
ほとゝぎすなくねの影しうつらねば鏡の山もかひなかりけり　同

○同・
あさねがみゆふのみ山の郭公はやうちとけぬ思ひ亂れて　同

○同
郭公すゑの松山風ふけば浪こすくれにたちゐなくなり　同

○山中郭公
時鳥おのがねやまのしひしばにかへりこばやと訪れもせぬ　同

○夕聞二郭公一
みくま野のはまゆふかけて郭公なくね重ねよ幾重なりとも　同

○南山の御幸のとき
みくま野の山路になのる郭公神も初音や嬉しかるらむ　後鳥羽院御製

○御集
拾哀傷
こゝにだにつれ〴〵となく時鳥ましてこがねの杜はいかにぞ　謙徳公

○五月くらまにまうでたりけるに郭公をききて
五月やみくらまの山の郭公覺束なしやよはのひと聲　藤原清正

○かみなびのもりの前をわたるとて
神なびの杜のあたりのほとゝぎす一聲きかで行きやすぎなむ　惠慶法師

○御集、古來歌合
郭公いづる山路に旅寐してよはにかへらむ聲や聞かまし　堀川右大臣

○寛治七年五月郁芳門院根合
なかずとて打ちも伏されず郭公聲まつ人もねがたかりけり　讀人しらず

○禖子内親王家歌合、郭公
忍びねにこがくれ行きし郭公聲さみだれてなき消ゆるなり　同

○仁和元年行平卿家歌合、郭公
みやこいでていづくも旅ぞほとゝぎすこゝにも結べ草の枕は　同

○同
續後拾夏
ほかにまたまつ人あれや郭公心のどかにこゑのきこえぬ　同

○承安二年閏十二月東山歌合、曉郭公
○同
○千五百番歌合
○百首御歌
○御集、郭公
○文治六年五社百首
○正治二年百首
○三體和歌
○となりをあらそひて郭公をきくといふことを
○光臺院入道二品親王家五十首、問郭公
○家集、時鳥
○顯季かつらの家にて暮天郭公を
○殿上にて郭公十首歌

時鳥なにとて聲をかはすらむ羽かく鳴はともならなくに　道因法師
夜をこめていづちゆくらむ郭公有明の月に友呼ばふなり　法橋顯照
此の歌判者清輔也云左首尾かなひてきこえず又郭公ともよばふとはふ
るくよめばにやと云々
郭公去年のふる聲今更になにかは忍ぶおのが五月を　宜秋門院丹後
柴の庵のかけ樋の水の音とめよ谷のすぎふに郭公なく　喜多院入道二品のみこ
聞けばありきかねばわびし時鳥すべて五月のなからましかば　花山院御製
郭公さやかに近くなく聲は濁れるよにはあはずもあるかな　皇太后宮大夫俊成卿
さとさそふ花たちばなの夕風に山郭公こゑかをるなり　慈鎭和尚
住みなれし卯の花月夜ときふけて垣根にうとき山ほとゝぎす　鴨長明
誰が方に心さすらむ郭公さかひの松のうれになくなり　西行上人
あふちさく岡邊にきなく郭公藤のゆかりの色やとふらむ　從二位家隆卿
堀後　散木夏
ほとゝぎず鳴く音雲居にとゞろきて星の林やうづもれぬらむ　俊頼朝臣
散木夏
暮れにけり聲をさめてよ郭公己が小倉の山にはあらずや　同
同
初めなき身の初めより郭公あかでも夜々をすぐしけるかな　同
同
ほのめかすうきたの森の忍び音に思ひ沈みて明かしつるかな　同

○郭公ともしからずといふことを
同
今こそはふたむら山の郭公聲をりはへてあやになくなれ　同

○久安百首
郭公衣のせきに尋ねきてきかぬ恨みを重ねつるかな　前參議親隆卿

○家集、深山聞郭公
斧の音もしばしはをやめまきもくの檜原の山に郭公鳴く　權大納言實家卿

○馬上聞郭公
郭公みさかのかたになくなべに駒渡しえぬ木曾のかけ橋　同

○老若五十首歌合
郭公みあれのしめに引きこめて外にけがさぬ聲をきかばや　慈鎭和尚

○後鳥羽院城南寺にて御會ありけるに、雨中時鳥
早苗とる鳥羽田の面に雨おちてをりはへ來なく郭公かな　後京極攝政

○千五百番歌合
飛ぶとりのあすかの里の郭公昔のころになほやなくらむ　同

○名所郭公
こと問はむ墨田川原の郭公昔の鳥のあとに啼くなり　後九條内大臣

○御集
五月雨の雲のかゝれるまきもくの檜原のみねになく時鳥　鎌倉右大臣

○同
郭公きくとはなしにたけくまの松にぞ夏の日かずへぬべき　同

○同
郭公きなく五月の卯の花のうきことのはのしげき頃かな　同

○六帖題
新六ノ六
さつき山雲は晴れぬと郭公卯の花月夜さやかにぞなく　正三位知家卿

○家集
晝はいでてすがたの池にかげうつせ聲をのみ聞く山時鳥　西行上人

○家集、文永元年、名所郭公
たかやすにうつりにけりな郭公いこまの山をこえて語らふ　權僧正公朝

○建保三年内大臣家百首、對郭公
なごりまで雲なへだてそ郭公いこまの峯の月になく聲　信實朝臣

○承久元年内裏歌合、夏曉更
忘るなよきなれの山の郭公なきてわかるゝ曉の空　前大納言伊平卿

○百首御歌
夏衣きなれの里のほとゝぎすかはらずぞきくこぞのふる聲　順徳院御製

○御集、夏夜戀
なけやなけ待つ夜ふけゆく郭公ぬし定まれる戀の山路に　後九條内大臣

○後京極院の御影の前にて講ぜられける三首歌、名所郭公
水無瀬川昔のあとのほとゝぎす忍ぶにたへぬ音をや鳴くらむ　中務卿のみこ

○喜多院入道二品親王家五十首
はやもなけいはたの森の郭公心おそくは手向けせざりつ　皇太后宮大夫俊成卿

○嘉祿四年百首
夕暮のいはたの小野のほとゝぎす語らひ捨てて山路こゆなり　民部卿爲家

○同
まちゝたるいこまの嶽の郭公雲なへだてそ行く方もみむ　同

○弘長三年内裏百首、雲間郭公
白雲のうへかた山のほとゝぎす空には誰かこと語るらむ　從二位行家卿

○近聞郭公
玉夏 あはれにも共に伏見の里にきて語らひあかす郭公かな　皇太后宮大夫俊成卿

○文應元年七社百首
郭公聲ふりたてて鈴か山いまぞ關路をこえてなくなる　民部卿爲家

○正治二年百首
續千夏 ほとゝぎすしばし休らへ菅原や伏見の里のむらさめの空　前中納言定家卿

○建保三年名所百首
月宿るみもすそ河の郭公秋のいくよもあかずやあらまし　同

○同
郭公こよひみ山をいづみなるしのだの杜に一聲ぞきく　兵衛内侍

○同
松浦がたひれふる山の郭公あかでも聲の遠ざかりぬる　正三位知家卿

○郭公歌中
散木 郭公まつら佐保姫たちゐしてひれふる山に聲な惜しみそ　俊頼朝臣

○西園寺入道前太政大臣家百首
しろたへの衣ほすより郭公あまのかぐ山をりはへてなく　從二位家隆卿

○中務卿親王家五十首歌合
かこ山のさかきがうれの郭公常世の鳥の音にやなくらむ　權僧正公朝

判者光俊朝臣右とこよの鳥など日本紀問多尋ね入りてかげざまに侍れ
ば勝の字をゆるさるべくや侍らむ云々

○建保三年名所百首
郭公なくひと聲や過ぎぬらむ今ぞあけゆくあまのかぐ山　知家卿

○同
よを重ねいな野の小篠ふしのまもなくや五月の山時鳥　行能卿

○郭公御歌中
しながどりゐな山わかれ郭公なきゆく聲は旅人ぞきく　鎌倉右大臣

○同
ものゝふのやそうぢ山の郭公わびても誰につげよとか思ふ　同

○建保三年内大臣家百首、嶺郭公
一こゑも啼きていなばの峯に生ふるまつかひあれや山時鳥　大藏卿有家

○千五百番歌合
新續古離別
今はとていなばの山の郭公忘れがたみの一こゑもがな　法橋顯昭

○くまのにまゐらせ給ひける時
聞きすててよそにはすぎじ郭公かづらき山の雲に啼くなり　後鳥羽院御製

○夏歌中
なき渡るこゑうつりせば郭公ひのくま河に駒とめてまし　源頼國朝臣

○文治三年百首
いかにせむひのくま川のほとゝぎす只一聲の影もとまらず　前中納言定家卿

○承久二年四季百首
新後選歌
こと問はむ聲も惜しまぬ郭公なにかうきたの杜のよごとに　同

○院北面にて、郭公
續千
まちあかすさよの中山なか〳〵にひと聲つらき郭公かな　同

○建保二年三月屏風歌
五月雨のふるの神すぎすぎがてに木高く名のる郭公かな　同

○秀能すゝめける五十首
戀すとやなれもいふきの郭公山のしづくに羽しをるらむ　同

○承久元年内裏御會、曉郭公
新後撰成
ほとゝぎす出づるあなしの山かづら今や里人かけてまつらし　同

○三十首歌、野郭公
宮城野の木の下露にほとゝぎすぬれてやきつる涙かるとて　同

○最勝四天王院名所御障子
郭公鳴くや五月もまだしらぬ雪は富士の峯いつとわくらむ　同

○御集、郭公
時しらぬ富士のたかねの郭公雪のうちなる聲も珍らし　中務卿のみこ鎌倉

○建保四年内裏十首歌合
郭公こゑきく小野のはぎがえを鳫の涙のいつかそむべき　従二位行能卿

○家五十首、里時鳥
色ふかく誰もしのぶの里の名を山郭公なく／＼ぞとふ　光臺院入道二品のみこ

郭公いつみよし野の里なれてたのむの鳫のあと忍ぶらむ　法印定範

ほとゝぎすおきゐの里に過ぎぬなりいかなる人の夢結ぶらむ　従二位範宗

○洞院攝政家百首、郭公
涙こそ露とおくらめ郭公おのがなつ野のふかくさの里　後九條内大臣

○家五十首、里郭公、光臺院入道二品親王
深草の里をはかれぬほとゝぎすながなく方を誰恨むらむ　正三位家衡卿

○郭公を
歌苑抄 住吉の松をばしらで郭公とほざとをのの方になくなり　寂念法師

○百首御歌中
すみよしの神もまつとや已が音を手向けてすぐる郭公かな　慈鎮和尚

○同
聞く人もおいその杜のほとゝぎすなごり露けきみな月の空　同

○同
よどのあたり夜深き空の郭公みなせ河原のくもぢをぞ行く　同

○同
軒の雨のやど訪ふよりも郭公かわける聲に袖のぬれける　同

○同
五月雨に山郭公聲ぬれて軒のあやめの色になくなり　同

○永萬二年歌合、時鳥
五月雨にしをれつゝなく郭公ぬれ色にこそ聲もきこゆれ　太宰大貳重家卿

○河國名所歌、雨山
雨山に來つゝなけばやほとゝぎす聲の色さへぬれ渡るらむ　爲忠朝臣

○和二年五月四日內裏歌合、待郭公
五月雨にふり出でてなけと思へどもあすの爲とやねを殘すらむ　侍從輔正卿
判者云郭公といふ事なけれど歌かたちよしとて爲勝

○千五百番歌合
ときしもあれ花ちる里の軒の雨におのが五月のとりの一聲　後京極攝政

○山寺郭公
郭公聞きにとてしも籠らねど初瀨の山はたよりありけり　西行上人

○舟中郭公
まつらふね舵とりまはしこぎ廻れたまつしまわに郭公なく　源仲正

○洞院攝政家百首、郭公
まきのたつ荒山いづる郭公くにのみやこにさつきつくなり　從三位行能卿

○同
なれぬればよるもやこゆる郭公小倉の峯の雲の通ひ路　後九條內大臣

○同
なりならずおふのうらなしうらなれてねぬに語らふ郭公かな　洞院攝政

○同
武藏野やしばしやすらへ郭公已がいるべき山のはもなし　同

○同
むさしのやそこともしらぬ足曳の山郭公近くなくなり　從二位賴氏卿

○同
夜もすがらねぐら定めぬ聲すなりさもいざとなる時鳥かな　宗長朝臣

○同
郭公雲のよそにや過ぎぬらむあさくら山のよはの一こゑ　俊成卿女

○久安百首
あさくらやとはぬになのる時鳥きのまろ殿のなをたてじとや　前參議親隆卿

○關白家歌合
郭公雲居はるかになのればやあさくら山のよそに鳴くらむ　前中納言匡房卿

○弘長元年百首歌
里わかずなのるなれども郭公朝倉山のたそがれの空　民部卿爲家

（家集、聞郭公と云ふことを）
あまのすむすまの關路の郭公なくねよ誰にうらみそめけむ　同

（成實卿すゝめける歌に、渡郭公）
をふねまつみつのむかひの郭公渡らぬさきに行く心かな　同

○百首歌
眞菰かるみつのみまきの夕まぐれねぬに目覺むる時鳥かな　前中納言定家卿

（建長三年毎日一首中）
五月きてけふみかの原郭公しばしはこゝに宿をかせ山　民部卿爲家

○同
神まつるけふの五月の郭公もとの宮るをうつしてぞきく　同

○同
郭公なのる初音もいくかぞと飛火の野守ことやとはまし　同

○同五年五月三首歌、河邊郭公
郭公きくもわかれずいさや河いさや又ともなかぬ初音は　同

○夏歌中
現存六
郭公今いくかとは忍び音にとぶひの野守五月待つらむ　前大納言爲氏卿

（題不知）
萬十四
信濃なるすがのあらのに郭公なく聲きけばとき過ぎにけり　人丸

（千五百番歌合）
郭公いつか忘れむ吾妻路やすがのあらの野のよはの一聲　從三位保季卿

大江山いそぎいく野のみちにしもことを語らふ郭公かな　小侍從

おとなしの山郭公いつよりかこゝに鳴くとは人にしられじ

（文應元年七社百首）
からさきのまつとせしまに郭公神に手向けて初音なくなり　民部卿爲家

（前大僧正源慈泉（家イ）隆子給）
からさきの松の一木をやどりにてとやまに通ふ郭公かな　參議爲相卿

（雜念百首中）
山路よりいでてやきつる里近きつるが岡邊になく郭公　同

（社道稱次鏡百首（百首鏡山歟））
月殘るかゞみの山のほとゝぎす峯より里にうつりてぞなく　同

○五十首歌、雲葉
少女子が袖ふる山の夕ぐれにつれなくすぐる郭公かな　祝部成茂

○題不レ知、人家
橋姫のまつよふけてや時鳥まきのをやまに初音なくらむ　源重方

○同治木
磯の浦なみのたまものなのりそをおのが音にかる時鳥かな　和徳門院

○同太政大臣
なき捨てて行方もしらず時鳥ゆらのと渡る曙のこゑ　前關白太政大臣

○保安二年閏五月家歌合、郭公
時鳥われがまつをばいとへどもなき渡るなりあまの橋立　贈左大臣長實卿

○弘安二年[illegible]根宮百首、郭公
まどろまでおきつの濱の時鳥なほまつかひも浪のよる〳〵　安嘉門院四條

○文永二年七月白河殿百首、渡郭公
淡路がた沖こぐ船のほかに又これもとわたる郭公かな　光俊朝臣

○保安二年閏五月贈左大臣家歌合郭公
吾妻路や不破の關屋の曙にほのかにぞ鳴く山ほとゝぎす　源經宗朝臣

○洞院攝政家百首
ときはなるいはねの山の郭公つれなかれとはまたぬ夕暮　從三位行能卿

○結緣經百首
石見のや高角山のほとゝぎす此の五月雨にぬれつゝぞなく　少將內侍

○光明峯寺入道攝政家七首歌合、旅時鳥
吾妻路のあしがら山の郭公こえ行く雲の上になくなり　從二位賴氏卿

○家集
郭公なげきの森にあはずして君が待つをばすぎにけるかな　修理大夫顯季卿

○嘉禎二年十首歌合、時鳥
かんさぶるなげきの杜の時鳥ひくしめなはもなく〳〵やこし　後久我太政大臣

しがらきのとやまの末の時鳥たがさと近き初音なくらむ　隆祐朝臣

○仙洞三首歌、河邊時鳥
郭公おのがさつきの名取河はや埋れ木のあらはれてなけ　少將內侍

○問時鳥といふことを
なけや今をちかたすぐる時鳥名にはなこその關といへども　前右兵衛督爲敎卿

○家集、雨中時鳥
五月雨にいまきの岡の郭公しとゞにぬれてなき渡るなり　修理大夫顯季卿

○中院入道右大臣家歌合、郭公
郭公いまきの岡のひと聲は五月なれども珍らしきかな　神祇伯顯仲卿

○題不レ知
六帖 かたをかの小松の森の郭公ほのかにぞなく戀しかるべき　讀人しらず

○杜郭公
石間 夏衣たつたの杜のほとゝぎすけふをりはへて初音なくなり　平範忠朝臣

○山郭公
心なきいはきの山の郭公はつねは人にさぞ惜しむらむ　法印圓勇

○五月のすゑの歌人々よみけるに
今はとて山路に歸る郭公なごしの月もありといふなり　能宣朝臣

○内裏にて時鳥待つとて連歌に
かきこもりなどや音せぬほとゝぎす鎌倉山に路やまどへる　實方朝臣

五月雨

○十五首番歌合
長秋詠草 早苗つきさみだれそむる初めとやよもの雨雲くもり行くらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○百首御歌
水まさるにぶの川瀬の五月雨に杣人しらぬまきながるなり　中務卿のみこ

五月雨の雲まくのきの郭公雨にさはりて聲のおちくる　慈鎭和尚

○家集、河五月雨
五月雨にやそうぢがはを見渡せば網代やいづこ瀬々の埋れ木　信實朝臣

○家集、五月雨
五月雨に水まさるらしうちはしのくもでにかゝる浪の白絲　西行上人

○同
ひろせ川わたりの堰のみをじるし水嵩そふらし五月雨の比　同

○同
流れやらでつたの入江にまく水は船をぞもやふ五月雨の比　同

○同	五月雨はゆくべき路のあてもなしをざゝが原もうきに流れて	同
○同	舟とめし湊のあしまさをたえて心ゆくらむ五月雨のころ	同
	散木 雲はれぬ五月きぬらし旅衣むづかしきまであまじめりして	俊頼
	家集 とけてすらぬる山もなき五月雨は寢覺め勝にて明かしつるかな	好忠
○千五百番歌合	五月雨は賤の垣根に日數へてあさのはぎえをほす隙ぞなき	土御門内大臣
	天の川やそせもしらぬ五月雨に思ふも深き雲の水尾かな	前中納言定家卿
	五月雨にかひやのけぶりうちしめり山田のくれに蛙鳴くなり	従二位家隆卿
○六帖題	新六二 五月雨のひまなき比もさを鹿のうはけの星は曇らざりけり	衣笠内大臣
○治承二年左大臣家百首、五月雨	五月雨に柴のいほりはかたぶきて軒の雫の音ぞみじかき	後京極政
○建仁元年老若五十首歌合	さつきやま雨にあめそふ夕風に雲よりしたをすぐる白雲	同
○洞院攝政家百首、五月雨	五月雨はむなしき空にみちぬらし行く方みえずあくる白雲	後九條内大臣
	五月雨も月のゆくへはしられけりひとむら白き山のはの雲	従二位行能卿
	いとゞまた雪氣の水やかさぬらむふじの高嶺の五月雨のころ	信實朝臣
○四季百首、雨	五月雨にまことの浪もこえにけり卯の花白き玉河の里	慈鎮和尚
○百首御歌、五月雨を	人またばいとひやせまし庭の草にあなところせの雨の景色や	同
○家集、山家五月雨	なびき伏す軒のくれ竹枝見えてたきつせ青きのきの五月雨	前民部卿雅有

百首の歌中に
五月雨は晴れぬとみゆる雲間より山の色こき夕ぐれの空　中務卿のみこ

○嘉元元年百首、五月雨
新後拾夏　みなと河うはなみ早く且こえてしほまでにごる五月雨の比　參議爲相卿

○乾元二年二月、五月雨
日を重ね軒端におほふ雨雲のよそにもならぬ五月雨のころ　同

○君臣御歌合
五月雨はところ〴〵にたきおちて見ぬ山河の數ぞそひ行く　前中納言爲兼卿

○嘉元元年仙洞三十首、五月雨
雫そふ水まで石をうちわびてうき五月雨にほどふりにけり　從二位爲實卿

○山の五月雨
明玉　五月雨はいくかになりぬまきもくのあなしの山にとく井たり（本ノマヽ）　大藏卿行宗

○御集、江五月雨
五月雨も久しくなりぬ住の江の行きあひの雲の隙やなからむ　後九條内大臣

○喜多院入道二品親王家五十首
遠方やながめし峯も雲路にて山こそなけれ五月雨のころ　大藏卿有家

○正治二年百首
麓までひとつ雲路となりはてて山のはもなし五月雨の空　從二位家隆卿

○十題百首御歌
昨日けふちさとの空もひとつにて軒端にくもる五月雨の空　後京極攝政

○五月雨歌中
しのぶ草しげき雫はなか〳〵に人にしられぬ五月雨のやど　從二位家隆卿

○同
徒然とあしやの海士のをぐしさす五月雨髮やほさでねぬらむ　同

○永萬二年五月經盛卿家歌合、五月雨
五月雨は岸の柳のこずゑこそ淀の渡りのふなぢなりけれ　藤原資隆朝臣

○蓮生法師八十賀に
五月雨はしのにきぶねの河やしろぬれて干すべき夏衣かな　民部卿爲家

○資盛家歌合、五月雨
五月雨は雲まもなきを河やしろいかに衣をしのに干すらむ　俊成卿

○正治二年百首
みたやもりそともの池に水みちてかねてあきある五月雨の空　同

長秋詠藻
五月雨は高嶺も雲のうちにしてなるさはふじのしるしなりける　同

五月雨にふじのなるさは水こえて音や煙に立ちまさるらむ　慈鎮和尙

みそらにはいほへの雲の晴れずのみ雨間もおかぬ五月雨の空　前大納言隆房卿

新六一
日數へて行きつもりぬる雨雲のかへりわづらふ五月雨の空　正三位知家卿

山のはに月もまちいでよを重ねなほ雲のぼる五月雨のそら　前中納言定家卿

五月雨の雲のまぎれになかたえてつゞきも見えぬ山の掛橋　同

花にとひ月に尋ねし友もなしくもこす峯の五月雨のころ　後京極攝政

橘の匂ひこずゑにさみだれて山郭公こゑかをるなり　西行上人

霞しくおぼろ月夜と見しものをへだてはてつる五月雨の空　參議雅經卿

五月雨は雲まなけれど久方の月のさかりはなほしるきかな　前大納言衆宗卿

六五　玉戀　新撰集
五月雨のたそがれどきの月影のおぼろけにやはわが人をまつ　躬恒

眞金だにとくといふなる五月雨に何の岩木のなれる君ぞも　能因法師

まがねふくおとたえにけり五月雨の日數ふりゆくきびの中山　藤原道經

限りあれば雪もけぬらし富士の山はれせぬ雲の五月雨の空　民部卿爲家

あしのやのうなひをとめのぬれ衣ころも久しき五月雨の空

五月雨に竹の若葉もたわむまでたまぬきかくるくもの絲すぢ　同

〇治承二年右大臣家百首
〇正治二年百首
〇六帖題、五月雨
〇喜多院入道二品親王家五十首
〇洞院攝政家百首、五月雨
〇御集
〇雨中郭公
〇百首歌、五月雨を
〇千五百番歌合
〇待人
〇家集、夏戀
〇元永元年正月十日中院入道右大臣家歌合、五月雨
〇千首歌
〇毎日一首中

〔正元二年毎日一首中〕
あらし山くづれておつるたきつせの雲まに白き五月雨の頃　同

〔文永四年毎日一首中〕
はれまなきそともの山の五月雨にふる日かさなる峯の雨雲　同

〔寛元四年日吉社歌合に五月雨を〕
山もとの入江の磯に瀧おちてしほのおさるゝ五月雨のころ　信實朝臣

〔光俊朝臣家會、夏河〕
新玉 苔のむす岩のがけ道水こえぬきさのをがはの五月雨の比　源仲遠

〔夏歌中〕
歌林 ともづなをとかで幾日になりぬらむなか井の浦の五月雨の比　憲盛

萬代 こまわにすやすの河原の柳かげしづえはひぢぬ五月雨のころ　後德大寺左大臣

〔家集〕
水なしと聞きてふりにしかつまたの池あらたむる五月雨の比　西行上人

磯の上ふるのたかはし高しとも見えずなりゆく五月雨のころ　二條院讃岐

〔衛門督家三百六十首歌合〕
浪こゆるやそせやいづく五月雨にいせのすゞかの山河の水　光俊朝臣

〔夏歌中〕
萬代 船よばふ聲も及ばずなりにけりおほえの岸の五月雨の比　源長俊

〔後九條内大臣家歌合〕
五月雨にせきりの浪のわきかへりさのゝなか河水まさるなり　具親朝臣

〔千五百番歌合〕
風雅夏 五月雨にこえゆく浪はかつしかやかつみがくるゝまゝの繼橋　參議雅經卿

〔最勝四天王院名所御障子〕
五月雨はひまこそなけれ津の國のあしやの里の雲のやへぶき　慈鎭和尙

〔千五百番歌合〕
津の國の蘆のまろやの五月雨に隙こそなけれ雲の八重ぶき　具親朝臣

〔家百首御歌、五月雨〕
五月雨に灘のしほやきいとまあれやおのがたぐひの煙休めて　洞院攝政

〔禖子内親王家歌合、五月雨有餘〕
五月雨のながき五月の水深みたま江のあしの夏がりもせし　加賀右衛門

○寶治二年百首
五月雨は岸のうはてに船つけてなぎさをみをの淀の河水　　民部卿爲家

○千五百番歌合
五月雨はたのみしのべに水こえていかに尋ねむもずの草ぐき　　大納言通具卿

○喜多院入道二品親王家五十首
見渡せばあやめにすがる五月雨の軒の雫やけふのくす玉　　正三位季經卿

○天慶二年二月貫之家歌合、懸仲夏
ふり暮す五月の空のながめにはねのみなかれて人ぞ戀しき　　讀人しらず

○天仁三年四月師時卿家歌合、五月雨
七日ふる五月の空のさかなればはれずも人をわびさするかな　　仲實朝臣

○久安百首
五月雨のふるや板間の隙をあらみもりしめてけり牀朽つるまで　　花園左大臣家小大進

○弘安元年百首、五月雨
たえもせずけふはいくかと五月雨のいとぬきかくる軒の玉水　　常盤井入道前太政大臣

○喜多院入道二品親王家五十首
五月雨のをやまぬほどはうちはへて軒よりおつる布引の瀧　　源　師光

○家集、五月雨を
五月雨の雨間の空やふけぬらむ木々の雫の音ぞすみぬる　　源　有仲

○洞院攝政家百首、五月雨
立ちのぼる雲間に山は見えそめてやみかたしるき五月雨の空　　民部卿爲家

照射

○百首御歌
照射する高圓山のしかすがに己れ鳴かでも夏はしるらし　　順徳院御製

○御集、照射を
あくるまで箱根の山にねらへども鹿のたちどぞともしかりける　　法性寺入道關白

○同
五月闇くらぶの山にともしして鹿ふす牀を尋ねかねぬる　　同

○同
五月闇ほぐしの松をしるべにているさの山に照射をぞする　　同

○同
月をだにもあはせぬ程に明くる夜は照射の鹿や嬉しかるらむ　同

○百首歌
五月闇ともしにいづる狩人のおのが思ひに身をや燒くらむ　重之

○家集、夏歌
夕されば照射にいづる狩人のやど寂しくやいもがなくらむ　少辨

○家集、ともし
狩人の夏のよ深くいるさやま照射の影の見えみ見えずみ　二條院皇太后宮大貳

○百首歌
うちま山すその河原にともす火は空悲しくや鹿は見るらむ　六條院宣旨

○長久二年五月庚申夜祐子内親王家名所歌合、むさし野のともし
武藏ののともしにぞいる紫の鹿のゆかりと思ひなしつゝ　讀人しらず

○いなみののともし
いなみのの草の茂みに見ゆる火や鹿のたちどの照射なるらむ　同

○長治元年五月源宗光家歌合、山路照射
五月闇たつきも知らぬ照射すと鹿の山路にねらひきにけり　俊賀法師

つくばねの峯路に見ゆる照射かな葉山の裾に鹿やふすらむ　藤原助則

○正治二年百首
照射する比にしなれど筑波山このもかのもぞあらはなりける　二條院讃岐

○家集、みじかきよのともし
徒らにほぐしの數やあまるべきはやまをいれば鐘聞ゆなり　權大納言實家卿

○家集、戀歌中
照射する人やしるらむしのぶ山しのびて通ふおくの思ひを　從二位家隆卿

○文治六年五社百首、照射
ますらをは鹿に心をかけつゝやしのぶの山によをあかすらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○同
雲居までゆく螢かと見えつるは高間の山の照射なりけり　同

○同
照射にもしながどりをや大丈夫がるなの端山をわけ忍ぶらむ　同

○正治二年百首
いくよろも葉山の露に絞るらむともしになるゝ賤のますらを　同

○家集、終夜照射を
よをへつゝならの葉茂き夏山にほぐしにかけて幾夜明かしつ　神祇伯顯仲卿

○家集
梓弓高圓山にともすひはほぐしにかけているにやあるらむ　左京大夫顯輔卿

○御集
五月闇くらぶの山にともしして鹿ふす牀を尋ねわびぬる　法性寺入道前關白

○久安百首
家
ことわりやさこそは辛く思ふらめ照射の鹿のめをもあはせぬ　藤原清輔

○千五百番歌合
夏山のともしのかげに星見えて麓に誰かさつを待つらむ　嘉陽門院越前

○百首御歌
照射する賤がゆくへの悲しさも思ひしらるゝ五月闇かな　慈鎭和尚

○百首歌中
梓弓ひけば木末よる〳〵はいるのの照射しかや悲しき　從二位家隆卿

○文治二年百首
夏ごろも立田の山にともしすといくよ重ねて袖ぬらすらむ　前中納言定家卿

○同五年百首
ともしする茂みが底のすり衣袖のしのぶも露やおくらむ　同

○家集、照射を
しげ山のほぐしの光ほのみえて木のまかすかにあくる東雲　前大納言爲氏卿

○六帖題
新六二
照射する端山の鹿は我が如くよにあはでこそ身はたすくらめ　光俊朝臣

○千五百番
火串かけ鹿にあひづの山なれば射るにかひある獵男なりけり　法橋顯昭

○堀川院御時百首
あひづ山裾野の原に照射すとほぐしに火をぞかけ明かしつる　仲實朝臣

○重家卿家歌合、照射
道とほみほぐしの松もきえぬべし八重山越ゆるよはの燈火　同

○天喜四年五月六日右大臣家歌合
照射
照射して逢坂までと思ふかないるをば關のとゞめざらなむ　讀人しらず

○家集十首歌、照射及曉
一字缺イ
ともせども今宵も明けぬ徒らに逢坂山もかひなかりけり　修理大夫顯季卿

○堀河院御時百首

五月山みねたつ鹿よ心せよともしのせこもみだれいるなり　權大納言公實卿

照射する端山の原にたつ鹿のめも見えぬよを歎きてぞふる　俊頼朝臣

麥

○三百六十首歌中

山賤のはたにかりほす麥のほの碎けてものを思ふ頃かな　好忠

○家集

みそのふに麥の秋風そよめきて山時鳥しのびなくなり　俊頼

○田家夏日

刈りし穗のそともの麥も朽ちぬらし干すべき隙もみえぬ五月雨　清輔

○正治二年百首

種まきし木の下麥のほにいでて風におきゐるやまはたのいほ　前大納言隆房卿

○正暦四年五月帶刀陣歌合、蟬

おくるてふ蟬の初聲きくよりも今かと麥の秋をしりぬる　讀人しらず

牡丹

○百首御歌

夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色こきふかみ草かな　慈鎭和尚

○久安百首

紅のいろ深見草さきぬればをしむ心もあさからぬかな　前參議教長卿

○建保四年百首

紫の露さへ野邊のふかみ草たがすみすてし庭の眞垣ぞ　家隆卿

樗

〔題不レ知〕
萬十七
玉にぬくあふちを家に植ゑたれば山時鳥かれずこむかも　中納言家持卿

〔久安百首〕
玉にぬく折にあふちの花の色を心うつらぬ人はあらじな　隆季卿

〔喜多院入道二品親王家五十首〕
かをりあふ庭のあふちの花ちりて菖蒲の軒をすぐる夕かぜ　家隆卿

〔家集〕
ふかみどり若紫にそめてけりあふちまじりの茂み木立は　殷富門院大輔

〔散逸〕
あふちさく北野の芝生五月きぬみざりし人の形見ばかりに　定家卿

〔六帖題〕
新六　家集
時鳥鳴く音きかむとたのめつる北野のあふち花さきにけり　衣笠内大臣

〔建長八年百首歌合〕
あふちさく花にかくれて時鳥名こそあさまの森に鳴くなれ　正三位忠定卿

判者行家卿云あさまの森にあふちのみあるところとかやうけ給はるし
からば花にかくれたる郭公たよりありてきこえ侍るに名こそあさまと
侍るもいたくつゞきてもおぼえ侍らずと云々

〔百首〕
かた岡のあふらなみよりふく風にかつ〳〵そゝぐ夕立の雨　後鳥羽院御製

〔寛喜四年百首〕
新六ノ六
たちやどる道のあたりのあふちはら日影もうすし蟬の羽衣　民部卿爲家

〔六帖題〕
みがきもるとのべにたてる樗かげ下ふみなれし路ぞわすれぬ　同

新六ノ六
道のべのかもの川原のふしたかみふるきの樗陰もなれにき　信實朝臣

百合

〇題不レ知
我妹子が家の垣内のさゆり花ゆりなりといはうたはぬに似る　紀豊河

〇正治二年百首
我妹子が宿のさゆりの花かづら永きひくらしかけて進まむ　後京極攝政

〇同
潮みたぬまののはまぢのさゆりばもいりぬる磯は浪の下草　寂蓮法師

〇同
わきかねし草深ゆりもありけりと花さきてこそ人もしるらめ　正三位經家卿

〇題不レ知
萬七 路のべの草深ゆりの花ゑみにゑみせしからに待つといふべしや　讀人しらず

〇同
萬二十 筑波根のさゆりの花のゆどこにもかなしけ妹ぞひるもかなしけ

〇同
萬十八 照射火の光にみゆるさゆり花ゆりもあはむと思ひそめてき

〇同
萬八 續後拾戀 夏の野の茂みにさける姫百合のしられぬ戀は苦しきものを　坂上郎女

〇百首歌
夏狩のせこ踏みしだきわくる野に萎れやすらむさゆりばの花　殷富門院大輔

〇家集、寄百合花戀
人しれず下葉の葛のまくりでにいざとりつかむ姫百合の花　源仲正

〇永久四年百首、夏草
百濟野のちがやが下の姫百合のねもころ人に知られぬぞうき　仲實朝臣

〇百首御歌
庭の面の土さへさくる夏の日にひとり露けき姫ゆりの花　土御門院御製

〇しん性さだまらずどいふことを
雲雀たつ荒田におふる姫百合のなににつくともなき我が身かな　西行上人

〇光明峯寺入道攝政家百首
現存六 今も尙草の眞袖にかくろへてあらはに見えぬ野邊の姫百合　知家卿

鵜河

○六百番歌合、鵜河
○千五百番歌合
○六帖題
○鵜川を
○家集、よかは
○御集

大井川なほ山かげにうかひ舟いとひかねたるよはの月かな　後京極摂政

此ハ歌右方人難云月よにも鵜をつかふことのあるにや陳云月よとはいへども山かげなどにてはつかふことのあるなり判云左右人難云聞え侍るめりと云々

大井河いくせにればうかひ舟嵐の山のあけわたるらむ　家隆卿

此の判詞云うがはのならひは瀬におかひくだすつねのならひなるないくせのぼればと云へるくださむれうにぞあくればあけがたことのほかに遅くなりいかにも疑ひおほかるべしと云々

かつら河七瀬のよどをうかひ船下しも果てずあけぬこのよは　中宮権大夫家房卿

夜河たつ五月きぬらし瀬々少女八十作の男もかゞりさすはや　法橋顕昭

かひ上る鵜船をしげみ桂河瀬々の波やくかゞり火のかげ

新六二
この河にさよふけぬらし桂人鵜縄手にまき船くだすなり　光俊朝臣

新六二
篝さす鵜飼の小舟かひくだりあけてをのぼる淀の河波　衣笠内大臣

あけぬるか小舟のかゞりたき捨てて煙も白む短夜の空　賀茂景久

よイ
そひ河にあたの鵜飼へ篝さし千代のひつぎの贄そなふなり　権僧正公朝

もがみ河鵜舟のかゞり諸共に焦れてものを思ふころかな　法性寺入道関白

○同

（桑門）よしのなるなつみの河の鵜飼舟月夜もわかず山かげにして　六條みこ

○正治二年百首

篝さしよるべのたなはうちはへて後をもしらぬうかひ舟かな　皇太后宮大夫俊成卿

○民部卿家歌合、鵜川

久方の月の桂のうかひ舟川風はやしたなはみだるな　讀人しらず

○永長元年五月源宗光家歌合、夜川

鵜飼船ちがふ手縄をさばくとて照射ぞかぬるよはの篝火　參議忠基卿

○禖子内親王家歌合、鵜川

篝火に手繩のかずを繰り返し騷ぎてもなほあかぬふちかも　讀人しらず

○長承三年九月顯輔卿家の歌合、戀

あまたとるよかはの手繩きれにけり亂れがちなるわが心かな　藤原忠紙

○天治元年五月無動寺歌合、夜川

よかは船ともす篝の光にはもにすむ魚の數もみえけり　俊宗法師

○同

うば玉のよかはの船の篝には藻にすむ魚のかくれなきかな　行眞法師

○同

大井河ふちせもわかずかつくら（かおとりカ）にまかせて下す篝舟かな　眞快法師

○家集、夏河

篝たく鵜河を照らすなつ蟲のおのが光も闇やまつらむ　前民部卿雅有

○水風知涼

鵜舟さす（一字抄）となせの瀧の夕風にまだきたもとに秋をしるかな　大藏卿行宗

○永久四年百首

かひのぼる鵜舟の綱のしけければ瀨にふす鮎の行く方ぞなき　太皇后宮肥後

○同

鵜船おほくくだす折しも瀧川に簗崩れして鮎子たばしる　神祇伯顯仲卿

○八條入道太政大臣家歌合、鵜川

篝火の光にまがふ玉藻には鵜飼のいほもかくれざりけり　同

○家集、鵜川

となせ川鵜舟にともす篝火の光のまゝにあけにけるかな　太宰尊遠卿

○同

大丈夫が鵜河の瀨々に鮎とると引くしら繩のたえずもあるかな　俊頼朝臣

○同

もがみ川おとす鵜船のみなれ棹さしもはいかで早きならなむ（ろカ）　同

○同

篝火の火影に見ればますらをはたもといとなく鯉子くむらし　同

○百首歌中

をちこちのよかはにたける篝火と思へば澤の螢なりけり　同

○師時卿家歌合、水邊螢火

五月闇かゞりなかけそ高瀬舟みぎはの螢ひかり繁しも　讀人しらず

○夏歌

（現存六イ）のぼりせの岩浪わくる鵜飼船ゆきこそやらねみを早みかも　従二位行家卿

○禖子内親王家歌合、鵜川

かゞり火の影にぞしるき玉川の鮎ふすせには光そひつゝ　武藏

○同

ふなばたに棹うちならし篝火のいかなるふちを行き歸るらむ　源頼綱朝臣

○承暦四年十月堀川院中宮歌合、鵜河

玉川の瀬々かひのぼる篝火にさばく手繩の數をしりぬる　仲實朝臣

○むめづにて鵜船のかゞりを見て

梅津河ともす鵜舟の篝火に底のみくづもかくれざりけり　惠慶法師

○夏鵜歌中

（現存イ　六帖六）かゞり火の光もうすくなりにけりふなかみ川の曙の空　後一條入道關白

○承暦四年堀河院宮歌合、鵜川

よしの川鵜舟やつれて上るらむ棹さす音の繁くもあるかな　源經兼朝臣

○長治元年六月民部卿家歌合、鵜川

よしの川河瀬をくだす鵜飼船うつ繩なみのよるやくるらむ　讀人しらず

○鵜

（萬十九　六三）しらかはの瀬を尋ねつゝわがせこは鵜河たたさば心なぐさに　同

○延喜二年中宮御屏風

大空にあらぬものからかはなみに星とぞ見ゆる篝火のかげ　貫之

○長歌

（萬十三）こもりくの　はつせの河の　のぼりせに（かみつイ）　うをやつひたし　くだ（しもつイ）

りせに　うをやつひたし　のぼりせの（かみつイ）　あゆをくはしめ　くだり（しもつイ）

せの

水鷄

○うしまどといふ所にて水雞のたたくおとしければ
散木 かしまどをたたく水鷄の音すなり波うちあけて誰かきくらむ　俊頼朝臣

○家集、海邊水雞
里のあまはなるとの浪に耳なれてたゝく水鷄に驚かずとか　源仲正

○神山といふ所にてくひなを
柴の戸をたゝくと思ひてあけたれば人もむ梢の水鷄なりけり　大僧正行尊

○永承六年五月庚申夜祐子内親王家歌合、くひな
門させる宿とも見えぬ梢にてなにをあけぬとたゝく水鷄ぞ　少辨

○右臣卿歌合
夕づくよ卯の花垣にかげそひて軒端に近く水鷄なくなり　前中納言爲兼卿

螢

○建保三年名所百首歌
大江山繁みがもとにまじりても人にしらるゝ螢なりけり　順德院御製

○同
ちゑにもるしのだの森の下露にあまる雫や螢なるらむ　僧正行意イ尊

○同
ゐなのゆく風に螢やみだるらむこぼれてきえぬ玉笹の露　正三位知家卿

○同
秋風をみつのみまきのまこも草かりにもつけてゆく螢かな

○同
蛙なくいかほの沼にすむ螢もゆる思ひにねをぞあらそふ　從三位行能卿

○千五百番歌合、夏御歌
まくず原たままく數やまさるらむはにおく露に螢とぶなり　後京極攝政

○御集、螢
ねにたてててつけぬばかりぞ螢こそ秋は近しと色に見せけれ　同

○尊品王
夏蟲の身をともしける光こそやみに迷はぬしるべなりけれ　寂蓮法師

○家集、夏歌中
澤水に螢の影のかずぞそふわがたましひや行きてすぐらむ　西行上人

○同
おぼえぬをたが魂のきたるらむ思へば軒に螢とびかふ　同

○文治五年五社百首、螢
ともしけつ光を見るはあはれなりあれにし路の螢なれども　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首
新古拾夏
水くらき岩間にまがふ夏蟲のともしけちても夜をあかすかな　式子内親王

○千五百番歌合
ともしける澤の螢ばほの見えてくもるもしらぬ鷄の一聲　大納言通具卿

○同
夏蟲のともしすてける光さへのこりてあくる東雲の空　二條院讃岐

○同
玉にまがふよはの螢の影むれて雲居の鴈の聲をまちける　西園寺入道前太政大臣

○同
玉夏
古の野守のかゞみ跡たえてとぶ火はよはの螢なりけり　寂蓮法師

○承久六年四季百首
昔思ふとぶひや螢春日のの野もりやいかにゆふやみの空　從二位家隆卿

○百首歌、螢
闇といへばまづもえまさる螢もや月になぐさむ思ひなるらむ　前中納言定家卿

○御集、螢
まどわたる宵の螢も影きえぬのきばに白き月のはじめに　後京極攝政

○千五百番歌合
玉夏
軒しろき月のひかりに山影のやみをしたひて行く螢かな　後鳥羽院宮内卿

○百首御歌
むらさめの雲間の螢かず見えて風吹きすさぶ庭の夏草　土御門院御製

水くらきあし間の池の夕暮によをしる蟲の影ぞほのめく　中務卿みこ

〔六十五間字歌、夢甘愁人枕不レ知
かり枕まだふし馴れぬあしの葉にまがふ螢ぞくるゝよはしる　前中納言定家卿

〔永久四年百首、夏蟲
草むらにすむ夏蟲はこぞの秋くちし下葉のなかに有るらむ　源　兼昌

〔喜多院入道二品親王家五十首
五月雨はまやのかやふき軒くちてあつめぬ窓も螢とびかふ　前大納言兼宗卿

〔堀河院御時百首
五月雨に草の庵はくつれども螢となるぞうれしかりける　前中納言匡房卿

〔正治二年百首
五月雨の庭のよもぎやくちぬらむすぐる螢の數そひにけり　小侍従

〔同
すゞみけむ昔やしのぶ橋の匂ふまそでにくる螢かな　従二位家隆卿

あけ行けばもゆる螢の影きえてけぶりを水に殘すなりけり　喜多院入道二品のみこ

柿本影供百首
草わけてもゆる螢やいはたきの浪のうはての夏のさわらび　後九條内大臣

〔寶治六年百首、水邊螢歌
清きせに螢ゆふるる玉笹の葉わけの水のいろぞ涼しき　同

〔名所歌内、攝津螢
岩こゆるおきつの浪に影うきて荒磯づたひ行く螢かな　參議爲相卿

〔建長八年百首歌合
船とめぬみなとのあしの絶え間よりともす篝やよはの夏蟲　右近中將經家卿

〔同
身にあまる思ひを人に見せむとてそでしの浦に飛ぶ螢かな　土御門院小宰相

〔同
けぶりたつ富士の裾野に飛ぶ螢もゆる思ひを身にやしるらむ　藤原伊嗣朝臣

〔建仁歌合
にほてるや入江のあしの葉にふれて螢みだるゝしがの浦風　藤原景頼

〔最勝四天王院名所御障子
もしほやく蘆屋のあまのうきねだに浪にしをれて行く螢かな　後久我太政大臣

〔家集
あしの葉にまがふ螢のほの〴〵と辿りそ渡るまののつぎはし　鴨長明

○建仁二年歌合
螢飛ぶしがのおほわた浪ふけてあまなき里にあまの漁火　　慈鎭和尚

○夏歌中、新深窓
もがみ河すだく螢はいなふねののぼればくだる篝なりけり　　大江廣言

○家集
きよたきの瀬々の白絲おのづから玉ぬきとめずちる螢かな　　正三位知家卿

○家集、杜夕と云ふことを
雨ふれどくるればもゆる夏蟲の誰ゆゑつゝむ衣手の森　　從二位家隆卿

○光臺院入道二品親王家五十首
伊勢のうみの入江の草のしほ干潟あまの螢の玉は拾はじ　　同

○承久二年四季百首
たが袖に包むほたるの衣河思ひあまりて玉とうくらむ　　同

○家集
里〻も今はみくさをうちはらひ螢ばかりや玉の井の水　　同

○家集、池邊螢
はま風になびくの島のさゆりばにこぼれぬ露は螢なりけり　　清輔朝臣

○題不知
現存六
拾ふてふ玉にもがもなひさぎ生ふる清き河原に螢とぶなり　　信實

○永仁二年内裏五首、水邊夏夜
亂れゆく螢の影やたき河の水くらきよの玉をなすらむ　　參議爲相卿

○乾元元年仙洞歌合
みだれゆく螢のけしきなさけみえて月におとらぬ夏の夕闇　　同

○後九條内大臣家百首、螢
島ひゞくいらこがさきの浪間にもこたへぬ玉は螢なりけり　　隆祐朝臣

○十禪師社百首、樹下螢
おとは河かはぞひ柳ふく風にかたへ秋なるなつむしの影　　同

○喜多院入道二品親王家
おとは河せゞのいはなみ玉ちりてもゆる螢も影ぞ涼しき　　隆信朝臣

○住吉社百首御歌
住の江のよるのほたるの哀れさを猶思はする松風のこゑ　　慈鎭和尚

○文應元年七社百首
住の江の玉もひとつにうつりつゝ浪のそこにもとぶ螢かな　　民部卿爲相（家イ）

水川の岩間のなみにとぶ螢くだくる玉のきえぬとぞみる　同

○河邊見螢といふことを

埋れ木の心もしらず名とり川さもあらはれてとぶ螢かな　同

○千首歌

くるゝ夜はうきて螢の思ひ川うたかた誰に消えはかぬらむ　同

○文應元年毎日一首中

小倉山夕やみかこつ雨のよの窓とふものは螢なりけり　同

○結縁經百首

あさか山あさきながらも山の井のかげみる水に行く螢かな　小將内侍

○長久二年五月祐子内親王家名所歌合

名とり河底さへぞてる夏の夜は螢ひまなく見え渡りつゝ　讀人しらず

○染河螢

漁火の浪まわくると見ゆれどもそめかはわたる螢なりけり　大納言經信卿

○行路螢

行きくれぬ螢すだかぬ夜半ならば迷ひやせましふるの中道　同

○古寺螢

いまぞしる雲の林のほしはらや空にみだるゝ螢なりけり　同

○河螢を、雲葉

ほたるとぶ岸の木陰や天の河ほしのはやしの名には立つらむ　法印實仲

○旅螢

散木夏

あらち山螢をかげのしるべにてたどるは谷のこずゑなりけり　俊頼朝臣

○仁和寺殿にて人々作文せられけるついでに、水上螢

よる光る玉を流すとみえつるは河くだり行くほたるなりけり　源仲正

○家集、螢火亂風

風ふけばうちあぐる浪にたちゐして玉のひふつくよはの夏虫　同

○長承三年六月常磐井五百番歌合
螢照細流

夏蟲の細谷川をてらすよはたまのおびするきびの中山　同

まがねふくきびの中山夏くればすだく螢の影ぞひまなき　爲忠朝臣

帯にする細谷河に見ゆる火は螢もまがねふくにやあるらむ　藤原忠隆

○堀川院御時百首
巴字なす汀にめぐる螢かなあふむのつきにあらぬものゆゑ　藤原盛忠

○家集中
流れゆく河邊にすだく螢をばいさごにまじるこがねとぞ見る　隆源法師

續後拾夏　新拾家集夏
夕やみにあまの漁火見えつるはまがきの島の螢なりけり　好忠

○長恨歌、夕殿螢飛思悄然
思ひ餘り戀しき君がたましひにかける螢をよそへてぞ見る　太宰大貳高遠卿

○家集、なりとく雲のまきといふ事を
あまびこよ雲のまがきにことづてむ戀の螢はもえはてぬべし　祐擧

○亭子院歌合、信子日
六帖六
暗きよにともす螢のむねの火をおしこめもたる玉かとぞ見る　忠峯

○家集、ほたるを
夏蟲はうらやましくや思ふらむおのが思ひにもえぬ螢を　能因法師

○御集螢
徒らに身をたきすつる螢かなのりのためとは思はざるらむ　中務卿みこ

○建長八年百首歌合
かげろふの夕さりくればとぶ螢なれもなにゆゑ燃ゆる思ひぞ　法印實伊

○百首歌、螢火透簾
玉すだれいぶせきなかのむつことを思ひしりてもゆく螢かな　寂蓮法師

○家集
まきのとももささで涼しき宵のまの簾にすぎてゆく螢かな　參議爲相卿

○祇園社百首、螢
身よりあまる心の程は知らねども袖の螢はあはれなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○百首御歌
をやま田は夏の暮こそうれしけれ稻葉のほたる賤の蚊遣火　喜多院入道二品のみこ

○夏御歌中、螢火亂飛秋已近
ゆく螢かねて雲路や思ふらむかりなきぬべきかぜのけしきに　後京極攝政

○同
かきつばたおふる澤邊に飛ぶ螢數こそまされ秋や近けむ　鎌倉右大臣

○家集、螢
移りゆく草葉にたまをあらはして露くらべなる夏蟲のあと　前民部卿雅有

○同
かねてより草葉におもる白露はまだよにいらぬ螢なるらむ　後九條内大臣

○禖子内親王家歌合
草しげみまがふ螢の光こそむら〳〵おける露とこそ見れ　武藏

○同
ひかりそふ夕べの露と見えつるは草葉にまがふ螢なりけり　同

○正治二年百首
夜もすがら草葉につたふ螢こそ風にこぼれぬ露とみえけれ　二條院讃岐

○光臺院入道二品親王家五十首、江螢
かゞりさす棚なし小舟こぎかへり入江のほたる數ぞそひ行く　家長朝臣

○同
夏と秋と誰かはわきてみつの江にかたへ涼しく行く螢かな　法印幸清

○百首歌、澤螢
日くるれば袖のみなとをゆく螢さわぐ思ひの程や見ゆらむ　光俊朝臣

夏神樂

○屛風歌、なかの夏神樂する所
山人のたける庭火のおきあかしこゑ〴〵遊ぶ神のきねかも　順

○天慶四年、内裏夏神樂
ゆく水のうへにいはへるかはやしろ河浪たかく遊ぶなるかな　貫之
（拾遺員外上）

○四季百首、夏神樂
みな月の月影白きをみ衣にたふさゞなみよるぞ涼しき　前中納言定家卿

○正治二年百首
夕かけてさかきをいはふ河やしろをり珍らしきさゞ浪の聲　隆信朝臣

○家集、夏神樂
しのにをるあたりも涼し河社さかきにかくる浪のしらゆふ　西行上人
（明玉）

○式子内親王家歌合
いはがねに浪かけこゆる河やしろしのの衣やほさで涼しき　參議爲相卿

○家集、夏神樂
かはやしろ浪のしめゆふ水のおもは月の光も淸く見えけり　清輔朝臣

○家集、夏神樂
歌苑抄 かは社しのにふりはへあきつはの袖ふる妹も夏神樂する　權僧正公朝

○夏神樂をよめる、秋撰風
かは社しひしばがくれゆく水に流れぬ浪やしのゝゆふしで　中原光成

○夏神樂歌中
同 かは社さゞなみをればみなづきのあらぶる神も心ゆくらむ　藤原重義

夏雜

○三百六十首夏歌中
家集 夏の夜の長閑けき雨をあしびきの山まつ風のふくかとぞきく　好忠

○同
あらはにて燒生にみえし春の野も夏はいろ〳〵花さきにけり　同

○同
懐しく手にはをらねど山賤の垣根のむはら花さきにけり　同

○同
庭におふるあさてがはなをはやしけむ昔の人ぞ峯と戀しき　同

○同
けふよりは名越の月になりぬとてあらぶる神にものなりなへる（秋のためなへイ）　同

○同
花ちりし春の嵐をおしおきて夏のひよりに吹かせてしがな　同

○家集
夏河の岩根をわくる岩千鳥つひにさてやはよをばすぐさむ　忠峯

○家集、夏歌中
散木 をぐろ崎ゐるなのねぬなは踏みしだきひもゆふまゝに蛙鳴くなむ　俊頼朝臣

○千五百番歌合
見わたせば浪もゆるがぬ夏の日に松影とほき磯の細道　後鳥羽院宮内卿

○西洞院百首御歌
ほとゝぎすおのがさつきのくれしより歸る雲路に聲恨むなり　後京極攝政

○治承二年右大臣家百首御歌
郭公こゑたえ〴〵にきえはつる雲路もつらきみな月の空　同

○同
秋ならで野邊のうづらの聲もなし誰にとはましふか草の里　同

○百首御歌
夏深きそのの植木ぞ靜かなるこずゑのとりや苔におるらむ　後九條内大臣

○[illegible]道宥次百首を、たはら
つくりやらぬ夏の荒小田拂ひかね蓬ながらや今かへすらむ　參議爲相卿

○乾元々年仙洞歌合、夏朝
夏をあざみ露おくとしはみえねども草葉涼しき朝あけの庭　同

○百首夏歌
蛙なく田中のゐどに日はくれておもだかなびく風わたるなり　寂蓮法師

○同
秋きぬといはぬばかりぞ月きよみ下もみぢするまのの萩原　寂念法師

○三百六十首中
日くるれば下はこ暗き木のもとにものおそろしき夏の夕暮　好忠

○同
いもと我ねやのかさどに晝寢して日高き夏の影をすぐさむ　同

下もみぢ秋もこなくに色づくはてる夏の日にこがれたるかも　同

○露
六一
夏の日にこがるゝ山の草なれやしばしの露に心やるらむ　讀人しらず

○六月瀬聲似雨と云ふ事を
うちよするゐ瀬々の白浪おと高みまたみな月に時雨ふるらむ　前中納言匡房卿

○建長三年毎日一首中
あま雲の五月雨くれし空はれてけふみか月の影もめづらし　民部卿爲家

○三百六十首の中
夏はぎのあさのをからとあた人の心輕さといづれまされる　好忠

○藤原長輔すゝめける六首
雨そゝぐ森のみどりの夏木立そめむもみぢの色はまたれず　藤原爲顯

○三百十首中
茜さす岩戸の山も見えぬべしめをきはめても照れる夏かな　好忠

○正安二年夏百首歌
ふきしをるけしきはみえて夏山の若葉によわき風の音かな　參議爲相卿

〇建保四年百首

ものごとに時雨のわきし松の色をひとつにそむる夏の雨かな　前中納言定家卿

〇百首御歌、夏

むらさめの雲ふきすさぶ夕風に一葉づゝちる玉のをやなぎ　順德院御製

夫木和歌抄卷第八　終

夫木和歌抄　卷第九

夏部三

題

夏夜　夏月　紫陽草　夏草　夏野　蚊遣火
夏衣　扇　瞿麥　瓜　夕顔　蓮
菱　夏田　夕立　蟬　茅蜩　納涼
泉　氷室　夏鹿　夏蟲　晩夏　荒和祓

夏夜

○建保四年百首歌

夏の池の汀にともすかゞり火のひかりも涼し夕闇の空　光明峯寺入道攝政

○千五百番歌合

夏蟲の思ひをうつす池みづにたぐひしらする篝火のかげ　後久我太政大臣

○[illegible]三年標柄宮百首

更け行けば庭の篝火やき捨ててほたるにゆづる夏の短夜　安嘉門院四條

○百首御歌

雨をやむ雲のうすみをゆく月の影おぼろなる夏のよの空　後鳥羽院御製

○十題百首御歌

夏のよは枕をわたる蚊のこゑのわづかにだにもいこそねられね　後京極攝政

○六百番歌合、夏夜

うたゝねの夢よりさきに明けぬなり山ほとゝぎす一聲の空　同

○建久二年百首歌
大井がは夏のみむすぶ筈やかた短夜ならぬ月もやどらじ　前中納言定家卿

○六百番歌合、夏夜短
夏の夜は流るゝ水のうき枕結ぶほどなきうたゝねの夢　同

夏月

○千五百番歌合
かさゝぎの雲のかけはしほどやなき夏のよわたる山のはの月　後京極攝政

○寶治五十首歌合
ほとゝぎす鳴くねも稀になるまゝにやゝ影涼し山のはの月　同

○文永十年毎日一首中
かさゝぎの鏡の山の夏の月さしいづるより影もくもらず　民部卿爲家

○建仁二年水無瀬殿六首御會、川上夏月
高瀬舟くだす夜川のみなれ棹とりあへずあくる夏の月影　中納言定家卿

○家集
きよみがた袖にも夏の月をみてかたへもまたぬ風ぞ涼しき　同

○嘉元元年百首、夏月
待ちいでし端山の木の間しげりあひて影遠くなる月の庭かな　參議爲相卿

○乾元元年仙洞歌合、夏月
空にしろく袖に涼しき影みえて月は夏とぞ(めイ)また思はるゝ　前中納言爲兼卿

○三百六十首中
影きよみ夏の夜すがらてる月をあまのとわたる舟かとぞ見る　よしたゞ

○夏歌中
なつもなほ雪げの水に月さえて氷しぬべき富士のしはかは　法昭源全（他本作康律師仙覺）

○一字百首
夏の夜はうきあかつきの雲もなし心のそこに月は殘りて　前中納言定家卿

○家集、夏夜曉月
かりそめの夕涼みなるうたゝねにやがて有明の月をみるかな　源仲正

○百首御歌
月の色も秋近しとやさ夜ふけてま垣の荻のおどろかすらむ　式子內親王

○千五百番歌合
まちもせずをしみもあへぬ夏の夜は山の端うとき月をこそ見れ　宜秋門院丹後

○六百番歌合
すむ月のひかりは霜とみゆれどもまだよひながら有明の空　従二位家隆卿

○六帖題、夏月
新六一
庭のおもの水音近きうたゝねにすだれ涼しき月をみるかな　信實朝臣

○保延二年家成卿歌合、夏月
夏の夜は光涼しくすむ月をわがもの顔にうちはとぞみる　高松院右衛門佐

○久安二年六月顕輔家歌合、夏月
夏やまの木々の木の葉も白たへに花さけるかと見ゆる月影　源親房

またで唯こゑてや見まし山の端をいづればあくる夏のよの月　讀人しらず

夏河の底まで月のすみぬれば瀬にふす鮎のかずもみえけり　源頼行

○山家夏月
山里はこやのえびらに澄む月の影にもまゆのすみはえにけり　俊頼朝臣

紫陽草

○だいしらず
萬二十　六
紫陽草の八重咲く如くやつよにをいませ我がせこみつゝ忍ばむ　橘左大臣

○久安百首御歌
紫陽草のよひらの八重に見えつるは葉越しの月の影にぞありける　崇徳院御製

○家集、夏草
あぢさゐの花のよひらに照る月の影もさながらをる（わがイ）身ともがな　俊頼朝臣

○顕仲朝臣家十首歌合
紫陽草の花のよひらは音づれでなぞいなのめの情ばかりは　同

○千五百番歌合
夏もなほ心はつきぬあぢさゐのよひらの露に月もすみけり　皇太后宮大夫俊成卿

○百首歌
紫陽草の下葉にすだく螢をばよひらの數のそふかとぞみる　中納言定家卿

○御集
とぶ螢光みえゆく夕暮になほいろ殘るにはのあぢさゐ　衣笠内大臣

○六帖題
新六ノ六
花咲きし庭の紫陽草あぢきなくなどてよひらに我をすてけむ　同

○同
紫陽草のよひら少なきはつ花をひらけはてずと思ひけるかな　信實朝臣

○同
しもつけや籬に交る紫陽草のよひらに見れば八重にこそさけ　光俊朝臣

○六帖題、あぢさゐ
これ程と人は思はじ川かみに咲きつゞきたるあぢさゐの花　權僧正公朝

夏草

○六百番歌合
夏山の草ばのたけぞしられぬる春みし小松人しひかずば　前中納言定家卿

○同
夏草の野島がさきのあさ露をわけてぞきつる萩がはなずり　法橋顯昭

○同
なつきてぞ野中のいほはあれまさる窓とぢてけり軒の下草　大藏卿有家

○同
しげき野と夏もなりゆく深草の里は鶉のなかぬばかりぞ　從二位家隆卿

○永久四年六月八條入道太政大臣家歌合、夏草
鶉鳴く夏野の草はおいにけりあさふす鹿もみえぬばかりに　讀人しらず

此の歌判者顯季卿云左夏草はくせなくみせ給ふれど右よりうづらは秋なむなく夏鳴かぬものなりと侍めれば證歌こそはいださるべけれど其の歌出でこずばあやまれるにやと云々

○承安三年經正朝臣家歌合、夏草
いざやこら朝露わけてかりゆかむ小鹿臥す野の夏の草だち　前參議親隆卿

草深み蟲のたれぎぬ結ひあげてとほりわづらふ夏の旅人　正三位季能卿

○文永三年毎日一首中
夏夏の露けき中のしもつけにむろのやしまのことゝやとはまし　民部卿爲家

○貞應三年四季百首、夏朝
夏くさの夜の間の露のした葉までさもほしはつる朝日影かな　同

○六帖題
同新六ノ六
御馬草にいくたびかりつ又はえのしののを薄ほに出でぬ間を　光俊朝臣

○一品子内親王家歌合、夏草
夏草をむすぶしるしのなかりせばいかでゆかまし山里の道　讀人しらず

○寶治二年百首
遠つ人なづみくるかもみやけぢの夏野の草のしげりゆくころ　前中納言定嗣卿

○三百六十首中
夏麻のした葉の草のしげさのみ日毎にまさる頃にもあるかな　よしたゞ

○同
大原やせかるのみ草かり分けてをりやたたまし涼みがてらに　同

○同
わがせこがきませりつると見る程に庭の小草もかた迷ひせり　同

○家集、夏戀
あふことは夏野に茂る戀草のかりはらへどもおひ結びつゝ　俊頼朝臣

○寛喜元年女御入内御屏風
森の影またほに出でぬ夏草のたもと涼しき山の井の水　従二位家隆卿

○建保三年名所百首
ふみしだく淺香の沼の夏草にかつみだれそふしのぶもぢすり　前中納言定家卿

夏　野

○六帖題
新六ノ六
夏深みまたかりそめぬ粟つ野のきゝすのひなの草がくれつゝ　衣笠内大臣

○家集、夏歌中
おのづから萩女郎花さきそめて野邊もや秋の景色なるらむ　俊頼朝臣

蚊遣火

○百首御歌
下くゆるむかひのもりの蚊遣火に思ひもえそひゆく螢かな　後鳥羽院御製

○同
かひたつるかきねむかひの細道は都の人にみせまうきかな　喜多院入道二品親王

○千首歌
人とはぬやどの蚊遣火しばくべて夏もみやまのいほぞ寂しき　民部卿爲家

○同
蚊遣火の煙ばかりやしらるらむはやまがみねの柴のかりいほ　同

○住吉社百首
けぶりゆゑ鹽屋とよそに思ふらし蚊遣火たつる住吉の里　慈鎭和尚

○正治二年百首
蚊遣火やあまの苫屋におきつらむたくもの煙たちぞまされる　正三位季經卿

萬代
○女につかはしける
藻屑たく蜑の蚊遣火それすらもすゞろにかかる下もえやせし　藤原雅親

○建長八年百首歌合
いかにして人にしらせむ藻屑たく蜑の蚊遣火くゆりわぶとも　衣笠内大臣

すみがまはたく人あらじ小野山の夏の煙や宿のかやり火　後九條内大臣

○蚊遣火を
蚊遣火の煙になるゝこも簾ものむつかしき我がこゝろかな　俊頼朝臣

○堀河院御時百首
雲かゝるとほちの里の蚊遣火に煙たつともみえぬなりけり　權中納言師時卿

○百首蚊遣火
夕立のそゝぎて過ぐるかやり火のめぐりはてたるわが心かな　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首、かやり火
蛙なくかひやにたてる夕けぶり賤がしわざも心すみけり　同

セイ

○文應六年七社百首、かやり火
夏ふかき賤が山田におくかひはほにこそいでね下結びつゝ　民部卿爲家

○永仁元年内裏歌合、野亭夏朝
かやり火の煙や庵にのこるらむかすむ末野のあけぼのの空　藤原爲通朝臣

○百首歌
蚊遣火のけぶりの末もほのかにてかすみに殘る夏のよの月　寂蓮法師

○正治二年百首歌
山賤の煙ばかりとおくかひのうへにもゆるは螢なりけり　同

○御集、蚊火
すゞろなる難波わたりの煙かなあし火たくやに蚊火たつる頃　後京極攝政

夏衣

○三百六十首中
家集
夏の日の菅のねよりも永きをぞ衣ぬぎかけくらしわびぬる　よしたゞ

○永久四年百首、夏衣
夏衣いもがみけしのあやなればうらなきさへぞ下にきまうき　俊頼朝臣

○建保三年名所百首
夏衣いつかはときを忘れ草ひも夕ぐれのあまのかご山　從二位家隆卿

○建久七年百二十八首
しのゝめのゆふつけ鳥の鳴くこゑにはじめてうすき蟬の羽衣　前中納言定家卿

○六百番歌合、夏衣
たちばなの匂ひを風のさそひきて昔にかへす夜はのさ衣　大藏卿有家

軒近き花たちばなに風すぎて匂ひを殘すせみのはごろも　隆信朝臣

○久安百首
きてかへるものともしらで夏衣のひとへ心はすかされにけり　花園左大臣

○承久二年四季百首
新六ノ五
蟬のはのうすき衣のひとへ山あを柴涼しき風のいろかな　從二位家隆卿

衣イ

○帖六題、夏夜
よを安み民の煩ひかへりみてひねりがさねはきる人もなし　光俊朝臣

扇

○六百番歌合扇

手にならす夏の扇と思へどもたゞあき風のすみかなりけり　後京極攝政

○同

うたゝねに扇をならすとこの上の月と風とは秋のものかは　隆信朝臣

○同

うちはらふ扇の風のほどなきに思ひこめたる荻のおとかな　從二位家隆卿

恨みても散りにし花を尋ねばやあふぎぞ風のやどりなりける　寂蓮法師

雪のいろの夏もきえせぬかひやこれ扇の風の秋よりもげに　大藏卿有家

袖の内になかばかくるゝ扇こそまたいでやらぬ月とみえけれ　正三位季經卿

○家集、夏歌

茜さす青みな月の日をいたみ扇のてかせぬるくもあるかな　惠慶法師

○永久四年百首、扇

ふりつみし雪の心のかよへばや扇の風の涼しかるらむ　仲實朝臣

の永久百

末廣のなゝつ骨にてはる扇やつれにけりなもとのすがたに　藤原忠房

手なれけるぬしはしらねど紫の扇の風のなつかしきかな　六條院大進

○家集

白露とおきまどはする秋くとものりに扇の風はことなり　和泉式部

此の歌水無月のつごもりがたに六波羅の説經ききにまかりたる人あふぎを取りかへてやるとてと云々

○禎子内親王家歌合、夏夜月

夏の夜の月みるほどの涼しさはうちはの風にけにぞたがはぬ　源賴綱朝臣母

○六帖題
新六ノ五 隠れける月にたとへし扇こそふかぬ風をもまたなしへけれ　民部卿爲家

○四季百首、夏旅
旅枕しろき扇の月影もなれてくやしきかたみなりけり　同

○六帖題
うつり香の身にしむばかり契るとて扇の風のゆくへたづねば　同

○同
新六ノ五 ひのおものさかりをつけしたをやめの扇の音もえやは忘るゝ　光俊朝臣

○六帖題、扇
日くるれば軒にとびかふかはほりの扇の風も涼しかりけり　衣笠内大臣

おほ扇さしかくしてぞ行ひの深きことをばならひつたへし　權僧正公朝

瞿麥

○六月内裏のぜんざいほりにまかり侍りけるにさがのにて撫子を
新古今夏 郭公鳴きつゝかへるあし引のやまとなでしこ咲きにけらしも　能宣朝臣

○家集
二葉なる若撫子もあはれなりいくその秋におはむとするらむ　たゞみね

○家集、なでしこ歌合
山賤のかきほをせばみおひそめしいろとはみゆや瞿麥の花　元眞

○だいしらず
春日野のやまとなでしこをりてける心を人は思ひしらなむ　讀人しらず

○家集、なでしこ
君が代のためしにひかむ春日野はいしの竹にも花さきにけり　俊頼朝臣

今朝も又いざみにゆかむさゆりばに枝さしかはす瞿麥の花

○久安百首
庭の面の苔路の上のからにしきしとねにしける常夏のはな　皇太后宮大夫俊成卿

○寛喜四年五月六條右大臣歌合歌
庭のおもにから紅のこま綿しけるとぞみる大和なでしこ　仲實朝臣

○千五百番歌合
みぬ人をまつの木かげのこけむしろなほ敷島や大和瞿麦　後鳥羽院宮内卿
よそへけむ昔の人のみるに似て露にぬれたるなでしこの花　小侍従

○題不レ知
續古神祇
撫子のうすくもこくも日くるればみむ人わきて思ひさだめよ　贈太政大臣（菅イ小野イ）

○百首御歌
夕がすみたなびく山の春よりもいろの千種にさける瞿麦　順徳院御製

天イ
○元喜四年五月八日右大臣家歌合
なでしこ
蒔きしにはおなじ種とぞみえしかど千ぐさにさける瞿麦の花　源親元朝臣

○天喜元年五月十一日庚申夜禖子内親王家歌合
いろいろに匂ひ深くもみゆるかな千代をこめたる牀夏の花　讀人しらず

○光臺院入道二品親王家五十首、題なでしこ
うすくこきまがきにうゑしとこ夏の色を忘れぬ花の朝露　權律師隆昭

○建長八年百首歌合
夕立の露おきわたすませの中にみだれてさける大和瞿麦　右近中將經家卿

○同
たがために手折りてゆかむ瞿麦はとみの岡べにいま盛りなり　前大納言顯朝

○題不レ知
萬八
せに立ちてとみの岡邊の撫子の花房手折り我は行きなむ奈良人の爲　讀人しらず

○同
同
たかまどの秋の野がみの撫子の花盛りかも人のかざしし撫子の花　同

○同
萬十一
住のえのこすのとこ夏さくもみず隱れてのみやこひ渡りなむ　同

○同
萬十九
ゆきしまの岩ほにおふる撫子は千代にさきぬる君が挿頭に　同

○建保四年百首
よそへてのかひこそなけれまつ人のこすの牀夏花にさけども　前中納言定家イ

○同三年家百首歌合
ゆきしまや岩ほなでしこ水こえて宿る月さへうつろひにけり　光明峯寺入道攝政

○同
戀しくばなどかはとはぬゆきしまの岩ほにさける撫子の花　從二位家隆卿

○同
まれにくる乙女の袖や撫子の花咲きかゝるいはほなるらむ　同

○家百首
古郷やたれによそへてうゑおきし垣根なでしこ花さきぬらむ　民部卿爲家

○建長八年百首歌合
白露のたまはおつともふるさとの垣根撫子しをれざらなむ　衣笠内大臣

○同
色ふかく思ひそめてし撫子のその花づまは今もあかれず　前大納言顯朝卿

○光臺院入道二品親王家五十首、野撫子
おく露ややどりなるべき夕暮のまがきはやがて大和撫子　參議雅經卿

○同
花の色によるはこえじと宿りしてくるゝ籬は大和なでしこ　正三位知家卿

○長永三年爲忠朝臣家歌合、夜思撫子
白妙の露の玉ぎぬうへにきてからなでしこの花やねぬらむ　讀人しらず

○修子内親王家歌合瞿麥
大和にも唐にも匂ふ花なれば垣ほのほかにてらす撫子　加賀左衞門

○永久四年百首、なでしこ
おぼつかな唐撫子をこゝまでにたれかわたして植ゑ初めにけむ　源兼昌

○夏歌中
大和ともからとも見えず山しろのこまのにさける撫子の花　權僧正賴信

○洞院攝政家百首、五月雨
五月雨に蓬がしたは水こえて垣ほあれゆくなでしこの花　俊成卿女

○同
さみだれに袖もぬれ／＼はらへども露重げなる常夏のはな　藻壁門院但馬

○百首歌
とこなつの花には露もおくものを秋にさきだつ蟲のねもがな　寂蓮法師

○久安百首
常夏の花のいろ／＼ちりゆくは秋のとなりや近くなるらむ　前參議教長イ

○天暦十年五月芳子女御歌合
同イ
たつのすむ濱べに匂ふ常夏はいとゞのどけき影ぞみえける　中務
中務家集

○なでしこ
なでしこの花咲きそむる夏の野にけふひぐらしの聲ぞ聞ゆる　讀人しらず

○家集、瞿麦

撫子の花はあだなる種なればいざしら川の野べにちりにき　小野小町

○家集

撫子の花咲きにけりなき人の戀しきときのよきかたみ草　みつれ

○權中納言俊忠卿家歌合、瞿麦、判者俊頼朝臣

露重みまたをれふして常夏のおきぬや花のあさいなるらむ　源仲正

○家集古、鄕なでしこ

古鄕にわがまき捨てし撫子をたれ哀れとておほしたてけむ　同

○草中なでしこ

拂ひあげぬ袚の下はかくせどもこがねのぜにの花はやつれず　同

○保安二年閏五月贈左大臣長實卿家歌合、瞿麦

終日にみれどもあかずあをによしならの都の大和なでしこ　爲忠朝臣

古鄕となりにし小野のあさ露にぬれつゝにほふ大和撫子　鎌倉右大臣

○天曆十年五月芳子女御歌合

宮城野にけふ咲きそむる撫子はならはぬ色に人やみるらむ　清涼殿女御

○長承三年六月爲忠朝臣家歌合、夜思瞿麦

夜もすがら哀れとぞ思ふその原やひとりふせ屋の常夏の花　藤原道經

○同

露けさは思ひこそやれわぎもこが一人ふしみのとこなつの花　讀人しらず

○同

旅ねする人にしらるななつかしき伏見のさとの常夏の花　源淳國

○永久四年五月顯輔卿家歌合、なでしこ

うらやましなづさふ人やたれならむ伏見の里のとこ夏の花　爲忠朝臣

○同

よがれせて露もおかずな君とわがふしみの里の常夏の花　法性寺入道關白家淡路

○岡屋入道前政百首

よそながら哀れとぞ思ふ川島の草のはつかにみゆるなでしこ　民部卿爲家

○家集

うら人やかざしにをらむなつ草の野島がさきのやまと撫子　衣笠内大臣

○七首歌中

このうちに夜なくつるのこゑまでも思へばかなし撫子の花　權僧正公朝

○老若五十首歌合

常夏の花にたまるゐるゆふ暮をしらでや鹿の秋をまつらむ　後京極攝政

○千五百番歌合

かつ見てもめづらしきかな撫子のいやはつ花の色をそへつゝ　正三位季經卿

○寛喜三年女御入内御屛風

咲きまさるいやはつ花の日をへつゝ籬にあまる大和撫子　前中納言定家卿

○同

くれなゐのやしほの錦たれそめてまがきにさらす常夏の花　民部卿爲家

○だいしらず

萬二十 久かたの雨はふりしく撫子のいやはつ花に戀しきわかせ　中納言家持卿

○同

萬二十 我がせこが宿の撫子ちらめかもいやはつ花に咲きはますとも　同

○贈紀女郎歌

萬十 撫子は咲きてちりぬと人はいへど我がしめし野の花にあらめやも　同

○同

萬十 見渡せばむかひの野べの撫子のちらまくも惜し雨なふりそね　讀人しらず

○一品宮御扇のゑに五葉のもとに岩になでしこ有り

萬代の岩ねにねざすとこ夏にいとゞときはの松ぞおひそふ　元輔

瓜

○小うりを人の宮の御方に奉りけるを

山城のとばのわたりの瓜つくりこまほしと思ふ折ぞおほかる　權中納言定頼卿

○ちひさき瓜を人のおこせたるを

岩倉や田中のむらの瓜つくり秋ははつともかりにもなせそ　祐擧

○鳥の子のやうなる瓜をある所にたてまつるとて

我が君のますべき千代のしるしには鶴のこにこそ瓜もなりけれ　惠慶法師

○家集

柴かこふ園の瓜生の一つらになるとしならばまろびあへかし　權中納言長方卿

○屛風夏歌

我が宿のませのわたりにはふ瓜のなりもならずも二人ねまほし　鎌倉右大臣

○同

兼盛歌也
山城のとばに通ひてみてしがなうりつくりける人の垣根を　讀人しらず

此の歌小大君家集云大監物なりけるとき内侍どころにみかきもりしに大舍人ひきてきたるにある人内侍のすけしろやうありてそこに有りけるなりなりければまへに有りけるふちふ（た家集）と云ふ瓜をきなるしきしにつつみて大舍人と云ふおきなにこれたてまつれとてとらせたりければくらづかさにつけてそこよりおくりけると云々

○返事

とことはにゆけばなりけり瓜作りそこともなきにたてりしや君　小大君

○賀茂社百首御歌合

拾玉四
奈良より聞ゆる瓜を大和路やいかでもちふにすこし許さむ　慈鎭和尚

○六帖

新六ノ二
百敷やくらの司のふり瓜に我おとらじといとふうなるご　衣笠内大臣

○夏歌中

いまだにもひく人あれや山城のこまのうりふにしげる下草　正三位知家卿

○六帖題

新六ノ六　小大君集
結びおく青葛籠の（兼盛集）かほ瓜はさぞなめならふたぐひのみして　同

○家集

山しろのこまのわたりもみつるかな瓜つくりける人の垣根を　兼盛

夕顔

○六百番歌合、ゆふがほ

かたやまの垣根の日影ほのみえて露にぞうつる花の夕がほ　後京極攝政

○同

おのづから情ぞみゆるあらてくむ賤が外面の夕がほの花　法橋顯昭

○同
山賤の契りのほどや忍ぶらむよるをのみまつ夕がほの花
寂蓮法師

○同
しづのめが片岡しめてすむ宿をもてなすものは夕顏の花
慈鎮和尚

煙たつ賤がいほりのうすぎりの籬にさける夕がほのはな
従二位家隆卿

○同
日かずふる雪にしをるゝ心地して夕がほさける賤が竹垣
正三位經家卿

○同
黄昏にまがひてさける花の名を遠かた人やとはゞこたへむ
隆信朝臣

○すだれ
現存六
夕がほのうつるすだれのひまもなく心にかゝる黄昏の宿
卜部兼直

○建保三年名所百首
わたりするをちかた人の袖かとやみつ野に白き夕がほの花
前中納言定家

○千五百番歌合
やまの陰おぼめくさとに日ぐらしの聲たのまるゝ夕顏の花
同

○建保四年百首
木の間もる垣根にうすき三日月の影あらはるゝ夕がほの花
同

○嘉祿元年百首、夕顏
夕がほの花の垣ほの白露にひかりそへてもゆく螢かな
民部卿爲家

○毎日一首中
小倉山くるゝをいそぐ夕がほの花のたよりを誰かとはまし
同

○隠居百首
うらやまし垣ほにしぼむ夕顏もくるゝ日影をまつことにして
同

○家集、夕がほ
山賤のすとかたか垣えだもせに夕顏なれりすがひ〳〵に
俊頼朝臣

○百首歌
あさてほす賤がはつきをたよりにてまどはれてさく夕顏の花
西行法師

蓮

○はちす
六六　伊勢集
濁り江は片深くこそあせにけれみを蓮さへみればおひにけり　讀人しらず

○建久元年六月一字百首
蓮さくあたりの風もかをりあひて心の水をすます池かな　定家卿

○崇徳院百首歌めしける時
長秋上
小舟さし手折らでぞ手にうつしみむはすの立枝の露の白玉　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首
夏の日も心の水をすませとや池のはちすに露の涼しき　同

○同
なほいとへ蓮の立葉の露だにもこの世の池は風ちらしけり　同

○百首歌
よそふなる月の御かほをやどす池にところをえてもさく蓮かな　西行上人

○同
すみのえにそむる心は濁るとも蓮の色はさやけかるべし　慈鎮和尚

○同
大寺のいけの蓮の花ざかりはこぶ心に手向けとぞなる　同

○毎日一首中
なみに入る海より西の夕日こそはちすの花の姿なりけれ　民部卿爲家

○同
くれなゐの初花ぞめを見つるかな水をうがてる池の蓮に　同

○同
池水にはじめていづる蓮葉をげにくれなゐと思ひそめけり　同

○同
夏の内に千本の蓮花さけどいのるけふこそこたへそむらめ　同

○蓮開水上紅
秋近くはちすひらくる水の上はくれなゐ深く色ぞ見えける　千里

○三百六十首中
家集
夏の日の水の面かくす蓮葉にたゞよふ露の身をいかにせむ　よしたゞ

○四洞隱士百首御歌
夏深き入江のはちすさきにけり浪にうたひてすぐる舟人　後京極攝政

○題不知
夕されば池のはちすのなびきばに露ふきわたす風ぞ涼しき　修理大夫顯季卿

○荷の花を
たま水を蓮の若葉に卷きこめてこぼすや花のひかりなるらむ　俊頼朝臣

○家集
山家集上
夕立のはるれば露ぞ宿りける玉ゆりすゝるはすの浮葉に　西行上人

○喜多院入道二品親王家五十首
玉夏
夕されば波こす池のはちす葉に玉ゆりすゆる風の涼しさ　三條入道左大臣

○家集、池晩蓮芳謌
風わたる池のはちすの夕づく夜人にぞあたるかげも匂ひも　前中納言定家卿

○建久元年六月一字百首
いつかみむ八のくどくの池にさく四色の蓮淸きひかりを　安嘉門院四條

○六帖題
新六ノ六
露宿すちぎりもあるを花荷なほたまこすやうき葉なるらむ　信實朝臣

○堀川院御時百首
堀
をとめ子がすがたの池の荷葉は心よげにも花さきにけり　大納言師頼卿

○同
同
早くとも小舟こぎよせかのみゆるしまわの蓮たをらまく惜し　權中納言師時 堀

菱

○題不レ知
萬十六
とよくにのきくの池なる菱のうれをつむとや妹が御袖ぬれけむ　讀人しらず

○同
萬七
君が爲うきねの池に菱とるとわがそめし袖ぬれにけるかな　讀人しらず

○正治二年百首
涼しやとうきねの池に袖ぬれて菱とりすさび暮す頃かな　俊成卿

○殖物百首中
船ばたをたゝくも寂し宵の間に菱とる船や江にかへるらむ　參議爲相卿

○千五百番歌合
みさび江の菱のうき葉にかくろへて蛙なくなり夕立の空　後京極攝政

○六帖題
新六ノ六
みさびまじる菱の浮蔓とにかくに亂れて夏の池さびにけり　信實朝臣

○同
同
いかにして池の菱ゐるうきことは初めも果ても思ひわくべき　民部卿爲家

夏田

○建仁二年和歌所にて、田家夏月
門田ふくほむけの風のよる〳〵は月ぞ稻葉の秋をかりける　前中納言定家卿

○建長四年毎日一首中
みちのくのわさ田の鳴子けふみれば秋をかけてぞ風も身にしむ　民部卿爲家

○四季百首、夏田
山里の門田の稻葉みわたせばひとほいでたる夏のあさ露　從二位家隆卿

○建長八年百首歌合
夕日さす門田の稻葉あめすぎておきしく露を秋かとぞみる　藤原伊嗣朝臣

○六帖題
新六ノ六
今ははや秋近からし小山田のわさほのかづら末なびくまで　衣笠内大臣

○同
賤のをがしける稻葉の五月雨に晴間をみてや田草ひくらむ　正三位知家卿

夕立

○六百番歌合
夕立の雲のみをよりつたひきて軒端におつる瀧のしらたま　大藏卿有家イ

○同
風わたる軒のしたくさくちしをれ涼しくにほふ夕立の空　前中納言定家卿

○正治二年百首御歌
いつのまに峯うつりして過ぎぬらむひと村雨の夕立のくも　後鳥羽院御製

○最勝四天王院名所御障子
富士の山おなじ雪げの雲路より裾野をわけてゆふだちぞする　同

○千五百番歌合
更くるまではれずとみえし夕立の名殘ともなき有明の空　小侍從

○建仁元年老若五十首歌合
山みくりそれかとぞ思ふした紅葉うち散るくれの夕立の空　前中納言定家卿

○永久二年四季百首
水もなきこさかをおつる夕立のたきつ瀬うくるもとの谷川　同

○建保五年百首
夕立のきくのしをれ葉はらふとて花まち遠にひとやあざける　同

○毎日一首中
時鳥こゑみな月と思へばや夕立つくもにたちかへりなく　民部卿爲家

○六帖題
新六一 かきくもる空のむらくも風まきて音にちかづく夕立の雨　同

○建仁二年内裏歌合
夕立の名殘の庭のひとしめり涼しくなれるあさ茅生の色　參議爲經卿

○嘉元元年百首、夕立
はるかなるながめも涼しなにはがた伊駒のみねの夕立の空　同

○家集、夕立
新古夏 おのづからすゞしくもあるか夏衣日も夕立の雨の名殘に　清輔朝臣

○夏歌中
萬代 かきくらし思ひもあらぬ夕立にいちびと騒ぐみわのやまもと　法印定圓

○六帖題
新六一 かき曇りふりぬとみゆる夕立の景色ばかりに過ぎにけるかな　衣笠内大臣

○同
同 夕立に峯のときは木音あれてことゝゝしくもすぐる風かな　光俊朝臣

○百首歌
かきくらす山下かげとみるほどにふらでも過ぐる夕立の空　信實朝臣

○寶治二年百首、夕立
見ればまたさも名殘なく晴れにけりこぼしかけつる夕立の空　同

○建長八年百首歌合
雨の足とまりもあへずこの里にはしりすぎぬる夕立の雲　同

○同
夕立の雲間の空をみわたせば日かげにまじるあめの白玉　光俊朝臣

○家集
桑門 なる神のおとはの瀧やまさるらむ關のこなたの夕立の空　中務のみこ

蟬

○建保三年名所百首
波風に秋をまつらの山の蟬そめぬ木ずゑの露になくなり　俊成卿女

○同
わびはつる身を初蟬の已れのみあはでの森にねやを鳴くらむ　藤原康光

○家集、蟬を
女郎花なまめきたてる姿をやうつくしよしと蟬のなくらむ　俊頼朝臣

○屋のつまにつく〳〵ぼうしのなくをききて
我が宿の妻はねよくや思ふらむ美しといふ蟲のなくなる　同

○百首歌、雨後蟬
ゆふだちの空ふきはらふ山風にしばし涼しき蟬のこゑかな　從二位家隆卿

○永仁二年内裏當座歌合
木がくれてしばし涼しき風をだに秋にはなさぬ蟬の聲かな　參議爲相卿

○家集、雨後聞蟬
村雨の跡こそみえねやまの蟬なけどもいまだ紅葉せぬ頃　後京極攝政

○新颯風雨天蟬聲暮啾々
くれはとりあやにくにふる夕立にぬれ〳〵はるゝ蟬の聲かな　慈鎭和尚

○家集
山里の背面の岡のたかき木にすゞろがましき秋蟬のこゑ　西行上人

○蟬去野風秋
鳴く蟬の聲たかくのみ聞ゆるは野にふく風の秋ぞしらるゝ　千里

○寛平御時后宮歌合
管絃
ことの音にひゞきかよへる松風にしらべなく（ともなくイ）なる蟬の聲かな　讀人しらず

○康平四年三月内親王家歌合に、青山
いつとなく色も變らぬ青山はせみのこゑにぞ夏をしるらむ　二條太皇太后宮上作

○長治元年六月国房卿家歌合
常磐山木末にすだくうつせみの聲のうちにや夏は果つらむ　讀人しらず

○永久四年百首、蟬
袖かくるならの下枝になく蟬の聲は高くも聞ゆなるかな　藤原忠房

○長元六年七月歌合、蟬、無動寺
山風に梢ひゞきてなく蟬のこゑにや秋の色をそむらむ　良意法師

○長治元年五月源廣綱朝臣、林門内蟬聲
夕かげの雲の林になくせみの聲もともにぞたかく聞ゆる　俊賀法師

○長久二年五月庚申夜祐子内親王家名所歌合、ゆるぎの森のせみ
なくせみぞ聲ふりたつる夏の日にゆるぎの森は村雨ぞする　讀人しらず

○同歌合、いはせのもりのせみ
思ふこといはせの森に鳴くせみのこゑ珍らしく人のきくらむ　同

○題不知
六二
かつみつゝいはせの森にすむ蟬も時もしらずや鳴き渡るらむ　同

○永久四年百首、蟬
東路や今朝立ちくれば蟬の聲たかしの山にいまぞ鳴くなる　仲實朝臣

○久安百首
はる〳〵と高師の山に鳴く蟬の聲は雲居のものにぞ有りける　左京大夫顯輔卿

○寛治五年右從二位藤原親王家歌合、蟬
空せみの聲のはるかに聞ゆるはたかをの山になけばなりけり　橘成元

○家集、蟬聲未ㇾ遍
夏山の椎の葉毎にとり付きてみゝの開もなくゆする蟬かな　源仲正

○せみを
歌苑抄
夏山のそらひゞくまでなく蟬はこのはも搖ぐ心ちこそすれ　俊惠法師

○同
山彦もこたへぞあへぬ夕づく日さすや岡邊のせみの諸聲　同

○文集百首歌に寄風雨天蟬聲
小ぐら山みねの梢になくせみもこゑしをれぬる夕立の空　八條院高倉

○久安百首
蟬のははさばかりこそは薄けれど聲に暑さをもたるなりけり　待賢門院安藝

○家集、蟬
衣手のもりの梢やたかからむはるかに蟬のこゑぞ聞ゆる　法性寺入道關白

○建長八年百首歌合
ゆふされば松風すゞしかた岡の森のこずゑに蟬はなけども　正三位忠定卿

○同
くれかゝる空とよむまで夏山の木だちをしげみ蟬騒ぐなり　前大納言顯朝卿

○同
空蟬のいかに慰む夜なれば暮れぬ聞ばかりねをもなくらむ　左近中將具氏卿

○同
たが爲と脫ぎてかすらむ空蟬の鳴く木のもとのおのが羽衣　後九條內大臣

○六百番歌合、蟬
ひまもなく篠田の森に聞ゆなりちえにやきなく蟬の諸聲　正三位季經卿

○同
雲居までひゞきやすらむ夏山の峯よりたかき蟬のもろごゑ　大藏卿有家

○土御門內大臣家十首歌合、深夏蟬聲
秋風もかよふばかりの梢より松をはらふや蟬のもろごゑ　寂蓮法師

○建長八年百首歌合
松たてるみのの御山の木かげとて友なき蟬もひとりなくなり（はしのたか山イ）　後九條內大臣

○弘安元年百首
木づたひて梢の蟬も鳴きくらし青葉かさなるはらのをか山　同

○百首歌、馬上聞蟬
眞柴わけはやむる駒に驚きて木だかくうつる蟬のもろ聲　寂蓮法師

○せみ
萬十五
石ばしる瀧もとゞろに鳴くせみの聲をしきけば都し思ほゆ　讀人しらず

○寬治五年十一月從二位藤原親王家歌合、蟬
石ばしる瀧のよどみにうちそへて木每に蟬の聲ぞ聞ゆる　同

○正治二年百首
山川のいは本とよむせみの聲梢もやがてひゞきあひにけり　源師光

○千五百番歌合
せきとむる山下水はすゑたえて風に流るゝせみのむらごゑ　寂蓮法師

雨そゝぐ峯の梢をながむればむら雲かゝる蟬のこゑ〳〵　第三のみこ

○寬元四年十一月當座百首
宿になく梢のせみのむら聲は夕日のかげもところせきまで　從三位爲實卿

○海道宿次百首、守山
なく蟬の涙しられてもる山のしげみにおつる木々の夕霧　參議爲相卿

○文永十一年毎日一首中
雲のゐる遠山くらきあさまだきあけ過ぎてなく蟬の聲かな　民部卿爲家

○千首歌
なつやまの梢もしろく鳴くせみの涙やしたに秋をそむらむ　同

○文應元年毎日一首中
鳴きつゞくせみの諸聲ひまもなしならびの岡の夏のひぐらし　同

○百首歌
住の江の松のうれふく浪風にこのころ蟬のこゑぞうちそふ　前中納言定家卿

○同
山里はせみのもろごゑ秋かけて外面の桐の下葉おつなり

○建保二年六月文字二十首
拾遺員外
なれきつる扇の風もいかならむ夕べのきくにこゑうつる蟬　同

茅蜩

○だいしらず
萬十五
夕されば茅蜩きなく伊駒山こえてぞあかくいもがめをほり　讀人しらず

○同
同
こひしげみ慰めかねて茅蜩のなく島陰にいほりするかも

○百首御歌
ひぐらしのなく夕暮の山風に色をもまたでちる木の葉かな　土御門院御製

○正治二年百首御歌
しはつ山風吹きすさぶならのはにたえ〴〵残るひぐらしの聲　喜イ 喜多院入道二品のみこ

○十題百首
み山ふく風のひゞきとなりにけり梢にならぶひぐらしの聲　前中納言定家卿

○建長八年毎日一首中
いとゞしく物ぞ悲しき小倉山夕日がくれの日ぐらしのこゑ　民部卿爲家

○文永四年毎日一首中
小倉山やまかげ急ぐひぐらしのなくやなみだとすぐる村雨　同

○建保三年名所百首
大江山ゆふだちすぐる木の間より入日涼しきひぐらしの聲　從三位 行能イ

○同
大江山我よりさきにゆく人の宿やとふらむひぐらしの聲　藤原康光

○千五百番歌合
新後撰夏
ひぐらしのなく音に風をふきそへて入日涼しき岡のべの松　後京極攝政

○同
ひさぎおふる沖の小島の浪の上に浦風さそふひぐらしの聲　從三位保季卿

○賀茂社百首禍歌
拾玉四
秋ちかき梢に蟬のなきすぎて松風はやみひぐらしの蟬（ぞなく拾玉）　慈鎭和尚

○六帖題
新六ノ六
夏ふかき梢のせみの弱り聲たゞやまもとのひぐらしぞ鳴く　信實朝臣

納涼

○建仁元年歌合、松下晩涼
木ずゑより夕風おくる松が根はあきまた秋の宿りなりけり　慈鎭和尚

○六百番歌合、蟬
茂りあふあをき紅葉の下涼み暑さはせみの聲にゆづりぬ　同

○南北百番歌合
賤のをが更け行く暗の門涼み好もしからぬまとゐなりけり　同

○住吉社百首
あつさをば松の嵐にをさめ置きて秋をうかぶる住の江の波　同

○家集
ひさぎおひ涼めとなれる陰なれや浪うつ岸に風わたりつる　西行上人

○同
なみたてる川原柳のあをみどり涼しくわたる岸の夕風　同

○家集
草の葉も動かぬ夏のてる日にも思ふなかには風やふくらむ　重之

○三百六十首中
上そよぐ竹のはなみのかたよるを見るにつけてぞ夏は涼しき　よしたゞ

○五十首歌
夏の日を道ゆきつかれいなむしろなびく柳にすゝむ川風　前中納言定家

○建久七年百二十八首和歌
夏の夜は月ぞけぢかき風すゞむふせやの軒のまやのあまりに　同

○後京極攝政家詩歌合、水邊涼自秋
夏衣秋だにたたぬ神なづきゐせぎの波の急くしぐれに　同
雪とのみおつるしら泡に夏きえて秋をもこゆる瀧の岩波

○同
龍田山夏の木ずゑの木がらしは川瀨の浪の底よりぞふく　慈鎭和尚

○同
袖ひぢて結ぶ白浪たちかへりこぼるばかりの松のゆふかぜ　從三位家隆卿

○同
來ぬ秋のいつ暮れはてしうすごほり結ぶばかりの山の井の水　大藏卿有家

○最勝四天王院名所御障子
雪の上になびきて上るふじのねのけぶり涼しき夏の空かな　慈鎭和尚

○同
夏山のあらしをぬきにおりなして涼しくおつる布びきの瀧　同

○同
神がきのみたらし川の夕涼み袖ふきかへすならの下風　前中納言匡房卿

○題不レ知
萬代 いづみ川すゞむこの夜は明けぬらし遠かた波の岩こゆるみゆ　讀人しらず

○同
萬代 わがゆ釣るたましま川の柳陰夕風たちぬしばしかへらじ　俊惠法師

○二夜百首御歌、納涼
口をさふる松より西の朝涼みこゝには暮ぞまたれざりける　後京極攝政

○同
玉葉夏 陰ふかき背面のならの夕すゞみひと木がもとに秋風ぞふく　同
野なかより松の木かげにせき入りてぬるき淸水の底に涼しき

○建保三年百首御陪納涼
はつせのやゆづきが下にかくろへて人にしられぬ秋風ぞふく　前中納言定家卿

○四季百首山
涼しさを尋ねもとむる心だにもされぱと山にすむ人もなし　同

○水邊納涼
松がねにけささらしるを手にかけて思はぬ外の秋をしるかな　權中納言定家(賢イ)卿

○同心を
夏山の谷の小川のみなかみにたづねきたれば秋もすみけり
同

○水邊納涼
下くゞる水こそあらめいづみ川河邊の松にかよふ秋風
權僧正公朝

○仁永二年内裏五首水邊夏夜
百敷や砌にちかきみかは水ながるゝこゑのふけて涼しき
前中納言爲兼卿

○野亭夏朝
朝風にさゆる草葉のすゑ遠みそこともわかぬ（にはとめわけぬイ）野邊の涼しさ
同

○嘉元元年三十首
日をさふる夕山松の木の下に清水ながれて夏ぞすくなき
同

○嘉元元年式部卿親王家千首、山家夏
涼しさはいづくもとはじ山里の松よりおつる風の下水
參議爲相卿

○貞應三年百首夏川
初瀬川しらゆふ浪の涼みしてかけだちならずふたもとの杉
民部卿爲家

○あづさをさくるといへることをよめる
水はよしあたりもしみよ吹きすぐる風さへさゆる山の井の里
俊頼朝臣

○夏歌中きのかげにかぜきたるといふ事を
ひざかりは遊びてゆかむ影もなしまの萩原風たちにけり

○夏歌洞路共清湛（淵イ）
山ふかみ谷をわけつゝゆく人はふきいづる風ぞ嵐なりける
千里

○だいしらず
歌林抄
旅人の葉山の裾にやすらへばあをみなづきも涼しかりけり（めイ）
讀人しらず

○安元二年閏九月歌合、泉邊翫月
月宿る岩井の水をむすぶ手に涼しさまねく玉ぞこぼれる
源仲綱

○永仁元年禁忍百首
石の上に落ちたる瀧のかず〳〵に涼しさまねく玉とみえつゝ
藤原爲顯

○嘉元四年十一月當座百首
涼しさはならの下葉の夕まぐれしるまく峯におとりやはする
從三位爲實卿

○家集夏歌中
風かよふ野守の宿のさゝむしろ木陰ならねど夕すゞみせり
信實朝臣

○文治六年女御入内屛風
涼みにとわけいる道は夏ふかく裾野につゞく森のしたくさ
後京極攝政イ

○建保四年内裏十首歌合
夕涼みまさ木のかつらふく風に外山をかけて秋やきぬらむ　僧正行意

○喜多院入道二品親王家五十首
芝居する山松かげの夕涼み秋おもほゆる日ぐらしの聲　野宮左大臣

○正治二年百首
風わたるまつの木かげの夕涼みまだきおとなふ秋のひところ　第三親王

○同
風わたる夕草かげに涼みきて唯ひと時の秋ぞうれしき　前大納言隆房卿

○千五百番歌合
松風のなつたけくまに涼しきは木末に秋やちかのしほがま　前大納言忠良卿

○同
結ぶ手の涼しきのみか岩そゝぐたるみの音も夏はしられず　法橋顯昭

泉

○悠紀方屛風歌玉陰井
岩間もるたまかけの井の涼しきは千歳の秋を松風ぞふく　皇太后宮大夫俊成卿

○五社百首、泉
ふりにけるおぼろの清水結びあげて昔の人の心をぞくむ　同

○同
眞清水の岩もる聲をよるきけば枕の下のこゝちこそすれ　同

○永久四年百首、避暑
大原やおぼろの水に雪ふれば夏はをちなるものにぞ有りける　仲實朝臣

○堀川院御時百首
續後拾夏
八重むぐらしげみが下に結ぶてふおぼろの清水夏もしられず　前中納言匡房卿

○同
結ぶてに扇の風もわすられておぼろの清水涼しかりけり　修理大夫顯季卿

○同
さらし井の木のしたかげに雪ふれば衣手寒し蟬はなけども　俊頼朝臣

○久安百首
ましみづの扇も夏もわすられてやゝはやきむし蟬はなけども　花園左大臣小大進

○喜多入院道二品親王家五十首、夏歌
夕されば秋の姿をうつしても月(かけ)をぞ結ぶまつかぜの水　前中(大イ)納言隆房(イ)

○百首歌、泉
月はさし岩もる水は秋のこゑ夏のよそなる庭のうたゝね　從二位家隆卿

○建長八年百首歌合
草のはにいはもる水をくみかけて露おく秋の景色をぞみる　信實朝臣

○百首歌
山かげの清き松が根まくらにて岩もる清水かたむすびせむ　寂蓮法師

○泉爲夏栖
ふるさとは岩もる水に住みかへてよもぎや庭の主なるらむ　同

○樹陰如ㇾ秋
手に結ぶ清水が上の玉がしはそのかげいつか秋にことなる　源仲正

冰室

○百首御歌
新續古夏
限りあればふじのみ雪のきゆる日もさゆる冰室の山の下しば　順德院御製

○同
冰室どのいなばが末の夕風に夏と秋とをふきみだりぬる　慈鎭和尚

○嘉元々年仙洞三十首御歌
新後拾夏
涼しさはほかにもとはずやましろの宇多の冰室のまきの下風　入道前太政大臣

○文治六年五社百首、冰室
春日山ふるき冰室のあと見るも岩のけしきはなほぞ涼しき　皇太后宮大夫俊成卿

○同
岩かげや松がさきとの冰室山いづれ久しき試しなるらむ　同

○同
冬とぢし岩戸あけても冰室もり夏は通さぬせき路なりけり　同

春もすぎ夏たけぬれど冰室山冬を納めておけるなりけり　同

○祇園百首
神のみな守るめぐみのしるしをばきえぬ冰室の冰にぞしる　同

○正治二年百首
神代より君をもかみと守りおけば氷も夏のものとこそなれ　同

○正治二年百首
畏きはなにはのことも多かれどたかつの宮の氷室なりけり　源師光

○家集、氷室を
すべらぎのみことの末し消えせねば今日も氷室のおものたつなり　俊頼朝臣

○堀河院御時百首
夏の日も涼しかりけり松がさきこれや氷室の渡りなるらむ　修理大夫顯季卿

○同
君がへむ御代なか坂の氷室にはうづむ氷の解けぬなりけり　中納言國信卿

○同
名にしおはば氷室の内にいかにしてこその氷のとけぬなるらむ　權僧正永縁

○同
つげの野に大山守がをさめつる氷室ぞ今もたえせざりける　仲實朝臣

○文應元年七社百首、氷室イ
御狩せし御幸にあへる氷室山とけぬためしを誰はじめけむ　民部卿爲家

○六題和歌
古のつげののみ狩それよりや氷室のおものたて初めけむ　中務親王

○貞應三年百首、氷室
せきいれしあたりの水はぬるけれど冬のまゝなる氷室山かな　民部卿爲家

○嘉元三年楚忽百首、つるが岡に納め奉る
この里は氷室結ばぬ山なればふじのみ幸をためしにぞとる　從三位爲美卿

○正治二年百首、氷室
春秋のとめる御代には昔より氷室に冬もとまるなりけり　正三位季經卿

○西洞隱士百首御歌
ほかは夏あたりの水は秋にしてうちは冬なる氷むろ山かな　後京極攝政

○百首歌、氷室
大和路や都も遠き氷室山まだよひながらいはとあくなり　從二位家隆卿

○同
すべらぎの氷のおもの嬉しくぞ告げしらすてふ數にいれける　從三位爲綱卿

此の歌は爲綱卿三位に任じて悦中の日少將内侍のもとより氷をつかは

したりける返事によめると云々

すべらぎの代々の冰のおもものにてうるほすかひぞ嬉しかりける　少將内侍

○弘安二年若宮百首
あはれなど冰室の冰つれなくてきえぬものから我くだくらむ　安嘉門院四條

○同年檜柄戸百首
都には日つぎの冰室あしたゆく君がためとてさぞはこぶらし　同

○氷室
水無月のてるひもとかすさゞ浪やおほ山深くつめる冰は　從二位行家卿

○六帖題
新六一
さしも今日影にうとき冰室山いはがき紅葉ちりやおほひし　信實朝臣

夏鹿

○百首御歌、晩夏
夏はつるやののかみ山たち忍び又つまかくす鹿やなくらむ　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
星みゆる夏けの鹿のかくろへて富士裾の野にしけるたか草　同

○弘安元年百首御歌
おきふしにまた聲たてぬさほ鹿の心やゆきて狄のうは風　同

○承安三年從正朝臣歌合、夏草、判者俊成卿
を鹿ふすとぶ火の野邊のしの薄ほにいでむ秋も近づきにけり　藤原爲眞

○百首御歌
夕立の夏野の草の露しげみこゑまつ鹿やぬれてゆくらむ　慈鎭和尚

○千五百番歌合
狄原や聲もほに出でぬさを鹿の深く夏野にそよぐなるかな　後京極攝政

○爲家卿家百首
さをしかの秋に先だつ霧の中におのれなかでや夏をしるらむ　家長朝臣

○建保三年内大臣家百首
夏のゆく鹿もかくすか大あらきやかる人もなき森の下草　大藏卿有家

夏蟲

○千五百番歌合
郭公こゑはたえにし垣根より忍びねに鳴くきりぎりすかな　従二位家隆卿

○百首御歌
かべにおふるいつまで草のきりぎりす秋待ち顔の露や忍ばむ　順徳院御製

○同
山賤の垣ほのおどろ夏ふけてそれともしらぬ蟲のこゑごゑ　後鳥羽院御製

○五十首御歌中
秋近き賤が垣根の草むらに何ともしらぬ蟲のこゑごゑ　同

淺茅生に秋待つほどや忍ぶらむききもわかれぬむしの聲々　寂蓮法師

○家集、夏蟲を
夏深きあさぢが庭のきりぎりす草の下ねになき初むなり　民部卿爲家

○千首歌
色みえぬ夏野の草にかくろへて秋待ちかぬる蟲のこゑかな　同

晩夏

○三百六十首中
荻のはに風のそよめく夏しもぞ秋ならねども哀れなりける　よしたゞ

○家集、六月十日秋のせちに入る
こよひより荻の葉風の音すなり秋のさかひにいりや立つらむ　もとされ

○家集
涼みけるところをくみて岩清水夏越のころはすぐさざらなむ　もとすけ

○夏のはて
六一 西へだに夏のゆきせばしたひつゝやがて戀しき秋はみてまし　讀人しらず

○同
同 今宵しも稲葉に露のおきしくは秋のとなりになればなりけり

○百首歌、夏

秋きぬといはぬばかりぞ月清みした紅葉するまの萩原　寂念法師

○百首歌

夏深きはらみにけりなしの薄下はひまとふくすのおびして　殷富門院大輔

○大神宮百首御歌

夏深み庭も葉びろの玉がしは時雨をならす夜はの村雨　後鳥羽院御製

○建保三年名所百首御歌

夏山やまつらがおきの西のうみそなたの風に秋はみえつゝ　順徳院御製

○百首御歌

けふ暮れぬ秋は一夜とふく風に鹿のねならす小野のしの原　後京極攝政

○西洞隱士百首御歌

けふまでは色にいでじのしの薄すゑ葉に秋の露はおけども　同

○文治三年百首

夏深き野べをまがきにこめおきて霧間の露の色をみるかな　前中納言定家卿

○建仁三年歌合、夏野秋近

玉夏 露わけむ秋のあさけは遠からでみやこやいくかまのの茅原　同

○文應元年毎日一首中

夏と秋と行きあひの稻葉いつの間にそよとも風の驚かすらむ　民部卿爲家

秋近くみだるゝ露の夏草にまつほにいづる庭のかるかや　同

○禎嘉二年百首

夏と秋のゆくもかへるもさ夜ふけて今やこゆらむ逢坂の關　同

○弘安三年百首

夏くるゝ日數も杉のしるしにて三わのはふりこみ幣とるらし　前大納言爲氏卿

荒和祓

○延喜十四年女四宮屛風

すみの江のあさみつ鹽にみそぎしてこひ忘れ草つみて歸らむ　貫之

○同十八年東宮御屛風、六月祓し

この河にはらへて流す言の葉は浪の花にぞたぐふべらなる　同

○天慶二年二月貫之家歌合、晩夏
昔より思ふ心はみな月のみそぎの神ぞ空にしるらむ　讀人しらず

○屏風に川邊（六月イ）はらへする所あひきえふ
みそぎする川の淵瀬にひく網をおほぬさなりと人や見るらむ　能宣朝臣

○保康三年屏風、六月ばらへする所
夏草に祓へかくればひとがたのあまづゝみとは露やおくらむ　順

○堀川院御時百首、荒和祓
八百萬神もなごしに靡くらむ今日すがぬきのみそぎしつれば　仲實朝臣

○同
千歳まで人なからめやみな月の三たびすがぬき祈るみ禊に　隆源法師

○同
水無月の清き河原にいぐしたて祓ふることを神はうくらむ（受けつらしイ）　基俊

○同
古のさばへなしける神だにもけふのみそぎになびく（なごむイ）とぞきく　顯仲朝臣

○みそぎを
千早ふるたな上河の清きせに千とせを祈る夏祓へしつ　宮内卿永範

○千五百番歌合
みそぎして秋の恵みもひろせ川幾千世までかすまむとすらむ　隆信朝臣

○布引百首御歌
布引の瀧もやけふのみそぎして水のしらゆふいは（いかイ）にかくらむ　法親王澄覺

○文治六年五社百首、夏祓
御禊するあさの立枝の青にぎて澤邊のかみもなびけとぞ思ふ　皇太后宮大夫俊成卿

○荒和祓祇園百首
六月やみそぎも涼し川やしろ袖にたまちる夕なみのした　同

○文治六年女御入内御屏風
新續古夏
君がためけふの御禊にいづみ河萬代すめと祈りつるかな　同

○家集、夏歌中
川やしろ秋はあすぞと思へばやなみのしめゆふ風の涼しさ　前中納言匡房卿

○百首御歌
ゆく螢秋風ふくとつげずともみそぎ涼しき川社かな　土御門院御製

御禊河ゆきかふ空や更けぬらむ露ながらをる麻のひとふさ　後鳥羽院御製

○百首歌、夏祓を
みそぎする岡邊のちはらたてながらまづ祓ふなりならの川風　正二位忠定卿

○喜多院入道二品親王家五十首
思ふことなる川上にうちはへてなごしのかぐら聲すみぬなり　法橋顯昭

○正治二年百首
みそぎするしるしはなくて人心うきものとのみこもりの神　三條入道左大臣

○文治六年女御入内御屏風
御禊する渚にまつるあさのはにまた夕波をかけてけるかな　同

○建長八年百首歌合
けふは早ゆふとりしでて夏麻のおふの川瀬にみ禊してけり　法印實伊

○柿本影供百首
けふはまたあさの露ちる玉くせの清き河原にいざみ禊せむ　後九條内大臣

○題不レ知
萬十一 たまくせの清き河原にみそぎして祈る命も妹がためなり　讀人しらず

萬四 君によりことのしげきを古郷のあすかの河に御禊しにゆく　八代女王

○題不レ知
立田川岸のせばきに祓へつゝいはふ心は君がためとぞ　讀人しらず

○六帖題、なごしのはらへ
蘆原や螢かゞやく神までもとびちるばかり祓へすつなり　權僧正公朝

○百首歌
淺茅刈るけふは夏越のはらへ草たかまの原の神もみそなへ　正三位知家卿

○堀川院御時百首
松影のとなせの水に御禊して千年の命のべてかへらむ　前中納言匡房卿

○家集、六月河原に祓したるに魚を取るをみて
川のせに釣する人の罪をさへ祓ひすてつるけふにもあるかな　和泉式部

○四季百首祝
もろ人のちとせ延ぶてふみそぎ河流すあさぢの末もはるかに　前中納言定家卿

○寛喜元年女御入内御屏風
みそぎ河あさの夕風吹きなびきゆくせの浪に秋やたつらむ　西園寺入道太政大臣

○同
神風や清き河邊にみそぎしてちとせの秋の初めをぞまつ　常磐井入道太政大臣

○御集、三百首御歌、荒和祓
うきを拂ふ大海の原に御禊して浪もあらぶる神やみつらむ　後鳥羽院御製

○文曆元年七月百首
難波潟けふ水無月の御禊をば八十しまかけて神ぞうけける　民部卿爲家

○同
磯河やいすゞの河の夏祓へたゞおしなべて神やうくらむ　同

○文治六年五社百首
けふもたれいすゞの河にみ禊して荒ぶる神もなごしなからむ　皇太后宮大夫俊成卿

○寶治二年百首
麻のはも水上かけていづみ川こま山びとやみそぎしつらむ　後九條内大臣

○同
みなづきの御禊川原のかへるさになごしの山の雲ぞあけ行く　從二位賴氏卿

○同
御禊することよひは夏のみなせ河あらぶる神も涼しかるらむ　隆祐朝臣

○百首歌
御禊するけふのあさぢのひたりなばあらぶる神も心とくらし　從二位顯氏卿

○久安百首
思ふことあさぢのなはにときつけて清き河せに夏祓へしつ　前納中言隆季卿

○同
玉のをや短からまし御禊する麻のをぬさに祈りかけずば　同

○文治六年女御入内御屛風
夏の日をかねて御禊にすつるかなあすこそ秋の初めと思ふに　後京極攝卿

○同
萬代といはふみそぎはますけよきそがの河原の夕暮の空　後德大寺左大臣

○物へ行く人に衣をとらすとて
みそぎつゝわかるゝかたの川浪の立ち歸るてふことをこそ思へ

○家集、はらへしける女をみて
御禊せしなごしの夜より人しれず賴み渡ると人にしらすや　元眞

○天慶三年七月右衞門督家屛風歌
六月祓
みそぎつゝ思ふ心はこの河のそこの深さに通ふべらなり　つらゆき

○家集、みな月ばらへしける所に男來合ひたり
六　家集
年の中に我が歎きとはなりぬれば世にみそぐとも失せじとぞ思ふ　伊勢

○毎日一首中
○六帖題
永イ
○文治十一年毎日一首中
○同五年毎日一首中
○弘長四年毎日一首中
○家百首歌
○文應元年七社百首
○貞應五年百首、荒和祓
○家集
○百首歌
○百首歌、荒和祓
○天仁二年十一月顯輔卿家歌合、夏はらへ
○治曆三年四月定綱朝臣歌合、六月荒和祓
○堀川院御時百首、荒和祓
○文治五年百首

くれずともはや夕かけて御禊せむけふは夏越と神もうくらむ　民部卿爲家
みそぎ川流すちのわのほどもなく過ぐる月日に廻りあふかな　同
新六一
徒らにおふの麻のはとりしでてことしもたけぬみな月の空　同
はしり井の河せに千たび御禊して早くぞ祈る神はうけよと　同
つひによるあさせやいづら大井河けふは御禊と流す大ぬさ　同
六月のみそぎ河原の早きせにさもすぎやすき夏の影かな　同
この川にならの大ぬさとりしでて麻あらふる神の御禊してけり　同
水無月や麻の立枝にぬさかけて流すみそぎは神やうくらむ　同
年毎にすぐるちのわのみそぎ川流れて早く廻りあふかな　同
川あひや清き川原に麻の葉のぬさとりしでていざ御禊せむ　同
麻の葉のぬさもとりあへず御禊河早瀬に夏を手向けてぞやる　安嘉門院四條
壬二上
御禊川しらゆふかけて麻のえのなほき心を神やうくらむ　從二位家隆卿
御禊すと川せにたつるみてぐらに浪さへけふはゆふかけてけり　琳賢法師
瀧つせにゆふかけ祈るすべら神けふのなごしに岩戸あくらむ　源忠季
澤邊なる淺茅をかりに人なして厭ひし身をもなづるけふかな　俊賴朝臣
みそぎすとしばし人なす麻のはも思へばおなじ假初の世を　前中納言定家卿

○同二年百首
御禊河からぬ淺茅の末をさへみなひとがたに風ぞなびかす　同

○百首歌、唐崎夏祓
いかにせむわれがらさきの夏祓へその人がたの數ならぬ身を　藤原爲顯

○久安百首
身はすてて人がたとだに思はぬを何にすがぬく御禊なるらむ　待賢門院堀川

○六帖題
新六一
ふけぬるか道のちまたに御禊してぬさきりすつる里の村人　光俊朝臣

新六一
里人のおなじ御禊の宿ごとにけふはかはらず千世祈るなり　衣笠内大臣

○百首御歌
御禊するさほの河風ふけぬらしみかさの山にさを鹿の聲　慈鎭和尚

○千五百番歌合
石河やせみの小川の流れにもあふせありやと御禊をぞする　隆信朝臣

しらざりつみわすゐまつる御禊河神さへうけぬ思ひせむとは

○文治六年女御入内御屏風
さほがはのたえぬ流れにいぐしたて祈る御禊も君が代のため　同

○天仁二年十二月顯季家歌合、夏祓
みな月のけふぞ夏越の祓へしてすがぬき捨てつさほの河原に　藤原隆仲

六月にみゝとがはにてみそぎつゝ祈ることをば神ぞきくらむ　中院入道右大臣

○正治二年百首
わかたゝみみつの河原にいぐしたて夕かたかけて夏祓へしつ　正三位季經卿

○建長八年百首歌合
たがみそぎゆふだゝみして立田川瀧のせきりにぬさ流すらむ　從二位行家卿

○千五百番歌合
誰がみ禊おなじ淺茅のゆふかけてまづうちなびくかもの河風　前中納言定家卿

○同
御禊する流れになびけあし原のくにはじめせし神の心も　野宮左大臣

○同
御禊するあさの河風吹きわけて秋をよせくる浪のゆふこゐ　西園寺入道太政大臣

○同

七夕のあまい川原にこひせじと秋をむかふる御祓すらし　後京極攝政

夫木和歌抄巻第九　終

夫木和歌抄 卷第十

秋部一

題 立秋 初秋 殘暑 七夕

立秋

○建長三年九月十三夜十首歌合、初秋露

秋きぬと野なる草木もしりぬらむあまねく廣き露の惠みに　後九條内大臣

○同

うちなびき秋きたりとや草むしろ野もせの露の玉をしくらむ　衣笠内大臣

○同

玉敷の露のうてなも時にあひて千代の初めの秋はきにけり　民部卿爲家

○同

今やこれ秋おく露の新むすびときは來にけりたもと涼しも　正三位知家卿

○久安百首、立秋

このねぬるあさけの風や拂ふらむ峯なる雲の空にきえぬる　前大言納隆季卿

山里は庭の草むらうらがれて蟬のなくねも秋めきにけり　清輔朝臣

○家集、旅泊秋來

もゝつての浪路に秋やたちぬらむせとの潮かぜ袂涼しも　同

○六帖題

新六一 白妙の衣手涼しうちまやま朝風ふきて秋はきにけり　衣笠内大臣

今朝の風この夕暮の草の露かはれる色に秋はきにけり　前中納言爲兼卿

○貞應二年當座百首、林蟬聲幽
ときはなる林の蟬もさすがまた秋とやしらむ聲かすかなり　民部卿爲家

○三百六十首中
ほだちする秋はきにけりおりそぼち早苗束ねし袖もひなくに　よしたゞ

○家集
み禊すと麻きり捨てし程もなく今朝は夜さむに風立ちにけり　和泉式部

○堀河院御時百首、立秋
まちかねてかたしく袖の寒きかな我が閨よりや秋はたつらむ　中納言國信卿

○建保二年内裏十五番歌合、秋風
夜や寒き衣手うすきかたしきのまたひとへなる秋の初風　順德院

秋きぬと風にのみやは驚かむひろはぬ袖にたまもはかなし　僧正行意

○百首歌、風告秋使
ふきすぐる風の音だにかはらずばけふも夏野の荻のうは葉を　寂蓮法師

○嘉祿三年百首、早秋風
いつしかに（とイ）朝けの風の身にしみてさやかにかはる秋はきにけり　民部卿爲家

○岡屋入道攝政家百首、行路立秋
たちそむるみちの秋風心せよかたみの衣まだひとへなり　同

○題不レ知
歌苑抄
葛の葉のうら吹き返す風の音もけふはすゞしなせみの羽衣　藤原道宗朝臣

○千五百番歌合
風の音に秋はけふより立田山夜はにや夏のひとりこゆらむ　後鳥羽院御製

風の音に驚くのみか荻のはのさやかになびく秋はきにけり　慈鎮和尚

秋風の立田がはらの柳影はるのみどりも色づきにけり　土御門内大臣

秋來ぬとひと夜をわくるかねの音に哀れうちそふ曉の空　野宮左大臣

鹽路より秋や立つらむ明方はこゑかはるなり須磨のなみ風　皇太后宮大夫俊成卿

秋風はひと夜ばかりを蟲のねのはたおるまでや夕暮の空　寂蓮法師

○後京極攝政並一字三十三首中
けふもまたみどりは同じ夏山の風にまかせて秋やたつらむ　宜秋門院丹後

○内裏御會、秋十首歌
惠みぬとみればくれにし春の草風におどろくあきはきにけり　前中納言定家卿

○文治六年五社百首
夏はてゝぬるや河邊のしのゝめに袖ふきかぬる秋の初風　同

○喜多院入道二品親王家五十首
いつしかとけさは袂のかろきかな秋は衣にたつにぞありける　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首
けふよりは秋の聲ぞときかすなり野守のかねの曉の空　同

○同
けふこそは秋のはつせの山颪涼しくひゞく鐘の音かな　前中納言定家卿

○同
けふよりや鳩ふく聲は聞ゆらむあさけの風も秋をつくなり　前中納言隆房卿

○同
何となく哀れ秋にもなりぬるを思ひもあへず夜どこ寒しも　源師光

○文治六年五社百首、立秋
けさ見ればさが野の露も色づきて嵐の山にあき風ぞふく　皇太后宮大夫俊成卿
すまの關秋の初風越しにけりしきつの浪の音もかはれる

○老若五十首歌合
秋はきぬとばかりこそはながめつれまがきのくれに荻の上風　寂蓮法師

○百首御歌、立秋
人とはぬむぐらの戸ざしあけぬよの露の道より秋やきぬらむ　後九條内大臣

○洞院攝政家百首、早秋
おきのぼる露はもとより荻の葉の音こそかはれ秋はきにけり　大納言通信卿

○同
露結ぶ岡邊の小篠あくるよのあしたの原に秋はきにけり　民部卿爲家

○同
秋きぬとあさけの露は急げども本あらの小萩花も咲きあへず　從三位家隆卿

○同
衣手の森の下風ふきかへてさむき蟬なく秋はきにけり　從二位頼氏卿

○同
門田うゑし昨日の早苗はやわせの走りほに出でて秋はきにけり　家長朝臣

○同
吹く風もけふたちそめてはつせめのゆふ花ちらす秋の河浪　隆祐朝臣

初秋

○建保三年名所百首
玉秋上
こゝろあての思ひの色ぞ立田山けさしもそめし木々の白露　前中納言定家卿

○文集百首、大底四時心惣苦就中腸斷是秋天
さくら花山時鳥雪はあれど思ひをかぎる秋はきにけり　同

○洞院攝政家百首、早秋
くれがたき春の霄の根引きかへてあくる夜遲き秋はきにけり　同

○初秋御歌中、雲葉集
龍田ひめ風のしらべもこゑたてつ秋やきぬらむ岡の邊の松　後鳥羽院御製

○秋御歌中
古來歌
あしすだれ夕暮かけてふく風に秋の心ぞうごきそめぬる　後嵯峨院御製

○嘉元元年百首御歌、初秋
天津風空にたちつゝあらかねのつちの色にぞ秋もみえける　龜山院御製

○建保二年秋十五首歌合
新後拾雜秋
をさまれる民の草葉をみせがほになびく田面の秋の初風　前中納言定家卿

○建保四年毎日一首中
おほみ田の今年のわせのはつほもの神の社にけふ供ふなり　民部卿爲家

秋の夜のはじめて永くなるまゝにね覺め涼しき曉の空

○洞院攝政家百首、早秋
竹の子の短きふしも秋きては永きよすがら風そよぐなり　家長朝臣

○光臺院入道二品親王家五十首、早秋
露おつるわさ田の軒端うちなびきけさよりまほに秋風ぞふく　同

○秋草
新六ノ六
野邊みれば草の初花かたさきてちゞには秋の色ぞまだしき　信實朝臣

○家集

新撰六帖 秋やくるいろはつれなきときは木の青葉の山に風薫るなり　正三位知家卿

○題不レ知

萬代 身にしめと吹きにけらしな玉も刈るあさかのうらの秋の初風　伊成卿

秋風 おほしまの松ふく聲にきこゆなり道あるときの秋の初風　前中納言經光卿

○建久元年一字百首

へだつらむいくへの雲のほかにして秋風ふくと鴈のきくらむ　前中納言定家卿

○正治二年百首

ながむれば木の葉うつろふ夕月夜やゝけしきだつ秋の空かな　式子内親王

よそにきく峯の嵐も荻のはにさとなれそむる夕暮のそら　寂蓮法師

○千五百番歌合

山深き松に吹きけりみやこにはまだ入りたたぬ秋の初風　俊成卿女

○初秋歌中

秋たちてはつ夕暮にふく風のやがて寂しき荻の音かな　從二位家隆卿

○題不レ知

萬八 拾 秋立ちていくかもあらねどこのねぬるあさけの風は袂涼しも　安貴王

○初秋歌

六一 東路のいさねの里は初あきの永き夜ひとりあかす我らぞ　みつれ

○家集、秋歌中

ゆるかりし風の音こそはげしけれ今はた秋になりぬと思へば　惠慶法師

○家集、秋のはじめつかた煙のたつをみて

夏はてて秋までくゆる蚊遣火は昔いかなることかありけむ　爲賴朝臣

○天暦二年貫之家歌合、初秋

松もなくしげき木の葉は夏ながら紅葉の色ぞ染め初めける　讀人しらず

薄くこくそめ初めたる紅葉ばになど我が戀を思ひそめけむ

○延喜五年十二月平定文家歌合、初秋

六一 時雨にも雨にもあらぬ初きりのふるにも空はさえ曇りけり　たゞみね

○左大臣家賀屏風、七月女共舟にのてり池にあそぶところ

はつ霧もたちそめにけり誰にかは人渡るらむかさゝぎの橋　元輔

六一　順集

木がらしの秋の初風ふきぬるになどか雲居に鴈の聲せぬ　　讀人しらず

此の歌は規子内親王家歌合にまさみち申す木がらしとは冬の風をこそいはめと申し侍りければかかる事はふるきことをためしにひかめと申しければひきける歌と云々

○三百六十首歌の秋のはじめの長歌

すゞみせし　夏の暮れにし　夕より　野べの草ばを　かきわけて　よもにふきくる　こがらしの　やゝはださむく　なるまでに　と云々　　よしたゞ

○爲家卿家百首

時雨をば四方の山邊にいとふべきこや木枯のあきの初風　　従二位家隆卿

○百首和歌

さを鹿の夏野の草をわけ捨ててみ山の秋にうつるはつこゑ　　慈鎮和尚

○建久七年百二十八首、秋の初めの歌

八重むぐら秋のわけいる風の色を我さきにとぞ鹿はなくなる　　前中納言定家卿

○御集、秋のはじめの御歌

色かはる露のみ袖にちりやせむみねの秋風木の葉青くば　　後京極攝政

○十五番歌合

出でそむるまだ三日月の仄かにてさながら秋の色をみすらむ　　従三位保季卿

三日月の光ほのかに見ゆるより心をつくる秋の空かな　　二條院讃岐

○文永十五年毎日一首中

夕まぐれひと葉色づく木の間より西こそ秋といづる三日月　　民部卿爲家

○三體和歌

よひのまの月の桂のうす紅葉てるとしもなき初秋の空　　鴨長明

○千五百番歌合

夕暮は小野のしの原忍ばれぬ秋きにけりとうづらなくなり　　前中納言定家卿

○家集、初秋
秋はきぬ紅葉のみ舟ふなよそへたなばたつめの天の川をさ　従二位家隆卿

○寶治十首歌合、初秋風
天の川かは風涼しとほづまのいつかとまちし秋やきぬらむ　正三位知家卿

○老若五十首歌合
秋たちてけふみかの原風寒しやゝたなばたに衣かせやま　後鳥羽院御製

秋はきぬ七日はまたじ七夕のあさひく絲のふしやわぶらむ　慈鎭和尚

○秋歌中
萬十五
今よりは秋つきぬらしあしびきの山まつ影にひぐらしなきぬ　讀人しらず

○十題百首糊歌
みなひとは蟬の羽衣ぬぎ捨てて今は秋なるひぐらしの聲　後京極攝政

○糊歌、立秋
した草に露おきそめて秋のくるけしきのもりに蜩ぞなく　同

○南北百番歌合
はゝそ原しぐれぬほどの秋なれや夕露涼しひぐらしの聲　同

○喜多院入道二品親王家五十首
秋風のふきにし日よりかた岡の蟬のなく音もいろかはるなり　従二位家隆卿

○家集、初秋風
やゝ寒き初秋風のいねがてに通ひすぎぬる夢のふるみち　民部卿雅有

○建長五年毎日一首、初秋
夜や寒き月や涼しき明方のおいの寐覺めに風ぞ身にしむ　民部卿爲家

殘暑

○六百番歌合、殘暑
うちよする浪より秋はたつた川さても忘れぬ柳影かな　後京極攝政

秋をあさみてる日を夏とおぼめけばくれゆく空の荻の上風　中宮權大夫家房卿

國
秋きてもなほ夕風をまつかねに夏を忘れぬかげぞたちうき　中納言定家卿

秋風の吹きもつよらぬ眞くづ原夏の景色になほかへるかな　大藏卿有家

夏衣まだぬぎかへぬ夕暮は袖にまたるゝ荻のうはかぜ　寂蓮法師

水無月のてる日や影を殘しけむけさふく風の秋にしられぬ　法橋顯昭

○永久四年百首、殘暑

秋きては風ひやかなる暮もあるにあつれしめらひむづかしのよや　俊頼朝臣

七夕

○六百番歌合、乞巧奠

星あひの空の光となるものは雲居の庭にてらすともし火　後京極攝政

たなばたは雲の上より雲の上に心をわけて嬉しかるらむ　慈鎭和尙

くれたけにすぐる秋風さよふけてまつるほどにや星合の空　前中納言兼宗卿

秋毎にたえぬ星あひのさ夜更けて光ならぶるにはの灯　前中納言定家卿

たれもまた今日七夕をまつりつゝいのる心は空にしるらむ　正三位經家卿

宿ごとに影をうつせば七夕のあふせはしげしあまの河浪　正三位季經卿

定めおく星合の空のしるしとて秋のしらべにことぢたつなり　法橋顯昭

七夕の逢ふ夜の庭におくことのあたりにひくはさゝがにの絲　寂蓮法師

○寶治二年百首、乞巧奠

見るまゝに庭の燈火かすかにて七夕まつる夜はふけにけり　信實朝臣

○家集、乞巧奠

よもすがら星合の空にたてまつるかうの煙や雲となるらむ　源仲正

○正治百首
たきものを雲の衣に匂はせて七夕つめのくれをまつらむ　三條入道左大臣

○寶治二年百首、乞巧奠
白露の玉のをごとの手向けして庭にかゝぐる秋のともしび　常磐井入道太政大臣

おくことのかひやなからむ星合の秋の別れはひきもとゞめず　後九條内大臣

七夕のあはすはなにに白露の玉のをごともけふはかさまし　民部卿爲家

彦星のゆきあひの空に手向けしていたゞきまつるこの夕かな　正三位知家卿

すべらぎの南のそのに御いでせしその夜の秋は今宵なりけり　光俊朝臣

○文永四年百首、乞巧奠
たましきや雲居の庭におくことのおのづからなる星合の空　民部卿爲家

○乞巧奠
庭の面にひかで手向くる琴のねを雲居にかはす軒の松風　入道前太政大臣

○文永元年百首、七夕
かへるさの袖ぬらすらしかさゝぎのよりはにかゝる天の川浪　參議爲相卿

○海濱名所歌、菊川七夕
浪に今うつしてみばやきく川の名もたよりある星合の影　同

○建長八年百首歌合
今宵とて雨間をいのる星合のかなふとみるぞ光なりける　信實朝臣

○七夕の心を
星あひの空だのめとやなりぬらむけふしもそゝぐ秋の村雨　他阿上人

○建長七年七月七日七首歌
遠づまのくべき秋なり絲のあみの玉の笹蟹かねてしるしも　權僧正公朝

○家集、七夕歌中
宵の間に月のまゆをばひらけども露ぞわかれの涙なりける　同

○家集、七夕
七夕やおのがきぬ〴〵なりぬらむ空なる雲の中にたえぬる　清輔朝臣

○同、七夕書志
たなばたの雲のはたてに思ふらむ心のあやも我にまさらじ　同

○光俊朝臣すゝめける百首

古來歌　いくとせを行きめぐりても七夕の契りはたえじ夜はのした紐　從二位行家卿

○弘長元年百首、七夕

七夕のおる麻ぬのの麻衣むねあひかたくなど契りけむ　同

○家集

萬十　七夕のいほはた立てておる布の秋さりごろも誰かそめけむ　赤人

○詠二七夕一歌

萬十　天の川やすの河原の定まりて心くらべはときまたなくに　讀人しらず

萬八　袖ふらばみもかはしつべく近けれど渡るすべなし秋にしあらねば　山上憶良

萬十　天の川かぢの音きこゆ彦星と七夕つめとこよひあふらしも　人丸

同　彦星とたなばたつめと今宵あはむ天の川せに浪たつなゆめ　同

同　天の川瀬毎にぬさをたてまつる心は君をさち（きイ）くいませと　同

同　こまにしきひもときかはし七夕のつまどふ宵ぞ我も忍ばむ　同

萬八　天の川うきつの浪とさわぐなりわがまつきみし舟出すらしも　讀人しらず

萬十　秋風に河浪たちぬしばらくは八十の船津にみふねとゞめむ　同

萬十　秋風のふきたゞよはす白雲は七夕つめのあまつひれかも　同

○七夕

萬十　わがこふるにのほのおもは今宵もか天の河原に磯枕まく　人丸

○題不レ知

萬十　機物のふみきもていで天の川うちはしわたす君がこむため　讀人しらず

同　天の河霧立ちのぼる七夕の雲の衣のかへるそでかも　同

○長歌

萬九　ひさかたの　あまのかはらに　のぼりせに　たまはしわたし　同

くだりせに　ふねうけするゑて

○題不レ知
萬十 彦星の川せを渡るさほ舟のとゆきてはてむかはつしぞ思ふ　中納言家持卿
萬十七 七夕のふなのりすらしまそかゞみ清き月夜に雲立ちわたる　同

○家集、雜歌
ひととせに一たびわたる天の河いくらばかりの廣さなるらむ　同
かさゝぎの橋つくるより天の河水もひなゝむかち渡りせむ

○秋御歌中
新續古秋　萬代　順家集 天津風あふぐともゆめ風たつなこは七夕のおれる錦ぞ　恆德公

○七月七日人にたまはせける
萬代 天津星ゆきかふ秋の夕暮にものうらやみもせられぬるかな　延喜御製

○家集
萬十 天の川橋うち渡すいもが家にたえず通はむときまたずとも　人丸
同 彦星のつまゝつ舟のひくつなのたえむと君に我がおもはなくに

○延喜六年亭子院明玉歌合
思ひやる心の空にしぐるればたなばたつめの別れ悲しな　讀人しらず

○七日夜
家　六帖　風秋上 七日ひは早くれななむ久方の天のかは霧立ちわたるべく　みつれ

○家集、七夕を
天の河けふの七日は永き夜のためしにもひきいみもしつべし　西行上人

○家集
詠むらむ空をだにみず七夕にあまるばかりのわが身と思へば　和泉式部
ひとひだにやすみやはする七夕にかしても同じ戀こそはすれ

○家集、秋歌中
露くだす星合の空をながめつゝいかでことしの秋をすぐさむ　藤原俊孝

○寛和六年七月七日東三條院瞿麥合
なでしこにけふは心を通はしていかにかすらむ彦星の空　兼盛

時の間にかすと思へば七夕にかつをしまるゝなでしこの花　能宣朝臣

此の歌事書にいはく左すはまちひさきませゆひてなでしこ二ほんばかりうゑたるにゆひつけたると云々

○同、すはまのなでしこにつけたる

同
七夕やわきてそむらむ撫子の花のこなたは色のまされる　讀人しらず

同
契りけむ心ぞながき七夕のきてはうちふすとこなつの花　能宣朝臣

此の歌詞云七夕ひこぼし雲の上にあり又つりしたるかたなどありすはまの洲崎に見えてにてと云々

○家集、七月七日

天の戸はさしやしつらむ彦星のかちふりたててかへる舟路に　平祐擧

○屏風、七月七夕まつりたらひに水入れてかげみる

天の河影を宿せる水かゞみ七夕つめのあふせしらせよ　惠慶法師

○寛治五年從二位藤原親子家歌合

雲葉集
あふことも馴れずやあるらむ七夕のまどほにきたる天の羽衣　康資王母

○家集、七夕を

七夕のたえぬ契りを結び置きて雲のしたひもけふやとくらむ　如覺法師

○七夕を

歌苑抄
七夕のくもの機たておる衣うらめづらしくうらかさぬらむ　藤原親重

同
七夕のわかるゝ今朝のたもとにはあきの白露おき初むらむ　俊惠法師

○千五百番歌合

七夕のあかぬ名ごりの袖よりや秋は露けきころとなるらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○久安百首、七夕の心を

さぬる夜の天の河原の磯枕そばだてあへずあけぞしにける　前大納言隆季卿

またれつる月のなかだちいらぬ間に早舟出せよ天のわたせに　前参議親隆卿

七夕の舟路はさしも遠かりしなどひととせに一わたりする　皇太后宮大夫俊成卿

七夕のあまの川もり心あらばかへさわたすなかさゝぎの橋　花園左大臣家小大進

○永久四年百首、七夕後朝
朝風に川浪さわけひと夜づま玉ゆらだにもたちとまるべく　源兼昌

○建長八年百首歌合
天の川くらしかねたるともしづま渡りを急ぐぬさたむくなり　前中納言顯朝卿

○七夕歌
萬八
七夕の袖つく夜はの曉は河瀬のたづはなかずともよし　湯原王（よみびとしらずイ）

○御集、七夕
こひ〳〵て稀に逢ふ夜は天の河河せのたづは鳴かずもあらなむ　鎌倉右大臣

七夕の別れを惜しみ天の河やすのわたりにたづもなかなむ

○家集、七夕をよめる
鳥にとも木にとも昔契りしはこよひなぼしのあふせ思へば　俊頼朝臣

永久四年百首、七夕後朝
七夕はあめのおしてのやへ霧に道ふみ迷ひまたやかへると　同

○九條大納言家にて七夕の歌七首當座にてよみける中
しをれきて今宵ばかりや久方のあまのは袖もほしあひの空　家長朝臣

○老若五十歌合
拂ふらむまくらぞみゆる夕まぐれ雲のちりるぬ星合のそら　嘉陽門院越前

○賀茂社百首御歌
をさめ戸のくるゝの妻戸おしあけてけふ七夕にかす物やなに　慈鎭和尚

○伊呂波四十七首歌
らのへうしひもの玉ゆらときかせば天の河原に雲やまくらむ　前中納定言家卿

○久安百首
彦星のかへさの秋ををしむとや七夕つめはあまのひれふる　實清朝臣

○正治二年百首
たなばたの雲の衣に風たちてうらめづらしき星合の空　前大納言忠良卿

○喜多院入道親王家百五十首
新續古
七夕にまをのにひ絲ひきかけてくる事たえぬ星合のそら　源師光

○正治二年百首
同
七夕の心やこよひはれぬらむ雲こそなけれほしあひの空　慈鎮和尚

彦星のもの忘れせぬ曉はたなばたつめもかくやわぶらむ　祭主輔親

此の歌は七月六日ある人わづらひて侍るをつかふまつる所よりめしけるにうたよみてといひければよめると云々

○三百六十首中七夕
家
空をとぶ乙女の衣ひとつより天のかはなみたちぞきるらし　よしたゞ

○七月七日ひきたるおくに蜘のいかけるをみて
小大君集
さゝがにのもろてにいそぐ七夕の雲の羽衣かぜやたつらむ　小大君

○かくよめるをみてかへしける
同
彦星のくべき宵とやさゝがにの雲のいがきもしるくみゆらむ　實方朝臣

○正治二年百首
星合の空はこよひぞ天の河もろてにいそげつまむかへ舟　前大納言隆房卿

○家集、七夕の心を
心してこよひの空はくもるらむ星合の姿しるくかもみむ　太宰大貳兼家卿

新千載秋上
天の原ふりさけみれば七夕の星のやどりに霧たちわたる　大納言經信

○家集、七夕歌を
雲はるゝ天のさよはしたえまかもとわたりくらし七夕つめは　躬恒

○御集
天の河月の御舟の泝りせにみがく光やわたるたまはし　中務のみこ

○家集、海路七夕
星合のかげをうつせばなごの海も天の川せの心地こそすれ　大納言經信卿

○堀川院御時百首
わたしもりふなよどめすな七夕の年に逢ふ夜はたゞ今宵のみ　仲實朝臣

○家集、七夕の歌中
七夕の天のたまゆかこよひさへ流れやすらむあかぬ涙に　俊頼朝臣

彦星のみけしのあやをいそぐとや機おる蟲の今宵しもなく

一字脱
七夕の袖にひまなくつくすみはあふせに今日や洗ひすつらむ

老いぬれば七夕つめにことよせて鳥も渡らぬみづはをぞくむ

○光俊朝臣すゝめける百首
天の河とりもわたらぬ曙におきて露ふむにはの草むら　正三位知家卿

○家集、七夕歌中
いそぎおきて庭の小草の露ふまむやさしき數に人や思ふと　西行上人

○千五百番歌合
七夕のあはぬたえまと數へしはこのよにみする月日なりけり　宜秋門院丹後

○家集、七夕の心を
一夜にはいそあひみける七夕をしらでや人の恨みそめけむ　俊頼朝臣

○堀川院御時百首、七夕
彦星の天の岩ふね舟出してこよひやいそに磯まくらする　顯仲朝臣

金秋
七夕のあはぬわかれの涙にや花のかつらも露けかるらむ　權中納言師時卿

○光明峯寺入道攝政家百首
天の河水かげ草のうちなびき玉のかつらも露こぼるらむ　前中納言定家卿

○挿頭花
六四
彦星のかざしの花は妻こふとみだれにけらしこの河のせに　讀人しらず

○久安百首
年をへてまれに逢ふ夜のあけ行けばみる人苦し七夕のいと　待賢門院あき

○千五百番歌合
あひみてもなほゆく末のちぎりをや結びかさぬる七夕の絲　後久我太政大臣

七夕のくもの袂やぬれぬらむあけぬとつぐる秋風の聲　後鳥羽院御製

○百首御歌
我がいのるねがひの絲の年をへてあはでしもやは秋の七夕　土御門院御製

○正治二年百首
七夕のまちこしあきは夜さむにて雲にかさぬる天の羽衣　後京極攝政

彦星の行きあふかげをうつしつゝたらひの水や天のかはなみ　民部卿範知（老イ）

○家集、七夕心を
七夕にけふやかすらむ野べごとにみだれおるなる蟲の衣は　建禮門院左京大夫
聞かばやなふたつの星の物語りたらひの水にうつらましかば
聲のあやは音ばかりして機おりの露のきぬをや星にかすらむ

○永延二年七月七日資實朝臣家歌合、鈴蟲
七夕にかしやしつらむ鈴蟲の雲居はるかに音ぞきこゆなる　讀人しらず

○喜多院入道二品親王家五十首
待ちかぬる心にさよや更けぬらむ月かたぶきぬ星合のそら　法橋顯昭

○百首御歌
さをしかのつれなき妻もあるものを待つを恨みの星合の空　順徳院御製

○顯輔家歌合、七夕
七夕のたえぬ契りをそへむとや羽をならぶるかさゝぎの橋　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首
天の河たえぬ契りのわたりとやはねをかはせる鵲のはし　源師光

○嘉元二年百首、七夕
かきつくるかぢの七葉の思ふことなほあまりある秋の夕暮　入道太政大臣

○弘安元年百首たてまつる百首
ゆみはりの月も入りなば天の川やそのなみぢに舟やまよはむ　安嘉門院四條

○建保四年百首
天の河ふるきわたりもうつろひて月のかつらぞ色にいで行く　前中納言定家卿

○同三年內裏七夕御會
七夕の手だまもゆらにおる機を折しもならふ蟲の聲かな　同

○千首歌
天の河秋風さむみ七夕の雲のころもやけふかさぬらむ　民部卿爲家
天の河手だまもゆらにおる絲のながき契りの秋はかはらじ　同

○建長三年毎日一首歌
たなばたのあくる別れにふきそめて人おどろかす秋風の聲　同

正治三年毎日一首中
七夕のいのる手向けやうけつらむあけてぞ歸るかぢの言の葉　同

○文應元年毎日一首中
君すめばちよも限らじかめのをの河せにうつす星合のかげ　同

○文永四年毎日一首中
夕立に水まさるらむ天の河はるかにわたせ鵲のはし　同

○六帖題
新六一
けふきてや立ちかさぬらむ天の河いほはたにおる雲の衣手　同

○弘安三年稻荷社百首
七夕のいほはた衣きぬ〳〵に天の川浪たちわかるらし　安嘉門院四條

○古集百首中鵲鴒悲贈二織女一首
名殘をやなれもしるらむ七夕の別れを送るかさゝぎのこゑ　參議爲相卿

○秋歌中
天の川秋は淺瀬の浪の上にもみぢの小舟はやこがるなり　正三位知家卿

○柿本影供百首
七夕もおなじ河原に立川姫いそげもみぢの秋のうきはし　後九條內大臣

○家集、七夕
今はとて人はおくとも七夕の秋のあふぎの名をばわすれじ　從二位家隆卿

○弘安元年百首
天の川雲ぞみだるゝ七夕に誰かしのぶのころもかすらむ　後九條內大臣

○家五十首
七夕に心をかして味きなくあかぬわかれのよそに苦しき　喜多院入道二品親王

○建保三年內裏七夕七首
天の川あくる岩戸もなさけしれ秋のなぬかの年のひと夜を　前中納言定家卿

○惆集
七夕のよどての姿立ちかくすきりのとばりに秋風ぞふく　衣笠內大臣

○弘安元年百首七夕
鵲のかはかぜたちぬ七夕のもみぢのとばりなみやかくらむ　後九條內大臣

明けがたのふじのけぶりや星合の空の別れの思ひなるらむ

○六帖題
新六二
別れをばかたへの秋やつけつらむ七夕つめのあかぼしの影　信實朝臣

○一字百首
長月のありあけのつきのあなたまで心はふくる星合の空　前中納言定家卿

夫木和歌抄卷第十　終

夫木和歌抄　巻第十一

秋部二

題　萩　女郎花　薄　刈萱　荻　蘭
　　草香　秋花　槿花　秋野

萩

○題不レ知

萬八 わがをかにさを鹿きなく初秋のはなづま戀に來鳴くさを鹿　太宰帥大伴旅人卿萬 中納言家持卿

萬十 てもすまにうゑしもしるくいでてみれば宿の初萩咲きにけるかも　讀人しらず

○光明峯寺入道攝政家會、野徑早秋

初萩のひとはなずりの旅衣露おきそむるみやぎのの原　從二位家隆卿

○題不レ知

萬八 いもがめを見そめのさきの秋萩はこの月ごろは散りこすな夢　坂上郎女

○戀歌中、人家

ほのかにも見そめのさきの秋の色に移す心をしらせてしがな　民部卿爲家

○爲家卿百首

露ながらあだにはをらじ我妹子が見そめのさきの秋萩の花　從二位家隆卿

○詠、風歌

萬十 萩の花さきたるのべにひぐらしのなくなるともに秋風ぞふく　人丸

○正治二年百首

小萩さく山の夕かげ雨すぎて名殘の露に日ぐらしぞなく　後京極攝政

○詠レ花歌
萬十
まくず原なびく秋風ふく毎にあだの大野の萩のはなちる　讀人しらず

○百首歌
新後撰
かたみこそあだの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし　前中納言定家卿

○大寶二年太上天皇幸二于三河國一之時歌
萬一
ひくま野ににほふ萩原入りみだれ衣にほはせ旅のしるしに　長忌寸

○千首歌
ひくま野に匂ふ萩原露ながらぬれて移さむかたみばかりに　民部卿爲家

○寛喜元年女御入内屏風
もろ人の衣するらしあづさ弓ひくまの野邊の秋萩の花　前中納言定家卿

○詠レ花歌
萬十
さぬかたの野べの秋萩時しあれば今盛りなりをりてかざさむ　讀人しらず

○題不レ知
萬八
あすか川ゆききの岡の秋萩はけふふる雨に散りかすぎなむ　丹比國人

○建永元年仙洞歌合、朝草花
續千秋上
わが袖はけさもほしあへず飛鳥川ゆききの岡の萩の白露　従二位家隆卿

○文永二年白川殿七百首
旅人のゆききの岡のこはき原うつればかはる袖の色かな　正三位知家卿

○題不レ知
萬八
たかまどの野邊の秋萩この比の曉露にさきにけむかも　中納言家持卿

萬二十
みや人の袖つき衣あき萩ににほひよろしきたかまどの宮

○詠レ花歌
萬十
秋風は日ごとにふきぬ高圓の野邊の秋萩ちらまくをしも　讀人しらず

○堀川院御時百首
たかまどの野をすぎゆけば秋萩の花ずり衣きぬ人ぞなき　前齋宮河内

○正治二年百首
高圓の野邊の秋萩分け行けばおきなさびにも似たる袖かな　源師光

○題不レ知
萬三
いざやこらやまとへ早くしらすげのまのの萩原たをりて行かむ　高市黒人

○堀川院御時百首
ふたばより朝たつ鹿はしからめとまのの萩原花さきにけり　大納言師頼卿

○久安百首御歌

道もせにたがをりしける錦ぞもえぞしらすげのまのの萩原　崇徳院御製

○題不知

萬七 住吉のとほ里をののまはぎもてすれる衣の盛り過ぎゆく　讀人しらず

○文治八年五社百首

春といひし人に見せばや津の國のとほざとをのの秋萩の花　皇太后宮大夫俊成卿

露しげきみやぎが原の萩さかり錦の上に玉ぞちりける

○題不知

萬十 春日野の萩しちりなば朝ごちの風にたぐひてこゝに散りこね　讀人しらず

○文應元年七社百首

萬十六 春日野の忍ぶもぢずり秋萩の花のみだれも限りしられず　民部卿爲家

○題不知

住の江のきしの野萩ににほはせど匂はぬ我の匂ひてをらむ　讀人しらず

○家集、秋歌中

住吉の岸のこはぎにうちそへて波の花さへめづるけふかな　顯仲朝臣

○住吉社百首歌

住吉の濱のむらはぎ露もろししばしな吹きそ松の浦風　慈鎭和尚

○文應元年七社

袖よりも心ぞうつる住吉のあさしばをののあきはぎの花　民部卿爲家

○題不知

萬十 あきつののをばなかりそへ秋萩の花をふかさねきみが假庵　人丸

萬九 おくれゐて我はや戀ひむいなみのの秋萩見つゝいなむ子故に　讀人しらず

萬十 處女らに行きあひのわせをかる時になりにけらしも萩の花さく　同

萬六 さしすきの栗栖の小野の萩の花ちらむ時にしゆきてたむけむ　同

萬八 暮に逢ひて朝がほはつるかくれのの萩は散りにき紅葉はやつげ　同

六帖五 から衣立田のやまの萩よりもいもをぞきみは珍らしとみむ　同

萬八 妻戀にしかなく山の秋萩は露霜さむみさかりすぎゆく　石川廣成

○家集
萬十 秋萩をちらす眺めのふる比はひとり起きゐてこふる夜ぞ多き　人丸

○三十首歌人々によませ給ひし時草花露
かず〳〵に月の光もうつりけり有明の庭の露のたま萩　入道前太政大臣

○喜多院入道二品親王家御會、野萩
立田姫すそ野の萩の唐錦まづおりそむる秋はきにけり　從二位家隆卿

○千五百番歌合
萬十 立田山木末はなほもみどりにて裾野の萩にあきをみるかな　宜秋門院丹後

○家集
萬十 たまぼこの君が使のたをりたるなごの秋萩みれどあかぬかも　人丸

○題不知、雲葉
寂しくもなりにけるかな秋萩の古江の花はちりすぎにけり　光孝天皇御製

○延長二年左大臣家屏風、さがののあき
家 手毎にぞ人はをりける君が爲ゆくすゑ遠き秋の野の萩　貫之

○題不知
萬十 この夕秋風ふきぬ白露にあらそふはぎの明日さかむみむ　讀人しらず

萬十 秋風ははやふきにけり萩が花ちらまくをしみきほひ〳〵に　同

○本院左大臣家前栽歌合、萩
六三 貫之家集 秋萩の花の流るゝ河のせにしがらみかくる鹿のねもせず　同

○承安二年法輪寺歌合、草花
こ萩さくきが野はゆかし秋萩の憂世のなかに心とめけり　快玄（覺イ）法師

○家集
萬代 さをしかも妻こひどきになりにけりさが野の萩も下紅葉して　伊勢

六二 思ひいでて戀しくもあるか粟津のこ萩がもとにわれ行きしかり

○秋歌中
萬代 きりはれぬ花野の小萩さきにけり行きかふひとの袖匂ふまで　修理大夫顯季卿

○大嘗會主基方御屏風、丹後
ふたむらの山の麓の秋萩に錦をしける野べかとぞみる　前中納言匡房卿

○正治二年百首御歌
よせかへる波の花摺みだれつゝしどろにうつるまののうら萩　式子内親王

○千五百番歌合
きり〴〵す啼きてよすがにあかずなりまののうら萩色變る比　西園寺太政大臣

○久安百首
風ふけばまののいと萩よるごとに貫く玉の露ぞとまらぬ　待賢門院安藝

○常磐井會、遠郷萩
行きてみむ駒のくつかけいしはらや遠路の里に萩さきぬめり　源仲正

○家集、水邊萩
白浪はよはに立ちきてみぎはなる萩のしづえの花やぬすまむ　同

○家集
風ふけば萩のはひえに浪こえてえもいはぬまの汀をぞみる　俊頼朝臣

○草花臨渓
風秋上
あだしのの萩の末こす秋風にこぼるゝつゆや玉川の水　同

○寛喜二年百首、萩
人心あだしの野べのまはぎ原移ろふいろもほどはありけり　民部卿爲家

○大治元年八月攝政左大臣家歌合
萩
あだしのの萩の末はの露よりもあやしくもろきわが涙かな　源雅光

○天永二年七月内大臣家歌合、草花
年をへてふるののをのに匂へどもなほ珍らしき萩の初花　同

○建長二年八月十五夜三首歌合
たがよにかうゑはじめけむ石の上ふるのにさける秋萩の花　後嵯峨院御歌

旅人のたちののはらの唐錦おりはへさらす秋はぎの花　冷泉太政大臣

○秋はぎ
現存六
露かけてをらばをしけむ神なびのあさ篠原のあきはぎの花　衣笠内大臣

○永久二年太神宮禰宜歌合、萩
ゆふだすき心にかけし神なびのみむろの萩はさきにけるかな　讀人しらず

○家歌、懸歌中
みそのふのませの秋萩なゝたぐりたぐるにつけて遲き君かな　俊頼朝臣

○秋の心を萩によす
秋萩を心にかけてをかざきのおほみあしぢをなづみてぞくる　同

○後法性寺入道關白家百首
あたらしや露けきのべにたつ鹿のうは毛に移る萩の花摺　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、萩
みるまゝにあたら物をとおぼゆるは鹿なくのべの萩が花かな　和泉式部

風をいたみした葉の上になりしよりうらみて物を思ふ秋萩　同

あらさじと思ひし宿を花により萩の原ともなしてみるかな　同

○御集
武藏野の萩がうへこす秋風にした葉の露やかずまさるらむ　順德院御製

○むさしのかみなりし人まできて萩のさきけるをみ侍りしに
武藏野の昔の萩をうつしうゑて君が爲とぞこの秋はまつ　能宣朝臣

○天延元年内裏御屏風歌、ひろさはの池
廣澤の池のみぎはの秋萩は波の底なるにしきなりけり　元輔

○家集、萩花移池
はらの池のたまもに花ぞさきにける汀の萩の影をやとひて　源仲正

○天德三年九月十三夜庚申中宮女房歌合
高砂の尾上の萩をゝりつれば鹿のたちどやうすらぎぬらむ　元眞

○原
萬十一　六二
すがはらの里の萩原秋の雨にうつろふことのをしき萩原　讀人しらず

○規子内親王家歌合、萩
順集
さをしかのすだく麓の下萩は露おくことのかたくも有るかな　同

○秋歌中
明玉　家持集
わが宿のまへの秋萩風ふけばなる人なしにぬきみだる絲　中納言家持卿

○天喜二年經房朝臣
秋くれば絲よりかくる萩のうへはむらごに花ぞ咲き亂れける　讀人しらず

○家集、萩歌中
みやぎのの枝を分けても白露は重きやなびくはぎの白絲　元眞

○家集、鹿鳴草
錦にもおりつべらなりわが宿の絲よりかくる秋萩なれば　能因法師

○秋歌中
萬代
秋の野のはぎの露ともしらざりつ千草のいとにぬける白玉　前大納言公任卿

○貞元二年八月三條左大臣家歌合　岸邊萩草

紫の雲とぞみゆる月かげに水のおもてらす岸の秋萩　兼盛

○寛治五年内裏歌合、萩

秋の野にたわゝにさける萩みればうらうへもなき錦なりけり　源盛雅

○家集、萩を

こむらさきたが袖かれし衣ぞとみゆるは秋の野萩なりけり　惠慶法師

○秋歌中

思ふ人こさせまほしきところかなみかきが原の萩の盛りは　同

○家集、非かのといふ所を行くとて

後拾遺秋上　萬代
思ふことなければ（と後拾）ぬれぬわが袖をうたゝあるのべの萩が露かな　能因法師

○爲家卿家百首

みかりする狩ばのをのの露霜にうつろひにけり秋萩の花　如願法師

○祇園百首

ことわりや野原にその名高からむ雲の上にも萩の戸のはぎ　皇太后宮大夫俊成卿

○貞應二年百首、野邊夕萩

秋萩の花のとざしの色に出でて夕暮しるき野邊の露かな　民部卿爲家

○太神宮百首御歌

花をのみながめなれにしみよし野のふる里遠き秋萩の花　後鳥羽院御製

○北野社百首御歌

露しげき萩の葉ずりのかり衣ほさでや旅のかたみにもせむ　同

○寶治二年百首、萩露

わぎもこが袖のつまずり色毎に亂れてうつる萩のあさ露　後九條内大臣

人はこぬ草葉の露のとこの上にかたしきねたる萩が花づま　正三位知家卿

○同集

新六二
村雨にちりかすぎなむ山しろのうぢのみやこの秋萩の花　衣笠内大臣

○文應元年五社百首

みやびとの花ずり衣いそがなむ露に咲きそふあのの萩原　民部卿爲家

たが袖にまづうつるらむたかしまやうち野の原の秋萩の花　同

狩衣みだれて袖にうつりゆくかた野のはらの秋萩の花　同

○五十首
誰にかはほさでも見せむたちなれしかた野の衣萩が花ずり　従二位家隆卿

○天永三年正月歌合、萩
夜もすがらこ萩が花をながめつゝ秋はかたのに旅ねをぞする　讀人しらず

○百首歌、名所秋
露ながら秋待ちえたる萩原のふる枝の花に風なふれそも　土御門院御製

くるゝ野のふるえの萩の花見ればことしばかりの秋としもなし

○洞院攝政家百首、早秋
おきそむる露の白玉枝ながらみかきがはらの萩の初花　従三位範宗卿

○建保秋十五首歌合
咲き匂ふうたのおほ野のこ萩原つまよぶ鹿も今やなくらむ　僧正行意

○文永五年九月十六日内裏歌合
あかなくに旅ねをぞする夕づく日いる野の萩の花のわたりに　徳大寺左大臣

○文治六年五社百首、鹿
武士のいる野の原としりながら萩さきぬれば鹿のなくらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○寛元四年十禪師歌合、野徑萩露
あづさ弓いる野のこ萩打ちなびき末もたわゝに露ぞこぼるゝ　右兵衛督爲教

はしたかの狩路のを野の朝露に今ぞうつろふ秋萩の花　後九條内大臣家大夫

○寛喜元年五十首、戀歌
契りおきし末の原野の萩の露うつろふ色にきえかへりつゝ　衣笠内大臣

○喜多院入道二品親王家五十首
鶉なくすゑのはら野の萩がえに秋の色ある夕づく日かな　祐性法師

○詠
萬十
白露をとらばけぬべしいざや此の露にきそひて萩の遊びせむ　讀人しらず

○建長七年顯朝卿家千首、翫萩
うゑおきて盛りになれりいざこども庭にし出でて萩遊びせむ　源仲遠

○正治二年百首
時きぬと鳫やなくらむ野邊みればほころびにけり萩の初花　源師光

○家集
萬代
白露にたえぬ秋はぎをれふして柴かるをのこ道だにもなし　大納言經信卿

○建長七年三十首
花さかば行きてやみまし石の上ふるからをのの本あらの萩　權僧正公朝

○君臣御歌合
露重る小萩が末はなびきふして吹きかへす風に花ぞ色そふ　前中納言爲兼

○嘉元四年十月常座百首、萩
した葉こそ花よりさきにおちにけれうつるま萩の風の夕暮　爲實卿

○千首歌
さきそむる岩瀬のをのの小萩原しばしも風にいかゞをらまし　民部卿爲家

○文永五年毎日一首中
老の身に見ても聞きても悲しきは萩さくやどの日ぐらしの聲　同

○同七年毎日一首中
をぐら山ふもとの宿の秋萩を鹿のねながら思ひやるかな　同

○毎日一首中
小倉山裾野の萩はちりにけりいまやをのへの鹿はなくらむ　同

○千五百番歌合
雲るよりかりの涙や小倉山ふもとの野べの萩の上の露　前大納言忠良卿

○元永二年七月内大臣家歌合、草花、判者修理大夫
白露のおりたつ萩のから錦鹿のよりきる衣なりけり　基俊

○千五百番歌合
浪あらふから錦とも見ゆるかな野島がさきの秋萩の花　皇太后宮大夫俊成卿

○建保三年名所百首
小萩さく野島がさきに風こえて夕てる浪にのこる月かげ　正三位知家卿

○同四年内裏歌合
旅人のみのしろ衣をさをあらみまどほにうつる萩が花ずり　同

○百首御歌
拾玉二
賤のめがあさの衣の花ずりは萩のなをりのものにぞありける　慈鎭和尚

○百首、野宮五百首中
秋萩のさき散るころやかち人の紫野ゆく袖のはなずり　藤原爲顯

○布引百首御歌
影うつすをのへのま萩さきしより花ずりすらし布引のたき　法親王澄覺

○野外萩人家
白露もうつりにけりなむらさきのねばふよこのの秋萩の花　藤原行家

女郎花

○題しらずイ家集秋歌中

萬十 てにとれば袖さへ匂ふ女郎花木のした露に（その白露もイ）ちらまくもをし　人丸イ

○家集、秋歌中

萬十 こと更に衣はすらじをみなへしさがのの花に匂ひてをみむ　中納言家持卿

○家集

六四 やをとめの袖かとみゆる女郎花君を祝ひてなで初めけり　伊勢

○昌泰元年亭子院歌合、女郎花

萱萬下 あらかねの土の下にて秋まちてけふのうらてにあふ女郎花　讀人しらず

萱萬下 秋の野の女郎花とるさゝわけにぬれにし袖や花とみゆらむ　同

萱萬下 ながき夜に誰たのめけむ女郎花人まつ蟲の枝毎になく　同

女郎花をりとるごとに松蟲のやどはかれぬとなくが悲しさ　同

○同三年五條關白前栽合、女郎花

うつろへる所ありともをみなへし野邊の古里忘れざらなむ　同

○延喜十九年八月竝女御歌合、女郎花

白露のわきてそめおく女郎花色ことなりと君にみえなむ　同

○家集、山家女郎花

嵐ふくみ山里なるをみなへしうしろめたくて歸るけふかな　元眞

○文永四年百首、夕立

永久 夕立やたらちねならむ夕がほもなほなつかしき女郎花かな　仲實朝臣

○久安百首

忍びかねつみしらするを女郎花たよせにをると思ひうとむな　花園左大臣家小大進

○家集

女郎花朝おく露をおびにして結ぶたもとやしをれしぬらむ　俊頼朝臣

○籬隔女郎花

女郎花うちたれがみを夕霧にかくれて誰としをれふすらむ　同

○永久四年七月忠隆家歌合
あかさりし伏見のさとの女郎花ねながら宿にうつしてぞみる　藤原國親

○保延四年權中納言經定卿家歌合
ひとりのみふしみの里のをみなへし露けさまさる秋の夕暮　藤原光忠

○女郎花
續古秋上
女郎花はなの下紐うちとけて誰とふしみの野べにさくらむ　藤原道經

○文治六年五社百首
すが原やふしみの野邊の女郎花誰になれてか今朝は露けき　皇太后宮大夫俊成卿

○堀川院御時百首
夕されば伏見の里の女郎花をらですぐべきこゝちこそせね　中納言國信卿

心からあだの大野におひたちてかせにたはるゝ女郎花かな　中納言師時卿

秋ぎりにかくれのをのの女郎花我がたもとには匂へとぞ思ふ　修理大夫顯季卿

み吉野のかたちのをののをみなへしたはれて露に心おかるな　俊頼朝臣

○永仁二年太神宮禰宜歌合、女郎花
たぐひなきかたちの野べの女郎花心とゞめぬ人はあらじな　藤原忠兼ィ

此の判者云かたちの野べ何に侍る所にあらむ女郎花栖にてはあらまほしき所にては侍るとまたよめる歌もきき侍らずと云々

○秋御歌中
露むすぶかたちの野べ（小野のイ）の女郎花玉をかざれる朝ぼらけかな　中務のみこ鎌倉

○院北面御會、故郷女郎花
古郷のみかきが原のをみなへし光露けきのべにふすかな　如願法師

○大嘗會悠紀方御屏風
かまふののしめのの原の女郎花野守にみすな妹が袖ふる　前中納言匡房卿

○大治三年八月廣田社歌合、女郎花戀
逢ふことをいなみ野にさく女郎花折らぬものゆゑ袖ぞ露けき　大夫典侍

○親子内親王家野宮
願歌集
くらぶ山麓の野べのをみなへし露の下より移りつるかな　藤原有忠朝臣

○同歌合判者

顯家集 霜枯のおきな草とはなのれども女郎花には猶なびきけり　順

○家集

いなみのの秋の尾花の招けどもをみなへしにぞ心つけつる　中納言家持卿

○秋御歌中

新涼窓 をらでゆく人はかたのの女郎花うへこそ花のあた名立ちけれ　後三條內大臣

歌林 名とり川をちの汀のをみなへし浪にたはれて濡衣やきる　岡崎大進

○家集

白川の河邊にたてるをみなへし今日の雨にや身をばしるらむ　前大納言公任卿

○秋歌中

歌林 さる澤の池なのぞきそをみなへし昔もさてぞ身をば捨てける　源仲綱

○永久四年七月歌合、女郎花、判者仲實朝臣

きゞすたつ交野のをのの女郎花假初にだになびかざるらむ　源經兼朝臣

女郎花露のおきがほ見せじとや裾野のきりのたちつくすらむ　藤原道經

此の歌判者左風なべてなびくとよめることわりなし右山なくてすその

いかゞとみれどふるくよめる心なかしとて勝と云々

○家集

山かげの田ぐちにたてる女郎花われ獨りのみ見るぞ悲しき　藤原長能

此の歌はくりこまのみやけといふ所に秋こたかがりしにまかりけるに

あこたにのくちに女郎花のたてるをみてよめると云々

雲のたつうりふの山の女郎花くちなし色をこひぞわづらふ　小大君

此の歌はちひさきうりのきなるをおなじ色がみにつゝみて女郎花にさ

してあさみつの少將にやるをききたがへてよりひらにとらせたりけれ

ばよめると云々

○家集

長き夜をいかにあかして女郎花朝がほみれば露けかるらむ　伊勢大輔

○久安百首、女郎花を

いそのかみふるからをののをみなへし名は古の姿なりけり　前参議親隆卿

さらでだに色めきたりといはれのの風にをれふす女郎花かな　待賢門院安藝

あだなりといはれのに咲く女郎花露の濡衣まれにやあるらむ　上西門院兵衛

○長元二年白川歌合、野花 俊成

なき名のみいはれの野べの女郎花露のぬれ衣きぬはあらじな　従三位頼政卿

○保延四年權中納言經定卿歌合、女郎花

あさからずいはれのにさく女郎花しめゆふ露も心しておけ　高松院右兵衛佐

○同

むさしのにわきて匂へば女郎花なべての草の中にむつまじ　藤原遠明

○建保三年名所百首

武藏野のきりのまよひの女郎花今もこもれる煙とぞみる　従三位行能卿

○秋歌中

萬代 新拾秋上

あだしのの心もしらぬ秋風にあはれかたよる女郎花かな　基俊

○久安百首

文イ

をみなへし露の衣を重ねきてなにあだしのにたはれふすらむ　大炊御門右大臣

○元永二年七月内大臣家歌合、草花

あだし野の萩の錦やとこならむつゆおきあかす女郎花かな　藤原道經

○永久四年七月忠隆家歌合、女郎花

あだしのになまめきたてる女郎花見すててえこそ歸らましけれ　意尊法師

○建長二年八月十五夜三首歌合

あだし野の名こそつらけれ女郎花露にしなれぬ隙しなければ　後鳥羽院下野

○承安五年三月重家卿家歌合、草花

我が宿に移してもみる女郎花あだしの野べのうしろめたさに　法橋顯昭

○仁安二年八月經盛卿家歌合、草花

聲たてて鳴く蟲よりも女郎花いはぬ色こそ身にはしみけれ　寂蓮法師

此の歌判者清輔朝臣云いはぬ色とはいかなる色にかくちなし色と思ひなされたるにや心えがたくと云々

○家集、女郎花を　權中納言長房卿
わぎもこが花の姿のをみなへしたまの衣や秋の夕露

○祇園百首、女郎花　皇太后宮大夫俊成卿
初秋はあさぢのわこそうれしけれ女郎花にもかけて祈らむ

○百首　寂念法師
住よしのあさ澤をのの女郎花たれまつ風に露こぼるらむ

○かくし題歌みならへの　同
みくま野の浦ふく風にをみなへし下葉は上の物とこそなれ

○三島奉納神樂を和する歌に、篠波　權僧正公朝
から崎の松ふく風に女郎花なびくをみればみしねつくかも

○家集、池邊女郎花と云ふ事を　西行上人
池の面にかげをさやかにうつしもて水かゞみする女郎花かな

○女郎花を　同
大方の野べの露にはしをるれどわが涙なきをみなへしかな

○月前女郎花　同
月の色を花にかさねて女郎花うはもの枝につゆをかけたる

○女郎花　同
女郎花いろめく野邊にふればへむ袂に露やこぼれかゝると

○賀茂社百首　慈鎭和尚
尾上よりさわぎぞ渡る女郎花をばな通ふか風のまねくか

○文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿
女郎花露をば玉のかづらにてきりのまがきに立ちかくすらむ
あはれなりよもぎが宿の女郎花思ひしをれて露けかるらむ

○家集、秋歌中　從二位家隆卿
久かたの天の河原のをみなへし今日の一夜や露はらふらむ

○千五百番歌合　後京極攝政
旅人のいるのの尾花たまくらにむすびかはせる女郎花かな

女郎花なびきもはてぬ秋風に心よわきは露のしたおひ　寂蓮法師

○文應元年七社百首

女郎花おほのの原の夕まぐれあやな名だてに宿やからまし　民部卿爲家

おのがすむ春日の野邊の女郎花しらでや妻を鹿もこふらむ　同

○女郎花

をとこ山裾野の原の女郎花うたてあだなる名もたてれとや　同

現存六
男山よそにみつのの女郎花たれゆゑ花の紐はとくらむ　明珍法師 鷹司院按察 現存

○百首

うきながらさてもある世を女郎花などひとさきに露こぼるらむ　寂蓮法師

○保延四年經定卿家歌合、女郎花

我ならぬ人にをらるゝ女郎花なにゆゑしめしのべならなくに　左京大夫顯季卿

○題不ㇾ知

萬十七
茅蜩の鳴きぬる時は女郎花咲きたるのべをゆきつゝ見えし　中納言家持

萬二十
高まどのみやのすそまのぬへかたに今さけるらむ女郎花かも　同

萬四
女郎花さくさはにおふる花がつみ都もしらず戀もするかも　同

○千首歌

花がつみおふる澤邊のをみなへし都もしらぬ秋やへぬらむ　民部卿爲家

明けわたるあしたの原の女郎花おきゐる露のいかにぬるらむ　同

○文永三年毎日一首中

あづまのの露をかけきや女郎花おちけるまゝの人の名だてに　同

○永久三年六神宮祠官歌合、女郎花

露重みあしたの原のをみなへしたわむにつけて懐しきかな　讀人しらず

○同四年七月雲居寺歌合、女郎花

秋くれば妻しめしのの女郎花いく朝露にぬれてみつらむ　瞻西上人

○題不ㇾ知

雲葉
秋の田の畔におひたるをみなへしいほもる人や種をまきけむ　法親王尊快

六六
女郎花咲く野におふる白菅の知らぬこともていはれしはせよ　讀人しらず

萬七
女郎花おふるさはべのますげ原いつかはうみて我が衣きむ　同

萬十一
かみなびの淺篠はらの女郎花おもへる君が聲のしるけく　同

○原草花、古來歌合
露しげき淺篠原のをみなへしいかなるふしに契りおきけむ　從一位良教卿

○千首歌
あきはまだ淺さゝ原の女郎花いくよろ／＼を露のおくらむ　民部卿爲家

○たなかみの山ざとにて女郎花おもしろく見えければ
さしこして薄はほかにまねけども女郎花をぞたをりにもくる　俊頼朝臣

○永久二年太神宮禰宜百首歌合、女郎花
秋くればなべて匂へと女郎花よどのはたれもすみうかりけり　讀人しらず

鏡山むかひの野べのをみなへし面影さらずみつるけふかな

○千首中
いたづらにたのめし人やまつら山秋を忘れぬ女郎花かな　民部卿爲家

○御集
箱根山ふもとの野邊の女郎花たがまく粟の色にさくらむ　中務卿のみこ

○六帖題御歌
たまだれのこすの大野の女郎花白露かけてさきにけらしな　同

○門妙社歌合、女郎花戀
身をつめば哀れとぞみる女郎花人もこすのの露にしをるゝ　上西門院兵衛

薄

○題不レ知
萬十
さを鹿のいるののすゝき初尾花いつしか妹が手枕にせむ　人丸

○寄レ露忍戀
かれねたゞ初ほの薄手枕に結ばばつゆの散りもこそすれ　民部卿爲家

○千首歌
かり人のいるのの薄うちなびきとたぢあらはに秋風ぞふく　同

○弘長元年百首、薄
初尾花そでの中にや秋風のいるののすゝき人まねくらむ　信實朝臣

○六帖題
新六五
かつみても猶ぞめかれぬしの薄はつほに結ぶ妹がたまくら　正三位知家卿

○隔一夜
六五
なよ竹に枝さしかはすしの薄よませに見えむ君はたのまじ　讀人しらず

○堀川院御時百首
秋風にはらむ薄のあるのべはうつしの花や色にまどへる　權大納言公實卿

○永久四年百首
みこもりにほにはいでねど篠薄風にはえこそすまはざりけれ　神祇伯顯仲卿

○建長八年百首歌合
咲きそむる初花すゝき露かけてまだてならさぬよはの下紐　後九條内大臣

○弘安元年百首、薄
秋萩のはつほの薄あさな〳〵花のまひもにむすぶ白露　同

○柿本影供百首
山もとの野原にまじるはつせめのしらゆふ尾花秋風ぞふく　同

○住吉社歌合、薄戀
いかにせむまのの入江にしほみちて涙に沈むしのの小薄　神祇伯顯仲卿

○同集、社頭歌中
新續古上
うちなびく入江の尾花ほのみえて夕やみ迷ふまののうら風　後京極攝政

○承安三年七月左大臣家歌合、野風
粟津野の尾花がうれを風ふけばよせて歸らぬ浪かとぞみる　法性寺入道關白家丹後

○喜多院入道二品親王五十首
山おろしや絶えず吹くらむ粟津野の尾花が末の片なびきなる　野宮左大臣

○南北百首歌合
粟津野の尾花が下にふきとめて袖に浪こす山おろしの風　慈鎭和尚

○文治六年五社百首
露むすぶあだの大野のしの薄なに招くらむ袖ぬらせとや　皇太后宮大夫俊成卿

いかにせむいはたの小野の篠薄ほにもいでずや秋もくれなむ　同

はりま潟いなみの野べのむら薄むら〳〵よする浪かとぞみる　同

○御集、秋十首中

花薄したに通ひしさを鹿も聲ほにいだすいなみの原　土御門院御製

○題不ㇾ知

たのむぞよ北野の秋の花薄まねくとならばしるしあらせよ　藤原經平朝臣

○家集、野薄

あすか川ゆき來の岡の花すゝき招く袂に露ぞこぼるゝ　權僧正公朝

○御集

岡の邊や薄かたよる秋風に春のやなぎの面影ぞたつ　中務卿のみこ

○嘉元々年百首

ほに出でて招くすゝきのあすか風袖吹きかへすあきの夕暮　參議爲相卿

○文應元年七社百首

風吹けば淺さは小野の花薄ひとつにつゞくおきつ白浪　民部卿爲家

○承安元年七月右大臣家歌合、野風

おきつ風つもりの浦をふきこせば遠里をのの尾花波よる　源仲綱

○貞應二年名所百首

白露や草の袂に小倉山ふもとのすゝき朽ちはつるまで　民部卿爲家

○六帖題御歌、秋野

尾花ちるふきあげの小野を見渡せばよせてかへらぬ秋の浦浪　中務卿のみこ

○保安三年九月内大臣家歌合、野風

風さむみうへのの尾花おきふすを須磨の浦波立つかとぞみる　堀河院中宮上總

○永久四年七月雲居寺歌合、薄

たえ〴〵に島わの尾花招くめり朝みつしほに見えがくれして　三宮相摸

○家集、草花隨風

花薄浪よる野邊をきてみればきよみかせきに秋風ぞふく　源有仲

○永久二年太神宮禰宜歌合、薄

ほに出でてまねくとならば花薄なにか忍びの岡に立つらむ　讀人しらず

○同四年七月忠隆家歌合

夕暮は忍びの岡の花すゝきたえずも誰を招くなるらむ　源經兼朝臣

○百首歌

みし人をしのぶのをかの花薄なびくはまねく心ちこそすれ　登蓮法師

○永久四年七月忠隆家歌合、薄

いつしかとしのだの杜のしの薄ひもとく秋になりにけるかな　藤原國親

○元永二年七月内大臣家歌合、草花

たむけにと結びて行かむかざごしの裾野の尾花ほに出でにけり　藤原顯仲朝臣

○永久二年太神宮禰宜歌合、薄

角ぐむとみしまの野べの篠薄ほにいづる秋になりにけるかな　讀人しらず

○住吉社歌合判歌

思ふこと大野にたてるしの薄忍ぶ心のありがたきかな　神祇伯顯仲卿

ほころびて招く袂と見えしかばしどけなきとてわれぞ結びし　源公忠朝臣

此の歌は延喜御前にすゝきのむすばれりたけるをこれはたがしたるらむと仰せられければよめると云々

○家集、八月ばかりにしのびたる人にあひてあしたに薄につけて

花すゝきほの結びつる袂ゆゑ露も心もとけず見えつる　藤原義孝

○家集、秋歌中

いと薄ぬはれて鹿のふす野邊にほころびやすき藤ばかまかな　西行上人

○三十六人歌合

花すゝきなびくけしきもしるきかな風ふきかはる秋の夕暮　平忠度朝臣

○家集

うゑおきしわれやは見べき花薄蘆のほにだにいださずもがな　和泉式部

此の歌は津國難波わたりに薄を植ゑ置きて京にきたるにかの國よりおいにたりといひたるかへりごとにて云々

過ぎ行くを招く尾花もなかりけり哀れなりしは花のをりかな　同

此の歌はこその春石山にまうでたりしに山中にとまりてやすみなどせ

しな又のとしの秋まへなわたるにさぞかしとおもふにあはれにてとはすれば人なしすゝきぞなさけなげにすくみてたてるにかきてむすびつくと云々

○光明峯寺入道攝政家百首、秋[illegible]

くるゝのも契りはかなき秋風にいなづま招くはな薄かな　従二位家隆卿

○承久の役述懐歌

たちわかれ今朝やこゝやの花薄まねく景色も悲しかるらむ　同

○家集

吉野川ひともとたてる岩薄つりする人の袖かとぞみる　同

○仁安三年奈良歌合、草花、判者俊成卿

さよひめの袖かとみればまつら山裾野に招く尾花なりけり　聖信法師

○家集

みまくさにはら野の薄かりにきて鹿の臥牀をみおきつるかな　西行上人

おしなべてなびく尾花のほなりけり月のいでつる峯の白雲

○文治二年百首

しのぶ山裾野の薄いかばかり秋のさかりを思ひわぶらむ　前中納言定家卿

○五行歌十五首、西といふ事を

みやこより尋ねいく野の花薄ほのかにてらす三日月の空　同

○高圓野にて作る歌

萬二十　六帖一
たかまどの尾花吹きこす秋風に紐ときあへなたゞならずとも　大伴宿禰池主

○建保三年名所百首

高圓のを花秋風たちにけりむら〳〵白き雲ぞふきしく　従二位家隆卿

○百首歌

打ちなびき秋はきにけり花薄ほさかの駒も今やひくらむ　衣笠内大臣

○家集、ある法師にかはりて

はな薄ほさかのこまにあらねども人おちやすき女郎花かな　前中納言匡房卿

○家集、秋歌中

御狩する片野のすゝき招けども空とぶ鷹はたがへりもせず　同

たちかへる人はかたのの花薄なにと穂に出でて招くなるらむ　上西門院兵衛
○久安百首

花薄まねかざりせばくる人の心かた野の恨みせましや　紀康宗
○承安五年三月重家卿歌合、迎不レ逢戀

あふことはさこそかた野にたてるとも忍びてなびけ篠のを薄　讀人しらず
○門妙社歌合、薄戀

岡のべやなびく片野のしの薄ほむけの露も時をまちけり　後鳥羽院御製
○千五百番歌合判御歌

すゝきちる秋の野風のいかならむよるなく蟲の聲ぞ寒けき　土御門院御製
○百首御歌

薄ののみどりがすゑの初尾花なびくにつけてよるかたもなし　同

過ぎて行く人はつらしな花薄まねくま袖に雨はふりきて　建禮門院右京大夫
○稻荷社歌合、雨中草花

秋篠のとやまのすゝきはの〴〵とあくる峯よりおろす山風　常磐井入道太政大臣
○秋御歌中、秋風

誰ゆゑに野となりはててふか草の里の尾花に鶉なくらむ　正三位季經卿
○千五百番歌合

とまらじなねてのあさけの花薄岡のやかたに人まねくとも　民部卿爲家
○百首歌、岡薄

むさしのや月影ながらしぐれけりを花がうへの露の下道　従三位範兼卿（宗イ）
○建保三年名所百首

なみのよる野じまが崎の絲薄みだれにけりなぬける白玉　同
○保安二年九月十三日關白家歌合野露、判者俊頼基俊

にはもせに玉ときちらす白露の亂れてぬける絲薄かな　讀人しらず

此の歌出入俊頼云いとすゝきとよめる證歌を可進云々

金秋
あだしのの露ふきみだす秋風にまねきもあへぬ花薄かな　權大納言公實卿
○嘉保二年八月二十八日鳥羽殿御歌合

あだし野の風に亂るゝ絲すゝきくる人なきになに招くらむ　前中納言定家卿
○百首、薄

○正治二年百首
聞きおきし名をあだし野の篠薄いつなれそめてまねく景色ぞ　小侍従

○六帖題
新六一 あらしふく竹のまがきの枯薄そよ〳〵さびし有明の月　衣笠内大臣

新六六 うくつらき秋のさが野の花薄くさの袂も露やかわかぬ　民部卿爲家

○文永四年毎日一首中
誰かこむうきはさが野の花薄秋のさかりと人まねくとも　同

○同八年毎日一首中
あき萩の花野の薄おのれのみほにいでずとも色は見えなむ　同

萬十 秋はぎのはな野にまじる村薄くさの玉とぞいろにいでゆく　同

○題不知
秋はぎの花のの薄ほにいでずわが戀ひわたるかくれ妻はも　讀人しらず

○秋歌中
明玉 風ふけば花野のすゝきほにいでて露うち拂ふ袖かとぞみる　修理大夫顯季卿

○家集
明玉 山とほきすゑ野の原の篠薄ほに出でやらぬいさよひの月イ　正三位知家

○布引百首
かぜわたる尾花がうれは布引の瀧よりあまる浪かとぞみる　法親王澄覺

○仲實朝臣家歌合
東路のなこそのせきにおひながらなほ人招く花すゝきかな　讀人しらず

○建保二年内裏歌合
新六六 いはしろの野なかにたてる村薄松ふく風に結ぼほれつゝ　順德院御製

○六帖題
夕くれば吹きもさだめぬ秋風にまねく薄の袖かへるみゆ　信實朝臣

○建保四年百首古來歌合
花薄ほむけの絲のかたよりにくるれば野べに秋風ぞふく　從二位家隆卿

○六帖題
新六二 あきかぜに露はみだれぬ花薄ほむけの絲のぬきあへぬまで　衣笠内大臣

○北野社百首
秋風もあだになふきそ花すゝきほむけの絲のぬける白玉　同

○秋歌中古來歌合
○寄レ花歌
○薄
○野薄人家
○家集、題不レ知
○天慶八年中宮七十賀御屏風
○御集、新除懸
○永久四年七月[illegible]隆家歌合、薄を
○家集、薄を
○堀河院御時百首

花すゝきほむけの絲をふく風に玉の緒とけて露ぞこぼるゝ　權中納言經平卿

拾七 わぎもこが逢坂山のしの薄穂には出でずもこひわたるかな　人丸

六六 年ふともわれ忘めやあふさかの篠の尾薄おひいでぬらむ　讀人しらず

あふさかの關のうへのの花薄招くや人をとむるなるらむ　藤原敬嗣朝臣

紫のひともとすゝき萬代にむさし野にこそ思ふべらなれ　中納言兼輔卿

新續古秋上 わたつうみの渚の岡の花薄まねきぞよするおきつ白浪　源信明朝臣

風ふけばなぎさの岡の花薄なびくや浪のよするなるらむ　後法性寺入道關白

風吹けばくるすの小野の絲薄たよりにのみとなびくなりけり　意尊法師

すがるふすくるすの小野の絲薄まそほの色に露やそむらむ　權中納言長方卿

花すゝきまそほの絲をくりかけてたえずも人を招きつるかな　俊頼朝臣

日をへつゝいとゞますほの花薄袂ゆたげに人まねくらし　鴨長明

白妙のますほの絲をくりさらしまがきにさほす花のな薄　同

秋深き霜よりのちの菊の色をかねてますほの尾花にぞみる　同

此の三首歌伊勢記云ゆきつきてみれば（かしこを二見のうら(さととイ)云々）さろほどたる板屋のなかしげにすみなせるにいろ〳〵のせんざいども盛り過ぎたれどよしある人のあたりと見えたり時雨などいふばかりには

あらではれまなかりければいたづらにこもりゐたるなぐさめがてらせんざいなる花色々ひとふさづゝとりならべてみるついでに三種のすゝきといふこと人の語りしを思ひいでて心みによめると云々

○建長八年百首歌合

花すゝきすそごの絲をよりかけて玉をしげぬく秋の白露　衣笠内大臣

○家集、八年、月前薄

はな薄月のひかりにまがはまし深きますほの色にそめずば　西行上人

○御集

夜もすがらたがそよめくと思ひしは靡く尾花の音にぞありける　花山院御製

此の歌秋の夜風の吹きけるに御前なる薄のなるを聞召してと云々

○百首歌、秋

花薄すゑ葉おしなみふく風にしたくさかろき薄ぞちりける　順徳院御製

○保安二年九月内大臣家歌、野風

秋風の尾花ふきまく夕さればのべには雪のふるかとぞみる　藤原爲眞

此の歌判者基俊云右歌をはなふきまくといへるふるき歌にもかくよみたらむなはなの歌また見侍らず下句に野べには雪のふるとぞみるといへるも春の花の風にちるをこそ雪とぞ見るなどよみ侍るめれ秋のなばなのゆきとよみたるふるきうたこそえ見いで侍られ蘆の花なぞからの歌には雪によそへてつくりて侍りしと云々

○建永元年和歌所三首歌合に、朝草花

横雲のたなびく山の岡邊なるすゝきも白くふく嵐かな　後鳥羽院御製

○文應元年七社百首、賀茂

河岸のつゝみになびく花薄ゆききの袖にまがへてぞみる　民部卿爲家

○千首歌、薄

秋の野の草のたもともうづもれて招くもしらぬ朝霧の空　　同

○三十首歌、閑庭薄

まねくとて草の袂のかひもなしとはれぬ里のふるき籬に　　前中納言定家卿

○或抄中

風雅秋上
うちしめり薄のうれはおもりつゝ西ふく風になびくむら雨　　同

○文永五年九月十三夜歌合、野草露繁

旅人の身にしむ野べの秋風にもとあらの薄つゆこぼれつゝ　　大納言資季卿

○久安百首、薄

はな薄ひともこず野の名をしらで誰招くらむ秋の夕暮　　大炊御門右大臣

○日吉社法樂御歌

哀れなり門もなき庵のませのうちにこぬ人まねく薄ひと本　　慈鎮和尚

○秋の心を、大峯にて

一むらの木末を宿のしるべにて尾花わけゆく道のはるけき　　光臺院入道二品のみこ

○大治三年八月廣田社歌合、薄隠

うしとのみ人の心はいはれ野にまねく薄をなにたのまむ　　大僧正行尊

○嘉禎三年百首、故郷薄

花薄あれにしものをなかをかの里をばかれず何まねくらむ　　民部卿爲家

○貞應三年百首述懐

うしとのみそよいはれの花薄袂の露はかわくまもなし　　同

○千首歌

露すがる草のたもとの秋のほをしのにおしなみわたる夕風　　同

○家集、山中秋花

しら鳥のとば山あらし吹くなべに尾花が末は浪のまもなし　　隆祐朝臣

○家集、薄を

つくばねの嶺吹きくだる秋風にしづくのたるは尾花ちるなり　　光俊朝臣

○長歌

萬九
筑波ねに　登りてみれば　尾花散る　雫の露に　鴈金も　寒く來鳴かぬ　　讀人しらず

刈萱

○文治十八年五社百首刈萱
はつ鷹のはつとやたしの秋風にまだきしをれぬのちの刈萱　皇太后宮大夫俊成卿

○述懐百首
萩原やしげみにまじる刈萱のしたはが下にしをれはてぬる　同

○文治三年百首
たづぬれば庭の刈萱あともなく人やふりにし荒れはてにけり　前中納言定家卿

○千五百番歌合
秋風に思ひみだれてくやしきは君をならしの岡の刈萱　嘉陽門院越前

○文永四年毎日一首中
みだれにしふるのの道の刈萱のなにゆゑにかは人にとはれむ　民部卿爲家

○家集、秋歌中
秋風にほずゑ浪よるかるかやのした葉の蟲の聲みだるなり　西行上人

○家集
をれかへる下のみだれに埋もれてほにかすかなる野べの刈萱　信實朝臣

○水院左大臣家前栽歌合、刈萱
刈萱のほに出でて物を言はねどもあゆく草葉に哀れとぞ思ふ　藤原成忠

白露の色かはりゆく刈萱のほに出でて秋をあはれとぞみる　讀人しらず

○百首歌かるかやまがきにみだる
風ふけばしら葉ばかりぞかるかやの籬のうちの物と見えける　寂蓮法師

○家集
をの山や野風にしたゞ刈萱のしどろにのみも亂れちるかな　前中納言匡房卿

○思刈萱古來歌合
かち人のゆききの岡の刈萱はをれふすかたや道となるらむ　藤原賴家

○題不ㇾ知
六帖
秋風に思ひみだれてくやしきは君とならしの岡の刈萱　讀人しらず

荻

○家集、ひぐらしを
秋風の荻のした葉を踏みみだる容にみちたる日ぐらしの聲　元眞

○秋御歌
萬八　荻の葉に風のふきよる夕ぐれをおなじ心にながめましかは　法性寺入道關白

○今皇院みこの宮と申しける時百首歌よみて奉りける中に
玉葉四　荻の葉に吹く秋風をわすれつゝ戀しき人のくるかとぞ思ふ　重之

○嘉元々年百首歌
朝まだきなかばは露にかたぶきてひとかたそよぐ風の下荻　參議爲家卿

○文治六年五社百首
聞きおきしいく田の杜の秋風も荻の葉よりや身にはしみけむ　皇太后宮大夫俊成卿

○文暦元年七社百首、荻
えにひたすなかばの月にこゑすみて荻ふく風の秋ぞ悲しき　民部卿爲家

○文永十一年毎日一首中
垣ほなる荻の初穂の秋風はいでそよさらに身にぞしみける　同

○式部卿親王家三首歌、秋草
みればかつうは葉にあまる白露のちるをも結ぶ軒の下荻　參議爲相卿

○住吉社百首
おきつ浪あはれはいかに住吉のまつの梢と荻のうはかぜ　慈鎭和尚

○最勝四天王院名所御障子
秋はそら里はふしみの夕まぐれ雲よりおろす荻の上風　同

○十題百首御歌
ふるさとは風のすみかとなりはててひとやは拂ふ庭の荻原　後京極攝政

○秋歌中
明玉　荻風の露ふきむすぶ秋の夜はひとりねざめのとこぞ寂しき　和泉式部

○題不知
萬三　しらすげのまのの萩原ゆくさくさ君こそみらめまののをぎ原　猿丸大夫

○家集、伊呂波四十七首
むすぶ露をぎ吹く原の色毎に心みだるゝまののをぎ原　前中納言定家卿

○文治二年百首歌
こぼれぬる露をば袖にやどしおきて荻の葉むすぶ秋の夕風　同

○後京極攝政家歌合、宮城野荻
秋きぬる荻ふく風のそよ更にしばしもためぬみやぎ野の露　同

○大治三年八月廣田社歌合、荻戀
あふことは片野にしげる荻のはの音をばたゆな秋は果つとも　法性寺入道関白家堀川

○久安五年六月家成卿家歌合、戀
篠すゝき忍びかねてはいはれのの荻の上葉の亂れあへかし　刑部卿頼輔

○家集、鹿を
さを鹿の聲ぞ悲しき露むすぶいはたのをのの荻の下ふし　權中納言長方卿

○永久二年太神宮禰宜歌合、荻
秋きぬと岩田の小野のいはねども著くも荻のそよぐなるかな　讀人しらず

なにごとをとぶひの野べの秋風に荻の上葉のそよといふらむ　同

○大嘉元年八月顯家朝臣越中國名所歌合、三島野
みしまのの荻の上葉にふく風ぞ秋の初めのしるしなりける　同

○長承三年常磐井五番歌合、野草染
いなみのをあさふみわたる狩人のかさの上葉になびく荻原　藤原範綱

○寶治二年百首、荻風
夕ぐれの風にあらそふ荻の葉の末もとゞろに聲ぞきこゆる　正三位知家卿

○六帖題
新六ノ六
ふきすぐる葉風はさても荻原やなほともずりの音の寂しさ　信實朝臣

○建保三年内大臣家百首、夕荻
新拾遺雜上
軒ちかき山の下荻こゑたててゆふ日がくれに秋風ぞふく　從二位家隆卿

○光明院入道二品親王家五十首、荻風
壬二中
草も木もさぞなあらしの山風にひとりしをれぬ荻の音かな　同

○寶治二年百首荻風
つくづくと秋の日ながき山里に荻の葉すぐる峯の木がらし　後九條内大臣

○千五百番歌合
けふもまた荻のすゑ葉を空にみて露わけくらす武藏野の原　參議雅經卿

あさくらやきのまろどのにたがとへば秋をも名のる荻の上風　同

○建保三年名所百首
荻原やすゐもたわゝにおく露のかずまさりゆく玉河の里　藤原康光

○正治二年百首
むら雲のたえまの月に鴈なきて荻の葉そよぐ有明の空　源師光

○後九條内大臣家二十首、月前荻
荻の葉も心づくしの聲たてつ秋はきにける月のしるべに　前中納言定家卿

をぎの葉もをれふしにける白露にやどりよわらね有明の月　從二位家隆卿

○文治六年女御入内御屏風
松風をすその荻のつたへきてちとせの秋と宿につぐなる　皇太后宮大夫俊成卿

○家集、荻風
あしがきはそこともしらずあれはててま近き荻に秋風ぞふく　從二位家隆卿

○郁芳門院後番歌合
荻の葉の風に浪よるおときけばしぐれし冬ににたる夜半かな　右衞門督家通卿

○荻をよめる、歌苑抄
續千載
わが袖は荻のうは葉の何なれやそよめくたびに露のこぼるゝ　皇太后宮大夫俊成卿

○題不レ知、歌苑抄
おともせでまねく薄ぞ哀れなるなにそは秋のとはず語りは　恩覺法師

萬十
蘆邊なる荻の葉さやぎ秋風のふきくるなべに鴈なきわたる　讀人しらず

○弘長元年百首、荻
音そよぐあしべの荻のそれとなく吹きまがへたるわかの浦風　從二位行家卿

○建長七年顯朝卿家續千首、海邊荻
いかさまにききかもわかむなにはがたあしの中なる荻の上風　光俊朝臣

○家集
露おつるあしたの原の荻の葉も夕べの風ぞ身にはしみける　右衞門督敎定

○同、野風
するゐたわに野ぢの篠原なびけどもなほこゐしるき荻の上風　隆祐朝臣

蘭

○大嘗會悠紀方御屏風
かまふの若紫のふぢばかま千世の秋まで匂へとぞ思ふ　前中納言匡房卿

○堀川院御時百首
秋ごとにたれきて見よと藤袴きぬがさ岡に匂ふなるらむ　權中納言師時卿

○天德二年八月右大將家にて秋花露を思ひてちらすといふことを
ほころびて花咲きにけり藤袴にほひを結ぶ露にまかせて　元輔

○堀川院御時百首
そめかけてまかきにさほす藤袴まだきも鳥のふみちらすかな　俊頼朝臣

立田山麓ににほふ藤袴たがきてなれしうつり香ぞこは　大皇太后宮肥後

○天永二年七月内大臣家歌合、草花
立田山すそのに匂ふ藤ばかま玉ぬきかくる露やおくらむ　藤原宗國

○家集、蘭を
きてみれば大江の山のあなたまでいくのともなき藤袴かな　源有仲

武藏野の草のゆかりにふぢ袴若むらさきにそめてにほへる　元眞

○長寛二年白河殿歌合、草花
藤袴ねざめのとこにかをりけり夢路ばかりと思ひしものを　登蓮法師

此の歌判者俊成卿云すがたことばいひしりてきこゆ但是は本文にやあらむそのかみ左傳と申すふみをうかゞひ侍りしにこそ鄭文公之妾燕姫夢に蘭をえたることはみ侍りしかされば眞韓詩にも夢斷燕姫曉枕薫とつくれりこれらの心にやあらむと云々

○千五百番歌合
藤袴夢路にさこそかよひけれおふとみる夜の移り香もがな　野宮左大臣

此の歌判者云鄭文公之家にいやしき妾女有りけり其の名を燕姫といふ夢に天使きたりて蘭をあたへていはく是れを汝が子とせよといへり夢

さめて後うめる子をふぢばかまと名づくといへり此の事をよまれたる
にこそと云々

ふぢばかま草の枕に結ぶよは夢にもやがて匂ふなりけり　皇太后宮大夫俊成卿
○文治六年五社百首

藤袴咲きぬるときはむさしのの若むらさきの色も見えけり　同

藤袴にほふてなもよそなりきあやなくふれし苔の袖には　同

春日野の若紫のふぢばかま草のゆかりも露ぞくだくる　民部卿爲家
○文應元年七社百首

あふことはかたのの野べの藤袴たれきてみよと露けかるらむ　源仲房
○大治三年八月廣田社歌合、蘭戀

みやぎ野や尋ねて來つるふぢ袴しるくも匂ふ夕まぐれかな　大江盛佐
○長治元年五月季經朝臣歌合

ふぢ袴はたおる蟲のをりたえて女郎花にはきするなりけり　橘能元
○天仁二年十一月顯季卿歌合、蘭

藤袴きる人あらば片岡のもすそたちえのはしのかりぎぬ　慈鎭和尚
○百首歌

秋の霜に移ろひゆけば藤袴きてみる人もかれ〴〵にして　同
○文集前頭更有蕭條物老菊衰蘭兩三叢

ふぢ袴ほころびぬとや立田姫秋の野ごとにぬぎすててける　六條院宣旨
○家集、蘭を

ふぢばかま嵐のくだく紫に又しらぎくの色やならはむ　前中納言定家卿
○老菊衰蘭兩三叢

藤袴ほころび渡るのべにこそぬはれてふせるうづらなくなれ　前大納言實家卿
○家集

旅人のいるのの原のふぢ袴たが手枕にまたにほふらむ　民部卿爲家
○貞應三年百首、蘭叢試

たれとだにいはたのをのの藤袴おぼめくからに匂ふ袖かな　西園寺入道太政大臣
○千五百番歌合

○三百首御歌
ふる郷のみかきが原のふぢ袴だがぬぎかけし形見なるらむ　中務のみこ鎌倉

草香

○永久四年百首、草香
春よりはもえいでしかど草のかう香は秋風ににほふなりけり　藤原忠房

秋の野の花わけ行けばくさ〴〵の香うつりぬらむわが衣手に　源兼昌

我が袖に草のかうつる秋の野のたびねの牀はなつかしきかな　二條太皇太后宮肥後

藤袴匂ふあたりはおひ出づる草のかうのみめづらしきかな　六條院大進

○家集、草のかう
白露のいかにそむれば草のかうおくたび毎に色のますらむ　元眞

秋花

○建長五年毎日一首中、秋花
みればかつ秋風さむく身にしみて花になり行く庭のくさむら　民部卿爲家

秋風のたままくをしくみゆるかな庭のこぐさの花の錦は　同

○文永四年毎日一首中
心せよ千草の花にあらしやま野分にならばしをれもぞする　同

○詠一字三十一首
はちすさく池の夕風なつあれどよし一花の秋のなでしこ　前中納言定家卿

○建長八年百首歌合
秋の野の花の盛りはすぎがてにみ草かりふく宿やからまし　從一位良教卿

○建久元年和歌所三首歌合、朝草花
朝露のたままく葛に風すぎてうらみそめたるあだしのの原　正三位季能卿

○正治三年百首
わきかねしおなじ緑の夏草を花にあらはすあきの夕暮　小侍従
なつ野をばおなじ緑に分けしかと秋ぞおりつるなゝ草の花　前大納言隆房卿

○詠秋野花
萬八
秋の野にさきたる花を手を折りてかきかぞふれば七草の花　山上憶良
萬二十
をとめらがたまもすそひく此の庭に秋風ふきて花はちりつゝ　讀人しらず

○承安二年法輪寺歌合、草花
いろ／＼の花にたはれて道遠みいくのの原に日をくらすかな　寛顯法師

○建保三年内裏十五首歌合、秋花
旅衣ひもとく花のいろ／＼もとほ里をののあだしあさ霧　前中納言定家卿

○六帖題
野邊みれば草の初花かた咲きてちゞには秋の色ぞまだしき　信實朝臣
やち草に心をとめてふるさとの（に力）たがうゑおきし秋の花ぞも　正三位知家卿

○御集
昔みしひとのなみだや露ならむ身をうぢ山の秋の夕暮　慈鎭和尚

○題不レ知
萬十一
かくれにはこひてしぬともみそのふの月草の花色に出でめや　讀人しらず
萬十
秋づけばみ草の花のあへぬるに思ふと知らず唯にあはずあれ　同

○家集
秋の花さま／＼そむる立田姫色のあはひをいかでしりけむ　能宣朝臣
此の歌は九月ばかりに人々あまたまうできてさけなどたうぶるついで
におはびな題にてよめると云々

○家集
山里はすとかたけかきさきはやすはぎ女郎花こきまぜてけり　俊頼朝臣
此の歌は隆源法師の大はらに人々まかりて遊びけるにをみなへしおも

○法性寺入道關白家百首、草花
○家集、秋歌中
○つゆくさのさきたりけるに風の吹たるをみてよめる
○題不知
○寛喜元年女御入内御屏風、野花
追而可尋之
○堀川院御時百首
○仁安二年八月經盛家歌合、草

しろかりけるをみてよめると云々

荻原やすゑこす風のほに出でて下露よりもしのびかねける　後京極攝政

繁き野と成り行く庭のかやが下におのれ亂るゝ蟲のこゑ〲　同

すぎねとやあなことぐ〲し花もりのわが離にも秋は有るらむ　従二位隆家卿

いかばかりあだにちるらむ秋風の烈しき野べの露くさの花　俊頼朝臣

移りゆくことをばしらず言のはの名さへあだなる露草の花　西行上人

春日野やゆかりの草のたねまきて花さく秋をけふみつるかな　常磐井入道太政大臣

ともかくも人にいはでの野べにきて千草の花を獨りみるかな　隆源法師

秋の野の花に心をそめしよりくさかや姫もあはれとぞ思ふ　登蓮法師

此の歌判者清輔云右くさかやひめは日本紀に侍ることにや此の紀にはいざなぎのみことといざなみのみこととのまぐはひして先づ國土出できてやまをうむ次に諸國山川海をうむ草木をうむと侍る木のおやくゝのちぐさのおやかやのひめなり歌の心はたがはれどくさかやひめとつづきたるおぼつかなしかかる事日本紀竟宴歌にも「としごとの春やむかしのかやのひめ」とこそよめれたゞしかやうのことはたしかにみるところ有りてこそよまれたるらむと云々

槿花

○堀河院御時百首
山里のしののあさ戸のひまをあらみあけてぞみつる朝顔の花　中納言國信卿

朝顔のはかなき花をいかにしてかしこき人の闇にうゑけむ　隆源法師

浦風の波やおるらむよもすがら思ひあかしのあさがほの花　修理大夫顯季卿

○文治六年五社百首、槿花
朝かほの露もやちよをへぬべきと山ぢの菊にうゑそへましを　皇太后宮大夫俊成卿

○百首歌
色かへぬ竹の籬の朝顔もおのれはあだの花にぞ有りける　土御門院御製

○久安百首、無常歌
朝顔の暮をまたぬもおなじこと千歳の松にはてしなければ　清輔朝臣

○百首歌、古来歌合
新拾遺哀傷
槿のあだにはかなき命をばつとめてのみぞしばし保たむ　僧都源信

○建保四年百首歌
立ちまがふ霧のまがきに結ぼほれまだ露ほさぬあさがほの花　光明峯寺入道攝政

○正安三年権中納言兼季卿
我が宿にことしの秋もそめてけりみたび花さくあさがほの花　入道前太政大臣

○家集
あくる夜の空かきくもるむら雨にさかり久しき朝顔の花　民部卿爲家

○百首歌
片岡の日かげしぐるゝ柴の戸にしばしかゝれるあさがほの花　従二位家隆卿

○百首歌、槿花
有明の月はのこれる日かげにもまづかたぶくは朝顔の花　寂蓮法師

○建長八年百首歌合
しばしなほしをれなはてそ夕日かげかくれのをのの朝顔の花　右近中將經家卿

あさがほの名にこそたてれ夕露にさきそふ花の色も有りけり　前大納言顯朝卿

此の歌判者古歌彼槿花一日自成レ榮など云ふ白居易の心をうつせる

○山井

六二 山の井のそこ朝顔の花なれば影をみしまに移ろひにけり　讀人しらず

○あさがほ

六帖丁 萬八家持伊勢集 かすがのの野べの朝がほ俤にみえつゝ妹は忘れかねつも　躬恒（他本伊勢歌）

○題不レ知

六二 戀しくばあしたの原をいでてみむ又あさがほの花は咲くやと　源　養　父

明玉 家 しどけなきねくたれ髪を見せじとやはたかくれたるけさの朝顔　小　野　小　町

六五 ねくたれの朝顔の花あさ霧におもがくれしてみせぬ君かな　讀　人　し　ら　ず

秋　野

○久安百首

何ごとも思ひすつれど秋は猶のべの景色のねたくもあるかな　皇太后宮大夫俊成卿

○三十六人歌合

移しうゑし都にも見しのべなれど朝立つ鹿の聲はなかりき　隆　信　朝　臣

○題不レ知

萬十 鴈がねを聞きつるなべに高圓の野がみの草ぞ色づきにける　讀　人　し　ら　ず

○同長歌

萬十五 あきはぎの　ちらへる野べの　はつ尾花　かりほにふきて
くもはなれ　とほきくにべの　つゆしもの　さむき山べに
やどりをるらむ　同

○建保三年名所百首

かり人の草わけ衣ほしもあへず秋のさがののよもの白露　順　徳　院　御　製

○嘉元三年楚忽百首

あはれなど野原を歸るつばくらの秋の千草を思ひすぐらむ　為　實　卿

○六帖題

野べにいでてみれどもあかず荻が花をばな葛花今さかりなり　光俊朝臣

吉野山ふもとの野べの秋のいろにわすれやしなむ春の曙　後京極攝政

庭深きまがきの野べの蟲のねを月と風との下に聞くかな　同

夫木和歌抄卷第十一　終

夫木和歌抄　卷第十二

秋部三

題　鹿　鴈　秋田　稻妻　稻負鳥

鹿

○題不レ知

萬八
夕されば小倉の山になく鹿の今宵はなかずいねにけらしも　岳本天王御製

萬八
ふなばりのゐかひの山にふす鹿の妻よ(とイ)ぶ聲をきくがともしさ　坂上郎女

萬二十
をみなへし秋萩しのぎさを鹿の露わけなかむ高圓の野(山イ)ぞ　中納言家持卿

萬八
この比の朝けにきけば足引の山をとよましさをしかなくも　同

萬十
さをしかの心あひ念ふ秋萩の時雨のふるにちらまくをし(きイ)も　人丸

萬十
山遠き都にしあればさをしかの妻とふ聲はともしくもあるか　讀人しらず

萬一
秋なればいまもみるごと妻戀ひに鹿なく山ぞたかの原のうへ　同

萬十四
さを鹿のふすや草むら見えずともころが金戸よ行かくしえしも　同

萬十
鴈はきぬ秋は散らぬとさを鹿のなくなる聲もうらぶれにけり　同

○家集、たしきのおもてにあしでにてかきける歌中
○百首歌、鹿
○冬歌中
○貫之家歌合
○文治六年女御入内御屏風
○天徳三年八月女房前栽合歌、しがの山ごえ紅葉のかげに鹿なく
○堀川院御時百首、鹿

萬十
足引の山のとかげになく鹿のこゑきゝつやも山田もらすこ　同

六帖　萬八
うたの野の秋萩しのぎなく鹿も妻にこふらく我にまさらじ　同

萬十二
たかやまの峯ゆく鹿のともおほみ袖ふりこむを忘ると思ふな　人丸

萬代をかけて祈ればさをしかのおとはの山に音のきこゆる　元輔

鹿のねのおとはの山に音せぬは妻に今宵やあふさかの關　寂蓮法師

この葉ふく嵐ぞいまはおとは山峯たちならす鹿のねはうし　參議雅經卿

御かりするくりこま山の鹿よりも獨りぬる夜は悲しかりけり　讀人しらず

ねぎごとを神やうけひく春日山いがきの奥のさをしかの聲　後法性寺入道關白

春日山松のあらしに聲そへてしかも千歳の秋とつぐなり　後京極攝政

しがの山紅葉のかげになく鹿の聲はふかくもなりにけるかな　元眞

そまかたに道や惑へるさを鹿の妻よぶ聲の繁くもあるかな　權大納言公實卿

ふた葉より朝たつ鹿はしからめどまののむら萩花咲きにけり　大納言師頼卿

かこ山のはゝそが下にうちとけてかたぬく鹿ぞ妻こひなせそ　前中納言匡房卿

よもすがら雫の山にうらぶれて妻を忍ぶるさをしかの聲　修理大夫顯季卿

足引のみゝなし山になく鹿はつま戀ひすれどきく人はなし　權中納言師時卿

よもすがらまちかね山になく鹿は朧げにやは聲をたつらむ　俊頼朝臣

○久安百首
さを鹿の妻に今宵やあはざらむまちかね山のかひに啼くなり　實清朝臣

○文治六年一社百首歌
たのめおきて妻やこざらむさを鹿のまちかね山の曉の聲　皇太后宮大夫俊成卿

○承安三年七月左大臣家歌合
妻こひにあはでこの夜はあけぬとや待兼山に鹿のなくらむ　正三位季經卿

○建長二年八月鳥羽殿御會當座二首御歌、曉鹿
有明のそらだのめなるつまこふとまつちの山にを鹿なくらむ　後嵯峨院御製

○家集、山
現存六
見えもせぬつまをこふとや秋霧のかくれの山に鹿のなくらむ　從二位行家卿

○鹿
夜もすがら月の光のもる山はふじとあらはに鹿ぞなくなる　三條入道內大臣

○光臺院入道二品親王家五十首、曉鹿
おのがつまもつれなくみゆる限りとや有明の山にさを鹿の聲　西園寺入道太政大臣

○家集、鹿を
かへる山峯のあさえに風かけてをちの裾野にすがる鳴くなり　如願法師

○門妙社歌合、曉鹿
衣手の山の麓にたつ鹿のうらさびしきは曉の聲　神祇伯顯仲

○爲忠朝臣三川國名所歌合、萩山
いろいろの錦とぞみる萩の山しがらむ鹿や秋はたつらむ　藤原道經

○保延元年八月家成卿歌合
なにごとを思ひみだれていとかやま心細げにを鹿なくらむ　高松院左衛門佐

○光臺院入道二品親王家五十首、曉鹿
夕づくよあかつき闇のくらぶ山木の下たどり鹿やなくらむ　前中納言光經卿

○最勝四天王院名所御障子
たつた山峯にはげしき木がらしにたちまふ鹿のこゑの夕暮　後久我太政大臣

○四季百首御歌
秋の色は木の葉のみかは立田山袖にしぐるゝさを鹿の聲　慈鎭和尚

さを鹿の立田の山の紅葉ばやおのが涙のいろとなるらむ　同

○百首御歌
立田山みねの紅葉は散りはててあらしにのこるさを鹿の聲　同

〇卿集、紅葉

たつた山紅葉のかげになく鹿の聲もしぐれて秋風ぞふく　中務卿のみこ

〇仁安二年八月經盛卿歌合、鹿

妻こふる秋にしなればさを鹿のとこの山とてうちもふされじ　源有房朝臣

〇保延元年八月家歌合、鹿

夜もすがらいかなる鹿の妻こひてとこの山邊にいねずなくらむ　中納言家成卿

此の歌判者基頼云其妖艷不異荊茎入夢之人姿就中このしかのとこの山にいれずなくらむも心詞ともにたくみにてきき所ある心ちして侍ると云々

〇或抄中

ゆみくらきしらぬ外山のしかの聲さむる枕の雨にたぐひて　前中納言定家卿

〇家集、たなかみと云ふ所にて山田の方に鹿おどろかすをききて

さよふけて山田のひたの聲きけば鹿ならぬ身も驚かれけり　俊頼朝臣

〇鹿のこゑはるかに聞えければ

妻こふる鹿のところに驚けばかすかにも身のなりにけるかな　同

〇おなじ所にて九月十三夜

いかにせむ今宵の月に妻こふる鹿のねをさへそへてきくかな　同

〇四條皇太后宮歌合

續後拾秋上
この比はみふねの山に立つ鹿の聲をほにあげて鳴かぬ日ぞなき　同

〇保延元年八月家成卿家歌合、鹿

帚木に妻や籠れるさを鹿のその原になく聲ぞたえせぬ　爲忠朝臣

〇祇園社三百六十首

園原にありとはみゆるはゝきぎのあはぬ妻ゆゑ鹿や鳴くらむ　前參議雅有卿

〇清輔朝臣家歌合、扶桑

さを鹿の聲しきるなりみよしののいざかた山に妻やこもれる　登蓮法師

〇經信卿歌合

うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋ねてや鹿もなくらむ　讀人しらず

〇家集

いはと山あくるもしらずなく鹿の尾上のきりに妻やまどへる　源雅光朝臣

○建長八年百首歌合
きよみがた浪によるなき月影のいる山のはもを鹿なくなり　清　定

○寶治二年百首
秋風になみしばの野のよる／＼に思ひそふとや鹿のなくらむ　衣笠内大臣

○家集
園原や伏屋に忍ぶさをしかも帚木をさへ見えずとや鳴く　俊頼朝臣

淺ましやなみしばの野にたつ鹿のつめの（かイ）われのみぬるゝ袖かな　同

○障子絵にまふしといふことをしてししふえふく所
まぶしさすさつをの笛の聲ぞともしらでや鹿のなきかはすらむ　同

○家集、鹿
さを鹿は命を妻にかへむとやさつをが笛になく／＼もよる　源仲正

○詠鹿歌中
（萬十）山べにはさつをのねらひおそろしとを鹿鳴くなり妻のめをほり　讀人しらず

○久安百首
しらすげやまのの茅原いちじるく朝たつ鹿の踏みならすらむ　前大納言隆季卿

きてみれば衣笠岡にたつ鹿のよをかさねても戀ふる妻かな　待賢門院安藝

あらし山はと（キイ）ふく秋のおとすれば聲をあはせてを鹿なくなり　花園左大臣小大進

さらぬだに夕べ寂しき山里のきりの籬にをじかなくなり　待賢門院堀川

○文治六年五社百首
（玉葉秋上）あらしふきまがきの萩に鹿なきて寂しからぬは秋の山里　皇太后宮俊成卿

○二夜百首御歌合
紅葉ふくあらしにつけてきこゆなり林の奥のさをしかの聲　後京極攝政

露ふかきまがきの野べをかき分けて我にやどとふさを鹿の聲

○家集
うりふ山紅葉のかげになく鹿の聲は深くもきこえくるかな　元　眞

○或所にうりをやるとて
うりふ山朝たつ鹿のかりごもに露けきめをもみつるけさかな　惠慶法師

○家集
とば山のをにたつ鹿の聲きゝてもてはなれてもぬるゝ袖かな　同

○寛喜元年女御入内御屏風、小野鹿立行客過ぐ
紅葉ばの濃染の山のくれなゐにふり出でにけりさを鹿の聲　従二位家隆卿

○家集、秋歌中
ひくまのに匂ふ萩原いりみだれなくやをじかの秋の白露　同

○御集、秋聞鹿
何ごともいはでの關としりながら思ひかねてや鹿はなくらむ　後九條内大臣

○永久四年百首、秋山
をの山にあさたつしかも聲たてゝ秋の哀れは忍ばざりけり　六條院大進

○人を尋ねてをのにまかりたりけるに鹿の鳴きければ
鹿のねをきくにつけてもすむ人の心しらるゝをのの山里　西行上人

○堀河院御時百首
妻こふとゝこの山なるさを鹿のひとりねをなく聲ぞきこゆる　中納言國信卿

○崇徳院御時御供花時御會鹿聲何方
なく鹿は峯かふもとかとこの山旅の枕に聲おくるなり　皇太后宮大夫俊成

○文治六年五社百首
新後撰戀
あきの野の萩のしげみにふす鹿の深くも人にしのぶころかな　同

つねよりも袖こそぬるれ末の松なみのしたにや鹿のなくらむ　同

○爲家百首
おのがつま浪こしつとや恨むらむすゑの松山を鹿なくなり　従二位家隆卿

○建仁元年老若五十首歌合
よさの海のうきねに通ふ鹿のねは浪よりけにぞ袖はぬれける　嘉陽門院越前

○家集、夜浦聞鹿
やよいかにむしあけの松の風に又はるかに鹿の聲おくるなり　皇太后宮大夫俊成卿

○三十首歌、海邊鹿
秋の鹿の我が身こすなみたちかへり妻をみぬめの恨みてぞ鳴く　前中納言定家卿

○同
うら風にさそはれいづる月影をむかひの山のを鹿なくなり　隆信朝臣

○建長三年毎日一首中
今宵われあしやのおきの月をみて鹿のねさそふ嵐をぞきく　民部卿爲家

○家集、鹿を
鹿のねはをばなが浪に流れきて袖しの浦の玉藻とぞなる　源有仲

○后宮歌合
高砂のをのへの鹿をゆく舟のうら悲しくや過ぎがてにきく　權大納言長家卿

○永久四年七月雲居寺歌合
をのへゆく鹿のなく聲高砂のうら寂しかる秋のよな／＼　瞻西上人

○最勝四天王院名所御障子
たかさごの尾上の鹿の聲よりや浦こぐ船もよるべしりけむ　從二位家隆卿

松風にうきねの波も高砂のをのへのかたやさを鹿の聲　參議雅經卿

○仁安二年奈良歌合、鹿、判者俊成卿
いく潮路ゆらの湊をこぎ出でぬうへ野の鹿の聲かすかなり　覺稱法師

夜もすがら岸うつ波にこゑそへてまのの入江にを鹿なくなり　尊玄法師

うらぶれて淡路のせとになく鹿は繪島がさきに妻や籠れる　勝覺法師

○和歌所影供歌合、海邊夕鹿
夕ぎりのゐなの湊をこめつれば鹿のなくねによする舟人　如願法師

淡路島しぐれのしたに行く舟をしかのねながらおくる山風　後鳥羽院御製

○文應元年七社百首
淡路しまうらよりをちの夕なぎに鹿のねさそふ沖津しほ風　民部卿爲家

夜さむなる五十鈴河原の秋風に聲ふりたてて鹿の鳴くらむ

秋風につま待ちかねて寒き夜の(かイ)ながらの山に鹿ぞなくなる

○ひえの山へ上りて後寂蓮法師のもとへつかはしける十首中
鹿のねをおくるながらの山風にいなばにきくやしがの里人　慈鎭和尚

○返し
鹿のねをいなばの風につたへてもよを恨みたるしがの里人　寂蓮法師

○五十首歌、秋十五首中
色かはるながらの山の山おろしに鹿のねよする秋のさゞ波　從二位家隆卿

○千五百番歌合判御歌
しがの浦やきつゝもよほす山風に寂しくもあるか鹿の初聲　後鳥羽院御製

○十禪師社百首、寺邊鹿
ゆきめぐりわがたつそまとなく鹿の人めはなれぬ谷のした風　隆祐朝臣

○舟中聞鹿といふことを
明玉
おしてるやみつの堀江に船とめてつげのの鹿の聲をきくかな　浄忍法師

○百首歌
湊河うきねの牀にこよひこそ秋をつげのの鹿もなくなれ　左近中將公衡卿

○後九條内大臣家歌合
みなと川外山の霧になく鹿の聲する方にとまり定めむ　業清朝臣

○喜多院入道二品親王家五十首
月影をおく霜かとや思ふらむつげ野のしかの聲の恨むる　源師光

○保延元年八月家成卿歌合、鹿
おのが身にしもおく夢や見えつらむ心細げに鹿のなくなる　源忠季

此の歌判者神祇伯顯仲卿云有しもおく夢こそ見どころ侍るめれつげののしかのいめのあはせのまゝなるは其のときの人ことわざになむ申しけるをそれをまぎ(みイ)れたらば心ぼそげに鳴かむことわりにぞされどもあまりみゝ遠き事はいかゞ侍るらむと云々

○原上鹿といふことを
秋くればしめぢが原にさきそむる萩の初枝にすがるなくなり　俊頼朝臣

○雜、野
あふ事をいなび野に住む鹿こそはかりの人にはあはじといふなれ　讀人しらず

○正治二年百首
雨注ぐいはれの野べの萩がえにひまなく露のすがるなくなり　前大納言隆季卿

○保延元年八月家成卿歌合、鹿
よをへつゝいなみ野に立つ棹鹿は何をかひよと鳴きあかすらむ　藏原爲眞

○長寛元年八月頼家朝臣家越中國名所合、三島
聲たてぬ宵しなければみしまえにふすさを鹿の數をしりぬる　讀人しらず

○題不知

六五 山なしの山の尾上にふす鹿のおさふしかねて人にしらるゝ　同

○秋歌中

良玉 心からあだしの野べにたつ鹿は妻さだまらぬ音をやなくらむ　源雅光朝臣

○家集、深山暁鹿

いかなれば妹背の山にすむしかの又重ねては妻をこふらむ　清輔朝臣

○弘長元年中務卿親王家百首

萩こえていろなる波にさを鹿のしがらみかくる野路の玉河　權僧正公朝

○同家歌合、鹿

春日野のとぶひがくれに秋萩の花踏みちらし鹿はなくなり　同

○文應元年七社百首

春日なるとぶひの野邊に立つ鹿も今いくよとか妻をこふらむ　民部卿爲家

○正治百首

更けゆけば鹿にひとよの宿かりて月をかたしくをのの草ぶし　喜多院入道二品のみこ

○安元二年歌合、鹿、判者俊成卿

むら雨やふるから小野のもとがしは秋風騒ぎを鹿なくなり　智海法師

○暁鹿といふことを

夜を殘すねざめに聞くぞ哀れなる夢野の鹿もかくやなくらむ　西行上人

○家集、白川にて鹿をききて

憂世には山の彼方もゆかしきに鹿のねながらいやはねらるゝ　實方朝臣

○家集、秋歌中

新拾雑上 人しれず狄のしたなるさを鹿もほに出る秋やねには立つらむ　中務

○家集、いなりにまうでて關まへなるほどにしかのなけば

思ふこと鹿だになくばいとゞしく高きみ山のかひよと思はむ　和泉式部

○家集、秋窓鹿

いなり山すぎの庵の曙にまどより通ふさを鹿のこゑ　從二位家隆卿

○秋歌中、暁鹿

をしほ山こまつが原になく鹿はちよに一夜の身をやかふらむ　同

○大治二年八月廣田社歌合、暁鹿

雲かゝるたかしの山のあけくれに妻まどはせるを鹿鳴くなり　源仲正

○家集、鹿歌中

たかし山松のこずゑにふく風の身にしむ時ぞ鹿もなくなる　增基法師

○名所歌、高瀬山秋（師イ）
たかし山夕波むかふ鹽風にかはりてくだるさをしかの聲　參議爲相卿

たかせ山裾野のましば片よりに鹿のねこゆる峯のあき風　從三位爲實卿

里とほみきく人なしにさを鹿の聲はたかしの山の秋かぜ　藤原爲顯（同イ）

○布引百首御歌
なきわびてさそふ水とや布引の瀧におちそふさを鹿の聲　法親王澄覺

○家集
つまこひやわりなかるらむ聲たてて忍びの岡にを鹿なくなり　刑部卿範兼

萬代
秋くれば忍ぶの山になく鹿も人にしられぬ妻やとふらむ　平政村朝臣

○千五百番歌合
新後撰秋上
思ひあまる心のほどもきこゆなり忍ぶの山のさを鹿の聲　寂蓮法師

○建保四年前内大臣家名所秋歌
初瀬山ゆづきがもとになく鹿のつまもかくさずてらす月影　從二位家隆卿

○文永七年十首歌合、遠鹿
鹿のねぞふしみのくれに通ふなる嵐ふくらしをはつせの山　中務卿のみこ

○建保三年名所百首
續千載秋上
いつせ山この葉色づく秋風にまづいねがてのさを鹿の聲　正三位知家卿

色かへぬときはの森の下露にぬれて秋しるさをしかのこゑ　兵衛内侍

鹿のねもいかでときはの杜の露色に出づべき風のおとかは　藤原康光

秋はさぞ吹きないぶきの山風になれずがほにも鹿のわぶらむ　從三位行能卿

夕されば秋のさが野の鹿のねに山もと深く露ぞこぼるゝ　從三位範定卿

○嵯峨にまかりて鹿を聞きて、歌苑抄
を鹿なくこの山里のさがなれば悲しかりける秋の夕ぐれ　藤原基俊

○建長六年龜山殿五十首、歌野鹿
いにしへのみゆきの跡を尋ねきてさが野の原に鹿ぞ鳴くなる　岡屋入道前攝政

○元久元年詩歌合、山路秋行 鹿イ
ときは山あきを忍びてひとり行く袖の色より鹿やなくらむ　後鳥羽院御製

○嘉元二年百首御歌、鹿
つたへみる（サイ）山はあらしのわが宿となれてもあかぬさを鹿の聲　亀山院御製

○文永七年七月白川殿七百首、遠聞鹿
嵐山あらしにつけてきこゆなりならびの岡のさを鹿のこゑ　後嵯峨院御製

○柿本影供百首
夜もすがら雙の岡になく鹿はかく見る妻をかくや戀ふらむ　従二位行家卿

○弘長元年百首、鹿
白露をならしの岡のさねかづら分けくる鹿や涙そふらむ　後九條内大臣

○承安三年七月右大臣家歌合、鹿
あけ暮にきりふの岡に立つ鹿はつまの行くへも見えずとやなく　清輔朝臣

○保安三年八月家成卿家歌合、鹿
み狩するをむらの嶽にすむ鹿はうちとけ難きねをやなくらむ　神祇伯顯仲卿

此の歌判者神祇伯顯仲卿云左をむらのたけききにくくこそほかにても侍りぬべけれとこの山につれにかりをするとしのたゆる事なきにより うちとけがたきかみかりするとはかたののみののかりはのをののなど たかがりにききなすたる（れカ）侍れどもくりこま山のしかよりもといふこと につきてよめるにや云々

○御集、野中鹿
秋もはやすゑの原野になく鹿の聲きく時ぞたびは悲しき　鎌倉右大臣

○百首中
尾花葺くいほりに露やしげからしうちのみやこにさを鹿のなく　光明峯寺入道攝政

○建保三年内大臣家百首、原鹿
みかの原くにのみやこの山こえて昔やとほきさを鹿の聲　前中納言定家卿

みよしののみかきが原の秋風に古里寂しさをしかの聲　大藏卿有家

○百首御歌
○故鄕鹿
○文永二年七月白河殿七百首、杣鹿
○延喜十三年九月陽成院歌合、惜秋
○家集、神なび山のほとりにて
○建保三年內裏十五首歌合、秋鹿
○中務卿親王家五十首歌合
○三十六人歌
○家集、曉鹿の心を
（顯仲卿すゝめける住吉社歌合、曉鹿「曉鹿イ」）
○和歌所三首歌合、夕鹿
○後鳥羽院熊野詣でけるに
○六百番歌合

里ふりて秋の野らともなるならばみかきが原に鹿やなくらむ　慈鎮和尚
すみよしのしきつの浦の夕されば鹿のねわたすむこの山風
古里の庭のあるじとなりにけりのこりしのべのさを鹿の聲
宮木ひくいづみの杣になく鹿はやむ時もなく妻やこふらむ　右近中將具氏卿
かみなびの杜によをへてなく鹿は過ぎ行く秋を惜しみとめなむ　讀人しらず
われならぬ神なび山の正木もて妻まく鹿もねこそなきけれ　增基法師
みむろ山した草かけてなく鹿の聲よりしげき曉の露　順德院御製
忍びわび思ひやかくる神なびのみむろの山に鹿ぞなくなる　從二位家隆卿
昔みしみわのひはらや秋くれて峯にを鹿の聲おくるなり　大納言通具卿
三輪の山杉間も秋のしるしにて鹿もかくれぬつまやこふらむ　前左兵衞督敎定卿
三輪の山すぎの青葉はときはにて秋のしるしに鹿ぞ鳴くなる　覺盛法師
寂しとや松に霜おく有明のしらつき山の峯になく鹿　源有仲
白露のおきゐてきけばさほ山は曉かけてを鹿なくなり　源親房
人はこず秋はいなばの山風にけふもくれぬとしかぞなくなる　大納言通具卿
紅葉ちることやわびしきみくまのの山の嵐に鹿ぞなくなる　慈鎮和尚
雨ふればかさとり山の鹿のねはなか〳〵よはの袖ぬらしけり　正三位季經卿

○久安百首

さを鹿もひとりふしみの里にては物寂しとやなきあかすらむ　　大炊御門左大臣

○文治六年女御入内御屏風

さをしかの萩が花妻しがらみて伏見の野べをよがれざりけり　　正三位季經卿

○最勝四天王院名所御障子

伏見山つまとふ鹿のなみだをやかりほのいほの萩の上の露　　前中納言定家卿

を鹿なくとこの月影ゆめたえてひとりふしみの秋の山風　　如願法師

一夜ふす伏見の里の岡べなるわさ田もかりに鹿ぞなくなる　　後久我太政大臣

鹿のねにねざめを秋の松の風ふしみの里に露や契りし

宮城野のうつろふ萩にあしびきの山たちならし鹿ぞなくなる　　如顯法師

○建仁元年老若五十首歌合

里はあれてしかぞなくなるするが原や伏見の野べの秋の夕暮　續千秋上　　従二位家隆卿

○建暦二年内裏詩歌合、水郷秋を

みなせ山ゆふかげ草の下露や秋ゆく鹿のなみだなるらむ　　後久我太政大臣

○最勝四天王院名所御障子

みなせ川この葉さやけき松風に鹿の音あらふきりのした水　　慈寅和尚

秋のよを深草山にすむ鹿は露にのみこそぬれわたるらめ

○ふちのをの社歌合

深草やふりにし里のあれしよりいまはのに出て鹿ぞなくなる　　少将内侍

○建長二年仙洞詩歌合、山中秋興

しらまゆみいるさの山の夕霧に立ちかくれてや鹿のなくらむ　　土御門院小宰相

○仁安三年奈良歌合、判者俊成卿

あらちをのいるさの山にたつ鹿は忍び聲にや妻を戀ふらむ　　朗覺法師

○秋歌の中、鹿

きりはるゝ川浪とほく月さえてこせのさ山に鹿ぞなくなる　明玉　　法印實伊

○建長八年百首歌合

なにとしてうつろひぬらむさをしかの心あひ思ふ秋萩の花　　光俊朝臣

秋霧の上ゆく鹿のこゝにのみうきてやふじのねをばなくらむ　後九條内大臣

○名所歌中
妻ごひはおのれもならぬ思ひとやふじの裾野に鹿の鳴くらむ　參議爲相卿

ふじの嶺の裾のをかけてなく鹿の聲もあらしにうき島が原　爲實卿

せきのとのゆふつけ鳥はつれなくて鹿のねあくる足がらの山　同

風そよぐたけの下露袖に落ちてしかの音寒き足柄のやま　參議爲相卿

あしがらの山路のあらしよをさむみ鹿のねもろき竹の下露　同

露はらふつたのしたぶしゆめ絶えてしかのね近きうつの山風　同

鹿のねも色そふばかりうつの山した紅葉こきつたの中道　爲實

○みちのくにくだりけるときさやの中山にとまりて侍りけるに鹿の鳴きければ
明玉 風秋上
旅ねするさよの中山さよなかに鹿も鳴くなりつまや戀しき　橘爲仲朝臣

○名所歌中
おなじくば鹿なく方にみちもがな秋しもこゆるさよの中山　參議爲相卿

月ふけてなくやを鹿のこゑすなり誰もねざめのさよの中山　爲實卿

○嘉元元年三十首
玉秋上
やたののや露霜さむくなるなべにあさぢ色づきを鹿なくなり　藤大納言典侍

○秋歌中、寂門
かり人のやたのの原になく鹿もあさぢ色づく秋や悲しき　公譽

○光明峯寺入道攝政家三首歌合
やたの野のあさぢ色づく秋風をわが身にしめて鹿も鳴くなり　前大納言資季卿

○建保三年内大臣家百首
あさかりの道見するおくひまをなみと山の原に鹿ぞ鳴くなる　從二位家隆卿

○百首歌中
新拾秋下
むさしののよはの草ぶしあけぬれど歸る山なきさを鹿の聲　同

〇御集、野鹿
武藏野のしののを吹雪寒きよにつまもこもらぬ牡鹿なくなり　後京極攝政

〇光明峯寺入道攝政家七首歌合、月下草
むさしのやしがらむ草の葉末より鹿のね近く出づる月影　民部卿爲家

〇秋歌中
秋萩のはな野の露の有明にあたらよとてや鹿のなくらむ　同

〇文應元年七社百首
妻まつとを鹿なくなりあふことのかた野のみのの秋の夕暮　同

〇内裏御會秋十首歌
秋風のたちにし日よりもののふのやそうぢ山に鹿も鳴くなり　同

〇寶治二年八月四條宮歌合
秋ごとにきけどもあかぬうぢ山のをのへの鹿のよはの一聲　大藏卿爲房

〇光臺院入道二品親王家五十首、曉鹿
すみわたるよをうぢ山の朝ぼらけなほ思ひいる鹿ぞなくなる　法印幸清

〇文安百首
あだち野の尾花隱れにほのみゆるしらげや鹿のしるしなるむい　前參議親房卿

〇後鳥羽院名所歌百首　百イ
安達野の秋風そよぐむら薄うきものとてやしかのなくらむ　如願法師

〇百首
を鹿なくあだちの原は紅葉して色もかはらぬたけくまの松　寂蓮法師

〇最勝四天王院名所御障子、阿立原
かり人のあだちのまゆみ末たわによるやをじかの秋の紅葉ば　從二位家隆卿

〇家集歌中
時雨行く空こそあらめさを鹿のかつけの星もかつくもりつゝ　同

〇百首歌
あらしふく楢の葉わけにつたひきて袖にしぐるゝさを鹿の聲　同

〇鹿聲何方といふことを
明玉
山里は秋のねざめぞ哀れなるそこともしらぬしかの一聲　後白河院御製

〇詠十首歌合、夜鹿
久かたのかつらのかげになく鹿は光をかけて聲ぞさやけき　後鳥羽院御製

おのがすむ峯のこがらし寒き夜は鹿も紅葉の衣きるらし　後九條内大臣

○柿本影供百首
うらもなき紅葉の衣たつた山よるなくしかは夢やみざらむ　同

○寳治二年百首、夜鹿
さ夜すがらこひの妻とふさを鹿の野原の風に聲迷ふなり　俊成卿女

○弘長四年毎日一首中
小倉山みねの紅葉ばなくしかの涙にそめて色に出づらし　民部卿爲家

○題をさぐりてよみける歌、山鹿
一つれはすそのに出でて小倉山峯にものこるさをしかの聲　參議爲相卿

○建長七年顯朝卿家十首歌、杜鹿
我が爲にあはでの杜の雫かはつまどふ鹿のたちぬれてなく　土御門小宰相

○家集、杜間鹿
おく露や涙なるらむさを鹿のつまどふよはの衣手の杜　同

○最勝四天王院名所障子
秋にふく生田のもりの下風にたれすむとかは鹿のとふらむ　大藏卿有家

秋ふかき心の色もしぐれつゝいくたの杜のさをしかの聲　具親朝臣

たづねつゝ生田のもりに宿とへば鹿のねながら朝風ぞ吹く　從二位家隆卿

○百首御歌
水ぐきの岡のむら萩うちなびきしかのねながらあき風ぞ吹く　土御門院御製

み山だに曉かけてなく鹿の聲する方に月ぞかたぶく

まくずはふあだの大のになくしかもひとつ恨みの秋の夕暮

○應德三年通宗朝臣家歌合、萩
すがるなくあだの大野をきてみれば今ぞ萩原にしきおりける　隆源法師

○永久四年七月忠隆家歌合、女郎花
を鹿なくあだのおほ野に女郎花うたでも今宵露ふしにけり　藤原宗國

○千首歌
風わたるあだのおほ野の葛かづら長き恨みに鹿ぞなくなる　民部卿爲家

草も木も涙にそめてつまかくすやのの神山鹿ぞなくなる

〇水無瀬御會秋歌中
妻かくすや野の神山たち迷ひゆふべの霧にしかぞなくなる　從二位家隆卿

〇月前鹿
月みてもなぐさめかねてなく鹿の聲すみのぼるをば捨の山　後嵯峨院御製

〇最勝四天王院名所御障子
さらしなや月ふくあらし夢にだにまだみぬ山に鹿ぞなくなる　如願法師

〇秋歌中
萬代 堀山
時雨の雨間なくしふればすがるなく賤はた山も錦なりけり　權大納言公實卿

〇百首御歌
つくばねのそがひに立てるさを鹿の妻ふく風に聲もおよばず　光明峯寺入道攝政

〇爲家卿家百首
さを鹿の角ぐみ初めしあしほ山ほにいでてなく秋はきにけり　從二位家隆卿

〇三百首御歌中
つくば山峯たちかくす秋霧のしたに通ひて鹿やなくらむ　中務卿のみこ鎌倉

〇建保三年九月十三夜十首歌合、暮山鹿
ゆふづくひ暮れ行くまゝになきまさる秋のを鹿の妻こひの山　衣笠内大臣

妻こひに鹿はなくなりから衣すそまの山の秋の夕暮　權大納言經平卿

鹿ふかく山の雫のゆふこりに鳴くやを鹿のいかゞしづけき　正三位知家卿

日くるれば行く人見えぬしがらきのと山にいづるさを鹿の聲　隆祐朝臣

夕霧にまがきの山やこれならむつまをへだてて鹿ぞなくなる　從一位眞教卿

ゆふぎりにまがきの山に妻こめて猶たちどまるさをしかの聲　參議爲相卿

〇暮山聞鹿といふことを
月くさのはなだのおびのゆふは山絶えぬる妻を鹿やこふらむ　中務卿のみこ鎌倉

〇仙洞三十首御歌
新後拾秋上
ゆふは山けふこえくれば旅衣すそのの風にを鹿鳴くなり　入道前太政大臣

〇文治のころひえの山より寂蓮法師のもとへつかはしける十首中
きく袖の露のふかさもあるものをねやまの裾のさをしかの聲　慈鎭和尚

○返し

を鹿なく同じねやまの裾なれどききわく袖ぞ露もおきそふ　寂蓮法師

○家集、鹿　旅宿路イ

秋の野をねやまのすそに分けなして袖にかたしくさを鹿の聲　同

○永承八年五月中納言基兼卿三井寺歌合、鹿

いかなればあふ坂山にふす鹿のなほ妻ごひのねをや鳴くらむ　讀人しらず

○前大僧正源恵(忠賢)家障子絵、相坂秋

逢坂のすぎまの紅葉いろ見えてうつろふ秋に鹿はなくなり　法印慈忠

○題不レ知

明玉
奈良山を夕越えくれば吉里のとぶひの野べにしかぞなくなる　法印尊海

○野[illegible]、吉[illegible]歌合

幾秋かつれなき妻をうねの野にあふみちしらで鹿の鳴くらむ　従三位忠兼卿

○秋歌

不聞
あき風や身にさむからじから衣たつたの山に鹿ぞなくなる　藤原基廣

○弘長元年百首鹿

日の暮に岩田のをのをゆきしかばさを鹿なきつ妻をこふらむ　従二位行家卿

○題不レ知

不聞
柞はら色づきぬらし山しろのいはたのをのに鹿ぞなくなる　惟宗忠景

○五十首和歌

初霜のふるのわさだの刈りもあへず胸わけにゆくさを鹿の聲　光明峯寺入道摂政

○[illegible]百首歌、鹿

石上ふるの山田になく鹿はおのれほにいでて妻をこふらし　権僧正公朝

さを鹿のたちのの原のはじ紅葉こゑかわくまでふく嵐かな

○[illegible]社百首和歌

歌苑抄
さをしかの笛ふく峯の追風に忍ぶもぢずり露ぞみだるゝ　後鳥羽院御製

○秋歌中、鹿

あはれとやねらふさつをも思ふらむを鹿つまどふ秋の夕暮　實清朝臣

○建長八年百首歌合

ふりまさる谷のかげ道苔たえて通ふを鹿のあとあれにけり　右近中将経家卿

○鹿

六二
あさみちのふる道わけてなく鹿はたちわかれにし人や戀しき　讀人しらず

○保延元年八月家成卿家歌合
夕霧にたてるそほづや見えざらむ山田のそひにを鹿鳴くなり　源仲正

○永久二年九月三井寺歌合、月
いかばかりくまなき秋の月なればふたけの鹿の星もみゆらむ　覲意法師

○承安二年七月右大臣家歌合、曉鹿
身をつめばあはれとぞきく夜もすがら佇む鹿の曉のこゑ　源行頼

○仁安三年八月經盛家歌合、鹿
山風にしをるゝ野邊の草むらのねや寒しとやしかのなくらむ　源師光

○百首歌
さを鹿の夢にもつまに逢はむとやしがらみかへす秋の下ふし　寂蓮法師

○家集
玉葉秋
鹿のねをかきねにこめてきくのみか月もすみけり秋の山里　西行上人

○正治二年百首
草がくれ庭になれくる鹿のねに人めまれなるほどをしるかな　喜多院入道二品のみこ

○仁安二年八月經盛家歌合、月
月影のさえゆくまゝにおく霜を思ひもあへず鹿やなくらむ　登蓮法師

此の歌判者清輔朝臣云右豐山の鐘の心にやそれは霜降時自鳴とかや申すめりされば秋月似二夜霜一云詩にも欲レ和豐嶺鐘聲否とぞつくられたろこれはわが月光をしもとみてかればしもに和してこそなれ心なき物なれば霜を見てながむとおもふにはあらじと云々

鴈

○詠鴈
萬十
おしてるや難波堀江のあしべには鴈ねたるかも霜のふれるに　讀人しらず

○題不知
萬八
けさの朝けかりがねなきつ春日山紅葉にけらし我が心いたし　同

○寄雁といふことを
うねび山峯のこずゑも色づきてまてどおとせぬかりがねの聲　大宰大貳高遠卿

○題不知
萬八 久方の雨雲おかす雲がくれなきぞゆくなるわさ田かりがね　中納言家持卿

○千五百番歌合
風ふけば雲はのこらぬ山のはに月をよこぎる初鴈の聲　従二位保季卿

○寶治二年百首、初雁
この秋のにひ玉章のことづても今こそあれと鴈はきにけり　信實朝臣

初鴈のとばたのくれの秋風におのれとうすき山のはの雲　後鳥羽院御製

○最勝四天王院名所御障子
をしねほすふしみのくろにゐる鴈の遠ざかりゆく曙の空　同

○建保二年内裏歌合
松風の秋にはいとゞたえ〴〵に伏見の夢のきゆるかりがね　俊成卿女

○百首御歌
萬代 旅衣ひもゆふかけてあしがらの箱根とびこえ鴈ぞなくなる　光明峯寺入道攝政

○貞應二年名所百首
たちかへり今やいなばの山風もまつにおとする初鴈の聲　民部卿爲家

○最勝四天王院名所御障子
をしねほすとばたのくろにゐる鴈の涙に結ぶ秋のいな妻　後久我太政大臣

○草木黄落鴈南歸といふ事を
草も木も色かはり行く秋風にみなみにかへる初鴈のこゑ　常磐井入道太政大臣

○百首御歌
峯こえて今ぞなくなる初かりのはつせの山のあきぎりの空　土御門院御製

○建保四年内裏十首歌合
夕くれば鴈のつばさのおほひばをもりてふりくる秋の村雨　正三位行衡卿

○秋雜歌、詠雁
萬十 あまとぶや鴈の翅のおほひばのいづこもりてか霜のふりけむ　人丸

○寒鳴驚旅客愁重
なく鴈の聲だに絶えてきこえねば旅なる人は思ひまさりぬ　千里

○家集
雨雲のよその物とはしりながら珍らしきかなかりの遠ごゑ　貫之

○寛平御時后宮歌合
鴈がねにおどろく秋の夜をさむみ蟲のおりだす衣をぞきる　讀人しらず

六五
忘らるゝ身を秋かけてくる鴈のあまたつらげにみゆる君かな　同

○[illegible]歌合
新古秋下
秋風に山とびこえてくる鴈のさむけにきゆる峯の白雲　躬　恒イ

○八月とほくまかる人にあふぎとらすとて
あふぎとて鴈のは風をふく程はわかれむ程やつくべかりける　恵慶法師

○家
鴈がねはみふねの山やこえつらむ梢かけたりとあまつ聲する　同

○文永元年七社百首
あはぢ島とわたるかりの秋風に聲ほにあぐる浪のをち方　民部卿為家

○文治六年五社百首
いつしかと鴈はきにけりたまくしげ二見の浦のあけがたの空　皇太后宮大夫俊成卿

○建保二年八月八幡宮歌合、海邊鴈
白雲につばさしをれし鴈がねのおりぬる磯も浪やひまなき　後京極攝政

今ぞしる秋は南にくるかりのあかしの沖の月になきけり　皇太后宮大夫俊成卿

松島やをじまが磯になく鴈のなみだもぬらすあまの袖かな　俊成卿女

○喜多院入道親王家五十首
夕さればたみののしまに鴈なきてあしのまろやに衣うつなり　寂蓮法師

○御集、夜泊鴈
なきわたる鴈も心はとまりけりこや高砂のうきねなるらむ　後徳大寺左大臣

○久安百首
古の共の玉章はかけずしてあしをふくめる鴈のつかひか　前大納言隆季卿

かりがねの浮べる翅うちたれて水田のほたちふみしだくらし　同

○家集、鴈の歌とて
玉づさはたがため誰かことづけし鴈のつかひぞうはの空なる　權大納言實家卿

○御集、野逸鴈
久かたのあまとぶ鴈の涙かもおほあらき野の篠がうへの露　鎌倉右大臣

○或所屏風歌

常世出でし日かずよいかに夜や寒きみやこにきたる雁のは衣　源重之

○或所にかへしに秋風と云ふことを

とこよへてかりの羽衣さむきうへに心してふく秋の夜の風　藤原清正

○百首歌、野雁

わかれにしほどは雲居の雁がねもくるすのを野の秋の夕暮　土御門院小宰相

○仙洞影供歌合、江月聞雁

夜を重ねたまえにおるゝかりの聲あしまの月にたつ空やなき　後京極攝政

○十題百首御歌

秋の夜の月にまちいづる初雁のかすみてすぐる春のふる聲　同

○西洞隱士百首

みよし野の里はあれにし秋の野にたれをたのむの初雁のこゑ　同

○八月十五夜五辻秋御會當座

ゆく秋も今やなかばにすぎぬらむ月にねぬよのかりの一聲　同

○寄字五十首、寄鳥戀

みるまゝに人の心のかりの子をいくつか重ねていかに頼まむ　家長朝臣

○建久三年九月十三夜大將家にまかりて

雁がねのはるかになのるひと聲ももの思ふ袖の露ぞうけとる　前中納言定家卿

○堀河院御時百首

雲がくれなのりをしつゝゆく雁のなごり寂しき秋の空かな　權中納言師時卿

○百首御歌、月

月のこるふぢえの浦の有明のよふねかずそふ秋の雁がね　後九條内大臣

○御歌中

大江山すそわの小田にゐる雁のはだれの霜のあとぞきえゆく　西園寺入道太政大臣

○千五百番歌合

初雁はこし路の雪を分けすぎてみやこの霧に今ぞ鳴くなる　第三のみこ惟

○正治二年百首

とこよいでし旅の衣や初雁のつばさにかゝるみねの白雲　後京極攝政

○仙洞百首御會、月前雁

雁かねも雲の衣をいとひけりおのが羽風にすめる夜の月　同

○百首御歌

露は野べわが夕ぐれの袖をまた雁の涙のそめてすぎぬる　慈鎭和尚

○和歌所影供歌合、江月聞鴈

月にふくま野のうら風寒からじ入江におつるころも鴈かね　如願法師

○百首歌

ほとゝぎす聲も絶えにし雲路よりあはれにしぐる秋の鴈がね　従二位家隆卿

○後京極攝政家歌合、須磨關秋

波にゐるくもに初鴈おとづれてすまの關屋に秋風ぞ吹く　同

○建保三年名所百首歌めしけるとき

便りあらばみやこへつげよ鴈がねにけふぞ越えつる白川の關　順德院御製

すまの浦蜑いさりわたる鴈がねも聲すみのぼるいざよひの月　同

かきつらねとぶ鴈がねの涙とや色まさりゆく水ぐきの岡　従二位家隆卿

みづぐきの岡のこずゑになく鴈の涙まがへて村雨ぞふる　正三位知家卿

鴈がねの聲は雲ゐにたかまどの野邊のこはぎに涙散りけり　兵衛内侍

新後拾秋上
涙にもいろこそみえね初鴈のいこまの山はきりがくれつゝ　藤原康光

たが方によるなく鴈のねにたてて涙うつろふむさし野の原　前中納言定家卿

○大治元年三條右大臣家歌合

武藏のに旅する夜の寢しきにたのむの鴈の聲ぞうれしき　源定信

○正治二年百首

鴈がねのかきつらねたるたまづさは淺緑なる空のいろがみ　三條入道左大臣

珍らしや朝霧がくれきこゆなりそともの田の初鴈のこゑ　源師光

○家集、鴈をききて

さ夜ふけて浦にからろの音すなり天のと渡る鴈にやあるらむ　前中納言通房卿

○大井川行幸に、旅鴈雲にまがひてたまづさとみゆ

大空にうちむれてとぶ鴈がねは緑のかみのふみかとぞみる　花山院御製

○家集

とぶかとぞ緑の紙にひまもなくかきつらねたる鴈がねをきく　和泉式部

○文應元年七社百首
かけてとぶたが玉づさとしらすらむかりの翅の雲のうはがき　民部卿爲家

○百首歌雲間初鴈
初鴈のかく玉づさをまきよせてほのかにみする村雲の空　寂蓮法師

○文治六年五社百首鴈
もろこしの浪路や過ぎし秋の鴈雲ゐにきてもからろおすなり　皇太后宮大夫俊成卿

初鴈はみどりの紙のたまづさをかきつらねたる秋の空かな　同

○文應元年七社百首、石淸水
みゆきするとき近からし神山は初鴈なきて色づきにけり　民部卿爲家

○春日
色かはるこの葉をみればさほ山の朝霧がくれ鴈はきにけり　同

○百首歌五十首中
ものゝふのやた野のあさぢ風さわぎ雲にみだるゝ秋の鴈がね　藤原爲顯

○建長八年百首歌合
大井川くだすいかだし心せよ暮れゐる鴈もたちさわぐなり　右近中將經家卿

つくばねや秋風さむみ旅衣すそわのたゐに鴈ぞなくなる　前大納言顯朝卿

峯こえの山のこなたにくる鴈はこしはなれたる聲ぞきこゆる　信實朝臣

○弘長元年百首
ふりくると思ふにつけて寂しさは鴈のなみだの秋の村雨　同

○建保四年内裏歌合
こしぢより秋を急がぬ鴈がねは初もみぢ葉のをりにあふらし　參議雅經卿

○最勝四天王院名所御障子
初鴈も雲ゐに今ぞなきわたるはまなのはしの秋ぎりの空　俊成卿女

はつ鴈の聲の行方も白浪のはまなのはしの霧のあけぼの　參議雅經卿

○雲葉
鴈がねも雲のとだえやうらむらむはまなの橋の秋の夕暮　具親朝臣

○貞應百首御歌
月影にあまとぶ鴈のかずみえて斜にたてる佐野のふなばし　光明峯寺入道攝政

○貞應元年八月三日歌合
かず見ゆる雁のはだれの霜のうへに月さえわたる天の橋立　　同

○五十首御歌
ゆく雁の霜のふりはに月さえて渡しかはせるかさゝぎの橋　　同

○建保三年秋十五首歌合、秋雁
この比の雁のなみだのはつしほにいろわきそむる峯の松風　　前中納言定家卿

○土御門内大臣家三十首
雁がねの空ゆくはねにおく霜の寒き夜ごろに時雨さへふる　　同

○元久比僧洞にて當座歌合、聞雁
しばしくもる有明の月の村雨に山とぶ雁も友うらむなり　　從二位家隆卿

○光臺院入道二品親王家五十首
秋風やしらべなるらむ雁がねのことぢをたてて鳴き渡るかた　　源師光

○建仁元年老若五十首歌合
玉づさのかきあはせたるしらべかな雁のことぢに峯の松風　　慈鎭和尚

○十五番歌合
いかにせむふしみの里の有明にたのむの雁の月になくなる　　後京極攝政

○秋歌中、初雁
玉葉秋　あはれなるみ山のいほのねざめかないなばの風に初雁の聲　　二條院攝政

○文治六年五社百首
をしねほす田面に來居て旅の雁おのがとこよの物がたりせよ　　皇太后宮大夫俊成

○六帖題
新六六　背面なる小田におりゐる雁がねの羽音きこえて今ぞ立つなる　　衣笠内大臣

○百首御歌
山本のはつた雁がねきなくなりいほもる賤も涙おつらし　　後光明峯寺攝政

玉葉秋　した葉ちる柳の木ずゑうちなびき秋風たかし初雁の聲　　中務卿のみこ

○若宮御歌合
夕日うつる柳がすゑの秋風にそなたの雁の聲も寂しき　　前中納言爲兼卿

○六帖題、はた
くれはとりあやに畏くおる機の越路の雁のつらをなしける　　權僧正公朝

○式部卿親王家和歌所歌
雁がねのとほよる翼雲きえてむらさめこゆる秋の山もと　　參議爲相卿

○海路雁といふことを
久方やあまの苦屋にさぬるよは浦風さむみ雁なきわたる　源季廣

○秋歌中
かりがねも友惑はせりしがらきの槇の杣山きりたてるらし　鎌倉右大臣

○建長七年顯朝卿家續千首、雁過湊
水ぐきの岡の港にとぶ雁をよみはたらかす文かとぞみる　信實朝臣

○千首
天の川とわたる雁のなみだとや紅葉のはしも色にいづらむ　民部卿爲家

○六帖題
新六一 久方の雲ゐの雁の越路より始めてくるやはづきなるらむ　同

同 いづみ川柞もいまだもみぢぬにこま山こえて雁はきにけり　光俊朝臣

○百首歌
こしの海やしなのの濱の秋風に木曾のあさぎぬ雁ぞ鳴くなる　同

○七百首歌、雁
たまだれのこすの大野の秋風にうかれ出でてや雁のなくらむ　權僧正公朝

○住吉社歌合、旅戀
もの思ふ身を初雁の空にのみなきてふけぬるさよの中山　從三位行能卿

○文應元年毎日一首中
ひろさはやあさけ寒けき池水に霧たちこめて雁ぞなくなる　民部卿爲家

あさぼらけたまものとこをたち別れ雁ぞなくなる廣澤の池　同

○正嘉三年毎日一首中
なきわたる雲ゐの雁のをとこ山いまや木ずゑの色變るらむ　同

○文應元年毎日一首中
夕づくよいらぬさきとや雁がねの小倉の山の陰になくなる　同

○永仁二年内裏歌合
月しづむ山のはかげをゆく雁の翼にうすきあかつきの空　參議爲相卿

○はつせにまうでけるとき（時イ）三輪山のほとりにて
新續古秋下 なしねほす三輪の山田に雁なきて夕日しぐるゝすぎの村立　前大僧正道慶

○堀川院御歌百首
天のとのあくるほどをばまたぬかな急ぎやすらむ旅の雁がね　中納言國信卿

雲かゝるあらちの山を鴈かねの霧にまどはでいかに來つらむ　前齋宮河内

鴈がねも羽しをるらむ眞菅生ふるいなさ細江にあまづゝみせよ　俊頼朝臣

○たなかみにてかりたる田よりかりのなきてたつを

秋の田の北斗も鴈のみゆるかなたれ大空にかきちらすらむ　同

○家集、初鴈

いくかにか初鴈がねの渡るらむはね打ちたゝみ休むよもなく　源仲正

雲ゐよりくる初鴈のいつの間にかただの浦にならびゐるらむ　同

○三百六十首中

打ちむれてとわたる鴈の羽風には天の川波さわぐらめかも　好忠

くる鴈のよはのは音に驚きて野べの玉ともおきゐぬるかな　同

○家集

くもりなき大海原をとぶ鴈のかげさへしるくてれる月影　同

○連歌しかまづにてかりを聞きて

しかまづにかりの聲こそ聞ゆなれいほの鄰に鶴やなくらむ　前中納言通房卿

秋田

○建長五年毎日一首中

風渡る野田の初穗のうちなびきそよぐにつけて秋ぞしらるゝ　民部卿爲家

昨日こそ神田の早苗急ぎしが今朝にひ物のみと聞くなり　同

○文永十一年毎日一首中

七夕の行きあひの早稻田鴈鳴きて己がはづきになりぬべきかな　同

○建保四年内裏十首歌合

己が秋に行きあひのわせを鴈がねの鳴くなるなべに露ぞこぼるゝ　光明峯寺入道攝政

○文治六年五社百首

稻葉ふく風もことにぞ身にさむき生田のさとの秋の夕暮　皇太后宮大夫俊成卿

○正治二年百首、しらふのため
山ざとは秋を松風ことしらぶ野田かる賤は千代うたふなり　同

○家集、海邊秋風を
夕さればあしやのおきに風すぎて生田の小田も穗波立ちけり　權大納言實家卿

○家集
あをげなるおくての稻を守るまに秋の盛りはすぎやしにけむ　好忠

○百首中
山しろの音羽のわたり打ちすぎて稻葉の風に思ひこそやれ　重之

○稻風に田のほとりにかりする人ありイ
家集
早苗とりおのが作らぬ秋の田を鴈にきぬとや田ぬしとがめむ　惠慶法師

○田のうへの月
山家上
夕露のたましく小田のいなむしろかへす穗末に月ぞ宿れる　西行上人

○正治二年百首、秋田
長きよにいくたび露のふきたててたのもの草にかへる秋風　從二位賴氏卿
露おつる草田のほさきうちなびき朝ふく風は袖ぞさむけき　衣笠内大臣

○御集、秋御歌中
山田もる木曾のふせ屋の苫ごしに又袖ぬらす秋の村雨　同

○日吉社五十首御歌
足引の山田の庵のとまをあらみこの下露や袖にもるらむ　後鳥羽院御製

○御集、十首御歌中
山田もりいやねざるらむ鴈がねの秋の夜深くなき渡るなり　花山院御製

○家集、秋田
うちとけてまどろみにけり山田もる庵にあひすむ月に守らせて　小辨

○家集、田家月
いほやもり山田は月に任せてよくまのあらはやいかまけもこむ　源仲正

○御集
秋の田をふきくる風のかうばしみこや袖のこる匂ひなるらむ　花山院御製

○家集
拾雜上　六帖　家集
小夜衣たちりのひだにみえなれて袖のこなたにすがるなくなり　如覺法師

○秋歌中
みやま田のおくての稻をかりつみてまもる假庵に幾よへぬらむ　躬恒

○最勝四天王院名所御障子

さとしむる鳥羽田の稲葉ほの〴〵ときりがくれ行く淀の川舟　慈鎭和尚

○建保三年名所百首

秋風のとばたのおもをふくなべにほなみに續く淀の川水　僧正行意

○千五百番歌合

壬二 霧はるゝとばたのおもを見渡せば行くすゑ遠きあきの山里　従二位家隆卿

○題不レ知

かりのなくとばたのおもに露おちて月かげとめぬ秋の山風　他阿上人

○秋歌中、古来歌合

玉秋上 ほにいづる伏見の小田を見渡せばいなばに續くうぢの川浪　冷泉太政大臣

○洞院攝政家百首、眺望

ふしみ山たのもの末をふく風にほなみをわたるうぢの川舟　光俊朝臣

○題不レ知

萬十 我が門にもる田をみればさほのうちの秋萩薄おもほゆるかな　讀人しらず

萬十 秋田刈るかり庵の宿り匂ふまで咲ける秋萩みれどあかぬかも　同

萬八 秋田刈る假庵もいまだこぼたねば鴈がね寒し霜もおきぬがに　同

萬八 衣手にみしぶつくまで植ゑし田をひたをわれはへ守れるくゑし　同

萬八 さほ川の水をせきあげて植ゑし田をかるわさ飯(いひ)は獨りなるべし　中納言家持卿

○家集、雑歌中

萬十 橘のもりべの庵の門田わせかる時すぎぬうしとやすらむ　讀人しらず

山川守たもりのひだの心にて戀する鹿のこゑぞとめつる　同

○三百六十首中

わがまもるなかての稲も軒端うちて村々穂先いでにけらしも　好忠

○寶治二年百首

とほ山田むら〴〵ほさき出でにけり今やみかりの庵さすらむ　光俊朝臣

○七百首歌、秋田

水澁(みしぶ)つきうゑしわさ田の走り穂にいでや程なきよとこそはみれ　權僧正公朝

○家集
秋の田の假庵のいねのひづち原ながくもあらぬよを嘆くかな　太宰大貳高遠卿

○三百六十首中
きりはるゝ門田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕風　大納言經信卿

○西行上人おくりける歌返事中に
ねたる閒に露やおきつゝしをるらむひた打ちはへて守る山田を　好忠

○六帖題
なにとなく露ぞこぼるゝ秋の田にひた引きならす大原の里　寂蓮法師

○三百六十首中
新六二
足引の山田にかくるひたぶるにあなもの寂しあきの夕暮　衣笠內大臣

足引の山田にかゝるひたのをのたゞひとすぢに人ぞ戀しき　同

○建治元年老若五十首歌合
とほ山田いなばの風はほのかにて庵もるひたのさよ深き聲　參議雅經卿

○たなかみにてむかひの山田かるをみて
新古雜下
うき身には山田のをしね押しこめて世を只管に恨みつるかな　俊頼朝臣

○六帖題、山田
新六二
小山田の稻葉をこむるくゑ垣の荒れまくみればしかいりにけり　光俊朝臣

○正治二年七月當座三首歌合、門前稻化
山里の門田のいなば風こえて一色ならぬ波ぞ立ちける　後鳥羽院御製

○家百首、秋歌
たちさわぐほなみ續きにすゑ遠き山のすそ田をくだる秋風　民部卿爲家

○寶治二年百首、秋田
賤の男が聲打ちそふる小山田のひたのひゞきぞ夜たゞ寂しき　信實朝臣

○寬喜元年女御入內御屏風
たみのとの天つ空なる秋の日にほすやをしねの數も限らず　前中納言定家卿

○秋田
現存六
いなむしろしくや門田の秋風に民のみつぎを急ぐ比かな　中原師光朝臣

○車
現存六
秋の田をみればよろづのこの車いくその稻をつみわたすらむ　前中納言

○正治二年七月當座三百首歌合
夕暮はみ山おろしにわが宿の門田のいねの花ぞなみよる　後久我太政大臣

いろ〳〵に門田のいなほ吹きみだる風に驚くむらすゞめかな　民部卿範光

いつしかと外面の鳴子いそぎひき小田の稻穗のかをるなりけり　大納言通具卿

あづまのの岡生の稻穗いでざれば何を頼みとすぐるわがよぞ　民部卿爲家

六二一 秋風にあたる稻葉のくだけつゝもの思ふ頃の繁き比かな　讀人しらず

秋風のふけばかたよるいねのはのくだけて物を思ふ頃かな　同

をしねたつ山田は庵ぞ荒れにけりよはの時雨も共にもるかな　嚕西上人

六二一 そほづたつ山田のいほは今もなほ心深しなうき世はあれど　讀人しらず

いなふきの山田の庵に旅ねしてもるよは鴈の聲のみぞきく　西住法師

此の歌判者俊頼朝臣云所(右イ)歌五文字のひが事なりまもらむいれ事らいほにふくべからず又たびの心すくなしいほにいでて田まもらむはたひとやは申すべきと云々

秋の田にかやりびたつる賤のをがそほづとみゆる衣さほすか　讀人しらず

秋の田のかるほともなく耕(かへ)されて忍びもあへぬねにぞそぼつる　俊頼朝臣

此の歌判者俊頼朝臣云田はあきかへすかなと人に申すまゝ尤もしかるべし證歌を申すべけれども覺え侍らず但し涅槃經の名字功德品に譬如耕田秋耕爲勝此經如是諸經に勝といへる文をおもへばなどかあきかへ

○寬元三年結緣經百首

○秋田

○永久四年九月雲居寺後番歌合、秋田

○そほづ

○大治元年八月攝政左大臣家歌合　旅宿鴈

○天喜二年四月藏人所歌合、秋田

○大治元年八月攝政左大臣家歌合　戀

すとよまざらむと云々

○堀河院御時百首
みたやもり鳴子の綱にてかくなり晴れまもおかぬ霧の水上　仲實朝臣

○家集、雜歌中
六萬十 足引の山田の稲はひてずとも綱をはやはへもるとしらなむ　中納言家持卿

○秋歌中
家 綱はへてもりわたりつゝ我が宿のわさだ鴫がね今ぞ鳴くなる　貫之

○洞院かりいほ
六二 うちはへてもる綱をのみひく時は稲葉に露ぞたまらざりける　讀人しらず

○永久四年九月雲居寺後番歌合、秋田
てもすまにひたの掛繩打ちはへて下もる秋になりにけるかな　仲實朝臣

○千五百番歌合
濱下續四 いそのかみふるの早稲田に綱かへてひく人あらば物は思はじ　二條院讃岐

○題不知、古來歌合
風わたる稲葉かたより引くつなの長き幾夜か秋田もるらむ　義淳法師

○六百番歌合、秋山
山田もるすこが鳴子に風ふれてたゆむねぶりを驚かすかな　大藏卿有家

○建長七年顯朝卿家歌合、田家
を鹿なく山田をみればすこがもるとまで動かし秋風ぞふく　光俊朝臣

○千五百番歌合
いねがてに庵もるたごのかり枕よはにおくての露ぞひまなき　後京極攝政

わが門のわさ田かりねの草の庵に夢路うつろふ神なびの杜　慈鎭和尚

○建久二年文字をく二十首
秋の色の眼にみてるすまひかな門田のなるこ外山のもみぢ　前中納言定家卿

○千五百番歌合
鳴子ひくとばたの面の夕まぐれいろ〳〵にこそ風も見えけれ　小侍從

○建治四年内裏歌合
秋風にを田の假庵のかたよりになびくすゝはの露も色づく　大納言忠信卿

此歌判云かたよりにすゝはなびく事かりほのすがたにはかなはずや云

云

○寶治二年百首
露そむるわさ田のほぐみ打ち解けて假庵の牀にいやはねらるゝ　正三位知家卿

○六帖題
新六二
秋にあへる山田のほだちふく風になどて心のかたなびきなる　民部卿爲家

新六二
秋の田の假庵のほぐみ徒然につみあまるまで賑ひにけり　信實朝臣

新六二
浦風にはまだのをしねうち靡きはや刈りしほになりぞしにける　光俊朝臣

○秋田
現存六
浦風のかよふいなばに露おちて秋田さびしき住吉のきし　後九條内大臣

○仁安三年奈良歌合、判者俊成卿
初鴈のいねのほのかになく鹿をあはれとぞきく秋のを山田　寛敬法師

○正治二年百首
初鴈のをしねとりほし今ははや家ゐする程になれる山里　源師光

○三百六十首中
わが宿の門田のわせのひつぢ穂をみるにつけてぞ親は戀しき　好忠

異イ
○永久四年百首治田
十代田のわさ田がはてのひつぢ穂のほさら〳〵に秋とみゆらむ　仲實朝臣

谷深みそしろの田ゐにゐもりして稀にぞたてるひつぢほの稲　神祇伯顯仲卿

稲妻

○六百番歌合、稲妻
夕づくよかげろふ宵の雲間より光をかへててらす稲妻　中宮權大夫家房卿

はかなしやあれたる宿のうたゝねにいなづま通ふ手枕の露　後京極攝政

うばだまのかみをあらはす稲妻も光のほかははかなかりけり　隆信朝臣

すたきこしさはの螢は影きえてたえ〲宿る宵のいなづま　寂蓮法師

此の歌判者云右歌も優には見え侍るを螢を夏題なりとて秋はかげきゆとよみきらむ事やいかゞ彼の潘安仁が秋興賦にも熠燿のほたる階闥しけり蟋蟀のきり〲す軒屏になくといへり朗詠集の詩にも萬點水螢は秋草中とよみて侍るなりと云々

○百首歌中

山田もるすこが庵のうたゝねにいなづまわたる秋の夕暮　同

○永久四年百首、稲妻

かづらきや木陰にひかる稲妻を山伏のうつひがとこそみれ　源兼昌

○六帖題

新六一 たどり行く道のあしみのみゆばかりさすがに照らす宵の稲妻　衣笠内大臣

新六一 村雨の空うちなびく秋の田の雲のはづれに残るいなづま　信實朝臣

○康元二年毎月一首中

同 とほ山の峯たちのぼる雲間よりほのかにめぐる秋の稲妻　民部卿爲家

くもりなき月よにみえし稲妻はけさふる雨のしるしなりけり　同

稲負鳥

○屏風に

家 里遠み暮れなば野べに泊るべしいなおほせ鳥に宿やからまし　順

○十餘たまちけるにこざりければ

萬代 大和物語 さよふけて稲負鳥の鳴きけるを君が叩くと思ひけるかな　俊子

○百首中

秋の田の稲負鳥のこがれはもこの葉もよほす露や染むらむ　従二位家隆卿

○六帖題

新六一 露けさも己が涙か秋の田のいなおほせ鳥はなかずも有らなむ　民部卿爲家

この夕いなおほせ鳥も聲たてて秋うら悲し淺ぢふの庭　前中納言爲兼卿

新六二 同 はやはこべ刈田の面のこまのあしいなおほせ鳥の聲急ぐなり　信實朝臣

なにぞこは稲負鳥の名のみして刈りほす民ぞあしたゆくゞる　光俊朝臣

○九十九首番歌中

垣ほなる菊の茂みにかくろへていなおほせ鳥の聲のけぢかき　爲實卿

○建長八年百首歌合

わが門につくる山田のほにつきていなおほせ鳥の聲すだくなり　從二位行家卿

判者知家卿云ほにつきてと侍る詞いらなくすべもなしいなおほせどりた雀といふ事の侍るとかやたしかならぬ下説なりと云々

夫木和歌抄巻第十二　終

夫木和歌抄　巻第十三

秋部四

題　月　駒迎　霧　秋風　野分　秋雨
　　露　秋夕　秋夜　秋雑

月

○題不レ知

萬八
わたつ海のとよはた雲に入日さし今夜の月よすみあかくこそ　讀人しらず

○御集、月を

入日さすとよはた雲の景色にてこよひの月は空にしりにき　法性寺入道關白

○秋歌中

萬八(代敵)
待ちわびぬ尋ねてゆかむ秋のよの月の光のあふところまで　大江嘉言

○久安百首

しらま弓はりてかけたる三日月はほどなくみゆる高圓の山　前參議教長卿

○元永二年内大臣家歌合、月判者修理大夫

夕されやあまつ空なるしらま弓とみゆれば月の山のはにいる　藤原尹時

判者云しらま弓とよめれば月はきこえたるにとみゆとよめる如何この
心にては月ともしらざりけるにやと云々

○初秋月歌二首中

萬三
天の原ふりさけみればしらま弓はりてかけたるよみぢはよけむ　中納言家持

○詠月歌中
（萬七（九イ））玉だれのこすの間通りひとりゐてみるしるしなき夕月夜かな（かめ萬）
讀人しらず

○家集
（萬十二）夕づくよ曉やみのほのかにもみし人ゆゑに戀ひわたるかも
人丸

（萬十一）ゆふづくよ曉闇の朝（か萬）あけに我が身はなりぬ君（なれ萬）を思ひかね（に萬）
同

○家集、初秋月
秋たつと思ふに空もたゞならでわれて光をはげむ三日月
西行上人

○六帖題歌、月新
（新六一）あかざりし人のまゆねによそへても名殘ぞをしき三日月の影
正三位知家卿

○千五百番歌合
夕づくよかたぶく空は宵ながら雲のいづくに有明の月
前大納言忠良卿

○六帖題
（新六一）空はれていざよふ影をいそげどもまだいでがての山のはの月
信實朝臣

（同）くも霧のたなびき消ゆる秋風にいざよひのぼる山のはの月
光俊朝臣

○ゆふづくよ
（新六一）雲うすき空かとみれば夕づくよはれても影ぞおぼろなりける
信實朝臣

○千五百番歌合
空さえてすむべき月を山のはに星の光のかねてみすらむ
寂蓮法師

○建久七年内大臣家歌合、未出山月
秋のそら月はこよひとはらふなるひかりさきだつ峯の松風
前中納言定家卿

○嘉祿二年百首
いでぬなりまだくれやらぬ白雲におなじ色なる山のはの月
爲家卿

○嘉元々年百首、月
くれぬより月のすがたはあらはれて光ばかりぞ空にまたるゝ
參議爲相卿

宵のまの光にも似ぬ哀れかな人さだまりてむかふ月影
同

○詠（徑イ）月建部卿親王家（之イ）々千首
めぐるとも裾野に道をふみかへて月には牀しまきの下かげ
同

○月歌中
月になる秋の心のいづくより我さへしらぬ涙おつらむ
前中納言爲相卿

○六帖題
○花月百首
○治承二年右大臣家百首御歌合
○最勝四天王院名所御障子
○家集
○家集、月前松
○題不知、古來歌合
○寛喜二年百首、山月
○寶治三年朗詠百首、寄山幽月猶[illegible]影
○題しらず
○詠月歌
○隨月照山明
○月宮有路無内入
○月照何心一點珠
○九月十三夜月不[illegible]良

新六一 みぎを下おもてを西とさだめずば其方にむきて月を待たまし　光俊朝臣
かぞふれば秋きてのちの月の色におぼめかしくも絞る袖かな　定家卿
爪木とるとほ山びとはかへるなり里までおくれ秋の三日月　順徳院御製
月詣上 秋風にこのまの月はもりそめてひかりを結ぶ袖の白玉　後京極攝政
さらしなや峯吹きおろす秋風のきりにしをれていづる月影　後久我太政大臣
萬代 あまの河やそのうらわに雲消えて空すみわたる月をみるかな　俊惠法師
たつた山月はこのまにいでそめて松の葉くゝるあまの川浪　土御門院小宰相
ふなばりのなづみの上の山をいでゝ西をさしける月の影みゆ　中納言家持卿
いでぬるか松影しらむ夕ぐれの山よりおくの山のはの月　爲家卿
山の端はいづるけしきに匂へどもまた影かくす秋の夜の月　同
萬四 大伴のみつとはいはじ赤根さしてれる月夜にたゞあへりとも　賀茂女王
萬六 山のはのさゝらえをとこ天の原とわたる光見えてしよしも　坂上郎女
ふたつとも見えぬを月の山のはにてり渡りつゝあくる空かな　千里
てる月の都に道はありといへど尋ねて行かむ方ぞしられぬ　同
てる月は波の心にてらされてひとつ玉とぞ見えわたりける　同
續千秋下 久方の空にかゝれる秋の月いづれの里もかゞみとぞみる　大納言經信卿

○百首歌合、古來歌合
秋の空に高く懸れるよるの月このよの物と見えずもあるかな　權大納言教家卿

○建保四年百首
つゆ分けば袖こそぬれめ久方のつき影淸しいざかはらより　家長朝臣

○西へ行く月をみて
續拾遺釋敎
うらやましいかなる空の月なれば心のまゝに西へゆくらむ　僧都源信

○月歌十首、そのかみことに
夜もすがらながめぞあかす月影を秋はところも忘るばかりに　權大納言實家卿

○三十六人歌合
玉葉雜五
思ふことなくてながめし昔だに月に心の殘りやはせし　後德大寺左大臣

○久安百首
くれの秋月は今夜のせきなれば心とゞめてたれか見ざらむ　實淸朝臣

○同
あまの戸をのどかにわたれ月の舟こよひは雲の浪なかりけり　同

○花月百首御歌
憂世とはいつもさこそは思へども心のたけを月にしりぬる　後京極攝政ィ

○同
さととよむ音もしづかになりはてて小夜ふけ方にすめる月影　同

○同
春夏の空にあはれをのこしける月をあきにて今宵みるかな　同

○御集、月御歌中
續古秋上
かきくもる心いとふな夜半の月なにゆゑおつる秋の涙ぞ　同

○同
あは雪を春のひかりにみしよりも雲間の月の庭のむらぎえ　同

○家撰歌合、山月
あしびきの山のたかねは久方の月のみやこの麓なりけり　同

○八月十五夜月前松風
秋の夜の光も聲もひとつにて月のかつらに松風ぞふく　同

○建長八年百首歌
みればまづ涙きりたつ秋の夜に我こそやつせ山のはの月　衣笠内大臣

○正治六年一首御歌
續後秋下
からさきやにほてる沖に雲なきて月のこほりに秋風ぞふく　後京極攝政

○寶治二年百首
にほてると名におふ浦の秋なれば月になきたるをちのさゞ波　後九條内大臣

遠ざかる汀も見えずにほてるや月のこほりか秋のうらなみ　爲家卿

さゞ波やこほりにけりな秋の夜の月のにほてるしがの浦風　爲氏卿

○御集
夜舟こぐせとの汐干をよそにみて月にぞこゆるさやかたの山　中務卿御子

○建久七年秋大將家にて韻一字三十一首
つり舟のうかぶ浪路に月おちて人と秋とのわかれをぞ思ふ　前中納言定家卿

○同年百首
あらし吹く月のあるじはわれひとり花こそ宿と人も尋ぬれ　同

いざさらばたづねのぼりて關すゑむたゞこの上ぞ月のいる峯　同

○秋歌中一字百首
はじめなき月の行方に身をかへてさらば心のはてをしらばや　同

○式抄中月歌中
いく里か雲に心のまどふらむうかるとかこつ月をながめて　同

星もなし雲間にしらぬ雨の夜になほまたるゝは山のはの月　同

○花月一首御歌
なか〳〵に月のくまなき秋のよはながめにうかぶ五月雨の空　後京極攝政

○御集中
山の端は天の河原のしまなれや月の御舟もこぎかくれつゝ　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
くもの波あとなき方の月の舟かつらが陰にこぎわたるみゆ　前大納言顯朝卿

○仁安三年好幸歌合、月、判者俊成卿
かつらをの月の舟漕ぐあまの海を秋はあかしの浦といはなむ　聖信法師

○屏風に八月十五夜に家のいけ蓮花ある所
はちす葉も紅葉もしける池の面はそこまでみよとてらす月影　順

○三條右大臣家屏風
久方の月影みればなにはがた鹽もたかくぞなりぬべらなる　貫之

○八月十五夜

難波がた鹽さしくれば山のはにいづる月さへみちにけるかな　同

○六帖題

新六一
あまの原空ゆく月のもちしほのみちにけらしな難波江の浦　衣笠内大臣

新六一
我がたのむ西のあるじに契りける今日の今宵ぞ月のさやけき　光俊朝臣

同
過ぎかはるよひ曉のかたわれをひとつにすめる月の影かな　信實朝臣

○貞永元年八月十五夜名所歌合

男山秋のなかばの法の庭月はこの夜のひかりのみかは　有長朝臣

○同歌中、古來歌合

をとこ山秋のなかばのみゆきをや雲にもしりて月はさやけし　法師行清

現存六
名に高き秋のなかばの一夜かはことわりしるくすめる月影　衣笠内大臣

○文永二年歌合

くもりなき今宵は秋のなとり川月にや見えむせゞのうもれ木　前大納言資季卿

○家集、百首

もろこしも秋のなかばになりぬとて今宵や月に衣うつらむ　從二位家隆卿

○家集、秋歌中

名に高きふたよの外も秋はたゞいつもみがける月の色かな　建禮門院右京大夫

○五行歌中

拾遺員外上中
秋の夜の影かたぶきぬもち月のとまりは浦のもなかなりけり　定家卿

○家集、月蝕を題にて歌よみけるに

いむといひて影に當らぬ今夜しもわれて月みる名や立ちぬらむ　西行上人

○千五百番歌合

なぐさまぬ心に月のめぐりきて昔にかへるをばすての山　嘉陽門院越前

○承久元年詩合、山河秋月

しるべせよ吉野のおくの秋の月たれかはこゝを又たづぬべき　後久我太政大臣

○深山曉月

續後拾秋下
花をのみをしみなれたるみよし野のこずゑにおつる有明の月　大藏卿有家

○月三十番歌合

ながめこし心は花のなごりにて月に春あるみよし野の山　慈鎭和尙

○花月百首
月影は秋よりおくの霜おきて木ぶかくみゆる山のときは木　定家卿

○光台院入道二品親王家五十番、野径月
むさしのは露おくほどの遠ければ月を衣にきぬ人ぞなき　同

○東へ下りけるに佐明の月さへ笠きたりといふ所にて（をききてイ）
十六夜日記
旅人のおなじみちにやいでぬらむ笠うちきたる有明の月　安嘉門院四條

○[illegible]院入道二品親王家五十首
あれ間もる月にまかせてすむ宿はねやのうちより明くる東雲　前大納言隆房卿

○百首歌
つくづくと眺むる月に浮雲のさわたるほどに夜はなりにけり　殷富門院大輔

○花月百首
とこのうへの光に月の結びきてやかたさえゆく秋の手枕　定家卿

○文治六年女御入内屏風
池水に雲居の空をうつしもて手にとるばかり月をみるかな　正三位

○寛元三年懸想百首
ふけにけり一人ねまちの月いでてむなしき山の峯の松風　為實卿

○御集、月あかきよ
我が宿の軒のうらいたかず見えてくまなくてらす秋のよの月　花山院御製

○家集
小倉山した草までもねをとめてさやかにみゆる秋のよのつき　太宰大弐高遠卿

○題不知
六五
君こふるしるべうらぶれ我がをればば秋風ふきて月かたぶきぬ　人丸

萬十一
窓ごしに月は照らして足曳のあらし吹く夜は君をしぞ思ふ　讀人しらず

新六一
今夜こそ月もみちけれしほの山さしでの磯に雲もまがはず　衣笠内大臣

新六一
有明の月の出しほのあまつ風海山かけて吹きはじむなり　信實朝臣

○海上月歌　花抄（苑イ）
月影にしほみちぬればなにはえをうたひて出づるあまのつり舟　登蓮法師

○保延元年家成卿家歌合
波のうへにいねの蜑人あけぬとておどろくばかりすめる月影　為忠朝臣

○家集、月歌中
玉秋下
月さゆる明石のせとに風ふけばこほりのうへにたゝむ白浪　西行上人

池にすむ月にかゝれるうき雲ははらひ殘せるみさびなりけり　同

○千五百番歌合
わたつ海の秋なき波のはなになほ霜おくものは夜半の月影　慈鎭和尚

○六百番歌合、廣澤池眺望
心にはみぬ昔こそうかびけれ月にながむるひろさはの池　後京極攝政

○正治二年百首
またやみむ明石のせとのうきまくら波間の月の明方のかげ　前大納言忠良卿

○月歌中
秋は今宵浦は明石の波のうへにかかる月をばいつかながめし　參議雅經卿

○家集
吹きはらふあなしの風に雲はれてなごのとわたる有明の月　俊成卿

○同集
明がたはしほひも寂しあまのすむいほの湊の秋のよの月　後鳥羽院御製

○題不レ知
明くるとやたづもなくらむいもがしまかたみの浦に殘る月影　西園寺入道太政大臣

照る月にみほのしるしの現はれてやすらひもせぬわだの入舟　源師光

○家集
ときしあれば西ふく風に雲はれて月をむかふるあはぢ島山　從二位家隆卿

○北野社百首歌
白妙の浪もてゆへるこのまより月をかざせる淡路しまやま　後鳥羽院

○建永三年和歌所歌合、海邊月
月宿るもしほの袖を人とはばかげをこたへよすまの浦浪　後久我太政大臣

○百首歌
月かげを袖にかけてもみつるかなすまのうきねの有明の浪　慈鎭和尚

○文治六年五社百首
たとふべき方こそなけれ玉津島てらしかはせるすみの江の月　俊成卿

○家集
伊勢集
磯にいでて漁りする火の消えぬれば吹飯(ふけひ)の浦を月に行くかな　伊勢

小町集
あまつ風雲ふきはらへ久方の月のかくるゝ道まよふべく　同

○建保三年名所百首
新勅神祇
榊とりかけしみむろのます鏡その山のはと月もくもらず　家隆卿

ながめやるなみの千里の雲居まで月に吹飯（ふけひ）の秋の浦風　正三位家衡卿

○百首御歌中
きよみがた浪の千里に雲消えていはしく袖によする月かげ　後京極攝政

○建長四年毎日一首中、高濱月
いくとせの雪とかいはむ白妙に名も高はまの秋の夜の月　民部卿爲家

山家集上
くまもなき月のおもてにとぶ鴈のかげを雲かと思ひけるかな　西行上人

なにはがた月の光に浦さえて波のおもてにこほりをぞしく　同

玉秋下
月すめば谷にぞ雲はしづみける峯ふきはらふ風にしかれて　同

山家集下
光をば曇らぬ月ぞみがきけるいな葉にかゝるあまるこの玉（りイあさひこの玉（山家））　同

同
みをよどむあまの川ぎし浪立ちて月をばみるやさゞ浪のかみ　同

憂世とて月すますなる事もあらばいかにかすべきあめのまし人（したイ）　同

こさ吹かば曇りもぞするみちのくのえぞにはみせじ秋のよの月　同

○家集、朝中朝臣家十首歌、月（首伴イ）
ま袖もてのごへる空の清き上にみがける月をすませてぞみる　後頼朝臣

○月歌中
ふく風にあたりの雲をはらはせて一人もあゆむ夜半の月かな　同

○貞元三年八月三條右大臣家歌合
水上秋月
君にこそとはまほしけれちゞの秋の水と月との同じ心を　菅原輔昭

○長永三年九月顯輔卿家歌合、月
空はれてきれる雲だになきよはに月のかつらの影のみぞする　藤原爲眞

○老後月をみて

續古雜下

數ふれば年こそ痛く老いにけれ夜をへてみつる月のつもりに　道命法師

○法性寺入道前關白家歌合

くもりなき鏡にむかふ心ちして老の後こそ月はまばゆき　顯仲朝臣

○嘉應二年住吉社歌合、社頭月

住よしの松のこずゑをみわたせば今宵ぞかくる月のしらゆふ　盛方朝臣

住吉のあまくだります松の上に空よりかくる月のしらゆふ　賀茂政平

○久安五年七月山路歌合、月

いかばかり今夜の月にこりぬらむさはの螢の心たかさは　隆緣法師

此の歌判者清輔朝臣云右歌本文侍る事なればなかしと云々

○承安元年八月全玄法印房歌合、月

池水の月おくらずばいかにして夜ふかき山をひとり過ぎまし　法眼全眞

此の歌判者清輔朝臣云文集に侍るかや鳳凰池上月送レ我過ニ商山一と申す心なればひがごとにはあられどもかれはききつきてきこゆこのいけ水の月おくらすはとあるこそうちきくもたがひて山のはの月などいはまほしけれと云々

○永萬二年重家歌合、月

秋ごとに今夜ばかりの影をみばめづらしげなき光ならまし　源通能朝臣

此の歌判者俊成卿云こよひの月を賞するこゝろはおなじくも侍りにの句に形を見ばといひてをはりの影に光ならましといへるかけと光と同じ事を二所におかれたるにこそと云々

○永久四年八月雲居寺歌合、

雲のゐる麓にこよひきてみれば名には月こそ隱れざりけれ　顯仲朝臣

此の歌判者基俊云右雲のゐるふもとなどいへるは山の名にあらで寺の名とこそ聞え侍れなほ山とみえてふもとといひ侍らばや名には月こそかくれざりけれとよめるは貫之がたみのの島を今日行かばと云ふ歌におなじやうにて侍るかな歌合の歌にはかかる事はよまれば左のかちとこそ侍れと云々

○保延元年八月家成卿家歌合、月

つねよりも今夜の影の淺きかな月のかつらの花ざかりかも　　權中納言經具卿

此の歌判者神祇伯顯仲卿云右の歌に今宵の影いかゞ侍らむ題をこめて末にあるべき事を先づあらはせるないざきき難しとぞきき侍る又月のかつらの花ざかりかもとよまれたる歌には月のかつらをば秋は紅葉とこそよみて侍るめれ古歌云「春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花やさくらむ」とよめるは春の花はさくべきにやとぞ給ふれども秋月の詩に添二桂花光一とつくりたればひがごとにはあるまじきにやと云云

○家集、月歌中

秋風に夜やふけぬらむおほ空の月のかつらのなびく影みゆ　　爲頼朝臣

○家集

さてもなほをらではやまじ久方の月のかつらの花とみるとも　　定家卿

○大輔長家卿にて月を

ますらをのしがきの影もあらはれてしのぶ隈なき秋のよの月　　源仲正

○常磐井百首、閑中月
はし近くあさまに閨をしつらひて空行く月をいれぬよぞなき　同

○安元元年閏九月歌合、窓枕月
いもこふとまたはし近きうたゝねの枕のそばに宿る月かな　從三位賴政卿
判者云枕のそばいかゞとてまけにきと云々

○建長八年百首歌合
月の夜の聲もほそめに窓あけて心をやれるうたながめかな　信實朝臣

○建久二年百首中
雲もなき衞士のたく火の影みえて月になれたるあきの宮人　定家卿

○承久元年日吉社歌合
おほかたのあらしも雲もすみはてて空の中なる秋のよの月　同

曉はかからむ山の月をみよ雲もとまらず秋風のにし　同

○後京極攝政家時歌合、月明風又冷
荻の露を野邊ゆく月にみがかせておきに涼しき山おろしの風　慈鎭和尚

○和歌所歌合、海邊月
新千秋下
もろこしの山人今はをしむらむまつらがおきの有明の月　後鳥羽院御製

○家集、月歌中
天の原ひかりさしそふかさゝぎの鏡とみゆる秋のよの月　爲家卿

○正應三年內裏御會、曉月
里とほきこずゑに影はかたぶきて霧にかすめる有明の月　前大納言爲世卿

○百首歌
たつた山さらでは春の色もなしうす霧かすむ秋のよのつき　順德院御製

みだれあしの葉ずゑの月のさゆるよは忍びにすれる鶴のけ衣　同

いへ〳〵の思ひや人はかはるらむいづくも秋の月は見るとも　同

○文永七年毎日一首中
宿ごとにひかりあらそふ秋の月ひとり淚にしづみてぞみる　爲家卿

○千五百番歌合
名ごりなく峯のあらしに月おちて一人なみだに流れてぞみる　寂蓮法師

はれくもる定めなき夜の月影にくめぢのかみの心いかにぞ　野宮左大臣

あなし吹くなだのしほひに雲消えて波にきはまる月の影かな　正三位季經卿

つねよりも月に心のすむ夜かなかくてや人の雲にいりけむ　小侍從

本ノマヽ

○寳治十二月歌合、海邊月

いざ今宵なだの蜑の子しるべせよ鹽路の月をこぎ出でてみむ　信實朝臣

○內裏御會、山中秋月

かこ山の峯のまさかきした葉まで月のかけたる秋のしらゆふ　爲家卿

○建仁元年十首歌合、山家秋月、

正治二年百首

影淸き月よりおつる袖の雨のくもれば出づる秋の山のは　慈鎭和尙

○建仁元年十二月歌合、山家秋月

山のはを軒のこずゑに住みなして窓よりいづる有明の月　寂蓮法師

○正治二年百首

軒ちかき峯の雲をながむれば窓のうちよりいづる月影　前大納言忠良卿

○洞院攝政家百首

峯の松はらふあらしの木の間よりかげさだまらぬ山のはの月　大納言經通卿

山里の木の間や風になびくらむ影さだまらぬにはの月かな　從三位行能卿

○花歌合初判

竹の葉はふるきまがきにおとづれて霧ふきはらふ窓の月影　如願法師

○秋歌中

老らくのともにふけぬと西へ行く心ありとや月はしるらむ　權律師隆寬

○同文歌中

かすかなる光は西にかたぶきて老いたる月の影ぞすくなき　他阿上人

○永文七年秋十首歌合

哀れなる淚のほどはありぬらむおいの時せよ秋のよの月　後九條內大臣

○光明峯寺入道攝政家百首家歌

秋の月たまきはるよのなゝそぢにあまりて物は今ぞかなしき　定家卿

○建長五年毎日一首中

水上や月のかつらに通ふらむかけさしのぼるよどの河舟　爲家卿

○文永七年毎日一首中
○家集、船中月
○月歌中
○正治二年百首
○家集、月歌中　秀イ
○建久八年了能卿月歌
○文永十一年毎日一首中、月歌
○同年毎日一首中
○文治六年五社百首
○式部卿親王家十五夜御會
○家集
○家集
○御集
○六帖題

月の行く道こそ秋はかはるらめおなじ空ともみえぬかげかな　同
さしかへる雫も袖のかげなれば月になれたるうぢの川をさ　同
くもりなき神がき山の月影になほゆくすゑの光をぞしる　同
久方の月のかつらやまがふらむみどりにすめる秋の空かな　家隆卿
秋風のふけ行くまゝに久方の月のみやびと誰をまつらむ　同
拾遺愚草下
秋とゝへば月のたゞぢをふく風の雲をばすてのひさかたの山　定家卿
同上
露さえて月かげ白き風のうちにおのが秋あるかねの音かな　同
月を思ふ涙や雨となりぬらむ秋の今夜ぞくもりはてぬる　爲家卿
面かげにおもひぞいづる少女子が月ふみのぼる雲の通ひ路　同
月清み千里のほかに雲つきてみやこのかたに衣うつなり　俊成卿
雲なくていつふりにけむ秋の夜の月の名うづむ庭の白露　前參議雅有卿
なが月の十日あまりの三日のはら川なみ白くすめる月かな　從二位家隆卿
續後拾神祇
曇りなきますみの月や天にますとよ岡ひめの鏡なるらむ　清輔朝臣
久方のあめのおしでやこれならむ秋のしるしとみゆる月かげ　同
さるさはの玉もの水に月さえていけに昔の影ぞのこれる　後京極攝政
新六六
秋の夜の月をみにくる人だにもねぬ名はたてぬひろさはの池　光俊朝臣

○月歌とて
○正應三年内裏月十五首
○元久元年五辻殿御會、野亭月
○文治五年に百首
○九月十三夜内裏御會
○建保三年名所百首
○家集新撰
○建保三年名所百首
○寶治二年百首、野月
○文治六年五社百首
○喜多院入道二品親王家五十首
○千五百番歌合
○六百番歌合

軒ばより影もる月の西にはやかたぶくやらむ窓近くなる　他阿上人
見るまゝにふけ行くひかり雲すみて星はまれなる秋の夜の月　爲道朝臣
ふけ行けば千里の外にしづまりて月にすみぬる夜の景色かな　前中納言爲兼卿
御吉野はゆきふる峯の近ければ秋よりうづむ月のした草　定家卿
月清み四方のおほ空くも消えて千里の秋をうづむ白雪　同
山風に月のさごろもはらへどもおぼえぬ雪は木の葉こそふれ　同
白妙の月の衣手かたしきてねぬよあまたの宇治のはし姫　從三位行能卿
山かぜに雲のしがらみよわからじ月さえおつる布引の瀧　寂蓮法師
ひかりさす里をたづねてすむ月のかげをみがける玉川の浪　俊成卿(女イ)
秋風のすゑ吹きなびくすゝき野のほむけにのこる月の影かな　從二位行家卿
旅の空のこりの月にひと〳〵も今やこゆらむあふさかの關　俊成卿
いづかたへ思ひやらまし秋の夜の空にもあまる月の光を　前大納言隆房卿
秋の夜の月すむ野べにふる雪はなびく風にもこぼれざりけり　（殷富門院大輔）前大納言兼季卿
秋の月ひるとは見えて空さむし雪と思へばにはのしら露　俊成卿
今夜さへたどや歸らむ月ゆゑにともをたづねし人ならなくに　正三位經家卿

此の歌判云戴安道常の事たるべしと云々

玉となり鏡となりし人のよはいかばかりにも月もすみけむ　後九條内大臣

おもひやる心の道や近からむやがて千里の月をみるかな　法橋顯昭

玉秋下
海のはて空のかぎりも秋のよは月の光のうちにぞありける　従二位家隆卿

池水にくまなき月をうつしみてこの玉をもてあそびつるかな　藤原尹嗣

いづこにもさやけかるらむ秋の夜の月にあやなく人を待つかな　元祐法師

月をみるほかにもさこそ厭ふらめ雲たゞこゝの空にたゞよへ　西行上人

つれなくて涙おとさぬ人もあらじ心みがほにすめる月かな　同

草むすぶ秋のかりねのはじめには月こそかへす小夜の手枕　第三御子

秋なればとてこそぬらす袖のうへものや思ふと月はとひけり　後京極攝政

風秋中
秋はたゞ荻の葉すぐる風の音に夜ふかくいづる山のはの月　後久我太政大臣

秋草の瀧をうけたる岩がねにこぼれてかゝる月をみるかな　後九條内大臣

秋風の露ふきとめぬ庭草にむらさめふりて月ぞのこれる　衣笠内大臣

聲ばかり木の葉の雨はふるさとの庭もまがきも月のはつ霜　定家卿

たまぼこの道もさりあへぬ春の花それかとまがふ山の月影　同

そめてける月の桂のすゑ葉までうつろふころの野邊の秋風　同

木のもとに月も光をやはらげて神さびわたる峯のまつ風　慈鎭和尚

○弘安元年百首
○喜多院入道二品親王家五十首
○四季百首、月
○承安五年七月右大臣家歌合
○永久三年五月太神宮社歌合、月
○家集
○建長八年百首歌合
○千五百番歌合
○弘安元年百首
○久集百首（文安カ）
○九月十三夜内裏歌會、山海月
○後京極攝政家五百歌、秋色
○霧月百首（花イ）

峯にたつ松のあなたになりにけり入りもいさよふ山のはの月　家隆卿
○家集

紅葉ちるきよたき川にふな出して名に流れたる月をこそみれ　俊頼朝臣

此の歌は九月十三夜大井にまかりて清瀧川のわたりまでまかりてかへさに藤辨のうめづにまかりてあきらかなる月をもてあそぶといへることを人々よみけるによめりと云々

なが月の月の有明のけしきをばおくのえびすも哀れとやみむ　上西門院兵衛
○久安百首

秋ふかみくもりなき夜の大空に誰かゝげたる鏡なるらむ　花山院御製
○御集、九月ばかり月あかきよ

駒迎

なくなるはあふ坂山のくつは蟲駒むかへする人やきくとて　權中納言師時卿
○堀川院御時百首、駒迎

ひきわたすせたのながはし空晴れてくまなくみゆる望月の駒　修理大夫顯季卿

關の戸にをばなあしげの見ゆるかなほさかの駒をひくにやあるる　隆源法師

ゆふ霧のたち野の駒をひくほどはさやかに見えず關の杉立ち　俊成卿
○文治六年五社百首

身につもる年はくれねどあふ坂におくりむかふる望月の駒　爲家卿
○文應元年七社百首

はしりゐの懸樋のきりは棚びきてのどかにすぐる望月の駒　俊頼朝臣
○家集

あふさかにけふくる雲の上人は月にのりてぞ駒をむかふる　慈鎭和尚
○賀茂社百首

○久安百首、駒迎の心を
てる月はつもれる雪のこゝちして玉かとみゆるきり原の駒　前大納言隆季卿

逢坂の關のずき村きりこめて立つとも見えぬ夕かげのこま　待賢門院堀川

○永久二年三井寺歌合、駒迎
望月の駒のつなすゑ手をはなちたなびく雲を任せてぞみむ　觀意法師

あふさかの神の手向けに影をだにしみづにとめよ望月のこま　還譽法師

○文應元年七社百首
信濃路やいく山川をへだてきぬけふたなびけるきりはらの駒　民部卿爲家

○百首、夜半駒迎
あふ坂のやまのはわけていりぬれど影かたぶかぬ望月の駒　俊蓮法師

足曳の山ぢをとくやこえぬらむ日たかくみゆるもち月の駒　兼盛

○弘安三年熊野歌合、百首
あふさかにむかふる駒をひきわけて使（便イ）にこゆる雲の上人　安嘉門院四條

○同二年
くもりなき月もなかばの秋ごとに影をならぶるひきわけの駒　同

○百首御歌
もち月の秋の光をさそひきて雲居にみゆるひきわけの駒　土御門院御製

○六帖題
新六一 名にたかき木曾のかけはしひきわたし雲居に見ゆる望月の駒　爲家卿

○八月十五夜の心を
ひきわくる聲ぞいばゆる望月のみまきのはらや戀しかるらむ　俊頼朝臣

○三十首歌中
あふさかや山たちいづるもち月の駒ふきおくる夜半の關風　家長朝臣

○六帖題
新六一 逢坂の關路につゞく駒のあしも明日のひき分く數やみゆらむ　信實朝臣

○家集、駒迎
むさし野の駒むかへにや關山のかひうちこえて今朝はきつらむ　順

○三百六十首中
みちのべのあはたの山の秋ぎりの立野の駒も近づきぬらし　好忠

風ごしの峯をはるかにひくときは雲居にみゆるもち月の駒　中原頼行

霧

○家集
秋くればかふかの山にたつ霧をうみとぞみつる波たたなくに　人丸

○題不知
萬九 朝霧にぬれにし衣ほさずしてひとりや君が山路こゆらむ　讀人しらず

○程へて有りける人によみける
こゝろみに我こ（とカ）はめやはおともせでふる秋霧にぬるゝ袖かな　謙德公

○返し
たつやともなにかはみけむ秋霧のふりはてにたる人の心を　讀人しらず

○本院左大臣家前栽合、山橋
朝ごとにきりはふれども足曳の山たちばなの色もかはらず　同

○題不レ知
六一 こゝろみにわれとはめやは秋霧の音もせでふる物にぞありける　同

○六帖題、霧
新六 とふまでの宿をへだてて夕霧のおともせでのみふる日數かな　正三位知家卿

○寛喜元年女御入内屏風
通ひくるみちの朝霧ふりぬればなほめづらしき初鴈の聲　同

○百首御歌
山川もる心にはれぬ朝ぎりのいな葉の風にむすぼほれ行く　慈鎭和尚

○霧中紅葉
錦はる秋のこずゑをみせぬかなへだつる霧の闇をつくりて　西行上人

○三百六十首中
おほひえやをひえの山も秋くればとほめも見えず霧の籬に　好忠

○堀川院御時百首
川ぎりのみやこのたつみ深ければそことも見えず宇治の山本　前中納言匡房卿

○百首歌中
ひとりねの夜の衣は肌寒しさほの川ぎりたちやしぬらむ　惠慶法師

○たなかみにて
とへかしなきり間をわけてかみ山の木しげき谷の下の朽葉を　後頼朝臣

野邊の色はみな薄ずみになりにけりしばしとみつる夕霧の空　隆信朝臣（隆源法師イ）

○御集
春こそは曙ごとにながめせしか又このごろの薄霧のそら　後京極攝政

○二夜百首御歌
たが宿に深きあはれをしりぬらむ千里おなじき里（きりイ）のうちにて　同

○正治二年百首
もみぢする秋の朝霧たつた山夜半にそめけむ色なかくしそ　慈鎮和尚

朝ぎりのそことしるしはなけれども薄ずみわたる三輪の杉村　民部卿範光

○千五百番歌合
たづねても誰かはとはむ三輪の山きりのまがきに杉たてる門　參議雅經卿

○建仁三年老若五十番歌合
たをやめの袖か紅葉かあすか風いたづらにふく霧のをち方　定家卿

○或抄中
峯の雲ふもとのきりの色いづれそらもこゝろも秋の松風　同

○四天王院名所御障子
あじろぎや波のきり間に袖みえてやそ宇治人は今かとふらむ　同

○堀川院御時
あふさかの關の杉間をひくなればこや望月の影ふちのこま　仲實朝臣

○祐子内親王家歌合
あふ坂の關よりこゆる秋霧はせたの橋にやたちわたるらむ　讀人しらず

○正治二年百首
あさぢ原蟲のねまでも故鄕のしぐれにのこるゆふぎりの空　寂蓮法師

○寶治二年百首
關こゆるみちたど〳〵し白河の山邊をかくすあまつきりかも　前中納言定嗣卿

○爲家卿百首
峯の雲かさねて白き夕ぎりにかへるね山のとりのひところ　家長朝臣

○建保三年名所百首
すまの浦に秋やく海士の初鹽のけぶりぞきりの色をそめける　家隆卿

夕霧に明石のとなみこぐ舟のほの〴〵きゆるあとの白なみ　僧正行意

はれ行くかまきの島風いろ見えてやそうぢ人の袖の朝霧　正二位忠定卿

○秋歌中
たまもかる野島がさきにきりこめて夕波千鳥こゑのみぞする　源師光

○舟
現存六
なにはがた浦の朝ぎりはれもせでよるほどみえぬあみの浮舟　在長朝臣

萬代
はる〴〵とよさのふけひの朝霧にあらはれわたる天の橋立　僧正行意

○千五百番歌合
磯近きあまのとやまの夕ぐれに霧のまがきをあらふ白浪　二條院讃岐

○建永元年歌合、霧中
くればまたいづくに宿をかりの鳴く峯にわかるゝ袖の秋ぎり　後久我太政大臣

○建長八年毎日百首中
入海のみなとの霧ぞはれやらぬ今日は光になりやしぬらむ　爲家卿

○同八年百首歌合
あさ日さす方のむら霧はれやらで山つく〴〵にみゆる秋かな　光俊朝臣

○毎日一首中
ふりすさむ雨のなごりの山風にむら〳〵すぐる秋の朝霧　爲家卿

よひのあめ名ごりのきりの朝立ちに我がかり衣しをれてぞ行く

○久安百首、霧を
つぶらえのせなのかすみもさりきえて霧たちわたる秋の夕暮　前大納言隆季卿

○家集、秋歌中
くれにけりまたこの秋の花薄ほのめくきりに霜結ぶまで　定家卿

○家集
川霧の煙と見えてたつなべに浪わきかへるむろのやしまに　俊頼朝臣

この歌はたなかみにて舟にのりてやしま（ろイ）といふ所にまかりたりけろに
きりたちこめていぶせかりければよめりと云々

○同

千鳥なくあまの川原にたつ霧はくもとぞみゆる秋の夕ぐれ

此の歌は河内守かれくにかの國に面白き所有りと申し侍りければこれまかり侍りけるに天河わたりて業平朝臣七夕つめにとよめる所なりとて舟などとゞめて川のほとりにてあそび侍りけるにかはらけなどとりおのおの歌よみけるによめりと云々

○是貞親王家歌合

はま千鳥秋にしなれば朝霧につままよはしてなかぬ日ぞなき　忠岑

○きり

六一　萬二
ゆふぎりに衣はぬれて草まくら旅にあるかもあはぬ君ゆゑ　讀人しらず

秋の霧山を千草に染めたればもみぢたがはぬ錦とぞみる　同

萬十五
あさつゆにものすそひぢて夕霧に衣手ぬれてさきくしもあるらむごとく　同

○六帖題不レ知

雨ならば宿もとるべき道のべの霧こそいたく袖ぬらしけれ　中務のみこ

拾遺員外上
こりはつる刈田のおものいなつまし鳴たつくれのうす霧の宿　定家卿

秋風

○柿本影供百首御歌

ゆふさればみどりの苔に鳥おちてしづかになりぬ園の秋風　鎌倉中務のみこ

○貞應三年百首

風わたるまがきの草の下折れにうづもれはてぬ松蟲のこゑ　爲家卿

○弘元二年百首
ゆふされば草の葉むすぶ秋風になほ吹きのこす野邊のうす霧　入道前太政大臣

○康元々年毎日一首中
深山木の下葉かつちるあきかぜにまたおとづれぬ初鴈の聲　爲家卿

○水無瀨殿秋十首歌合
あさぢふの小野のしの原うちなびきをちかた人に秋風ぞふく　定家卿

○建久元年百首、秋歌
木の葉ふく風の心になびき來て枕にかはるひぐらしのこゑ　同

○誠抄中
つれ〴〵と山ぢ露けき秋風は日影ひとへにかよふ春かな　同

○文集百首閑居の秋中
はし鷹を手ならすころの風立ちて秋の扇ぞとほざかり行く　同

○十題百首御歌
秋の夜に荻うちそよぐ風の音に花ありとてもいとはざらまし　後京極攝政

○四洞院十首御歌
あき風のむらさきくだく草まくら時うしなへる袖ぞ露けき　同

○正治二年百首
鳴きわたる雲居の鴈も心せよこぬ人たのむ秋の日(ニカ)のころ　寂蓮法師

○建長三年九月十三夜十首歌合、山家秋風
いまよりや蟲の音さそふ山風の音羽の里は夜さむなるらむ　從三位行家卿

○寳治二年百首
露結ぶあとだに見えずみづぐきの岡のさゝ原秋風ぞふく　源俊平朝臣

○家集、秋風
柴の庵にはたものかこひそよめきて音する物は嵐なりけり　俊頼朝臣

○百首御歌
秋風よ荻の上葉になれ〳〵てあらしにうつるけふぞ悲しき　慈鎭和尚

○御集
拾遺秋
入海のはまなのはしに日はくれて秋風わたるこしの松原　鎌倉中務のみこ

○三百六十首中
秋風はまだきな吹きそわが宿のあばらかくせる蜘のいがきに　好忠

○百首歌
玉雜一
秋風は昔の人にあらねども吹きくるよひぞ哀れとはるゝ　重之

○永延二年七月宗貴朝臣家歌合、松下秋風

松の葉に秋ふく風のおときけばくもらぬ雨に袖のぬれける　藤原茂次

○久安百首

秋風は雨よりふくをいかなればこちと薄の招くなるらむ　花園左大臣家小大進

○百首御歌

さらで（さイ）ふすねやの板戸は今夜こそひきたてつべき秋風はふけ　喜多院入道二品のみこ

○建保四年内裏十首歌合

かぎりあれば吉野の奥にふく風は秋なればとて音もまさらず　僧正行意

○寶治二年百首、秋夕

秋風のけにも身にしむ色ならばちしほのほどや夕なるらむ　信實朝臣

○嘉元三年楚忽百首

荻の葉に茅が下をれ亂れおひておきふしわぶる野分木がらし　爲家卿

○二百首御歌

時雨ゆくよもの木の葉の秋かぜをことぞともなき松の色かな　順德院

○六帖題

新六六　ひさぎおふる庭の木陰の秋風に一こゑそゝぐ村時雨かな　爲家卿

○寛平御時歌合

菅萬　秋の蟬寒きこゑにぞきこゆなる木の葉のきぬを風やぬきつる　讀人しらず

○題不レ知

萬十　露霜のさむき夕べの秋風に紅葉しにけりやまなしのきは　同

○家集、松風いたく吹くを

荻の葉のいろづくたにもあるものを心すごくも行く嵐かな　中務

○秋風

六一　うちさわぎ鴈ぞきぬらしわぎもこが衣のひまをときつ秋風　讀人しらず

六一　秋かぜは野分け山わけふくなれど戀のみだれはあくるよもなし　同

家持集　六一　秋風はときとふき來ぬ白妙の我がときごろもぬふ人もなし　同

野分

○西洞隱士御歌
我が涙木々の木の葉もおほひ落ちて野分かなしきあきの山里　後京極攝政

○六百番歌合
新後拾秋上
昨日までよもぎにとぢし柴の戸ものわきにはるゝ岡野べの里　同

なびきゆく尾花がすゑに波立ちて眞野の野萩につゞく濱風　慈鎭

玉葉秋上
荻の葉にかはりし風の秋のこゑやがて野分のつゆくだくなり　定家卿

新後拾秋上
かりにさす庵までこそなびきけれのわきにたへぬ小野の篠原　家隆卿

夕まぐれむら雲迷ひふく風にまくらさだめぬ花のいろ／＼　隆信法師

思ひやる我が心までしをれきぬ野分するよの花のいろ／＼　寂蓮法師

○建保二年秋五首歌合
はなぞめの衣の色もさだまらず野分になびく秋のむら雨　定家卿

○毎日一首中
ふきすさむ野分の空の雲間よりあらはれわたるありあけの月　爲家卿

○嘉祿二年百首
雨わたるむらくもさわぎ吹く風に野分の草の色ぞやつるゝ　同

秋ふかき河上とほく野分してやすくもたたぬねしろたかがや　權僧正公朝

秋雨

○六百番歌合、秋雨
ふりくらす小萩がもとの庭の雨をこよひは荻の上にきくかな　後京極攝政

ゆくへなき秋の思ひぞせかれぬる村雨なびく雲のをちかた　定家卿

日にそへて秋の涼しさつたふなり時雨はまだし夕ぐれの雨　慈鎭

小雨ふるかつ〳〵（しかイ）わせをかるまゝに民の袖さへうるほひにけり　法橋顕昭

○秋歌中
新拾雑上　秋深き山の陰野のしばの戸に衣手うすし夕ぐれのあめ　伊勢

○秋歌中
日をわたる秋の村雨おとすみて木々のたもとも色かはるころ　後鳥羽院

○六帖題
新六一　夕ぐれの風さだまらぬうき雲にゆきてはかへるあきの村雨　正三位知家卿

○正治二年百首
ちらぬより木の葉に通ふねざめかな風にむら立つ秋のよの雨　後鳥羽院

○千五百番歌合
さ夜ふけてはとふく山の秋風に村雨過ぎぬ袖にしぐれて　従二位保季卿

○二百首歌
村雨の名残もしばししぐれけりしのだの森のあきの夕風　順徳院

○毎日一首中
秋の雨のしぐれてかへるむら雲の朝けの空は風ぞ身にしむ　為家卿

秋風のさそひてすぐるむら雨を涙になしてひぐらしぞなく　同

○文永九年毎日一首中
秋風にむら雨すぐる梢よりなみだしらるゝひぐらしの聲　同

○嘉元三年仙洞歌合　一首イ
朝風はこずゑにあらくふきすぎて曇りもあへぬ秋の村雨　同

○毎日歌中
露かろき木の葉の風のふきすぎてかたへはれ行くうす雲の雨　為相卿

○仙洞五十首
深き夜のはしにしたゝる秋の雨のおとたえぬれば軒ばもる月　後京極摂政

○建久七年秋左大將家にて、題一字三十一首
らんせいの花の錦のおもかげにいほり悲しき秋のむら雨　定家卿

○或抄中
またれゆく光にをしき月よりも雨にきこゆる荻の音かな　同

○六帖題
○寶治二年百首、秋歌
○題不知
○百首御歌、雨
○返し
○はゝのはてにて佛事おこなひて
○くものいに露のかゝれるをみて
○喜多院入道二品親王家五十首
○一句一首

露

新六五 草の葉に袖つくみちのかり衣いかなる露の色にそむらむ　信實朝臣

葉にあまる雫もあるを萩のえに置きながしたる秋の露かな　同

萬十一 あさといでの君があゆひをぬらすつゆ原早くおきいでつゝわれも裳のすそぬらさな　人丸

秋の窓にひとむらさめの露おちてはれ行く雲のすゑぞ涼しき　慈鎭和尚

月清下 さりとものそのよの月の曇らずば言葉の露をみがかざらめや　後京極攝政

此の歌は御集云九月九日作文ありけるに家房卿詩をおくるべきよしありて時にのぞみて十三夜にと侍りければ遣はし侍ると云々

みがくべき言葉の露のおけばこそ其の夜の月の影もまたれめ　中宮大夫家房卿

玉釋教 かきつめしことばの露も數毎に法の海にはけふや入るらむ　權イ前中納言長房卿 方玉

さゝがにの絲にかゝれる白露はあれたる宿の玉すだれかな　能因法師

露さえてねぬ夜の月やつもるらむあらぬ淺茅のけさの色かな　定家卿

今はとてしぎはたつなり秋のよの思ひのそこに露はのこりて　同

夜をかさねはたおる蟲のいそぐかな草の袂に露やさゆらむ　同

○正治六年百首
露さゆる小野のしの原うらがれて月ふきはらふあさぢふの風　前大納言忠良卿

○補集、秋歌
きえなばや草の葉つたふ白露の身をばうけくに秋の夕ぐれ　中務卿のみこ

○三島社奉納十首、草枕
ならびふす尾花の袖のかさなりてほずゑもつたふ秋の白露　爲家卿

○寛元三年百首、淺茅露
おけばかつ下をれはつるあさぢふのはずゑにつゞく露の白玉　同

○千首歌
ひぐらしのなく夕ぐれのなでしこに秋も寂しくおける露かな　同

○秋歌中
露しらむ庭はまどほになく蟲の木陰の草に夜をのこすころ　爲相卿

○六百番歌合、野分
朝まだき庭も籬ものわきして露おきあがる草のはもなし　有家卿

○家集、田家待月
はやいでてかどたに宿れ秋の月葉のぼる露の數やみゆると　俊頼朝臣

○建保三年名所障子
みやぎ野の本あらの小萩したはれて葉のぼる露に宿る月かな　僧正行意

○建曆三年内裏歌合、野夕風
人ならばみやこにみましみやぎのの露をいさよふ萩の夕風　家隆卿

○正治二年百首
續後拾秋上
みやぎ野の小萩をわけてゆく水や木の下露のながれなるらむ　正三位季經卿

秋の露しのぶの軒に影そへて星にぞかよふ夜半のながめは　民部卿範光

○建仁元年老若五十首歌合
時雨れつる夕日の色にそでさえて山風さむき木々のむらつゆ　寂蓮法師

○六百番歌合、朝戀
風つらき（くイ）もとあらの小萩袖にみて更けゆく空におもる白つゆ　定家卿

○千五百番歌合
しぐれつる今朝のむら雲ほどもなく入日にみがく山の初露　大納言通具卿

○同歌合、逢戀
おひみてはまつと思ひしことのはに心のつゆのなほ重きかな　慈鎭和尚

○文永七年九月十三夜中務卿親王家十首歌合
ひとすぢに秋の夕べもかこたれず心の露にぬるゝたもとは　典侍親子朝臣

○家集、述懐古來歌合
かくしつゝありふる程に身の露やたまりて沉む淵となるらむ　和泉式部

きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくされに悲しかりけり　同

○萩の上の露、雲葉
新拾遺秋上
夜もすがら狄の葉風はたえせぬをいかでか露の玉とぬくらむ　中務卿みこ

○恒久親王家歌合
鳫のなくうはの空なるなみだこそ秋の袂の露とおくらめ　友則

○建保三年名所百首
むさしのや月影ながら時雨れけりを花のうへの露の下道　従三位範宗卿

○建久二年左大將家百首歌、閑中草花
あとたえて風だにとはぬ萩のえに身をしる露はきゆるひもなし　定家卿

○建長八年百首
ひとことの戀の千草もかず〳〵におのが思ひの露やかはらむ　後九條内大臣

○家集
小篠原すゑ葉のつゆはたまに似て石なき山をゆくこゝちする　西行上人

○千五百番歌合
みせばやな曉露のおきわかれ篠分くる朝の袖のけしきを　家長朝臣

○永久四年百首、小篠
露しげきをざゝが原にわけゆけば衣のすそになびくしら玉　二條太皇太后宮常陸

○旅五十番詩歌
昨日けふ野にも山にも結びつゝ草のまくらや露のふるさと　後京極攝政

○韻字百二十八、述懐
いかゞせむ深山の月はしたへどもなほ思ひおくつゆの故郷　定家卿

○建保三年秋十五首歌合、秋歌
袖ぬらすしのぶもぢずりたがために亂れてもろき宮城野の露　同

○文永八年毎日一首中
白露の玉のおびするかきごしは雪かとみゆる庭のおもかげ　爲家卿

○秋歌中
玉秋上
いづくよりおくともしらぬ白露のくゆれば草の上にみゆらむ　同

○建保三年内裏歌合
月いづるとほ山松の木の間よりまだき宿かる露のころもで　光明峯寺攝政

○堀川院御時百首
みるもをしたゞぢにたてる秋萩をしをれせさする露の柵　仲實朝臣

○帥中納言經忠卿家にて五十首
秋萩も露のしがらみかけつればいくしほに葉を染めかくすらむ　俊頼朝臣

○永久四年百首、松蟲を
夕されば野邊もや物を思ふらむ松蟲鳴きてつゆしめりけり　同

○文治二年百首
ふぢばかまあらぬ草葉もかをるまで夕露しめる野べの秋風　定家卿

○秋御歌中
萩の花さきみだれたる玉ばこのあしたの露は色ことに見ゆ　花山院御製

○家集、百二十首
しののめに秋おく露の寒ければたゞひとりしも蟬のなくらむ　大江千里

秋夕

○正治二年百首
野原よりたもとにかよふ風の音におなじ露ちる秋の夕ぐれ　前大納言忠具卿（通カ）

うらみじな秋の夕べは今ぞこれそれにもよらず心つよさを　寂蓮法師

あかつきの鳴たつまでもなかりけりいな葉にこもる宿の夕暮　同

たれかまた千々に思ひをくだきても秋の心にあきの夕暮　同

同じくは哀れしられむ人もがな鹿と蟲との秋の夕暮　後鳥羽院

○元久元年詩歌合
しをりしてつらき山とはしらざりきたゞこのごろの秋の夕暮　如願法師

○三百番歌合、秋夕
暮れぬれば野邊もひとつに露おちて蟲のねになる庭の朝露　家隆卿

○老(若イ)の五十首歌合

秋とあき(をイ)と思ひ入りてぞながめつる雲のはたての夕暮の空　後京極攝政イ

みずしらぬ昔の人の心まであらしにこもる夕暮のそら　同

みよしのを秋のはるにてながむれば曙よりも夕ぐれの空　同

○六帖題

新六二 秋されば野に鳴く雉のほろ〳〵と涙こぼるゝ夕まぐれかな　衣笠内大臣

○建保二年内裏秋十首歌合、秋雑

鴫のたつ野ざはの秋の夕まぐれいづくにとまる心なるらむ　範宗卿

○湖邊秋夕

萩の露荻のうは風見るめなきうらわの秋もたゞならぬかな　知家卿

○百首歌

新續古秋上 蝉のこゑ蟲の恨みぞきこえける(ゆなる新續古)松のうてなの秋の夕ぐれ　前少(中新續古)納言家嗣卿

○永仁二年家歌合

くれうつる木ずゑの日影袖に落ちてはらふ衣はうすぎりの露　為相卿

○秋歌中

あはれさをいふも心のきはならでことばにあまる秋の夕暮　他阿上人

○家集、秋歌中

ふきわたる風に哀れをひとしめていづこもすごき秋の夕ぐれ　西行上人

秋夜

○建保二年秋十五首歌合、述懐

老がよはあはれ裾野の草がれによるの思ひもなが月のそら　定家卿

○文集

鐘の音をねざめて聞くや秋ならぬ袖にまぢかき天の河浪　慈鎭和尚

○承久二年四季百首、曉

たが里のいづらは秋の鐘の音を月よりのちもながめてぞきく　定家卿

○夜

昔とてこふともあはむものなれやなに面かげの秋のよの空　同

○曉

新後拾秋下
明けがたに秋のねざめやなりぬらむ殘ることなく物ぞ悲しき　家隆卿

○永久四年百首

まろねする長月の夜の寂しさは鳴きぬとてたのまれもせず　仲實朝臣

○題しらず

萬三
長き夜を獨りやねむと君がへて過ぎ行く人のおもほえらくに　讀人しらず

萬三
今よりは秋風さむく吹きなむといかでかひとり長き夜をねむ　家持卿

秋雜

○文集百首

秋に堪へぬ言の葉のみぞ色に出づる大和の歌ももろこしの詩も　定家卿

○題一字三十一首

唐國の昔のひともたへざりし秋のあはれはたれか忍ばぬ　同

○建保二年十首

たまきはるわが身時雨とふりゆけばいとゞ月日もをしき秋かな　同

○初一字題三十首

としのうちはよしたゞ秋のなかばにて心もたへず人も恨めし　同

○建保三年名所百首

きよみがたひまゆく駒も影うすしあきなき波の秋の夕ぐれ　同

○六帖題

新六四
つれづれの秋の眺めのうたゝねにやすく日影のかたぶきにけり　知家卿

○秋時雨を

をしねほすいほのかきしば風立ちて時雨しらるゝ秋の山里　前民部卿雅有

○旅千五百番御歌

ともなくて草葉にやどる秋の野の螢ばかりや夜のともしび　後京極攝政

○建保四年百首御歌

我がかどのいつもと柳時雨れつゝあへず移ろふ秋はきにけり　光明峯寺入道攝政

○撰歌　瑋子内親王家歌合、千鳥

ねざめしてたれか又きく小夜千鳥おとなふ秋の深き哀れを　宣旨

○題不レ知

詠めする空にもあらでしぐるゝは袖のうちにや秋をしるらむ　女御

○惟貞親王家歌合

新勅秋上 いかにして物思ふ人のすみかには秋よりほかの里を尋ねむ　相摸

秋くれば深山里こそわびしけれ夜は螢をともし火にして　千里

ひとしれず涙や空にくもりつゝ秋のしぐれとふりまさるらむ　元方

ひとりしも秋にあかなく世の中の悲しき事をもてなやむらむ　貫之

○陽成院二宮歌合

おく露にくちゆく野邊の草のはや秋の螢となりわたるらむ　忠岑

○三百六十首

まぶしさしはとふく秋の山人も己がありかはしらせやはする　好忠

○悲レ秋不レ到ニ貴人心一

大方の秋くることの悲しさもあでなる人はしらずぞありける　千里

○悲秋聽歎レ老（孤イ）

すぎて行く秋の悲しと見えつるは老いなむことの思ふなりけり　同

○貞應元年百首

思ひあへず時雨れにけりな立田山うすがすみゆく秋の村雲　爲家卿

○久安百首

巣をこひて歸りわづらふつばめかななれさへ秋の風や悲しき　隆季卿

○久永五年毎日一首中秋歌

秋風にかへる心はつばくらめ初かりがねの春やしるらむ　爲家卿

○弘長三年内裏百首二十五首

見えぬらむ色にいで行く秋草のまほならずとも思ふ心は　從二位行家卿

○千五百番歌合

人こそあれ庭のむぐらも色づきて風のみかよふ古里の秋　正三位季能卿

○家集

山里のそとものの岡のたかき木にすゞろかなしき秋蟬のこゑ　西行上人

○四季百首、述懐

秋の日は物思ふ人のせきなれやふりしく木の葉ゆく道もなし　定家卿

〇夜聞砧杵向レ霜怨醉客徒誇白綺歌

おのづから秋の哀れを身につけてかへるこさか（きこりカ）の夕暮の歌　同

夫木和歌抄巻第十三終

夫木和歌抄 巻第十四

秋部五

題　蟲　小鷹狩　鶉　鳴　擣衣　秋霜
葛　菊　秋水

蟲

○西洞隠士七百首調歌
ひぐらしのなく山影はくれはてて蟲のねになる萩の下露　後京極攝政

○御集秋歌中
露深しとばかりみつるあさぢ原くるれば蟲のこゑもみちぬる　同

○弘長元年百首
露をさむみ霜もあまる秋草になきこぼれたる蟲のこゑかな　信實朝臣

○花月百首
蟲のねを月のともにぞながめつる野原の露ぞ袖にまかせて　慈鎭和尚

○嘉禎三年前内大臣家三十首
あらち山夕日かくれてあさぢ原色づきぬとや蟲のなくらむ　従二位家隆卿

○正治二年百首
年もへぬあさぢが原の蟲のねに結ぼほれたる宿とみながら　寂蓮法師

○建保二年秋十五首歌合、秋蟲
月かげはいたらぬくまもなく蟲の聲のかぎりや深草の里　参議雅經卿

○御集、歌中
庭くさに露のかずそふむらさめに夜ふかく蟲の聲ぞ悲しき　鎌倉右大臣

○日吉社十五番歌合

蟲の音のよわるもしるし淺ぢふにけさは寒けくはだれ霜ふる　大藏卿有家

秋の野の蟲の聲こそよわるなれうらがれわたる萩にしぐれて　慈鎭和尚

○田家蟲といふことを

こ萩さく山田のくろの蟲の音にいほもる人や袖ぬらすらむ　西行上人

○寛元四年七月十禪師宮歌合、庭蟲漸衰

いまよりは庭のあさぢに鳴く蟲のあさ露寒くこゑよわるなり　從三位光成卿

○建保三年名所百首

みむろ山麓のをばな霜がれて嵐のそこによわる蟲のね　俊成卿女

○文永七年中務卿親王家十首歌合、野蟲

秋の野の露のたまのをふく風にいくよみだれて蟲の鳴くらむ　典侍親子朝臣

○千五百番歌合

蟲のねはならの落葉にうづもれてきりの笆に村雨ぞふる　後京極攝政

○文治二年百首

そこはかと心にそめぬ下草もかるればよわる蟲のこゑ〳〵　前中納言定家卿

○六帖題

新六六　すみ馴れしもとの野原や忍ぶらむ移すむしやに蟲のわぶるは　光俊朝臣

○家集

桑門　玉だれのこすのをゆけば白露のおくにあまたの蟲ぞ鳴くなる　同

○建長八年百首歌合

聞くたびに哀れなるかな蟲のねの露をかなしぶ心ことばは　左近中將具氏卿

○惟貞親王家歌合

わび人の年ふるさとは秋の野の蟲の宿りとなるぞわびしき　元方

秋くれば蟲と共にぞなかれぬる人も草葉もかれぬと思へば　興風

○天慶二年二月貫之家歌合、晩秋　晩イ

琴のねにこゑよりあはせなく蟲も秋のはつるはえこそ忍ばね　讀人しらず

○御集、蟲

より合はせ鳴く蟲のねを琴柱にてひきたてたりな秋の調べに　花山院御製

○蟲聲秋忽深

下露や結ぼほるらむ蟲のねのよりあはせてもわぶるおとかな　同

おく霜に草のかれゆく時よりぞ蟲のなくねもかたくきこゆる　千里

秋の雨のかつふりすさむ下草に涙みだれて蟲のわぶなる　民部卿爲家

うらみつくす東雲までの蟲のねも明くる光になきとまりぬる　前中納言爲兼卿

現存六
雨すぎてときぞともなくおく露も今は夕べと蟲の鳴くらむ　信實朝臣

現存六
里とほき野なかの杜の下草にくるゝもまたぬ松蟲のこゑ　衣笠内大臣

玉かづらいぶきの山の秋の露誰が面かげをまつむしのこゑ　順德院御製

たかまどのをのへの宮の秋はぎをたれきてみよと松蟲のこゑ　後京極攝政

秋もなほ千年のともは子の日せし遠里小野のまつむしの聲　從二位家隆卿

山里は秋やちとせのまさるらむ子の日せしのの松蟲のこゑ　同

秋風はふかでもきこゆ山里にあらぬをのへのまつむしの聲　藤原忠房

ときは山麓の野べにとしをへていつもかはらぬ松蟲のこゑ　同

露ながらこぼさでをらむ月かげにこ萩が枝の松むしのこゑ　西行上人

明玉
ききしらぬことのみしげき唐國の野べにかはらぬ松蟲の聲　慶政上人

かみ風や竹のまがきの松蟲は千よにちとせの秋やかさねむ　皇太后宮大夫俊成卿

ありすがはいつきの宮の秋の花ちよをかねたるまつむしの聲　同

龍田山すそ野のあらし露ふけばやがてみだるゝ松蟲のこゑ　前中納言定家卿

○霜草欲枯蟲聲急
○岡屋入道攝政家百首、叢蟲（雨後イ）
○君臣御歌合
○蟲
○まつむし
○建保三年名所百首御歌
○和歌所初度影供歌合、故郷蟲
○住吉三十首歌
○寛喜元年女御入内御屛風、山家松蟲夕
○永仁四年百首、松蟲
○家集、月前蟲
○もろこしにわたりける時野はらをすぎけるに松蟲をききて
○文治六年五社百首
○建久元年百首

○光臺院入道二品親王家五十首、尋蟲聲
まてしばしききてもとはむ草の原嵐にまがふまつむしの聲　參議雅經卿

○家集、野蟲
立ち歸りみちある御代にあはむとやおなじこや野の松蟲の聲　從二位家隆卿

○家集
いのちやはなにぞは露のあだし野にあふにしかへぬ松蟲の聲　同

○嘉元々年式部卿親王家續千首、原蟲
あさぢ原いさはた霜の寒けきにかれぬもましか松蟲のこゑ　參議爲相卿

○六帖題、松蟲
新六六
草の原秋はすゑはにうらがれてなのみつれなき松むしの聲　民部卿爲家

新六六
浪かくる礒邊のまつの松蟲はねにあらはれてこゑ恨むなり　正三位知家卿

○文應元年毎日一首中
月をみて光をのみやたのむらむ桂のさとにまつむしのなく　民部卿爲家

○千五百番歌合
いはしろの野べの下草ふく風に結ぼほれたる松蟲のこゑ　參議雅經卿

○百首歌雜五十首中
ことのねに通ふは峯の秋風をなほ松蟲のこゑやそふらむ　藤原爲顯

○住吉社百首御歌
すみよしのいがきのもとの蟲のねにおのが聲にも松風ぞある　慈鎭和尚

延喜七年亭子院御門御時西河行幸せさせ給ひけるに忠岑新和詞序云
「ひるはひぐらし蟲をもとめ夜はよもすがらさうのこゑなどとゝのへし
めあるときには山のはに月まつむしうかゞひきむのこゑにおやまたせ
ある時には野べのすゞむしをききて谷の水の音にあらがはれ」と云々

○家集、雜歌中
きりぐ\すわが閨近くよるはなけ晝はさわがし物語りせむ　中納言家持卿
唐衣たつたの山にあやしくもつゞりさせてふきりぐ\すなく　かな家

○家集、きり〴〵すのこゑ
から衣夜風涼しくなるなべにきり〴〵すさへなきみだれつゝ　惠慶法師

○題不レ知
萬十
庭草に村雨降りてきり〴〵すなく聲きけば秋はきにけり　讀人しらず

○六帖題
風秋中
庭の蟲は鳴きとまりぬる雨のよの壁に音するきり〴〵すかな　中納言爲兼卿

○門如社歌合、蟲夕
夕くればよもぎがねやのきり〴〵す枕の下にこゑぞきこゆる　顯仲朝臣

○家集中
きり〴〵す雲ゐの鴈に何といひて壁のそこより聲あはすらむ　殷富門院大輔

○雨のうちの蟲
壁におふる小草にわぶるきり〴〵すしぐるゝ庭の露厭ふべし　西行上人

○文集百首、相思夕上松臺立蛬思、蟋蟀聲滿耳秋
きり〴〵すよる松風にこゑわびて明くるより又ひぐらしの聲　慈鎭和尚

○寶治二年百首、曉蟲
なが月の比こそあらめ蛬夜のあくるにも聲よわるなり　正三位知家卿

○三百首和歌
永き夜のたけだの原の蛬うきふししげきねをや鳴くらむ　中務卿みこ

○六百番歌合、寄蟲戀
獨りふすなが〳〵しよの悲しさに語らひあかすきり〴〵すかな　中宮權大夫家房卿

○槐集中
秋の夜の月のみやこのきり〴〵すなくは昔の影や戀しき　鎌倉右大臣

○建保三年名所百首
なみかへる野島が崎のきり〴〵すもにすむ蟲の聲かとぞきく　兵衛内侍

○きり〴〵す
現存六
夢覺むる牀(ゆか)の下なるきり〴〵す聲いそがはしあけぬ此のよは　前中納言定嗣卿

○旅宿蟲
さらぬだに草の枕は露けきにあらそひて鳴くよはのちくろと　源仲正

○久安百首
いこま山麓の野べも霜枯れてすみかもみえぬくつわむしかな　前參議親隆卿

○みちの國へ下りけるにふたむら山にて
秋風にはたおる蟲のこゑしげみたづねこえつるふた村の山　重之

○久安百首　たつたひめ花の錦の唐衣をいそぐや蟲の夜もはたおる　前大納言隆季卿イ

○六帖題　新六二　いそぐとてよる山すぐる旅人のふりやすてけむ鈴蟲のこゑ　民部卿爲家

○久安百首　神樂岡ふきまふ風のつてごとにふりすぎこゆるすゞむしの聲　大炊御門右大臣

○正治元年新宮歌合　ふり立ててならし顔にぞ聞ゆなるかぐらの岡の鈴蟲のこゑ　民部卿範光

○堀川院御時百首　堀百　駒とめて麓の野べを尋ぬればをぐらにすだくくつわ蟲かな　前中納言匡房卿

堀異本　初時雨ふれば小倉の山かげのこ萩がしたに鈴蟲ぞなく

み狩するかた野の野べの鈴蟲の戀することゑかふりたててなく　前中納言國信卿

○文永十一年毎日一首中　鈴蟲の昔のことを思ふにものとふりはつるしらかはの里　民部卿爲家

○六帖題　新六六　秋ははや夜さむになりぬ處女子が袖ふる山の鈴蟲のこゑ　正三位知家卿

小鷹狩

○百首御歌　新續古秋下　はしたかのとや野のあさぢ踏み分けて己れもかへる秋の狩人　順徳院御製

○建久七年百二十八首和歌　かり人の袖こそうたてしをれぬれ露深草の里のうづらに　前中納言定家卿

○六帖題　新六六　とやかへる鷹を手にすゑあはづ野の鶉からむと此の日暮しつ　衣笠内大臣

同　あまたたび鶉にあへる箸鷹のさもとりあへずもがれてしがな　民部卿爲家

同　ふる雨にくるすの小野のこ鷹狩ぬれしぞ人の初めなりける　光俊朝臣

同　うづらかる秋の草ねのあづさ弓早とりうちのなこそしるけれ　信實朝臣

○九十九首菊歌中
同　とがり野やならしば隠れ咲く菊の霜につかれの色ぞしをるゝ　爲實朝臣

○天喜六年八月公基朝臣家歌合、小鷹狩
擧鳥はいかゞきくらむたかはなつ狩場のを野の鈴蟲のこゑ　讀人しらず

○承曆四年十月堀川院中宮歌合
手にするゑて出でしさしはもそれぬれば野べの花にや亂れあひなむ　源經兼朝臣

かりにとて露けき秋の野べにいでて萩すり衣きてやかへらむ　藤原實盛

○家集
み狩するま野の萩原こひにしてはふれば鷹の斑（か）やかはるらむ　俊頼朝臣

○家集、鷹狩
雲雀とるこのり手にすゑ駒なめて秋の狩田に出でぬひぞなき　源仲正

○天慶（慶イ）三年御屏風に、田中に小鷹狩したる所
人もみなわれならねども秋のたにかりにぞ物を思ふべらなる　貫之

○題不知
萬十九　新拾別　若せ野に秋萩しのぎ駒なべてこ鷹狩（はっとがり萬）だにせでや別れむ　讀人しらず

鶉

○百首御歌
かり人のいる野の淺茅踏みしだきなくや鶉のとこものこらず　順德院御製

○貞應三年百首、鶉中聞鶉
かり人のいる野の原の夕ぎりに思ひもしらぬうづら鳴くなり　民部卿爲家

○百首御歌
高圓の野ぢのくず原風ふけば秋を鶉のうらみてぞなく　光明峯寺入道攝政

○建久二年百首
深草の里の夕風かよひきて伏見の小野にうづらなくなり　前中納言定家卿

○秋歌中
萬八　新續古雜上　葛のはをふくゆふ風にうらぶれてたごのいり野に鶉なくなり　源季廣

○家集
桑門　新續古旅
あはれなるみやぎが原のたびねかなかたしく袖に鶉なくなり　正三位季經卿

○正治二年百首
秋萩の下葉の露も色づきてうづらなくなりみやぎ野の原　従二位家隆卿

○家集、秋歌中
うづらなく野ぢの玉河けふみればすなみに秋風ぞふく　同

○百首歌
有馬山みねの松風おとさえてゐなのさゝはらうづらなくなり　左近中將公衡卿

○百首御歌
露はなほち草ながらにあだし野の秋を鶉のこゑのみぞする　順徳院御製

○六帖題御歌、鶉
秋深きいはれの野べのこ萩原うつろふつゆに鶉鳴くなり　中務卿のみこ

○仁安二年八月經盛卿家歌合、草花
うづらなくとほ里小野のこはぎ原心なき身もすぎうかりけり　法橋顯昭

○天仁二年三月比叡山歌合、鶉
夕さればうら風ふきてうづらなくま野の入えの秋のあさふに　讀人しらず

○六百番歌合、鶉
夕風のま野の萩原ふくまゝにねやあれぬとや鶉なくらむ　正三位季經卿

○題不知
鷹のこを手にはすゑねど鶉なく粟津の原にけふもくらしつ　法橋顯昭

○
萬代
鷹のこはまろにたばらむ手にすゑてあはづの原の鶉がりせむ　讀人しらず

○文治六年五社百首
鶉なく粟津の原のしの薄すぎぞやれぬ秋の夕は　皇太后宮大夫俊成

○千五百番歌合
くれかゝるを野の草ぶし風すぎて結ぶまくらに鶉鳴くなり　従二位保季卿

○堀川院御時百首
わがせこが狩にのみくる粟津野に鶉なくなり草がくれつゝ　二條大皇太后宮肥後

○千五百番歌合
風つたふとばたのおもの夕まぐれわくるいなばに鶉鳴くなり　長家朝臣（家長イ）

○建保三年名所百首
風ふけば浪にやとこのあれぬらむ野島がさきに鶉なくなり　従二位家隆卿

○久安百首
うづらなく夕の空のあはれまで月にふけゆく更科の里　従二位範宗

○野花露滋
鶉なく栗栖の小野の夕まぐれほのめきわたる花薄かな　前参議親隆

○六帖題
鶉なくあだの大野のまくず原いくらの露にむすぼれぬらむ　修理大夫顕季卿

秋風におけばかつちる白露のあだのおほ野に鶉なくなり　民部卿為家

○千五百番歌合
吹く風もあらしになればとこの山ゆふべの鶉うらみてぞなく　大納言通具卿

○平惠時朝臣家探題三百首歌中
はしたかのかりばの末のいぬかみやたつる鶉のとこの山風　藤原為顕

○名所秋人家
秋深き杜の下草うらがれていはたのをのに鶉なくなり　法印實伊

山里のまきの葉がくれ夕日さすそともの野らに鶉なくなり　權大納言實家卿

この歌はいまだ三位にていつとなく侍りし比秋さかりなる所にまかりて程へ侍りしによめる云々

○百首御歌
新勅秋上
ぬしはあれど野となりにける籬かなをがやが下に鶉なくなり　慈鎮和尚

○天仁二年寂山歌合、鶉イ
山里のあらたのくろをすぎゆけば尾花が下にうづら鳴くなり　讀人しらず

○正治二年百首
秋のくれとへかし人の山里をかりたの原に鶉なくなり　皇太后宮大夫俊成卿

○家集
鶉なく刈田のひつぢ生ひいでてほのかにてらす三日月のかげ　西行上人

○建長八年百首歌合
あまの原きりのまぎれに日はくれてたなかの里に鶉鳴くなり　衣笠内大臣

○六帖題、葛
新六六
かへりさす鶉のとこや寒からじくずはふ野べの露の下風　信實朝臣

○百首御歌
たのめこし人の心は秋ふけてよもぎが杣にうづらなくなり　後鳥羽院御製

○喜多院入道二品親王家五十首
荒れゆけば蟲のねまでは思ひしに鶉たつなり庭のしの原　法橋顕昭（寂蓮法師イ）

○百首御歌
風はやみ鶉ふす野の夕暮にこずゑもしらぬこのはをぞみる　慈鎮和尚

○家集、懐歌中
人心はとのうづらか箸鷹のせめてううれとのがれのみゆく　源仲正

○家集、田家秋興
山田もるきその伏屋に風ふけばあぜ傳ひして鶉おとなふ　俊頼朝臣

○西行上人とひて侍りける返歌中
うづらはふ門はこの葉にうづもれて人もさしこぬ大原の里　寂蓮法師

○家集
良玉　かり人の絶えずと聞きし栗栖野にいつまでとてか鶉なくらむ　山田法師

○題不レ知
萬八　うづらなく古きみやこの秋萩を思ふ人どちあひみつるかな　讀人しらず

萬十一　ひと事をしげしと君を鶉なく人のいにしへ（ふるやにイ）にあひいひてやりつ

○贈紀女郎
萬四　鶉なくふるき里より思へどもなにそも妹にあふよしもなき　中納言家持卿

鴫

○六百番歌合、鴫
唐衣すそ野のいほの旅枕そでより鴫のたつ心ちする　前中納言定家卿

あはれさは荻ふく風のおとのみか有明の月にしぎもなくなり　中宮権大夫家房卿

いづかたへはねかく鴫の過ぎぬらむまだあけやらぬ霧の籬に　前大納言兼定卿

あけぬとて澤たつ鴫の一こゑははねかくよりも哀れなりけり　従二位家隆卿

鷹枕たかせのよどにたつ鴫の羽音もそゝやあはれなくなり　法橋顯昭

あけぬるか鴫のはねがきねやすぎて袖に月もる深草の里　隆信朝臣

新拾雑　あけがたに夜はなりぬとや菅原や伏見のたゐに鴫ぞ立つなる　正三位季經卿

時しもあれねざめの空に鴫たちて秋の哀れをかきあつむなり　大藏卿有家

○家集

あけぼのにうだのくろよりたつ鴫のはねかく音や萬代のかず　俊頼朝臣

此の歌は伊勢齋宮に侍りける比みそぢの南の田をばうだといふ方に鴫のはねかく音のしければよめると云々

○堀川院御時百首

明けぬなり鴫の羽がき數ふればかけのたれ尾の永き夜なれど　基俊

○家集、暁の心を

あはでのみ伏見の里にたつ鴫のはかずにおつるわが涙かな　皇太后宮大夫俊成卿

○太神宮百首御歌

伏見山あくる田の面に立つ鴫のしもにふしつるあとやみゆらむ　後鳥羽院御製

○百首歌、戀

草ふかみさはにぬはれてふす鴫のいかによそたつ人の心ぞ　西行上人

○光明峯寺入道攝政家百首、秋戀

待ちわびて思ひたえにし秋の夜にたれ曉の鴫のはねがき　従二位家隆卿

○六帖題

新六一　吾妹子がみどりのまゆをかきそへて門田の鴫のはおとをぞ聞く　衣笠内大臣

○十題百首御歌

あけぬるか山田の澤にたつ鴫のはおともよほす鳥の初こゑ　後京極攝政

○千五百番歌合

千五百番　ながをかや田面の庵のあれまくに寐覺めいざなふ鴫の羽がき　西園寺入道太政大臣

同　あけぬるかま野の浦風おとづれてなびく尾花に鴫のはねがき　従三位保季卿

同
あけぬとて鴫が羽音に驚けばまだ夜もふかしゐなの篠原　法橋顯昭

同
あけぬるかとやまの原の秋の月かたぶく空の鴫のはねがき　隆信千五百　信實朝臣

○御集
あふことの程へにけるもこひしきの羽の數にぞ思ひしらるゝ　謙德公

此の歌は「くればとくゆきてかたらむあふことのとほちの里は住みうかりしを」といひつかはしける人の返しと云々

○永久四年百首、秋夜
まろねする長月の夜の久しさは鴫なきぬとてたのまれもせず　仲實朝臣

○家集、寄鴫戀
曙の鴫ののぼりはかきつがむ雲ゐはるけき戀もするかな　源仲正

○家集、しほがまの浦にやどりて
懷中
さ夜ふけて物ぞ悲しきしほがまのもゝはがきする鴫のは風に　能因法師

○題不知
くさ枕夢ぞたえぬるみちのくのあさかの沼のしぎの羽風に　讀人しらず

○建長五年毎日一首中
しもがれの草のしたねや寒からじ曉深く鴫ぞたつなる　民部卿爲家

○御集
曉の鴫の羽音はしぐれにてすゞのしのやに月ぞもりくる　後京極攝政

擣衣

續千秋下
衣うつきぬたの音もたかまどの山のこの葉に秋風ぞふく　光明峯寺入道攝政

○貞永七年七首歌合、里前擣衣、判ヲ定家卿
ながき夜の生駒おろしやさむからむあきしの里に衣うつなり　從二位家隆卿

此の歌の判云右あきしのゝさと秋篠のの字今一あるべき由各申す云々

み山ふく秋風さむみあづまやのしづはた衣今ぞうつなる　民部卿爲家

あまのすむおきつこ島のしほ風に里もまがはずうつ衣かな　源家清

○龜山殿五首歌合河邊擣衣
月ゆゑはまだねぬ里もありすがは夜寒しられて衣うつなり　前大納言爲氏卿

衣うつきぬたの音のとほつかはわたりを寒み誰を待つらむ　信實朝臣

○結縁經百首
和泉河あたりさむけき秋風にきぬたのおとの衣かせ山　少將内侍

○三百首御歌
いづみがは河風さむし今よりやくにのみやこは衣うつらむ　中務卿のみこ鎌倉

○大宰大納言家にて三十首中に、名所擣衣
蘆の屋に波のよるさへ打つ衣灘の鹽やきいとまなのよや　家長朝臣

○川をへだてて衣うつ
玉川やをちの砧にならすなりこやさほしける手づくりの布　殷富門院大輔

○百首歌
賤のめがしのをりはへてさゞれ水うつや衣のいそぎなるらむ　寂蓮法師

○家集秋の歌中、擣衣
有明の月は籬にうつろひてまくらにきくの衣うつなり　從二位家隆卿

○土御門入道二品親王家會、擣衣稀
それもよもまれにうつよの音はせじ巖をなでし蟹のは衣　同

○建久七年百二十八首和歌
衣うつひゞきぞ風をしたひくる槙はとほき月のとなりに　前中納言定家卿

○建保三年内裏御會、月前擣衣
月にうつたみの衣も宿毎にくにさかえたるみよぞ聞ゆる　同

○建久六年左大將家秋五首歌、秋聲
さえわたる月にむかひてうつ衣いくとせ秋のこゑをつくらむ　同

○六帖題、衣うつを
新六五　續千雜體
賤のめがきなれ衣の秋あはせ早くもいそぐつちの音かな　正三位知家卿

○五十首、擣衣曲
こよひたれそなたの風のたどりとてぬし定まらぬ衣うつらむ　光臺院入道二品親王

○久安百首
から衣さゆる霜夜にうちわびてまどろむまにや音たゆむらむ　花園左大臣家小大進

○康平六年十月家歌合、擣衣
いくへうつ衣なればか夜をかさね砧の音のたえずきこゆる　藤原公基朝臣

○正治二年百首
旅ねする山田のいほは夜さむにていなばの風に衣うつなり　二條院讃岐

○第三親王家十五首
よにふればしづのをだまきはては又月にいく度衣うつらむ　從二位家隆卿

○家集
なが月のふけゆく夜半の風よりも衣うつねぞ身にはしみける　光明峯寺攝政民部卿

○九十九首菊歌中
はなゆゑや菊さくころの里人はかきねにいでて衣うつらむ　從二位爲實卿

○永久元年楚忽百首
夜もすがら里は衣をうつなみのおとづれかはす住よしの浦　參議爲相卿

○嘉元二年百首、擣衣
ふくる夜の月影したふやまがつは庭にいでてや衣うつらむ　同

○光臺院入道二品親王家五十首
秋風にさそはれきえてうつ衣およばぬ里の程ぞきこゆる　前中納言定家卿

○正治二年百首
白妙の衣しでうつひゞきよりおきそふ霜の色にいづらむ　同

○貞應三年百首、擣衣聲幽
おひ風にきこゆるほどぞ遠からねたえだえにうつあさのさ衣　民部卿爲家

○秋御歌中
おとなしの里の秋風夜をさむみ忍びに人や衣うつらむ　同

○文應元年七社百首
おきていにし人もきてみぬあすか風唯いたづらにうつ衣かな　同

○建長八年百首歌合
あすかには衣うつなりたをやめの袖の秋風夜寒なるらし　從二位行家卿

みにしめとふけばやいたく秋風のおとはの里も衣うつらむ　衣笠內大臣

風さゆるとこの山人おのれのみ夜を重ねてやころもうつらむ　右近中將經家卿

秋風のいはとことかは夜をさむみはつせをとめご衣うつなり　前大納言顯朝卿

判者知家卿云いはとことかはよをさむみと侍るこそ萬葉にひとりさへ
やむこともなく〳〵と侍るをふかく思ひいれたりと見えて難有しと云々

○家六首歌合、河邊擣衣

おちたぎつしらゆふ浪にはつせめの已が手づくりうつ衣かな　光明峯寺入道攝政

はつせ河ゆくせをはやき月日かなことしもあさの衣うつなり　正三位知家卿

霜さゆる河べの里にうつ衣ちたびやちどりこゑをあらそふ　從二位家隆卿

新深窓
あじろぎに紅葉の錦かけすててうつや衣をまきの島人　信實朝臣

なが月やうぢの川風さむからじまきのしま人衣うつなり　從三位範（宗イ）定卿

唐衣いまやたつたの川風にきぬたの音もうちすさむらむ　兵衛内侍

萬代
たがためにいそぐなるらむ夜もすがらまきの島人衣うつなり　左京大夫顯輔卿

○家集

しぐれゆくまきのを山の秋風に衣うつなりうぢの里人　下野

○家集

浦とほきしがのおほわた行きすぎて里近からし衣うつなり　正三位知家卿

○家集

良玉
せきあらし夜さむにふくやさゞ浪のあはづの里に衣うつなり　左兵衛督基氏

（新撰擣衣

門葉
さ夜衣ぬれても色やのこるらむ霜ながらうつみわの里人　後鳥羽院御製

○御集、名所（擣衣イ）

夜さむなるしるしか三わの里人のありとしあるは衣うつなり　後九條内大臣

○弘安元年百首

古里は夜さむになれやさゞ浪のあふみのをとめ衣うつなり　中務卿みこ

○五十首歌合御歌

○二夜百首御歌、擣衣
昔より白き衣をうつなれやこゑには色のありけるものを　後京極攝政

○貞永百首御歌
高砂にいづれひゞきのまさるらむあけゆくかねに衣うつなり　光明峯寺入道攝政

○建保三年内大臣家百首、隣擣衣
有明の月おちかゝる足曳のやまずもうつかあだのさごろも　大藏卿有家

○同四年百首
足曳のあらしやよもに寒からむとほき山べに衣うつこゑ　光明峯寺入道攝政

○五十首秋歌中
笹の葉にしみつく霜のよをへてはみ山もさやに衣うつなり　從二位家隆卿

○喜多院入道二品親王家五十首
かざごしの峯さえわたる秋の夜はいそぎうつなりきその麻衣　寂延法師

○文治六年五社百首
野となれる秋のあらしを寒しとや衣うつなり深草の里　皇太后宮大夫俊成

○光臺院入道二品親王家五十首、擣衣幽
さと遠く今日は生野のはなすゝきほのかに秋の衣うつなり　正三位知家卿

○秋御歌中、現葉
あまの川やゝ夜さむなる風のおとにかたのの里も衣うつなり　土御門入道内大臣

○貞應三年百首、擣衣
秋しらぬときはの山の里人もよがれぬ風にころもうつなり　民部卿爲家

○秋歌中
萬代
あはれなりいくたのおくの里人も月によな／＼衣うつなり　權大納言通方

○老若五十首歌合
やゝさむきいくたの杜の秋風にたへぬ里人衣うつなり　從二位家隆卿

○三十首歌、名所擣衣
ぬのびきのたきも夜さむに聲さえて生田のをのに衣うつなり　同

○家集、秋歌中
みやぎ野の野守がいほにうつ衣はぎがはなずり露やそふらむ　同

山賤の夜のまの風やこりぬらむあけはてぬれど衣うつなり

○嘉祿三年百首、初擣衣
みに寒く過ぎぬる夜半の山風にけさより麻のころもうつなり　民部卿爲家

○貞應三年一字百首
白妙のしも夜の風のさむければ衣手うたぬ里人もなし　同

○西園寺入道太政大臣家三十首
壬二集中
くれかゝる峯のしはやの夕霜にたれしら雲の衣うつらむ　後九條内大臣

○中務卿親王家十首歌合、擣衣
はしたかのとかへる山の柴のとに誰かみかりの衣うつらむ　同

○柿本影供百首
山人も月を契りの秋のよやかつらの花の衣うつらむ　同

○正治二年百首御歌
衣うつきぬたの音をしるべにておきゐの里をたづねつるかな　第三のみこ

○七百首歌、擣衣
みちのくの忍ぶの里の秋風にもぢずり衣うちもたゆまず　權僧正公朝

かうちめが手ぞめの衣うちわびぬ秋風さむきたかやすの里

○建長六年龜山殿百首歌、河邊擣衣
里人は衣うつらしよしの河いはなみ高く音のきこゆる　從三位爲繼卿

夜もすがら衣うつをば白浪のたつかとよそにききあかすかな　周防内侍

このうたは殿上の人々あめふる日うつなはしらなかくし題によみける
によめると々

○堀山院御時百首
わぎもこが手玉もゆらにうつ衣たが爲にとていそぐなるらむ　權中納言（師時イ）

○五社百首
ふきおろすひえの山風よや寒きみつのはま人衣うつなり　皇太后宮大夫俊成卿

○光明峯寺入道攝政家六百首歌合、河邊擣衣
こばた川こはたがための唐衣ころも寂しきつちのおとかな　前中納言定家卿

○千首歌
ゆく秋のすゑのはら野のさゝのやによを寒からし衣うつなり　民部卿爲家

○六帖題
新六二
月になくやもめがらすのねにたてて秋の砧ぞ霜に打つなる　同

○文應元年七社百首

○正治二年百首

○光台院入道二品親王家五十首、擣衣歌

○建保四年内裏十首歌合

○千五百番歌合

○建保二年内裏十五首歌合

○建長三年十首歌合、田家月

○正嘉二年毎日一首中

○秋霜似鬢年空長

○霜輕未殺萋々草

○世の中をなにゝたとへむといふ歌をきゝて千首よみけるに

ふたみがた夜風みにしむあま人はあけゆくまでや衣うつらむ　同

夜半にふく秋風さむくなるまゝに衣うつなるかもの川上　同

雲かゝるいこまおろしの山風にころもうつなりたかやすの里　同

たのめおく人やありけむなみ風に衣うつなりまつが浦島　皇太后宮大夫俊成卿

里のあまのしほやき衣うつ音もまどほにひゞく風のつてかな　家長朝臣

みやこだに夜さむになりぬいかばかりこしの山人衣うつらむ　従三位範宗卿

しほ風や秋は夜寒になるみがた蜑のとまやに衣うつなり　隆信朝臣

秋霜

新千秋下
さを鹿のつまどふ岡は霜がれてからぬわさ田にのこる秋風　僧正行意（慈イ）

山里は雪よりさきも住みわびぬ初霜がれのながつきの空　従三位範宗卿

まだ刈らぬわさだをもると霜のよの岡の館に月をみるかな　信實朝臣

いかにせむ霜を待つまの秋のはの弱きにつけてをしまるゝ身を　民部卿爲家

秋の夜のしもにたとへつ我が髪はとしの空しく老のつもれば　千里

よひ〳〵に又置く霜の輕ければ草のはたにもかはらざりけり　同

異本家集
世の中を何にたとへむしもを痛み色かはりゆく淺ぢふの野べ　やどる家集　能宣朝臣

○西洞院十首御歌

霜まよふ庭のくず原色かへて恨みなれたる風ぞはげしき　後京極攝政

○貞應三年朗詠百首、一夜林霜葉（霜林イ）落紅

結びけるひとよの霜のあさおきに皆いろまさる菊の紅葉ば　民部卿爲家

○嘉元元年式部卿親王家續千首歌　野草欲枯

みればかつ野べのした草霜がれて嵐ののちの色ぞしをるゝ　參議爲相卿

○不忘

萬十 六六
露しもの寒き夕べにたへかねて移ろひにけりつまなしの花（木はイ）　讀人しらず

萬十 六五
あき山に霜ふりおほひ木の葉散り年はふれどもわれ忘れめや　人丸

○六百番歌合、秋霜

霜むすぶ秋のすゑはの小笹原風には露のこぼれしものを　後京極攝政

いろかはるをしの毛衣けさみればふる霜しろし秋の露霜　法橋顯昭

しも沍ゆるよもぎが下の蟋蟀こゑもかれ野になりやしぬらむ　從二位家隆卿

とけてねぬ夢ぢも霜にむすぼほれまづしる秋のかたしきの袖　前中納言定家卿

秋の野の千草の色もかれあへぬに露おきこむるよはの初霜　中宮權大夫家房卿

思ふより又も哀れはかさねけり露にしもおく庭のよもぎふ　寂蓮法師

此の歌左方申云つゆにしもおく如何右陳云つゆしもといふはつゆに霜のおきくするなり又雖云露霜は露と霜とのともにおくにこそ露の上に霜おかむこと如何判者俊成卿云霜は露の結ぶにこそ侍るなれと云々

○一字百首、秋霰

霜うづむ尾花がしたのかれまより色めづらしき花の紫　前中納言定家卿

○或抄中

たへてこそ山の深さもながめつれ秋にわびぬるながき夜の霜　同

葛

○題不知
萬二十 高圓の野べはふ葛のすゑつひにちよに忘れむ我がおほ君かも　　讀人しらず

萬十二 水莖の岡のまくずをふきかへしおもしろこらがみえぬ比かも　　同

○家集
萬十 六二 拾雑秋 秋風の日ごとに吹くは水ぐきのをかの葛原色づきにけり　　人丸

○建保三年名所百首
新後秋上 みづぐきの岡のまくずをあまのすむ里のしるべと秋風ぞふく　　前中納言定家卿

○寶治二年百首
高まどの野べはふ葛の秋風にかへすぐ〵も見つる月かな　　光俊朝臣

○戀歌中
たまさかに逢坂山のま葛原まだうらわかし恨みはてしを　　二條大皇太后宮攝津

○家集
みやぎ野のま葛ふきこす秋風に露さへおくるさを鹿のこゑ　　従二位家隆卿

○千五百番歌合、判御歌
みわの里きてもとへかしはるぐ〵とまつも恨めし葛の秋風　　後鳥羽院御製

○永久後百首御歌
いかにせむ葛はふ松のときのまを恨みてふかぬ秋風ぞなき　　同

○家集
松がきにはひくる葛をとふ人は見るにかなしき秋の山里　　和泉式部

○千五百番歌合
まくずはふま野のはまぢの夕風にうらみてかへる秋の夕風　　前大納言忠良卿

○建保三年名所百首御歌
みむろ山かみのいがきにはふ葛のうらふきかへす沖の白浪　　順徳院御製

○昌泰四年八月歌合
いそのかみふるの社にはふくずも秋にしなれば色かはりけり　　讀人しらず

○正治二年百首
いそのかみふる野のま葛いく返りうつろふ秋の風恨むらむ　　従二位家隆卿

○後京極攝政家歌合、野風
けふまではいはたのを野の眞葛原うらがれわたる秋風ぞふく　同

○風によする戀
あだし野の葛のうらふく秋風のめにし見えねばしる人もなし　鎌倉右大臣

○家集
すがるふすこぐれが谷の葛まきを吹きうらがへす秋の夕風　西行上人

○久安百首
武藏野の葛の青葉のしたはれてうらまでさゆる月をこそみれ　參議親隆卿

○題不レ知
萬代　續後拾戀
まくずはふ小野の篠原下にのみ人をこふるは苦しかりけり　讀人しらず

○家五十首御歌
あさゆけばくずの葉分けに袖ぬれて露ところせき深草の里　喜多院入道二品みこ

○建保三年内大臣家百首、寄名所戀
あれはてていとゞふか草秋の野に人やはかへる葛のうら風　信實朝臣

○六帖題
新六六
みよし野のかりぢのをのにはふ葛の下の恨みはしる人もなし　衣笠内大臣

○歌林苑の會、寄風戀
たのめつゝなほいなみ野の葛の葉の恨みをますは秋の夕風　藤原憲經

○戀歌中
現存六
人めのみしのぶの岡のまくず原いつあらはれて恨みそめまし　源季茂

○くず
現存六
かの岡に葛かるをのこまてしばし恨みむと思ふ折もこそあれ　明珍法師

○寛和元年八月内裏歌合、風
おほあらきの杜の葛葉をふく風に紅葉もあへずちりやしぬらむ　橘爲義朝臣

○くず
六一
足曳の箱根の山にはふ葛のひかばよりきねぬなはなほゝに　讀人しらず

○題不レ知
萬十二
おほ崎のありそのわたりはふ葛のゆく方なくや戀ひ渡るらむ　同

○弘長元年百首、露
浪越ゆるありそのま葛うらはまで餘りてうみの露ぞこぼるゝ　後九條内大臣

○建久元年百首
ま葛はふいくたの小野の秋風にやがて色づく袖のうへかな　前中納言定家卿

○家集、社歌中

くれかゝる籬のまくずうちなびき山のかひより秋風ぞふく　民部卿爲家

○百首歌中、栗栖野葛

葛かづら栗栖の原の秋風に昔をかけて身をうらみつゝ　藤原爲顯

○正治二年七月當座三首歌合、故郷蟲

あはづ野の眞葛か原の夕暮にうらみがほなる蟲のこゑ〴〵　大藏卿長房

○平貞時朝臣家三首歌合、逢後恨戀

あふさかの關こえなばと思ひしにあはづの杜の葛の下風　權僧正公朝

○家集、絶戀

ことかたにねはふ横野の蔦葛これぞたえにし始めなりける　同

○家集、秋歌中

さを鹿のいる野のま葛恨みても猶たちかへり妻やこふらむ　前大納言爲氏卿

○寄鹿戀

さを鹿の立つ野の眞葛枯れね唯恨みしほどぞねもなかれける　源有重

○六帖題

新六二 秋風のふきあげの野の葛かづらさぞうら枯れて露こぼるらむ　光俊朝臣

○弘安元年百首、秋歌

ま葛原たままく田ゐの秋風によせてほなみの又かへるらむ　匠（定）定（四イ）法危

○御集

萬六 人心あさ澤小野にはふくずの秋風ふけばうらみつるかな　鎌倉右大臣

眞葛はふ　春日の山は　打ち靡き　春さりゆけば　山かみに　讀人しらず

菊

○寛平御時菊合歌、山さきのみなせのきく

うぢつけに見なせば菊のまされるは折る人がらの花の影かも　讀人しらず

○さがのひろさはの菊

吉秋下 ひともとと思ひし菊をひろさはの池の底にもたれか植ゑけむ　同

○むらさきのの菊

新拾秋下 なにおへる花さき匂ふ紫のひともときくに置ける初霜　同

○大井のとなせのきく
○たみのの島の菊すはまにうゑたる菊の下に女神をかさにきて貝ひろふ
○ならの佐保川の菊
○和泉ふけひのはまの菊
○伊勢のあじろはまの菊
○あふさかの菊
○家集
○大井河行幸菊の花岸に殘りて空なる星かとおどろかれ
○九十首菊歌中
○延喜十三年十月三日菊合歌
○大治二年八月廣田社歌合、判者基俊
○文應元年七社百首、住吉

瀧つせはたゞけふばかり音なせそきく人もなき思ひもぞする　同

玉秋下
たみのともいまはもとめじ立ちかへり花の雫にぬると思へば　同

千鳥故さほの河原をとめくればみなそこきりてさける菊かな　同

けふ〳〵と霜置きまさる冬はたゞ花うつろふと恨みゆくらむ　同

いはにさくあじろの菊をしほひには玉とぞとめむなみの下草　同

この花に咲きつきぬらし關川のこゑず（うきくもイ）もみよとをれる菊のは　同

おほゐ川きしにとまれる菊の花浪よせかけて色もさだめず　參議伊衡卿

岸近くまれにのこれる菊の花あまのかはせの心ちすらしも　花山院御製

よそに見るとなせの菊の花盛りをらばや折らむたきなくもがな　從三位爲實卿

うつしける心のさかもひろさはや菊と月とにすめる池水

花なびく菊のえながら白妙にいさご吹きあげのはまのしほ風

新續古秋下
なみとのみうちこそみゆれすみのえの岸にのこれる白菊の花　坂上是則

君がためちよまつ風にすみよしの神やうゑけむ岸の白菊　讀人しらず

判云すみよしの菊よめらむ不レ覺すみよしにはしのぶぐさわすれ草松などをこそ證歌ききて勝負可申云々

ゆふしでか浪かあらぬかすみのえの松のしたなる白菊の花　民部卿爲家

○伊勢
○石清水
○菊花臨レ水一字抄
○弘安元年百首
○柿本影供百首
○九日
○家集、菊宴の時
○天慶八年內裏御屛風
○寬平御時菊合歌
○家集、うつろふ菊を人の許よりおこせたりける返し
○陽成院七十の御賀によめる
○天曆七年十月內裏の菊合に、すはまに菊あり

ちはやふるかみがき山の白菊は天照る秋の星かとぞみる　同

かみ山の菊の下水せきかへし老いせぬ秋をとゞめてしがな　同

吉野川きしの白菊さきにけりおりしくなみに露やおくらむ　大藏卿行定

秋の色の花のおとゞときゝしかどしもの翁とみゆる白ぎく　後九條內大臣

秋のひのいそのうらわのあま人は菊さく道にしほやくむらむ　同

新千秋下 いくたびか霜はおきけむ菊の花八十島ながらうつろひにけり　讀人しらず

このうたは康保三年十月十七日內裏の前栽合にあさかれひのおましのかたに八十島をつくりて庭に菊をうゑさせ給ひたりけりきくの花にかゝれける歌云々

六一 忠岑集 貫之集 をる菊の白露多みわかゆてふぬれ衣をこそおいのうへにきれ 身家集　忠岑

一枝の菊をるほどにあらたまの千年をたゞにへぬべかりけり　貫之

水にさへ流れて深きわが宿は菊の淵のとぞなりぬべらなる　同

皇のよろづよまでにまさり草たまひしたねをうゑし菊なり　讀人しらず

伊勢物語 くれなゐに匂ふがうへの白菊はをりける人の袖かともみゆ　業平朝臣

家 露かゝるきくの中なるあしたづは今いく度の千代をそふらむ　伊勢

玉秋下 たづのゐる汀の菊に白浪のをれどつきせぬ影ぞみえける　中務

○秋歌中

萬代
うゑてみる所の名にも似ぬものはくろとにさける白菊の花　大貳高遠卿

○家集中宮御歌合、玩菊といふことを

雲の上に菊ほり植ゑてかひの國つるのこほりを移してぞみる　權大納言長家卿

此歌註云風土記に甲斐國鶴郡有二菊花山一流水洗レ菊飲二其水一人壽如レ鶴云々

○延喜二年十二月前太政大臣七十賀の屏風

こ紫ちしほの色のふるければ行末とほくみゆる白菊　元輔

○題不レ知、古來歌

古里のかきねつゞきの草がれにあまりてのこる秋の白菊　源道濟

○家集、仙家菊と云ふ事を

心にもあらぬ山ぢの露のまになゝよのきくの雫をぞみる　如覺法師

○永久二年九月三井歌合、菊

かはなみの黄金をゆると見えつるは岸なる菊の洗ふなりけり　法印靜賢

○四季歌に、九月

菊の花いろのこがねにみゆればや草のやどりに露もおくらむ　大貳高遠卿

○堀河中宮女房より送りける菊歌の返し

白かねとこがねの色にさき紛ふ玉のうてなの花にぞありける　同

○常磐百首、水岸菊

時ならぬ雪のつゝみとみゆるまで池をめぐりてさける白菊　源仲正

○家集、九月十三夜に

こよひはと心えがほにすむ月のひかりもてなす菊の白つゆ　西行上人

○長承三年九月十三日顯輔卿家歌合、月

さらしなの山ぢにさける白菊の花もまばゆき秋のよの月　藤原忠兼

此の歌判者基俊云さらしなの山ぢにさける白菊はと讀めり未レ聞二本文證歌一とし頃はさらしなにはたゞ慰めがたき月てる所とのみこそ知りて侍れさらに菊さける所とはうけ給はらず若し山ぢの菊の露のまにと

よめるふることなどにおぼしわたりて被レ詠たるにや侍るらむかれば
仙家の菊也更非二俗境之菊一云々

○家集
たれとわれ庭にたはれむませゆひし宿のむら菊花咲きにけり　顯仲朝臣

○家集、菊繞二禁庭一
八重菊のさける所のなにしおはば今一重をば添えてみてまし　清輔朝臣

○御集、五行御歌中黄
秋の日の光のまへにさく菊のかれ野の色にまがひぬるかな　後京極攝政

○家集、秋歌中
西のその千代へて後やむらさきの雲とも見えむ白菊の花　從二位家隆卿

○文治二年百首
またもあらじ花よりのちの面影にさくさへをしき庭のむら菊　前中納言定家卿

○永久四年九月雲居寺後番歌合、菊
秋はなほたちそふ浪とみゆるかな籬のしまの白菊の花　覺盛法師

○のこりの菊ををしむといふことを
わかれにし秋の殘りて菊の花匂ふまがきのしまにぞありける　權中納言定頼卿

○これをききておなじくよみける
過ぎぬとてをしみし菊はさき殘る籬のしまにとまるなりけり　前中納言通俊卿

○家集、菊歌中
やへ菊の花の袂をあかずとや霜のうはきをなほかさぬらむ　藤原忠房

○家集、菊を
いく秋にわがあひぬらむなが月のこゝぬかにつむやへの白菊　西行上人

○十題百首、菊
谷川のいはねの菊やさきぬらむ流れぬ浪の岸にかゝれる　後京極攝政

○ある所へ硯のふた返すとて菊をまきたりければ
ときならぬ花もさきけりたまくしげふたみの浦の秋の白菊　少將內侍

○久安百首御歌に菊を
星とのみまがへる菊のかをりかは空だき物の心ちこそすれ　崇德院御製

初春の梅をだにこそをしみしか思へばいまはひとつこのはな　同

○伊勢記、菊を作る長歌

ぬれてほす　露のしら玉　おく山の　いくちとせとも　しら　鳴　長　明
菊は　草のあるじと　なりながら　よろづの花の　弟にて
いとゞにほひを　のべにみつ　あきの千草の　いろをなみ
うらさびしかる　このごろも　わか紫に　にはをそめ

○喜多院入道二品親王家五十首

百草の花のおとゞとなりぬればやへ〳〵にのみみゆる白菊　正三位季經卿

○九十九首、菊歌中

八重むぐらかどさすまでもいろめくは菊こそ草の主なりけれ　從三位爲實卿

○禎子内親王家歌合、九月九日

いろ〳〵の匂ひをこめて初霜のおくゆかしげにみゆる白菊　加賀左衞門

○久安百首

色々にうつろふ菊のうは露はむらごにそむる玉かとぞみる　大炊御門右大臣

○百首歌、菊花重々

うすくこくうつろふ色は白菊の千草にもとをわけぬばかりぞ　寂蓮法師

○御集、御作に

むしろだのいつぬぎかけし玉ならむちとせを契る菊の白露　後堀川院御製

○二條院大嘗會

たがみやの里のしるしに白菊の花の雪とはみゆるなるべし　讀人しらず

○家集

紫の一もときくに萬代をむさし野にこそたのむべらなれ　中納言兼輔卿

○九十九首、菊歌中

とまらじな野もりがねやのかや筵かりにも菊の花なかりせば　從三位爲實卿

花のなもこもりし妻やこれならむ一もときくの武藏野の原　同

牡鹿伏す野原の菊のいかならむかやが茂みもわけみだすなり　同

夕しものふる野の菊の花の色に衣手かゝる秋の中みち　同

秋田刈るしのやの菊をこきまぜてほさぬをしねの露ぞ色づく　同

山どりの岡邊のきくのしたもえにながき夜つたふ空の月影　同

もとしげきむかひの岡の菊のえにまじりてあをき花の下草　同

われさらばしめゆひ立てむ岡のべに人もすさめぬそが菊の花　同

やまあゐのをみの衣にまがふやとわが袖そめむ菊のはなずり　同

菊にそめ紅葉につけて山ひめのふたつの色を誰ゆるすらむ　同

藤ばかま見えけむ夢ぞ忍ばるゝね覺めの菊の花のかをりに　同

菊さきてゆききの袖のやすらひにことのねこもる宿の夕暮　同

花よりもたえぬ下葉はおちにけり霜まつ菊は枝ばかりして　同

をとめごはたれとかきくの花かづらかけはやしらむ秋の心を　同

面かげは梅やなぎにもかさなりて春秋かよふやへぎくの花　同

雨すさむ風のしをれ葉かたよりに菊あらはなる宿のあしがき　同

たねしあれば苔ばかりなる岩がねにひとくき（さイ）さける白菊の花　同

枯れぬればちらでもねにや歸るらむ古枝の菊は若葉さすなり　同

はげしさに絶えたる菊や思ふらむあらしのこのは心輕さを　同

○光臺院入道二品親王家五十首、殘菊匂

草も木もうつろひはつる秋風にひとりしをれぬにはの白菊　從三位範宗卿

○永久二年太神宮禰宜歌合、菊
風にあへずしをるゝ野べの草のはをもどき顔なる庭の菊かな　讀人しらず

○主基方御屏風
色も香もうつりやすると旅人の衣に匂へしらぎくの花　前中納言匡房卿

○堀川院御時百首
かばかりの匂ひもあらじ菊の花うべこそ花のあるじなりけれ　同

○永久四年百首、九月九日
けふごとにきくを藥とする人はちとせの秋をすぐるなりけり　仲實朝臣

○寛喜元年女御入内御屏風、重陽宴
こゝのへのとのへも匂ふ菊のえにことばの露の光そへつゝ　前中納言定家卿

こゝのへや千年のかめにさす菊の匂ひも深しかけることのは　從二位家隆卿

○百首歌
さぐりえて其の一もじぞあらはるゝ箱をひらける菊の言の葉　前中納言定嗣卿

○寶治二年百首御歌、重陽宴
かきおける言葉のつゆも玉しきのこゝのへにさく庭の白菊　後九條内大臣

むらさきにつらぬる袖やうつるらむ雲のうへまで匂ふ白菊　常磐井入道太政大臣

新拾秋下
もろ人のけふ九重ににほふてふ菊にみがける露の言の葉　民部卿爲家

をる人の老せぬ秋の露までにちとせをめぐる菊のさかづき　俊成卿女

山人の宿はいくよのあとふりてあきを忘れぬ菊のさかづき　從二位賴氏卿

千代ふべき山ぢの菊をかめにうゑていま長月の雲ゐにぞかる　信實朝臣

○六百番歌合、重陽宴
雲の上にまちにしけふの白菊は人のことばの花にぞありける　後京極攝政

○千五百番歌合
行き通ふ人だにあらばとひてまし山ぢの菊のちよのけしきを　第三のみこ惟

○百首歌、宴遊
あまの河ひかりをかはす星なれやけふもてあそぶ白菊の花　慈鎭和尚

○正治二年百首
しらぎくは秋の雪とも見ゆるかな移ろふ色をふゆの花にて　同

○文治六年五社百首
瑞垣のあたりにさける菊よりや久しき秋の花となりけむ　皇太后宮大夫俊成卿

秋をへて思ひぞいづる雲の上の星にまがひし菊のとの花

○住吉
かたそぎやたまのみと野の初霜にまがひてさける白菊の花　同

○久安百首
續千秋下
山河の水のみなかみたづねきて星かとぞみる白ぎくのはな　同

○[illegible]歌合に殘菊を
星とのみまがひし菊は紫にうつろふのちぞ雲とみえける　權大納言實家卿

○百首御歌
幾秋もつきじとぞ思ふみなせ川老いせぬ菊のかげをせきつゝ　順德院御製

○最勝四天王院名所障子
山風のよそにもみぢばみなせ川せきいるゝ宿の庭の白菊　從二位家隆卿

よろづよの契りぞむすぶみなせ河せきいるゝ庭の菊の下水　大藏卿有家

よろづよの秋までこそはみなせ河せきいるゝ庭の菊の下水　俊成卿女

この里に老いせぬちよはみなせ河せきいるゝには菊の下水　前中納言定家卿

○寛喜元年女御入内御屏風
老をせく菊の下水手に結ぶこの里人ぞちよもすむべき　同

○養和元年百首歌
さきまさるくらゐの山の菊の花こきむらさきに色ぞうつろふ　同

○文治五年百首
ひとすぢにたのみしもせず春雨にうゑてし菊の花をみむとは　同

○建保四年百首
契りありてうつろはむとや白菊の紅葉の下の花にさきけむ　同

○家集、菊歌
うみとなるするゑぞ久しきながつきのけふつむ菊の秋の白露　民部卿爲家

○正嘉三年毎日一首中
けふは又しらぬ山ぢのきくの花都のてぶりうつしてぞみる　同

○寶治二年百首、重陽宴
我が君のよをなが月によろひとはけふ白菊の色にまがひぬ　光俊朝臣

○文永二年詩歌合、仙家秋興
ぬれてほす露もちとせの菊の花はこやの山にうつしてぞみる　權中納言公雄卿

○六帖題
新六六
たてながら籬のきくのつくり花心づからの色とやはみる　信實朝臣

新六一
かきねなる菊のきせ綿けさみればまだき盛りの花咲きにけり　同

○秋詞歌中
おなじ枝をいかに分けてかそめつらむなかば移ろふ白菊の花　花山院入道右大臣

○建長八年百首歌合
いろ〳〵に菊の綿ぎぬ染めかけてまだき移ろふ花とこそみれ　從二位行家卿

○歌林苑歌合、菊を
紫の雲間のほしと見えつるやうつろひのこる白菊の花　清輔朝臣
或本藤原伊綱歌云々

○橋邊菊を
かさゝぎのわたさぬ橋のあたりまでほしか河邊の白菊のはな　隆祐朝臣

○家集
しぐれする山ぢの星のくらきよは獨りまがきになびく白菊　同

○菊をよめる、古來歌
これよりや天の川せにつゞくらむ星かとみゆる菊のたかはま　法印公譽

○同、後葉
花さかぬ常磐の山に如何にしてけふこゝぬかの菊を摘むらむ　讀人しらず
此の歌爲忠朝臣ときはのいへに住み侍りけるに九月九日ある人のもとより申しおくり侍りけると云々

○正治二年百首
つゆ霜に籬のきくは枯れはてて木の葉の底にのこる蟲のね　前大納言忠良卿

秋水

〔建仁二年内裏十五首歌合、秋水〕

秋風のかつふきはらふ谷のとに思ふもきよくすめる山水　前中納言定家卿

山のはもしぐれはまだきあさ日影くれなゐ匂ふ谷（瀧歟）の白絲　同

おとは川せきのあらしの影見えてたが色深き秋のたきつせ　參議雅經卿

夫木和歌抄卷第十四 終

夫木和歌抄　巻第十五

秋部六

題　秋山　蔦　柞　櫨　檀　薜
　　桐　紅葉　暮秋　九月盡

秋山

○治承二年右大臣家百首

秋深み青葉の山も紅葉せりなほはしぐれもそめじと思ふに　皇太后宮大夫俊成卿

○建保四年百首歌

露しぐれうはけにはらふ水とりの青葉の山も色にいでつゝ　光明峯寺入道攝政

○永久四年百首、秋山

まこも色のあをばの山も秋くれば露の雫に下もみぢせり　（信イ）仲實朝臣

○洞院攝政家百首、紅葉

あしのはに夕霧たちぬなにはがたむこの山邊も色づきぬらむ　從二位家隆卿

○同百首

あかねさす日も夕しほにこぐ舟のわたりの山の紅葉しにけり　同

○題不レ知

（續千五）秋さればおく露しもにあへずしてみやこの山は色づきぬらむ　讀人しらず

○長歌

（萬二）顧みすれど　大船の　渡りの山の　紅葉ばの　散りしみだれ
に　妹が袖　人麿

〇家集、或所屏風歌
霧もたち紅葉もちれるうりふ山越え惑ひぬる今日にもあるかな　惠慶法師

〇建久三年九月十三夜左大臣家にて
おのれのみ秋をばよそにみむろ山いはむす苔に時雨ふれども　前中納言定家卿

〇建保三年名所百首
玉秋下
いこま山あらしも秋の色にふく手ぞめの絲のよるぞ悲しき　同

〇正治二年仙洞十首歌合、山嵐
秋の紅葉一葉もをしめみむろ山ゆるす時雨の染めつくすまで　同

〇貞應三年四季百首、秋雲
思ひあへずしぐれにけりなたつた山うすがすみゆく秋の村雲（雨イ）　民部卿爲家

〇百首歌、遊山催興
松がねの茸がり行けば紅葉ばを袖にこきいるゝ山おろしの風　寂蓮法師

〇秋歌中
現存六
下紅葉うつろふまゝに小倉山色ことになる峯のしひしば　常磐井入道太政大臣

〇惟貞親王家歌合
日ぐらしのなく秋山をこえくればことぞともなく物ぞ悲しき　讀人しらず

〇三百六十首中
ともしすと秋の山べにいる人の弓のや風にもみぢ散るらし　好忠

〇康元元年毎日一首中秋歌
色かはるふぢのうらはのかつちりて松あらはるゝ秋の山もと　民部卿爲家

紅葉こそときはの色となりにけれひとりさめたる松もしぐれて

〇家集、紅葉
もみぢするおなじみ山の梢にてひとりさめたるいはね松かな　清輔朝臣

〇七百首中
たれならむ時雨にあける秋山にひとりさめたる松の緑葉　權僧正公朝

蔦

〇文治六年五社百首
すみの江にかゝれる蔦の紅葉ばは浪も幾しほよりてそむらむ　皇太后宮大夫俊成卿

○住吉社百首
おしなべてみなすみよしの松の中に秋をこめたる蔦の色かな　慈鎮和尚

○百首御歌、古寺紅葉
秋の色を音にきけとやはつせ山蔦にうもれて鐘ひゞくらむ　同

○六百番歌合、蔦
玉秋下
としをへて苔にうもるゝ古寺の軒に秋あるつたの色かな　同

○百首歌、紅葉
宿うづむ軒ばの蔦の色をみよみ山が里の秋のけしきに　參議雅經卿

○寛元四年十一月當座百首、秋歌
軒つたふ蔦のすゑはにかくろへてあまり氣近き日ぐらしの聲　爲實朝臣

○永久四年百首、蔦
山里のむぐらのかきにはふ蔦の色にて秋の深さをぞしる　二條太皇太后宮肥後

○洞院攝政家百首、旅
言の葉は蔦のもみぢにかきつけつ都におくれうつの山風　從二位家隆

○六百番歌合、蔦
新續古旅
うつの山こえし昔の跡ふりて蔦のかれ葉に秋かぜぞふく　後京極攝政

あしの屋の蔦はふ軒の村時雨おとこそたてね色はかくれず　前中納言定家卿

けさみれば蔦はふ軒に時雨してしのぶのみこそ青葉なりけれ　隆信朝臣

ちらぬより紅葉にたどる山ぢかないはねの蔦や色かはるらむ　從二位家隆

しづえまでかゝれる蔦はもみぢして錦をはるはわだのかさ松　正三位季經卿

○洞院攝政家百首、紅葉
みむろ山玉まつがえに取りかけてたがたむけたる蔦の紅葉ば　大納言經通卿

○題不知
六帖
いと早も鳴きぬる鴈かこがの杜木にはふ蔦も紅葉あへなくに　讀人しらず

○建長八年百首歌合
きくにはふ蔦もみぢせりこがのもり淀の渡りや時雨しつらむ　光俊朝臣

○正和二年後日一首中
小倉山松の木かげになく鹿の涙いろづくつたの紅葉ば　民部卿爲家

○文永二年毎日一首中
○秋杉を
○長歌
○寄社、賀茂下社にて
○康和三年九月河原院歌合、さほ山のもみぢを
○題しらす、萬家百首
○柞葉一變といふことを、雲葉
○柞葉漸紅なりといふ事を
○建保百首中
○六百番歌合、柞

植ゑおきし木ずゑはもりとこだかくて蔦ふく軒に涙こそもれ　同

みわの山いがきの蔦の色なくてすぎには秋のしるしをもみず　藤原爲守

萬十七 みのさやけきか　玉櫛笥　二上山に　延ふ蔦の　行きは別れず　あり通ひ　讀人しらず

柞

神山のはゝその紅葉いちじるくわが思ふ事をてらすなるべし　太宰大貳高遠卿

さほひめにとひみてしがなわきてしも柞の紅葉あさき心は　讀人しらず

古秋下 あき霧はけさはなたちそ龍田山柞のもみぢよそにてもみむ　讀人しらず

續古秋下 柞原しぐるゝかずの積ればやみるたびごとに色まさるらむ　白川院御製

玉秋下 時雨するいはたの岡の柞はらあさな〳〵に色かはりゆく　前中納言匡房卿

さはりせしふたごの山の柞原よにうみすぎてきえぬべきかな　俊頼朝臣

山めぐる時雨のやどかはゝそ原わが物がほに色のみゆらむ　慈鎭和尙

はゝそ原すゞみし夏のあを木立いろかはりても猶なるゝかな　正三位季經卿

秋ぞかし岩田の小野のいはずともはゝその原に紅葉がりせむ　大藏卿有家

松かげにいかに時雨のもりぬらしいはもと柞まづ紅葉せり　法橋顯昭

〇永久四年百首、柞 いはばやないはでの杜の柞原へだつる霧はたちものくやと 藤原忠房

かた岡のおふしまじりに生ひしげるはゝその小枝初紅葉せり 源兼昌

〇家集、秋歌中 まきのたつあら山かけてしぐれつゝ柞の杜ぞ色にいでぬる 權僧正公朝

〇常磐井入道太政大臣家三十六首 夕日さす野山にたてるはゝそ原かた枝しぐれてすぐる秋かな 民部卿爲家

〇弘安二年若宮百首、紅葉 松山に柞かへでのまじらずはしぐれけりともいかでかはみむ 安嘉門院四條

〇秋地儀 色うすきはゝその一葉ちりそめて霧の下よりあまる山風 參議爲相卿

〇永仁三年九月爲世卿家會、柞を しづかならぬ風のうへきも思ふかな殘るはゝその秋の心を 藤原爲顯

〇寶治二年百首、河紅葉 打ち渡すほどはいそがしさほ河の汀のはゝそ紅葉しにけり 少將內侍

〇六帖題 新六二 賤がすむ垣根につゞくはゝそ原里の時雨ももみぢしにけり 信實朝臣

同 峯つゞくと山のすその柞原秋にはあへずうす紅葉せり 民部卿爲家

〇柳集、林葉 はゝそちる箱根の山に吹く風は紅葉をまける心ちこそすれ 中務卿のみこ鎌倉

〇森 六二 やま城のいはたの杜のはゝそ原いはねど秋は色に出でにけり 紀郎女

〇題しらず 萬九 新古 山しろのいはたのを野の柞原みつゝや君が山路こゆらむ 式部卿宇合

櫨

〇百首御歌 一目見しとほちの村のはじもみち又もしぐれて秋風ぞふく 順德院御製

○文應二年毎日一首中
○家集、秋歌
○寛元三年結緣經日百首
○嘉元元年竹園千首御會、寄國戀
○秋歌中、古來歌
○家集、高野にすみける時寂然法師すみける大原へつかはしける
○閑居百首、贈答歌
○柿本影供百首
○題しらず
○百首御歌
○六帖題

ありま山しぐるゝ峯のときは木にひとり秋しるはじ紅葉かな　民部卿爲家

木枯のすゐの原野のはじ紅葉かつさそはれてくるゝ秋かな　同

現存六
山もとの賤が垣根のむら竹にもりて色づく櫨もみぢかな　同

言のはをこれにならひてちらすなよ玉づさつぐる櫨の一枝　參議爲相卿

あらち山時雨ふるらしやたのなる百枝のはじは紅葉しにけり　法印實伊

山深み窓のつれ〴〵とふものは色づきそむるはじのたち枝　西行上人

檀

もゝつてのいそしのさゝふ時雨してうづひこ檀（まゆみ）紅葉しにけり　俊頼朝臣

このうたは田上の山ざとに侍りける比さゝのたけにのぼりてあそびけるにまゆみのもみぢを見てよめると云々

田上のさゝふのたけも時雨るなり今や檀（まゆみ）の紅葉しぬらむ　後九條内大臣

心のみひき野のまゆみすゐつひにおきふす袖も露のしげけむ　同

萬十一
葛城のうづひこ檀あをきにもたのみや君がわかなつむらむ　讀人しらず

けさみればまゆみの紅葉色ぞこきほそかは山に時雨ふるらし　後鳥羽院御製

新六六
人しれず紅葉しにけり南淵のほそかは檀いつしぐれなむ　正三位知家卿

○秋歌中
○弘長三年百首
○久安二年六月大宮太政大臣家歌合、紅葉
○六帖題
○かづらきの山をすぎけるにまさきのもみぢをみて
○千五百番歌合、秋歌中
○永保三年齋宮歌合、紅葉
○正治二年百首歌
○建長四年毎一日首中、秋雨
○建保二年秋五十首歌合、秋雨

玉葉 おしなべてまだき檀の色づくはいる日をうけて露や置くらむ　和泉式部
風わたる岩垣まゆみ今はとやよりこし波もひきかへるらむ　後九條内大臣
苔のむすいはがきまゆみ色深しこれを嵐にしらせずもがな　左京大夫顯輔
新六六 山深みいはがきまゆみ紅葉せばたれみよとてか時雨染むらむ　衣笠内大臣
新六六 あづま野の檀のもとは色こくてときはすがたもいつ紅葉せむ　信實朝臣

薜

かづらきやまさきの色は秋にしてよその梢は青葉なるかな　西行上人
外山までみ山のあらし分けすぎてまさきのかづら秋風ぞふく　後鳥羽院宮内卿
夕さればこそみえね音羽山ちるやまさきの紅葉なるらむ　源頼綱朝臣

桐

もゝしきや桐の木ずゑにすむ鳥のちとせは竹の色もかはらじ　寂蓮法師
古里のきりの梢をながめてもすむらむ鳥を思ひこそやれ　從二位家隆卿
そともなる桐のひろはに雨おちてあさけ涼しき風の音かな　民部卿爲家
人は來ずはらはぬ庭のきりの葉におとなふ雨の音の寂しさ　大納言通具卿

此の歌判者定家卿云雨滴梧桐山館秋といへる景氣かよひ侍るにやと云

紅葉

萬十
古郷の初もみぢ葉を手折りてもけふぞわがくるみぬ人のため　讀人しらず

ならのはの名におふ宮のうす紅葉そむるやせみの涙なるらむ　土御門院御製

風に靡く雲の行くてに時雨れけりむら／＼青き木々の紅葉ば　順徳院御製

は山木は夕になればむらごなりたがおりそむる錦なるらむ　好忠

杣人は露ときえしを唐にしき峯の秋霧おのれたつらむ　惠慶法師

つゝめどもおいその杜の薄紅葉たへても色にいでにけるかな　中宮權大夫家房卿

うらみけむなにはのみつの秋の空梢もはやく紅葉しにけり　大藏卿有家

あまの袖あらそひかねてまつ島も下紅葉する秋ぞ悲しき　從二位家隆卿

色ふかきいぶきの山の紅葉かなおふらむ草はさしもこがれし　同

もみぢばを霧なへだてそ生駒山しぐるゝ雲は又もはれなむ　兵衛内侍

紅葉するふじのしは山こがれつゝ秋を燒く火の煙なるらむ　家長朝臣

暮れぬとてかつちる山の紅葉ばに嵐吹くよとみてやかへらむ　修理大夫顯季卿

○詠黄葉歌中
○鐘鳴黄葉滴宮秋といふ事を
○百首御歌
○三百六十首中
○百首歌中
○六百番歌合、老戀
○光明峯寺入道攝政家百首、古寺紅葉
○建保二年名所百首
○洞院攝政家百首、紅葉
○家集、暮山落葉

○家集、秋歌中

風秋下 下紅葉いろ〳〵になる鈴鹿山時雨はいたくふるにぞあるらし　能宣朝臣

○閑居御百首、贈答歌

伊勢の海やあまのとやまの紅葉ばに舟ながしたる秋風ぞ吹く　後九條内大臣

○百首御歌

しぐれゆくまゆみの岡の薄紅葉たまらぬいろに秋風ぞふく　順徳院御製

續後撰冬 ながれ行く紅葉やあきのとませ河ゐでこす浪に嵐吹くらし

山人の日も夕こりのしもとゆふまさきのかづら今やそむらむ

○文治六年五社百首

旅衣にしきたちきぬ人ぞなき紅葉散りかふしがの山ごえ　皇太后宮大夫俊成卿

○二條院御時五首御會、紅葉出墻

山姫や岩がきがくれたはるらむもみぢがさねの袖の見えつる　同

○仁安二年八月經盛家歌合、紅葉

もみぢ葉はくれなゐ深くなり行けど獨りさめたる松の色かな　藤原伊行

○家集中

たづね見る紅葉の影にいほしめてすまばややがて大原の里　參議爲相卿

○最勝四天王院名所御障子

うつの山うつゐばかりの峯の色はわきて時雨や思ひそめけむ　前中納言定家卿

たれにかは風のたよりもしらすべき紅葉吹きしくうつの山道　具親朝臣

もみぢ葉の關はすゞかのいせの山錦をぬすむ風をとほすな　慈鎭和尚

○百首御歌

色ふかき杉間の紅葉たづねきて秋のしるしを三わの山もと　同

○家集

秋かけてかもの時雨やふりぬらむわがかた岡の紅葉しにけり　實方朝臣

くれなゐに秋やたむけて染めぬらむ松の尾山の峯の紅葉ば　民部卿爲家

○嘉元三年百首、紅葉

秋ふかき三山の梢あめそめてひと葉かつちるくれの寂しさ　參議爲相卿

○建保三年内大臣家百首

立田山神のみけしにたむくとやくれゆく秋の錦おるらむ　前中納言定家卿

○三十六人歌合

たつたひめ秋のみけしやこれならむ紅葉重ねの衣手のもり　前大納言爲氏卿

○百首

現存六
くれなゐにちしほやそめし山姫のもみぢがさねの衣手のもり　俊成卿女

○家集

よそにみて散りやすぎなむたか取のこじまの紅葉浪ごしにして　正三位知家卿

○後朱雀院女房歌合

青柳のところだになき紅葉ばを折りかけてける霜かとぞみる　讀人しらず

○家集

紅葉ばのいろの赤さにめをつけて鞍馬の山によるたどるかな　廬主

○建長四年歌合

まきもくのひはらの山の下紅葉まれなる色のちらまくもをし　源經平朝臣

○仁安二年經盛卿家歌合

覺束ないづれうらごの山ならむみなくれなゐにみゆる紅葉ば　清輔朝臣

○永曆元年八月清輔朝臣家後番歌合、紅葉

みつの杜もみぢの色も見るべきに立ちなかへしそ淀の川霧　源雅重朝臣

○紅葉留客

歌苑抄
暫しとも岩手の杜のもみぢ葉は色に出でてこそ人をとめけれ　源賴綱朝臣

○長承三年九月顯輔卿家歌合、紅葉

いくしほか時雨ふりいでてそめつらむ唐紅に木がらしの杜　藤原爲忠朝臣

○永久四年十月齋宮宣旨家歌合、本廣篠杜

行きやらで秋は心のとまるかなもみぢ散りしくこがらしの杜　讀人しらず

ふかくのみ秋のそめゆく紅葉ばをちとせにちらす木枯の杜　同

○題不知

題五
打ちむれてこむ人は猶こがの杜木々の紅葉のまだちらぬまに　同

○經盛卿歌合、紅葉

歌苑抄
初時雨ふりにし里をきてみれば御垣の原にもみぢしにけり　藤原資隆朝臣

○建保三年名所百首

小倉山峯の木のはや色にいでてふりにしみゆき今も待つらむ　正三位忠定卿

〇洞院攝政家百首、紅葉
神世よりをぐらの山の紅葉ばはしたてる姫やそめ初めけむ　從二位家隆卿

〇百首
をぐら山松のたえまのもみぢばに秋のそめける色ぞかくれぬ　安嘉門院四條

〇洞院攝政家百首、紅葉
露霜のおれる衣のやち草に秋は木のはの色ぞみだるゝ　信實朝臣

〇百首御歌
むら時雨ふりみふらずみくれなゐの初花ぞめの峯の紅葉ば　洞院攝政

〇建保二年水無瀬殿秋十首撰歌合
河波のくゞるも見えぬ紅をいかにちれとか峯の木がらし　前中納言定家卿

〇洞院攝政家百首、紅葉
わきてみむ春さくるでの花ならでいはぬ色なる峯のもみぢば　常磐井入道太政大臣

〇落葉を
歌苑抄
うすくこくちる紅葉ばをこきまぜて色々にふく秋の山風　源頼行

〇弘長元年百首、紅葉
露さむみ秋なく蟬のひぐらしもあかずぞみつる山の紅葉ば　從二位行家卿

〇家集
鳴く蟬もあきのひゞきのこゑたてて色にみ山の宿のもみぢば　前中納言定家卿

〇建久八年百首十八首續歌
色にいでて秋の梢ぞうつり行くむかひの峯のうかぶさかづき　同

〇後九條內大臣百首歌合
石向
鴈なきてはだれ霜ふる此のゆふべるなのは山の紅葉しにけり　法印實伊

〇文永七年十首歌合、紅葉
日をさふる夕べの山のゆき合や青葉に歸る紅葉なるらむ　後九條內大臣

〇柿本影供百首
昨日けふ紅葉やさかりしるしらず人は木影に日ぐらしの山　同

〇喜多院入道二品親王五十首
秋はきてたがすみすてし宿なれや紅葉ふりしく深草の里　從二位家隆卿

〇大治三年八月廣田社歌合、紅葉
いとゞしく照りこそまされ紅葉ばに日影うつろふ天のかぐ山　後三條內大臣

〇光臺院入道二品親王家五十首、夕紅葉
しぐれつる木ずゑは晴れて夕づく日錦ほすてふあまのかぐ山　從二位範宗卿

しがらきのと山の紅葉おのれとや夕日をそむる色增さるらむ　光台院入道二品のみこ

○秋歌中

林葉

たかしやま紅葉をこゝに吹く風はいま一入の色そめよとや　前大納言爲氏卿

○名所歌中、鳥籠山紅葉

よそにみてやすくはすぎし高瀬川紅葉のかたの道はなくとも　參議爲相卿

○式部卿親王家五十首續歌中

もみぢ葉も今やちるらむおとたつるならしばの野の風の風

○題不知

萬十六

たつた姫紅葉の錦たむけにと二かみ山にそめかけてけり　讀人しらず

○洞院攝政家百首、紅葉

しぐれつゝおのれ色分け筑波嶺のそがひにみゆる秋の紅葉ば　從二位成實卿

○元久四年詩歌合、山路秋行

薄もみぢ花におとらぬ梢かな春をおもはじしがの山ごえ　正三位季經卿

○光台院入道二品親王家五十首、夕紅葉

夕時雨ふるから小野の本がしはもとつはながら紅葉しにけり　家長朝臣

○洞院攝政家百首、紅葉

時雨のみふるからをのの本がしは本の葉もなく紅葉しにけり　光明峯寺入道攝政

○光台院入道二品親王家五十首

もみぢ葉に昔をとへば立田河をりしも空もかきしぐれけり　皇太后宮大夫俊成卿

○千五百番歌合

たつた姫たつたの山はわが名とや紅葉もことに思ひそめけむ　同

○家集、紅葉

露のぬきよはの山風このごろはたつたの錦心してふけ　從二位家隆

○天福元年四月藏人所歌合、紅葉

今はたゞ紅葉のにしきたつた姫そめかけつらむさほの山べに　讀人しらず

○正治二年百首

さほ山は紅葉むらごのきぬ掛けて松の緑ぞひとへなりける　土御門内大臣

十首歌

露しもや矢野の神山くれなゐに匂ひそめたる峯の紅葉ば　民部卿爲家

たつた姫かけてほすてふもみぢばのやしほの衣雨にそめつゝ　同

○五十首歌、夕紅葉
○韻家百二十八首秋歌中
○老若五十首歌合
○六十五番歌、秋風吹レ草空催レ涙 白露變二雲似二瀬遊一 隨イ
○洞院攝政家百首、紅葉
○文應元年七社百首、伊勢
○石清水
○日吉
○住吉
○八門紅葉
○洞院攝政家百首、紅葉
○最勝四天王院名所御障子

龍田姫雲のはたてにかけておる秋の錦はぬきもさだめず　前中納言定家卿

思ふとも今はのこらじ秋の色は峯ふく風に木のはくだけぬ　同

山ひめのぬさのおひ風吹きかさねちひろのうみに秋の紅葉ば　同

苔の上にきのふの紅葉焚きすてて秋の林にたれあそびけむ　同

やま人のうたひてかへる夕べより錦をいそぐ峯の紅葉ば　同

山もとの河せの波は色にいでて秋の日數にうつりはてぬる　民部卿爲家

露時雨もりにけらしな神路山この下紅葉いろかはりゆく　同

やはた山紅葉をぬさとたてぬきに錦おりかくなが月の比　同

神山のすきまの紅葉つゆ霜にあきのしるしぞよそに見えける　同

すみよしのあけの玉がきひとつ色にしぐるゝ比の秋の紅葉ば　同

住吉の松のたえまの紅葉にやつもりのあまは秋をしるらむ　左京大夫顯輔卿

神なびのあさ澤原の初紅葉けふしめざしてまたもきてみむ　大納言經通卿

をとめごがもみぢの衣打ちしぐれ袖ふる山の秋のみづがき　從二位家隆卿

もみぢ葉の山櫻戸もあけてけり花にまたれし人やまつらむ　從二位賴氏卿

まつらひめこずゑの紅葉色そめてあきふる袖は錦なりけり　從三位行能卿

唐錦きみに見よとやまつら山のこるもみぢも枝に一むら　慈鎭和尚

○仁安三年奈良歌合、判者俊成卿
まつら山紅葉しぬれば紅のひれは木末にふらせてぞみる　覺稱法師

もみぢする賤はた山の唐錦たたむたたじは風のまに〳〵　濟祐法師

いかなればあさかの山のあやにくに紅ふかく紅葉しぬらむ　常陸丸

○家集、みちの國へ下りけるに
唐錦おら（たた歟）まくをしき木のもとはふたむら山の紅葉なりけり　橘爲仲朝臣

○三百六十首中
くらま山秋の月夜にみればあかし岑に紅葉やいとゞ照るらむ　好忠

○くりこま山なる人の家に女ども紅葉見るを
紅葉せるくりこま山の夕かげをいざ我が宿にうつしもたらむ　能宣朝臣

○村上御時殿上紅葉歌合
思ひやるくらぶの山の紅葉ばにおとらぬものは心なりけり　元輔

○紀伊より京へのぼりにくらぶ山にて
ときは木にもみぢの色をくらぶ山よるの錦と人や思はむ　祭主輔親

○障子の繪にいもせの山中に河流れたり紅葉ちりうかぶ
むつまじきおなじつゞきの妹脊山紅葉の色もわかずぞありける

萬代
いにしへの跡をたづねて大井川もみぢのみ舟ふなよそひせり　前大納言隆信卿

○家集
ひにそへてあかくぞ見ゆる鏡山紅葉の色や深くなるらむ　左京大夫顯輔卿

○屛風にかゞみの山のもみぢしたるかた
ちり積るもみぢの色や昔よりあかきかゞみの山となるらむ　謙德公

○定頼卿長谷にまうでてかへり給ひければつかはしける
家集
見すてては歸るべしやは長谷山の峯の紅葉のことはとはぬを　前大納言公任卿

○紅葉に鳥のやどりたるを
紅葉みてかへらむ方もおぼえぬをよぶこ鳥さへなく山路かな　惠慶法師

○家集、紅葉をはじめて見て
から錦おりつむ峯の村紅葉みそむるけふにあからめもせず　同

○家集、秋歌中
吹く風にすまひやすらむ神なびのうらみの山の峯の紅葉ば　同

○紅葉留行人
うすくこく龍田の山ぞ見えわたる峯のつゞきに村紅葉して　源仲正

○家集、海邊紅葉
蜑の住む磯のやま邊をみわたせば浪にぬるでの紅葉しにけり　同

○白河にて山のもみぢを
色ごとに山の紅葉のもゆるかなたかきところは松やしぐるゝ　堀川右大臣

○關白殿白川に紅葉御らんじにおはしましぬときゝて
新拾遺雜上
いかにしてありし心を慰めむ紅葉みにもとさそはれぬ身は　同

○百首中
古來歌合
うき世には長く梢の紅葉ばにちりばかりだに心とゞむる　僧都源信

○久安百首
新拾秋下
入日さすとよはた雲にわきかねつたかまの山の峯の紅葉ば　崇徳院御製

染め渡す時雨ふりての紅のやしほの岡のならのはもみぢ　前參議親隆卿

けさみればしづはた山の梢より紅葉の錦おりぞそめつる　實清朝臣

○千五百番歌合
たぐひなきやしほの岡の紅葉ばはみぬより色の程ぞしらるゝ　前中納言兼宗卿

○長承三年九月顯輔卿家歌合、紅葉
紅のやしほの岡のもみぢ葉は時雨降り出でてそむるなりけり　法性寺入道關白家三河

○仁安二年八月經盛卿歌合、紅葉
紅のこぞめの色と見えつるや八しほの岡のもみぢなるらむ　法橋顯昭

新續古秋下
色ふかきやしほのをかの紅葉ばに心をさへもそめてけるかな　刑部卿頼輔

○洞院攝政家百首紅葉
つれもなきやしほの岡の薄紅葉しぐるゝ度になぞかこたるゝ　家長朝臣

秋の色のいづこはあれどたつた姬そむる八しほの岡の紅葉ば　正三位知家卿

秋のきる紅葉の衣日をかさねうつろひまさる三室山かな　光俊朝臣

○永久四年七月忠隆家歌合、紅葉
唐錦ふたむら山のもみぢゆゑあかでもけふをたちくらすかな　藤原爲忠朝臣

○嘉應二年住吉社歌合、旅宿紅葉

しぐれする紅葉の錦ゆかしきにあけてをたゝむ二村の山　寂然法師

○嵯峨故内府墓所にて、懷舊

山里は袖のもみぢの色ぞこき昔をこふる秋のなみだに　慈鎮和尚

○後法性寺入道關白家百首、紅葉

秋風のたつた山よりながれきてもみぢの川をくゞる白波　後京極攝政

山人の木の下道はたえぬらむ軒端のまさきもみぢ散るなり

○家集

名とり川きしの紅葉のうつる影はおなじ錦を底にさへしく　西行上人

○題しらず

現存六
いなり山麓めぐりの紅葉ばは秋ばかりするあけの玉がき　讀人しらず

○寶治二年百首

うつり行く日數もいく日もみぢばをしばしとゞめよ木枯の森　光臺院入道二品のみこ

やよやまて今はかぎりの秋の色は紅葉にかぎる木枯のもり　安嘉門院高倉

露むすぶ深きもみぢのいろ／＼もしのだの杜の千枝の秋風　信實

おほあらきのうきたの森の薄紅葉かつ／＼露や色をそめけむ　從二位顯氏卿

○家集、紅葉歌中

いろ／＼にとり染めてけり龍田姫はしむらごなる衣手のもり　正三位季經卿

○紅葉遲速といふ事を

露やわくしぐれぬ先に色にいでてさもふりがたき初紅葉かな　家長朝臣

○建保三年内大臣家百首

植ゑてみる本荒の楓紅葉ばを知るも知らぬも折りにおこする　同

○洞院攝政歌百首

そめてけりまゆみの岡の薄紅葉をちかた人の心ひくまで　隆祐朝臣

○不知題

あらしふくおほえの山の紅葉ばはいくのにおれる錦なるらむ　俊盛法師

○千五百番歌合

紅葉ばにこがれおひてもみゆるかな繪島が磯のあけのそぼ舟　法橋顯昭

○百首歌、旅宿紅葉
高砂の尾上の松の秋風にとまりもしらずちる紅葉かな　従二位家隆卿

○貞應二年名所百首歌
ともとみしよその紅葉は散りはてゝひとりしぐるゝ高砂の松　民部卿爲家

○顯仲卿すゝめける住吉社歌合、紅葉謌
滿しほのひるまにすぐる吾妻路やきよみが關に紅葉しにけり　源仲房

○同歌合判云 歌イ
きよみがたやしほに埋もる紅葉ばは梢の錦たちもまさらじ　神祇伯顯仲卿

○あづまへ下りけるに
しぐれけり染むる千入のはては又紅葉のにしき色かはるまで　安嘉門院四條

此の歌路次の記に云やつはしないでて行く日いとよくはれたり山もと遠きはらのなすぎゆくひろつ方になりぬもみぢいとおほき山にむかひて行く風につれなきくれなゐ所々くちばに染めかへてけりときは木どもちたまじりてあなぢの錦なみる心ちす人にとへばみやぢ山とぞいふ云々

○承安二年法福寺歌合、紅葉
朝日さすしらつき山の紅葉ばの夕くれなゐにいかでみゆらむ　琮雅法師

龍田姫いとかの山の紅葉ばをいかにそむればむらごなるらむ　快玄法師

○永久四年八條入道太政大臣家歌合、紅葉
をしめどもいとかの山のもみぢ葉の心よわくも風にちるかな　中院入道右大臣

○紅葉未遍
いとか山しぐれに色をそめさせてかつ〴〵おれる錦なりけり　西行上人

○家集、秋歌を
雲はれぬあさまの嶽も秋くれば煙をわけて紅葉しにけり　俊頼朝臣

○家集、秋歌中
しぐれゆくかた野の原の紅葉かりたのむ影なくふく嵐かな　同

○建保四年家六首歌合、故郷紅葉
こまなめていざみかの原ふる里の紅葉は今も秋をしるらむ　光明峯寺入道攝政

○寶治二年百首
まきもくのあなし川風よきてふけ匂へる紅葉今さかりなり　光俊朝臣

○建長七年顯朝卿家千首歌、杣紅葉
まきもくのひ原にまじる薄紅葉これやくち木の杣木なるらむ　信實朝臣

○洞院攝政家百首、紅葉
この里をわきて時雨やそめつらむいは田のをのの秋の紅葉ば　常磐井入道前太政大臣

みよしのは外山の色のかはるより秋の紅葉もおくぞしらるゝ　後九條内大臣

○柿本影供百首
もみぢ葉にいはきりとほる吉野河おとして水の秋やゆくらむ　同

○南北百番歌合
新續古秋下
みよしのの花は雲にもまがひしをひとり色づく峯の紅葉ば　後京極攝政

○家集、秋風
よしの山紅葉散るらし我が宿のこずゑゆるぎて秋風ぞふく　源頼實朝臣

○建長八年百首歌合
尋ねつゝいざみの山のもみぢばの時雨にあへる色のてこらさ　前大納言顯朝卿

音にきくたかきの山はなもしるし雲居にみゆる峯の紅葉ば　右近中將經家卿

○仁安二年八月經盛卿家歌合、紅葉
朝日山峯の紅葉をみわたせばよもの梢に照りまさりけり　左中辨修親卿

○洞院攝政家百首、紅葉
あさ日山あらしや色にいでぬらむもみぢふりつむうぢの柴舟　光明峯寺入道攝政

○内裏御會、朝見紅葉
もみぢ葉の猶色まさるあさ日山よのまの露の心をぞしる　前中納言定家卿

○建保四年百首
いづみ河日も夕暮のこま錦かたえたちゆく秋の紅葉ば　同

ながつきの紅葉の山の夕しぐれはるゝ日影も雲はそめけり　同

○貞應元年歌合、紅葉交松
ながつきのもみぢの山の木枯にそめぬ松さへ色ぞうつろふ　俊實朝臣

○題しらず
萬十五 あま雲のたゆたひくればながが月の紅葉の山もうつろひにけり　讀人しらず

○六帖題
新六一 久方の中なる秋の紅葉ばやしぐるゝほかに色まさるらむ　正三位知家

○建長三年十首歌合、行路紅葉
玉ぼこのゆききのをかの初時雨もみぢの影をえやはすぐべき　前左兵衛督教定

○家集、水江紅葉
秋の日もながらの山のもみぢ葉は大津の里のかざしなりけり　隆祐朝臣

○百首歌、三神山
たむけする紅葉にあけるみ上山つゞりの袖をあはれともみよ　藤原爲顯

○紅葉不秋風
村時雨はるかにめぐると山よりをのへの里の紅葉をぞみる　後嵯峨院大納言典侍

○稲荷行幸時
いなり山すぎまの紅葉きてみればたゞあをぢなる錦なりけり　周防内侍

椎をのみこのみ拾ふに紅葉ばをあからさまにも誰をりつらむ　俊頼朝臣

此の歌はたなかみの山里にて山人の椎ひろひけるついでにもみぢををりてきたりけるをみてよめると云々

○建長八年百首歌合
信濃なる菅の荒野はうら枯れてきそのみかさは紅葉しにけり　衣笠内大臣

○大嶺のにて周防内侍のもとへつかはしける
新古神祇 いまも猶こゝろしてふけ紅葉ばのちるををしほの山颪の風　藤原伊家

○返事
續拾神祇 木がらしの心してふくしめのうちはちらぬ梢ぞおほ原の山　周防内侍

○題しらず
六帖 明玉 家集 大峯に鳴ぞなくなるうねび山みかきが原に紅葉しぬらし　中納言家持卿

○光明峯寺摂政家六首歌合、故郷紅葉
露時雨いくよをかけて染めつらむをのへのみやの秋の紅葉ば　従三位範宗卿

○門校社歌合、紅葉盡
霧のまに峯の紅葉ばたづぬとてひもたけにけりたかまどの山　神祇伯顯仲卿

○題しらず

萬八 なら山の峯のもみぢばとればちる時雨の雨しまなくふるらし　讀人しらず

萬八 秋されば春日の山の紅葉みるならの都のあれまくをしも　大原今城

○秋御歌中

新千秋下 入る月にてりかはるべき紅葉さへかねてあらしの山ぞ寂しき　惟高御製のみこ

○惟貞親王家歌合

散りまがふ秋の紅葉を見るごとに袖に時雨のふらぬ日はなし　元方

○兵部卿親王家歌合

秋山に心をのみもいるゝかなもみぢの色の深きまに〳〵　讀人しらず

もみぢ葉は霧のたつにもちりけるを風をかたなと思ひけるかな　同

六四 萬七 奥山に紅葉拾ひにいにし妹はこゝにやみたすぬ六まてど見えこず　同

○行幸

六六 吉野河きしの紅葉し心あらばまれのみゆきを色かへてまて　同

○題しらず

萬八 なら山を匂はす紅葉たをりきて今宵かざしつちらば散るとも　同

萬八 あぢさけの三六萬わのはふりか山照らす秋の紅葉のちらまくをしも　長屋王

萬十 もみぢする時になるらし月びとの桂の枝の色づくみれば　讀人しらず

萬十 飛鳥川紅葉は流るかづらぎの山の木の葉は今ぞちるらし　同

萬十五 たかしきのうらまの紅葉我ゆきて歸りくるまでちりこすな夢　同

○長歌

朝もよい　きちり古に入り立ち　待乳山　こゆらむ君は　紅葉ばの　散り飛ぶみつゝ

暮秋

○建保四年百首
ひきむすぶかりほの庵も秋くれてあらしによわき松蟲の聲　前中納言定家卿

○文治三年百首
草がれの野原のこまのうらぶれてしらぬさかひのなが月の空　同

○寄階滴雨といふことを
くれの秋はしにしたゝる夜の雨草のいほりのうちならぬとも　同

○或抄中
秋はゆきあめは靜かにふりしめて袖のしりぬる夕暮の空　同

○建久九年仁和寺宮五十首
ひとりきく空しきはしに雨落ちてわがこし道を埋むこがらし　同

○直一字三十首中
りうたんの花の色こそ咲きそむれなべての秋はあさぢふの末　同

○御集、暮秋心を
露むすぶ秋のすゑにもなりぬれば裾野の草も風いたむなり　後京極攝政

○六帖題
新六六　もずのゐる古枝のはぎも霜がれてあしたの原に秋ぞ暮れ行く　衣笠内大臣

新六六　なが月の末野の霜に音かへてさかりすぎたる女郎花かな　同

○建長三年鳥羽殿十首歌合、草花露
すがのねのなが月の夜のあけたては露けさまさる秋萩の花　同

○六帖題
新六一　いはきにも物の心はありといへばさぞな別れの秋は悲しき　光俊朝臣

○六百番歌合、暮秋
新續古秋下　なか月のつきも有明になりぬれば秋くれはつる夕暗の空　大藏卿有家

をしみかね秋くれぬとは棹鹿のおとせで人につぐるなりけり　法橋顯昭

ながつきの有明の空をみてのちぞ秋のあはれの果てはしりぬる　前大納言兼宗卿

○建仁元年五十首御歌、暮秋曉月

ながめかねて秋もいまはの有明を心にとへば月ぞこたふる　慈鎮和尚

○正治二年百首

暮の秋こずゑに月はかたぶきてあらしにまよふ有明の雲　同

○秋御歌中

古來歌
いざゆきて渡りつくさむ秋ふかき立川の里にもみぢ散るころ　同

○御集

現存六
ちり紛ふこのはの里を立ち別れさぞすみうしと秋もゆくらむ　後光明峯寺攝政

○建仁元年十一月五十首歌

いまいく日秋もあらしの横雲にいづれはしらむ山のはの月　前中納言定家卿

○建保三年後九月内裏歌合、寒野蟲

行く秋の末野のこのはあさな／＼そむれば弱る蟲のこゑ／＼　同

○嘉元三年仙洞歌合

花の後もくちなし色の秋の暮萩はふたゝびなさけ見えけり　前中納言爲兼卿

○百首歌

かこつべき野原の露も蟲のねもわれよりよわき秋の暮かな　順德院御製

○正治二年百首

秋ふかみ杜の下草うらがれてこずゑにすさむ日ぐらしの聲　二條院御製

○世間を何にたとへむと云ふ事を聞きてよみけるに

異本能宣集
世の中を何にたとへむ風さむみ暮れゆくあきの空蟬のこゑ　能宣朝臣

○三百六十首中

なが月の萩のかれはにおく露は花をしのぶるしかの淚か　好忠

○旅鴈秋深獨別群

行く鴈も秋すぎがたにひとりしも友におくれてなき渡るらむ　千里

○寒鴈飛急覺秋限

行く鴈のとぶことはやく見えしより秋の限りと思ひしりにき　同

○兵部卿元良親王家歌合

紅葉ばのちりかふ駒のあまたあるを何かにのりて秋を留めむ　讀人しらず

風にちるこのはの駒は騒ぐとも秋のかけにはいかゞまさらむ　同

○爲家卿家百首文字按轡白駒景

白妙の駒のくつばみひきとめて峯にのこれる秋の色かな　家長朝臣

〇兒屋池亭にて五首歌、暮秋
山里はまだながら月の空ながら霰しぐれのふるにぞ有りける　能因法師

九月盡

〇延喜御時内裏御屏風
紅葉ばの流るゝときは龍田河みなとよりこそ秋はゆくらめ　貫之

〇延喜御時内裏御屏風
もみぢばの幣ともちるは秋はつる立田姫こそかへるべらなれ　同

〇題不レ知
（雲葉）ちる木の葉かさなる霜にあともなし山路の末の秋の別れは　源實明朝臣

〇家集、秋歌中
のこりなく峯のもみぢも散りにけり秋よび返せ山のやまひこ　惠慶法師

〇堀川院御時百首
こふ人にちゞの黄金はとらすとも秋のくるゝぞをしくは有りけり（古る）　前中納言匡房卿

色々の木のはたむけて秋はけふ生田のもりに門出しにけり　中納言國信卿

〇百首歌
秋はけふ生田の杜やすぎぬらむもみぢ散りかふすまの浦風　寂蓮法師

〇正治二年百首
かへる秋わたの原よりゆくならば舟がくれせよ沖津白浪　正三位經家卿

〇旅九月盡
なれきつる秋さり衣ながら月のけふの別れのなにやたつらむ　民部卿爲家

〇嘉元三年百首御歌、九月盡
秋の色はこゝのつわけてすぎぬなりのこる一夜の影ぞ寂しき　龜山院御製

〇建保三年名所百首御歌
あすは又あぶくま川のしがらみに昨日の秋の色やのこらむ　順德院御製

〇同四年百首
ふる里や冬はあすかの河風にいたづらならずうつ衣かな　從二位家隆卿

〇永仁元年龜山殿御會十首、古寺秋暮
鐘のおとも秋ぞくれぬるこの山の嵐のきたに冬を迎へて　大藏卿隆輔

○千首歌

くれてゆく色はさやかに見えねども入合の鐘に秋ぞつきぬる　民部卿爲家

夕日影さすやみ山の谷のとにあけなば冬やこがらしの風　同

○文永四年九月歌合、九月盡菊

秋もいぬ老ぞかさなる菊の花わがゆばかりに袖はふれども　光俊朝臣

○百首歌、每人惜秋

すみがまに寒さをこふる人までや秋の別れを思ひわぶらむ　寂蓮法師

○建長八年百首歌合

見わたせばかりた寂しき夕暮にしぎたち別れ秋もいぬめり　信實朝臣

○千五百番歌合

こたふべき秋の葉風も霜がれてたれにとはまし秋のわかれぢ　後京極攝政

○久安百首

いづかたにふけゆくよはのなりぬらむ秋の殘りか冬の初めか　前大納言隆季卿

○百首御歌

秋と冬とゆきあふ坂の關もりは露のたもとに霜やおくらむ　慈鎭和尙

夫木和歌抄卷第十五　終

夫木和歌抄 巻第十六

冬部一

題

初冬　時雨　落葉　殘菊　神無月　冬擣衣
冬霧　枯野　霜　寒草　冬風　冬月
冬雨　冬夜　衾　網代　冬雜

初冬

○正治二年百首

あけ方のまくらの上に冬はきて殘るともなき秋のともし火　後京極攝政

○千五百番歌合

風の音もいつしか寒き槇の戸に今朝よりなるゝ埋み火のもと　同

秋くれしもみぢの色にかさねても衣かへうきけふの空かな　前中納言定家卿

冬きぬと思ふばかりのあさぼらけことの外にも變る空かな　嘉陽門院越前

○同歌合判歌

秋くれて露もまだひぬならのはにおして時雨の雨注ぐなり　後鳥羽院御製

○百首御歌

諸人のはなずり衣ぬぎかへて袖にこきいれし形見だになし　順德院御製

鐘の音のしもとなり行く明方ぞよもぎが露も冰りそむらむ　順德院御製

敷島や山とにはあらぬ唐國の虎ふす野べも冬はきぬらむ　同

○正治二年百首歌めしけるに

秋くるゝ鐘のひゞきはすがはらやふしみの里の冬の曉　後鳥羽院御製

いつしかも冬のけしきになりにけり朝ふむ庭の音のさやけさ　源　師光

○家五十首

霜枯の荻の葉さやぎあられふりつけがほにてぞ冬はきにける　喜多院入道二品のみこ

山がつの賤の松がきひまをあらみ冬になりぬとけさ凩ふらし　前大納言兼宗卿

○賀茂社百首御歌

秋は猶かへりもやらぬまがきぞと弱れる聲に蟲のなくなり　慈鎮和尚

○千五百番歌合

しの原やしのびに秋のおきし露こほりなはてぞ忘れ形見に　後京極攝政

○柿本影供百首

夕霜のはだれふりおほひ冱ゆるよのほづえの萩（荻カ）に秋ぞ殘れる　後九條内大臣

○百首歌

寂しさは冬のはじめぞなかりける木の葉ちりかひ時雨音づる　從二位家隆卿

○文治六年五社百首、初冬

山里はかけ樋の水につらゝゐて音づれぬにぞ冬をしりける　皇太后宮大夫俊成卿

○述懷百首題

冬されば野原もいとゞ霜がれて物寂しくもなりまさるかな　同

○文治二年百首歌

かきくらす木の葉は道もなき物をいかにわけてか冬のきぬらむ　前中納言定家卿

○正治二年毎月めされける歌、初冬

この頃の冬の日かずの春ならば谷の雪げにうぐひすの聲　同

○文永五年毎日一首中、初冬

冬はけさきの丸殿のあさ戸いでて時雨をなのる紅葉散るらし　民部卿爲家

○家集、初冬十首歌

波ゆるき入江のみなみ春に似て朝日のそらぞ冬のかげなき　參議爲相卿

ふるとしも夜半にはしらぬ朝戸いでて時雨をみする霜の村ぎえ　同

○百首御歌、初冬
立田姫かへる山路のこがらしにとまらぬ秋の色にしぐるゝ（ぞイ）　衣笠内大臣

○河
現存六
みくづせくやなせのさなみ冰ゐてたましま川に冬はきにけり　法印實伊

○爲家卿家百首、初冬
わぎもこがうはもの裾をひきかへて今朝たちかへる冬の水波　家長朝臣

○千五百番歌合
もみぢせし秋はいなばの山陰に松のみのこる冬はきにけり　同

○建長八年百首歌合
今日よりは四方の社の神無月いづくに旅のみしめ引くらむ　左近中將具氏卿

○堀川院御時百首、初冬
神無月また冬がまへせぬものをとりあへぬまであるゝ空かな　中納言國信卿

冬きては今宵ぞはつ夜いつのまに片しく袖のさえわたるらむ　隆源法師

時雨

○建保四年内裏十首歌合
神無月あらしにまじる村雨に色こきたれてちる紅葉かな　順徳院御製

○同五年内裏七首歌合、冬夕旅
ぬれきつゝとふべき山の夕暮もおなじ時雨の末のしらくも　同

○和歌所三首歌合、深山戀
よそにみてやみなばねたし葛城やひとり時雨るゝ峯の白雲　大藏卿有家

○おりゐさせ給ひける日雨のふりければ、雲葉
新千雜上　雲葉
日の光いでそふ陰のしぐるゝはいづれの方の山邊なるらむ　朱雀院御製

○御返し、雲葉
同
白雲のおりゐるかたやしぐるらむおなじ山邊の麓なれども　太皇太后宮穩子

○題不知
萬代
神無月まだいくしほもしぐれぬに紅ふかく野はなりにけり　大江嘉言

○宇治殿にて聞雨聲勝淺といふ事を
萬代
嵐ふく時雨の雨のすはへ（そ萬代）にはせゞのをなみのたつ空もなし　堀川右大臣

○題不知
萬代
とふ人もなきやまざとの村時雨ふたよりみより驚かすかな　中務

○閑夜時雨といふ事を
月をこそあはれとよひに詠めつれくもる時雨も心すみけり　俊惠法師

○家集、冬歌中、朝時雨
つま木こる賤のころもの朝時雨ほすもやさむき冬の山風　從二位家隆卿

○寶治二年百首、初冬時雨
日かず今ふるとはいはじ朝時雨まつ一むらに冬ぞきにける　信實朝臣

○嘉禎二年十首歌合、時雨
つたへこし昔の人めかれはてて時雨にもろき秋のふる里　後久我太政大臣

○家集、神無月のすゑほどに
雪おくるこしの嵐のすゑの雲しばししぐるゝ高圓の山　源有仲

○太神宮百首御歌
冬の夜の月にわかるゝむらくもに時雨くまなき有明のそら　後鳥羽院御製

○北野社百首御歌
しがらきのとやまのみゆき積るらしむら雲迷ひ時雨する比　同

○千五百番歌合
ひとつ空におなじ雲こそかはりけれ麓は時雨峯はしらゆき　前大納言忠良卿

○家集、冬山
新後拾冬
あらしこすとやまの峯のときは木に雪げしぐれてかゝる村雲　民部卿爲家

○家集
この比の時雨雪げに曇る日はあしたの程ぞしばしのどけき　參議爲相卿

○家歌合に時雨を
風の上にうきたる雲のひと時雨ふるともなくてはるゝ空かな　同

○若臣御歌合
曉の時雨の名殘ちかからし庭の木のはもまたぬれてみゆ　前中納言爲兼卿

○家集、題不知
おくやまの峯の時雨をわけ行けばふかき谷よりのぼる白雲　如願法師

○六帖題歌合
この夕あられまじりのしぐれして寒さならはす木がらしの風　中務卿みこ鎌倉

○百首歌
神無月いかなる時の雨なればかきくもるより物がなしかる　殷富門院大輔

〇同

何となくまづかきくもる心かな時雨しぬべき空のけしきに　寂蓮法師

〇御集、時雨

神無月なほさだめなき雲よりも心しぐるゝゆふぐれの空　中務卿のみこ鎌倉

〇千首歌

めぐり行く時雨にすける遠山の松には色のわかれやはする　民部卿爲家

〇千五百番歌合

冬きぬるけしきの森のむら時雨そめし木のはを又誘ひけり　第三のみこ

行きかへりこれや時雨のめぐる雲またかきくらす遠山の空　參議雅經卿

〇老若五十首歌合

明けばまづ木の葉に袖をくらぶべし夜半の時雨に夜半の涙に　慈鎭和尚

〇堀川院御時百首

あまづたふ時雨に袖は濡れにけりひがさの裏をさしてきぬれど　修理大夫顯季卿

〇題不知

萬一
うらさぶる心ざま見し久方の天つ時雨のながれあふみれば　讀人しらず

萬十　新古
時雨の雨まなくしふれば槇のはも爭ひかねて色づきにけり　人丸

〇元永元年十月内大臣の家歌合、時雨

さもこそはまやの杉ふき薄からめもる計りにもうつ時雨かな　權中納言師俊卿

〇たなかみの山ざとにて

時雨るれば夕紅の花ごろもたが引きかけしをちのたかねぞ　俊頼朝臣

〇家集に、時雨を

晴れくもりさだめなければ初時雨雲の袖がさからすぎにけり　基俊

〇家歌合、曉時雨を

深山邊のならのはさわぐはつ時雨いくむら過ぎぬ明方の空　權中納言長方卿

〇家集

梢よりひと時雨して過ぎぬなりしづえの紅葉ぬれもはてぬに　源仲正

〇嘉禎二年住吉社歌合に、旅宿時雨を

旅のいほは嵐に騷ぐよこ時雨柴のかこひにとまらざりけり　從三位頼政卿

〇家集

風わたるみねの木の間のよこ時雨もる山よりも下葉そむらむ　信實朝臣

○家集中、月前時雨
月の跡の山の端くもるさよ時雨染めぬ葛もてりまさり行く　前民部卿雅有

○建保三年百首、田家時雨
かり殘す田のもの畔もむら〳〵に時雨れてはるゝ冬はきにけり　前中納言定家卿

○仁和寺宮にたてまつりける月次御屏風歌
夕日かげむれたるたつはさしながら時雨の雲ぞ山めぐりする　同

○千五百番歌合
錦おる賤機山のむら時雨げにたてぬきとなりにけるかな　慈鎭和尚

○堀河院御時百首
からにしき霜をはたてと賴めども時雨の絲の猶よわきかな　前中納言匡房卿

○五百首御歌
立田山峯の時雨のいとよわみぬけど亂るゝ四方のもみぢば　後鳥羽院御製

○百首御歌
玉葉冬
かみ無月時雨とびわけ行く鷹の翼ふきほす峯の木がらし　同

深山より時雨は晴るゝむらさめに日かげなみよる庭の松風　同

○冬御歌古來歌合
夕月夜そむるをかべの松のはを絲にかへすむら時雨かな　六條のみこ雅

○御集
もりかはる軒端の月に雲すぎて時雨をのこす庭のまつかぜ　後京極攝政

○千五百番歌合
夕暮のひとむら雲の山めぐりしぐれはつれば軒端もる月　同

○文永七年毎日一首中
神山のみねかきくもるむら雲は都のきたのしぐれなりけり　民部卿爲家

○岡屋入道攝政家百首中、河時雨
大井川岩こす水やまさるらむ時雨をくだす瀨々のいかだし　同

○瀧邊時雨
萬代　新續古雜上
一時雨すぎにけらしなみよしのの吉野の瀧津岩たゝくなり　勝命法師

しぐるれば紅葉の色もわたるせも汀も深くなりまさるかな　能宣朝臣

此の歌家集に云屏風にむまにのれる人河をわたるに時雨のすれば袖を

かづくもみぢする所をよみると云々

落葉

○住吉社百首御歌

木の葉にもまぎれぬものは住の江の時雨にたぐふ庭の松風　慈鎮和尚

○弘安元年百首、落葉

いまよりの霜まちえたる冬のはの心よわくもちる涙かな　民部卿爲家

○毎日一首中

ちらぬまを頼むもかなし冬のはの霜おきまさる色を見るにも　同

草の原かるゝ人めはあとたえて木のはさへふる冬の山里　同

○文永二年毎日一首中

人はこず空しきはしに時雨おちて拂はぬ窓を埋むもみぢば　同

○嘉元元年百首、落葉

をしまれぬ朽葉は下に留まりてもみぢ吹きやる庭のこがらし　參議爲相卿

○月前落葉

ちりくもる峯の木のはの風の上に月はしぐれぬ有明の山　同

○家集、落葉を

嵐ふく庭の木のはのをしきかな誠のちりになりぬと思へば　西行上人

○三百六十首中

吹きちらす冬の嵐ぞ恨めしき木のはをぬさとたのむ山人　好忠

家集

ことならば山ともさら（はやくイ）になりならむ（なイ）こころの紅葉散り積りつゝ　同

○題不レ知

玉雜三　六帖六

守山の峯の紅葉ば散りにけりはかなき色のをしくもあるかな　讀人しらず

○冬の歌中、古來歌合

石のはしうづむもみぢも結ぼほれ苔の道にも秋やのこらむ　藤原範永朝臣

○題不レ知、古來歌合

ちりはてて一葉だになき冬山はなか〳〵風の音もきこえず　和泉式部

〇家集
夕月夜いるさの山の麓にはちるもみぢばぞもりかはりける　俊惠法師

〇冬歌中
新拾冬 水上に風わたるらし大井川もみぢをむすぶ瀧のしらいと　殷富門院大輔

〇池上落葉
たまもかるふなではしばし心せよ池のもみぢば錦おるめり　大納言經信卿

〇安元元年十一月右大臣家歌合、歌苑抄落葉
もみぢちる清瀧川をきてみれば錦をつまぬいかだしぞなき　藤原基輔朝臣

〇建保三年名所百首
音まがふ木のは時雨をこきまぜて岩瀬にそむるきよ瀧の波　前中納言定家卿

きよ瀧のせゞの白絲冬くればそむる木のはの錦をぞおる　從二位家隆卿

なとり川底の埋れ木あらはなるもみぢは上の色にいづとも　從三位範宗卿

〇弘安元年百首
埋れ木もしばしもみぢの名取川あらはれてゆく冬の嵐に　後九條內大臣

〇家成卿家歌合、落葉
新千冬 もみぢちるながらの山に風吹けば錦をたゝむしがの浦浪　刑部卿範兼

〇正治二年百首
清見潟浪に木のはぞせかれぬる富士のなるさは風こえぬらし　前大納言隆房卿

〇千五百番歌合
ふじのねや木のは波よるきよみ潟あらしの末におきの友舟　前大納言忠良卿

〇落葉
雲のゐるふじのなるさは風こえてきよみが關に錦おりかく　俊賴朝臣

みなかみにもみぢ散るらし神なびの岩瀨のさなみ紅にたつ　同

〇永久四年百首、落葉
散りしける賤機山のもみぢばを苔ぢにおれる錦とぞみる　藤原忠房

〇仁安二年二月歌林苑歌合
ありま山おろす嵐の吹きよせていなの篠原もみぢしにけり　藤原賢隆朝臣

〇同
水上にあらしふくらし吉野川もみぢにそむるたきの白絲　賀茂政平

○安元元年十月右大臣家歌合、落葉

よしの川もみぢ流れて岩の上にくれなゐ深き浪ぞこえ行く　寂然法師

○保延元年家隆卿家歌合、落葉

木枯のふきそめしよりよしの川紅葉おちこぬ瀧のせぞなき　藤原雅親

○御集、冬歌中

吉野川もみぢば流る瀧のうへのみふねの山に嵐ふくらむ　鎌倉右大臣

○久安百首

かれたてる橋の桃せのわかだちに色づくとみし葉さへ散りぬる　前參議親隆卿

○正治二年百首

霜いとふ鳥のうはけにくれなゐの紅葉をのこす立田川かな　小侍從

○家集、冬歌中

とぶ鳥のうはけにのこる紅は散りしもみぢの名殘なりけり　信明朝臣

○家集、落葉纔殘

みふゆきぬいかで嵐の殘しけむ鳥の上毛の木の葉ばかりを　源仲正

○寄柏戀

ふみとむるあとなき戀やかしは木の落葉が上の鹿のつまかた　同

○顯輔卿家歌合、落葉を

秋はてし峯の嵐に送られてねにかへりぬる木のはなりけり　前大納言師仲卿

○家集、深山落葉

紅葉ちる松浦の山はをとめごの錦のひれをふるかとぞみる　權大納言實家卿

○建久三年左大將家にて、韻一字三十一首

薄くこき四方の紅葉をふみ分けてかたも定めぬこがらしの跡　定家卿

此の歌韻字百首に都門路僻(辟イ)今誰問霜上獨望鹿蹤(跡イ)(誤脱アルカ)といふ事など云々

○十題百首、木

草も木もひとつにおつる霜のうちに葉かへぬ松の色ぞ殘れる　同

木はた(く歟)ちぬ草葉はかれぬ何をかは山にも野にも人の眺めむ　同

○後鳥羽院の熊野へまゐらせ給ひけるとき道の程の御會

染めし秋を暮れぬとたれかいはた川又浪こゆる山姫の袖　同

○建長八年百首歌合

木のはちる篠田のもりのちえごとに冬や嵐のかずはみゆらむ　後九條內大臣

○家十首歌合、寒樹交松

時雨こし色や緑にかへるらむ木の葉かれ野の松のあらしに　後京極攝政

○六百番歌合、落葉

しぐれ行く松のみどりは空はれて嵐にくもる峯のもみぢば　寂蓮法師

○正治二年百首

嵐吹くみねの木の實をひろふまに袖に紅葉のまづたまりぬる　同

○御集、冬歌中

夜もすがらこぼれる露を光にて庭の木のはに宿る月かげ　後京極攝政

○天王寺百首

冬のなほすぎすてて行くにしきをば庭にぞたゝむ衣手の森　慈鎭和尚

○六百番歌合、落葉

只をしむ（且をらむ）ながめも移る庭の色になにを木末の冬に殘さむ　前中納言定家卿

木の葉ちるとやまの幕をわけ行けば袖に嵐の聲ぞくだくる　從二位家隆卿

をしみかね峯の紅葉に染めおきし心の色もちりはてにけり　中宮權大夫家房卿

○建保八年内裏十首歌合

（續拾遺冬）山川のもみぢの上のうす氷木の間もりこし（くる續拾）月かとぞみる　西園寺入道太政大臣

○千五百番歌合

奥山のゆきげの水にながれいでて秋と冬とをみする紅葉ば　慈鎭和尚

○家會、山野落葉

みかり野のとだちを埋むなら柴に猶ふりまさる山のこがらし　前中納言定家卿

○六帖題、冬風

（新六一）人もこしなにぞはおちば吹きたてて又紅葉する木がらしの風　光俊朝臣

○爲家卿家百首

神無月ありあけの月の山おろし霜おきながらちる紅葉かな　從二位家隆卿

○百首

よそにのみ嵐の聲は訪れて窓うつものは木のはなりけり　寂蓮法師

○建長八年百首歌合

山川のはやせうちこす岩波にながれかゝりてよどむもみぢば　後九條内大臣

もりくるも時雨はやすき板間より障りてふるや木のはなるらむ　信實朝臣

○寛元元年十月右大臣家歌合、落葉

時雨つる名残に庭やしめるらむ木の葉そよがぬ山おろしの風　衣笠内大臣

閨の上にをり／＼注ぐ村時雨かわける音や木のはなるらむ　清輔朝臣

此の歌判者清輔朝臣云右歌わが事なればにやさせる難なしと思ひ給ふるを乾けるおと心えずぬれたる音はかわけるぞなど申さるゝ人ありしわりなく侍り資通大貳の歌合に良暹（遅イ）法師の歌にも「風にかわけるこゑきこゆなり」とこそよめれと云々

ちりかゝるはゝそが下にふす鹿の上は夏毛の心ちこそすれ　源仲正

○建保四年百首

もみぢ散る山より歸るしづのをはたが爲これる錦なるらむ　藤原賢忠

○建保五年内裏歌合、冬山風

立田山ねぐらの木のはちりはててゆふつけ鳥の色ぞのこれる　從二位家隆卿

○百首御歌

みづ鳥のあを羽やまじる立田川波そめのこす峯の木がらし　正二位忠定卿

○建保四年百首歌

木のはふくむこの山風たちぬらしあやしや軒に天のつり舟　慈鎮和尚

風さむみ三穂の浦邊（わイ）をこぐ舟に山の木のはのきほひがほなる　前中納言定家

○毎日一首中

色見えぬ冬のあらしの山風にまつの枯葉ぞ雨とふりける　同

○嘉禎二年十首歌合、時雨を

もみぢ葉のこずゑに見えし嵐山庭を盛りと吹きかへてけり　民部卿爲家

新拾冬 しがらきのと山のもみぢ散りはてて寂しき峯にふる時雨かな　如願法師

○御集

風渡る梢よりたつむら鳥のおりゐるみれば木のはなりけり　後德大寺左大臣

○光明峯寺入道攝政家百首
風の音は楢のおち葉にふきそめてゆふしめなびく賀茂の神山　常磐井入道太政大臣

○建保三年名所百首歌
時雨ゆく足立の原のしらま弓しらず木の葉はちりはてぬらむ　正三位家衡卿

冬籠る夜のまの風のあらち山いかに木のはのまなくちるらむ　藤原康光

○同五年内裏七首歌合、冬山霜
足引の山かつらかきちりはてて霜のふりはに殘る色かな　權大納言忠信卿

○千五百番歌合
たえ〴〵の木のはが下の音信も霜にとぢつる蟲のこゑ〴〵　後久我太政大臣

風にちる木のはみだるゝ露霜にむすぼほれゆく冬の夜の夢　俊成卿女

おく山の雪げの水やくだすらむたきつ岩ねに積るもみぢ葉　同

○建保八年百首歌合
嵐吹く山のふもとのかゞみ川岩瀬みなぎりゆく紅葉かな　衣笠内大臣

○庭落葉
九重につもる紅葉のいろぞこきたましく庭も光りそふまで　龜山院御製

○家集、山路落葉
ふみならす跡とは見えてもみぢばの積る姿ぞ山となりける　正民部卿雅有

われならでまた物おもふ袖なれや木のはは時雨るゝ有明の山　光俊朝臣

○百首歌
新續古雜上
筑波ねのこのもかのもの山風にかたも定めず散る木のはかな　前大僧正良珍

殘菊

○家集、殘菊を
秋さける菊にはあれどかみな月時雨ぞ花の色はそめける　貫之

○延喜十三年六月内裏菊合
六六 新拾冬
菊の花冬の野風にちりもせでけふまでとてや霜はおくらむ　是則

○永承八年五月中納言泰憲卿三井寺歌合、殘菊を

○元永元年十月内大臣家歌合、殘菊

○百首御歌

○六百番歌合、殘菊

同家
はつ時雨ふりそめしより菊のはなかりし枝ぞ又そはりける　躬　恆

同
ひとくさにさけるかひなし菊の花うつりて後は色かふなゆめ　參議伊衡卿

霜のうちに殘れる菊の錦には立ちまさるべき花のなきかな　讀人しらず

露むすぶ霜夜の數のかさなればたえてや菊のうつろひぬらむ　權中納言師俊卿

霜がるゝはじめとみずば白菊の移ろふ色ををしまざらまし　源　雅　光

秋くれて千草の花ものこらねどひとりうつろふ霜枯の菊　藤　原　基（重）重（基イ）

冬きてもなほ時あれや庭の菊こと色そむる四方のあらしに　順德院御製

さま〴〵の花をば菊にわけとめて籬にしらぬ霜がれの頃　後京極攝政

白菊のちらぬはのこる色がほに春は風をも恨みけるかな　前中納言定家卿

風雅參
染めかふるまがきの菊の紫は冬にうつろふ色にぞありける　正三位經家卿

いつしかと移ろふ色の見ゆるかなはな心なる八重の白菊　正三位季經卿

霜ふれば若紫の色みえてきくは老いせぬ花にぞありける　法橋顯昭

花もかく霜のませまで見る菊の匂ひを袖に又やのこさなむ　慈鎭和尚

うつろふはまたさく花もなき花と菊にもそめつ深き心を　隆信朝臣

一枝もをりつる袖は白菊のにほひまでこそうつろひにけれ　寂蓮法師

此の歌有方難云殘心如何陳云までといひたるに色もうつろひたりとき

こえたりうつろふと云ふのこりの心なり判云右歌きくの匂ひふかくいふに侍るべし殘菊の心はにほひまでといふにのこる心なりとさもある事にはあれど白ぎくなりとにほひまで袖にうつらむことなどかなからむされぱうつろふ心になほすくなかるべくやと云々

しらぎくの殘マヽもはなの名なれども雪のこずゑや三吉野の山　慈鎭和尚
○四季百首、冬花

紫のうつろふ八重の菊にまた白きうはぎとみゆる初雪　式子内親王
○正治二年百首

霜おかぬ南の海のはまひさし久しくのこる秋のしら菊　前中納言定家卿

此の歌は後鳥羽院熊野にまゐらせ給ひけるとき新宮三首御會に庭上冬菊といふ事をと云々

むらさきもなほくちはつる色そへて三度うつろふ霜枯の菊　同
○家集

てふのゐし花はさながら霜がれて匂ひぞ殘る菊のまがきに　同
○色葉四十七首歌

神無月

神無月ひはらの下葉うらがれてもみづとなしに色變るころ　民部卿爲家
○文永六年毎日一首中

この里は冬おく霜のかたければ草のわか葉ぞ春の色なる　前中納言定家卿
○文集百首、十月江南天氣好可レ憐冬景似ニ春花一

えのみなみ若葉のくさも緑にて春のかげなる神無月かな　同
○伊呂波四十七首歌イ

かみな月時雨るゝものを冬の影春に似たりとたれかいひけむ　皇太后宮大夫俊成卿
○祇園社百首、時雨

見るとなき夢も木のはに結ぼほれ果敢なくあくる神無月かな　從二位家隆卿
○正治二年百首

神無月夕日のかげになりにけりあらだちそむる沖津しら波　後鳥羽院宮内卿
○千五百番歌合

かみな月天のつゆしも秋おきてなほ時みゆる峯のもみぢば　民部卿爲家
○家百首歌

露けくて秋の日頃はすぐしてき時雨るゝ月をいかでくらさむ　主殿
○家集、十月を

神まつる月をあすとや山びとのみむろの榊今日たててけり　民部卿爲家
○文永八年毎日一首、十月晦日

新六一
おほあらきの木の葉亂れて千早ふる神無月こそ神さびにけれ　信實朝臣
○六帖題

冬擣衣

神無月まづ月かげの寒ければ夜すがら衣いそぎうつなり　藤原敦隆
○天仁二年師頼卿家歌合

夢むすぶねやさむからし賤のめがさゆる霜夜に衣うつこゑ　民部卿爲家
○同詠百首冬歌、閑窓夢驚或添孤婦砧上

衣うつ人いかばかりながむらむ雪のこしぢに跡はみえねど　爲實朝臣
○嘉元四年楚忽百首、冬歌

冬霧

霧たちて渡せも見えぬさほ川のしるべや夜半の千鳥なるらむ　藤原基俊
○堀川院御時百首、冬歌萬葉歌合

あさぼらけさほの川霧冬かけてなくや千鳥のなほ迷ふらむ　從二位家隆卿
○建保四年内裏十首歌合

○正嘉二年毎日一首中、冬歌
あらしやまふもとをくだる川ぎりの雲になりゆく冬の曙　民部卿爲家

あさぼらけ霧にまぎるゝ波の上に霜おきわたすせたの長橋　同

○文應元年七社百首
あさぼらけさだかにみえぬ波の上に霜を渡せる勢田のなが橋　同

○康元元年毎日一首中
谷の戸をあくるも深き霧の内に霜をわたせるまきの板橋　同

○光臺院入道二品親王家五十首、島千鳥
あかしがた島たちかくす朝霧に舟こそ見えね千鳥なくなり　俊乘法師

○禖子内親王家歌合、冬歌
川霧のたちよる峯に眺めしてあじろにひをも暮しつるかな　加賀左衛門

枯野

○題不知
萬十一
道のべの草を冬野にふみからし我たちまつと妹につげこせ　人丸

○六百番歌合、枯野
鹿のねも蟲もさま〲聲たてて霜がれはてぬ宮城野の原　従二位家隆卿

いろ〱の花ゆゑ野べに立ちいでし心までこそ霜がれにけれ　大藏卿有家

花はなほその姿とも見えわかでかれのは蟲の聲ぞ戀しき　前大納言兼宗卿

しもがるゝ野原と秋のしのばれて心のうちに鹿ぞなきぬる　正三位季經卿

のこりゐて霜を頂くおきな草冬の野もりとなりやしぬらむ　法橋顯昭

○文治三年百首
霜さゆるあしたの原の冬がれて一花さける大和なでしこ　前中納言定家卿

○貞應三年一字百首
霜がれの草のしげみにかくろへて一花のこる女郎花かな　民部卿爲家

○正治二年百首御歌
○百首御歌
○老若五十首歌合
○建保四年内裏十首歌合
○六帖題
○家集、戀歌中
○題不レ知
○家集
〃家集
○堀河院御時百首に、霜

結びおきしひばりの牀も冬枯れてあらはれ渡る武蔵野の原　後鳥羽院御製

ふく風も幾度道によわるらむみな霜がれのむさしのの原　順徳院御製

うらがるゝ野べの草ばの霜どけて朝日にかへる秋のしら露　前大納言忠良卿

霜きゆる日かげに秋やかへるらむ枯野の草に露ぞかゝれる　従三位行能卿

新六 草はみな霜がれはつる冬野守いかにすみかの寂しかるらむ　光俊朝臣

新六二 冬野にはこがら山がらとびちりて又いろ〱の草の原かな　信実朝臣

霜

六帖 伊勢集 ふけし夜の行合の霜に似てしかどなど身に寒くあたらざりけむ　伊勢

萬 ゆふこりの霜おきにけり朝といで跡ふみつけて人にしらるな　讀人しらず

閨の上に霜や置くらむ片しける下こそいたくさえのぼるなれ　和泉式部

あはれ見えし袖の露をば結びかへて霜にしみ行く冬枯の野べ　西行上人

此の歌はあさからず契りありける人のみまかりにける跡のなどこ心の色かはりて昔にもとほざかるやうにきこえけり古郷にまかりたりけるに庭の霜を見てよみけると云々

ゆふこりのはだれ霜ふる冬の夜は鴨の上毛もいかにさゆらむ　前大納言公實卿

〇建保二年名所百首
ゆふこりの岩根の霜にかさねてもなほ袖さむしさやの中山　正三位忠定卿

〇冬歌中に
冬寒みまきの葉白く霜さえてあさ寂しかるしがらきの里　經正朝臣

〇正治二年百首
冬はまだあさはの野らにおく霜の雪より深きしのゝめの道　前中納言定家卿

〇家集、桑門
冬ふかみおほの浦波さえ〳〵て霜がれにけりいせの濱荻　前中納言長方顯

〇百首歌に、庭霜を
さゆる夜の庭の草葉のあさぼらけ雪と見るまでおける霜かな　從二位家隆卿

〇千五百番歌合
霜やこれ變らぬ色をおきあかし月にかれのの秋のふるさと　參議雅經卿

〇文治六年五社百首
あし鴨のはがひの霜やおきぬらむ尾上の鐘もほのきこゆなり　皇太后宮大夫俊成卿

〇承久二年百首四季
あさぼらけよどこの霜のいさとさに煙をいそぐ冬の山里　前中納言定家卿

〇建久元年百首
あしたづの聲ぞ雲居に聞ゆなるたまのうてなは霜深くして　同

〇六帖題
新六一 けふ過ぐる星の光に風さえて音せぬ霜ぞ夜半にさむけき　民部卿爲家

〇百首歌中
霧にみし俤よりもさびしきは霜にくもれる野べのあけぼの　前中納言定家

〇家集、冬曙
雲しらむとほぢのをのへ見えそめて霜おぼろなる東雲の庭　參議爲相卿

〇建長八年百首歌合
天つそらくだらぬ今も霜おけば冬はかれのの原とこそなれ　前大納言顯朝卿

〇御集中
くれかゝる新島守は霜の袖こほりなはてぞわすれがたみに　順德院御製

〇建保三年念所百首御歌
をしほ山松の葉とづるゆふ霜に色こそなけれ峯のこがらし　同

〇承久二年四季百首、松
殘りなくわが黑髮はうづもれぬ霜の後にもまつは見えけり　前中納言定家卿

○弘安元年百首
秋過ぎてしもにつれなき庭の松後にしぼむとたれかいひけむ　後九條内大臣

○百首歌、名所述懐
としをへておもひの霜に埋もれて行合もみず住吉のまつ　従二位家隆卿

○建保五年内裏歌合、冬山霜
新拾冬　すがのねも移ろひかはる冬の日にゆふ霜いそぐ山の下草　信實朝臣

○同四年内裏百首歌合
冬きては結びもなれぬ初霜のおくてのいなば風そよぐなり　正三位家衡卿

○建保三年家百首歌、野徑霜
嵯峨の山野べのみち芝霜枯れてふりにしみ雪あとは見えけり　光明峯寺入道攝政

冬枯のをののあさぢふ風をいたみゆくての袖も霜ぞ碎くる　信實朝臣

○正嘉元年毎日一首中
白妙のながらの濱の霜の上に跡さだかなる今朝のかち人　民部卿爲家

○文永六年毎日一首中十一月一日
今朝は又朝おく霜のふかさにて名におふ月もまづしられける　同

○六帖題霜
新六一　谷ふかき岩屋にたてる霜柱たが冬ごもるすみかなるらむ　光俊朝臣

○家集
いと早もゆふしでかけて祈りこしいがきおしなみおける霜かな　好忠

○正治二年百首
うらがれのあさぢはくちぬ一年の末葉の霜の冬のよな〳〵　前中納言定家卿

寒草

○日吉社十五番歌合
ゐな山の道の篠原うづもれて落葉がうへにあらしをぞきく　後京極攝政

○建仁元年十首歌合、嵐吹寒草
小篠はら夜はの嵐は拂へども葉わけの霜はなほ結びけり　皇太后宮大夫俊成卿

○三百六十首中
野かひせし小篠が原もかれにけりいまは若駒なにになづけむ　好忠

〇千五百番歌合
分けきつる裾野の尾花うらがれて衣手さむし篠のをふらき　大藏卿有家

〇家集、冬歌中
家集　たまかけし玉の桂もおとろへて霜をいたゞく女郎花かな　西行上人

〇家集、寄二寒草一戀
わぎもこや霜がれもせぬこはすゝき冬になるまで我に靡かぬ　源仲正

〇永久元年十一月歌合、寒草
秋風に招きし尾花かれぬれば篠のみたてるはたすゝきかな　讀人しらず

〇百首御歌
霜枯の尾花ふみわけ行く鹿の聲こそきかねあとは見えけり　後鳥羽院御製

〇六百番歌合、枯野を
夢かさば野べの千種の面影はほの〳〵なびくすゝきばかりや　前中納言定家卿

〇三十首歌中に
萬代　野べみれば尾花も見えぬむらすゝき枯葉が末に霜ぞ置きける　法性寺入道前關白

〇山家說を
續後拾雜上　枯まさるあさぢに庭はとぢられてなにと霰の玉をしくらむ　無品親王輔仁

〇六帖題
新六一　吹く風にかれののを萱すぎはてて秋みし程の下をれもなし　衣笠內大臣

新六六　片岡の柴間にまじるしの薄霜がれてこそ見るべかりけれ　同

〇冬歌中に
現存六　かきほなるしののは草の冬枯に霜おく風のおとしきるなり　信實朝臣

〇建仁二年新宮歌合、嵐吹寒草
荻原や今はかれ葉に吹きかへてあらしになりぬ野べの秋風　民部卿範光

〇建保四年內裏十首歌合
旅衣すそののをばな霜がれてやどりし秋の露をこふらし　八條院高倉

〇家集、野徑寒草
後葉集　道すがら枯野にたてるかほり花ふりわけ髮に霜おきてけり　俊頼朝臣

〇文治六年五社百首
しほ風にいせのはま荻うらがれて波の枕も霜ぞおきける　皇太后宮大夫俊成卿

〇六帖題
新六六　おきわたす霜のたゞぢや疎からじ森のおち葉のふかき下草　光俊朝臣

○弘安元年百首、冬歌

たのめばやかれての後の冬草にふかくも露のなほむすぶらむ　定圓法師

○家集

冬枯の野田の草ねにふすしぎの何の陰にか身をもかくさむ　民部卿爲家

○千首歌

冬きては浪花のあしびたゆまねば汀にそよぐかれはだになし　同

霜がるゝあしのほずゑのおのれのみ招くもしらぬ冬の暮かな　同

○家集、冬歌中

續後拾參

なにはがた汀のあしは霜がれてなだの捨舟あらはれにけり　二條院讃岐

○正治二年百首

津の國のこやはなにに隠るらむ莖のみたてる霜がれの庵　前大納言隆房卿

○家集に、ひつぢをよめる

よしさらば生ふるひつぢのかしげつゝ物にもなして霜枯れよとや　俊頼朝臣

○家集、野のわたりのかれたる草

霜がれてもろく碎くる荻の葉をあらくわくなる風の音かな　西行上人

○一句百首

しをれあしのほ末の色に秋過ぎてゆきぞ留まるをちこちの岸　前中納言定家卿

冬氷に池邊のあしは結ぼれてしたねとくべき春やまつらむ　清輔朝臣

此の歌は承安五年三月重家卿家歌合に池邊寒蘆など云々

○建長八年百首歌合

今はみな霜の下なるあし分をかれなであまといつ思ひけむ　信實朝臣

浪の花のなにはのあしの霜枯に音のかそけき浦風ぞふく　光俊朝臣

此の歌の判者行家卿云右おとのかそけきと侍り一かど通りてきこえ侍れどいたくみゝ遠きかたやすき侍らむ云々

○寶治二年百首、寒草

鵜ふすをののかやふは霜がれてをれ葉片より風さやぐなり　衣笠内大臣

冬風

○延喜六年定文家歌合、樹雨寒風
霜がれの植木にやどる風の音を雨とや枝にさわぐみのむし　讀人しらず

○禖子内親王家歌合
我がやどの木ずゑのおとに足引の山の嵐を思ひこそやれ　式部

○三百六十首中
家 深山にははやまの嵐荒げなりしひのかさをれいくそかゝれり　好忠

おほあらきのおほくの枝もなびくまで絶えず烈しき冬の山風　同

○六百番歌合、椎柴
冬ごもる賤のつま木にことそひて風もをりけり峯のしひしば　大藏卿有家

○六十五番歌合、述懐嵐中送二遠鐘一
さだめなく嵐にかはる山陰のくもりはてたる入合のかね　前中納言定家卿

○六帖題、冬風
新六一 おとづれし木のは殘らぬ冬がれに枝ふきしをる風の烈しさ　民部卿爲家

○正治二年百首
いろ〳〵にちりし紅葉も音たえて月かげ寒しこがらしの空　隆信朝臣

○五首御歌
いしまよりたまるし水もゆきなやみひとり流るゝ峯の松風　後鳥羽院御製

○五行御歌、北
其方としも冬の景色のはげしとやとぢたる戸をも叩く風かな　後京極攝政

○建保四年内裏十首歌合
しもぐもり（ほイ）鹽風あらき磯の上につま木をりたき誰明かすらむ　光明峯寺入道攝政

○六帖題、冬風
雲ふかみかげもる星もまれにして雪げまでなき風も寒けし　前中納言爲兼卿

○題不レ知
雲葉 冬がれのたかねにのこる松なくば空行く風をいかでしらまし　平泰時朝臣

冬月

○家集、冬の月を
名殘なく弱りはてぬる嵐かなむべこそ月はくまなかりけれ　大納言經信卿

○建保五年内裏歌合、冬關月
風さゆる關のわらやはあとふりてたがすむ闇に月のすむらむ　權大納言忠信卿

○老若五十首歌合
ふしなれし蘆のまろやも霜がれてうちもあらはに宿る月かな　後京極攝政

○御集、山家冬月
山おろしのけしきばかりや冬ならむ都なりせば秋のよの月　同

○百首御歌
新後拾雜冬
たつた山紅葉やまれになりぬらむ川おと白き冬のよの月　土御門院御製

○同
みだれあしの葉末の月のさゆる夜はしのぶにすれる鶴の毛衣　順德院御製

○寶治二年百首、冬月
行く水のあさせこほれる長き夜に結ぼほれたる月のさむけさ　後九條内大臣

○嘉祿二年百首、冬月
影とめしよもの草木はかれおちてひとりさしたる冬のよの月　民部卿爲家

○千首歌
冬きては木のはかくれもなかりけり月の桂の色はしらねど　同

○嘉元三年百首、冬月
風をいたみ氷れる雲にかげもりて月も雪氣の空ぞさむけき　參議爲相卿

○正安五年内裏當座歌
宵のまの同じ月とも見えぬかな霜のうへなるあかつきの影　前中納言爲兼卿

○家集、冬月と云ふことを
冬枯のすさまじげなる山里に月のすむこそあはれなりけれ　西行上人

○正治二年百首
露冰るかれのの原の露の上にさびたる夜半の月をみるかな　前大納言忠良卿

天の原おなじ空よりふる雪にひかりをわくる冬のよの月　宜秋門院丹後

○家集、月前寒草

○建長五年毎日一首中、冬曉月

○六帖題

○同

○家集、冬の夜の月のあかきに賀茂にまうでて

○寶治二年百首

○家集、古來歌合

○久安三年十二月顯輔卿家歌合、冬月

霜ぐもりおぼろにさゆる月かげをひとむらてらす庭の白菊　前民部卿雅有

霜むすぶよもぎの門の朝戸出にさえてさしいる有明の月　民部卿爲家

新六一
出づるよりさえこそまされ木枯のふきしをりたる山のはの月　同

新六一
木がらしのふきすゝめたる冬の夜の月みてさむき我が姿かな　信實朝臣

神がきや松の嵐もおとさえてしもに霜おく冬のよの月　信實朝臣（建禮門右京大夫イ）

雲もなきあらしばかりを雪げにてさやけき月の影の寒けさ　少將内侍

ひむろ山の松に宿れる月かげはとり殘したるこほりなりけり　登蓮法師

あだ雲もなき冬の夜の空なれば月の行くこそおそく見えけれ　西住法師

池水の上に宿れる月影はとづるこほりにさはらざりけり　讀人しらず

よも山の松の葉ごとにおく露の皆かずみゆる冬の夜の月　權中納言經定卿

此の歌判者入道大相國云左の歌冬の露こそききならはず侍れ露むすぼほれて霜となるといへり霜となりなむ後ははよ露もあらじものを若し證歌などのあるにや又其の山其の森などよまれたらむにてだに葉ごとの露をみむことはありがたき事なれども月のせめてはあかき心をいはむにはさてもありなむよも山とよまれたるつくしのあさくら山などをもこゝにて見るべきにやことのほかの（本のマヽ）□眼ある人にやと云々

冬雨

冬の雨の名殘のきりはあけ過ぎてくもらぬ空にのこる月影　民部卿爲家
○文永七年毎日一首中

ふるあめの雪になり行く冬の雲嵐や空に吹きこぼるらむ　同
○弘長三年毎日一首中

ふる雨の音靜かなる冬の夜にゆふやみふくるかねぞ聞ゆる　同
○文永五年毎日一首中

みやこ人ちぎりしものを初雪に松の葉をしき夕ぐれのあめ　從二位家隆卿
○承久二年四季百首、冬雨

新六一
この里は空かきくもりふる雨にとやまをみれば雪ぞ積れる　衣笠內大臣
○六帖題、冬雨

新六一
しがらきの山かき時雨ふる雨にとき〴〵まじる雪の寒けさ　光俊朝臣

冬夜

あはれなり冬の夜さむみ明けぬよりおのが世いそぐ里人の聲　民部卿爲家
○毎日一首中

玉葉雜一
風さやぐさ夜のねざめの寂しきははだれ霜ふり鶴澤になく　皇太后宮大夫俊成卿
○久安百首

いはと山よに明けがたき冬の夜の天の關もりたれかすゑけむ　好忠
○三百六十首中

新六一
夏ぎぬのありしながらも冬の夜は妹としねなば寒からむやは　同

新六一
冬きてはあねこかねやのたけすがき幾夜寐覺めの風の寒けき　正三位知家卿
○六帖題

衾

○六百番歌合
さゆる夜は東處女もいかならむ風もたまらぬあさでこぶすま　中宮權大夫家房

重ねずば朱の衣も何ならし身をあたゝめにあさでこぶすま　正三位季經卿

さゆる夜の寒けさ今はあらじかしあけの衾の厚くみゆれば　正三位經家卿

雪の夜はおもふばかりもさえぬこそ閨の衾のしるしなりけれ　從二位家隆卿

この葉をや鳥の上毛に殘すらむねやの衾のさゆる霜夜に　寂蓮法師

きく人のまだら衾は板まより霜おく夜半の名にこそ有りけれ　大藏卿有家

○遠江國歌
萬十四
きく人のまだら衾に綿さはにいりなましもの妹が小牀に　讀人しらず

○題不知
萬十四
たく衾しら山風のねなへどもころがおそきのあろこそえしも　同

○長歌
萬五
さむくしあれば　あさぶすま　ひきかゝぶりぬ　かたごろも
ありのことごと　きそへども　山上憶良

○永久四年百首、衾
あせいらばうれたくせこは思はじや人はたふるなまだらを衾　仲實朝臣

きたりともうす紅の厚ぶすま冬によりせば寒からましを　藤原忠房

新六五
閨の上に霰たばしる夜半なれどいもと衾はさえずぞありける　源俊昌

○六帖
新六五
神無月ならの都におくるてふ衾もとしをかさねつるかな　衣笠內大臣

○久安百首
あふ事はせめてなごやが厚衾あるはかひなししをれのみして　前參議教長卿

○久安二年六月顯輔卿家歌合、戀
思ひわびなごやの衾よそにみて戀のよどのにおき明かしつゝ　從三位季行卿

○保延元年八月家成卿家歌合、戀
うちふさで戀しあかせばさよどこのゆたけの衾よそにこそみれ　顯仲朝臣

○六百番歌合、衾
さゆる夜にをしの衾を片しきて袖の冰をはらひかねつる　後京極攝政

○寛喜元年女御入内御屏風、人家池水鳥
池にすむをしの衾もさむき夜に上毛の霜やいとゞかさなる　光明峯寺入道攝政
霜もらぬをしの衾のおほひ羽も千代をかさぬる宿の池水　從二位家隆卿

網代

○近江國より上り來る時宇治川のほとりにて
萬三 新古 もののふやそうぢ川の網代木にいさよふ浪の行方しらずも　人丸

○題不レ知
萬七 宇治川は淀む瀬もなしあじろ人舟よぶ聲のをちこちきこゆ　讀人しらず

○家集、網代
み吉野の吉野の河の網代には瀧のみなわぞおち積りける　貫之

○内裏御屏風
谷川におじろをさして神無月いはまがくれの紅葉をぞみる　能宣朝臣

○寛和二年六月内裏歌合、網代
水上の瀧の白絲見えつるは網代のひをのよるにぞありける　藤原惟成

○最勝四天王院名所御障子
新六三 もののふのやそ氏人のまとゐして波にいさよふせゞの網代木　大藏卿有家

○六帖題
さらぬだに波もてゆする網代木に流しかけたる宇治の柴舟　光俊朝臣

○建長七年顯朝卿家千首、網代
數多せくたな上川の網代木にせわけのひをのよりも定めず　信實朝臣

○文治六年五社百首

ひをのよる宇治の網代に舟とめて氷をかくる月をこそみれ　皇太后宮大夫俊成卿

○六帖題

新六三 ひをのよる近江の海も風さえてたなかみ山や網代うつらむ　衣笠内大臣

○堀河院御時百首

漣のあふみの海のあじろ木に波と共にやひをのよるらむ　前中納言雅〔匡イ〕房卿

網代木に錦おりかく田上のあそのう〔ャイ〕まかは木の葉散るらし　大納言師頼卿

篝火のなからましかばひをのよる網代の程をいかでしらまし　修理大夫顯季卿

○月明網代と云ふ事を

網代には月の光もあるものをなにますらをのかゞりたくらむ　俊頼朝臣

○家集、冬歌中

田上やそのむらきみにあらなくにまづ網代木に來てぞ打ち見る　顯仲朝臣

○文治六年五社百首

田上や宇治の網代ももるゝ有りて日をへむひをも哀れいつまで　皇太后宮大夫俊成卿

○網代眺望

浪の上に心の末のかすむかなあじろに宿る宇治のあけぼの　後京極攝政

○文應元年七社百首、賀茂

程遠きやそうぢ川の網代をも神にたむけてたれはじめけむ　民部卿爲家

○百首歌

風さゆるせゞのあじろの旅衣袖よりひをばよるかとぞみる　從二位家隆卿

○文治五年百首

よをへては見るもはかなき網代木に越のみ空の風を待つらむ　前中納言定家卿

○建久元年百首歌

後の世の心もしらず網代守あえたる空の月をよな〳〵　同

○祿子内親王家、十月庚申夜

舟〔さしイ〕とめよ宇治の渡りの渡守網代〔ふねイ〕にひをのよるべ見ゆべく　宣旨

河霧のたちぬる時は網代木にひをのよるべも見えずぞ有りける　讀人しらず

網代木にひをのよるをば白浪の洗へどきえぬ雪とこそみれ　美作

風さゆる網代の氷魚はよる波の下よりむすぶ氷なりけり　寂蓮法師
○兼宗卿家歌合、網代

新六三 水早き宇治の川せの網代守手玉もゆらにうたぬ日もなし　衣笠内大臣
○六帖題

新六三 網代もるまきの島人いとまなみ氷魚のよるしもいやはねらるゝ　正三位知家卿

ひをもよをすぎ難しとや思ふらむいしら風にも網代うつなり　俊頼朝臣
○いしらかせに網代うつをみて

紅葉よる網代の布の色とめてひをくゝりとはみゆるなりけり　西行上人
○家集に、ちる葉あじろにとゞまる

もみぢ散る宇治の網代は日をへつゝ花の都の人もよりけり　隆信朝臣
○文治六年女御入内屏風

この頃はせゞの網代に日をへつゝ言とふ人のたゆるまぞなき　前中納言定家卿

冬雜

玉葉雜一 つれづれと眺め暮せば冬の日も春のいくかに異ならぬかな　和泉式部
○家集

此の歌は冬の比あれたる家にひとりながめてまたるゝ事のなかりける
まゝにいひあつめける中によみけると云々

神まつる冬は半になりにけりあねこがねやに榊をりしく　好忠
○三百六十首中

新しきうれへは多く寒きよの長きよりこそ始まりにけれ　千里
○新愁多待夜長來

冬の夜の寒きまにまにわぎもこが衣を鳫のこゑはききつや　前中納言家持卿
○家集、雜歌中

いたづらにおり松たきてふけしよも猶九重のうちぞ戀しき　前中納言定家卿
○四季百首、冬夜

○一字百首
筒井づゝゐ筒のたるひとけぬまに早（ほどなくイ）くもくるゝ冬の影かな　同

○建保四年内裏歌合
雪白きかり田の原をみわたせば仇にすみこし庵ぞ殘れる　從二位行能卿

○冬御歌中
玉秋上　旅枕ふしみの里のあさぼらけかり田の霜に鶴ぞなくなる　式子内親王

○西洞隱士百首御歌
霜さゆる刈田の原にゐる鳥のすみか寒しき冬のあけぼの　後京極攝政

夫木和歌抄巻第十六　終

夫木和歌抄巻第十七

冬部二

題　千鳴　氷鳴　氷　霰　霙

千鳥

○題不レ知

萬六 千鳥なく吉野の川の音しげみやむときなしにおもほゆるきみ　人丸

○河千鳥を

萬一 さよ中と夜やふけぬらむ吉野河せのなるなべに千鳥なくなり　六條以みこ

○題不レ知

新拾冬 雲葉 楸おふる河原の千鳥なくなべにいもがりゆけば月わたるみゆ　中納言家持

○天平五年正月於内裏聞千鳥

萬十九 かはべにも雪はふれれし宮のうちに千鳥鳴くらし居む所なみ　同

○題不レ知

萬三 我がせこが古家(ふるへ)の里のあすかには千鳥なくなり妻(きみ萬)まちかねて　讀人しらず

萬十二 ますけよきそがの河原になく千鳥まなく我がせこ我しこふれば

○南海漁父百首歌合

新續古冬 こよひたれ眞菅片しきあかすらむそがの河原に千鳥なくなり　後京極攝政

○冬歌中

林葉 もがみ河岩うつ浪にとひかひ(ねイ)てはねしをれぬと千鳥なくなり　大納言師時卿

○永保三年十月祐子内親王家歌合 千鳥

雪ふりの立田の川になく千鳥こゑばかりをやよそにきくらむ　藤原時房

○夜千鳥を

歌苑抄
さよ千鳥ねざめてきけば我が門のいさゝ小河に友よばふなり　源通能朝臣

○家集、水のほとり千鳥のたゞひとつたてるをみて

友をなみ河せにのみぞたちゐけるもゝ千鳥とは誰かいひけむ　和泉式部

○久安百首御歌

夜をさむみ心づからやなく千鳥おのが羽風にむすぶこほりを　崇德院御製

○光臺院入道二品親王家歌、冬五首中

なかたえし身をうちはしの河千鳥深き霜夜のあともはかなし　従二位家隆卿

○後鳥羽院御時名所歌中

千鳥なくありあけがたの河風に衣手さゆるうぢのはしひめ　如願法師

○家集、寒夜千鳥

ひさぎおふる跡の河原の河おろしにたぐふ千鳥の聲のさやけさ　清輔朝臣

○正治二年百首

さえわたるやすのかはらの曙に霜にあととふ友千鳥かな　前大納言隆房卿

○題不レ知

萬代
夕霧におともしられず楸おふるやすの河原に千鳥なくなり　源季廣

○冬歌

萬代
風さゆるやその湊のあくる夜に磯さきかけて千鳥なくなり　信實朝臣

水上に友よぶ千鳥ことならばやそのみなとに聲たえずなけ　紫式部

この歌はあふみのかみの女けさうしける人のふた心なしとつねにいひわたりければうるさくてよめる

○題不レ知

六六
山河の岩間がくれになく千鳥人しらねばやこゑのきこえぬ　讀人しらず

○家集、千鳥

山川のみかげにそよぐあしの葉の寒き夕になく千鳥かな　權大納言忠信卿

ながむれば刈田のおものうす氷あとも定めずなく千鳥かな　同

○百首御歌

高砂のをのへの月やふけぬらむ河音すみて千鳥なくなり　順德院御製

○家集
もろともにありすのかはの河千鳥暁ごとにかならずぞなく　小弁

○入道尺阿九十賀たまはせける屏風御歌
濱千鳥あとふみつけよいもがひもゆふは河原の忘れがたみに　後京極攝政

○弘長元年百首
月のころむろのやしまの明方に（はイ）思ひありとや千鳥なくらむ　後九條内大臣

○三百六十首中
さよ中と夜はふけぬらし玉島の河音すみてちどりなくなり　衣笠内大臣

○建保四年内裏十首歌合
新千冬
うちわたす大河のべのせをひろみおよばぬ聲に千鳥なくなり　僧正行意

○後鳥羽院遠所おはしましける時喚千鳥
なをたのめみなせ河原になく千鳥有明の月にかへりすみけり　從二位家隆卿

○建保四年百首御歌
みかさ山月まちいでてさほがはの清き河原になく千鳥かな　光明峯寺入道攝政

○洞院攝政家百首、祝
たえず行くさほの河原の夕千鳥君がやちよをかけてなくなり　光俊朝臣

○題不知
萬七
さほがはの清き河原になく千鳥かはべの跡に忘れかねつも　讀人しらず

○建仁元年老若五十首歌合
忘れじな君も契りし友千鳥みくまの川にすまむかぎりは　從二位家隆卿

○家集、冬歌中
風ふけばとはに波こすみくま野の浦わの月にちどりなくなり　具親朝臣

○仁和寺歌合、千鳥、別當僧正卿
まつち山おろすあらしや寒からむすみだ河原に千鳥なくなり　智海法師

○題不知
秋風
まつち山夕こえ行けば風さむみ墨田がはらに千鳥なくなり　源季廣

○夕千鳥を
明玉
夕さればたれ忍べとていほさきのすみだ河原に千鳥なくらむ　荒木田氏忠

○正治二年土御門内大臣家影供歌合、曉尋千鳥
玉春
尋ねてもいかにきかましさよ千鳥かものかはらの有明のころ　從二位家隆卿

○文治六年五社百首
河千鳥なれもやものはうれはしき糺の杜を行きかへりなく　皇太后宮大夫俊成卿

○千首歌
うらわびて千鳥なくなり和泉河よわたる風の身にやしむらむ　民部卿爲家

○千五百番歌合
新續古今雜上
かさねては衣手さむしいづみ川千鳥なくよの曉のしも　西園寺入道前太政大臣

○同歌合判御歌
となせ河うす霧なびくせゞの波むれたる千鳥風にゆくなり　後鳥羽院御製

○しがらみ
六帖三
大井川かはの柵かみしもに千鳥しばなく夜ぞふけにける　讀人しらず

○堀河院御時百首
おほ井河くだす筏におどろきてゐぜきにきゐる千鳥鳴くなり　權中納言師時卿

○家集、石山にてよめる
河霧は汀をこめて立ちにけりいづこなるらむ千鳥なくなり　藤原長能

○月くまなかりける夜千鳥をききて
續千參　雲葉イ
霜がれのあしまの月の明方をなきて千鳥のわかれぬるかな　藤原敏行朝臣

○題不知
萬十一
明けぬべく千鳥しばなく白妙の君が手枕いまだあかなくに　讀人しらず

○千首歌
さゆる夜の千鳥しばなく白妙のたが手枕もあけやしぬらむ　民部卿爲家

○仁和寺宮十首、河千鳥
おとたえて岩間にこほる思ひ河しのぶもしらずなく千鳥かな　同

○六百番歌合、寄千鳥戀
思ひかぬる夜はのねざめに風ふけて涙のかはに千鳥なくなり　慈鎭和尚

○五十首御歌、寄千鳥戀
しるべなき涙のかはの河風に思ひかねてもちどりをぞきく　同

○能因日記古歌中
大和物語
こよひこそ涙の河にゐる千鳥なれて（きイ）かへると君はしらずや　讀人しらず

○多歌中
萬代
みなといるおきつしほ風寒き夜は河島がくれ千鳥なくなり　信實朝臣

○元永元年十一月内大臣家歌合、千鳥
風わたるまかみ河原やさむからむ夕かたかけて千鳥しばなく　藤原忠隆

○千鳥
六六
いとゞしく物思ひをれば河千鳥野にも山にも鳴きわたりけり　讀人しらず

六五 貫之集

あらを田をうち返しても濱千鳥なほふみつけて跡をとゞめば(むイ)　同

○哥
おのれなけ急ぐせきぢのさよ千鳥とりの空音も聲たてぬまに　前中納言定家卿

○三十首歌、深夜千鳥
思ひかねつまどふ千鳥風さむみあふくま河の名をやたづぬる　同

○最勝四天王院御障子歌(名所イ)
さよ千鳥やちよをさそふ君が代にあふくま河のしき浪のこゑ　俊成卿女

忘れじよ(なイ)またあふくまの河風にしばしなれぬと千鳥なくなり　參議雅經卿

夜を寒みつまよぶ千鳥うらむなりあふくま川の名や頼むらむ　具親朝臣

○家集
聞きなれし千鳥なくなり墨田河いざ言問はむ名におはずとも　鴨長明

○貞應二年當座百首、曉渡千鳥
都思ふ有明の月のすみだ川おもかげばかり千鳥なくなり　民部卿爲家

○百首歌、渡千鳥
心あらばすみだ河原の渡守しばしは思ふ千鳥なくなり　寂蓮法師

○家集、千鳥
うちすぐる墨田がはらの夕ぐれに心細くもなく千鳥かな　後德大寺左大臣

○文應元年七社百首
風近ゆる古河のべのさよ千鳥夜はにとわたるこゑきこゆなり　民部卿爲家

○名所歌中
風おろすふじのかはとのさよちどり湊にむかふこゑの曙　參議爲相卿

さえわたる雪けはふじの河千鳥みなと近しと恨みてぞなく　從二(三イ)位爲實卿

○題不知
(萬七)さほ河に鳴くなる千鳥いつしか(なに萬)も河原を忍びはやかはのぼる　讀人しらず

○建長七年顯朝卿千首歌(家イ)
さよ千鳥今ぞつまどふ古里のならのさほなるはやかはのぼる　光俊朝臣

○光明峯寺入道攝政家百首
神なびの三室の岸にゐる千鳥たつた河原に風やはげしき　從二位家隆卿

○三島社にたてまつりけるに
川さゆるかみなびがはの淸きせに妻よぶ（どふイ）千鳥こゑぞふけぬる　權僧正公朝

船よばふ淀のわたりのかは千鳥みつのの里につまやこふらし　同

○神樂を和する歌中
とね河のかはらを行けばさよ千鳥石ふむ道にをちかへり啼く　同

○題不知
（秋風）眞菅生ふるみつの河せにさよ更けて妻どふ千鳥聲すみぬなり　中原師光朝臣

○百首歌
君がため鶴のよはひもなほあかでいつぬき河に千鳥鳴くなり　寂念法師

○家集、女のもとより歸りてつかはしける
はま千鳥けさのねぐらをおきて又やすらはれつる程の苦しさ　大江匡衡朝臣

○冬歌中
（雲葉）さよふけてなくやゆつはのむら千鳥河上さむく嵐ふくらし　行圓法師

字家集、冬歌中
としをふる濱松が枝のいたづらにねぐらもしらぬ夕千鳥かな　從二位家隆卿

さよ千鳥波や高けむ風早のうらのおきすにたちゐなくらむ　正三位知家卿

○家集、千鳥を
しほがまの煙にまがふ濱千鳥おのがはがひをなれぬとやなく　俊賴朝臣

○百首歌、朝千鳥
朝な〳〵浦風さむみあぢがまのしほつをさして千鳥鳴くなり　土御門院小宰相

○寶治二年百首、潟千鳥
夕浪のたゆたひみればあゆちがた汐干のゆたに千鳥なくなり　正三位知家卿

あゆち潟汐干にけらしゆふさらす遊ぶ千鳥もこゑのとがなり　光俊朝臣

身のほどはいはでぞ思ふいはみがた何を恨みて千鳥なくらむ　後鳥羽院下野

○旅泊千鳥
（明玉）あけぬなりはや舟でせよ石見潟あさみつしほに千鳥なくなり　祐盛法師

○百首、千鳥
むしあけの松ふく風やさむからむ冬の夜ふかく千鳥なくなり　前中納言定家卿

○河海（濱イ）千鳥といふことを人々あまたよみけるついでに

よを寒み浦の松風ふきむせ（すさ集）びむしあけの浪に千鳥なくなり　鎌倉右大臣

夕づくよみつ汐あひのかたを浪涙（家集）しをれてなく千鳥かな　同

我が戀はもゝしまめぐる濱千鳥行方もしらぬかたになくなり　同

○海邊戀を

淡路（萬代）島通ふ千鳥のしば／＼もはねかくまなくこひや渡らむ　同

○文治六年女御入内御屏風

あけぬなりみゆるこ島の波の上に雲間をわけて千鳥とわたる　後德大寺左大臣

○百首歌に

雪の色におなじしらゝの濱千鳥こゑさへさゆる曙の空　寂念法師

○建保四年百首中

ひがたふく浦風さむみ水ぐきの岡のみなとに千鳥なくなり　家長朝臣

○弘安元年中務卿親王家百首

ひがた吹く汐風さえてみづぐきの岡の湊にちどりなくなり　權僧正公朝

千鳥なく汐のさしでの磯の松やちよの聲にちよの色そふ　同

○同親王家歌合、千鳥

あらつの海汐ひ汐みちいちじるくたちゐるにみゆる村千鳥かな　同

○家集、述懐百首中

浮しほの浪にたゞよふはま千鳥跡とゞむべき方もしられず　清輔朝臣

○弘安元年百首、冬歌

ふみそめて今もしのぶのうら千鳥あとつけなみや心あるらむ　法印定圓

○百首歌、鳥五首中

ひとしれず昔しのぶの浦千鳥ともなふあとに音こそなかるれ　藤原爲顯

○貞應三年百首

うき人の遺すかたみの浦千鳥なく／＼しぼる袖をだにとへ　民部卿爲家

○嘉祿四年百首

なにとこのみぬめの浦のさよ千鳥跡方もなきねのみなくらむ　同

○家集、千鳥

有明の月さえわたるむこの浦のしほひのかたに千鳥つまよぶ　後德大寺左大臣

○寛喜元年女御入内御屏風、海邊千鳥

君が代はなかゐのうらの濱千鳥昔の跡にけふやあひみむ　常磐井入道前太政大臣

○久安百首

浦風や更け行くまゝにさむからむ浪のいりえに千鳥つまよぶ　藤原實清朝臣

象潟や柴の戸ぼその明方にこゑうらぶれてちどりなくなり　花園左大臣家小大進

○家集、浦千鳥

引きつれていづかたへとかむら千鳥浦めぐりして友誘ふらむ　源仲正

○元永元年十月家歌合、千鳥を

神風や夕日のうらのおきつ浪たちゐしばなくはま千鳥かな　法性寺入道關白

○大嘗會悠紀方御屏風、千坂浦

幾ちとせいくさかゆらむ御代なれやちさかの浦に千鳥なくなり　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首

ことわりやまのの入江になく千鳥浦風寒きありあけの空　同

○題不ㇾ知

萬三
あふみの海夕浪千鳥ながなけば心もしぬにいにしへ思ほゆ　人丸

○百首歌

入日さすおなじかた川のうら風に夕浪ちどり妻したふなり　民部卿爲家

○貞應三年、湖上千鳥

風さむみ沖つさゞ波さくはなに色まどはせる浦千鳥かな　同

○六帖題御歌

ふけゆけば山おろしさえて小波のひらの湊に千鳥なくなり　中務卿みこ鎌倉

○文治六年女御入内御屏風

やちよとぞ千鳥なくなるしほの山さし出の磯に跡を尋ねて　隆信朝臣

○正治二年百首

冬の夜の有明の月もしほの山さし出のいそに千鳥なくなり　從二位家隆卿

○洞院攝政家百首、祝

聲はみなやちよときけば鹽の山磯べのちどりためしにぞひく　大納言經道卿

○濱千鳥

六三
こゑをだにきけばなぐさの濱千鳥ふるす忘れず常にとびみよ　ニイ　讀人しらず

○養和元年百首

友千鳥なぐさの濱の波風に空さえまさるありあけの月　前大納言定家卿

○建仁元年老若五十首歌合

おほよどの松に夜ふくる浪風に恨みてかへる友千鳥かな　同

○三所御會冬歌

濱千鳥つまどふ月の影寒しあしのかれ葉の雪の浦風　同

○建久元年百首

友したふ千鳥鳴くなりひれふりしまつらの山のあとの汐かぜ　同

○寶治二年百首御歌、濱千鳥

まつら潟もろこし舟はいでぬひも浪路をさして千鳥なくなり　後九條內大臣

○嘉元元年百首、千鳥

新千冬
夜をさむみつばさに霜やおくの海の河原の千鳥更けてなくなり　參議爲相卿

○建保四年百首

さゆる夜はいくへか霜もおく海のかはらの千鳥月恨むらむ　從二位家隆卿

○同二年仙洞三十首歌

あけぬとやうらの家しまなく千鳥また天の戸は月ぞさしける　同

○正治二年百首

きよみがた雪ふる空になくちどり岩に音せぬ浪やかへらむ　寂蓮法師

○百首のうた

冬の色よそれとも見えぬさゝ島の磯打つなみに千鳥たつなり　順德院御製

○光臺院入道二品親王家五十首、島千鳥

さゝ島の磯こす浪にたつちどり心もぬれてなかぬ日ぞなき　前中納言光經卿

○冬歌中

住吉のききもせじとやさよ千鳥なかゐの方へ浦づたひ行く　信實朝臣

○建保三年名所百首御歌

すみ吉の松のあらしやかはるらむ夕浪千鳥こゑまさるなり　順德院御製

○百首歌

島傳ひ千鳥なくなりつのくにのむこの浦しほ今やみつらむ　中務卿のみこ鎌倉

○家集、遠千鳥

いづくへと沖つ小島のひとあさり羽もやすめず立つ千鳥かな　前民部卿雅有

○正治二年百首

君が代になをあらはして友千鳥ながらの濱にこゑ聞ゆなり　從二位家隆卿

○夕千鳥を、古來歌合

わかの浦やみつのつとめの跡とめておいの夕になく千鳥かな　後九條內大臣

○題不知、古來歌合
ちどりなくゐなのみなとに風さえて浪まにのこる有明の月　俊惠法師

○題不知
六三
千鳥なくゐなの河原を見る毎に（時は六）やましなりとか（ととひしく六）思ほゆるかも　讀人しらず

○建長八年百首歌合
ありま山峯のあらしに月さえてゐなのかはらに千鳥なくなり　伊嗣朝臣

○建保三年名所百首
さよ千鳥聲とほざかる波の上にはるかに月のうき島が原　正三位知家卿

○題不知
撰集
とほざかる昔のあとを尋ねても身をうきしまになく千鳥かな　從一位良教卿

○柿本影供百首
ほのかなるなくねも寂し友千鳥とほつの濱のあけがたの空　左近中將具氏卿

○内裏にて人々歌つかうまつりけるに千鳥を
いそざきのこぬみの濱の友千鳥あさみつ汐にこゑさわぐなり　藤原定氏朝臣

○三百首御歌
あへじまの岩うつ浪の夜さえてすむともきかぬ千鳥なくなり　中務卿みこ鎌倉
室の浦の汐ひのかたのさよ千鳥なき島かけてせとわたるなり

○題不知
萬三
おふの浦の河原の千鳥ながなけばわかさほ川の思ほゆらくに　讀人しらず
汐風やとをよる千鳥たまの浦のはなれ小島に友さそふなり　權僧正公朝

○三島社にたてまつりける歌に
おふの浦の河原の千鳥さほぢにて聞きしに似たる聲の悲しさ　同

○七百首歌
浦傳ふあとさへ見えてたぢまなるゆきの白濱千鳥なくなり　同

○月前千鳥
萬代
さよふけて月影寒み玉の浦のはなれこ島にちどりなくなり　平忠度朝臣

○家集、冬十首歌中
さえわたる汐風いかに寒からむ千鳥むれゐるゆふさきの浦　西行上人

○千鳥を、古來歌合
むら千鳥みしまをさして渡るなりのさかの浦に舟やつくらむ　定教法師

○法性寺入道關白家歌合、旅泊千鳥

おりしけるいせの濱荻下さえていそらがさきに千鳥なくなり　藤原盛方朝臣

○御集、松邊千鳥

高砂の松をともとて鳴く千鳥君がやちよのこゑやそふらむ　後京極攝政

○濱千鳥を、古來歌合

たちゐなく聲たかさごの濱千鳥あとかたなしとよを思ふかな　僧都源信

○家集

夜舟こぎ沖にてきけばひたち海のかしまが崎に千鳥なくなり　從三位賴政卿

○百首歌

あらし吹くをじまが磯の濱千鳥岩うつ浪にたちさわぐなり　俊頼朝臣

○正治二年百首

あらしふくをじまがさきの入しほに友なし千鳥月になくなり　喜多院入道二品のみこ

○光臺院入道二品親王家五十首、曉千鳥

さよ千鳥浦のはつしまゆきかへり有明の月の空になくなり　從三位範定（宗イ）卿

蟲のねはのじまの草にかれはてておのが霜よの千鳥なくなり　信實朝臣

○建長八年百首歌合

霜がれの尾花なみよる風にさへのじまがさきをたつ千鳥かな　藻壁門院小宰相

○平野社歌合、月前千鳥

さしのぼる月の出しほに誘はれてをじまの千鳥浦づたふなり　如覺法師

○百首、磯千鳥

たれと又よ深き風にまつしまやをじまの千鳥こゑ恨むらむ　前中納言定家卿

○正治二年百首

沖つ風吹きくるなみもこゆるぎの磯べの千鳥たちゐなくなり　從二位家隆卿

○千五百番歌合

こゆるぎの磯の松風おとすれば夕浪千鳥たちさわぐなり　土御門内大臣

ゆふかけて妻や戀しきかみしまのいそまの浦に千鳥しばなく　法橋顯昭

旅ねからききや忍ばぬ磯千鳥なれたるあまの袖をとはばや

○建保五年内裏歌合、冬河風

湊河しもふき迷ふ山おろしにはね打ちしをりなく千鳥かな　後久我太政大臣

○後京極攝政家十首歌合、旅泊千鳥
みやこ思ふ夢路はしばし友千鳥こゑはまくらにちかの浦風　寂蓮法師

○家集
磯千鳥あやな鳴く音はなに故になかずの濱のなかばまちけむ　中納言兼輔卿

○はま
六帖三　人しれぬ思ひするがのうと濱にあそぶ千鳥のこゑのわりなさ　讀人しらず

○建長八年百首歌合
あみの浦のあさひく汐の浪まよりめにもかゝらず行く千鳥かな　後九條内大臣

○題不レ知
兼作　あふことをいなみの浦になく千鳥我もさこそは聲を惜しまね　藤原公重朝臣

○冬歌中
石間　沖つ浪あらゐのさきの汐風にふきよせられてなく千鳥かな　今出川院兵衛

○正治二年百首
契りしにあらずなるとの濱千鳥あとだにみせぬ恨みをぞする　正三位經家卿

○題不レ知
歌林　うらさびて哀れなるをのとまりかな松風さえて千鳥なくなり　澄西法師

○百首歌
萬代　おきつ風身にやしむらむ唐衣袖しのうらに千鳥なくなり　寂然法師

片しきにさゆる袖しのうら千鳥おのれも浪のよるは鳴くなり　民部卿爲家

○家集、海邊曉戀
きぬ〴〵にわかるゝ袖の浦ちどりなほ有明はねぞなかれける　同

○元永元年十月内大臣家歌合、千鳥
波あらふ袖しのうらの清き磯にあとふみつくる濱千鳥かな　源兼昌

○寳治三年百首、渡千鳥
舟よするなるとの沖のとも千鳥おのが通ひは風もいとはず　民部卿爲家

○六帖題、千鳥
新六　夕なぎのあしやの沖の汐風にさそはれてなくむら千鳥かな　光俊朝臣

○最勝四天王院名所御障子
きくからにあはれなるみのさよ千鳥よゝたつ浪の末の松風　慈鎭和尚

○元永元年十月内大臣家歌合、千鳥
小夜ふけてなるみの浦にたつ千鳥思はぬ方にともや尋ぬる　顯仲朝臣

○永久四年九月修行三番歌合
獨りいでてなはの浦わをこぐ舟をともに千鳥ぞなき渡るなる　琳賢法師

○住吉社三十首
おきつ風ふきあげの濱に立つ千鳥いざ白浪の花かあらぬか　従二位家隆卿

○最勝四天王院名所御障子
なく千鳥それかあらぬか沖つ風ふきあげの濱の雪の白波　同

○正治二年百首
ふきあげの濱風さむみあととへば雪にあまぎるむら千鳥かな　大藏卿有家

よさのうみ松風さそふさよ千鳥浪よりほかに袖ぬらせとや　慈鎭和尚

○六帖題、千鳥　百イ
新六三　よさのうらや汀の千鳥哀れにぞさゆる霜夜に友よばふなり　民部卿爲家

○千五百番歌合
沖つ波たかしの濱のさよ千鳥あともさだめぬ聲きこゆなり　隆信卿

○建保三年名所の百首
風あらき浪やたかしのはま千鳥ふみ通ひこしあともたえ行く　俊成卿女

○後朝
六五　たごの浦の波まにあそぶ濱千鳥いつをほどにて戀しかるらむ　讀人しらず

○濱千鳥
六三　吾が戀はなたかの浦のはま千鳥をはにもふれぬ君がみゆべき　讀人しらず

○家集
沖つ風ふけひの浦のけはしさになころとともに千鳥たつなり　俊頼朝臣

○題不知
萬代　しほ風や寒けかるらむ冬のよのふけひのうらに千鳥なくなり　後鳥羽院御製

○建保三年、名所百首
わがよはひふけひの浦のさよ千鳥思ひしまゝの浪に鳴くなり　従三位範宗卿

○同
さすらふる我がよ吹飯（ふけひ）のうら千鳥なく／＼すぎぬ誰忍べとて　正二位忠定卿

○六帖題、千鳥
新六三　風をいたみありそに通ふ濱千鳥涙かゝらじあともとゞめず　正三位知家卿

○建仁元年老若五十首歌合
有明の月にむれたるこゑながら千鳥なみよる沖つ汐風　参議雅經卿

水鳥

○建久二年十題百首
をしのゐる蘆のかれまの雪こほり冬こそ池のさはりなりけれ　權中納言定家卿

○一字百首
をしのゐるこほりのひまに月さえて心のそこぞまづは碎くる　同

○文治三年百首
つてにきく契りもがなと相思ふこずゑのをしのよな〳〵の聲　同

○建久七年百二十首韻歌
物思はぬ人のきけかし山里のこほれる池にひとりなくをし　同

○述懐百首
水の上いかでかをしの浮ぶらむくがにだにこそ身は沈みけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○文治六年五社百首
こやの池の蘆の枯葉の草ぶきやともねのをしの住かなるらむ　同

拂ひあへぬ上毛の霜にいかにしてをしの青羽の變らざるらむ

○正治二年百首御歌
風を痛みこ島が崎に住むをしは見えても見えず浪の浪まに　後鳥羽院御製

○同
むれてたつ空も雪けにさえくれて氷のねやにをしぞなくなる　式子内親王

○御集、冬夜
くちばしも氷とぢてやをし鳥の寒けき夜半におとなかるらむ　花山院御製

○御集中
きく人の袖に浪をば宿しおきてこほれる池にをしは鳴くなり　後京極攝政

○寶治二年百首、池水 氷イ
さゆる夜の池にうきねのをし鳥は氷をたまの臺にぞしく　後九條内大臣

○住吉社百首御歌
こはいかに霜さゆるよのをしの聲を住の江にきく冬の曙　慈鎭和尙

○建仁元年老若五十首歌合
鹿のねをうきねのをしの聲にかへて我も生田のをのが草臥し　同

○同

誰きかむいくたの奥にさよ更けて妻や爭ふをしのもろ聲　嘉陽門院越前

○建仁四年百首

聲たててよる行く鹿の山河に妻こひかねてをしぞなくなる　從二位家隆卿

○同年名所百首

思ふことわれと增田の池にすむをしのうきねもさやは苦しき　兵衛内侍

○永久四年百首、鴛鴦

夜と共に思ふことなきをし鳥の影をならびの池にすむらむ　六條院大進

○寶治二年百首

これまでもつがはぬをしの慰めに影や竝びの池となるらむ　後九條内大臣

○建長八年百首歌合

池水に浮べるをしのむなげもて寒き景色のなきがあやしき　信實朝臣

○千五百番歌合

さむけしや番はぬをしの終夜浪にかたしくしもの毛衣　隆信朝臣

○同

哀れなりしたの思ひやいかならむ冰をたゝむをしのけ衣　前大納言兼宗卿

○洞院攝政家百首

うちはらふ霜のつばさの背さえてをしのうは毛にこほる月影　俊成卿女

○千五百番歌合

霜の上におのが翅をかたしきて友なきをしのさよ深き聲　後京極攝政

雷雨本
雪の下こほりのうへをすみかにて冬にこもれる池のをし鳥　第三のみこ

○冬歌中

雲葉
うき草に枕やすむとをし鳥の今は冰にねむかたやなき　源師賢朝臣

○家集、水上落葉

となせよりうきて流るゝ紅葉ばにつれてぞ下るをしのむら鳥　源仲正

○百首中

續後拾参
おほゐ河ゐせきの水や凍るらむはやせにをしの聲くだるなり　寂蓮法師

○貞應三年句題百首、水鳥眠レ岸

心せよつばさをしきてをしがものしばしまどろむ岸の白波　民部卿爲家

萬代
谷川のふしきに眠るをし鴨はつらゝの牀や夜さむなるらむ　光臺院入道二品のみこ

○六帖題
新六三 池水にをしの劒羽そばだてて妻あらそひの景色はげしき　信實朝臣

同 山河のあたりは凍るいはわたに流れもやらずをしぞなくなる　光俊朝臣

○百首歌、古來歌合
けさ見ればうきねのをしはあくがれて氷ぞゐたるまのの池水　實清朝臣

○河
六帖三 新勅雜四 ちくま河入江のをしもさわがぬはうき影みせむ物ならなくに　讀人しらず

○題不レ知、閨中
しろや君冰柱ひまなきはらの池に變らぬをしのよはの浮寢を　同

○家集
とをつかは岩間のをしのひと番ひさてしもすまば山深くとも　長明

しもさゆるふたみの浦のをしの上毛君より外に誰かはらはむ　小大君

○みちのくにより申しつかはしたりける人の返し
鹽がまの浦にすむともをし鳥のとふことのはをいつか忘れむ　能宣朝臣

○題不レ知
萬二千 礒の浦につれ（ねイ）よび來鳴く（すむイ）をし鳥のをしきあかみは君がまに〳〵　讀人しらず

○冬歌中
水ぐきのをかの湊の凍る夜はかずだにかかでをしぞなくなる　權僧正公朝

○家集
河舟のあしまをわくる楫の音にをしのはかぜのまつ聲ぞする　大納言經信卿

このうたは橘俊綱朝臣にぐして天王寺へまゐり侍りけるにみちの舟にてよみけると云々

○仁安二年歌林苑歌合、水鳥
冬深み六田のよどにふしつけししばまの水にをしぞなくなる　藤原憲盛

○同
浮寢するつらゝの牀や寒からむまのの入江にをしぞなくなる　祝部成仲

○嘉應二年七月法住寺殿歌合、水鳥近隣
岸近みあしまの水にうきねして手がひになづくをしの鴨鳥　前大納言隆房卿

○同
住みなるゝ手飼のをしやこれならむ立ちぬる臺にたたぬ番ひは　隆信朝臣

○西洞隠士百首御歌
難波潟蘆のしをれ葉こほりとぢて月さへ寒しをしの一聲　後京極攝政

○日吉社歌合
なにはがた松のあらしに雲消えて月の氷にをしぞたつなる　慈鎭和尚

○天仁二年三月比叡山歌合、鴛
難波江のしげきあしまの薄氷わりなくをしのすだくなるかな　讀人しらず

○永久三年十月家歌合、水鳥
古來歌合
みしまえやあしの枯葉の下ごとにはがひの霜をはらふをし鳥　法性寺入道關白

○修行にいてけるに途にてみしまえにをしの立つをみて
みしまえの水鳥さわぐ夕ぐれに袖うちぬらし今ぞすぎゆく　大僧正行尊

○冬歌中
現存六
しがの浦の汀の浪やこほるらむ浮ねもとほきをしのひとりね　正三位經朝卿

○永承五年十一月俊綱朝臣家歌合 水鳥
衣河つまなきをしの聲きけばまづわが袖のさえまさりける　讀人しらず

○天仁二年家歌合、水鳥
夜を重ねいこそねられね吾妹子が姿の池のをしのは風に　大納言師賴卿

○六百番歌合、見戀
かかりける姿の池のをしの聲きては袖のぬれしかずかは　寂蓮法師

○家集、寄水鳥戀
うらやましいかなる鴨のわぎもこが姿の池に浮ねしつらむ　俊賴朝臣

○仁安二年歌林苑歌合、水鳥
まき流すにふの河瀬にゐる鴨はめなれにけりなたちも騒がぬ　從二（三イ）位賴政卿

○同
谷河はこほりしにけり朝日さす岩のかけぢにかもめむれゐる　源季廣

○同
はるゞゝと淡路の沖にうく鴨を蜑のを舟に見ぞまがへつる　藤原親佐

○洞院攝政家百首
はらの池の汀を遠み氷るよは沖をふかめて鴨ぞ鳴くなる　大納言經通卿

○永久四年卒爾百首、水鳥
廣さはの汀の氷さえぬらし浮ねの鴨の聲急ぐなり　民部卿爲家

○千五百番歌合
おしてるやなにはの蘆の下がくれかりねも鴨の霜になくこゑ　後鳥羽院御製

○家集、百首
たつた川紅葉を分けてゐるかもの色に青葉はのころなりけり　喜多院入道二品のみこ

○嘉應元年五月潤智法眼房歌合、水鳥（觀イ）
いづみ河こほりを分けてゆく舟のあとにきゐるは鴨のむら鳥　讀人しらず

○家集
現葉　淺氷とけもやするとこやの池のあしまをなるゝかもの村鳥　顯仲朝臣

○承安五年三月重家卿歌合、池邊寒蘆
こやの池の汀の蘆は霜がれて見なるゝかもぞあをなりける　正三位季經卿

○冬歌中、かも
現存六　夕されば聲もしみゝにもゝつての磐余の池に鴨ぞなくなる　藤原季宗朝臣

○題不レ知
萬三　新古今　もゝつたふいはれの池に鳴く鴨をけふのみ見てや雲隱れなむ　大津皇子

○同
萬三　よしのなるなつみの川の河淀にかもぞなくなる山影にして　湯原王

○同
萬一　あしべ行く鴨のはがひに霜ふりて寒き夕はやまとしぞ思ふ　志貴皇子

萬十四　蘆の葉に夕霧たちてかもがねの寒き夕しなほは忍ばむ　讀人しらず

○喜多院入道二品親王家五十首
あしの葉に雪ふる夜半は水とりの浮ねぞ浪の下に見えける　寂蓮法師

○六帖題、水鳥
新六三　あしねはふ浮ねにすだく鴨の子の親にまさるときけば賴もし　光俊朝臣

○六十五韻歌、敬神喩禮在汀鳧
影うつす山のあをばも冬枯れてさびしき池に殘るをしがも　前中納言定家卿

○喜多院入道二品親王家五十首
あしがものよるべの汀つらゝゐてうきねをうつすおきの月影　同

○正治元年左大臣家十首歌合、水鳥知レ主
見なれてはこれも名殘やをし鴨のなれだに宿の主はわきけり　同

○柿本影供
おく霜は青葉のうへに重ねつゝやなぎにみゆる鴨の毛衣　後九條内大臣

○家集、水鳥夜遊
夜もすがらおきのすゞがもはふりして渚の宮にきね鼓うつ　源仲正

○十題歌合
あしがものうきねよいかになみ枕たのむ入江のまのの浦風　參議雅經卿

○範定家歌合、水鳥
嵐ふくひらの湊にゐる鴨はうきねながらも浦づたひけり　寂蓮法師

○弘安三年稻荷社百首
さのみなど鷗群れゐる水の江に跡もなき名のたち騷ぐらむ　安嘉門院四條

○同二年龜栖宮百首
とことはに涙の川をまくらにてうきたる鴨の音こそなかるれ　同

○題不ㇾ知
[六三] 音になきて夜は物思ふ浮鴨のわが身隱れにとひもきななむ　讀人しらず

○六帖題
[新六三] みくさゐる入江に馴るゝ浮鴨の安からぬ世は思ひしりにき　衣笠內大臣

○同
[新六三] 世にふれば鴨の水がきやすからず下の思ひは我ぞ苦しき　正三位知家卿

○同
[同] 霜のきぬこほりの牀によを重ね寒さたへたる池のかもどり　光俊朝臣

○正治二年百首
たのしみや寶の池に深からむたまもにあそぶ鴨のむら鳥　喜多院入道二品のみこ

○題しらず
[萬三 王懸二] かるの池の入江めぐれる鴨すらに玉もの上に獨りねなくに　讀人しらず

○冬歌中、古來歌合
かものたつ羽音さわがし輕の池のうはての堤人やすぐらむ　法印尊海

○天つちの一字の歌
もがみ河いな舟のみは通はずておりのぼり猶さわぐあし鴨　順

○家集、冬歌中
もがみ河うきねはすれど水鳥の下の心はやすけくもなし　基俊

○家集、湖鳥水鳥 遵イ
風さえてうきねの牀やこほるらむあぢむらさわぐしがの辛崎　大納言經信卿

○堀川院御時百首
なるみ潟沖にむれゐるあぢ村のすだくは風のさわぐなるかな　仲實朝臣

○氷を

夕さればまのの池水こほりしてよがれがちなるあぢの村鳥　三條入道内大臣

○正治二年百首

池水の汀におつるあぢむらに碎けてみゆるうす氷かな　源　師光

○三百六十番歌合

吹く風を岩にへだてて山河のぬるみにつたふあぢのむら鳥　覺盛法師

○家集

みる人は沖の荒波疎けれどわざとなれるるをしたがへかな　惠慶法師

このうたはあふみにひらといふ所に人々まかりて題ども出して歌よみけるに水とりのなみにあそびけるを題にてよみけると云々

○冬歌中、古來歌合

くれかゝる沼のねぬなはふみしだき刈田のくゞひ霜拂ふらし　資隆朝臣

○百首歌、沼水鳥

永き夜に沼のねぬなはふみしだきくゞひ鴈がね霜はらふなり　從二位家隆卿

○百首御歌

ひまこほる冬のかり田にゐる鴈のおほひば白くさゆる霜かな　後鳥羽院御製

○嘉應二年法住寺殿歌合

きみが代の長閑なりとや水鳥のたまの汀につばきしくらむ　皇太后宮大夫俊成卿

このうた判者右歌歟又みづからのおやしの歌とみ侍りしかばおしてたの勝と申すべかりしを人々祝の心あり勝つべしなど侍りしかばさらば持などにてやと定め申しにき但したまのいけなどいふ事こそあれみぎはやいかゞといふ事侍りしをよみ人をかくされたるゆゑにくはしくも申さでやみ侍りにしなり瑤池玉砌などは詩にもつれの事なりみぎはや大和ことばにて水のきはといふ事なれば本文におよぶべからず又玉と

いふことはなにをもほむる時の事なればたゞみぎりとても侍るべかり
しかとさいひつればことばもおとる水とちかからむ爲やまとことばに
つきておまへのみぎはにつばさなしかせて侍るばかりなりと云々略之

○正治二年仙洞十首歌合、水鳥
さゆる夜にむれゐる鳥の音なれや氷のうへに浪をきくかな　後京極攝政

○建保四年内裏十首歌合
霜深きなにはのあしのしたはれてむれゐる鳥の跡も見えけり　嘉陽門院越前

○同五年内裏歌合、冬川風
思ひ川絶えずながるゝ水とりのおのが羽風もあらしふくころ　權大納言忠信卿

○同
浪のうへにこほりあらそふ水鳥のかもの河風さゆる夜半かな　正三位知家卿

○百首歌
水鳥のあしにひかるゝねぬなははは人もかまへぬくゝりなりけり　喜多院入道二品のみこ

○水鳥
六三
風ふけばよどを求むる水鳥の浮ねをのみやわれなげくらむ　讀人しらず

○六帖題
新六三
浮どりのさながらぬるゝ水遊び何そはさてもかしらからけそ（かゝげてイ）　忠實朝臣

○冬鳥中、人家
水とりのおさきの池のこほれるやうき影移す鏡なるらむ　平時親

○家集
歌林
あはぢ島松ふく風のおろすかときけば磯べにあきさたつなり　俊惠法師

○同
むれわたる磯べのあきさ音さむしのだの入江の霜のあけぼの　長明

○七百首歌中
あきさゐるあらき濱べの松がねに衣手しきてさぬる悲しさ　權僧正公朝

○山里百首、水鳥來寥
なるみ潟あきさわたると見し程に磯の玉藻はつらゝゐにけり　源仲正

○仁安二年歌林苑歌合、水鳥
いづかたも同じ浮寐をなにとかは浦渡りするさよのすが鳥　祐盛法師

○氷島を

新撰国 霜結ぶ入江のまこも末わけてたつみとさきのこゝろも寒けし　前大納言忠良卿

氷

○千五百番歌合

けさはしもそるはしたかの影もみしのもりの鏡薄こほりして　小侍従

○洞院攝政家百首、氷

秋はてて枯野の草に結びおくこほりぞ露のかたみなりける　俊成卿女

○最勝四天王院名所御障子

はしひめのこほりの袖の夢たえてあじろふきそふ浦の河風　同

○千五百番歌合

石まわけ落つるよそめはそれながら音せぬ瀧やたぐひなるらむ　隆信朝臣

○家集、冬歌中

たきつせやよもの山河音たえて松に流るゝ風ぞせかれぬ　従二位家隆卿

○嘉元元年三十首

とぢはてぬ水ひとすぢの道見えてあたりは凍る冬の山河　前中納言爲家卿

○冬歌中

衣玉 ふしつくるむつたのよどの淺氷とくれば袖ぞぬれまさりける　孝善

○こほりの河の水をむすぶといふことを

かはわたにおの〳〵つくるふし柴をひとつにくさる朝氷かな　西行上人

○堀川院御時百首、氷

大丈夫がもぶしつか鮒ふしつけしかひやが下に氷しにけり　權大納言公實卿

○同

氷柱ゐて守る岩まの關なればよをへてかたくなりまさるなり　俊頼朝臣

○述懐百首

しみ凍るすはのとなかの徒渡り打ち解けられぬよにこそありけれ　同

○久安百首

けさしもやすはの氷のひま分けてをしふるこまの道なづむらむ　前參議親隆卿

○文治六年五社百首

冬なれば水のこほるは常なれどことにはすはの渡りなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○洞院攝政家百首
駒とめてすはのとたわる旅人の氷のはしの音のさやけさ　家長朝臣

○家集中
こほりゐる淀のおほわた冬寒みいつか春日にとけむとすらむ　前中納言匡房卿

○同
續後撰雜中
こがでさす淀の汀のうはこほり下にぞなげくつねならぬよは　好忠

○三百六十首中
とをつかは吉野のたきをわけ行けば氷ぞあわとうきてさ迷ふ　同

○屏風の鳥に、十月池のほとりのもみぢ
淺氷とけにけらしな池の面にたたまくをしき紅葉ちるなり　元輔

○洞院攝政家百首、氷
なつをのみ松が崎なる氷室山このうづみ氷はあたりさへつゝ　家長朝臣

○同
かち人のわたる小川のうす氷ながれもやらぬおとぞくだくる　信實朝臣

○二夜百首御歌
大井河せゞの岩波おとたえてゐぜきの水に風こほるなり　後京極攝政

○六百番歌合
しみづもる谷のとぼそもとぢはてて氷をたゝく峯の松風　同

○百首御歌、氷
あさごとにこほりぞ今はむすびける霜がれはつる菊の池水　後嵯峨院御製

○御集
波よするしがの唐崎こほりゐておきに汀のなりにけるかな　後京極攝政

○寛元元年女御入内御屏風、湖邊氷
しがの浦のこほりの上も鏡山いづる朝日の影もくもらず　從二位家隆卿

○三十六人歌合
夜をさむみ汀のこほりひとへづゝ重ねてかへるしがの浦浪　寂蓮法師

○建保三年内大臣家百首、湖氷
あふみの海ひら山おろし吹雪來てさゞ波結ぶしがのから崎　大藏卿有家

○貞應二年名所百首
ふくる夜のしがの唐崎風さえてこほりの下によする白浪　民部卿爲家

○洞院攝政家百首
にほの海や浦風あらく立ちにけりこほりをこえてよする白浪　信實朝臣

○喜多院入道二品親王家五十首
谷川の水はこほりに結ばれてとけぬおびするきびのなか山　前大納言隆房卿

○建長八年百首歌合
さゆる夜も行くせは波の早ければ水のみわたぞまづ凍りける　正二(三イ)位忠定卿

○喜多院入道二品親王家五十首
をしのゐる池の冰のます鏡おもてにうらもみゆるなりけり　前大納言兼宗卿

○冬御歌
みのの國ふはのなか山雪きえてとくるこほりの關のふぢ河　中務卿のみこ鎌倉

○千五百番御歌
見わたせば冰の上に月さえてあられなみよるまの浦風　後鳥羽院宮内卿

○題不知
現存六
冱ゆる夜はみむろの山の帶にせるあすかの冰結ぼほれつゝ　光俊朝臣

○冬歌中
雪葉
こやの池の蘆まのこほりむすぶらし嵐あれゆくゐなのしば山　前大納言經平卿

○承安五年三月重家卿家歌合、池邊寒蘆
こやのいけの汀のあしを下葉より結びよするは冰なりけり　昌俊法師

○家集、冰礙レ舟
うなゐごが流れにうくるさゝ舟のとまりは冬の冰なりけり　源仲正

○百首歌
なにはがた入江をこえてみつ汐のしたにや水は猶凍るらむ　從二位家隆

○今宮御會、冰礙レ舟
湊いづるかこのとも舟ゆすれどもひわれもやらぬあさ冰かな　源仲正

海原やあきつしまわに冰ゐてよせわづらひぬから人の舟

○正治二年百首
難波がたよせくる波に風さえて蘆のかれ葉にたるひしにけり　土御門內大臣

○同
わたの原ふかくや冬のなりぬらむ冰ぞつなぐあまのつり舟　式子內親王

○同
難波がた汀の風もさしぬればこほりにつなぐなだのつり舟　二條院讃岐

○冰逐レ日結
難波潟みぎは日をへてこほるらしうらわの浪も沖になりゆく　權中納言長方卿

○家集
清見がた富士の山風うみふけば氷ぞ波のせきとゐにける　忠盛朝臣

○建保四年內裏十首歌合
けさよりは行く瀨の水もあさもよひきの河上は氷しぬらむ　僧正行意

○洞院攝政家百首、氷
河浪の舟もかよはずいるしほのおよぶをはてとこほる湊は　民部卿爲家

○寶治二年百首、池氷
山かげのたつらの池の冬さむみこほりにけりなもる水もなし　同

○貞應三年百首
水上の山のたきつせこほるらし生田のかはらゆく水もなし　同

○康元二年毎日一首中
岩がねのしばまをわくる山河のうはなみこほる冬のあけぼの　同

○六帖題
新六一　冬きてはたがはにたてる水車氷のくさびうちそへてけり　同

○冬歌中
冬はみつふたみの浦のあさ氷とけぬほどこそ鏡なりけれ　惠慶法師

○久安百首、氷
さえ〲て風のわたせるうきはしは河瀨にむすぶ氷なりけり　實清朝臣

○六帖題御歌、氷
いかばかりさゆる嵐ぞとませ河ゐてこす浪もゆふこほりせり　中務卿みこ鎌倉

○百首歌、氷
松影の岩のたむけのゆふ氷たまをかけたるぬさかとぞみる　光俊朝臣

○六帖題
新六一　あはれわが心の水のいつよりかとけぬこほりの結びそめけむ　衣笠內大臣

○題不レ知
萬二十　さほ河にこほりわたれる薄氷のうすき心をわが思はなくに　讀人しらず

○千五百番歌合
浪さわぐをしのは風もさだまりぬ結びやしつる池の薄氷　寂蓮法師

霰

○十題百首御歌、木
かた岡のまさきの下葉いろづきて山の奥にはあられふるころ　後京極攝政

○正治二年百首歌めしけるに
冬ふかき外山のあらしさえ〲て裾野のまさ木霰ふるなり　後鳥羽院御製

○同
ふく風にあられふりしく葛の葉のちりての後も玉ぞまきける　源　師光

○冬歌中
明玉　わけて行くふたむら山のこぐれより柞まじりの霰ちるなり　中原師光朝臣

○文集百首、南窓背レ燈坐風霰暗紛々
思ひやれ風にあられのおとちりてさゝひき結ぶいほの燈　慈鎮和尚

○家集、霰を
み山ぢを夕こえくればしひ柴のうればにつたふ玉霰かな　仲實朝臣

○久安百首
家　磯べにはあられふるらしあま人のかづく白玉かずやそふらむ　清輔朝臣

○文治六年女御入内御屏風
風わたる池のこほりはひまなくて浪よるものは霰なりけり　三條入道左大臣

○さくらの花にあられのはしりけるをみて
たゞはおちて枝をつたへる霰かなつぼめる花のちる心地して　西行上人

○建保六年文集百首
風のうへに星の光はさしながらわざともふらぬ霰をぞきく　前中納言定家卿

○三百首歌、行路霰
冬の日の行く方急ぐかさやどり霰すぐさは暮れもこそすれ　同

○文治五年百首
あられふるしがの山路の風さえて峯にふきまく浦のさゞ波　同

○冬御歌中
いづれをか玉とは見らむ霰ふるかしまが崎のあまのをとめご　六條のみこ

○文治六年五社百首
月もすむ玉つくりえは霰ふり氷みがけるなにこそありけれ　皇太后宮大夫俊成卿

○百首歌、霰
さゆる夜におつればこほる涙こそまくらのもとの霰なりけり　同

○柿本影供
たちわたる雲の衣のうらよりや玉とは見えて霰ふるらむ　後九條内大臣

○千五百番歌合
月さゆるにはの木の葉におく霜のくもらぬうへに霰ふるなり　従二位定家卿（家隆イ）

○建保四年内裏御會、寒山月
あられふる山ふきあらすこがらしに月影ながらなびく白玉　同

○同五年内裏歌合、冬野霰
やたの野に霰ふりきぬあらち山あさぢも寒く色かはるまで　同

○家集、冬夜
月にはれ霰にくもりかはれどもたゞには白くさゆるよはかな　前民部卿雅有

○家集
竹のおとのわきて枕にさゆるかな風に霰のぐせられにけり　西行上人

○承久二年四季百首
さびしさにたえぬしばやの夕煙あたら霰のたまやすゝけむ　従二位家隆卿

○六百番歌合、寒松
とやまなるしばのあみどは風すきて霰よこぎる松のおとかな　寂蓮法師

○百首歌
さゆる夜の空より風の結びきてこほれるあめは霰なりけり　同

○君臣御歌合
玉集冬　やねの上はつもれる雪におともせでよこぎる霰窓たゝくなり　中納言爲兼卿

○六帖題
新六一　白妙の玉の緒とけてかたいとのくるすのをのに霰ふるなり　民部卿爲家
冬さむみしぐれや空にこほるらむそめこし山に霰ふるなり

○三島社に奉りける歌に
神がきやたまのみぎりに榊葉のさやぐをきけば霰なりけり　権僧正公朝

霙

○六百番歌合、霙
風わたる花のあたりの春雨は冬の空にもありけるものを　慈鎭和尚

○同
かきくもりおなじ空より雪ふれば時雨も色のかはるなりけり　寂蓮法師

○同
かき曇りみぞるゝ空やさえそめて凍りもはてぬ時雨なるらむ　從二位家隆卿

○同
けふも又かたののみのにみぞれして乾くまもなき狩衣かな　正三位經家卿

○同
誰もみよこれはみぞれの空ならむちりくる花は雨やまじりし　正三位季經卿

○正治二年百首
あれくらす冬の空かなかきくもり霙よこぎる風きほひつゝ　式子内親王

○建保四年百首
みぞれふる端山がしたのおそ紅葉ひとむらみゆる冬の夕ぐれ　從二位家隆卿

○永久四年百首、霙
夕暮の霙にしみやとけぬらむたるひづたひに雫おつなり　源　兼昌

○同
夕されに雪ふる里の柴の庵は雫にてこそみぞれとはしれ　神祇伯顯仲卿

○同
ひまを荒み竹のすがきの下さえて夜な〳〵降るは霙なりけり　藤原忠房

○題しらず
萬一
霙ふりあられ松原住吉のおとひむすめとみれどあかぬかも　讀人しらず

夫木和歌抄卷第十七終

夫木和歌抄　巻第十八

冬部三

題　雪　野行幸　鷹狩　豊明節會　賀茂臨時祭　神樂
　　冬梅　炭竈　佛名　爐火　歳暮

雪

○題不レ知
（萬十　新名冬）やたの野にあさぢ色づくあらち山峯のあわ雪寒くぞあるらし（ふるらし萬）　人　丸

○建保三年名所百首、冬歌
あらち山峯のあわ雪いかならむ麓のあさぢうらがれにけり　僧正行意

○家集、雑歌中
しら山の峯なればこそ白雪のかのこまだらにふりてみゆらむ　中納言家持卿

○久安五年七月山路歌合、雪
吉野山またよこ雲のくれぬるとみゆるにしるしけさの初雪　法橋顕昭

○同六年百首
おしなべてかのこ斑らにみゆるかな雪むらきゆるゐなの笹原　上西門院兵衛

○同
よしの山初雪こよひふりにけりあくれどはれぬ峯のよこ雲　藤原清輔朝臣

○同
跡たゆるあらちの山の雪ごえにそりの綱手をひきぞわづらふ　前參議親隆卿

○洞院攝政家百首、雪
初雪にかきあつめてぞきこえあぐる大宮人のけさのありかず　家長朝臣

〇初雪

ふりぬべき宵のくもりを詠めおきてあけぬにむかふ初雪の庭　参議爲相卿

雲さむき夕山おろしふきおちてこよひは雪にみゆる空かな　同

〇乾元元年仙洞歌合

けさしはや雪はふりきぬ山風のあれつる夜半はこれにぞありける　前中納言爲兼卿

〇家集、雪

いかばかり降りつみぬらむあらち山岩の崖路に崩れおつる雪　清輔朝臣

〇永久四年百首、初雪

はつみ雪ふりにけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまで　源兼昌

〇家集

たゆみつゝそりのはやをもつけなくに積りにけりな越の白雪　西行上人

〇伊呂波四十七字

こしの山またこのごろのいかならむなべての峯にそゝぐ初雪　前中納言定家卿

〇正治二年百首

雪そゝぐはなのみすり（こイ）の狩衣うちはらへどもむらがへりつゝ　三條入道左大臣

〇承安二年十二月東山歌合、與日雪

越の山たておくさをのかひぞなき日をふる雪にしるし見えねば　大炊御門右大臣家佐

〇深山雪を

萬代　初雪のしるしのさをはたてしかどそことも見えず越の白山　同

〇元永元年十月内大臣家歌合、初雪

夜をさむみ越のねわたしさえ／＼て思ふもしるしけさの初雪　藤原宗國

〇雪埋二遠山一といふ事を

雲葉　いかばかりつもれる山の雪なれば梢をふみて人のゆくらむ　堀河右大臣

〇寛治八年八月京極關白家歌合、雪

ふる雪に谷のかけはしうづもれて梢ぞ冬の山路なりける　俊頼朝臣

〇嘉祿四年百首

雪ふればこしの中山あとたえてこずゑは道の下にさえつる　民部卿爲家

〇法輪寺百首、寄レ雪述懐

かじきはく越の山路の旅すらも雪にしづまぬ身をかまふとか　源仲正

〇家集、夜雪

夜もすがらふせやがうへにつむ雪をいくたびかきつ越の里人　同

○北野社百首
ふみわけぬながめも道やたえぬらむ越のしらねの雪の曙　後鳥羽院御製

○家集
あらち山松のひゞきぞほのかなる風もや雪に埋もれぬらむ　鴨長明

○題不レ知
歌林
うちしぐれむこの浦風さえ〳〵てゐなの小笹に雪降りにけり　藤原憲經

○千首歌
霜がれの汀にたてるあしつゝのひとへはかりにふれる初雪　民部卿爲家

○冬御歌中に
玉葉冬
けさみればとほ山白しみやこまで風のおくらぬよはの初雪　中務卿みこ

○前大僧正源忠泉、深山瀬田橋
新拾遺雜上
うちわたすあさけの袖も白妙に雪をかけたるせたの長橋　參議爲相卿

○正應五年三島社十首歌、松上雪
あらはるゝ雪の下はのふかみどり松のなさけは冬ぞ見えける　同

○寛元元年百首、雪
霜まではちぐさのあともみし野邊の雪はわかるゝ秋の面影　同

○家集、六首歌
深からぬ雪のあさけの窓の前にさ枝かたよるいさゝむら竹　法眼慶融

○建治元年五月源廣綱朝臣歌合、曉見二初雪一
かゞみ山曉がたにみわたせばあまぎりあひて初雪ぞふる　藤原明信

○安元元年十月右大臣家歌合
しもがれの眞萩が枝ぞめづらしきとほ里をののけさの初雪　寂念法師

○同千首歌
めづらしく又も見よとやよしの山櫻が枝にふれるはつ雪　俊惠法師

○同千首歌
霜がれの草葉ぞしばしたまりける庭にきえ行くけさの初雪　民部卿爲家

○嘉元三年楚忽百首
をみ衣袖よりあまるくれなゐのひとへふりたる明方のゆき　爲實朝臣

○秀能すゝめける五首歌、雪
あまつ風はつ雪白しかさゝぎのとわたるはしの有明の空　中納言定家卿

○建長八年歌合
さえむせぶあらしに迷ふむら雲のはつ雪さそふ夕暮の空　從一位眞敎卿

此の歌判者行家卿云嵐をむせぶといはむ事山中樹洞（凋イ）庭松などにつきてやたよりあらむたゞなべて夕のそらをわたらむ嵐は難明（有カ）や波のおと水のこゑをもいはまをわけて氷の下をくゞるをぞわびさするよしの川をともよみて侍ると云々

○家集、對レ雪思レ雪
今みゆる雲の色こそあやしけれ我がまつ雪はこよひふらむか　前民部卿雅有

○建保三年名所百首御歌
ゆふかりのかたののましはむら〳〵に又ひとへなる初雪の空　順徳院御製

○建仁元年老若五十首歌合
槇の戸をあさけの袖に風さえて初雪おつる峯の白雲　後京極攝政

○賀茂社百首御歌
初雪のふりすさみたる雲間よりをがむかひある三日月のかげ　慈鎭和尚

○隔レ里見レ雪と云ふことを
しのむらやみかみのたけを見わたせば一夜の程に雪の積れる　西行上人

○雪の朝りやうせんと云ふ所にて
たけのぼるあさ日の影のさすまゝに都の雪はきえみきえずみ　同

○御集
現存六
嵐ふくさゝふの山の夜のほどにおともそよがずつもる白雪　衣笠内大臣

○中務卿親王家歌合
ならのはにゆふとりかけてちはやふる神なび山につもる白雪　従二位行家

○雪歌中
雪深みきびの中山あとたえてけふはまがねをふきやわづらふ　俊惠法師

○家集
萬十
とつ國は衣手さむし高窓の山の木ごとに雪のふるらし　中納言家持卿

○冬歌中
雲葉　續古雑上
朝な〳〵よそにやはみるかゞみ山ねかひの岡につもる白雪　正三位知家卿

○十一月きえやすき雪をうらみし心
はだれ雪あだにもあらで消えぬめり世にふることや物うかるらむ　主殿

○家集、雪を
さゞ波やひらの高根に雪ふればなにはあしげの駒なめてけり　殷富門院大輔

○一字百首
雉子なく片野の原に雪ちりてとだちもしらずあるゝけふかな　前中納言定家卿

○建長八年百首歌合
春またず急ぐ花野の梅がえにうらこき雪のふらぬ日ぞなき　後九條内大臣

○祇園百首
代を祈る神のしるしはとよのとし深くつもれるみ雪にぞしる　皇太后宮大夫俊成卿

○ゆく道の雪
雪重みしだれるみさの枝なれやさはるをかさに時雨おつなり　俊頼朝臣

○百首歌に
松風のおとはふゞきになりにけり梢をわたる山の白雪　信實朝臣

○建保三年内大臣家百首、岡雪
山賤の急ぐあさ戸もあけわびぬむかひの岡の雪のふゞきに　同

○後京極攝政家十首歌合、雪中曉嵐
このまよりなびく夕ひのほどもなし嵐にふゞくさよの中山　從二位家隆卿

○久安五年十月山路歌合
白雲のかゝるたかねとみゆるかな雪ふりつもるさやの中山　蓮覺法師

○安元元年閏九月歌合、月照山雪
積りける雪ばかかりは木の間より月もしぐるゝさやのなか山　從三位頼政卿

判云しぐるゝおぼつかなしと云々

○正治二年百首
吹雪するきそのみさかに雪しきて拂へどのびぬまくりでの袖　三條入道左大臣

○寶治二年百首、積雪
いつまでかふみも分けけむみ山べにしみたる雪は道たえにけり　信實朝臣

○喜多院入道二品親王家五十首
ふる雪に樵の道はあとたえてたれおく山に冬ごもるらむ　隆信朝臣

○後京極攝政家歌合、雪中松樹低
花と見る雪も日かずもつもりゐて松の梢は春のあをやぎ　前中納言定家卿

風のまのもとあらの萩の露ながらいく代か春をまつの白雪　同

○同
ふる雪にたえずなり行く庭の松やはなちる里の玉の小柳　慈鎭和尚

をとめ子が袖白妙にたちかさねうちふす宵のとこの面影　大藏卿有家

○石淸水三百首歌合、月前雪
しめのうちに月の光をやはらげて玉のちりしく庭の雪かな　土御門内大臣

○同
ふる雪はつもりにけりなあかしがた月におとせぬ浦の松風　後鳥羽院宮内卿

○同
さゆる夜の月の空よりふる雪は光のやがてつもるなりけり　皇太后宮大夫俊成卿

○同
花にまがふ雪の梢に春はきてなほ月こほるあまの河波　大藏卿有家

○同
空はなほ雪げの名殘おぼろにてにはにさやけき月の影かな　隆信朝臣

○喜多院入道二品親王家五十首、閑居
山里は松のとぼそもうつろひて月ぞさしいる雪のまくらに　従二位家隆卿

○百首御歌
よさの海の冬のしほ風雪に吹きてことのほかなる浪の音かな　慈鎭和尚

○千五百番歌合
高砂の松のねぐらやをれぬらむ雪よのつるの恨み鳴くなる　従二位家隆卿

○光臺院入道二品親王家五十首、湖雪
拾遺愚草中
にほの海や汀のほかの草木までみるめなぎさの雪の月かげ　前中納言定家卿

○六百番歌合、冬朝
ながめやる衣手さむし有明の月よりのこる峯の白雪　寂蓮法師

○千五百番歌合
ときは山白雪かゝる木ずゑこそはるかにみゆるゆきの下草　野宮左大臣

○建保三年名所百首
をしほ山けさふる雪のゆふかづら神代をかけてなびく松風　正二位忠定卿

○百首御歌
山風のつもればやがてふきたててふれどたまらぬ峯の白雪　後鳥羽院御製

○同
駒とめてしばしはゆかじ八橋のくもでに白きけさのあわ雪　順德院御製

○樹深雪深百首歌
おのづからたつきも見えぬつくばねの峯の紅葉につもる白雪　従二位家隆卿

○百首歌
寂しさは重ねてけりな津の國のあしのまろやの雪のうはぶき　寂蓮法師

○同
かきくらす空さへひまはなかりけり浪花の小屋の雪の草ぶき　民部卿爲家

○家集
かれはつるかやがうは葉に降る雪は更に尾花の心地こそすれ　西行上人

うらかくすをみの衣とみゆるかな竹の葉わけにふれる白雪　同

○百首歌合
すゑ重みをふれす竹の雪間よりけさはそともの山もかくれず　安嘉門院四條

○貞應三年四季百首、冬夜
くもるとは星の光に見えねどもたえ〴〵風はおつる白雪　民部卿爲家

○君臣桐歌合
吹きしきる嵐をこめて埋むらしふけゆく山ぞ雪にしづまる　前中納言爲兼卿

○正應五年内裏當座歌
里遠き煙のすゑのひとなびきさらではのべの雪のこのいろ　同

○奈良花林院歌合、雪
玉の緒にはゝその杜もなりにけるふる白雪のきえぬかぎりは　基俊

○寛治八年八月京極關白家歌合、雪
近江ぢは民の笠のみ見ゆるかな越にもまさる雪にぞありける　讃岐

○同
旅人のしばすり衣うちはらひ拂ひもあへずけさの白雪　藤原正家朝臣

○永萬二年重家卿家歌合
ますらをが埴生のこやのむね弱みいくへになりぬ雪のうはぶき　前大納言隆家卿（隆季歟）

○同
いかにせむ冬木も未だこらなくに深くも雪のなりまさるかな　前中納言雅頼卿

○永久四年百首、雪
奥山のならひとなればあなしけの雪よりさきに冬木こりつむ　仲實朝臣

○安元二年十月右大臣家歌合、初雪
をしねかる賤のすが笠白妙にはらひもあへずつもる雪かな　清輔朝臣

此の歌判者云旧は秋こそかゝるものにてあるを雪ふらむ時はいかゞなど
申す人ありしかども其は僻事なり十月にかる所おほかりなしれと云ふ
はおそきいれなればかきあひてこそ侍れと云々

○弘長元年百首
ふりつみて餘りさえたる雪の上はさすや朝日も影ぞ凍れる　信實朝臣

○家集
あまの原かきくらがりてふる雪をよめには明かき月かとぞみる　和泉式部

○家集、雪歌中
宿からむ行方もしらず久方のあまのかはらの雪ぐれの空　従二位家隆卿

○文治六年五社百首
おぼつかなたがへる鷹もいかならむ狩場のをのの雪ぐれの空　皇太后宮大夫俊成卿

○百首御歌
よしの山いりにし人のおとづれもたえて久しき雪の通ひぢ　順徳院御製

○前大納言忠良卿歌合、山家雪
すみわびぬ我だに人をたづねばやと山の末の雪のかよひぢ　寂蓮法師

○嘉祿四年百首
人とはでことしの空も暮れぬべしあとなき庭のゆきの山里　民部卿爲家

○正治二年百首歌
たれを問ひ誰をまたましとばかりにあとたえはつる雪の山里　後京極攝政

○正治二年仙洞十首歌合、曉雪
あけぬるか梢をれふす松がねのもとより白き雪の山のは　前中納言定家卿

○文字鎖二十首、建保二年
すゞみせしならの廣葉をけさもがな日影ふせがむ雪つもる宿　同

○和歌所影供歌合、山家朝雪
朝な／＼外山吹きこす雪のあらしよもぎが庭の跡たゆるまで　如願法師

○家集、五首歌中
ふる雪に軒はかたしくみ山木のおつる梢に嵐ふくなり　寂蓮法師

○家集、庭雪を
ふる雪にまがきかたしく吳竹の庭のふしどは下こほりつゝ　後京極攝政

○御集、雪を
暁の峯のいほりにはる〴〵と見渡されたるよもの白雪　後九條内大臣

○一句百首、建久元年
ちる雪にみどりは見えてをとめごの袖の色ますもゝしきの庭　前中納言定家卿

○家集
をとめごが袖ふる山の花すゝき雪うちはらふ心ちこそすれ　少將內侍

此の歌はかすがのつかひにたち侍りけるにかれたるすゝきに雪しろくふりかゝりたるをみてよめると云々

○山家冬夜
ひとりぬる宿はふゞきに埋もれて岩の崖みち跡たえにけり　俊頼朝臣

○承久四年百首、初雪
くちなしの色にたなびくうす雲の雪けの空とたれか見ざらむ　同

○建長七年家千首歌
くちなしにさえたる雲の懸れるはいかほのねろに雪ぞ降るらし　前大納言顯朝卿

○題不レ知
萬十 うかねらふとみ山雪のいちじろくこひをばいもに人しらむかも　はいもが名萬　讀人しらず

六一 山の峽そこともしらずをとゝひも昨日もけふも雪の降りつゝ　同

六二 萬十 ならし山の峯もきりあふうべしこそ籬のもとの雪はちりけれ　同

○寛平御時后宮歌合
六一 家持集 月夜には花とぞ見ゆる竹のうへにふりしく雪を誰かはらはむ　源宗于朝臣

○同
菅萬 かきくらしちる花とのみふる雪は冬のみ空の雲やちるかも　讀人しらず

冬のうみふりいる雪はそこにゐて春たつ波の花とさくらむ　同

○延喜六年定久家歌合、依レ雪波心寒
ふる雪に波の心もさむからじかさがくれとやへたにたちよる　同

わたの海にふる白雪はきえながら波の心にさむさをぞそむ　同

○御集
いづくぞと見めぐらはせど天の原木の枝だにも見えずあるかな花　山院御製
御集云亂雪如花といふことをふるめかしきさまにはあらじとて云々

○題不ㇾ知
萬代家
奥山のゆづるはいかでをりつらむあやめもしらず雪のふれるに　平　兼　盛

○初雪を
冬くれば草木になべてをる人の衣手さむき花ぞちりける　貫　之

○南北百番歌合、山家
玉葉雑一
山かげや友をたづねしあとふりてたゞいにしへの雪のよの月　後京極攝政

○御集、雪中遠望
雪白きよもの山べをけさみれば春のみよしの秋のさらしな　同

○社頭雪
みかさ山昔の月をおもひ出でてふりさけみれば峯の白雪　同

○寶治二年百首、殘雪
ふれどまたつめもかくれずさを鹿のあさたつをの冬の白雪　民部卿爲家

○弘長元年百首
續古今冬
さらでだにそれかとまがふ山の端の有明の月にふれる白雪　同

ふりつもるうは葉の雪のゆふこりに凍りてかゝるまきの下露　従二位行爲卿

○家集、夕雪
ひとあれの風より後はしづまりてたけの葉しらむ夕暮の雪　前民部卿雅有

○家集、深雪の（爲イ）山と云ふ事を
吉野山やまとなりけむそのかみもかくやさほ姫雪を集めし　大納言經信卿

○堀河院御時百首
よしの山とをつ河上雪深みけぶるや民のいへゐなるらむ　中納言國信卿

○喜多院入道二品親王家五十首
越路をぞ冬の山とは思ひしに吉野のおくも雪は白山　皇太后宮大夫俊成

○石清水三首歌合、月前雪
みよしのやふる里さむくふゞきして月にあまぎる峯の白雪　前大納言忠良卿

○長治元年五月重隆卿歌合、雪
つま木こる道たえぬらむみ吉野の山のとはらにふれる白ゆき　平　時範朝臣

○つくしにてよめる

夜の程にいかなる國にきにけりと驚くばかりふれるしら雪　前中納言匡房卿

○雪をみてしづかに行きて馬のおそきにまかせたり

ゆきやらで雪の尾花とみつるかなひときふたきの駒に任せて　同

○文治六年五社百首

冬はこれ水の心の空にみちてこほれば雪とふるにぞありける　皇太后宮大夫俊成卿

空さむみ雲さえ〳〵てふる雪は冬のすがたの見するなりけり　同

○千五百番歌合

雪よこれ雲さへこほる冬の雨の空に結べる名にこそありけれ　同

○後法性寺入道關白家百首、雪

白妙のいさごまきしく天の河月のみやこの御ゆきなるべし　同

○正治二年百首

龜山やおほうち山をみわたせばふたをにみてりとよの雪にも　同

○題不知、古來歌

たらちねやおよばぬ山の雪の道麓にだにもなほや迷はむ　藤原光家

○百首御歌

明玉
はれ曇りふりもつゞかぬ雪雲のあふさきるさに月ぞさえたる　後一條入道關白

○南海漁父百番歌合

おのが秋月影さえし夜はかけてをのへの雪に鹿やなくらむ　慈鎭和尚

○百首御歌

あくがれし花のふゞきにすきなれて雪の空にも志賀の山ごえ　同

○光明峯寺入道攝政家百首、林雪

冬くればおのがみどりのあらはれて雪に色ある松のむらだち

○雪歌中

雪とくるしみゝにしだくかさゝぎの道ゆきにくき足柄の山　西行上人

○建仁元年老若五十首歌合

雪つもるときはの杜の下みどりわすられぬべし花も紅葉も　慈鎭和尚

○同

春しらぬたぐひをとへばみかさ山このごろ深き雪のうもれ木　前中納言定家卿

○喜多院入道二品親王家五十首

春秋の花も紅葉もをりすぎてはてはさながらゆきの埋れ木　隆信朝臣

○家百首御歌
ふりうづむとほ山もとの谷深み見えてすくなき雪のうもれ木　洞院攝政

○後法性寺入道關白家百首
山里の雲のこずゑにながめつる松さへけさは雪の埋れ木　後京極攝政

○御集、冬御歌
雪をれの峯のしひ柴ひろふとてあとみせそむる冬の山里　同

○建仁元年老若五十首歌合
山人のたきすさみたるしひ柴のあとさへしめるゆきの夕暮　同

○十題百首御歌
春の花秋の月にものこりける心のはては雪のゆふぐれ　同

○百首歌、雪朝眺望
ながめやる心のすゑも道たえぬ雪のあしたのしほがまの浦　寂蓮法師

○定家卿母のおもひにて侍りける時つかはしける時五首御歌
み吉野やをばすて山の春秋もひとつにかすむ雪のあけぼの　後京極攝政

霜がれのまき野の野べのけさの雪とほき心を庭にみるかな　同

○八幡宮歌合
秋はすぎ春はまだこぬなぐさめに月と花とをみする白雪　祐盛法師

○千五百番歌合
岩にさく雪の花こそあはれなれ春もみざりき秋もみざりき　慈鎭和尚

○六百番歌合、冬朝
新後撰冬
雲ふかき峯のあさけのいかならむまきのとしらむ雪の光に　後京極攝政

○同
朝戸あけて都のたつみながむれば雪の木ずゑや深草の里　中宮權大夫家房卿

○同
一年をながめつくせる朝といでにうす雪こほる寂しさのはて　前中納言定家卿

○同歌合、寒松
さえ〳〵て梢の雲をかくすなり尾の上の松の雪のうら風　從二位家隆卿

○千五百番歌合
色もなほ昔の袖ぞしられける雪ふりうづむ軒のたちばな　寂蓮法師

○建保五年内裏歌合、冬海雪
さえわたる峯の雲よりこしの海の空ともなみの雪の汐風　俊成卿女

○同
新拾冬 こぎかへるたななしを舟道もなし難波のあしの雪の下をれ　兵衛内侍

○正治二年百首歌
哀れなるあまの汐やのけしきかな雪のとざしにけぶり絶えせで　民部卿範光

○安元元年十月右大臣家歌合、初雪
めづらしやけさ初雪にみやぎのの萩のふるえに花咲きにけり　藤原基俊朝臣

○寶治十首歌合、野外雪
白雪のふるえのこ萩けさみればあらぬ花さくみやぎ野の原　山階入道左大臣

○建長八年百首歌合
白雪のつもるたびにもゆかしきはみかりのをかの曙の空　左近中將具氏卿

○文永七年毎日一首中
小倉山さが野の奥の月ゆきをとひこで人のしらむものかは　民部卿爲家

○建久四年毎日一首中
霜がれはさてものこりし冬草の下をれかこつけさの白雪　同

○正治二年百首
かきくらしかれ野の草の雪をれをやがて枕に結ぶさむけさ　隆信朝臣

○三百六十首中
ふりつゞき雪間もみえぬ冬の日のはれぬ雲居の鴈ぞなくなる　好忠

○文治百首、寂寞深村夜聽鴈聲中聞
里とほきそののむら竹深きよの雪の雲間をわたるかりがね　前中納言定家卿

○家十首歌、邊村雪
あともなき末野の竹の雪をれにかすむやけぶり人はすみけり　同

○正治二年百首歌めしけるに
ながむれば春ならねどもかすみけり雪おろ（ちイ）ふれる遠き野の里　後鳥羽院御製

○百首御歌
もゝとせの雪もけなくに風さえてまた冬ごもるみ吉野の山　土御門院御製

○後京極攝政家十首歌合
山人のひかりたづねしあとやこれみ雪さえたるしがの曙　前中納言定家卿

○古寺雪
映しける月のみ顔はひかりあひて軒のあれまにつもる白雪　同

○百首歌中
そなれ松梢くだくる雪をれに岩うちやまぬ浪の寂しさ　同

○建仁元年老若五十首歌合

くれ竹の葉ずゑにすがる白雪もよころへぬれば氷とぞなる　後京極攝政

○同

み山には松の葉白くふる雪にすそのの原はむら雨の空　後鳥羽院宮内卿

○最勝四天王院名所御障子

すが原やふしみのかたは時雨して雪ぞはつせの山のはのそら　參議雅經卿

○同

はつせ山尾上の鐘ぞあはれなる雪のいほりの明方のそら　如願法師

○同

鳴く千鳥それかあらぬか沖つ風ふきあげのはまの雪の白波　從二位家隆卿

○同

冬深みそれかあらぬかおきつ風ふきあげの濱のゆきの白波　參議雅經卿

○同

きのくにやいざふきあげの濱に出でて雪の鹽風浦にながめむ　慈鎭和尚

○洞院攝政家百首、雪

春の色はかれにし秋の霜の上にまたひらけたる雪の白菊　俊成卿女

かきくらし日かずふる屋の軒とぢて空にも深き雪の白くも　同

○正嘉元年毎日一首中

さゞなみやひら山おろしうみかけて一つになびくゆきの白雲　民部卿爲家

○三十首歌、故郷雪

あれにける志賀の山里冬くればところもわかぬ雪の花ぞの　同

○草庵雪朝

明けぬとて誰か通はむかりの庵の草のかこひの雪のとざしは　同

○毎日一首中

空はみな風にや雨のこほるらむたかねの雪のふる里の空　同

○家集、述懐歌中

世にあまる人のなげきの涙こそ雪をめぐらす袖はぬるらめ　同

○廻雪を

世にふれば袖こそぬるれあめの下雪をめぐらす人をみるにも　同

○舞を

雪のうちに雲のうへ人たちまひてめぐらす庭の袖ぞゆかしき　同

○建長三年名所百首

うちはらふわが袖かけてさえにけりたみののしまの雪の白浪　正二位忠定卿

○前大僧正源忠泉障子繪

駒なめて打出の濱の汀よりこほりにかゝる雪のさゞなみ　法眼慶融

○六帖題

新六一 我が宿のかきほのたにのあさと出に雪をれくゝる竹の下道　光俊朝臣

○家集

年ふればうはのたまももおひにけりからすのかみに雪積りつゝ　よしたゞ

○題不レ知

萬五 わがそのに梅の花ちる久方のあめより雪のながれくるかに　人丸

野行幸

○永久四年百首、野行幸紫野

紫のみ狩はゆゝしま白なるくちのはがひにゆきちろほひて　俊頼朝臣

○同

御狩野の野ぐちの尾花なびくまで羽風はげしきましらふの鷹　神祇伯顯仲卿

○同

あかねさす御狩のをのにたつ雉子空とる鷹はあはせつるかな　仲實朝臣

○同

あはせつるましろの鷹も心あらばみこし近くて空にとらなむ　源兼昌

○六百番歌合、野行幸

狩衣おどろの道もたちかへり打ちちるみゆき野風寒けし　前中納言定家卿

○同

さがの原はしる雉子のかた跡もけふのみゆきに隱れなきかな　正三位行家卿

○同

古のながれをうくるみかりかなそのせり河の跡をたづねて　正三位季經卿

○同

大原や野べの御幸のところえて空とるけふのましらふの鷹　法眼顯昭

○同

雉子なくさが野の原のみゆきにはふかき路をや先づ尋ぬらむ　前大納言兼宗卿

此の歌右方より難云きゞすは冬はなかぬ事にこそ陳云近來歌少々鳴く
とよみ侍りと云々

鷹狩

○建保三年名所百首
狩行けばかたのの霰きえぬまの玉のをまたず雉子なくなり　從二位家隆卿

○文治六年女御入内御屛風、鷹狩
けふくれぬあすもかりこむかたの原枯野の下に雉子なくなり　後京極攝政

○冬御歌中
萬代にへまつる豐のあかりになる程は御狩の鷹のやすむ日もなし　三位のみこ輔仁

○久壽二年大嘗會悠紀方御屛風、近江國
あられふる玉のの原にみ狩して天の日つぎのにへたてまつる　前參議俊憲卿

○堀河院御時百首
日影さす豐のあかりの御狩すとかたののみのにけふも暮しつ　俊頼朝臣

○同
吹き渡すひらの吹雪は寒くとも日つぎのみ狩りせでやまめやは　中納言國信卿

○同
とや歸るたなれの鷹を手にすゑて雉子鳴くなる片野べぞゆく　權僧正永縁

○同
はし鷹のしるしのすゞの近づけば隠れかねてや雉子鳴くらむ　前齋宮河内

○家集、鷹狩
御狩野にけふはし鷹の空にしてとふさのすゞもとかで歸りぬ　源仲正

○常磐井百首、鷹狩
はし鷹のあすの心やかはりなむけふ空とりのあはれかひ（くいイ）して　同

○屛風に鷹狩したる所を
おぼつかな今としなればおほあらきの森の下草人もかりけり　貫之

○三百六十首中
藪がくれ雉子のありか窺ふとあやなく冬の野にやたはれむ　好忠

○御集、鷹狩を
箸鷹のみよりのさかはかきくもり霰ふる野にみ狩すらしも　法性寺入道關白

○久安百首
御狩野のとだちも見えず雪ふれば草とる鷹はたどらざりけり　待賢門院堀川

○御集、冬歌中
みかり野のとだちの雪をうち拂ひ草とるたかの跡ぞみだるゝ　後九條内大臣

○正治二年百首
雉子すむ枯野がくれのかひもなく草とるたかの音きこゆなり　源師光

○六帖題、おほたかがり
新六二
みかりのに草とるい（新六ふ）ぬの立ちかへりたつる（同か）雉子の羽音悲しも　光俊朝臣

○正治二年百首
暮れぬとも初とやたしの箸鷹を人よりいかゞあはせざるべき　小侍從

○祇園社百首
雪もちれあられもかゝれみ狩人かた野の原はよそにきくべし　皇太后宮大夫俊成卿

○最勝四天王院名所御障子
狩りくらし今はとだちも片野なるふみならしばの雪の下をれ　參議雅經卿

○影供歌に、鷹狩
雉子たつかたのの冬のみ鷹がひけふもいくよりあはせ暮しつ　從二位家隆卿

○百首歌、鷹狩
あけはきてなほかりゆかむをしほ山こまつが原の雪の夕暮　同

○久安元年七社百首
たつ鳥の人をひきこすおち草にいぬよびかはしあさる狩人　民部卿爲家

○貞應三年百首
朝な／＼とだちのましは道をなみいぬよびこしてあさる狩人　同

○旋頭歌
萬七　六四
垣ごしに犬よびこして狩する君青山のはしき山べに馬休め君　人丸

六四　萬七
春日野に犬よびこして狩する君青山のはしき山邊に馬休め君　讀人しらず

○建長八年百首歌合
はし鷹のうは毛吹きたて吹く風にかりぢの原は霰ふるなり　衣笠内大臣

○洞院攝政家百首、雪
立つ鳥のたつみはこすげねがくれぬ雪はあさはの野べのみ狩は　前大納言經通卿

○題不レ知
萬代
みちのくの忍ぶの鷹を手にすゑてあだちの原をゆくはたが子ぞ　能因法師

○文治六年女御入内御屏風、鷹狩
けふも又みしまの原にかりくれぬしらふの鷹の見えず見えずみ　後徳大寺左大臣

○同
急ぎたつ日なみのみかり雪深しかたののをののの冬の曙　前中納言定家卿

○同
けふ幾日日なみの御狩かり暮し交野のをのを行き歸るらむ　隆信朝臣

○家集、鷹狩を
ふる雪に友むれ鳥しるべしてをけとも見えずましらふの鷹　顯仲朝臣

○家集
箸鷹のいづれかこゐの枝ならむ歸るばかりによびみてしがな　基俊

○同
もろ歸り空とる鷹をひきすゑて粟津の原をかるや（はイ）たが子ぞ　前中納言匡房卿

○文應元年七社百首
あはづ野のとだちの薄ふみしだき朝霜わけていづる狩人　民部卿爲家

○文治三年百首
降る雪にさてしとまらぬみかり野を花の衣のまづかへるらむ　前中納言定家卿

○永萬二年重家卿歌合、戀
我が戀はうけおふ鷹にあらねどもあふことぬるき歎きをぞする　藤原懐綱

○永保三年十月媞（禔イ）子内親王家歌合
鷹狩
人しれぬ心ならねどみ狩野のたかもこゝろにはかゝりこそすれ　源頼綱朝臣

○元永元年十月内大臣家歌合、たか狩
御狩する野中の清水そこすみてとりかふ鷹の影ぞうつろふ　源兼昌

○同
かりわたるつかれの鳥にあはむとやこゐする鷹の空にまつらむ　藤原顯仲朝臣

○同
雉子なくとぶひの野邊をかりにきて空とる鷹にまかせつるかな　藤原宗國

○永久三年十月内大臣家歌合
をさめたるこゐのふしぎのしるければ草とる鷹に任せてぞみる　藤原忠隆

○仲實朝臣家にて鷹狩をよめる
夕まぐれはねもつかれに立つ鳥を草とる鷹にまかせてぞみる　俊頼朝臣

○家集、鷹狩歌中

日をへつゝ狩り暮しても歸るかなはとにかはりし人もある世に　同

○正治二年百首

哀れなるかりはのをののとだちかな思へば是れやつみの通ひ路　慈鎭和尚

○同

ふゞきする交野の原をかり行けばくろふの鷹ぞ雪にまがはぬ　前大納言隆房卿

○同

あはせつるま白の鷹をさしとりてとだちかくすは頼もしきかな　正三位經家卿

○百首歌、鷹狩

ひきすゑよいらごのたかの山がへりまだ日は高し心そらなり　從二位家隆卿

○家集、鷹狩を

あはせつるこゝろの箸鷹をきとらしいぬかひ人のこゑしきるなり　西行上人

○元永元年内大臣家歌合

み（えイ）ゝかたきしらふのたかの山がへり心ゆるさずかり渡るかな　藤原通經

○嘉元四年十月當座百首

はし鷹のならしの岡の夕風にとだちのま柴うちさわぐなり　從三位爲實卿

○文永二年白川殿七百首、岡邊鷹狩

かり人のならしのをかのなら柴におなじとだちの音聞ゆなり　民部卿爲家

○家集、狩場雪

せり河の昔のかりばあとふりて名のみこのれる野べの白雪　參議爲相卿

○千五百番歌合、冬御歌

かり人もあはれしれかし嶺の鹿野邊の雉子のおのがこゑ〴〵　後京極攝政

○同

駒なべて入野のすゑに霰ふりまだかりゆかぬ雉子たつなり　家長朝臣

○文治六年五社百首

御狩する山路にすゞのこゑはしてしらふの鷹は雪にまがひぬ　皇太后宮大夫俊成卿

はかなしや交野の原に立つ雉子絶えぬかりばと且はみるらむ　同

○寛喜元年女御入内御屏風

いはせ山鳥ふみたてて箸鷹のこすゞもゆらに雪はふりつゝ　前中納言定家卿

○伊呂波四十七首歌

雉子なくかりばの雪にかりねせむうたのふし柴しばし宿かせ　同

〇弘安三年新熊野宮百首
衣手もさぞ寒からしはしたかの雪うちはらふうたの狩人　安嘉門院四條

〇弘安百首
かり暮すうたのかりばのかへるさに雪よりいづる山のはの月　權中納言公雄卿

〇家集、大鷹狩
おしかはのあしほのくちを引きすゑて鳥野の御狩始めとぞきく　權僧正公朝

〇西園寺入道太政大臣家三十首
はし鷹の遠山をちのかたかへりかへるさあかぬ雪のみかりば　從二位家隆卿

〇建保三年名所百首
御狩するかたののくれは鈴蟲のかれにし聲もなほぞ聞ゆる　兵衛内侍

〇鷹狩な
霜がれのあさ野の雉子ふみたててたきのうへ行く狩人はたれ　洞院攝政

〇思放逸鷹夢見感悦作歌
萬十七やかたをの鷹を手にすゑ三島野にからぬ日もなく月ぞへにける　中納言家持卿

〇千首歌
新拾冬みしま野やくるれば結ぶやかたをの鷹もま白に雪は降りつゝ　民部卿爲家

〇三島社にたてまつりける歌
みしま野に神の御鷹を引きすゑてからぬ日もなし大年のにへ　權僧正公朝

〇建長七年顯朝卿家、鷹がり
はなと見しくるすのをのの小萩原雪ふみちらしかる人やたれ　同

今はさはあすきてからむたつ鳥のいり草みえす日はくれにけり　從二位行家卿

〇六帖題
新六二よそにはや日つぎのかりば立つ雉の暫しの程をありと頼まむ　民部卿爲家

〇同
同つかれやる聲をしばまにさきだてゝかるや交野の道慕ふなり　信實朝臣

豊明節會

〇豊明節會
さしぐしのかざしの日影さやかなるとよのあかりぞ昔戀しき　民部卿爲家

○六帖題
新六一　新拾遺冬
よさむなるとよのあかりの霜の上に月さえわたる雲のかけ橋　同

○寶治二年百首、豐明節會
風さゆるみかきのたけの笛の音にをとめたちゐる雲の通ひ路　後九條内大臣

○同
雲の上にあまる日影のさしながら處女さびすも年のへにける　正三位知家卿

○同
雲の上やとよのあかりの月の色に日影をぞふるをみの處女子　辨内侍

○同
雲の上豐のあかりにたちいでてみはしのめしに月をみしかな　少將内侍

○同
くもりなきとよのあかりのをみ衣日影にみがく雲の上人　後成卿女

○同
をみ衣けふきてかすは日影草とよのあかりの名こそしるけれ　民部卿爲家

○同
新拾遺冬
みの山の白玉つばきいつよりか豐のあかりにあひはじめけむ　從三位行家卿

○同
諸人のむれても庭にたつの日は豐のあかりぞいやめづらなる　信實朝臣

○家集、辰日節會を
けふやさは禊のはててをとめごがひれふる豐のあかりなるらむ　前參議親隆卿

○同
萬代
たま柏あひみそめにしみの山の豐のあかりぞけさは戀しき　小辨

このうたはりんじのまつりのかへるさにこせわたりとて大殿にむまわたるといへるかへり事と云々

○文治六年女御入内御屏風、五節參入
處女子が雲のかけはしのぼるなり豐のあかりの御火白くたけ　後德大寺左大臣

○同
雲の上にたまものこしを引きつれてのぼりぞやらぬ天つ處女子　三條入道左大臣

○同
今宵こそ雲居はるかにのぼるなれ雪をめぐらす天つをとめご　正三位季經卿

○同
白妙のあまの羽衣つらぬきてをとめまちとる雲の通ひぢ　前中納言定家卿

○同
さよふけて豐のあかりのもろ人のをとめむかふる雲の通ひぢ　後京極攝政

○文應二年毎日一首中、五節
ひれふりしあまつをとめのなごりとて雪をめぐらす雲の上人　民部卿爲家

○色葉四十七首歌
さしイ
えるくしのさしてもなれぬ名殘ゆゑ豐のあかりの影ぞ戀しき　前中納言定家卿

○弘長三年内裏百首、豐明節會冬十月
處女らは今宵やとよのあかりとて山した日影かづらしつらむ　從二位行家卿

○十題百首
さやかなる雲居にかざす日かげ草豐のあかりの光ませとや　前中納言定家卿

○永久四年百首、五節
日影さすをみの赤紐うちとけてたちまふ人をもて囃すなり　後賴朝臣

○同
をとめごが袖ふりそめしをみ衣豐のあかりにたえせざりけり　仲實朝臣

○同
もろ人の遊ぶなるかなをとめごが汗衫のすその永き夜すがら　源兼昌

○同
くもりなきとよのあかりに見つるかな天つをと姫まひの姿を　六條院大進

○家集
しばしまて豐のあかりの月もみよ日影のいとはさこそくるとも　前中納言匡房卿

此の歌は五節にある所のわらはせちゑのまひ姫の上るまゝにまひいでにければつかはしけるとぞ

賀茂臨時祭

○文治六年十一月女御入内御屏風賀茂臨時祭
みたらしや汀によするさゞ波ををらでもかへすをみの袖かな　後法性寺入道關白

○同
をみ衣みたらし河に影みえてたちまふほどにあけぬこのよは　後徳大寺左大臣

○同
神やまのみたらし河にかげみえて大宮人のかざすふぢなみ　正三位季經卿

○同
あをずりの袖をつらぬるみたらしに影も心もとまるけふかな　隆信朝臣

○同
ふる袖はみたらし河にかげみえて空にぞすめるうとはまの聲　前中納言定家卿

○承久二年四季百首、冬臨時祭
かざしこし櫻も藤も昔にてみたらし河を思ひこそやれ　同

神樂

○堀川院御時百首、神樂
あまくだる神の心をとるけふや庭火のけぶり雲とみゆらむ　權大納言公實卿

○同
曉のほしさへ見えぬ榊葉のしもうちはらふ袖のかさぶり　前中納言匡房卿

○同
白にぎてたくさの枝に取りかざしうたへばあくる天の岩かど　顯仲朝臣

○同
夜を寒みとる榊葉におく霜をしらゆふ花と人やみるらむ　基俊

○同
ひろまへの庭火の光あきらけくかなづる袖をみるぞ嬉しき　隆源法師

○同
からかみに袖ふる程はとのもりのとものみや人御火白くたけ　俊頼朝臣

○家集、古來歌合
新拾遺神祇
ふきたつる庭火のまへの笛の音を心すみてや神もきくらむ　小辨

○文治六年五社百首、神樂
ふきたつる庭火の前の笛の音はあまの岩戸もさこそあけけめ　皇太后宮大夫俊成卿

かこ山やさか木の枝ににぎかけてその神あそび思ひこそやれ　同

あなさやけあなおもしろとみゆるかなとる榊ばに霜のおく程　同

松風にやまと琴のねひゞきあひて庭火の笛も空にすむなり　同

○述懷百首

執々とねざめてきけば里神樂かごとがましき夜にこそありけれ　同

○石淸水三首歌合、社頭松

さか木とる庭火のかげにひく琴のしらべに通ふ峯の松風　小侍従

○弘安二年若宮百首

やはた山には火ほのめく松風にあづまのしらべこゑ通ふらし　安嘉門院四條

○嘉元元年三十首

たちかへる雲居の庭の神あそびいとたけのねも月にすみけり　前中納言爲兼卿

○文應元年七社百首、神樂

神代より今にかはらぬすががきもきくは一つのやまと琴のね　民部卿爲家

春日山そのうぢ人のまどゐしてうたふ榊はさぞさかゆらむ　同

我が神は千とせよろづ世もとするゑもしもの月夜にうたふ宮人　同

本末の賢木みてぐらとり〴〵にこれも一つになるとこそきけ　同

○文永二年毎日一首中、神樂

神まつるけふのためとや霜がれの枝に殘れるならのはがしは　同

○同十三年毎日一首中、神樂

枯れ殘る楢の葉柏とりいでて今日やひら手に神祀るらし　民部卿爲家

○家にて六十首の歌よみけるに、神樂

をとこ山曉めぐる神がきにかつらをうたふ聲のさやけさ　參議爲相卿

○天仁二年十一月顯季卿家歌合、神樂

天の戸を細目にあけてみそなはす庭火の影のおもしろきかな　藤原保俊朝臣

○同

夕てぐら手に取り飾るからかみの三わを横手にすゝめつるかな　隆源法師

○正治二年百首

御火白きかげに立ちまひ祈るかな君が千代ふるからかみの袖　民部卿光範

○天慶五年内侍のかみの屏風

こゑたかくあそぶなるかな足曳の山人今ぞかへるべらなる　貫之

○永觀元年右大臣家賀屏風十月神樂したる所庭火たける

庭火たくほかげにきゆる榊葉の霜は幾よかおかむとすらむ　元輔

○文治六年女御入内御屏風

ます鏡ひかりをぞふる雲の上に星さへわたる聲きこゆなり　隆信朝臣

○同

こゑさゆる星に光やまざるらむもゝしきてらすやたの鏡は　正三位季經卿

○六帖題

新六一
おく霜もさえわたる夜のあさくらに返す〳〵も神やなびかむ　衣笠内大臣

○千五百番歌合

そのかみの岩ともかくやあかぼしの明けゆく空に星うたふ聲　正三位季能卿

○四季百首、冬祝

あきらけき御代の千とせをいのるとて雲の上人星うたふなり　前中納言定家卿

○禁中神樂

さよふかき大内山に風さえて雲居をわたる朝倉のこゑ　寂蓮法師

○百首御歌

神垣やしでふく風にさそはれて雲居になびくあさくらの聲　慈鎭和尚

○同

さよ更けてかへすしらべの琴のねも身にしみまさる朝倉の聲　待賢門院堀川

○貞應三年百首

もろ人のうたふ玉ざゝさゆるよに袖までみがく冬の月影　民部卿爲家

○仙洞三十首御歌、神樂

神風やみもすそ河のさゞなみにこゑをあはするよるの絲竹　入道前太政大臣

○神樂を

玉葉冬
山もとやいづくとしらぬ里かぐらこゑする森は宮居なるべし　同

○天仁二年十一月家のうた合、神樂

面白くなりぞゆくなるひさごもて神の心をくみてけるかな　修理大夫顯季卿

○同

石淸水みかの豐御酒つきもせずほしをりあげて遊ぶなるかな　琳賢法師

○同

宮人は神のいさむるうれたさにおほよそ衣ぬぎぞみだるゝ　藤原盛仲

○久安百首、神樂
闇のうちににぎてをかけし神遊びあか星よりや明け始めけむ　崇德院御製

○同
をみ衣袖ふるよはのその駒にあさくらおきてあかしつるかな　郁芳門院安藝

○同
をとめ子が袖ふり返すそのこまはとよのにはとも面白きかな　花園左大臣小大進

○家集、神樂を
夜を寒みせかゐの水はこほる(れ歟)ともには火は春の心地こそすれ　前中納言匡房卿

○家集
神人の庭火すゝむる御影にはまさ木のかづらくりかへせとや　西行上人

○住吉社百首御歌
住よしの庭火の煙のぼれどもくもることなきあかつきの星　慈鎭和尚

○百首御歌
神がきや御まへのはまの松風に浪もうちそふ里かぐらかな　後京極攝政

○同
天つちの神代の秋のしわざよりとるやさかきの色もかはらず　土御門院御製

○同
とりかざす日影のかづらくり返しちよとぞうたふ神の御前に　順德院御製

○文治六年五社百首
ちはやふるかもの社の神あそびさか木の風もことにかぐはし　皇太后宮大夫俊成卿

○百首、神樂
風さえて空にすみ行く賢木葉のこゑさへ匂ふ雲のうへ人　從二位家隆卿

○千五百番歌合
天の戸のあけやしぬらむうま玉のふけてゆく空にあか星の聲　醍醐入道前太政大臣

○同
賢木とるとよ宮人の神遊びたちまふ袖の香さへかうばし　嘉陽門院越前

山あゐにすれる衣やまがふらむはだれ霜ふる庭のさかき葉　法橋顯昭

○文治五年百首
かをとめし榊の聲にさよふけて身にしみはつるあか星の空　前中納言定家卿

○永承四年十一月庚申夜禖子内親王家歌合、神樂
年ふればしげる榊のもと末にむれゐて遊ぶしめのうち人　讃岐

○家集、神樂の心を
○天仁二年十一月題季卿家歌合、神樂
○永承五年十一月俊綱家歌合、神樂
○題季(朝カ)卿歌合、神樂
○題隹卿家歌合、神樂
○六帖題、神樂
○同
○同
○建長七年顯朝卿家十首歌合、神樂
○三島社にたてまつりける神樂を知らで云ふ歌、庭燎
○宮人

さ夜ふかく霜はおくとも山人のをれるさか木は色もかはらじ　中務

庭火たきかなでとりもつ榊葉ははやその駒のふちにぞありける　讀人しらず

葛城の神もあらはにみゆるまで神樂の庭火あかくもあるかな　源仲頼

君が代の祈るいのりの宮人はゆふかけてこそ庭火たきけれ　讀人しらず

かへりたつ雲居の庭火ふかき夜にしもさえまさる山ゐの袖　民部卿爲家

新六二 庭火たく煙もともにたちぞまふかなづるきねが袖のは風に　正三位知家

同 月さゆる夜ぞふけぬらし松の尾の神遊びする聲きこゆなり　光俊朝臣

同 人の長の神のをしへにしたがひてこゑ〴〵すめる九重の庭　信實朝臣

さゆる夜の庭火の影に今みればうたふもろ人山かづらせり　源仲業

庭火たき常世にありしながなきの鳥のねきけば明けぬこのよは　權僧正公朝

庭火たくとよのあかりのから玉をこきちらしてもふる霰かな　同

庭火たきちまきの矛をとりもちて岩との前にひれふるやたれ　同

おぼめくか庭火の影にあさぢ原やほよろづ(八十イ)よの神遊びまで　同

霜のうへに雪をかさねて宮人のおほよそ衣さえあかしつゝ　同

冬梅

○百首御歌
さとわかぬ春のとなりとなりにけり雪まの梅のはなの夕風　順徳院御製

○六帖題
新六一
かぎりある三冬しそへば年の内にほづえはさきぬ軒の梅がえ　衣笠内大臣

同六
日かずまつ春をおそしと白雪の下よりにほふ梅のはつ花　同

○喜多院入道二品親王家五十首
冬深きかきねの梅ぞ匂ふなるきくよりおくの花にやあるらむ　従二位家隆卿

○家集、冬歌中
春近きかきねの梅はにほへどもかすみへだてぬ冬のよの月　同

○正治二年百首、山家
山里はかきねの梅の匂ひきてやがて春なるうづみ火のもと　同

○寳治二年百首、冬歌
香をとめて春やしるしとたづぬらむ雪のそこなる梅の初花　民部卿爲家

○題不レ知
萬五
むつきたち春のきたらばかくしこそ梅を折りつゝ樂しきをへめ　讀人しらず

炭竈

○堀川院御時百首、炭竈
年をへて爪木とりくべ（こりつむイ）炭がまにけぶりをたたぬ大原の里　權大納言公實卿

○同
大原や小野の炭がま雪ふりて心ぼそげにたつ煙かな　大納言師頼卿

○同
すまの浦の鹽やくあまの煙かとみぞまがへぬるをのの炭がま　前齋宮河内

○同
すみがまのくちやあくらむをの山に煙の高く立ちのぼるかな　隆源法師

○三百六十首中
冬山のすみやき衣なれぬとて人をば人のたのむものかは　好忠

くゆりつゝ世に炭がまのけぶたきを吹きつゝもやせ冬の山風　同

○建長八年百首歌合
今ははやをのの山なる炭がまの煙けぶたき衣きにけり　典侍親王

○炭竈
六二 兼盛集
谷ふかくやく炭がまのけぶりだに峯の雲とはならぬものかは　讀人しらず

○嘉保三年三月花山院左大臣家歌合、雪
をしほ山雪ふりつみて炭がまの煙ばかりぞしるく見えける　同

○治暦元年十二月皇太后宮歌合、山雪
雪ふかみ人もかよはぬをしほ山まきのすみがま煙たゆらむ　同

○百首歌、古來歌に
ながらへて世にすみがまと思へどもはては煙となるぞ悲しき　僧都源信

○文治六年五社百首、炭がま
炭がまの山のおくまでみゆるかな民のつとめの限りなければ　皇太后宮大夫俊成

をち方や都のたつみたれすみてま木のすみがま煙立つらむ　同

炭がまもひむろも近きをの山は火と水とこそへだてなりけれ　同

冬くればをのの炭やき木をおひて時にあへりと思ひがほなる　同

○百首歌、遠近炭竈
立のぼる煙ぞみゆる炭がまの尾の上の外にとなりありとは　寂蓮法師

○寛喜元年女御入內御屛風
くにとめる民の煙のほどみえて雲間の山にかすむ炭がま　前中納言定家卿

○御集中
うかりける世にすみがまのうす煙たえみたえずみ物思ふころ　後鳥羽院御製

○百首御歌
新續名冬
よそにても寂しとはしれ大原や煙をたつる炭がまの里　土御門院御製

○冬歌中
つくばねの松の炭がまおしなべてときはにしげくたつ煙かな　土御門院小宰相

○冬歌中に
雪ふりてけふともしらぬ奥山に炭やくおきなあはれはかなみ　鎌倉右大臣

○貞應三年百首、遠近炭竈
炭がまのおなじ煙のするゑだにもとほきはかすむ大原の里　民部卿爲家

○寛喜元年女御入内御屏風、遠近炭竈
見わたせばいく山のはのあなたなる煙にしるきをのの炭がま　西園寺入道太政大臣

○同
すみがまの遠山煙たえずたつ民のゆききもしるき御代かな　従二位家隆卿

○建長八年百首歌合
たえずたつ煙のほどはをの人の炭やき衣のすゝけにぞしる　従二位行家卿

○六帖題
新六二
冬のきて遠山あらしさえゆけばやく炭がまの煙たつみゆ　衣笠内大臣

○同
新六二
とにかくに大原山の荷をおもみ冬はすみ木をこりやそふらむ　信實朝臣

○大納言家忠卿家歌合
なしほ山雪ふりつみて炭がまの煙ばかりぞしるく見えける　國輔

佛名

○家集、佛名を
三世の師の御名となへつる驗にはつみもや今宵殘らざるらむ　俊頼朝臣

○六百番歌合、佛名
ひととせのはかなき夢はさめぬらむ三世の佛の鐘のひゞきに　後京極攝政

○同
唱へつる佛の御名はあさ日にてやがてきえ行くひととせの露　慈鎮和尚

○同
河竹のなびくは風も年暮れて三世のほとけの御名をきくかな　前中納言定家卿

此の歌判云かはたけ禁庭のよし聞ゆるにや勝と申すべくやと云々

○同
となへつる三世の佛もきくやとて大宮人のなのるなりけり　中宮權大夫家房卿

○同
唱へつる三世の佛の中のよになぞかへる師をすゝめおきけむ　法橋顯昭

○同
あまた度竹のともし火かゝげてぞ三世の佛の名をばとなふる　正三位季經卿

○同
これやこの三世の佛ももろ人の名をあらはしてあくる東雲　前中納言兼宗卿

○同
冬深きありあけの月のあけがたになのりていづる雲のうへ人　隆信朝臣

此の歌左云名謁不レ限二佛名一陳云十二月二十日比の名謁は佛名なり判云右ありあけの月のあけがたの雲のうへ人なのりていでむ佛名なるらむと云々

○六帖題、佛名
六一　となへつる佛の光てらさずばきえずや霜の身につもらまし　正三位知家卿

同　浅ましや佛の御名をききさしてなどかへなしの程に立ちけむ　衣笠内大臣

同　諸人の君をすゝむるかへなしのよそひのほどによぞ更けにける　信実朝臣

同　霜結ぶよひののぶしのかつけわた今ぞ寒さも忘れはつらむ　光俊朝臣

○永久四年百首、佛名
かづけつる綿引きかけよさよ過ぎてむろへ歸らむせなか隠れに　俊頼朝臣

○建長七年顕朝卿家千首歌、佛名
はるかなるひえの峯より都まできこえしのりを今も唱ふる　権少僧都支光

○百首御歌
三世までも佛になのるのぶしたち春のおまへにまゐる人かな　慈鎮和尚

爐火

○建保百首、埋火
山賤の榾さしあはせ埋む火のあるともなくてよにもふるかな　好忠

○文治六年五社百首
うづみ火にすこし春ある心ちしてよ深き冬をなぐさむるかな　同

○千五百番歌合
うづみ火のあたりに近きうたゝねに春の花こそ夢に見えけれ　同

○建久元年百首歌
うち匂ふふせごの下のうづみ火に春の心やまづ通ふらむ　前中納言定家卿

○嘉祿二年百首、埋火
いかにせむ下にかくるゝ埋み火の思ひしらさむ煙だになし　民部卿爲家

○百首歌、埋火忘レ冬
三日月もおくらぬ宿にいかにして春をむかふるよはの埋み火　寂蓮法師

○御集、埋火を
うば玉の夢もさむけき曉はのころともなき埋み火のかげ　土御門院御製

○正治二年百首
埋み火のあたりのまどゐさよ更けて細かになりぬ灰のてすさび　式子内親王

手すさびにとふはひうらのあたりまで埋め時えぬ思ひなりけり　小侍従

歳暮

○三百六十首中、歳暮
暇(いとま)なみかひなき身さへ歎くかなみたまの冬と宜もいひけり　好忠

○家集、しはすのつごもりに
續後拾遺
なき人のくるよときけど君もなしわがすむ宿やたまなきの里(レイ)　和泉式部

○年の終りに暦のぢくのもとまで巻きよせたる人々よむに
まきよする暦の心はづかしく殘りのひらにおい見えにけり　惠慶法師

○六帖題
新六一
一年のこよみをおくにまきよせて殘る日數のほどぞすくなき　正三位知家卿

○家集、歳暮
行く年を暦のぢくにまきよせておいはてにける身を歎くかな　源仲正

○堀御院御時百首
家
ことだまのおぼつかなさにおがみすと梢ながらも年をこすかな　俊頼朝臣

○歳暮神祇を
明玉
月なみのよるのまつりの霜の上に曉をまつうらばみの人　卜部兼直

○としごもりの夜
舊年は今宵許りになりにけり我がみの果てもいつとしらばや　六條院宣旨

○久安百首、歳暮心を
舊年は今宵ばかりになりにけりあけば祝ひのことのはもがな　大炊御門右大臣

○同
まきもくのあなしの山の鶯は今いくかとか春をまつらむ　藤原季通朝臣

○同
山賤のそともの松もたててけり千とせといはふ春のむかへに　待賢門院堀川

○同
今宵ねて送るあしたや我がせこがふたなゝ枝の松もをるべき　前大納言隆季卿

九重の雲の上よりやらふなのほどにともなふふりつゞみかな　同

○六帖題
新六一 もゝしきの大宮人もききつきて鬼おふほどに夜はふけにけり　衣笠内大臣

○親子内親王家歌合、歳暮
ふる年といふ名をやらふ音たかみ春をいとふと人やきくらむ　宣旨

○報恩會次、歳暮述懷
思ひやれまくらにつもる霜雪のむそぢに近き春のとなりは　前中納言定家卿

○喜多院入道二品親王家五十首
一とせを花よ月よとすごしきて身に雪つもるはてぞ悲しき　大藏卿有家

○百首
數ふれば年の暮とはしらるれど雪かくほどのいとなみはなし　後鳥羽院御製

○千五百番歌合
とし暮れて送りむかふる人毎にいづれを急ぐいそぎなるらむ　嘉陽門院越前

○同
あすをまつ賤が門松さきだててけふより春の色をみるかな　從三位保季卿

○建長八年百首歌合
老らくにかくれむと思ふしめの門の年籠りをば哀れともみよ　信實朝臣

○六帖題
新六六 これぞこの春を迎ふるしるしとてゆづる葉かざしかへる山人　正三位知家卿

○百首歌
しるしらず道行く人のしげきにもあはれは深き年の暮かな　寂蓮法師

○家集に、たきぎになひたる者どもあまた山をこゆ
常よりも足のいとなみ山人は春のむかへに行くにやあるらむ　小　辨

○寛喜元年女御入内御屏風、歳暮山邊民家
年暮れて都へいづるたみのとはあけむちとせの春やまつらむ　従二位家隆卿

○文治六年女御入内御屏風、歳暮
賤のをは雪を小まつにひきそへて春いとなみにみ山いづなり　後法性寺入道關白

○同
千代ふべき松さへ山をいでにけり春をいとなむ賤にひかれて　後京極攝政

○同
とし暮れて今ぞみ山をいだすなるかねていはひの賤の門松　後徳大寺左大臣

○同
賤のをが松もておるゝ山ぢをやつゞきて春のこえむとすらむ　三條入道左大臣

○同
山人のかへる家ぢに年くれて松こそけふのかざしなりけれ　隆信朝臣

○同
ひきつれて山路に松のみゆるかな春の迎へをいはふなりけり　皇太后宮大夫俊成

○堀川院御時百首
門松をいとなみたつとするほどに春明方によやなりぬらむ　修理大夫顯季卿

○家集、としのくれの心を
さゝるする室の八島のことこひに身のなりはてむ事をしるかな　俊頼朝臣

○閏月
六一　後撰冬　この月の冬のあまりにあらざらば鶯ははや鳴きもしなまし　讀人しらず

○六帖題しらず
新六一　かぞふるも三冬の後の冬なればいとゞ寒さのきはめゆくかな　信實朝臣

○千五百番歌合
行く年もこえける春もあふさかの關路にとりの音やまつらむ　野宮左大臣

○同
宿毎に春のかすみをまつとてやとしをこめては急ぎ立つらむ　前中納言定家卿

○百首歌
年くれば松きる賤の身の上におひてぞかへる峯のあらしを　同

○同
あはれにもをのの音まで急ぐなり松きる山の年のくれがた　参議雅經卿

○家集、歳暮鳥
とぶ鳥のあすかの里も年暮れぬあけば宿とへ谷のうぐひす　従二位家隆卿

○御集、冬述懐
世にすめばはやくも年のくるゝかな心の水はかつこほれども　後京極攝政

○百首御歌
いつしかと涙のこほりうちとけて年のうちにぞ春はたつべき　慈鎮和尚

○建久元年六月一字百首
殘りなく暮れぬる年のいろがほにひとは曇らぬ冬の山かな　前中納言定家卿

○家集歌中に
かぎりなく行きかふ年の通ひぢや霜にくちせぬかさゝぎの橋　従二位家隆卿

○寶治二年百首、歳暮
かつこえてわかるゝ冬の山影に人だのめなる春のうぐひす　後九條内大臣

○歳暮
白雪のふるの山べの杉むらのすぐるほどなき年の暮かな　鎌倉右大臣

○千五百番歌合
年のあけて影いかならむます鏡こよひ一夜におもがはりして　慈鎮和尚

○百首御歌
暮れかゝる年の光のかゞみ山むかへるおいのさこそ苦しき　後九條内大臣

○建長八年百首歌合
人毎の老をむかふるいとなみもやすくはみえぬ年の暮かな　土御門院小宰相

○文治六年五社百首
月日のみ流るゝ水とはやければ老のそこよりとしはかへらず　皇太后宮大夫俊成

○百首御歌
はかなさはうつゝともなき心ちして夢の底より年ぞくれぬる　喜多院入道二品のみこ

○西洞院十百首
窓のうちに曉ふかきともし火のことしの影に殘るともなし　後京極攝政

○南北百番歌合
かぎりありて春明がたになる年を宮もわらやも急ぎくらしつ　同

○御集
あけぬより春のかすみもたちやせむこよひはさすな白河の關　同

○家集、つごもりの夜
ふる雪にかすみあひてやいたるらむ年ゆきちがふよはの大空　惠慶法師

○弘長元年百首、歳暮　後九條内大臣
高しまのそま山川のいかだしは急ぐとし木をつみやそふらむ

○正治二年百首　皇太后宮大夫俊成卿
舟路よりゆくともしらば年のくれまつらの山に袖もふらまし

○治承二年百首　同
ひきとめむ方こそなけれ行く年のきの關もりが弓ならなくに

暮れはつる年はわが身に積るなり冬のゆくらむ方ぞしられぬ　同

○歳暮雪といふことを　同
暮れはててこしぢにかへるあらたまの年ふりこめよ雪の白山

夫木和歌抄卷第十八　終

夫木和歌抄 巻第十九

雑部一

題
天　日　星　風　雷　雲
雨　渧　虹　火　煙　塵
暁　朝　昼　夕　夜　東
西　南　北　巽　乾　坤
艮　彼岸

天象

〇千五百番歌合
常磐なるみどりの色にあらはれて君がちとせは空にしるしも　後久我太政大臣

〇同
久方のうらの限りもなき世かな三つの光のあらむかぎりは　後京極摂政

〇老若百首歌合
世の中に任せて身をも捨つるかなこたへぬ空をうち眺めつゝ　同

〇同
あふげどもこたへぬ空の青みどり空しくはてぬ行末もがな　定家卿

〇同
久かたの天の岩戸をあけそめてひかりは君が心なりけり　寂蓮法師

○六帖題御歌

久方のあまつみ空は高けれどせをくゞめてぞわれは世にすむ　中務卿御子

げには又空しき空の綠こそありてなきよのためしなりけれ　同

新六五 たれか又かはらぬ色を久方の空のみどりにそめはじめけむ　正三位知家

新六二星 いつもみる空の綠はときはにて星のはやしの影ぞかはらぬ　同

新六二 天の原ながむる空をためしにてつくる世もなき身の思ひかな　衣笠内大臣

新六二 天の原空にあふきのうれふとも身のうきことを答へやはせむ　爲家卿

新六二 あまの原岩戶の關のあはれなどすぎゆく年をとゞめざるらむ　知家卿

新六二 みのうれへ天津そらにはみちぬれどおよぶ所のなきぞ悲しき　信實朝臣

新六二 天の原空に心をつくしてぞむなしき世には思ひしりぬる　光俊朝臣

○久安二年顯輔卿家歌合、夏月

雲はれて月すみわたる夏の夜はにごらざりけり水いろの空　花園太政大臣家大進小イ

○題不レ知

六二萬十 打ちはへてふらぬ雨ゆゑこちたくも天のみ空は曇りあひつゝ　讀人しらず

日

○建保三年名所百首、日

みちのべの日影のつよくなるまゝにならすしのだの杜の下陰　定家卿

○百首歌

庭のおもは日影ゆるがぬ夏草になびくばかりの風ぞ凉しき　爲家卿

○六帖題

新六二 たのもしなあまねき光世に出でてくもらぬ空にてらす日影は　同

○同
新六一　今もかもまつたか山はてらす日にその色どき（ニイ）のはじめをぞしる　光俊朝臣

○三島社
わだの原いり日のきはの雲のみや霞にもるゝ色にみゆらむ　前參議雅經

○家集、三月賴政許
いかゞみる如何はすべきけふのみと思ふ春日のやゝ曇りゆく　權大納言實家

○家集
夏の日のあしにあたればさしながらはかなくきゆる道芝の露　和泉式部

○最勝四天王院名所障子
みな月のてる日やうすきふじのねに猶きえがたき雪の白雲　俊成卿女

星

○承久二年四季百首、星
冬の木の霜もたまらぬ山風に星の光のまさりがほなる　定家卿

○家集
未來記歌　玉葉雜二　そよくれぬ楢のひろはに風落ちてほしいづる空の薄雲の影　同

○永久四年百首、星
雪とのみ頭はなりていたゞきし星をよそめにみるぞ悲しき　神祇伯顯仲

○同
日くるれば星をいたゞく髮にしも拂ひもあへずおける霜かな　仲實朝臣

○同
我一人かまくら山をこえゆけば星月夜こそうれしかりけれ　二條皇太后宮肥後

○家集、寄星戀
わがこひは七ます星に祈りのみ（みむイ）人の思ひをうらにしるなり　源仲正

○神祇歌中
雲葉　新續古神祇　あひに逢ひて日よしの空ぞ長閑なる七つの星のてらす光に　祝部成仲

○六帖題
新六一　君が代は七つの星をためしにてうつらぬほどを空にしるかな　衣笠内大臣

新六一　木のまこそはや明けぬらめ明星の山のは高くひかりさえけり　光俊朝臣

新六一
くるゝまに出でそふ星の數しらず彌ましにのみなる思ひかな　　爲家卿

○千五百番歌合
くもりなくをさまる御代を人も皆見るとていづる星の影かな　　正三位季能

○住吉社秋歌
いのりこふ星の宿りも雲晴れていく代も契る住吉の里　　家隆

○家集、雜歌、人の門よりかへりて
ありあけの曉よりもうかりけり星のまぎれのよひのわかれは　　定家卿

○返し
舟よする思ひもあらじ宵のまの別れはほしのまぎれなりけり　　讀人しらず

○文永九年毎日一首中
さゆる夜の雲みる星のはやしよりしも吹きおろす木枯の風　　爲家卿

○弘長四年毎日一首中
みゝあらふ河瀨の星ときく程によな〳〵あらぬ影ぞ久しき　　同

○家集
朝夕にあふぎておかむかひありて空なる星もあはれとはみよ　　大納言經家

六二
よひ〳〵にさし出でなむと夕づゝの月なき空に一人かもねむ　　讀人しらず

此のうたは大宮亭女の年いみと云ふことし侍りけるに扇に書き付け侍る歌なり

○家集、戀歌中
六一
日暮るれば山のはいづる夕づゝの程はみゆれど遙けきやなぞ　　忠岑

○題不レ知
萬十　六一
ゆふづゝも通ふ天路をいつまでかあふぎてまたむ月人をとこ　ろ見ゆ萬　　人丸

萬七
空のうみに雲の波たち月の舟星のはやしにこぎかくされぬ　　同

○家隆卿家百首
夏見えし星の光ぞかくれゆく秋たつ夜半の永きはじめに　　家長朝臣

○伊呂波四十七首歌中
星のかげ西にめぐるもをしまれてあけなむとする春のよの空　　定家卿

○仙洞五十首家、羅月
月のすむ空にまれなる星の色をまがきにのこす白菊の花　後京極攝政

○家集、郭公
時鳥なく音は雲にとゞろきて星のはやしやうづもれぬらむ　俊賴朝臣

○家集
末の世と思ふべきかは折ふしにいでていさむる星の光を　爲家卿

はるゝ夜の星のひかりにたぐひきておなじ空よりおける白露　後京極攝政

○長承三年六月常磐井五百首
あまの河まれなる中もあるものを思ひかねたるよはの星かな　寂蓮法師

うらやましたれをみ空のよばひ星くるれば出でて光しるらむ　爲忠朝臣

○家集歌
うき木あれば星にも人はあひにけり戀路に通ふ言の葉もがな　俊成卿

日のひかりふたつになれば紫の星もふたつに今やなるらむ　伊（勢歟）

天の原南にめぐる（すめるイ）ひなつ星なにのくさともとよさと（太子の幼名）にとへ　讀人しらず

此の歌は聖徳太子傳記云敏達天皇九年太子御歳九歳夏六月人有りて奏日はしの連八島と云ふ者有り歌をうたふ事世にすぐれたり而夜な〳〵人有りて來りて相和して爭ひうたふ聲有常の人の音にあらざるが故八島これを怪しみて追ひて尋ぬれば住吉の濱に至り天曉入二海中一物有りて火の如くにしてひかりを放つ太子天王の牀下に侍りて奏曰これは熒惑星なり天王驚きて是れをとふ太子奏曰天に五星有主二五行一象二五色一歳星は色青主レ東木也熒惑は色赤主レ南火也此の星下りて化して人と成

りて童子の中に交りて好みて作二謠歌一未來の事をうたふ蓋し是れ星歟
天皇大に悦び給ひ其御製曰「我が宿のいらかになのろこゑはたそたし
かになのれなにの草とも」とありけり御歌に星の返歌と云々

風

雲葉　新續古今神祇
花もちりもみぢもちらす一枝にふきなす風をいかゞ恨みむ　菅原太政大臣

○志有りける女房ちと云ひ遣りける
萬代　家
立ちよれば袖にそよめく風の音の近くはきけどあひもみぬかな　貫之

○文永五年毎日一首中
巳の年とあくる岩戸の初めよりならひし風はあらずなりにき　爲家卿

○住吉社百首歌
すみはきかじイ
見ずばきかじおふる早苗の初めよりこまかに騷ぐ風の氣色は　慈鎭和尚

○家集、寄二落葉一戀
朝毎にこゑをとがむる風の音はよそへてかへる人の心か　西行上人

此の歌謙德公例ならぬ事有りける後女のもとへ遣はしける御返事
よるべなみ風をまちし舟よりも餘所にこがれし我ぞ悲しき　讀人しらず

○六帖題
新六二
霜さやぐ野中の岡の風おもてたちいづべくもなきわが身かな　光俊朝臣

新六一
いづるより冱えこそまされ木枯のふきこほりたる山のはの月　爲家卿

○千首歌
吹きこほる夜のまの風の名殘とてはつゆき白き庭の冬草　同

○百首御歌
風こほるたま江のあしま猶さえてはるの霞もたつ空ぞなき　中務卿御子

○柿本影供百首

吹きまよふ風の枝なる鳥よりもすみ難きこそねはなかれけれ　光俊朝臣

風の音千代の色ふく暮ごとにこぬ人まつはさぞな寂しき　爲家卿

○題不レ知、六帖、春風

六一　われを君とふやくくと春風の今はあらしとふくぞ悲しき　讀人しらず

○同夏風

七イ

六五　夏風の六一菅萬わがたもとにしつゝまれば戀しき人のつて（とイ）にしてまし　同

○夕歌中、秋風

萬十　秋風のきよき夕べとあまの河舟こぎわたる月人をとこ　人丸

○永仁元年八月十五夜五首、月前秋風

わが國は千五百秋風をさまりて君が光にすめる月かげ　爲家卿

○飛鳥風

萬八　梅の花ちらす冬風音にのみききしわがいもをみらくしよしも　大伴駿河丸

萬一　たをやめの袖ふき返すあすか風都をとほみいたづらに吹け　志貴皇子

○題不レ知、初せ風

萬九　はつせ風かく吹くよはいつまでか衣かたしきわれ一人ねむ　讀人しらず

○同、さほ風

萬六　我がせこが衣かすがのさほ風は痛くなふきそ家にいたるまで　坂上郎女

○千五百番歌合

くれゆけばさほ風寒し旅人に宿かすがのやいづくなるらむ　顯昭

○湖風

萬三　蘆べにはたづがね鳴きて潮風（みなと萬）さむく吹くらむつをのさきはも　若湯座王

○三野國いかほ風

萬十四　いかほ風吹く日ふかぬ日ありといへどあがこひのみし時なかりけり　人丸

○時津風

ときつ風西ふくうみを行く舟のゆたのたゆたに雲ぞわかるゝ　同

○題不レ知、湊風

萬十七　湊風寒く吹くらしなごのえに妻よびかはしたづさわぐなり　中納言家持

○題不レ知、時津風

萬七　時津風吹きまくしらすあこの海の朝氣のしほに玉藻かりてな　讀人しらず

○ひがた吹、正治三年百首
ひがた吹くよさの浦波高からじ汀の千鳥むれてたつなり　源師光

○家風
萬二十 家の風は日に〻吹くとわぎもこが家苞もちてくる人もなし　丸子連大歳

○朝ごち
萬十一 あさごちにゐでこす波の世蝶（たやすくもイ）にもあはぬもの故たきもとゞろに　讀人しらず

○北ごち、雁中雪
北ごちに下居（ひゐ）の林まで通りつるこ雪はみすのふるふなりけり　源仲正

○永久四年百首、落花まごち
まごち吹く花のあたりの風下は時ぞともなき雪ぞつみける　仲實 久永百

○文永五年毎日一首中、こちの山風
くもりなき月日をかくす浮雲をあとなく拂ふこちの山風　爲家卿

○こち風
てりもせずおぼろ月夜のこち風に曇りはてたる春雨ぞふる　同

○永久四年百首、後堀河
谷おろしの風しやまねばよとともに興津がはらにくぬぎ波たつ　神祇伯顯仲

○天王寺百首和歌、島おろし
西へゆくあはぢの島のしまおろしむかへの雲の吹き拂ふなよ　慈鎮和尚

○題不知、あゆの風
萬十七 あゆの風いたく吹くらしなごの海に釣する小舟こぎ歸るみゆ　家持

○堀河院御時百首
越の海あゆの風ふくなごのうみに舟はとゞめよ浪枕せむ　仲實朝臣

○嘉元四年十一月當座百首、北風
北にふき南にかはる追風もひとの思ひは叶ふとぞきく　爲家卿

○住吉社歌合、秋山月西吹風
ときしあれば西ふく風に雲晴れて月をむかふるあはぢ島山　家隆卿

○六帖題、興津鹽風
新六三 おほよどのうらにみるめもよりぬべし沖つ鹽風南吹くなり　衣笠内大臣

○千五百番、南の風
なにとなく心ぼそきは南ふくとさのふなぢの明方の空　顯昭

○四季百首
このごろは南の風にうきみるのよる〳〵涼しあしのやの里　定家卿

○しなどの風

あまつ神つくともつきじうきことは科戸の風ぞふきも拂はむ　和泉式部

此の歌はなき事おひたる時ある人きて我をあまかつにせよと云ひたるによめる

○家集、神祇

八重雲をしなどの風にはらはせて神遊びするくにはやすくも　權僧正公朝

○保延四年定家卿家歌合、月

山のはをしなどの風は吹き拂へかたぶく月やしばしとまると　大江維順朝臣

此の歌判者云右しなどの風吹きはらへと侍れども中臣はらへを聞く樣におぼえ侍る(なイ)と云々

○常磐井百首、谷辻風

ちりぬともほかへはやりそ色々の木のはめぐらす谷の辻風　源仲正

○同不レ知、催馬樂心あひの風

みちのくち武生の國府に我はありとおやに申し給へ心あひの風　讀人しらず

○家集、思不レ言戀

心あひの風ほのめかせ八重すがた隙なきおろこ(をちにイ)たちやすらふと　俊頼朝臣

○南北百首歌合、述懐憂世の風

(月清集上)はかなくも花のさかりを思ふかな憂世の風はやすむよもなし　後京極攝政

○述懐御歌中、人の心

海原やあら磯崎の波よりも人の心の風ぞはげしき　後九條(内大臣歟)入道關白

○住吉社百首、ふるき風

ふるき風松のこずゑにふかすともこの世みだすな住吉の神　慈鎭和尚

○大君の風、六帖題、山夏風

あふぎけるわが大君の風なればたれも涼しき宮の内かな　權僧正公朝

○文應元年五十首、大空の風

さりともとたのみしかども大空の風を結びてなすこともなし　同

○千五百番歌合、代々の風

この時にあふぞうれしき代々の風ききしにまさるわかの浦波　大納言通具

○毎日一首中
ひえの山高ね颪のうき雲に雪ふき渡すしがのうらなみ　爲家卿

○洞院攝政家百首、あら磯風
こよひわれあら磯風のはげしきに衣手寒みこひつゝやねむ　同

○冬歌中、みどりのあらし
くれなゐの梢は雨とふりはてて綠のあらし松に吹くなり　大藏卿家季

○家集、蓬生風
誰かきて見るべきものとわが宿の蓬生あらしふき拂ふらむ　和泉式部

○住吉社百首御歌、思の風
かぞへゆく思ひの風の海ふけば心のうらにたつ涙かな　慈鎭和尚

○天王寺百首御歌、ことの葉風
和歌の浦やことのはかぜは立つ波を心にかけて契るとをしれ　同

○正治二年百首御歌、河おろし
けさみればたつた河原の川おろしさそふ紅葉を波ぞおりける　喜多院入道二品御子

○六帖題、山の下風
新六一
つゞきたつ衣のときは木葉たててひとすぢわたる山の下風　爲家卿

○家集、ゆふ下風
夏山のゆふした風のいつのまにおと吹きかへて秋の來ぬらむ　西行上人

○日吉社歌合、秋の初風
君が宿のをぎの上葉はいかならむけふ吹きそむるこひの初風　慈鎭和尚

○同、夕吹風
紅葉ばを夕ふく風に任すれば苔むす谷にうちしぐれつゝ　同

○三百六十首中、關風
三年生ひの駒うりてこと（ちイ）になづけつゝ牽きくる秋のけさの關風　好忠

○家集
相坂の關のせき風身にしみてとりのなだてにねをぞ鳴きつる　道信朝臣

○家集、關路納（晩イ）涼
夕さればせき風はやみ清みがた秋とおぼゆる波の音かな　權中納言長方

○題不知、山ごしの風
萬一
山ごしの風をときしみぬる夜おちず家にある妹をかけて忍びつ　讀人しらず

○貞應三年百首、風奥のはやて
波しらむ奥のはやてやつよからじ生田が磯によするとも舟　爲家

○六帖題、追手の風

新六五 しばしともいふかひぞなき沖かけておひての風にいづる舟人　正三位知家

○三百六十首中、さよ風

身に寒く秋のさよ風吹くなべにふりにし人の夢にみえつゝ　好忠

○同、野の風

ひとりぬるわが身はあれて草村の野ら風よりも寒くあるかな　同

○竹風如秋しののをふゞき

秋きぬと竹の園生になのらせて篠のをふゞき人はかるなり　俊頼朝臣

○千五百番

頼むとも今はたのまじあふみぢの篠のをふゞき人はかるなり　小侍従

○久安百首

なにしおはば早打ち出でよ近江路の篠のをふゞき忍び／＼に　大炊御門右大臣

○正治二年百首

こひ侘びぬつれなき人に近江路のしるべに通へ篠のをふゞき　喜多院入道二品親王

○嘉禎二年遠所十首歌合

日數さへ篠のをふゞき立ち重ねあふみぢとほき行末の空　後久我太政大臣

○聞風音高村風

萬代冬一 家 平山の紅葉夜のまはいかならむ峯のむら風うちしきりふく　惠慶法師

○寶治二年百首

たえ／＼にかをれる梅の匂ひかな夜半のむら風吹きにけらしな　光俊朝臣

○永久四年五月歌合、叢澤風

澤風やはげしかるらむかたよりにすだく螢のたちさわぐなり　法性寺入道關白家淡路

○建長八年百首歌合

さは風になれもやなびく夏草のおなじ方にもゆく螢かな　衣笠内大臣

○六帖題、沼風

新六六 花がつみかつみだれゆく沼風に露やあさかの名に匂ふらむ　信實朝臣

○同、川あらし

新六三 日くるれば山陰くだる河あらしうきねを寒み鴨ぞ鳴くなる　爲家卿

○賀茂社[illegible]歌合、神風

くもる夜のそら吹きはらへ神風や雨なつかしき袖もよしなし　慈鎭和尚

○十題百首御歌

君をいのるときしもあれや神風の身にしみ渡る伊勢の濱荻　後京極攝政

○大神宮百首御歌
神風や天のやへ雲吹きかけよまがへる道におとやみゆると　後鳥羽院

○家集、陰題、天津風
あまつ風清く涼しき大よどの野べにならひてこゑたてな蟲　忠岑

雷

○題不レ知
萬十七
天雲の近く光りてなる神の見ればおそろし(かしこし萬)見ねば悲しも　人丸

○長歌
萬十二
鳴神の　光み空の　長月の　時雨のふれば　鴈がねも　未だ聞えず　讀人しらず

むら雲はなほなる神のこゑながら夕日に通ふさゝがにの露　後鳥羽院

なる神の聲をさめたりいなづまの光ばかりぞ夕立ちの空　俊成卿

○千五百番歌合
秋をまつひかりも近くなる神の音にはたてぬ風ぞ涼しき　隆信朝臣

○六帖題
新六一
しらざりき遙けき空になる神のみぬものからに人をこふとは　衣笠内大臣

○同
同
なるかみの音羽の山の夕立にせきのこなたも水まさりつゝ　爲家卿

○文永九年毎日一首中
すぎにける關のこなたになる神のおと羽の里の夕立の空　同

雲

○題不レ知
萬七
思ひあまりいともすべなみたまだすき(た萬)雲とぶ山にわれしめ結ぶ(わがしめゆひつ萬)　讀人しらず

○五六題
六五 明方にと（きイ）山の雲のいとはれて歸りしほどは寂（わび六）しかりきや　同

○弘長二年内裏一首
くれぬとて歸るをみればつくばねの峯こそ雲の宿りなりけれ　從二位行家

○仙洞三首、曉雲
いかにして夕にかへる雲の色の曉しりてたち渡るらむ　爲實卿

○洞院攝政家百首
山かつら明けゆく空にほとゝぎすいづる初音は峯わたるなり　定家卿

○千題百首、君臣歌合
大空にあまねくおほふ雲のそで袖くちうるふ雨くだるなり　爲兼卿

○千題百首
この日ごろさえつる風に雲こりてあられこぼるゝ冬の夕ぐれ　定家卿

○建仁元年老若五十首歌合
壬二市 炭がまの峯のけぶりに雲こりて雪けになりぬ大原の里　家隆卿

○久安百首
くまもなく月すみわたるあまの河名をだにかけじ雲の白波　前參議教長

○二夜百首
しらぬ山の雲をはるかに尋ねつゝ昔は人にあひけるものを　後京極攝政

○亭子院御時
家集 のる雲のひとわきもせぬものならば水と涙はなからざらまし　伊勢

○弘長元年百首歌合
風さわぐ雲のふるまひたゞならでかねてまたるゝ夕立の空　常盤井入道太政大臣

○建長八年百首歌合
夕立の雨ふきすごす山風に岑より遠く雲ぞわかるゝ　從二位行家

○戒抄古歌、しらさ雲
天の原よこぎりわたるしらさ雲月にもまがふはやくけねかし　讀人しらず

○永久四年百首歌、白雲
白雲は雨やみてこそ歸りけれはなぞめならばかゝらましやは　藤原忠房

○家集、雜歌中
山もなき海のおもてにたなびきて浪の花にもまがふ白雲　西行上人

○北野社歌合
足曳の山雲よそにめぐりきぬ神のめぐみの雨の夕ぐれ　後鳥羽院

○家集、旅歌中
東路やまだあけやらぬあしがらの八重山雲を今ぞわけくる　家隆卿

○さくらの雲
思へ人心へだてぬかひもなしさくらの雲の八重のをち方　定家卿

○六百番歌合、寄レ繪戀繪にかく雲
いかにせむゑにかく雲にあらねどもまことすくなき人の心は　慈鎮和尚

○久安百首、うれへの雲
そらにみつうれへの雲の重なりて冬の雪ともつもるなりけり　俊成卿

○勝鬘品心
うき世にはうれへのくものしげければ人の心に月ぞかくるゝ　前大納言定教

○康元元年毎日一首中、曉の雲
あかつきの雲につけても思ひ出でや世をうぢ山の秋のよの月　爲家卿

○正嘉二年毎日一首中、薄雲
山たかみ梢かくれぬうす雲にふくとはなしに風ぞ涼しき　同

○六帖題、あまとぶ雲
新六一 久方のあま飛ぶ雲のいかにして照る日の影をたちへだつらむ　衣笠内大臣

○青雲、六帖題不レ知
六一 萬三 大君は神にしませば青雲のみかきがうへに宿りすらしも　讀人しらず

○六帖題、とよはた雲
新六一 あまの原とよはたぐもになる神のおとすぎやらぬ夕立の空　信實朝臣

○御集、夕旅宿
昔思ふとよはた雲の夕しほにひとりもかへる沖つ白波　後鳥羽院

○不レ思戀、天雲
六一 思はずにあひもやすると天雲の行くてはたゞに歸りきぬるを　讀人しらず

○家集、村ちる雲
風吹けば空にむらがる雲よりもうきて戀する人はまされり　忠岑

○文治三年百首、不レ思戀朝の雲 空イ
旅の空しらぬかりねにたち別れあしたの雲のかたみだになし　定家卿

○紅葉中雲ありなし雲
風にちるありなし雲の大空にたゞよふ程やこの世なるらむ　寂蓮法師

○御集、無常を
世の中はありなし雲の山のはに懸ればきゆるためしなりけり　後德大寺左大臣

○寄レ山戀、夕ゐる雲
あまさかる夕ゐる雲ととぢられて今もよはせる名にあふ香山　俊頼朝臣

○家集、ゐのこ雲
雲はらふ月の光におひにけりはしりちりぬるゐのこ雲かな　源仲正

○建保三年名所百首、さみだれ雲
かりごものさみだれ雲となりにけりみつのみまきの夕暮の空　僧正行意

○百首歌、夕雲
山風にゆふ雲なびきしぐれきぬ舟はやわたせうぢの河長　衣笠内大臣

○同
雨はれぬ旅のやかたに日數へてみやこ戀しき夕雲のそら　慈鎮和尚

○百首歌、水まさ雲
末はれぬ水まさ雲にもる月をむなしくあめの夜は思はむ　同

○同、あだ雲
月のまへにしぐれすぎたるあだ雲をはらふならひは秋の山風　同

○安元元年壬九月歌合
月の面にやがてきえぬるあだ雲のこの世に如何ありと賴まむ　藤原明

○花月百首、心の雲
さみだれもはれざらめやはもの思ふ心の雲はまつ空ぞなき　慈鎮和尚

○文永二年中務卿親王家三首歌合
述懐
身をも猶うしとはいはじ今はたゞ心の雲を風にまかせて　法印厳忠

此の歌判者右心雲おぼつかなきよし人々申し侍りしかど文集にや侍らむ已將レ出二浮雲外一と侍るにこそ心詞幽に見え侍る由申す

○長歌、涙の雲
仰げども　空行く月の　晴れやらぬ　涙の雲を　夜半の風　拂ふ誠の

○柿本影供百首、さはたり雲
くれかゝる沖の小島の波まよりさわたる雲やちどりなるらむ　後九條内大臣

○建久七年百首二十八番、山家嶺たつ雲
ふもとにや峯立つ雲とながむらむわがあけぼのにおはぬ櫻を　定家卿

○永久二年名月内裏歌合、八重雲
やへ雲も風吹く空はなびきけりこひの煙ぞやる方もなき　藤原資光

○同四年百首、春曙横雲
山のはのよこ雲はしりわたりつゝみどりにみゆる曙の空　源　兼昌

○千五百番歌合、よろこぶ雲
もろ人のあふぐのみかは君が代は空によろこぶ雲もありけり　土御門内大臣

○同、八雲
そさのをの君が御門のためとてや八雲のしるし思ひたちけむ　同

○正治二年百首
君が代は八雲の空のはじめよりよむともつきじわかの浦浪　寂蓮法師

○題不レ知、たなびき雲（く歟）
萬二
北山にたなびく空の青ぐもの星さかりゆく月もさかりて　持統天皇

○同
萬十六
いやひこのおのれ神さび青雲のたなびく日すらこ雨そぼふる　讀人しらず

○千五百番、たぢろぐ雲
はれぬるかたぢろく雲のたえまより星見えそむる村雨の空　後鳥羽院

○題不レ知、いさよふ雲
萬十四萬
人ねろにいはる物から青ねろにいさよふ雲のよそりつまはも　讀人しらず

○題不レ知
萬二
かくらくのはつせの山の山際にいざよふ雲は妹にかあるらむ　同

○家百首歌、鶴朝雲
あさ雲にたづぞ亂れて遊ぶなるうらゝにみゆる春のこのごろ　前大納言顯房

萬三
秋の夜は　影しさやけし　朝雲は　鶴は亂れて　夕霧に　蛙は騒ぐ　赤人

雨

○題不レ知
萬四
あまさかり（つゝみ萬）常する君は久方のきのふの雨にこりにけむかも　大伴女郎

○同
萬八
こゝにありて春日やいづこ雨さかり（つゝみ萬）出でてゆかねば戀ひつゝぞをる　藤原八束朝臣

○秋歌中
萬八
雨ぐもり心ゆがみにいでみれば春日の山は色づきにけり　中納言家持

○雲
六一 貫之集
あめふれば北にたなびく天雲を君によそへてながめつるかな　讀人しらず

○六帖題
新六一
きたへ行く夕べの雲の大空にかさなるみれば雨はふりつゝ　光俊朝臣

同
こちふけば雨けにつどふうき雲のかきあつめてぞ物は悲しき　爲家卿

同
雲もなく晴れたる空にふる雨は法のうるひのはじめなりけり　衣笠内大臣

○六百番歌合
ふくる夜の軒の雫をかぞへても猶あまりぬる袖の露かな　後京極攝政

ときによりすぐればたみのなげきなり八大龍王雨やめたまへ　鎌倉右大臣

此の歌云御集云建暦元年七月洪水漫レ天土民愁歎せむ事をおもひて一人奉レ向ニ本尊ー聊致ニ祈念ー云々

○歌集
ものをのみ思ひの家をいでてふる一味の雨にぬれやしなまし　和泉式部

○南北百首歌合
日をへつゝ民の草葉のかれゆくに惠みの雨をいかでそゝがむ　慈鎭和尚

○文永十年毎日一首中
祈るてふ人の心の雨風もきみのためにぞけふは晴るらむ　爲家卿

○六帖題
とにかくにみかさと申せ夏深きすゑの原野に日てり雨ふる　光俊朝臣

○同よこ雨
窓うつも風にしたがふ横雨のおといくたびかふりすさぶらむ　信實朝臣

○建保八年百首歌合
夕立の軒端すぎゆくよこ雨にこすのまみれば露ぞかゝれる　左近中將具氏

○家集、霧中雨
かた山のそばの崖路の横雨にみかさとだにもいはでぬれ行く　權僧正公朝

○建長八年百首歌合、たなびく雨

しらま弓磯べの山の秋風にたなびく雨や木の葉なるらむ　藤原伊嗣朝臣

此の歌判者云たなびく雨は或書にかすみてふる雨と侍れば春の雨にや
と云々

○題不レ知

六一 新拾秋下 くれなゐの八しほの雨ぞふりぬらし立田の山の色づくみれば　躬恒

○同、村雨

六一 人しれずもの思ふ宿の村雨は身よりふりぬる物にぞありける　讀人しらず

○家集、夏雨

六一 思はじと思ふものから夏雨のふり捨てがたき君にもあるかな　躬恒

○家集、ながあめ

ふれば世のいとゞうき身のしらるゝをけふ長雨に水増さらなむ　和泉式部

六一 つれ〲と（の六）ながめに我はなりにけり（ぬめり六）つれなき空に（を六）ふる心ちして　讀人しらず

○攝政家にて、雨中菫菜

誰と見て忍びかはせむつれ〲とこし雨ふりて菫咲く野を　俊頼朝臣

○家集、ひぢかさ雨

わが戀はひぢかさ雨にそぼぬれてさほすといはむ君もぞおう（おくカ）る　同

○歌林

萬十一 六一 袖中抄 催馬樂 妹が門ゆき過ぎがてにひぢかさの雨もふらなむ雨がくれせむ　讀人しらず

○家集、雨の足
花待イ

ひまもなくもりくる雨の足音をわがとほづまと思はましかは　俊頼朝臣

○待花雨不開

春はきておそき櫻の梢かなあめのあしまつ花にやあるらむ　西行上人

○家集、郭公、五月雨の雨

ほのかにぞなき渡るなる時鳥こゑふりたてよさみだれの雨　元輔

○久安百首、彌生の雨

ほそくふる彌生の雨やいかならむ水にあやおる廣澤のいけ　花園左大臣家大進

滴

○題不知
萬二 六一 我をまつ君がぬれけむ足曳の山の雫にならましものを　石河郎女

○六帖題
新六一 谷かげの岩もとしづくつく〴〵と時をもわかずぬるゝ袖かな　爲家卿

○同
同 あけわたる山の雫にそぼちても花をつむ身となりぞしにける　光俊朝臣

同 暮れかゝる山のしづくをうけためて下枝にうつすならのは柏　知家卿

○建仁九年十月歌合、郭公
ほとゝぎすこゑは雲まに音信れて雫をのこす軒のたちばな　後京極攝政

虹

○高野に登りける時かづらき山に虹の立ちければ
更にまたそり橋渡す心ちしてをふさかゝれるかづらきの山　西行上人

○十首(題カ)百首
時雨れつゝ虹たつ空や岩橋をわたしはてたるかづらきのやま　寂蓮法師

○建長三年歌合
うちしぐれにじたつ秋の下紅葉そめ渡したるかづらきの山　如寂法師

○文永三年毎日一首歌
雨はるゝ峯のうす雲うき散りてにじたちわたる冬の山里　爲家卿

火

○於二燈前一影字レ身
一人してもゆるほのほに向へるは影を作ふ身とぞなりぬる　千里

○六帖題
新六一 心なき岩木の中をいづる火もうたてはてには身やこがすべき　為家卿

○同
新六一 打ちいだす燧の石のほくそなみ何にもつかぬわがみなりけり　衣笠内大臣

○ことの葉
新六五 いつはりの人のことの葉心せよ海をさへゆく火ともなるなり　光俊朝臣

○雑歌中
明玉 心なきいは木の中の思ひだにむろの八しまの煙とぞなる　前中納言雅具

○保安二年家歌合、閑（思イ）
山伏の旅の泊りにともす火のうち出でて人にほのめかしつる　法性寺入道関白

○文永元年毎日一首中、七月十四日夜（恋イ）
ともす火も手向くる水も誠あらば魂のありかを聞く由もがな　為家卿

○長久元年五月斎宮内親王家歌合（貝アリ）
浦近み夜こぐ舟にともす火の影かとみえてひかるたましひ　読人しらず

○六帖題不レ知
萬十一 萬六 ともし火の影にかゞよふ埋み火のいもがゑみがほ面影にみゆ　同

○六帖題
新六六 はかなくもたく火も悲し燈火のかげにかゞよふ夜はの松蟲　為家卿

○永久四年百首
燈火に入る夏蟲のはかなさを身にさとりてもあかしつるかな　俊頼朝臣

○六帖題
新六五 燈火の消えての後によりふせばわが影をだに見る由もなし　光俊朝臣

○建長八年百首歌合
燈火のきゆるをきはの一人ねは身にそひはつる影だにもなし　後九條内大臣

此の歌判者云秋燈挑盡未レ能レ眠といへる心なうつされたるにこそと云
云

○寶治二年百首、夜灯
なみ間よりたえぐ\てらす灯のあかしのとまや誰あかすらむ　同

○題不レ知
萬十五 雲集 山の端に月かたぶけばいさりする蜑の燈火おきになづさふ　人丸

○家集
すゝきとる蜑の燈火よそにだにみぬ人ゆゑにこふるころかな　同

○文應元年七社（永イ）
夢さめて見るもはかなし山里の風のまへなる窓のともし火　爲家卿

○建久七年百二十八首
おきをあめるこやのかりねのたゞ一夜風にまたゝく宵の燈火　定家卿

○早世身如二風裏灯一暮年意作二鶴中蝶
世の中は草木もたへぬ秋風になびきかねたる宵のともし火　同

○津國にまかりていさりするをみて
いさり火のこしの紅葉とみゆなれば波の中にや秋ををしまむ　元輔

○関白入道摂政家百首、釣渚
いとまなみ夜もやすまず須磨の蜑の釣すと點す浦の漁火　爲家卿

○千五百番歌合
あま少女いさりたく火のほのかにて思ひの程を人しるらめや　野宮左大臣

○六帖題
新六三
暗きよりくらきをしらでかり物のつりの漁火なにともゆらむ　信實朝臣

○百首中
すまの浦や海士のたくもの漁火ややがて鹽燒く便りなるらむ　寂蓮法師

○最勝四天王院名所歌
大井河くだす鵜舟のかずみえてかゞり火なびく夕やみの空　入道前太政大臣

○正治二年百首御歌
すまの浦やあまのいさり火ほのかにてなほ有明の光をぞまつ　後鳥羽院

○北野宮百首御歌
あはれなり世をうみ渡る浦人のほのかにともす沖のかゞり火　同

玉葉
旅人のともし捨てたる松の火の煙寂しき野路のあけぼの　中務御子

○五行歌中歌（無イ）
深き夜のみちにさきだつ松の火の光をおくる契りばかりや　定家卿

○家集、霞似煙
はなの火を櫻が枝にたきつけてけぶりとなれるあさ霞かな　西行上人

○久安百首、冬歌
年をへてつめるなげきを此の冬の喜びもがなたきつくしてむ　季通朝臣

君こふと忍のび〳〵に身をやきて風のあなづる灰となしてむ　好忠
○家集

いにしへの飛火の野べの名殘りとて螢ほのめく夕闇の空　爲家卿
○文永元年七社百首

萬三 たかまど山に　春のやく　野火とみるまで　くゆる火の　い
かに問とへば　たまぼこの　みちゆき人の　金村
○長歌

歌林 いしの火に此の身をよせて世の中の常ならずさを思ひしるかな　嘉陽門院越前
○千五百番

忍びわびいはほの中を尋ぬともそれも思ひのある世なりけり　家隆卿
○家集、寄火戀

續後拾物名 片繩をするがのふじの山よりもわが胸の火のまづもゆるかな　友則
○寛平御時歌合

たえはてし身には歎きをこり積みてたつ方しらぬ胸の埋み火　後九條内大臣
○弘長元年百首

思ふべし薪の上にもゆる火は世のことわりをあかすなりけり　後京極攝政
○五行御歌中、火

煙

たく人もあらじと思へどよしの山雲のうちより煙こそたて　重之
○百首中

立ちのぼる煙をみてもかみ山に人の心のおよびやはする　爲家卿
○毎日一首中、神火

世の末のいかになりゆくことわりを煙につけて人のみすらむ　同
○同歌中

しもむすぶましばのいほの月影に煙きりあふ明くれの空　同
○建長四年毎日一首中

さみだれはすまのしほやも空とぢて煙ばかりぞ雲にそひける　俊成卿
○千五百番

○同
四方の海も煙にぎほふはまひさし久しき千代に君ぞ榮えむ　定家卿

○六百番歌合
新千戀一
しらせばや心の空に立つ煙みせばやふじの山にまがへて　後京極攝政

○正治二年百首御歌中
ちりつもるもりの落葉をかきつめて木の下ながら煙たてつる　同

○同
遠かたにたゞ一むすび立つ煙思ひとくにぞ小野のすみがま　前大納言隆房

○題不知
夕されば野にも山にも立つ煙なげきよりこそもえまさりけれ　菅原太政大臣

○御集、蚊遣火
寂しさに柴とりくべし冬よりも煙けぶたき宿のかやり火　中務卿御子

○家集
かやり火の煙けぶたきあふくまによるは著さも覺えざりけり　和泉式部

○田舍行人に
それとみよ都のかたの山のはにむすぼほれたる煙のほらは　同

○久安百首
ふる雪にそこともみえず東路は煙やむろの八しまなるらむ　前參議親隆

○千五百番歌合
下參
これやさは人を思ひのはつけぶりなれぬながめの空の浮雲　雅經卿

○同
朝日さすこほりのうへのうす煙まだ晴れやらぬ淀の川ぎし　後京極攝政

○文永八年毎日一首中
望月のひかりにちかきうす煙一夜ばかりのへだてなりけり　爲家卿

○人しれぬ志ある人につかはしける
この世をも後をもいかにいかにせむもえむ煙も結ぼほれつゝ　能宣朝臣

○家集、山里に侍りける頃をはりのけぶり
拾遺上と思ふ家
をしからぬ命やさらにのびぬらむをはりの煙しむる宿にて　元輔

○百首歌中、無常
消えがたき香の煙のいつまでか立ち廻るべきこの世なるらむ　寂蓮法師

○百首御歌
たえずたく香のけぶりやつもるらむ雲の林に風かをるなり　後京極攝政

○六帖題
新六一 もえつゞくかうの煙のときうつり羊のあゆみけふも程なし　光俊朝臣

○住吉百首御歌、庭火煙
住よしの庭火のけぶりのぼれどもくもるときなき曉の星　慈鎭和尙

○十題百首御歌、あさげの煙
月清上 大井河あさけの煙ほのぼのとくたす筏の遠ざかり行く　後京極攝政

○建保四年百首
君が代はつきせぬ民の朝煙ゆたかにたつる御つぎ物かな　家長朝臣

○百首御歌、炭竈
山深みたく炭がまのあさけぶり心細くもみえわたるかな　後德大寺左大臣

○家集、月次歌、雪氣の煙
朝日さす雪氣の煙うちなびき吉野の山もみえずかすめる　太宰大貳高遠

○六帖題、同煙
興津風吹きしく浦のしほ煙立ちのぼらぬやわが身なるらむ　中務卿御子

○洞院攝政百首、不逢戀
いかにせむ風ふく浦の鹽けぶりなびかぬ方に思ひきえつゝ　光俊朝臣

○千五百番歌合
浦風にやくしほけぶり吹きまよひたなびく山の冬ぞ寂しき　定家卿

○題不知、鹽やくけぶり
萬三 六三 なはの浦にしほやく煙夕されば行き過ぎかねて山にたなびく　日置少老

○屛風繪に富士の煙
家 春深きまたきつけたる蚊遣火とみゆるはふじの煙なりけり　能宣朝臣

○正應五年三島社七首歌、十月
時しらぬふじの煙もはるゝ夜の月のためにやたたずなるらむ　參議爲相

○文治二年百首、夕けぶり
そこはかとみえぬ山路の夕煙たつにぞ人のすみかともしる　定家卿

○正治二年百首
雪うづむ山路のそこの夕煙しばをりくぶる誰が住ひぞ　隆信卿

○洞院攝政家百首
はかなしや忍ぶの山のゆふけぶりきえなむのちの跡の白雲　俊成卿女

磯がくれほのかになびく夕煙たが舟とむる入江なるらむ　後一條入道關白

○建保三年名所百首、民の煙

千代までも民のけぶりや絶えざらむ鳥羽の田面の朝け夕けに　同

塵

○千五百番名所百首

いくちりの山をいくへに重ねてもげにわが國は動きなき世に　後一條入道關白

○六帖題

新六一 こけ深きみどりのほらは紅の塵のほかなるすみかなりけり　衣笠内大臣

○同

新六一 數しらぬ（ず新六）誰もかきおくなのみして塵につくべき言のはもなし　民部卿爲家

○同

同 心をばよしなき色に染めがみのうたてはらはで塵つもるらむ　知家卿

○同

同 たのもしな一つのちりの中にだによもの佛のこもらぬはなし　光俊朝臣

○同

同 老が世はみることうときます鏡塵のへだてもさぞつもるらむ　信實朝臣

○家集、述懷

曇りなき鏡の上にゐるちりを目にたててみる世と思はばや　西行上人

○廣田歌合、社頭雪

いさぎよき光にまがふ塵なれやおまへのはまにつもる白雪　俊成卿

○家集、文永元年、社頭雪

玉帚ほしをみるにも君が代は塵をさまりていやさかえなむ　權僧正公朝

○述懷歌中

萬代 朝ごとに作の宮つことる塵のすてられにける身をいかにせむ　道因法師

○百首中

雲かゝる大内山となりにけりいく世の塵のつもるなるらむ　雅經卿

○久安百首

萬代 君が代は光つきせぬ日の本に朝たつちりのかずもえしらず　花園左大臣家小大進

○題不知

雲葉 おひがたき御法の塵にうづもれてみたつる人のなきぞ悲しき　塵取上人（慶政）拾

曉

○文治六年五社百首
曉はかねの聲より鳥の聲ちどりしばなきしぎのはねがき　俊成卿

○養和百首、旅
つく〴〵とねざめてきけば波枕まださ夜深き松風のこゑ　定家卿

○六帖題、曉
新六一 わぎもこが綠のまゆをかきそへて門田の鴫のはね音ぞきく（をイ）　衣笠内大臣

○同
同 たまきはるけふの命のあり數にまたはかなくもあくる東雲　知家卿

○同
同 八こゑなく鳥よりさきと思へども曉おきをかねぞ過ぎける（ねぞすぎにける新六）　光俊朝臣

○同
同 なか〳〵に横雲おほふ明け暮はしのゝめおそき山のはの空　信實朝臣

○六百番、曉戀
夜を深みしばなく影は我が如くねてもさめても戀やすべなき　顯昭

○同
月やそれほのみし人のおもかげを忍びかへせば有明の空　後京極攝政

○正治二年仙洞十首歌合、曉雪
夜もすがら重なる雲の絶えまより月をむかへる峯の白雪　同

○文永元年七社百首、曉賀茂
たをやめのかざる朝日の粧ほひにまづあけてみる玉くしげかな　爲家卿

朝

○六帖題、朝
新六一 老いにけるほどもはかなし朝ごとのたらひの水にうかぶ面影　衣笠内大臣

○同
新六一（は新六）朝毎にあらふとすれど積るらむ身のちりばかりいかで淸めむ　爲家卿

○同

新六一 あけやらぬ闇の隙のみ待たれつゝ老いぬる身には朝ねせられず（い新六） 知家卿

○同

新六一 殿もりの宿直やくれの庭だちに姿かしこき朝清めかな 信實朝臣

○同

同 さばかりの朝まつりごとしげけれど代々にすてぬは敷島の道 光俊朝臣

○洞院攝政家百首、後朝戀

いかにして朝のまをもかこちよせてあかぬ名殘を暫し留めむ 知家卿

○六百番歌合、朝戀

雲はれて山のはいづる光にもかわきもやらぬ袖のうへかな 有家卿

○同

朝戸出のいもがふりこす黒髮はみるよそめさへ心みだれぬ 顯昭

○同

雲かゝり重なる山をこえもせずへだてまさるは明くる日の影 定家卿

○題不知

いざ命思ひは夜半につきはてぬ夕べもまたじ秋のあけぼの 慈鎭和尚

萬十一 いもこふといねず朝けのをし鳥のこれよりわたる妹が使か 人丸

晝

○六帖題

新六一 あしがきの影だにみえずなり行くはつゆもひるまの庭の秋草 衣笠内大臣

新六一 をりおける根もなきはなの一枝は露のひるまもいかゞ頼まむ 爲家卿

同 みれば又瓶にをりさす花の色のやがてもしぼむ時はきにけり 光俊朝臣

○六百番、晝戀

もの思へばひまゆく駒も忘られてくらす涙をまづおさふらむ 後京極攝政

○同

身にすぎて馬こそ物は悲しけれ戀やひつじのあゆみなるらむ 顯昭

○同
おのづからくれ行く雲を待つほども頼む言葉の夢路なりけり　寂蓮法師

○同
かたぶかぬいもが心のひかげかな中空にのみもの思ひして　慈鎮和尚

○百首歌
このごろは霜雪だにもおち散らぬ冬のみ山のひるぞ寂しき　定家卿

夕

○御集
夕づくひ入りぬる跡もくれやらぬひかりのこれる山のはの空　中務卿御子

○百首御歌
夕づく日山のあなたになるまゝに光のこれるやまのはのそら　順徳院

風雅雑中
ゆふづくの山のあなたになるまゝに雲のはたてぞ色かはりゆく　同

○千五百番
雲にふしあらしに宿る足曳の山のいくへの夕暮のそら　雅経卿

○同
たまぼこの道のきえ行くけしきにてあはれしらする夕暮の空　野宮左大臣

○六帖題
新六一
かへるさの家路を急ぐ道に出でて夕とゞろきの民のこゑかな　信實朝臣

秋としも哀れをなにと思ひけむ暮れゆく空の風にぞありける　同

○六帖題
新六一
徒らにけふも暮れぬといひ〳〵て哀れ我が世もさて暮れぬべし　爲家卿

○同
新六一
待ちわびてさわぐ心の夕まどひするとはなくてねられもやせむ　信實朝臣

○夕やみ
新六一
小車の道の小野松はやともせ輪だちもみえず日はくれにけり　同

○嘉元元年壬十二月御歌、夕梅
そことしる匂ひながらは梅の花夕闇みちはよそにすぎまし　龜山院

○乾元元年仙洞歌合、夕
聞きつくす入相の鐘のこゑのうちに夕べの色ぞ深くなり行く　爲兼卿

○嘉元三年仙洞歌合
くれぬるか遠つ高ねは空に消えて近き林のうすくなりゆく　同

○初逢戀
六五 墨染のたそがれどきの大空にあひみし君にさやかにもみつ　讀人しらず

○六百番、夕戀
いまは我またじと思ふ心さへ又かきみだす雲のふるまひ　寂蓮法師

夜

○六帖題
新六二 この夜半はまだふけなくに老らくのかたねぶりする灯のもと　信實朝臣

○同、夜中
新六二 しのゝめの曉近くなりにけり衣手いたくさえぬ此の夜は　衣笠内大臣

○同
同 きのふけふわくなる鐘の音にだに猶おどろかぬ長き夜もうし　爲家卿

○同
同 うしのくひさすがに月のかけ出でて心すむ夜のときのふたかな　信實朝臣

東

○五行歌中
月も日もまづ出でそむる方なれば朝夕人のうちながめつゝ　後京極攝政

○太上天王勅答
ひんがしの國に我をれば朝日さすはこやの山の影となりにき　鎌倉右大臣

○五行歌中
朝日さす岸の青柳うちなびき春くる方はまづしるきかな　定家卿

西

○五行歌中

秋風も入日の空もかねの音もあはれは西にかぎるなりけり　後京極攝政

みやこよりたづねいく野の花薄ほのかにてらす三日月の空　定家卿

○建長七年百首二十八首歌

さまざまに春のなかばぞ哀れなる西の山のはかすむ夕日に　同

南

○五行歌中、南

玉章をまつらむ里の秋風にはるかにむかふはつかりのこゑ　後京極攝政

堂たてしきしのかひある藤浪のなびきてともに思ひやるかな　定家卿

○最勝四天王院名所御障子

秋の夜は都のみなみ月ぞすむ鳥羽田のおもの雲ゐはるかに　有家卿

○走湯山に參詣時御歌

玉神祇

伊豆の國山の南にいづる湯のはやきはかみのしるしなりけり　鎌倉右大臣

○建久七年韻百二十八首

たちのぼる南のはては雲はあれど照る日くまなき北の大空　定家卿

北

○五行歌中、北

その身しも冬の景色のはげしとやとぢたる戸をもあくる風かな　後京極攝政

日かげなきこなたの軒のかけの雪山のこし地は空にしられて　定家卿

○明題百首、窓梅北面雪封戸

日影みぬかた枝は雪にとぢながらかつ／＼匂ふ窓の梅が枝　爲家卿

巽

○六百番、冬朝

朝戸あけて都のたつみながむれば雪のきゆるや深草の里　中宮大夫家經（房歟）

乾

○六帖題

新六一　はるかなる都のいぬゐわが宿は大内山のふもとなりけり　衣笠内大臣

○家集

わが庵は都のいぬゐすみわびぬうき世のさがと思ひなせども　寂蓮法師

坤

○家集、未申と云ふ事を

陸奥の白河こえて別れにしひつじさる／＼行けど遙けし　惠慶法師

艮

○六帖題

新六五　百敷や大内山のうしとらにおりべのつかさあやたてまつる　光俊朝臣

彼岸

○文永七年毎日一首中

悲しびに樂しみのくにのむかふ程まさにしらるゝけふは初めぞ　爲家卿

○建長毎日一首中

けふ出づる春の半ばの朝日こそまさしき西のかたはさすらめ　同

○康元元年

夜ひるの久しき秋になりにけり春のなかばを今ぞと思へば　同

わきてなほ山のはいづるけふの日やまことの西に光さすらむ　同

○建長二年毎日一首中

とにかくにめかれぬ物を晝よるのおなじときなる花と月とを　同

夫木和歌抄卷第十九 終

夫木和歌抄　巻第二十

雑部二

題山

山

○天高暮山道

新續古今雑中

天津空高くはれつゝみえつれば（るは新古續）くれゆく山も遠くぞありける（の遠きなりけり同）　千里

○百首御歌

わが戀はかめの上なる山なれや名をのみききてみる時もなし　後九條内大臣

○二夜百首御歌

きえがたきしたの思ひはなきものを富士も淺間も煙立つとも　後京極攝政

○六帖題

弓たけのかずもおよばぬ山中にはる〴〵一人いもこひめやも　光俊朝臣

○千首歌

あしびきのをのへの櫻咲きしよりまがひし松の色はしりにき　民部卿爲家

○寛喜元年女御入内御屛風

足びきの山のかたそのいはし水下ゆく杜のがけぞ涼しき　太政大臣常磐井入道

○冬御歌中

現葉

きのふけふみやこの空も風さえて外山の雲に雪はふりつゝ　龜山院御製

○百首題

暮れかゝる遠山すがた哀れなり雲のたちなすまゝにのみして　前中納言爲兼卿

○六帖題

及びがたく高き姿をあらはして山といふ名はありはじめけむ　同

○ゆふ山、嘉元元年百首

今しはや草木の色も吹きかへて夕山さむきにはの秋風　入道前太政大臣

○神垣山、永久三年十二月太神宮歌合、郭公

千はやふる神がき山の時鳥ゆふつけてこそ聲しきるなれ　讀人しらず

○文應元年七社百首

かすがなる神垣やまのみしめなは猶ひきとめよ春のわかれを　民部卿爲家

○くれなゐの山、永仁元年龜山殿十首、山館暮秋

うつりゆく夕日の峯に宿とへば紅葉のほかもくれなゐの山　龜山院御製

○秋風山、民部卿親王家歌會

見るもかなし（さびイ）梢の紅葉もろくちりて夕日すくなき秋風の山　藤原實文朝臣

○横雲山、正應五年三島社十首、曙花

空よりもはなのをのへは明けすぎて松原くらきよこ雲の山　前民部卿雅有

○同首歌

のきとづる木の間の空もほのぼのと花をたよりの横雲のやま　大藏卿有家

○みなかみ山、新羅社歌合、紅葉

大井河あらふにしきをたづぬればみなかみ山の紅葉なりけり　信覺法師

此の歌判者云左歌みなかみ山と侍るは大井河の方に神山といふ所のあるにやおぼつかなし又たゞ水上山のもみぢといへるならばむげにおもへる所もなくやと云々

○夕ぎりの山、永仁三年家歌合イ

鳴く鹿のこゑもほのかになりにけり秋風うづむゆふぎりの山　前參議爲相卿

○このくれ山、嘉保三年五月匡房家歌合

まちかねてたづねきたれば時鳥このくれ山に一聲ぞなく　讀人しらず

○くゐ非山、仁安三年奈良歌林苑歌合

遠方や雲ゐの山のほとゝぎす天津空にも鳴きわたるかな　同

○久方の山、建久八年季能卿すゝめける月歌

秋といへば月のたゞぢを吹く風の雲をばすての久方の山　前中納言定家卿

○まさご山、洞院攝政家百首、月

秋風の吹上のはまのまさご山外にはみける月のかげかな　民部卿爲家

○おもひの山、嘉保四年百首

あはれわが思ひの山をつきおかば富士の高ねも麓ならまし　同

○こゝろの山、山家の心を

雲葉集 しら雲の八重だつ奥にいらねども心の山の身をかくすかな　自空法師

○檀のすそ山、家集中

河あひのまきのすそ山いしたててそま人いかに涼しかるらむ　西行上人

○とりしく山、題不レ知

萬三 岩がねのこりしく山をこえかねてなきはなくとも色にいでめや　長屋王(佐保)左大臣

○いは山

六五萬十四 岩山の大やが原のいはひつらひかばゆる〳〵わが名たえそね　讀人しらず

○六帖題

新六五 いはやまの柴の下草かれぬとて思ひにたへぬ程をしらめや　衣笠内大臣

○すゑのの山、洞院攝政家百首

あさ日さす末野の山の峯つゞき空行く人は雲もかゝらず　從二位家隆卿

○はに山

はに山のさゝやの牀のまろぶしに鳥の音聞ゆ明けぬこのよは　民部卿爲家

○六帖題

新六三 はに山のくづるゝ谷の埋れ水すましかねたるわが心かな　同

○高砂山、雜歌中

年月のかずをもしらじ麓よりつもれる塵のたかさごの山　一條内大臣

○高砂山、本院左大臣家前栽合、萩

鹿の聲高砂山のはぎなれば折りてこしよりねをやなくらむ　讀人しらず

○いこま山(河内)

萬十二 君があたり見つゝもをらむ伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも　人丸

萬十 いもがりと馬に鞍おきていこま山打ちこえくれば紅葉ちりつゝ

萬三 伊駒山木だちもみえず散り亂れゆきはだれなるあしたゝの霜

○同

萬十五 妹にあはずあらばすべなみ岩根ふむ伊駒の山を越えてぞあがくる　讀人しらず

○長歌

萬六 つゆ霜の　あきさりくれば　伊こまやま　とふひかくれに　同

はぎのはな　しからみちらし　さを鹿は　妻をとはまし

○百首歌
朝開きとぶひがくれに生駒山それともみえず春のかすみは　従二位家隆卿

○洞院攝政家百首
津の國のこやさく花と今もみるいこまの山の雪のむらぎえ　前中納言定家卿

いこま山松風しかは野の櫻ちらさでのこせ庭ながらみむ　權大納言實家卿

此の歌家集云大宮の加賀が許よりよるの鶴といふ草子をかりて程へし
をこふとて「いまはたゞよるの鶴」とくつかぶりに讀みておこせたりし
返しによめると云々

○保安二年九月内大臣家歌合、山月
生駒山こしげきものをいかにして谷のながはに月のすむらむ　藤原爲眞

○永久四年百首、榊
いこま山手向はこれやこの空にいはくらうちて榊たてけり（たイ）　源兼昌

○雜歌中、秋風
神さぶる生駒の山のあさ雲に舟こぎかへすみつの浦人　源寂法師

○六帖題
新六六
神さぶるいこまのやまのあせみ花さも心なきさきどころかな　光俊朝臣

○いはくに山（綜國、周防）
萬四
すはうなる岩國山をこえむ日は手向よくせよあらきその道　讀人しらず

○御集、榊
手向せし岩國山の峯よりも猶さかしきはこの世なりけり　中務卿親王

○旅歌中
いはくにのあら山道はまだ遠しくれもぞかゝるあゆめ黒駒　右兵衛督基氏

○洞院攝政家百首、不ﾚ逢戀
あふ事は君にぞかたき手向していはくに山を七日こゆとも　正三位知家卿

○寶治二年百首
うごきなき岩國山に杣木ひくたみのかずそふ世にもあるかな　前中納言定嗣卿

○いはき山(磐城、駿河、伊豆)
萬十二 岩木山たゞこえきませいそ崎のこぬみの濱にわれたちまたむ　讀人しらず

○家集、羈歌中
岩木山なけ木も種はあるものをたひを(こイ)し戀ひばまつならずとも　從二位家隆卿

○いはむら山(大和)、題不レ知
萬十三 つのさふるいはむら山に白妙のかゝれる雲は大ぎみにかも(わが大ぎみかめ萬)　讀人しらず

○いそべの山(越前又遠江)
萬十一 しらま弓磯べのやまの常磐なる命もがもや戀ひつゝをらむ　人丸

○弘安三年走湯山百首
見渡せばいそべの山の白妙に波たちまよふ花さきにけり　安嘉門院四條

○いつへの山(伊豆又越中)
萬十九 わがこゝだしぬばくしらに時鳥いつへの山をなきかこゆらむ　中納言家持卿

○いかご山(遠江又上野)
萬八 いかご山野べに咲きたる萩みれば君がいへなる尾花しぞ思ふ　笠金村

○山を
現存 あふ坂の關のあなたのいかご山いかにまちみむ年はへぬとも　洞院攝政

○いさごの山、御集
蘆の屋のいさごの山の水上をのぼりてみれば布引のたき　後九條内大臣

○百首歌
萬四 蘆の屋のいさごのやまのうへにある瀧の白絲みてもかへらむ　左近中將具氏卿

○いもせの山(妹背の山、紀伊)
萬七 おくれゐて戀ひつゝあらずばきの國の妹背の山にあらましものを　笠金村

萬七 せの山にたゞに向へる妹の山ことゆるすやもうち橋わたす　讀人しらず

萬三 人ならば親のまなごぞあさもよい(レイ)きの河づらのいもとせの山　同

槙の葉のしなふせの山しのばずて我こえゆけばこのはしりけむ　同

○いなば山(因幡美濃)、建保三年名所百首
きのふかも秋のたのもに露おきしいな葉の山もまつの白雪　前中納言定家卿

○同
秋の田のいなばの峯に吹く風の身にしむころは冬のくれまで　從二位家隆卿

○同
いな葉山雪の松原さえくれてむら雲白くいづる夜の月　從二位行能卿（家イ）

○最勝四天王院名所御障子
峯の松すそ野の荻もなびきつゝいなばの山はたゞあきの風　慈鎭和尙

○いぶき山（伊吹、遠江又下野）
夕づく日さすやいぶきのさしも草露にももゆる色は見えけり　僧正行意

○同
秋をやく色にぞみゆるいぶき山もえて久しき下の思ひに　前中納言定家卿

○同
木末まで伊吹の山のさしもいかにもえつゝ秋の色にみゆらむ　正三位家衡卿

○同
吹きすてて風はいぶきの山のはをさそひていづる闇の藤かは　藤原康光

○いまきの山（大和）、重（貫イ）家卿五首歌合、郭公
つねよりもめづらしきかな子規いまきの山のけふの初聲　祝部成仲

○いはねの山（近江又丹波）、大嘗會悠紀方御屛風、己日参入音聲
行末を思ふも久し君が代はいはねの山の峯のわかまつ　皇太后宮大夫俊成卿

○延久大嘗會、秋風
久しさのしるしなるべし色かへぬいはねの山の松の緑は　前參議實政卿

○天仁大嘗會（近江國石根山）
新千載賀
いはね山やまあゐにすれるをみ衣袂ゆたかにたつぞ嬉しき　前中納言匡房卿

○いなむら山（近江）、正應大嘗會
かくばかりゆたけき年にいなむらの山田守をば又もあひきや　民部卿資宣

○いなふさ山（近江又備中）、桑花
題不レ知
つくり田のかるべき君が御代なればいなふさ山の豐かなりけり　源兼隆（淸イ）

○いなぶち山（南淵、大和）
題不レ知
續中
秋なればいなぶち山のきり〲す聲よわり行く暮ぞ悲しき　讀人しらず

○いつはの山（越中）、懷中
萬十一　六帖二
しらま弓いつはの山の常磐なるいふり（いのちならばや萬）あやなよ戀ひつゝやへむ（をらむイ）　同

○いかづち山（雷、大和）、寶治二年百首
夕立の雨しふれれば天の原いかづち山はかきくもりつゝ　前中納言定嗣卿

○いたじき山（常陸或出羽）、明鏡
題不レ知
みちのくに近きいではのいたじきの山に年ふるわれぞ侘しき　讀人しらず

○いはての山(陸奥)、家集
○いくら山(信濃)、國中題不レ知
○いそしの山(近江)、家集
○いぬかひの山(犬飼、近江)、永仁大嘗會
○いはくら山(石藏、近江)
○いはと山(石戸、近江)、冬歌中
○正應大嘗會
○いはさか山(石坂、丹波)、九條內大臣家百首
○大嘗會主基方歌、石坂山を
○いはかけ山(國未勘)、家集、樹陰卯花
○いや高山、天仁元年大嘗會
○いとか山(縁賀、紀伊)
○いつはた山(越前)、貞家卿家五首歌合、曾、判者俊成卿
○いるさ山(但馬、丹波歟)、家集
○康保四年百首、題歌
○家集、待雨花

色見えて思ふ心はとしもへぬいはての山のまきの下露　正三位知家卿

忘らるゝ身のうきことやいくら山いくらばかりの歎きなるらむ　讀人しらず

白妙の花のほつえをめにかけていそしの山をおりぞわづらふ　俊頼朝臣

箸鷹のは風に雪はうちみだれ朝風さむきいぬかひの山　前中納言俊光卿

よのとみはいは倉山にをさめおきて萬代までも君につたへむ　兼盛

曾丹集
いはと山ゆふしでかけていのりこし榊おしなみおける霜かな　好忠

さか木とる今もいはとの山かづらふたゝびなびけやその諸神　民部卿爲家 イ爲實

都にもうす紅葉せりいはさかや山のこずゑは今かそむらむ　左近中將具氏卿

鶴のすむいはさか山の姫小松千代のけしきの著くもあるかな　讀人しらず

家中
身をしれば哀れとぞ思ふ照る日うすき岩影山にさけるうの花　皇太后宮大夫俊成卿

蟬のこゑいやたか山の木のしたや旅ゆく人の宿りなるらむ　前中納言匡房卿

古來歌
いとか山下行く水のうすこほりくる冬ごとにさぞむすぶらむ　法性寺入道關白

かきくらしこしのかた道ふる雪にいつはた山を思ひこそやれ　藤原範綱

いるさ山おなじかざしはなになれやみちし雪には雲がくれつゝ　祐擧

年ふともかはらじ心しらま弓いるさの山の峯のしひしば　前大納言爲家卿

あづさ弓いるさの櫻いかならむおして春雨ふらぬ日はなし　鴨長明

家
いけの面に影をうつせばいなり山みつの御垣に浪や立つらむ　安法法師

いなり山やま下水をむすびあげて君さへ影にならべてしがな　元眞

時鳥いくたの山のなゝめぐりめぐり行きても又もなかなむ　衣笠内大臣

咲きぬらむいさみの山の櫻花かすみはよそにたちへだつとも　同

いづも山こよひの月のさやけさは雪のあしたの心地こそすれ　源兼經朝臣

君が代はちとせにいちどとる數の祝ひの山とならむときまで　讀人しらず

神も又まつに心やつくすらむいはしろ山になくほとゝぎす　平忠盛朝臣

あひがたき花のさかりにみつるかなけふ石山の春の月かげ　民部卿爲家

うち忍びいはせの山の谷がくれ水の心をくむ人ぞなき　後京極攝政

足曳のいたくら山の峯までもつめるかりほをみるがうれしさ　前中納言匡房卿

萬十四
足柄の箱根の山に粟まきて實とは成れるをあはなくもあやし　讀人しらず

萬十四
足柄の箱根の山にはふくずのひるはよりこねしたなほ〳〵に　同

はこね山梢もまたや冬ならむふたみは松の雪のむらぎえ　西行上人

ちらさじとおくらむものを箱根山あくればこほる玉篠の露　顯仲朝臣

はこね山麓の里に宿とへばくれぬと急ぐ峯の旅人　民部卿爲家

もとこえしみちともみえず箱根山木ずゑの雲にあまる高ねは　參議爲相卿

○いなり山(山城)、家集
○家集、いなりにまうでたるに瀧のもとに女にあふ
○いくたの山(攝津)、建長八年百首歌合
○いさみの山(伊勢)、古來同
○いづも山、承保三年十一月源經仲朝臣出雲國名所歌合
○いはひの山(國未勘)、永久三年十一月大神宮禰宜歌合、祝
○いはしろ山(紀伊)、くまのにまゐりけるとき
○いし山、正元元年毎日一首中
○いはせ山(大和又近江)、千五百番歌合
○いたくら山(板倉、相模近江又備中)、悠紀方御屏風
○はこねの山(相模國謌)
○家集、松上殘雪
○堀河院御時百首
○貞應三年百首
○海道名所歌中

路次記云澤と堀とかはしめたる道をゆくにことの外にたかき山の峯は
ろかにみえしを人にとへばあれこそもとのみちといふをききてと云々

○前大僧正源惠人々に千首歌よませけるに
箱根山さかしき嶺にしく板のいたく苦しき旅のみちかな　爲道朝臣

○はつせ山、喜多院入道二品親王家五十首、臨諸
ながめつゝ夕こえくればはつせ山ふしみの里も麓なりけり　從二位家隆卿

○文永三年毎日一首中
小初瀬のみ山おろしのはげしさを猶身にしめて月やみるらむ　民部卿爲家

○建保四年百首
明玉
しぐれゆく秋にしられぬこもりえの初瀬の山の峯のしひしば　西園寺入道太政大臣

○山寺明月
初瀬やま峯の宿なる旅ねにはまくらよりこそ月は出でけれ　清輔朝臣

○はなみ山、花見、備中、、正應大嘗會
今ぞしるちらぬ櫻のはなみ山風もうらゝにをさまれる世を　大藏卿隆博

○はなぞの山、花園、山城又大和參河、、家集
時雨そむる花園山にあきくれてにしきの色をあらたむるかな　西行上人

○はなの山、山城、、花のさかりに僧正遍照のもとに
續後撰釋教
年をへていたくなめでそ花の山ぼだいのたねとならぬもの故　僧正靜觀

○はらのをか山、狩鴨莽名所、、家集
あさかへるかりいそなごの村鳥ははらの岡山こえやしぬらむ　西行上人

○はきの山、參河、、後鳥羽院家參河國名所歌合
白露は萩の山べにおきつればすゝきくれなる玉とこそみれ　寂然法師

○同
ちりぬべき花のをしさにいつとなくをりもやられぬ萩の山かな　盛忠

○はがひの山、名寄、大和、、家集
鶯のはがひの山も白妙に雪はふりつゝなきていづなり　權僧正公朝

○正治二年百首
大鳥のはがひの山にふるしもを誰につけにと急ぐみとさき　源師光

○はだれの山、家集中
時雨するはだれの山は紅葉ばの色づく程の名にこそありけれ　俊頼朝臣

おく霜や染めはづすらむ紅葉ばのむらごにみゆるはした山かな　同

斧とりて丹生の檜山にいらねどもこりのみつめるわがうき名かな　光俊朝臣

萬十二 斧採りて　丹生のひ山の　木樵り來て　筏に作り　眞楫貫き　磯漕ぎたみつゝ　讀人しらず

にふの山あらしの流す紅葉ばにじくれぬ槇も色づきにけり　中務卿のみこ

明玉 つげやらばいもやとがめむにひた山いはねの枕誰にかはすと　従二位家隆卿

萬七 みなぶちと細河山にたつま弓ゆづるまくまで人にしられず　讀人しらず

よゝをへていく代になりぬ久方の天くだりけむ星岡の山　源仲業

萬四 近江路のとこの山なるいさや川けのこの比は戀ひつゝもあらむ　讀人しらず

萬四 白鳥のとばやま松のまちつゝぞわが戀ひわたるこの月ごろを　同

古來歌 そひまゝに又もあひみぬはかなさに秋ぞ悲しきのちの鳥羽山　後九條内大臣

となみ山とびこえてなく時鳥都に誰かききなやむらむ　民部卿爲家

萬十九 春さりくれば　ほとゝぎす　いやしき鳴きぬ　ひとりのみ　きけば悲しも　君と我と　隔てて戀ふる　となみ山　とびこえさりて　あけたてば　松のさ枝に　夕されば　月に向ひて　讀人しらず

遠つ山みやぎが原の萩みるとあきは鹿なきたはれをぞたつ　好忠

○はした山(半、近江)、たなかみにてよめる
○にふの山(丹生、大和又紀伊)、顯朝卿家千首
○題不レ知
○百首御歌
○にひた山(爾比多、上野)、旅の心を
○ほそ河山(細河、大和)
○ほしをかの山、建長七年顯朝卿家千首
○とこの山(鳥籠、近江)、題不レ知
○とば山(鳥羽、山城)、題不レ知
○承久の後名所百首御歌
○となみ山(礪波、越中)、千首歌
○長歌
○とほ津山三百六十首中

○ときはの山(山城又常陸)、八幡臨時の祭の使のもとへ八
○永久三年十二月太神宮禰宜歌合祝
○御集
○千五百番歌合
○家集、雜歌中
○家集
○同
○とりすみの山(大和國中)
○とみつき山(丹波)、祝歌榮花
○とみ山(實、備中)、家集
○題不知(秋風)
○とほ松の山うへの御局にて雪のふる日ある女房のもとへ
○とみのを山(丹波)、大嘗會風俗十首、神樂歌
○となせ山、嘉元元年民部卿親王家千首續會、瀧紅葉
○ちかみ山(國中)
○ちとせの山(千年、近江又丹波說)天仁元年大嘗會

ときは山影をうつせるおほ井河木の葉ながれて紅葉しにけり　堀河右大臣

君が代はときはの山の玉椿八千代の八たびあらたまるまで　讀人しらず

ときは山八尾の峯の玉つばき色もかはらでいく代へぬらむ　鎌倉右大臣

よとともに木の下くらきときは山月もおくらで誰かこゆらむ　醍醐入道太政大臣

新拾秋下
たれすみてあはれしるらむときは山おくの岩屋の有明の月　源道濟

人をのみ夜半にまつちのときは山峯の葛葉のうらみてぞふる　好忠

うつろはぬときはの山の榊葉をいのる心は神ぞしるらむ　能宣朝臣

ふかければ聲も聞えず鳥すみのやとりは山の名にぞありける　讀人しらず

君が代はとみつき山のさき〱に榮えぞまさる萬代までも　源兼澄

とみ山のかげまさり行く君が代にあへる國人たのもしきかな　兼盛

昔より名づけそめけるとみ山はわが君がよの爲にぞありける　讀人しらず

雲近く峯のあらしのさむきかな雪やふるらむ遠松の山　祐擧

榊葉の色もかはらでけふよりはとみのを山に千世をこそまて　前中納言匡房卿

いはなみの色をぞうづむとなせ山紅葉の瀧のおつるあらしに　參議爲相卿

思ふ人ちかみの山ときくからに麓の里もなつかしきかな　讀人しらず

春立ちて霞たなびく千とせ山ふもとの里のかげものどけし　藤原正家朝臣

○堀河院御時百首

峯つゞき松のみ繁くみゆるかなこれや千とせの山路なるらむ　中納言師時卿

○康平四年三月祐子內親王家名所歌合、ちとせ

續後拾遺
眞砂より岩ほとなれるちとせ山こや君が代のためしなるらむ　讀人しらず

○寶治二年百首歌、社レ社祝

動きなき千歲の山のみづがきは久しき御代のしるしなりけり　從二位賴氏卿

○ちりひぢの山、百首歌、寄レ山戀

淺ましやたが思ひよりちりひぢの山もなげ木の生ひ初めけむ　從二位家隆卿

○りうのを山、家集、郭公

雲はれぬりうのを山の時鳥空をかけりて鳴きわたるなり　源仲正

○ぬの引山(伊勢)

嵐ふく雲のはたてのぬきをうすみむらぎえわたる布引の山　鴨長明

此の歌伊勢記云二見のおとなし山にのぼりて海山をはるかに見けるに布引の山をみてよめると云々

○おときゝの山(尾張)、家集

おときゝの山の麓や近からむあはでの森にあひがたきかな　祐擧

○同、おときゝの山の時鳥

聲ばかりおときゝ山の時鳥姿ゆかしきものにぞありける　堀河院中宮上總

○おとは山(山城)、家集

おとは山木の下かげにかほ鳥のみえがくれせし聲の悲しさ　伊勢

○洞院攝政家百首

おとは山夕こえゆけば久方の月ぞいさよふ志賀のうら浪　光俊朝臣

○題不レ知

一字抄
郭公いかできかましおとは山すそ野の里にやどらざりせば　藤原盛房

○をしほ(小鹽、山城又近江)、建長八年百首歌合

しぐるれど青ばやかはる水鳥のをしほの山の峯の松が枝　從二位行家卿

○家集

小鹽山ふもとの霧のたえまよりよどの河瀨の舟わたるみゆ　光俊朝臣

○洞院攝政家百首、祝

君が代はをしほの山の榊葉のはるさす枝のときはかきはに　同

○題不レ知

宮木引くをしほの山は昔より君がためとや神も定めし　讀人しらず

○寛喜元年女御入内御屏風、山家松蟲多

ゆくすゑもちゞの秋とやをしほ山をのへの里の松蟲のこゑ　民部卿爲家

兼作抄

小倉山花も紅葉もうゑおきていかなる神のつくりそめけむ　光俊朝臣

○大宮太政大臣家歌合

霧はれぬ小倉の山のたかねよりこゑばかりして鴈わたるなり　讀人しらず

○をぐら山（小倉、山城又近江或土佐）、建長七年顯朝家千首歌

小倉山かくれなき夜の月かげにあかしの濱を思ひこそやれ　兼明のみこ

○題不レ知

祈りこししるしあらせば男山岩根も松のおふるためしに　從二位範宗卿

○をとこ山（山城）、石淸水歌合

數ならでわが身はふりぬをとこ山おいせぬ色も哀れかけなむ　正三位知家卿

○同

男山峯の櫻にもろびとのかざしの花をたぐへてぞみる　源兼昌

○永久四年百首、石淸水臨時祭

をぐら家集

男山峯のもみぢ葉散りにしを手折りてぞみる（をりてぞ見ゆる家集）しきにしければ　興風

○家集、屏風

こゝにては雲ゐにみえてをとこ山あまの河こそ麓なりけれ　前大僧正隆辨

此の歌は文永八年熊野にまうで侍りけるにあまの川のほとりをとほり侍るとて男山はるかにみえて侍りければよめると云々

○おとくれ（つイ）山（上總）、永萬二年五月經盛卿家歌合、郭公

時鳥尋ねきたれば今こそはおと（づイ）くれ山のかひになくなれ　賀茂重保

○永久三年十二月太神宮禰宜歌合郭公

きたりとやおとくれ（つイ）山の時鳥語らふこゑはう（よイ）はのそらにて　讀人しらず

○長歌

萬三

こもりくの　泊瀨の山の　青機の　忍坂山は　はしりいでの　同

○おとたか山（晋高、近江）、天仁大嘗會

續千神祇

よばふなる音たか山の榊ばのこゑもかはらぬ君が御代かな　前中納言匡房卿

風雅
吹く風は枝もならさで萬代とよばふこゑのみおとたかの山　皇太后宮大夫俊成卿

夕すゞみわが袖かへるあまをぶねをすての山の眞木の下風　従二位家隆卿

佐良科やをばすて山の柴の戸にしばしも秋の月はくもらず　信實朝臣

いつしかとめづらしきかなをの山の松のうは葉にふれる初雪　源義家朝臣

春くれば花ちる里となりにけり秋風なれしをの山のいほ　俊成卿女

夕霧にあさのさ衣そぼちつゝ冬木こりおく小野の杣人　大納言師俊卿

降る雪に嶺のしらかし枝たれて雫にまがふ小野のやま里　源有房朝臣

松やあらぬ風や昔の風ならむいづれの秋かおとなしの山　鴨長明

此の歌伊勢人くだりにけるに二見にいりて南のかたにおとなしといふ山に松風のひゞきわたるをききてよめると云々

六二一
陸奥のあふくま河のあなたにや人わすれずの山はさかしき　讀人しらず

萬三
我が大君天しらさむと思はずばおほにぞみけるわつか杣山　中納言家持卿

いと深き雲の波かなおほふねのわたりの山の花のさかりは　權僧正公朝

春日野の若草山にたつきじのけさの羽音にめをさましぬる　好忠

かけまくもかけてぞたのむ木綿だすき神路の山のゆく末の寺　慈鎭和尚

神路山いかにしぐれのふればかはたのみし杉の色かはるらむ　後鳥羽院御製

○大嘗會悠紀方御屏風、辰日退出音聲
○をすての山(小篠山、紀伊)、西園寺入道太政大臣家三十首
○をばすて山(信濃)、光臺院入道二品親王家五十首、山家
○をの山(山城)、文永元年十月内大臣家歌合、初雪
○建仁二年五十首歌、田家花
○家集
○久安五年七月歌合、山路雪
○おとなしの山(紀伊又陸奥)
○わすれずの山(陸奥)、題不知
○わつかそま山(和京香蘇郷、大和)
○わたりの山(渡、石見)、七百首歌
○わか草山(若草、大和)、三百六十首中
○神路の山(伊勢)、天王寺百首御歌
○太神宮御歌

我が君をいのるにつけて神路山千代まつむしの聲ぞきこゆる　民部卿爲家
○文應元年七社百首

すゞか河ふりさけみればかみぢ山榊葉わけていづる月影　前中納言定家卿
○建保三年名所百首

春日山たかねにたてる松がねのおひくる春は神やしるらむ　大納言經信卿
○かすが山(大和)、松契多春

かすが山岩ねのすゞをふく風の音も涼しき秋はきにけり　從二位家隆卿
○家集、秋歌中

ちりまがふ春日の山のやま櫻ひかりにきえぬ雪と見えつゝ　讀人しらず
○延喜二十二年三月京極御息所歌合

萬十二
神山のやましたとよみゆく水のみをしたえずば後もわがつま　同
○かみ山(山城近江又備中丹波)、題不知

神やまのさか木のしるしさしそへよ平野の松に千代はまつ風　清輔朝臣
○永萬二年五月經盛卿家歌合、祝

神山にしげる榊や君が代のときはかきはのためしなるらむ　前參議經盛卿
○同

かみやまのおろす嵐に雲はれてにほてりまさる秋のよの月　民部卿爲家
○嘉祿元年百首、秋十首

神山の柏のくぼてさしながらおひなほる身のさかゆべきかな　相摸
○家集

かみやまの峯の瀧津せ清ければみたらしがはの底もすみけり　寂超法師
○貴布禰御社歌合

新後拾賀
神山の麓をとむるみたらしの岩うつ浪やよろづよのかず　前中納言匡房卿
○堀川院御時百首

古をみずやありけむ神山の行くさきとほき千代のかぎりは　兼盛
○家集

おしなべてゆふとぞみゆる神山のまさか木の枝にふれる白雪　賀茂成助
○冬歌中

かも山の谷の御手洗結ぶまに水はくむまでみゆるかげかな　賀茂重保
○かも山(賀茂、山城)、貴布禰社歌合

天くだる神のかこやま今しもぞ君がためにとみるもかしこき　民部卿爲家
○かこ山(大和)、寛元元年結縁經百首

續千夏 五月雨は天のかぐ山空とぢて雲ぞかゝれる峯のまさか木　前中納言定家卿
○建保三年名所百首

新古夏 春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかぐ山　持統天皇御製
○題不レ知

霞より立ちこそまされ久方の雲のうへなるあまのかぐやま　讀人しらず
○天暦四年正月庚甲一品宮歌合

家 かぐ山の五百津眞榊末葉までときはかきはにいはひおきてき　清輔朝臣
○家集

此の歌は山階寺に萬僧供養して御卷數奉りける臺のおほひにおしてにてかくべき歌とてこひければ天暦帝の四十賀の時彼の寺の御卷數の臺にかきける歌は平兼盛なむよめりける例をおもひてよめると云々

○長歌

萬三 おもりつく　あまのかぐ山　霞たち　春にいたれば　まつかぜに　池浪たちて　さくらばな　此のくれしげに　おきべには　かもめよばひて　へつかたに　あぢむらさわぎ　百敷の　おほ宮人の　たちいでて　あそぶ舟には　かぢさをも　なくてさびしも　こぐ人なしに　人丸

○かたをか山(大和)、文治六年五社百首

白妙の手向のゆふにまがふかなかたをか山の峯のむらぎえ　皇太后宮大夫俊成卿
○御集

新深窓 道のべのかたをか山のむめの花立ちよるばかり春風ぞふく　常磐井入道太政大臣
○六帖題

露繁きかた岡山のくさがくれあはれおやなし撫子の花　權僧正公朝
○かめ山(山城)、家集

萬代 かめやまの上の冬草やくならしおほゐの方に煙たつみゆ　大江嘉言

○弘長元年百首

龜のをの山の岩ねの宮つくり動きなきよのためしなるべし　民部卿爲家

○家集

萬代のためしにひかむかめ山のすその原に繁るこまつを　西行上人

○喜多院入道二品親王家五十首、祝

かめやまの岩ねに通ふひろさはの流れはたえし萬代までに　覺延法師

○家集

良玉　龜山にとるさか木葉の常磐にとさしても君を祈りつるかな　大納言經信卿

○家集、大嘗會を

榊葉の色もかはらぬかめ山にときはのかげと茂るべきかな　元輔

○延長二年左大臣家屛風

家六四　龜山のかふをうつ（つくイ）してゆく水にこぎくる舟は幾代へぬらむ　貫之

波の上にあふこと難き龜山のうき木をただにつくすべしやは　前大納言公任卿

此の歌はためもとしほか新ぼちまゐりあひてかくなともいはで又の日つかはしけると云々

○家集、詞略之

紅葉ばのちるもをしまじ龜山のかふを盡してなりもこそすれ　和泉式部

○家集、松を

新續古賀　おほゐ河久しきことは影うつす龜のを山の松ぞしるらむ　大納言經信卿

○家集、雪十首歌

龜山にふりつゝ雪の下きえてきよたき川の水まさるらし　權大納言實家卿

○關白家歌合

龜山の岩がき沼にゐるたづは久しき御代のしるしなりけり　俊頼朝臣

○かづらき山（大和）、題不知

萬十一　拾戀三　青柳のかづらき山にたつ雲のたちてもゐても妹をしぞ思ふ　讀人しらず

○百首御歌

かづらきやとやまはかすむ山のはにまだゆき白しはるの曙　慈鎮和尚

○深山花

明玉　と山まで雲こそかゝれかづらきやたかまの櫻いまさきぬらし　前大納言伊平卿

○建保三年名所百首

春霞かさなる雲やかづらきの山のたかねの櫻なるらむ　従二位家隆卿

をとめ子が葛城山のさくら花霞にもれしおもかげぞたつ　正三位知家卿

○かざしの山（國未ㇾ勘）、春歌中

萬代 春の日のかざしの山の櫻花ちりかふことぞ面影にたつ　橘俊綱朝臣

○かざこしの山（信濃）、千五百番歌合

梅の花遠のふもとに咲きにけりにほふにしるし風こしの山　野宮左大臣

○北野社百首御歌

吹きみだるかざこし山の櫻花ふもとの雲に色やまがはむ　後鳥羽院御製

○かさぎの山（笠置、山城）、建仁元年五十首、古寺花

ちらすなよかさぎの山の櫻花おほふばかりの袖ならずとも　前中納言定家卿

○建保三年内大臣家百首

わび人の涙の雨はあらじかしかさぎの山の法の朝日は　従二位家隆卿

○かまくら山（相模）、題不ㇾ知

萬十四 薪こる鎌倉山のこたる木のまつと汝がいはば戀ひつゝやあらむ　人丸

○家集

忘草かりつむばかりになりにけりあともとゞめぬ鎌倉の山　前大納言公任卿

此の歌ばあひしれる人もすまで草おひしげりある中にこれなむ忘草と
いひしかばよめると云々

○かたのの山（河内）、題不ㇾ知

六二 かうちのやかたのの山のかたきし（しき六）に雪か花かと浪ぞよせける　讀人しらず

○かたびら山（美濃明玉 信濃イ）

小夜更けてかたびら山の時鳥ひとりねざめの友となるらむ　二條太皇大后宮肥後

○かせの山（鹿背、山城）、題不ㇾ知

萬六 かせのやま木立をしげみ朝さらず來なきとよます鶯の聲　田邊福丸

同 少女子がうみをかくてふかせの山時のゆければ都となりぬ

○最勝四天王院名所御障子

泉河かは浪白くふく風にゆふべ涼しきかせの山まつ　後鳥羽院御製

○長歌

萬六　河次の　立ち合ふ里と　山城の　かせ山のまに（山ぎはイ）　宮柱　太しきたてて　讀人しらず

○かくれの山（陸、伊勢）、題不ㇾ知

萬一　我が背子はいづちゆくらむ沖つ藻のかくれの山をけふかこゆらむ　同

○かた山（金、山城又陸奥）、同

萬十　かな山のしたひが下に啼く鳥のこゑだにきかば何かなげかむ　人　丸

○家集

かな山にかたくねさせる常磐木の數におひますくきのとみ草　祭主輔親

○かなひの山（丹波）、永保元年大嘗會主基方御屏風

祈る事かなひの山のさねかづらくれともつきぬ四方の山かな　前中納言匡房卿

○かさめ山（笠目、備中）、正應大嘗會

あめが下かさめの山の草木まで春のめぐみに露ぞあまねき　大藏卿隆博

○かさとり山（信濃、山城）、寶治元年百首

たよりあらば一むら雨に立ちよらむかさとり山の峯の松風　冷泉太政大臣

○題不知

六一　雨はふる道はまどひぬ山しなのかさとり山はいづれなるらむ　讀人しらず

○家集

まさきわるひだのたくみや出でぬらむ村雨はれぬ笠取の山　西行上人

○かさぬひの山（美濃）、あづまへくだりけるに

十六夜日記　旅人はみのうちはらひ夕ぐれ（ふ日記）の雨に宿かるかさぬひのやま（里日記）　安嘉門院四條

此の歌路次記云關よりかきくらしふりつる雨時雨にすぎてふりくらせばかさぬひのうまやといふところに暮れはてれど泊ると云々

○かゞみ山（近江又山城或豐前）、豐前國より京にのぼりて作る歌

萬三　あづさ弓ひきとよ國の鏡山みずひさならばこひしけむかも　讀人しらず

○同國鏡山にて作る歌

萬三　大君のむつたまあへやとよ國の鏡の山をみやと定むる　平持女王

○家集、雜歌中

くしげなるかゞみの山をこえゆけばわれは戀しき妹が姿か　中納言家持卿

○天延元年内裏屏風
冬さむみ谷のこほりの結ぶには鏡の山ぞいとゞさやけき　元輔

○家集
流れゆく水さへすめる鏡山名にはたがはぬところなりけり　能宣朝臣

○永仁大嘗會
神代よりくもらぬやたの鏡山ねごしのさか木色もかはらず　前中納言俊光卿

○雪を
現存六
雪ふればしらぬおきなのかゞみ山松もさながら面がはりせり　正三位知家卿

○百首御歌
玉くしげ鏡の山にふる雪はたれとしつもる影をとめけむ　衣笠内大臣

○大嘗會御屏風
玉かづらきよく見せむと鏡山豐のあかりの月もくもらず　前中納言定家卿（光俊馬房歟）

○建保三年名所百首
近江なるかゞみの山の玉かづら春をかけてもちよは曇らじ　從二位家隆卿

○御集
水海におのれがみるか鏡山やまの姿も雪ふりにけり　正三位忠定卿

○千題三十首に雪
かさゝぎのかゞみの山の夏の月さしいづるより影もくもらず　慈鎭和尚

○毎日一首中
鏡山初雪ふれりいつしかもおいそのもりのかげぞ悲しき　權僧正公朝

○長歌
あまつたび向ふ朝日のかゞみ山たま〳〵はるゝ光をぞみる　民部卿爲家

○かみをかの山（神岡、紀伊）、題不知
やすみしる　我がおほ君の　かしこくや　御墓つくれる　山しなの　かゞみの山に　よるはも　額田王

○かみむら山（神村、備中）、保安四年大嘗會主基方御屏風
萬九
をの山にもみぢつねして神岡の山の紅葉ばけふやちるらむ　讀人しらず

○正應大嘗會
萬代
千はや振るかみむら山のしひ柴のいや年のはに祈りまつらむ　藤原行盛朝臣

萬代
萬代をさしてぞ祈る千はやふるかみむら山の峯のまさか木　同　大藏卿隆信歟

○かみなび山（神南備、大和又丹波）、御集
木枯もしぐれもしらじいほえさすかみなび山のときは木の影　光明峯寺入道前攝政

○文永五年中務卿親王家歌合
ならの葉にゆふとりかけて千早ふるかみなび山につもる白雪　従二位行家卿

○題不レ知
萬十二
ひとりのみ見ればこひしも神なびの山の紅葉を手折りこむ君　讀人しらず

萬十
旅にしてつまこひすらし郭公かみなび山にさよふけてなく　同

萬十
かみなびの山したとよみゆく水に蛙鳴くなり秋といはむとや　同

○百首御歌
みむろ木のかみなび山のもゝはよりしげき思ひぞ色に出でぬる　土御門院御製

○長歌
萬三
となみはる　さかたを過ぎて　石ばしる　神なび山に　あさ　讀人しらず
みやに　つかへまつりて

○かやの山（可也能、筑前）、題不レ知
萬十五
草枕旅をくるしみこひをればかやの山べにさをしかなくも　讀人しらず

○後九條内大臣歌合
しだをれのかやの山べに鳴く鹿のさこそ亂れて妻をこふらめ　正三位知家卿

○かまどの山（周防又筑前或美濃）題不レ知
懷中
みのの國かまどの山の日くるれば煙たえせぬなげきをぞする　讀人しらず

○ひざくら
現存六
散る度にもえこがれてもをしけきはかまど山なるひ櫻の花　同

○題不レ知
六二
都より西にありてふかまど山煙たえせぬ戀もするかな　同

○吉野の宮に御ゆきの時
萬一　新勅旅
みよし野の山下風の寒けくにはたやこよひもわがひとりねむ　持統天皇御製

○題不レ知
萬三
山ぎはにいつものこらば霧なれや吉野の山の峯にたなびく　人丸

○長歌
みよしのの　槇たつ山に　みどりなる　山すげのねの　ねん　讀人しらず

ごろに　我が思ふ君は

外山なるまさきのかづら色づけば吉野の冬の奥ぞしらるゝ　皇太后宮大夫俊成卿

みよし野のさやまを花やへだつらむ雲に松ふく風のおとかな　嘉陽門院越前

みよし野の外山の花は散りにけり奥の木ずゑやさかりなるらむ　慈鎮和尚

よしの山花の梢に風ふけばほそ谷がはに雪ぞながるゝ　西念法師

新深窓 新千雑上 みよし野のはなともいはじ朝ぼらけ嶺たつ杣山イの横雲の空　前大納言忠良卿

はやすぎよ人の心もよこた山綠のはやしかげにかくれて　鴨長明

春霞たちわたるなりはしだてや松原ごしのよさのおほ山　光俊朝臣

萬十四 待つ人はゆきとまりつゝあぢきなく年のみこゆる余作の大山　和泉式部

新六二 妹をこそあひみに來しかまよひきの横山へろのしたなすもへば　人丸

萬一 何としていかにやけばかいづみなる横山すみの白くみゆらむ　光俊朝臣

海底の沖つ白波たつた山いつかこえなむいもがあたりみむ　讀人しらず

萬七 朝霞やまずたなびくたつた山舟出せむ日はわれこひむかも　同

萬十三 白雲の　立田の山の　瀧上の　小倉の峯に　開けたる　櫻の花　同

新後拾旅 朝まだきわがうちこゆる立田山深くもみゆる松のみどりか色かな新後拾　人丸

唐衣たつたの山にいぐしたて神さびにけるわれがこひかな　基俊

○正治二年百首

○千五百番歌合

○花月百首御歌

○久安五年七月歌合、山路花

○百首歌

○よこた山、（横田、近江）、家集

○よさのおほ山、（余作之大、丹波）、寶治二年百首

○家集

○よこ山、（和泉或武藏又常陸）、題不ㇾ知

○六帖題

○たつた山（大和）、題不ㇾ知

○長歌

○家集

○保安二年九月内大臣家歌合

○千五百番歌合
龍田山こえし昔の面かげはふもとの里の有明の月　野宮左大臣

○百首御歌
白雲のたつたの櫻さきにけり外山をかけてにほふ春風　後鳥羽院御製

玉雑三
立田山あらしのおともたかやすの里はあれにし寺とこたへよ　阿一上人

此の歌は河内國教典寺にすみ侍るを此のごろすむ所はいづくの程ぞと
尋ぬる人のあるよし申して侍る人の返しによみてつかはしけると云々

○御集夕紅葉を
たつた姫そむる外山の紅葉ばにあかねさしそふ夕日かげかな　入道二品のみ子性助

○たむけ山(大和又近江或相模)、題不知
六四 續千載 貫之集
紅葉をも花をもをしむ心なば手向の山のかみぞしるらし　讀人しらず

○同
萬六 玉旅
ゆふだゝみ手向の山をけふこえて何れの野べにいほりせむこら　坂上郎女

○同
萬十二
よそにのみ君をあひみてゆふだすき手向の山をあすかこえなむ　讀人しらず

○建保三年名所百首
吹く風を神やいさめむ手向山をればかつちる花のにしきに　従三位範重卿

○たまつしま山(玉津島、紀伊又阿波)、題不知
萬六
しほひればたまもかりつゝ神代よりしかぞたふとき玉津島山　赤人

○たか山(高、大和又美濃)
萬十一
たか山にいでくる水の岩にふれ砕けてぞ思ふいもにあはぬよは　同イ 讀人しらず

萬十一
われゆゑにいはれしいもは高山の峯のあさ霧すぎにけむかも　同

○柿本影供百首
五月雨の雨雲つゞくたか山の岩ねしのぎておつるたきつせ　後九條内大臣

○たかまつの山(高松、近江又大和)、だいしらず
里ごとに霜はおくらしたか松の野やまおなじく色づくみれば　讀人しらず

萬十
夕されば衣手さむしたかまつの山の麓に雪ぞふるらし　同

○永仁大嘗會
もろともに千世をならせるためしかな鶴の來やどる高松の山　前中納言俊光卿

○たかつの山(高津、石見)、題不レ知
萬二　拾
いはみのや高津の山の木の間よりわがふる袖を妹見つらむか　人丸

○北野社百首御歌
新續拾秋上
いはみがたたかつのやまに雲はれて袖ふる峯をいづる月影　後鳥羽院御製

○たかまと山(大和)、題不レ知
萬八
春日野に時雨ふるみゆあすよりはもみぢかざさむ高窓の山　八束朝臣

○戀歌中
萬代
たかまどの山の瀧つせ岩こめて聲をききてもぬるゝ袖かな　左京大夫顯輔卿

○建保三年名所百首
たかまどの山の千種の花すゝき秋もするこすこがらしの風　正三位知家卿

○たかまの山(大和)、內大臣家百首
新古今
よそにのみききかなやまむ時鳥たかまの山の峯の遠かた　前中納言定家卿

○同
新拾戀一
葛城や高間の山にさすしめの外にのみやは絕えむと思ひし　從二位家隆卿

○たなかみ山(田上、近江)、曆仁元年百首
朝日影たなかみ山にうつろひてたちものぼらぬうぢの河霧　衣笠內大臣

○題不レ知
萬十二
ゆふだゝみ田上山のまな(さねイ)かづらあるもいにしもあらしめずとも　讀人しらず

○たかしま山(高島、近江)
萬九
旅にあればよなかをさして照る月の高橋山にかくらくをしも　同

○玉ぐしの山、重家卿家五首歌合
たまぐしの山よりいづる月影は光そへばやさやけかるらむ　祝部宿禰成仲

○たまのを山(玉雄、備中、玉小、近江)、家集
桑門
今ぞみるたまのをやまの麓にてくちしかまふの野べの螢は　光俊朝臣

○正安大嘗會
陰しげき玉のをやまの玉つばき八千代のかずは君がためかも　大藏卿隆博

○たまのよこ山、家集
明方のみ空のほかの時鳥玉のよこ山なきてすぐなり　顯仲朝臣

○たかのの山(高野、紀伊)、百首歌
朝日まつたかのの山にいかばかり神なき道をさだめいりけむ　殷富門院大輔

○寛喜三年百首、古寺鶯
○たかゐの山（信濃）
○たまさか山（攝津）、六百番歌合稀戀
○たかきの山（高城、大和）、歌林苑歌合、鶯
○たかを山（高雄、山城）、高山寺にまうづるとて
○文永七年毎日一首中
○たかくら山（高倉、備中又丹波）
○天仁元年大嘗會丹波國御屛風
○たかみくら山（高御倉、近江）、大嘗會御屛風巳日退出音聲
○たまきの山（玉城、大和）、建長八年百首歌合
○たるみの山、建長七年顯朝卿家千首歌
○たちのの山（相模）、題不知懷中
○たかのを山（鷹尾山、近江）、康治元年大嘗會悠紀方御屛風近江國
○正應大嘗會

おのづからおとなふものは白雪のたかのの峯の松のしたをれ　民部卿爲家
そのまゝにやみなばつらし信濃路や高井の山の雲のよそめは　衣笠内大臣
かたらひしわが戀妻やほとゝぎすたまさか山に聲のきこゆる　法橋顯昭
うちなびき春さりくれやみ吉野のたかぎの山に鶯のなく　讀人しらず
玉雜三
たかを山清瀧がはをそこにみて谷かけめぐるまつの下道　權大納言冬基卿
おいの後けふさかこゆるたかを山苦しさいとふ道しるべせよ　民部卿爲家
風賀
君が代は賤のかど田にかる稻も高倉山にみちぬべきかな　前中納言匡房卿

此の歌は永保元年大嘗會御屛風たかくら山のふもとに人の家門田に稻ありと云々

たかくらの山の麓の里なれば積みおくいねのかずもしられず　同
動きなき高みくら山祈りおきつをさめむ御代は神のまに〳〵　皇太后宮大夫俊成卿
里人のつたふいはねの道たえて玉きの山は雪ふりにけり　法印實伊
もえいづる時はきにけり岩そゝぐたるみの山の峯のさわらび　源仲業
相模なるたちのの山のたちまちに君にあはむと思はざりしを　讀人しらず
御狩するたかのを山にたつ雉やきみが千歳の日つぎなるらむ　左京大夫顯輔
ましらふの鷹のを山のあさ狩に霜うちはらふ峯のしひ柴　民部卿資宣

あられふるたかみの山に宮木ひく民よりしけに物をこそ思へ　相摸

狩人のこぬ日ありともたかふちの山の雉子はのどけからじな　同

霧はるゝたかつき山の月影につらもみだれず鴈はきにけり　大藏卿輔博

もみぢするたかはた山を秋ゆけばしたてるばかり錦おりしく　顯仲朝臣

朝な〳〵たつ河霧の寒きかもたかはら山の紅葉そめけむ　人丸

はる〴〵と久しかるべき御代なれば玉松山にちよをこそまて　正家朝臣

萬九 たゆらきの山のをのへの櫻花さかむ春べは君を想はむ　讀人しらず

六二 あふことはとほたうみなる高師山たかしや胸にもゆる思ひは　同

富士のねはこゝを限りのなごりとて高師の山にかへりみるかな　中務卿の御子

高師山はるかにみゆる富士のねを行きながら人に尋ねてぞしる　民部卿爲家

たかし山夕こえはててやすらへば鐘の濱にもしほやくみゆ　同

朝風にみなとをいづるとも舟はたかしの山の紅葉なりけり　西行

風ふけばたかしの山の白浪にひとあたりして誰かこゆらむ　慈鎭和尚

岩づたひ駒うちわたす谷河のおともたかしの山にきにけり　源光行

此の歌路次記云参河遠江のさかひにたかし山ときこゆるあり山中にこえかゝる程に谷河ながれおちて岩せのなみことに〳〵しくきこゆさかひ

○たかみの山(高見、近江又豐前)家集
○たかふち山(大和)
○たかつき山(高月、備中)
○たかはた山(近江)、堀河院御時百首
○たかはら山(大和)、家集
○たままつ山(玉松、近江又丹波)
○たゆらき山(絶等寸、播磨)、題しらず
○たかし山(高士、遠江)
○御集、都に歸りのぼらせ給うけるにたかし山にて
○建長五年毎日一首中、あづまへくだりける道にて
○貞應三年百首
○百首歌
○百首御歌山路
○あづまにくだりける時

河とぞいひけると云々

拾遺員外
れき山の裾野のをだの秋風やなびきし人のはじめなるらむ　前中納言定家卿

とくさかるその原山の木の間よりみがきいでぬる秋のよの月　源　仲正

その原の山をいかでと歎くまに君もわが身もさかりすぎゆく　中納言家持卿

よそにみしその原山のはゝき木もふる白雪に埋もれにけり　琳仁法師

此の歌判者云その原山とよまれたるはききならはぬ心ちする山にても
や侍るらむ不見給事なればしられどもその原やふせ屋とのみぞよみな
らはしたると云々

つくば山しげきまさ木の枝よりもしらぬは人の心なりけり　順徳院御製

あづさ弓つるがの山を春こえてかへりしかりは今ぞなくなる　民部卿爲家

わがおれる錦とやみるから人のつるがの山の嶺の紅葉ば　源　兼昌

夜と共にすむはつまきの山なればなかでや鹿の秋をすぐらむ　後頼朝臣

つるうちの山より出づる月影は弓はりとこそいふべかりけれ　讀人しらず

かぎりなく思ふ心はつげのやま山口をこそたのむべらなれ　同

つきの山くもらぬ影はいつとなく麓の里にすむ人ぞしる　加　賀

久方の月の山べに家ゐしている時もなきかげをみるかな　大　進

○れき山、後京極攝政家にて、置一字十三首歌
○そのはら山(信濃)、保延元年中納言家成卿歌合、月を
○家集、雜歌
○久安五年七月歌合、山路雪
○つくば山(常陸)、御百首
○つるがの山、家集
○永久四年七月忠隆卿家歌合、紅葉
○つまきの山、家集、名所鹿
○つるうちの山(讃岐)、題不知
○つげの山(伊賀)、閨中
○つきの山(出雲)、康平四年祐子内親王家名所歌合、月の山
○同

○つゞきの山（國未勘）、百首

春雨も花のとだえぞ袖にもるさくらつゞきの山の下道　後鳥羽院御製

○建長八年百首歌合

あら磯のつゞきの山は風こえて遠かた人にかくる白浪　後九條内大臣

此の歌判者臣云右歌すがたたけだかく詞きらくしくこそみえ侍れ但つゞきの山を夏のうたの中に侍る歌柴のごとくめづらしきさまにや侍らむ倚木の岡日本紀にみえ侍ればは山と岡とはふるくよめることもまゝ侍ればさもやなどたよりつき侍る程に彼の岡は湖海のあたりとはみえ侍らぬにや今歌只荒磯につゞきたる山より風こえて遠方人に涙なかくろにこそまことに蒼波路遠く思ひやられていとなかしかるべし作者の本意にはそむきて名所などをかやうに申しなし侍らばことにはゞかりおほくみちのためあさく侍るかなと云々

○岡山（攝津）、寶治二年百首

つれてゆくね山もしらぬしら鳥のさきのよもうき身の契りかな　從三位行家卿

○なちの山（那智、紀伊）、同集

又たぐひなちのお山にすむ月の清きひかりに松風ぞふく　後鳥羽院御製

○百首御歌

なちの山雲ゐにみゆる岩ねより千尋にかゝる瀧の白絲　光明峯寺入道攝政

○雜歌中

思ひ出づる袖さへいつもかはらぬはなちのお山のおくの瀧つせ　法印覺寶

○なら山（大和）、題不レ知

萬八 あをによしならの山なる黑木もて作れる宿はをれどあかぬかも　聖武天皇御製

○同

萬四 君にこひいともすべなみなら山のこ松が下に立ちなげきつる　笠女郎

○なみくら山(遠江、近江又相摸)

○なかを山、永保元年大嘗會御屛風、たび人のあまたゆきかふあり

○なが峯山(長楽、近江)、大嘗會悠紀方御屛風

○同

○承保元年大嘗會

○大嘗會悠紀方御屛風、風俗歌

○なか山(中、相摸)、題不レ知

○家集

○なごしの山(山和又土佐)

○なかむら山(近江)、祝歌

○ながらの山(長樂、長柄、近江、攝津上總)、家集

○日吉神社百首

○題不レ知、懷中

○建長八年百首歌合

萬七 さゞなみのなみ倉山に雲ゐれば雨ぞふるてふかへりこわがせ　同歟 讀人しらず

もろ人のさかゆく道はなかを山また行末ぞはるけかりける　前中納言匡房卿

しひ柴のかはらぬ色をたのむかな君がよはひのなが峯の山

君が代はなが峯山にふた葉なる小松のちたびおひかはるまで　左京大夫顯輔卿

槇の葉も苔おふるまでなりにけりいくよかへぬるなが峯の山

よろづ代を祈りぞかくる長峯の山のさか木をさねこじにして　皇太后宮大夫俊成卿

君もこず我もゆかずの中山はなげきのみこそしげるべらなれ　讀人しらず

中山のふるたあらさず今年より我まもりつゝなでておほさむ　相摸

みな月のみそぎが原のかへるさになごしの山の雲ぞ明けゆく　從二位賴氏卿

萬づ代はなかむら山のながらへてつきず運ばむ御調ものかな　源兼隆(澄イ)

玉賀 君が代はながらの山のいはねまつちたび八千度花の咲くまで　左京大夫顯輔卿

思はざりき命ながらの山に又たび〳〵のりの花をみむとは　慈鎭和尙

ながら山いざながらへし流れても程久しくは忘れもぞする　讀人しらず

ふりにける跡こそみれば哀れなれこれもながらの山のかけ橋　法印寬伊

此の歌判者云有歌河陽之橋を引きて湖山の梯にわたされたる心通難及

詞義可規但梯いかなる山に有無さだむべきにあらざれど彼の長等山は

昔仙人住行之靈地也天智天皇伽藍を建立し給ふ崇福寺是也梯ありとい
ふことはみえ侍らず瀧こそ侍るなれと云々

播摩なるながひこ山の霧はれて千とせの春（松イ）をみるが嬉しさ　元　輔

たえはてぬなさけの山に雲きえてはるゝ心や星あひの山　慈鎭和尙

新六一
みわたしのをかのやしほはちりすぎてなが谷山に嵐ふくなり　衣笠内大臣

人の命ながが谷山にほるといはばしぬる所はあらじとぞ思ふ　前大納言公任イ

白雲のちへの衣手たちわかれけふやなぐさの山路こゆらむ

あふことはなぐさの山の時鳥語らひよするかたはいづらは　長覺法師

つねにわが旅ねせしかなおく玉の名を懷しみなでし子の山　能因法師

春の日の光はきはもなけれどもまづ花さくは梅はらの山　皇太后宮大夫俊成卿

あめのしたとしへぬ秋ぞなかりけるむら雲山の神のしるしに　前中納言匡房卿

此の歌永保元年大嘗會主基方御屛風むら雲山に神社又山のふもとに田
ありと云々

萬一　續古旅
うぢま山朝風さむし旅ねして衣かすべき妹もあらなくに　長屋王

君が代は久しかるべきうぢま山の二葉の松のけしきしるしも　讀人しらず

あらしふく昔の庵の跡みえて月のみぞすむうぢの山もと　寂蓮法師

○ながひこの山、家集
○なさけの山（國未勘）、六百番歌合、稀戀
○ながたに山（長谷、山城）、六帖題
○いたうわづらひける頃或人ところを奉りけるを
○なぐさの山（名草、紀伊）、家集
○承安五年三月重家卿家歌合旅歌中
○なでしこの山（陸奧）、家集
○梅はらの山（近江）、大嘗會紀悠方御屛風
○むらくめ山
○うぢま山（宇治間、大和）、國不知
○うぢま山（山城又土佐打）、永久三年五月太神宮祭宣（左歌）、說
○うぢ山の喜撰が跡といふ所にて

○うなかみ山(上野)、永久四年百首
なつぞひくうなかみ山のしひ柴のかし鳥なきつ夕あさりして　俊頼朝臣

○うねびの山(雲飛、近江又大和)家集
春かけて雪はふれども玉だすきうねびの山に鶯ぞなく　權僧正公朝

○うへかた山(宇敝可多、對馬)、仁安三年奈良歌合、判者俊成卿
萬十五
たかしまやうへかた山のもみぢ葉を吹きなちらしそ沖つ汐風　智海法師

○題不知
たかしまのうへかた山は紅のやしほの色になりにけるかな　讀人しらず

○うりふ山(山城又近江)
夕霧はたつをみましやうりふ山こまほしかりし渡りならでは　和泉式部

此の歌は夕暮にちひさきうりを齋院より給はせたるに書き付けてまゐらせけると云々

○うつの山(駿河)、建長五年毎日(一イ)百首中あづまに下りける道にて
又みれば昔にかはるうつの山蔦もかへでもそれとしもなし　民部卿爲家

○旅十五首御歌中
しげりあふつたも楓も跡ぞなきうつの山邊は道細くして　後京極攝政

○一字百首
蔦かへでしげる山ぢのむら時雨たびゆく袖は色うつりけり　前中納言定家卿

○三百六十首歌合
影だにもそはずなるこそ悲しけれ木の下くらきうつの山道　覺盛法師

○建保三年名所百首
宇津の山さこそはかねて聞きしかどかすみをわくる蔦の細道　僧正行意

○羇中歌
露ふかきつたの下道わけこえて岡べにかゝるうつの山もと　法印定圓

○六百番歌合
うつの山夕こえくればみぞれふり袖ほしかねつあはれこの旅　法橋顯昭

○最勝四天王院名所御障子
新千旅
いろ〳〵の木の葉しぐるゝ露分けてうつゝも遠きうつの山道　俊成卿女

○正治二年百首
あらしふく高ねの雲をかたしきてゆめ路も遠し宇津の山ごえ　前大納言忠良卿

○うつの山をこえけるに時雨を
○仙洞千首
○海道名所歌中
○南北百番歌合
○文治六年五社百首
○五十首歌
○うつたの山(打歌、不見)、題しらず
○うぐひすの山、當座會名所歌中
○うらみの山(信濃)
○うたゝね山(國未勘)、家集
○建長八年百首歌合

都にや紅葉散るらし宇津の山たかねの雲にしぐれふるなり　光俊朝臣
都より思ひこそしれかみな月いかにしぐれむうつのなか山　從三位爲實卿
聞きおきし昔には似ぬ宇津の山眞葛や蔦におひかはるらむ　參議爲相卿
此のうた路次記云うつの山をこゆるに蔦はみえず葛のみところ〳〵にしげりてみえ侍れば草木も昔にはおひかはるにやあやしくてと云々
詠めつる空ゆく月の行すゑに思ひもいでようつの山ごえ　慈鎭和尚
玉旅 夢路にはなれしやとみゆうつゝには宇津の山べの蔦ふける庵　皇太后宮大夫俊成卿
新續古旅 宇津の山月だにもらぬ蔦の庵に夢路たえたる松風ぞふく　從二位家隆卿
萬二 いはみの海うつたの山の木の間より我ふる袖をいも見つらむか　人丸
現存六 澄む月のひかりをよするうら浪のうつたの山は嵐ふくらし　隆祐朝臣
雲のいは谷の心もゆふべとて歸るやよひのうぐひすの山　從三位爲實卿
たづねばや心のすゑはしらずとも人をうらみの山の通ひぢ　同
夏衣うたゝね山のほとゝぎす今はき(來)ときに立ちかへりなく　中納言家持卿
夜の程にはやふきたちぬ夏衣うたゝね山の秋の初風　法印實伊
此の歌判者云うたゝね山定作者有存知歟かやうのめづらしき名所を自歌のかざりとおほく體成歟これ又時につけたるひとつのすがたなれば

○うらごの山（信濃）、弘安元年百首
○紅葉歌中
○うらのの山（信濃）、題不レ知
○うすひの山（宇須比、上野）、上野國歌
○うきしま山、いけのうら
井十山とも
○井なの山（攝津）、猶しばしまてなどかけりける人のがりつかはしける
○題不レ知
○ゐでの山（山城）、三百六十首中

雖にあらずと云々

わきてをる人のためとや白雪のうらごの山にさける梅が枝　後九條内大臣

たちぬはぬ錦とぞみる唐衣うらごの山の秋の紅葉ば　後一條入道關白

萬十四 かのころとねずやなりけむはた薄うら野の山につくかたよかも　讀人しらず

同 日のくれに碓氷の山を越ゆる日はせなの眞袖もさやにふらしつ　同

まつに吹く伊氣（かけ）の浦風わたるらし波にたゞよふうき島の山　同

此の歌有長明伊勢記詞云二見のおとなしの山に人々のぼりて遙か海山をみる東には參河遠江駿河などをみこして富士の山ほのかにみゆ艮にあたりて甲斐のしられ信濃のみさかあり北に美濃をはりの山どもの上より加賀の白山みゆ乾にたどの山すゞかのみつうへや西に布引の山あさか山又伊賀のくにの山どももその名もしらず南はあさま山しまくにの方也あさま河をへだててひゐかはのよこれといふ山の西のはなにかゞみのみやおはしますうみ山もはるかに見えわたりてなむあると云々

ねらひするゐなの柴山吹雪してたへて待つべき心ちこそせね　俊頼朝臣

萬十一 しなが鳥ゐなな山とよみ行く水の名にのみよせし隱れ妻はも　讀人しらず

ゐでの山餘所ながらにもみるべきを立ちな隔てそ峯の白雲　好忠

雲葉
あまの河ゐぜきの山のたかねより月の御船の影ぞさしこす　光俊朝臣

萬代　新續古旅
流れいづる涙ばかりを先立てゝゐぜきの山をけふこゆるかな　道命法師

萬四
とにかくに人はいへどもわがさちの後瀬の山の後もあはむ我　讀人しらず

六二
若狭なる後瀬の山の後もあはむ我が思ふ人にけふならずとも　同

やどれ月衣手おもし草枕たつやのちせの山の雫に　前中納言定家卿

ともするのちせの山のさ月やみおのれ火串のむくい悲しも　鴨長明

現存六
又もこむはゐをぞ契る若狭ぢや後瀬の山のふぢの下影　祝部成茂

萬十一
紐鏡のどかの山もたがゆゑか君きませると紐とかずねむ　讀人しらず

萬十七
鳥總立て船木伐ると云ふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代かみびぞ　同

現存六
浪間よりけさこそみつれとぶさたつ舟木きるてふのとの島山　衣笠内大臣

後拾賀
姫こ松おほ原山のたねなればちとせをたゞにまかせてをみむ　元輔

桑門
夜もすがらかはを時雨のそめつらむ大原山の峯のしひ柴　櫻非尼

有明もあきぞなごりの大原や月をおぼろの山のはの空　參議雅經卿

實方集　新續古春下
きゞすなくおぼろの山の櫻花かりにはあらでしばしみしかな　實方朝臣

いかばかり涙の時雨色なればなげ木おほしの山をそむらむ　俊頼朝臣

萬代とおほとみやまぞよばふなる久しく君をさかゆべしとは　左京大夫顯輔卿

○ゐせきの山（河内）、百首歌

○ゐせきの山をこゆとて

○のちせの山（後瀬、若狭）、題不知

○九月十三夜内裏御會

○家集

○山

○のどかの山（能登香、國未勘）、題不知

○のとしま山（能登）

○山

○おほはら山（山城）、家集、御時君子むまれて侍る七日の夜

○時雨を

○おぼろの山（山城）、千五百番歌合

○大原野の櫻をみて

○おほしの山（多師、近江）

○おほとみ山（大富、遠江）

○おほえ山（大江、丹波）、喜多院入道二品親王家五十首
君が代にあふうれしさは大江山ますゐの水のたえじとぞ思ふ　法橋顕昭

○おほきの山（大樹、筑前）
萬八 今もかもおほきの山の時鳥鳴きとよむらむわれなけれども　坂上郎女

○おほたき山（近江）、大嘗會悠紀方御屏風
布さらす麓の里のかずそひてうの花さけるおほたきの山　皇太后宮大夫俊成卿

○おほくら山（大藏、近江）、山脇民家多稲積所
數しらず秋のかりほをつみてこそおほ倉山の名にはおひけれ　同

○おほは山（大葉、紀伊）、題不知
萬七 おほは山霞たなびきさよ更けてわが船はてむ泊りしらずも　讀人しらず

○おほの山（大野、大和）、家集
現存六 大野やま麓のうらは霧はれておきその風は月ぞさやけさ　信實朝臣

○題不知
萬五 おほの山きりたちわたるわがなげくおきその風に霧立ち渡る　山上憶良

○おきつしま山（近江）、同
萬十一 あふみの海沖つ島山おきまけてわが思ふ妹がことのしげけむ　同

○おも影山（因幡）、同
六五 六四 わがせこが面影山のさかさまに我のみこひてあはぬねたしも　坂上郎女

○同、家集
いなばよと問はましものを戀ひ忍び忘られがたき面影の山　祐擧

○永久四年七月忠隆家歌合
澄みのぼるおもかげ山の月みれば心も空にうつりぬるかな　藤原爲忠朝臣

○くらゐ山（信濃、又美濃）、建長八年百首
くらゐ山たかねも今は近づきぬ道ある御代にまよはずもがな　從一位良教卿

○正應大嘗會
すべらぎのくらゐの山の玉日かげ雲居にかへるけふの宮人　大藏卿隆博

○祝歌中
扶桑 くらゐ山いはねにおふる玉椿八千代のかげは君のみぞみむ　讀人しらず

○家集
のぼりゆけくらゐの山の嶺までに岩ねにおふる松も見がてら　元輔

○同
賤のをになびきながらも身にぞしむくらゐの山の峯の松風　相摸

○匡房卿中納言になりてけるとき母のもとよりつかはしける

くらゐ山木末に高くのぼるとも老そのもりを思ひわするな　読人しらず

○かへし

位山まつは木だかくなりぬともおいその杜をいかに忘れむ　前中納言匡房卿

○天仁二年顯季卿家歌合、祝

位山おひいづる松のよはひをも雲居はるかに君のみぞみむ　藤原隆重

○保延元年家成卿家歌合、祝

くらゐやまおひそふ松の年をへてたえずも君が榮ゆべきかな　藤原忠衆

○家集

くらゐ山久しき松の陰にゐてたのむ身さへも年をふるかな　俊頼朝臣

此の歌は堀河院御時所衆とも歌よみけるにゆき遠にかはりて松のちぎり久しといふ事をよみけると云々

○くさかの山（攝津又河内）、題不ㇾ知

萬八 續古旅　おしてるや難波をすぎて打ち靡くくさかの山を暮にわがゆく　読人しらず

○くろかみ山（備中又下野）

萬七　うば玉の黒かみ山のやま草の小雨ふりしきます〱か思ふ　同

○老人見ㇾ花と云ふことを

なが〱ちりなむことを君も思へ黒髪山に花さきにけり　西行上人

○くらぶ山（鞍部、山城或伊賀又近江）、天德三年二月内裏歌合、霞

春がすみたちやこめつるくらぶ山おとはの山に雪も見えねば　元眞

○家集

墨染のくらぶの山の深ければ鳥のあとさへみえずもあるかな　藤原義孝

○名所歌中

くらぶ山はるさへ梅の匂ひにはよるみるあきの花もなきかな　読人しらず

○くらま山（山城）、家集

鞍馬山くらくみゆれど時鳥かたらふ聲をわれ（そイ）としらずや　清正

○題不ㇾ知

採姫式 袖中抄　感ありて人のまうづる鞍馬山行ふのりははかなかりけり　読人しらず

○くらはし山（椋橋、大和）、家集

白雲のたなびきわたるくらはしの山のまつとも君はしらずや　貫之

○くさつきの山、家集
○くまの山（紀伊）、後鳥羽院南山に幸の時
○百首御歌
○くま山（山紀伊）
○くりこま山（山城又陸奥）、題不レ知
○屏風、くりこま山なる人の家に女ども紅葉みたる所
○題不レ知（懷中）
○くちみ山（朽網、豐前）、家集
○くちなし山　大和又讃岐）、題不レ知（懷中）
○くちきの山（朽木、近江）、永久四年百首長歌
○やののかみ山（矢野神、伊豫又對馬）、題不レ知
○やまとしま山、建保四年百首
○やはた山（山城）、正治二年百首
○建所十首歌合、郭公

子規なく初聲はわれきかむくさつきの山さやぬきいでむ　赤人
熊野やま雪吹きおろす春風を花かとみてやうぐひすのなく　大藏卿有家
千歳ふる松のみ茂くみゆるかなたのむみくまの山のかひには　後鳥羽院御製
麓ゆくふな人いかにさむからむくま山たけをおろす嵐に　同
六二 大和物語 くり駒の山に朝たつきじよりもわれをばかりに思ひけるかな　讀人しらず
紅葉せるくり駒山のゆふかげをいざわが宿に移しもたらむ　能宣朝臣
六六 くり駒の松にはいとゞとしふれどことなし草ぞおひそめにける　讀人しらず
いかでわれくり駒山のもみぢ葉を秋はつとも色かへてみむ
くちみ山くちたてりとや思ふらむしられぬ谷の松のふるえを　俊頼朝臣
やまとなるくちなし山の杣人はいはでぞ思ふ心ひとつに　讀人しらず
たゞ大空を　あふぎつゝ　身をしる雨に　おほはれて　朽木の山の　杣人に　なり行く身をも　いかゞせむ　仲實朝臣
萬十 つまかくすやののかみ山露霜に匂ひそめたりちらまくをしも　人麿
ほのぼのとあかしのとより見わたせば大和島山霞たなびく　光明峯寺入道攝政
萬代に千世を重ねてやはた山君をまもらむ名にこそありけれ　皇太后宮大夫俊成卿
萬代三 やはた山むかひの里の時鳥忍びしかたの聲もきこえず　從二位家隆卿

○やつり山（矢釣、大和）、題不知
矢釣山木立もみえず散り紛ふ雪もはだらにまひでくらくも　讀人しらず

○やかみの山（屋上、石見）、長歌
萬二 妻こむる　屋上の山の　雲間より　渡らふ月の　惜しめども　人丸

○まきむく山（巻向、大和）、題不知
萬七 拾雑上 なる神の音にのみきくまきもくの檜原の山をけふみつるかな　同

○同
萬十 こらがてをまきもく山に春されば木の葉しのぎて霞たなびく　讀人しらず

萬十 妹が袖まきもく山の朝霧に匂ふ紅葉のちらまくをしも　同

○まつら山（松浦、備中又肥前）
長勝四天王院名所御障子
まてしばし太山おろしもしぐるなりまつらの浦をいづる舟人　従二位家隆卿

○同
まつら山霜雪むすぶ鹽風にからくにさへや月のすむらむ　具親朝臣

○建保三年名所百首、松浦
たのめてもまた遠うみにまつら山秋もやきなむ天の川なみ　従二位家隆卿

○同
くる秋をそなたの浪にまつら山松に涼しき風もふかなむ　兵衛内侍

○題不知
萬五 音にきき目にはまだみぬさよ姫のひれふりきてふ君まつら山　三島王

○まつち山（忽打、亦イ 大和又駿河）
萬三 新勅旅 まつち山夕こえゆきて庵崎のすみだがはらに一人かもねむ　辨基法師

○同
萬九 朝もよいきへゆく君がまつち山こゆらむけふぞ雨なふりそね　讀人しらず

○奈良花林院歌合、祝
君が代をまつちの山の小松原ちへのけしきを見るぞうれしき　權僧正永縁

○山どり
六二 夕されば君をまつちの山鳥のなく〳〵ぬるをたちもきかなむ　讀人しらず

○久安百首
わぎもこが衣かたしき待乳山すそ野を早くあゆめくろ駒　郁芳門院安藝

○まちかね山（攝津）、家集
夜もすがらたまりてつもる涙かなこやまちかねの山川の水　俊頼朝臣

こぬ人をまちかね山の時鳥かたぶく月の影になくなり　後鳥羽院御製
○北野百首御歌

しらじかしさよふくるまで津の國の待兼山は今ぞこえゆく　法性寺入道關白
○御集、隔レ山戀

嵐ふくまきのを山の松かげにたえずやころもうぢの里人　權中納言國通卿
○まきのを山(槇尾山、山城)、建仁三年七月八幡若宮歌合、山家松

いとひても猶ふる里を思ふかな槇のを山のゆふぎりの空　從二位家隆卿
○正治二年百首

暮れかゝる月のかつらははれにけり松のをやまの夕立の雲　民部卿爲家
○まつのを山(山城)、山階入道左大臣家百首、夕立

白浪のまがきの山に立ちよればあまこそたれとつひにたえぬれ　重之
○まがきの山(名所不審可勘之)、家集

宿りしてあすも又みむ夕霧のまがきの山は色づきにけり　光俊朝臣
○建長二年詩歌合

菊のうへの露ふく風はやすらひてまがきの山をのぼる月かげ　從三位爲家(賢イ)
○九十九首菊歌合

ひきつれてまとゐせむとや思ふどち春はま弓の山に入るらむ　祐子内親王家紀伊
○まゆみの山(下野)、堀川院御時百首

まさき山柾木のかづら紅葉してしぐれも時をたがへざりけり　前中納言資實卿
○まさきの山(眞佐木、備中)、建久九年大嘗會悠中

時雨れつる正木の山のそがひよりみゆる紅葉の色のてこらさ　大藏卿隆博
○正應大嘗會

色かへずみゆるさぬきのまつ山も春は緑の深さまされり　好忠
○まつ山(松、備中又讃岐)、家集

妹が袖まきての山をくれなゐにちしほふりいで雨やそむらむ　權中納言長方イ
○まきての山、紅葉

六二一
世の中をなげ木にくゆる煙山はれぬ思ひを何にそめけむ　讀人しらず
○けぶり山、題不レ知

萬十四
天の原富士の柴山このくれの時ゆづりなばあはずかもあらむ　同
○ふじの山(駿河)、するがの國歌

きえがてのふじのは山の峯の雪時ゆづるとや霞るらむ　從二位家隆卿
○建保三年名所百首

○家集
富士のねや外山も今はかきくらし天ぎる雪のふらぬ日はなし　同

○正治二年百首御歌
萬三 ふじの山きゆればやがてふる雪のひとひも夏になる空ぞなき　後京極攝政

○詠不盡山
萬三 富士のねにふりおく雪は六月の望にけぬればその夜ふりけり　蟲丸

○長歌
なまよみの　かひのくには　うちよする　するがのくにと　をちこちの　くにのみなかに　いでたてる　富士のたかねは　あま雲も　いゆきはゞかり　とぶとりも　飛びものぼらず　もゆるひを　雪もてけしつ　ふる雪を　ひもてけしつゝ　いひもせず

○三百六十首中
こゝら高きかふひ（甲斐）駿河の中に出でて四方にみえたる山はふじのね　光俊朝臣

○旅心を
玉旅 めにかけていくかになりぬ東路やみ國をさかふ富士のしば山　前大僧正隆辨

○建長五年毎日一首中あづまに下りける道にて
浪の音に富士山颪吹きさえてこよひはいたくねて明かしつる　民部卿爲家

○ふたい山（布賞、山城或大和）
題不レ知
萬六 ふたい山やまなみみればもゝよにも變るべからぬ大宮どころ　讀人しらず

○山
現存六 いづみ河今こほるらしふたい山やまなみみれば雪白くして　洞院攝政

○ふたかみ山（二上、大和又備中）
長永三年九月顯師卿家歌合、紅葉
時雨ふるふたかみ山をみ渡せば梢もあけにそめてけるかな　大藏卿行家（宗歟）

○天喜元年八月賴家朝臣家越中國名所歌合、二神山
君が代はふたかみ山の峯におふる絲の松のおひかはるまで　讀人しらず

○題不レ知
萬十七 玉くしげふたかみ山に鳴く鳥の聲のこひ（ほイ）しきときはきにけり　同

○ふなきの山(近江)、元永元年正月中院入道右大臣家歌合

さゞ波や船木のやまの時鳥ほにいでて今ぞ鳴きわたるなり　左京大夫顯輔卿

○家集

今もかもゆふ立すらしふなき山の野さかの西に雲のかゝれる　中務卿のみこ

○名所歌中

あづまぢや（扶桑）舟木の山の木の閒より仄かにみゆる夕づくよかな　源　忠季

○藤しろの山(紀伊)、熊野山二十首

みさかにはみかさやとらむ藤代の山はしぐると木の葉ふるなり　民部卿爲家

○ふなさか山(播磨又大隅、懐中)

風はやみ立つ白波をよそ人にふなさか山とみゆるぞあやふき　讀人しらず

○ふなをか山(山城)、永久四年七月忠隆家歌合、薄を

秋くれどふなをか山のしの薄たれに忍びてほに出でざるらむ（ろナシイ）　源　清國

○ふかしの山(石見)、題不レ知(懐中)

なべてそのふかしの山に入りぬれば歸らむ道もしられざりけり　讀人しらず

○二むら山(二村、參河又丹波尾張)、天仁元年大嘗會

しづかなるふたむら山や麓にぞちとせの秋の花も咲きける　藏原正家朝臣

○弘安二年高野山奉納百首

わすれずよあやめもみえず行きくらし二むら山の末の野原は　安嘉門院四條

○郭公皈レ山

時鳥（一字抄）ふたむら山にたづねみむいりあやの聲はけふやまさると　俊頼朝臣

ほど近く衣の里はなりぬらむふたむら山をこえてきつれば　藤原經衡

此の歌は二むら山をこゆとてころものさとを見やりてよめると云々

○東に下りける道にて

玉くしげふたむら山のほのぐとあけゆく末は浪路なりけり　源　光行

此の歌路次記云夜のうにち二村山にかゝりて山中などこえすぐる程に

ひがしやうくしらみて海のおもてやゝあらはれわたりなみも空もひとつにて山につゞきたるやうに見ゆると云々

○ふる山（布留、大和）、三百六十首中
あなしがはふる山かけてくる春のしるしとけさは水ぞ溫める　好忠

○題不レ知
萬三
いその上布留の山なる杉むらの思ひかくべき君にあらなくに　讀人しらず

○正治二年百首
新古今春上
花の色をそれかとぞ思ふ少女子が袖ふる山の春のあけぼの　前中納言定家卿

○ふたごの山（下野又豐前）、三百六十首中
箱根山ふたごの山も秋ふかみあけくれ風に木の葉のちりかふ　好忠

○題不レ知
六五　後撰別
ふたご山ともにこえねばますかゞみそこなる影をたづねてぞくる　讀人しらず

六二
しもつけやふたごの山のふた心ありける人を賴みくるかな　同

○ふた葉山、家集、夏歌中
かみがきにかくるあふひの二葉山いくとせ袖の露はらふらむ　正三位季經卿

○ふえ吹山（笛吹、丹後）、永仁元年悠紀方御屏風、近江國
足曳のふえ吹山の松風によろづ代の秋しらべこそすれ　前中納言匡房卿

いはねさす笛吹山のかひありてちとせをふべき聲ぞきこゆる　藤原正家朝臣

○ふしみ山（山城或大和）、洞院攝政家百首
續拾秋上
伏見山麓のきりのたえ間よりはるかにみゆる宇治の川浪　常磐井入道太政大臣

○建仁元年老若五十首歌合
かき曇り時雨も今はすが原やふしみのとやま色かはるまで　寂蓮法師

○ふは山（不破、近江又美濃）、文永十年毎日一首中
雲かゝる伊吹のたけを日にかけてこえぞかねつるふはの關山　民部卿爲家

○海道宿次百首
里つゞきしばの籬をわけすぎて道も木ぐらき不破のなか山　參議爲相卿

忘れじな關屋の杉のしたかげにしばし涼みしよはのなか山　中務卿のみこ

○夏旅
年へたるすぎの木陰に駒とめて夕立すぐすふはの中やま　同

○建仁二年五十首御歌、關路花
不破の山風もたまらぬ關の屋をもるとはなしにさける花かな　後鳥羽院御製

○承暦三年十月法住寺歌合、關路紅葉

ふはのやま紅葉散りかふ梢よりあらしおこさぬ關もりもがな　隆信朝臣

○不破山な（國中）

君をおきて思ふはやまの鶯のなく〳〵聲はたれにかたらむ　讀人しらず

○こまの山、秋歌中

萬代秋下　もみぢせぬこまの山のときは木も秋は下葉にけしきつくらし　惠慶法師

○ふぢさか山（藤坂、丹波）、家集

さき草ももえぬらむやぞ春きなば若菜つむべきふぢさかの山　好忠

○こま山（狛、山城）、題不レ知

萬六　こま山に啼く時鳥いづみがは渡りをとほみこゝに通はず　田邊福丸

○こはた山（山城）、六帖題

新六　木幡山あるはさながらくちなしの宿かるとても答へやはせむ　信實朝臣

○このもと山、題不レ知

萬十四　おふしもと（てイ）このもと山の眞柴にものらぬ妹が名かたに出でむかも　讀人しらず

○こせのさ山、家集、雨中時鳥

誰きかむこせのさ山の杉が末（うれ）に雨もしのゝにくきらなくなり　隆賴朝臣

○こちこせ山、戀歌中

現存六　待つ宵もいつかはきます吾妹子がこちこせ山は其の名ばかりぞ　正三位知家卿

○このきの山（許能紀能）

萬五　梅の花ちらくはいづくしかすがにこのきの山に雪はふりつゝ　大伴百代

○ころもでの山（伊勢、山城）

國中　きてみらむ事を賴まぬ身にしあれば立ちわびぬべき衣手の山　讀人しらず

○ことひき山（但馬）

六二　いつよりかしらべの聲のたえにけむ琴ひき山の音のきこえぬ　同

國中　さのみこそことひき山と人はいはめしらべても鳴く蟬の聲かな

○こまがたの山、家集

闕の海の波打ちこえてみつるかなこれやこまきのこまかたの山　祐擧

○こまつの山（小松、近江）、家集

いかにして君が衣にたちつらむこまつの山の墨染の雲　信明朝臣

○こだかみ山（水高見、近江備中）
題不レ知

歌林　さゞ浪やこだかみ山に雲はれてあしりの奥に月おちにけり　俊惠法師

家
うしのをの山の紅葉のまだしきは外より時雨くるまなりけり　安　法　法　師

峯高きうしのを山にいる人に柴くるまにてかへるなりけり　修理大夫顕季卿

おとづれよこしのは山の時鳥たごのうら藤今さかりなり　従二位家隆卿

萬十二
み雪ふるこしのおほ山ゆきすぎて孰れの日にか我が里をみむ　讀人しらず

ねわたしにしるしの棹やたてつらむこびき待ちつる越(こし)の中山　西　行　上　人

かりがねは歸る道には迷ふらむこしのなか山霞へだてて　同

拂はれぬ枕のちりのつもりてやこひてふ山の名をばたづねむ　従二位良教卿

此の歌判者光俊朝臣云左歌さま優には侍れどもおぼつかなきことぞ侍りける彼の戀の山は古詩云和爾猷之祖戀神玉命與上和爾明玉日女命以石塞河與得會所戀故云戀山也とみえたり然るをいまの歌はまくらのちりつもりて名をたつるさまなり麓のちりひぢより白雲かゝる山とおほひのぼれることをおもひてとは心えられて侍れど名づくる山緒はちがひてぞ侍るべきと云々

萬八
時まちておつる時雨の雨やみてあさかの山のうつろひぬらむ　市　原　王

萬十一
あさか山かげさへみゆる山の井の淺き心をわが思はなくに　釆　女　九カ 風

萬代　續後拾戀一
あさかやまあさゐる雲の風をいたみたゆたふ心我はもたらじ　仁　和　御　製

○うしのを山（越中）、家集　山城歟
○堀河院御時百首
○こしのは山（此歌或抄をきのは山云々別に勘之）、家集夏歌
○こしのおほ山（越中）、題不レ知
○こしのなか山、家集
○霞中歸鴈と云ふ事を
○こひの山（山城、出雲）、建長八年百首歌合
○あさか山（安積、陸奥）、題不レ知
○同
○人にたばせける

○あを山（八雲御抄、大和又周防）
題不レ知
○同
○同
○泉溪青山出白雲
○康平四年三月祐子内親王家名所歌合、あを山
○六帖題
○あしほ山（安之保、常陸）
○あをはの山（青羽、若狹）
○千五百番歌合
○建長八年百首歌合
○光臺院入道二品親家五十首
○あしがら山（相模）、題不レ知
○同
○洞院攝政家百首、旅
○貞應二年六月名所歌百首

萬十
あを山のいはがきぬまのみこもりに戀や渡らむ逢ふ山もなみ　讀人しらず

六五　萬三
あを山の峯の白雲あさにけに常にみれどもめづらしあぎみ　湯原王

萬四
あを山を横ぎる雲のいちじるくわれとゑみして人にしらるな　大伴坂上郎女

ゆく水の青き山よりおちくれば白雲みゆとみえまどひつゝ　千里

みち遠みいそかざりせばあを山の木陰はいかにたちうからまし

青山と名にこそたてれおのづから峯のさかき葉花さきにけり　信實朝臣

萬十四
筑波根の脊向にみゆるあしほ山あしかるとかもさねみえなくに　讀人しらず

萬八
白露はうつしなりけり水鳥のあをばの山の色づくみれば　三原王

ちりのこる青葉の山の櫻花風よりのちをたづねざりせば　大納言通具卿

水鳥の青羽の山のなつ木立うきねにかへる花をしぞ思ふ　從一位眞教卿

秋やくる色はつれなき常磐木のあを葉の山に風かはるなり　正三位知家卿

萬三
とふさたつ足柄山にふな木伐る木にきりかへつあたら船木を　沙彌滿誓

萬十四
我が脊子を大和へやりてまぶしさす足柄山の杉のこのまに　讀人しらず

萬二十
足柄のやへ山こえていましなばたれをか君とみつゝ忍ばむ

雪消えぬ富士の裾野を分け捨てて夏になりゆく足柄の山　從二位賴氏卿

春がすみ山立ちこえば足柄のがけ路の雪もまれにこそみめ　民部卿爲家

こえやらでけふはくらしつ足がらの山かげ遠き岩のがけ道

萬十四 岩がねをつたふ崖路の高ければ雲に道ふむあしがらの山　民部卿爲家

萬十四 足柄のあきなの山のひこ船のしりひか（かゝイ）しめよこゝはあこたに　讀人しらず

萬十 けさ行きてあすはこじといふしかすがに淺妻山に霞たなびく　人丸

萬十 こらがなにつけのよろしさ朝妻のかた山岸に霞たなびく　同

夜をこめて春はきにけり朝づまのかたをか山に霞たなびく　藤原時房

朝づまや遠の外山にいづる日の光をみがくしがの浦浪　後京極攝政

初雪は冬のしるしにふりにけりあきしの山のすぎの梢に　西行上人

玉貫 初時雨ふりにけらしな明日よりはあきさか山の紅葉かざさむ　前中納言賴資卿

六二 しをりしてゆかまし物を相津山いるよりまどふ道としりせば　讀人しらず

萬十四 かみつけのあそ山つゞら野を廣みはひにし物をあせかたえせむ　同

新六六 わが戀はあそ山もとのあをつゞら夏野をひろみ今さかりなり　民部卿爲家

吹きおろすあそ山あらし今朝さえて冬野をひろみ雪ぞ積れる　中務卿のみこ

あそ山の中よりいづる白河のいかでしらせむふかき心を

萬十五 もゝ舟のはつるつしまのあさぢ山時雨の雨にもみたひにけり　讀人しらず

吹く風のをさまる御代のあさぢ山いづる月日の影ものどけし　從二位顯氏卿

○家集

○貞應三年百首

○あきなの山（安岐奈、相摸）、題不レ知

○あさづま山（朝妻、近江）

○嘉保三年三月花山院右大臣家歌合、霞

○正治二年百首

○あきしの山（秋篠、大和）、家集冬歌中

○あきさか山（備中）、貞應三年大嘗會備中國

○あひづの山（合津、陸奧）、題不レ知

○六帖題

○三百首御歌中

○雜歌

○あさぢ山（安佐治、對馬）、題不レ知

○弘安光年仙洞詩歌合、仙家勝趣

○ありき山(有木、備中)、名所歌中
○ありま山(攝津)、雜歌中
○題不知
○家集
○あはぢ島山(淡路)、懷中題知らず
○あはの山(阿波)
○あらち山(有乳、越前)
○建保三年名所百首
○嘉應二年百首、山雪
○承安元年八月金玄法印坊歌合、判者清輔朝臣
○家成卿家歌合、山寒花遲
○あしき山(惡木、筑前)、題不レ知
○あべしま山(阿部島、大和)

扶桑 ありき山今ありきとも君こそはかぞへもしらぬ松の千歳を　盛永

雲葉 新千雜上 津の國のむこの奥なるありま山ありともみえず雲ぞたなびく　右兵衛督基氏

萬七 しながどりゐなのをゆけばありま山夕霧たちぬ宿はなくして　讀人しらず

扶桑 ありま山裾野の原に風ふけばたまもなみよるこやの池水　法性寺入道前關白

いかにせむとぶひも今はたてわびぬ聲も通はぬあはぢ島山　左京大夫顯輔卿

萬六 まゆのこと雲居にみゆるあはの山かけてこぐ舟とまりしらずも　讀人しらず

六二 人心あらちの山となるときぞ契りしこしの道はくやしき　同

やたの野に霜おく風やあらち山たえぬあさぢのけさの色かな　正二位忠定卿

有乳(あらち)やまゆきも日かずもふるまゝに木ずゑぞ近き峯の松原　民部卿爲家

この頃はあらちの山の跡たえてすがの薬しのぎみ雪ふるらし　讀人しらず

今もまたあらちの山はさむければ梢に春もしらぬなりけり　源仲房

此の歌判者基俊云「梢に春もしらぬ成りけり」と計りにて花の心侍るにや花とよまむわろかるべき事かはと云々

萬十二 あしき山梢こぞりてあすよりはなげきたれこそ妹があたりみむ　讀人しらず

國中 うき事を思ひつくしのあしき山なげきこり積む年やへぬらむ　同

萬十二 たまかつまあべしま山の夕露に旅ねはせむや寒きこのよを　同

○あはた山（粟田、山城）
六二 あはた山こゆともこゆと思へども猶逢坂ははるけかりけり　同
國中 見るたびに煙のみたつあはた山はれぬ悲しき世をいかにせむ　同
同 東路をゆきつくしつゝあはた山人よりこえて君をこそ思へ　同

○正月十日白河に院おはしますに節分の朝源中將のもとに
ゆきてみよ霞やけさはたなびくとあはたの山の裾のこ松を　堀河院中宮上總

○あたごの山（愛岩護、山城）、題不レ知
六二 わがためは何のあたごの山なれや戀しと思ふ人のいるらむ　讀人しらず

○家集、霞を
あたご山またふる雪もきえなくにしきみがはらに霞たなびく　前中納言匡房卿

○述懷百首中
我といへば愛宕の山にしほりするもき木の枝のなさけなのよや　俊頼朝臣

○あさま山（信濃）、家集
いたづらに何の煙の淺間山あさましながら世にたてるらむ　民部卿爲家

○あら山（荒、和泉又豐前）、六帖題
新六一 こりしける岩のあら山そばかけて安くは人のすぎがたのよや　同

○同歌中、同題
槇のたつあら山おろし猶さえてくにの都はあわ雪ぞふる　中務卿のみこ

○題不レ知
萬三 すべらぎは神にしませば槇のたつあら山中にうみをなすかも　人麿

○あふさか山（近江）、家集
とりゐたつ逢坂山の境なるたむけの神よわれないさめそ　源仲正

○後京極攝政家詩歌合、羇中眺望
にほの海を逢坂こえてみ渡せば外山はなみの麓なりけり　光明峯寺入道攝政

○猿六帖
あふさかの山の嶺にてなく聲はましらのみこそ哀れなりけれ　讀人しらず

○長歌
萬十三 ものゝふの　うぢ河わたり　をとめ子に　あふ坂山の　手向ぐさ　絲とりおぎて　わぎも子に

○あらしの山(山城)、家集

○保延元年家成卿家歌合、落葉

○建長四年家千首歌、山

○あさ日山(朝日、山城又越前)、長承三年九月顯輔卿家歌合、紅葉

○老若五十首歌合

○六帖題

○家集

○あかはた山(大和)、國不レ知

○堀河院御時百首

いつか又めぐりあふべきのりのわの嵐の山を君しいでなば　西行上人

此の歌はいまだ出家せざりけるそのかみ法輪にまうでて空仁法師と物語し侍りけるついでによめると云々

もみぢ葉はいまは木末に嵐山このもかのもにちりしきにけり　高松院左衛門佐

此のうた判者云右歌のあらし山きゝつるすの文字大切にぞきこえ侍る又このも彼の面もひが事にこそ侍るめれ嵐山などにはこのもかのも侍るべきやうもなしたゞつくばねといふ山のみぞかくはよみ侍るかの山は八面侍る山なればこのおもてかのおもてとよみ侍るなりと云々（以上誤なるべし）

とことはに麓の松におとづれて嵐のやまの山おろしの風　前大納言顯朝卿

朝日山てる紅葉ばのあたりには松の緑もうつろひにけり　琳賢法師

萬代をひかりにこめて朝日山のどかにかすむ初春のそら　嘉陽門院越前

新六二 朝日山かすむこなたの伏見田井うち返すべき時はきにけり　光俊朝臣

朝日山ふもとをかけし夕だすきあけくれ春を祈るべきかな　寶方朝臣

衣だに二つありせばあかはたの山にひとつはかさましものを　讀人しらず

此の歌は住吉の明神の御歌となむ

紅葉するあかはた山を秋ゆけばしたてるばかり錦おりつゝ　顯仲朝臣

○あをね山（青根、大和）、家集
○あひの中山
○あしくま山（肥後）、六帖題
○あり明の山（越前）、老若五十首歌合
○題一字三十一首中
○百首御歌中
○名所歌中、在明の山
○あかつき山（國未勘）、家集、曉時鳥
○あかしまの山（常陸）、柿本影供百首
○あらはの山、建保七年顕朝卿家千首
○あづさ山（美濃）、三百六十首中
○ある所に夜ふかき月をみけるとて
○あさくら山（朝倉、筑前）かたらひける人にわすられて

青ね山苔のむしろの上にしてゆきはしとねの心ちこそすれ　西行上人
東路のあひの中山ほどせばみ心の奥のみえばこそあらめ　同
新六六
ゆづり葉のときはの山も埋もれぬあしくま山に雪のふれれば　衣笠内大臣
花のいろはやよひの空にうつろひて月ぞつれなき有明の山　後京極摂政
てりかはる紅葉の峯の光にてまつ月おそきありあけの山　前中納言定家卿
風夏
夏ふかき峯のまつがえ風こえて月影涼しありあけのやま　慈鎮和尚
東雲の月より峯はあらはれてありあけのやまと秋風ぞ吹く　従二位為實卿
きぬぐの曉山のほとゝぎす誰に別れてねなばなくらむ　中務卿のみこ
船とむる入江のさをの音すみてあしまの山に秋吹ぞふく　後九條内大臣
神無月木の葉ふりしく頃なれば名さへあらはの山と見えけり　藤原伊長朝臣
あづさ山みのの中道たえしよりわが身に秋のくるとしりにき　好忠
天津風ふかずぞあるらし夏の日のあづさの山に雲ものどけし　能宣朝臣
此の歌は六月ばかりに美濃へまかりけるにあづさの山をこゆとて雲のおりゐたるをと云々
よよをへてあづさの山にいる月の影まどかなる秋の空かな　同
心ざしあさくら山のまろどのは尋ねぬ人もあらじとぞ思ふ　前中納言匡房卿

昔みし人をぞわれはよそにみしあさくら山の雲居はるかに　讀人しらず

まだきより秋とぞなのる黄昏やあさくら山のよその松風　從二位家隆卿

降る雪にあはづの野やま道もなし先だつあとも沛にいでつゝ　民部卿雅有

秋の色はあさこの山の唐にしき露いかなればわきてそむらむ　讀人しらず

はるのよの月弓はりになる時ぞあづちの山にいるはみゆらむ　同

みちのくのあきたの山は秋霧のたちのの駒も近づきぬらし　好忠

六二 昔みし人をぞ今は忘れゆくあふくま山のふもとばかりに　讀人しらず

萬一 青菅山は　せなともの　おほき御門に　よろしなへ　神さび
立てり　同

立ちよれど雨ふり山の木のもとは頼むかひなく思ほゆるかな　同

さ月闇はるゝまもなきあめ山にいかに螢のきえせざるらむ　盛忠

夜と共に頼まれねかな信濃なる名に立ちにけりあだしのの山　讀人しらず

嵐吹くこぐれの雪をうち拂ひけふこえくるやさやの中山　大納言師時卿

まろふしのしばのしきゐに霜ぞおく夜やふけぬらむさやの中山　皇太后宮大夫俊成卿

鳥のねも今しばしあらばかすみなむまだ深からじさやの中山　後九條内大臣

袖まくら霜おく牀の苔の上にあかすばかりのさやの中山　鎌倉右大臣

○山六帖
○百首歌
○あはづの山(近江)、前大僧正源惠泉障子繪歌
○あさこの山(但馬國中)、題不レ知
○あづちの山(若狹)
○あきたの山(秋田、陸奥)、家集
○あふくま山(陸奥)、題不レ知
○あをすげ山(背菅、大和)、長歌
○あめふり山(相模、國中)
○あめ山、(參河、寶飯)、藤原朝臣參河國名所歌合、雨山
○あだしのの山、題不レ知
○さやの中山(遠江)、堀河院御時百首
○五社百首
○柿本影供百首
○御集、旅宿霜を

〇嘉祿二年百首
ゆきくらす道の芝草をりかけて片しきあかすさやの中やま　民部卿爲家

〇菊川宿會、山納涼
やすらひに道ゆく人も進むなり松ふく風のさやのなか山　爲道朝臣

〇石清水三首歌合、旅宿風
おもかげは都ながらのうたゝねに松風ぞふくさやのなか山　寂蓮法師

〇正治二年百首
岩がねの枕におつる松風に夢路たえぬるさやのなかやま　宜秋門院丹後

〇洞院攝政家百首
松がねのまくらに結ぶ白露のさやのなかやま仇にねにけり　從二位賴氏卿

〇嘉元元年百首、旅
露しげきふもとの小篠分けそめてふかく入りたるさやの中山　從三位爲隆卿

〇海道宿次百首、日坂
名に高きさやの中山おかなくに坂こえやらで歸りみるかな　參議爲相卿

〇あづまへくだりけるに
十六夜日記
こえくらすふもとの里の夕やみに松風おくるさやの中山　安嘉門院四條

此の歌路次記云ひるになりてさやの中山こゆることのまゝとかやいふ
社のほど紅葉いとさかりにおもしろし山かげにて嵐もおよばぬなめり
深くあはれなりふもとの里きく河といふ所にとゞまる云々

〇東にくだりける道にて
ふみかよふ峯のかけ橋とだえして雲にあとゝふさやの中山　源光行

此の歌路次云さやの中山はきたは山にて松杉嵐はげしく南は野山にて
秋の花露しげし谷より峯によりうつるみち雲に分け入る心ちして鹿の
音なみだをもよほし蟲のうらみあはれふかしと云々

〇貞永二年百首
笹の葉のさやの中山ながき夜もかりねの夢は結びかねつゝ　光明峯寺入道攝政

〇建保三年名所百首御歌

さゝの葉はさやの中山ふく風におのれねぬよの夢も結ばず　順徳院御製

〇同

ふしわびぬ旅ねの袖をまきの葉にふるや霰のさやの中山　正三位知家卿

〇同

けふも又さやの中山こえくれてしらぬ庵に月を待つかな　藤原康光

〇さゞなみのおほ山、題不レ知

萬二 小波のおほ山もりはたが爲か山にしめゆふ君もあらなくに　讀人しらず

〇さほ山（大和）

萬六 さゝたけの大宮人のいへとすむさほの山をば思ふやも君　石川足人

〇家集

ほとゝぎす鳴くさほ山の松の葉のねんごろみまくほしき君かな　人麿

〇さぎさか山（鷺坂山）、題不レ知

萬九 讀古歌 しら鳥の鷺坂山の松かげに宿りてゆかむよもふけゆくを　讀人しらず

〇堀河院御時百首

しら鳥の鷺坂山をこえくれてをざゝが峯にゆきふりにけり　修理大夫顯季卿

〇さつき山（攝津）、題不レ知

萬十 新古夏 さ月山うの花づきよ時鳥きけどもあかずまたなかむかも　人麿

萬十 さつきやま花たちばなに時鳥かくらふ時にあへる君かも

〇さみの山（讃岐）

萬二 妻もあらば取りてたけましさみの山野の上のうはき過ぎにけらずや　同

〇さへき山（佐伯、攝津）

萬七 佐伯山うの花もちしあはれ（かなしきがイ）をかてをしとりてば花はちるとも　讀人しらず

〇さき山（佐紀、大和在春日）

萬十 春日なるみ笠の山に月も出でぬかもさき山に咲ける櫻の花もみるべく　人麿

〇さがらの山（山城、相樂郡）、長歌

萬三 朝霧の　ほのに成りつゝ　山城の　相樂の山の　山のまに　讀人しらず
行き過ぎぬれば

〇さかづき山（紀伊）

萬十 時鳥なく初聲は我にかもさかづき山のさしてなくかも　赤人

○さゞれいしの山（沙石、佐々礫、近江丹波）、家集

君が代の數をかぞへてとりつまむためしなりけりさゞれ石の山　能宣朝臣

○さやま

寂しさに野べに立ちいでて眺むればさ山がすそに鈴蟲の鳴く　前中納言匡房卿

○さやかた山（周防備前又筑前）、正治二年百首

あらし吹くさやかた山に雲きえて月影たゝむせとのしらなみ　第三のみこ

○さゝふの山（小竹生、近江又丹波）、家集

現存
あらしふくさゝふの山のよのほどに音もそよがず積る白雪　衣笠内大臣

○さくら山（櫻、近江）大嘗會主基方綱屏風近江國

みかみなる櫻の山の花ざかり散るといふ事はあらじとぞ思ふ　前中納言匡房イ

○久安百首

櫻山木ずゑの雪のきえぬまはをりたがへたる花かとぞみる　上西門院兵衛

○さらしなの山（信濃更級更科）千五百番歌合

古郷はわれ松風をあるじにて月にいでこしさらしなの山　後京極攝政

○さやか山くに〳〵にある所々をよみけるに

名にしおへば殊にあかくもみゆるかなさやか山よりいづる月影　和泉式部

○きびのを山（備中）、承徳二年正月庚申歌合、霞

春のくるけしきは空にしるきかなきびのを山の峯の霞に　讀人しらず

○きびの中山（備中）、紅葉隔山といふことを

麓まで峯のあらしやさそふらむもみぢ散り來るきびの中山　大納言經信卿

○弘安元年中務卿親王家百首

しもつみちこまの里人ころ〳〵にきびの山田の早苗とるなり　權僧正公朝

○久安百首

しばしまてまがねふくまで音やめてきびの中山時鳥鳴く　前參議親隆卿

○きりめ山（級目、紀伊）、題不知

萬十二
きりめ山ゆきかふ道の朝がすみ仄かにだにや妹にあはざらむ　讀人しらず

○きさ山（象、大和）、神龜二年五月幸于芳野離宮時

萬六
みよしのゝきさ山ぎはの梢にはここだも騷ぐとりの聲かも　赤人

○承久四年卒爾百首

幾秋の色をかよそにすぎぬらむ象山かげの松のした風　民部卿爲家

○建長八年百首歌合

大和路にこゆべき道はたえにけりきさの中山雪深くして　從二位行家卿

萬十二
戀衣きなれのやまになく鳥のまなく時なしわがこふらくは　讀人しらず

鳴く鳥のこゑも恨めし戀衣きなれのやまのかへるさのそら　從二位家隆卿

冬ごもりきぬ〴〵山を見渡せば晴るゝ夜もなく雪はふりつゝ　好忠

萬四
みちのくにきぬ〴〵山をみ渡せばきえむともなく雪降りにけり　同

いまよりはき山の道はくるしけむわが通はむと思ひしものを　葛井連大成イ　太宰帥大伴卿

きぶね川ながれ久しき谷水のまだいく千世かすまむとすらむ　廣言

林葉
秋かぜのふく夕暮はきぶね山聲をほにあげて鹿ぞ鳴くなる　賀茂成助

さ夜更けて見つゝやゆかむ越路なるきよ姫（さカ）のこかきよ姫の山　中納言家持卿

きよ水の山時鳥ききつればわがふるさとの聲にかはらぬ　元眞

ゆらの山ふもとの松の松風にたちよる人も千代をこそまて　前中納言匡房卿

ゆふは山松の葉風にうちそひて蟬のなくねも嶺わたるなり　法橋顯昭

都人おぼつかなしやゆめ山をみるかひありてゆきかへるらむ　讀人しらず

萬十
思ひいづる時はすべなし豐國のゆふ山雪のけぬべく思ほゆ　同

萬七
少女らが振分髪をゆふの山雲なかくしそ家のあたりみむ

うつろひし花より後のゆふやまにまた雲かゝる松の藤なみ　入道前太政大臣

新拾遺秋
河上に里あれ殘るみなせ山みしものとては月ぞすむらむ　後九條内大臣

○きなれの山（蓍柄、大和）、題不知
○洞院攝政家百首
○きぬ〴〵山（陸奥）、三百六十首中
○家集
○き山（筑前）、題不知
○き舟山（山城）、文治三年貴船社歌合
○秋歌中
○きよひめの山、家集
○きよ水の山（清水、山城）、家集人の國なる女に
○ゆらの山（遊樂、丹波）、家集、遊樂山松を
○ゆふは山（出羽、豐前）、六百番歌合、蟬
○ゆめ山（甲斐、備中）、題不知
○ゆふの山（木綿、豐前）
○寶治元年百首
○みなせ山（山城攝津）、建長八年家百首歌合

○經家卿家百首

忘れめやかたののみかり狩りくらし歸るみなせの山のはの月　家長朝臣

○家集

みなせやま玉しく庭も昔にて風のみはらふこけの上かな　後鳥羽院下野

○みむろと山（御室戸、山城又近江或大和）、題不レ知

萬七
玉くしげ御室戸山をゆきしかば面白くして昔おもほゆ　讀人しらず

○家集

行くが上に早くゆけ駒神なびの御室の山にやまかづらせむ　貫之

○山

六二
世をうしと厭ひし人は神なびのみむろの山に入りにけるかな　讀人しらず

○永曆元年八月清輔朝臣家歌合

御室山移ろふ花にしめさしつとめむとめじは神のまに〳〵　資隆朝臣

○建長八年百首歌合

まきもくのみむろの山も移ろひぬわが時とふる秋の時雨に　衣笠内大臣

○三百六十首中

みむろ山木の葉散りにし朝よりあらはにみゆるよもの玉垣　好忠

○題不レ知

萬十三　新勅撰
月も日もかはりゆけどもひさにふる御室の山のとつ（二イ）宮どころ　讀人しらず

○長歌

同
神代より　いきつきくれば　かみなびの　みむろの山の　はるされば　春霞たち　あきされば　くれなるにほふ　神なびの　三室の神の

○みかみの山（三神、三上、近江又紀伊）、文永十年毎日一首中

鏡かとさやかにみえてさゞなみやみかみの山を出づる月影　民部卿爲家

○百首歌中

手向する紅葉にあける三神山つゞりの袖をあはれともみよ　藤原爲顯

○みかさ山（三笠、大和又筑前近江）、題不レ知

萬六
あまくだる三笠の山を高みかも月のいでこしよはふけにつゝ　安部蟲丸

○同

萬七
おほ君のみかさの山のおびにせる細谷河の音のさやけさ　讀人しらず

○永保三年十月經子内親王家歌合歌

三笠山ほそ谷川にかげさしてさやかにすめる冬のよの月　源頼綱朝臣

音にきく富士のたかねにあらねども三笠の山も煙立ちけり　大納言公任卿

○家集

玉神祇　みかさやまひはら松原綠なる色もてはやすあけの玉がき　九條左大臣女

○神祇歌中に

高砂のみかさの山の秋風にふるさとはれていづる月かげ　光俊朝臣

○月歌中

萬一　みわ山をしかもかくすか雲だにも心あらなむかくさふべしや　額田王

○三輪山（三輪、大和）、近江國にて

旅衣誰にかさましみむろつき三輪山けさはあらしさむしも　前大納言顯朝卿

○建長八年百首歌合

時鳥名殘を雲にとゞめきおきて村雨はるゝ三わの神杉　如願法師

○最勝四天王院名所御障子

現存六　杣人のいかに待ちみむ三わの山しげきなげ木をひく世なりせば　鷹司院按察

○雜歌中

家　尋ぬれば杉の葉きえて三輪のやま末こす松ぞおひかはりける　素性法師

○松六帖

萬代　みあれ山岩ねをいづるみたらしに宿る月さへ神さびにけり　若水

○みあれ山（御所生、山城）、題不レ知

あひみつゝ猶おぼつかな宮路山こやしかすがの渡りなるらむ　讀人しらず

○みやぢ山（參河、懷中）、同

尋ねきてわれこそはまだ見えもせめ峯こし山はいつも忘れじ　同

○みねこし山（陸奥、懷中）、同

現存六　その上の御影の山の諸葉草けふはみあれのしるしにぞとる　中原師光朝臣

○みかげの山（御影、山城）、葵

みかげ山卯の花づく夜露ながらほすやちはやの布留の神垣　西園寺入道太政大臣

○光明峯寺入道二品親王家五十首、社卯花

○みかきの山（三輪、大和）、長歌

萬九　三墻の山に　秋萩の　妻をまたむと　朝月夜　明けまくをしみ　人丸

○みはしの山（石見）、題不レ知

渡るともつくべくもなし君が世のみはしの山の動きなければ　讀人しらず

○みづのを山（水尾、山城）、同
うちつけにみづのを山の秋風を岩まにたきつ音かとぞきく　同

○みゝなし山（大和）、家集
かたらへど耳なし山の時鳥ひとりごとする心ちこそすれ　前大僧正行尊

○みゝかの山（耳我、大和）、長歌イ
萬一　みよしののみゝかの山に　ときなくぞ　雪はふるといふ　讀人しらず
ひまなくぞ　雨は降るといふ

○みふねの山（御舟、大和）、遊吉野時御歌
萬三　たきの上の御舟の山にゐる雲の常にあらむとわが思はなくに　弓削皇子

○堀河院御時百首
玉秋下　瀧の上のみ舟の山のもみぢ葉はこがるゝ程になりにけるかな　隆源法師

○みづわけ山（水分、大和）、題不知
萬十九　あら玉の年ゆきかへりはるたば水分山に鶯はなけ　中納言家持卿

○同
萬七　神さぶるいはねこゞしきみよしのの水分山をみれば悲しも　讀人しらず

○みの山（美濃）
六二　催馬樂　みの山にしげり榮ゆる山かざし豐のあかりにあふが嬉しき　黒主

○冬歌中
萬代　催馬樂　みの山にしゞに生きたる玉がしは豐のあかりにあふが樂しさ　讀人しらず

○百首歌
現存六　新拾冬　みのやまの白玉椿いつよりかと豐のあかりにあひはじめけむ　從二位行家卿

○山
ふるさとになりにし世よりみの山の玉の葉柏はとる人もなし　源寂法師

○永仁元年禁忍百首
みの山のつれなき中にながらへて心ひとつの松ぞふりぬる　藤原爲顯

水茎のかきのみたゆることのははみののを山の神ぞしるらむ　實方朝臣
此の歌は美濃のかみなりける人の女にたびたび文やりけれども返事せざりければよみてやりけると云々

○みちのく山、陸奥)、家集

○みを山(三尾、近江)、六帖題

○みむらの山(三村、近江)、永保元年大嘗會主基方御屏風

○みなぎし山(見奈疑之、越中)、建長八年百首歌合

○みのお山(箕面、攝津)、家集

○みすの山(紀伊)、家集、くまのへまゐりけるにやがみの王子の御まへにて

○みすみの山、題不レ知

○みやさき山(武藏)、家集

○山

○みどりご山、家集

○みなぶち山(見名淵)、題不レ知

○同

みちのくの山をひそかひに見渡せば東のはてや八重の白雲　光俊朝臣

此の歌は康元元年十一月鹿島社にまうでて濱にいでて逍遥するに艮にあたりて雲のたえまより山のほのかにみえたる彼はみちのくになむ侍るなど申しければ遙かにききける程におもひしられてよめると云々

新六二 みを山や柚のわれ木の片落ちに捨てられながらふしは忘れず　民部卿爲家

新勅賀 しぐれふる三村の山のもみぢ葉はたがおりかけし錦なるらむ　前中納言匡房卿

おしこめてみなぎし山の朝霞やたけもみえずたちにけらしも　光俊朝臣

みのおやま雲かけつくる峯の庵は松のひゞきも手枕のした　鴨長明

苔ふかきみのおの奥の杉の戸にたゞ音するは鹿の音ばかり　同

まちきつるやかみの櫻さきにけり荒くおろすなみすの山風　西行上人

ゆく先をみすみの山を頼むにはこれをぞ神に手向けつゝゆく　讀人しらず

池水も今こほるらしみやさきの山風さむく雪はふりつゝ　中務卿のみこ

舟とむる岩瀨のわたりさよふけてみやさき山をいづる月影　賀茂重敏

われひくやうひねはなくと郭公みどりご山にいりてこそきけ　惠慶法師

萬九 みけむかふ南淵山の巖にはちる波たれかけづりのこせる　弓削皇子

萬十 増鏡みなぶち山はけぶもかも白露おきて紅葉ちるらむ　讀人しらず

○みかもの山（美可母、下野）

萬十四 下野のみかもの山のこならのすまぐはしころはたかけかもたむ　同

○しがの山（滋賀、志賀、近江）

萬十六 しがの山いたくなきりそあらをらがよすがの山とみつゝ忍ばむ　同

六二 さゞ浪や志賀の山路のつゝらをりくる人たえてかれやしぬらむ　同

○重家卿家五首歌合、雪

高砂のをのへも雪に埋もれて道たえぬらむしがの山ごえ　源通能朝臣

○しのぶ山（信夫、陸奥）、百首、忍絶戀

人しれず通ひし跡はしのぶやま茂りはてたるみち芝の露　民部卿爲家

○古今調百首

上にみぬおもひの色の下ぞめは絶えずしのぶの山のくちなし　隆祐朝臣

○しはつ山（近江又豐前）、旅歌

萬三 しはつ山うちこみえればかさぬひの島こぎ歸るたななし小舟　高市連黒人

○秋歌中

古來歌 鹽風に浦はれわたるしはつ山こぎいづる舟も月やみるらむ　源俊定朝臣

○しら山（白、之良、加賀）、題不レ知

六五 新勅戀二 兼盛集 白山の雪の下草われなれや下にもえつゝとしのへぬらむ　讀人しらず

○正治二年百首御歌

白山の松の木陰にかくろへてやすらにすめるらいの鳥かな　後鳥羽院御製

○同

哀れなりこしのしらねにすむ鳥も松を頼みてよをあかすらむ　從二位家隆卿

○しほつ山（鹽津、近江又越前）、弘長三年内裏百首イ

あだ浪のゆききにかゝる鹽津山からしやたえず繁き人めは　前大納言爲氏卿

○だいしらず

萬三 しほつ山うちこえくればわがのれる駒ぞ跪く家こふらしも　笠金村

○弘長元年百首、花

風ふけば空にひがたのしほつ山花ぞみちくる沖津白なみ　後九條内大臣

○しとみ山（紀伊）、家集

しとみ山風はおろせど時鳥聲はこもらぬ物ににぞありける　俊頼朝臣

○題不レ知

六一 しとみ山おろしの風の寒ければ河せに常になきてこそふれ　讀人しらず

○しづくの山（近江）、家集、雨中時鳥
五月雨にしづくの山の時鳥しののにぬれて小夜中になく　修理大夫顯季卿

○題不レ知（懐中）
妹により夜半にやこゆるしづく山如何に露けくなりまさるらむ　讀人しらず

○建長八年百首歌合
梅が枝の花のたるみも岩注ぐしづくの山にきゆる白雪　後九條内大臣

○しづはた山（駿河）、千五百番歌合
錦おる賤機山の夕しぐれけに たてぬきとなりにけるかな　慈鎭和尚

○永久四年百首
ちりしけるしづはた山のもみぢばを苔ぢにおれる錦とぞみる　藤原忠房

○しほたれ山（美作）、家集、夕立
いつとなくしほたれ山のさゞれ水くれゆく儘に聲たてつなり　後頼朝臣

○しがらき山（滋賀樂）、千五百番歌合
新續古今
都だに霰ふる夜にしがらきの槇のとやまの奥ぞしらるゝ　前大納言兼宗卿

○家集、夏歌中
東雲のしがらき山のほとゝぎす檜はらがくれの空に鳴くなり　信實朝臣

○しほの山（甲斐）、保安二年閏五月賭左大臣家歌合、時鳥
子規なくしほ山のいそわにはたななし小舟いでぞわづらふ　神祇伯顯仲卿

○建長八年百首歌合
しほの山さし出のいその明方に友よぶたづの聲きこゆなり　左近中將經家卿

○家集、雪
雪ふれば都の内もよもながらみなしほ山の心地こそすれ　和泉式部

○山不レ知（梁塵秘抄）
かひにをかしき　山の名は　しらねなみさき　しほの山　むろふしかしはま山　すゝのしげれる　ねはま山　讀人しらず

○しこの山（紀伊）、家集
雲鳥やしこの山ぢはさておきてをくちがはらの寂しからぬか　西行上人

○しらつき山（白月、近江）、承安五年三月重家朝臣家歌合、墻根卯花
卯の花のさける垣ねや久方の白月山のふもとなるらむ　清輔朝臣

○家集
かならずば誰かしらまし梅の花しらつきやまの雪の曙　左京大夫顯季卿

○しら雲山（近江）、大嘗會悠紀方御屏風俗歌
○しろかね山
○しげ山（繁、越中）、百首
○したひ山（下檜、大和）、長歌
○ひきての山（引手、大和）、紅葉を
○柿本影供百首
○題不知
○ひえの山（比叡）
○ひよし山（近江）、弘安日吉一品經歌
○弘安四年毎日一首中
○ひら山（比良、平、近江）、家集
○ひらの遠山（近江）、家集、雪を
○家集
○ひらのおほやま、中務卿親王家歌合、時雨

つくばねの白雲山のたえ〴〵にわがすべらぎを仰ぐなりけり　前中納言匡房卿

しろかねの山のかひある梅の花萬代ふべき匂ひこそすれ　同

此の歌は永承四年大嘗會主基方御屏風に丹波國しろかねの山に梅の花さかりにさけるに旅人のある所と云々

繁山の火串のひかりほのみえて木の間かすかにあくる東雲　前大納言爲家

萬 ます鏡たゞめにみえずしたひ山下行く水の上にいでなむ　讀人しらず

紅に深くぞみゆるふすまぢのひきての山の峯のもみぢば　修理大夫顯季卿

萬二 梓弓ひきての山のほとゝぎす雲を宿とやおしているらむ　後九條内大臣

萬二 ふすまぢの引手の山に妹を置きて山ぢを行けばいけりともなし　人丸

六二 昔わがかどでにしてしひえの山心弱くはいづるものかは　讀人しらず

日吉山七ます神の跡たれてくもらぬ影は世をてらすらむ　大宰權帥經任卿

ひよし山峯の小松のいたゞきにいやたかからむ千代の初春　民部卿爲家

家 ちはやふるひらのみやまの紅葉ばにゆふかけ渡す今朝の白雲　安法法師

はれのぼるあさゐる雲のしたごとに初雪ふれるひらの遠山　紫金臺寺入道二品のみこ

都までさむさぞみゆる峯ごしのひらの遠山雪ふりにけり　信實朝臣

近江ぢや北より冬は來にけらしひらのおほ山まづ時雨れつゝ　權僧正公朝

○ひらの遠山(近江)、建長八年百首歌合
○ひらのみ山(近江又肥後)、光臺院入道二品親王家五十首
○ひこねの山(近江)、辨乳母につかはしける
○返歌
○ひはらの山(名所不審)、家集
○ひなたの山(相模)、家集
○ひさしの山(日差、備中)、正應大嘗會
○ひとへ山(一國、山城或大和)
○國不レ知
○ひぐらしの山(大和)、建長八年百首歌合
○もる山(守、近江)、百首歌
○建長三年名所百首

峯たかきひらの遠山はかすみつゝ空なる雲や櫻なるらむ　衣笠内大臣

嵐ふくひらの太山(みやま)の秋の月もの思ふ袖もくもりやはせむ　従二位家隆卿

ひこね山あまねき門とききしかどやへの雲居にまどひぬるかな　大納言經信卿

世を照らす彦根の山の朝日には心もはれてしかぞかへりし　辨乳母

此の二首家集云あふみのひこねといふ所に觀音驗所とて人々のいみじうまゐりしに右大辨通俊にさそはれてゐまり侍りて歸りて辨乳母にいひやり侍りけると云々

桑門
夜もすがら何を時雨のそめつらむひはらの山の峯のしひ柴　寛仁法親王

さしてこしひなたの山を賴む身はめも明らにとみえざらめやは　相摸

長閑なる春の日差の山たかみあきらけき世の初めをぞしる　大藏卿隆博

蟬のはのうすき衣のひとへやま青葉涼しき風のいろかな　従二位家隆イ

萬門
故郷は遠くもあらずひとへ山こゆる我からに思ひぞわがせし　讀人しらず

花盛り昨日もけふも木のもとにたれ日ぐらしの山路なるらむ　後九條内大臣

此の歌判者知家卿云ひぐらしの山みゝなれず心ありてきこゆと云々

わが袖はくるれば露ももる山の松の葉かけて下もみぢつゝ　従二位家隆卿

物おもふ名ばかり色にもる山のしぐれぞ下の松にさはらぬ　従三位行家卿

もろ山に祈りし事のしるしあれば紅葉は神の手向けなりけり　中納言匡房卿

此の歌は主基方御屛風にもろ山に神の社ありてかへり申する人あり山に紅葉ある所と云々

素性集　六二
つらしとてもろはの山にかくるともわれ山彦になりて答へむ　讀人しらず

三熊野や紀ぢより越ゆるもゝへ山おなじ數なる浦のはまゆふ　權僧正公朝

あふひ草もろはの山の時鳥なれてみあれの頃や待つらむ　光俊朝臣

此の歌判者知家卿云あふひ草もろはの山いとをかしくつゞけて侍りと云々

いかほなるものきき山の郭公にごらぬことに聞ゆなるかな　伊勢

家
もがみ山すがけをしより心ありて守りかへせるやかたをのたか　中納言家持卿（せ家）（人丸イ）

六二
見ても思ふみぬにもおもふふたまるか心ひとつに物思ひの山　讀人しらず

またもみぬ紅葉の山の木の間より色に秋ある月もありけり　喜多院入道二品のみこ

神無月もみぢのやまに尋ねきて秋ある外の秋をみるかな

雨とふる紅葉の山をこえゆけばみのしろ衣色かへてけり　法橋顯昭

君をとふ道のなかてはこえがたき關のを山のなからましかば　讀人しらず

思ふことなるや伊勢ぢの鈴鹿山ふりはへ越えて道は辿らじ　家長朝臣

○家集

○もろ葉山（諸葉、山城）、六帖題不レ知

○もゝへ山、六帖題、はまゆふ

○建長八年百首歌合

○ものき山（上野）、家集

○もがみ山（最上、出羽）

○物おもひの山（陸奥）

○もみぢの山（常陸）、正治二年百首

○家集、十月十日比東山の紅葉を見て

○千五百番歌合

○せきのを山（伊勢）、題不レ知

○すゞか山（伊勢）、奏し侍りける事かなひ侍るのちに

〇御集
〇家集
〇題不知
〇家集
〇すはら山（山城）、題レ不知
〇末の松山（陸奥）、家集
〇入道関白家御屏風、末の松山
〇洞院摂政家百首、眺望
〇仁安二年二月清輔朝臣家歌合、海辺霞

鈴鹿山ふるの中道君よりもききならすこそおくれざりけり　女御徽子女王

（玉葉三）かずならぬ身は箬鷹の鈴鹿山とはぬになにか音はかはさむ　小馬命（姉イ）

鈴鹿山伊勢のはま風寒くともちよまつまでにいろかふなゆめ　讀人しらず

ふり捨ててこざらましかばすゞか山扇の風のふきこまじやは　俊頼朝臣

此の歌は伊勢に侍りける比都より扇をおくりて侍りける人の返しによみける鈴鹿山はあふぎの郡の内に有りと云々

人しれず戀をのみこそすはら山これより深くいりぬともやさは　讀人しらず

あら磯のみるめは猶やいつくらむ末の松まで浪たかくとも　相摸

あしたづの羣れゐるすゑの松山はいくよ重ねし千歳なるらむ　棐盛

浪映る色にやあきのこえぬらむみやぎが原の末の松山　俊成卿女

春霞へだつるころは白浪のこすともみえぬすゑの松山　従三位頼政卿

此の歌判衆議するの松山の歌はいとゞをかしく侍るに海のほとりの霞にはへだたりたる心ちす彼の末の松山はまことに波のこゆるにはあらず山より遠に遙かにのきたる海の浪の山のはより見こされてこゆるやうにみゆるなりされば題の心にはかなはずや中にもへだつとよまれたれば山よりこなたにたてる霞にこそと申す人もありしかどちかく江中

納言の歌に「すゑの松山なみこさば峯のはつ雪きえもこそすれ」とよまれたればそれをひがごとにはよむと申さるゝ人も侍りしかばとがなくなりぬと云々

谷の戸は夕しほさしてあまごろもすそまの山にあきかぜぞふく　光俊朝臣

すめ神の　すそまの山の　ふし谷の　さきのありそよ　あさなぎに　よする白波　夕なぎに　みちくるしほの　中納言家持卿

萬十七 心にはゆるぶことなくすがの山すがなく君をこひや渡らむ　同

白絲のすがの葉山の月まつとくるゝ夜かけてうつ衣かな　後九條内大臣

現存六 春は猶日影もながきすがの山見えむにあかぬ花の色かな　衣笠内大臣

朝凪に漕ぎ出でて見れば伊よぢなるすがほの山に雲ぞかゝれる　爲頼朝臣

秋風をまくらの波にききそへてさぞなねざめをすまの中山　参議爲相卿

○すそまの山（須蘇麿、越中）、建長八年百首歌合
○越中國二上山にて作る長歌
○すがの山（須加、越中）、題不レ知
○柿本影供百首
○綱集
○すがほの山（伊豫）、題不レ知
○家集、名所秋

夫木和歌抄巻第二十　終

昭和十二年九月五日普及版印刷
昭和十二年九月十日普及版發行

（非賣品）

校註國歌大系

編輯者　中山泰昌

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者　小川菊松

東京市豐島區巣鴨六丁目一〇八二番地
印刷者　矢島勇三郎

東京市豐島區巣鴨五丁目一〇八二番地
印刷所　矢島印刷所

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行所　株式會社　誠文堂新光社
電話神田　自二一二六番　至二一二九番
振替東京　四五三四〇番

昭和五年十二月二十日印刷　昭和五年十二月二十三日發行